
狼少年の初恋

澤群 キョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狼少年の初恋

【Nコード】

N2115Q

【作者名】

澤群 キヨウ

【あらすじ】

たちばな
立花 れいじ
玲二

県立大瀬高校1年3組。出席番号19番。
健康状態・いたって良好。
ビジュアル良し。成績良し。
高校生活のモットーは、

「目立たず 目をつけられず そこそこマジメ」

入学式直前に知った、自分の秘密。

そして、これから先の生活の絶対条件は、恋愛禁止。

そんな玲二に、突然同じクラスの女子が告白してきて…。

秘密を抱えた純情少年の、もどかしくも幸せな恋物語です。

高校に入って3ヶ月。

6月も終わりの木曜日の放課後、学校の裏庭で花壇の手入れをしている。

毎週木曜日は園芸委員の作業日だ。と言っても、雑草を抜いて花に水をやるだけ。

作業は8割がた終了している。喉が渴いていた。梅雨の合間の晴れの日は蒸し暑い。

「はあ、だいぶ終わったね」

横から声がした。可愛い顔にあった、可愛い声。

そのだ園田いつき …… 同じクラスの園芸委員だ。

「2人だともつとかかると思ったけど、あと少しだよ。でもホント今日は暑いよね。ちよつと休憩しようか？」

しゃがんだまま小さなタオルで汗を拭きつつ、笑顔でこちらを覗き込んでくる。

花壇の様子を見る。残りの作業はもう、少ない。

「いや、あと少しだから一気にやって終わらせよう」

「……そうだね。じゃ、がんばろっか」

快い返事をもらって、作業を再開する。

ちよつと休んだほうがよかったかな……と、女子への気遣いについて考えていると、突然質問が飛んできた。

「立花くんは、どうして園芸委員になったの？」

その質問に、花壇の方を見たまま答える。

「誰もなり手がいなかったし……」

雑草を引き抜き、ゴミ袋に放り込む。

「もっとラクな委員だと思ったから」

本当は、1番なりたかった図書委員になれなかったからというもう1つの理由があった。

が、そこまで話すことはしない。そんな必要はないだろうから。

「そうだよ。みんな来ればラクなんだろうけど。もう、とうとう誰も来なくなっちゃったね」

横を向くと、可愛い顔がちょっとふくれているのが見えた。

部活だ塾だデートだと、他の委員たちは少しずつ活動を自主的に休止していた。

そして本日、とうとう2人きりだ。

確かに何十人も必要な仕事ではない。広い花壇があるわけでもない。

自分としては、都合がよかった。

とにかく「目立たず、目をつけられず、そこそこにマジメ」が高校生活のモットーだから。

「でも、よかった」

彼女のおしゃべりは続いている。

この状態でいいことなんて、何かあるか？

「立花さんと2人で過ごせるから」

……返事に困る。

園田いつき。県立大瀬高校1年3組、出席番号18番。

「超」をつけても差し支えない程の美少女。

小学校、中学校と同じ学校だった。同じクラスになったことはなかったが、誰もが「1番可愛い子は？」と聞かれたら彼女の名前を挙げていた。

いつだったか、同じクラスの子が騒いでいたのを思い出す。「園田さんがこの間スカウトされたんだって！」

たまにクラスメイトが持っている雑誌のグラビアでみかけそうな、まとめ売りのアイドルよりもきつと上だろうと思う。

今この瞬間、ジャージ姿で土にまみれていても、可愛さは少しも損なわれていない。

その彼女が、自分と2人で過ごせるからよかったなんて言うのはなぜなんだろう。

視線を感じる。

気にしないよう黙って雑草を抜き続けていたが、心がざわめいた。

……なにか頼み事でもあるのか？

ストーカーがいるから、男と一緒にいると安心とか……。

気の聞いたセリフを出せないまま黙々と手を動かしているとまた声が聞こえた。

「立花くんは、彼女とか……いるの？」

「ご覧の通りで、いないけど」

平静をよそおって答える。事実をありのまま。「彼女」も「彼女とか」もない。

「よかったあ」

小さな声だが、そう聞こえた。顔をあげて、隣にしゃがむクラスメイトを見る。

その次になんて言うのかが気になって、視線をはずすことができ

ない。

「私ね……、あのね……」

いつきが下を向く。

「もうここまでできたら、言うしかないよね」

そう呟いて顔をあげると、力の入った表情でこちらを向いた。

「立花くんのこと、好きなんだ」

大きな目がキラキラと光っている。危うく、手に持った雑草を落とすようになった。

もしかして冗談とか、罰ゲームとか、ドッキリとか……？
今までまともに話したことだつてないのに。

「小学校も、中学校も一緒だったでしょ。ずっとね、こっそり、立花くんのこと見てたんだ」

そう言った顔は少し赤い。多分自分は、それ以上に赤くなってるだろう。

さつきから、彼女の声が少し遠い。

いや、自分の心臓の音がやたら大きいからだ。

いつきが立ち上がったので、つられて自分も一緒に立ち上がる。ポンポンとひざについた土を払ってから気をつけの姿勢になり、いつきはちよつと控え目な笑顔を浮かべて言った。

「立花くん、……私とつきあってくれませんか？」

心の中に、入学式前日の出来事が思い起こされた。
人生最大の衝撃。母の告白。

いつきはまっすぐこちらを見つめて、返事を待っている。

遠くからチャイムの音が聞こえてきた。

花壇にはまだ雑草が少し残っている。

日差しはもうだいぶ暑い。もうすぐ夏がやってくる。

断らなくては……。

しかし、少し潤んだ大きな瞳を見ていると、言葉が出てこない。

そういえば、息も出来てない気がする。

慌てて、はあっと息を出す。それを見ていつきが慌てた。

「ごめんなさい、困らせちゃって。よく知らない相手といきなり付き合ったりなんてできないよね？」

「……」

「じゃあ立花くん」

マジメな顔をして、右手を前に差し出してくる。

「つきあってももらえるかどうか判断してもらうために、まずは私と友達になってください」

上目使いの瞳は、少し様子を伺っているような感じだ。

だめだ。断らないと……。

しかし、口からは自分の意思とは真逆の言葉が飛び出してきた。

「わかった」

いつきはほうつと息を吐いて微笑んだ。

「よかった!」

花のような可愛い笑顔だった。汗ですら、笑顔を彩る宝石のように見える。

「嬉しい! これからよろしくね、立花くん」

手をぎゅっと握ってくる。自分のものに比べると小さくて、指も細い。けど、力強い握手だった。

元々あまりしゃべるほうではないが、いつもよりずっと言葉が出ない。

今あった出来事があんまりにも衝撃的過ぎる。これは現実なんだろうか?

「じゃ、花壇の手入れ、やっちゃおう?」

「ああ……」

こんな返事しか出来ない自分がなんだか情けないような気がして、ひどく恥ずかしい。

雑草を抜く作業など、あっという間に終わってしまう。

……さすがになにか言いたい。このまま一言も何も言わないのはどうかと思った。

散々考えて、ようやく短いセリフをひねり出す。

「もう帰る?」

「うん。もう用事ないもん」

「じゃあ……、一緒に帰ろうか」

同じ小学校だったんだから、家は近いはずだ。

「ほんと!? 嬉しい!」

いつきが笑顔で飛び上がった。あまりの喜びように少々驚く。

「じゃあ急いで着替えなくっちゃ! いこ、立花くん!」

更衣室で着替え、教室でまた顔を合わせた。席は斜め1つ前だ。カバンを持って、一緒に下駄箱まで歩く。

「私ね、立花ちゃんと話せたらいいなって思って、園芸委員になったんだ」

いつきはニコニコ幸せそうな笑顔を浮かべながら、こちらを赤面させるようなことばかり言ってきた。

可憐な唇からは、どの先生の授業が面白いとか、地元と高校のある地域との違いとか、他愛のない話題が次々と飛び出してくる。

嬉しそうに話す顔を見つめたり、時々見つめていられなくなったりしながら、短い返事をしていく。

学校から徒歩8分、電車で20分。家からの最寄駅にはあつという間についてしまった。そろそろ夕方だ。日が長くなってきて、まだ暗くはない。

「家ってどのあたり？」

「平森の3丁目」

「ここから10分くらいかな」

「うん。そのくらいだよ」

10分か……。

「俺、送っていいこうか」

いつきがちよつと驚いたような顔で見つめてくる。

この発言が良かったのか悪かったのか考えたが、答えは出なかった。

「じゃあ……、送ってもらおうかな」

頬をちよつと赤くして答えて、微笑んでいる。

「すごく嬉しいかも」

そのセリフを、すぐに訂正してきた。

「かもじゃなくて、すごく嬉しい」

なるほど人気があるわけだ、とその反応を見て思った。
こんなに素直で明るい反応をされたら、誰だって好きになってしまうに違いない。

「立花くんは歩きなの？」

黙って頷いて、いつきにあわせて歩く。

自分の家とは方向が違うが、通ったことのある道だった。

小学校時代の友達に住んでいて、遊びに行ったことが何回かある。そっぴやあいつ、元気にしてるかな。

高校に入ってまだ3ヶ月しか経っていないが、中学校までの時代とはだいぶ生活が変わっていた。……色んな意味で。

「この辺は知ってる？」

「うん。同じクラスのやつの家があったから。上本って知ってる？平森の1丁目だったかな」

あのころは別に住所なんて気にしてなかったけど、そういえばあいつ「園田の家の近くなんだぜ」って威張ってたことがあったっけ。

少し懐かしい風景をたどりながら、最後に知らない道に入ったところでいつきが振り返った。

「私の家、ここなの」

なんとなく渋い雰囲気の家。可愛い女子高校生には少し似合わない気がする。

「帰り道わかる？」

「ああ、大丈夫」

「立花くん、ありがとう」

その微笑に、黙って頷いた。

「また、明日」

「うん。じゃあまた明日ね」

嬉しそうな顔で、手を振っている。自分も右手をちょっとだけ上げて、家路に着いた。

モヤモヤとした気持ちを抱えながら歩き続け、玄関のドアを開けた。

が、鍵がかかっている。ポケットから鍵を取り出して差し込む。

どうやら母は留守のようだ。買物にでも行っているのだろうか。いないと思うと少し気が楽だ。

帰ってくるまでに、なんとか平静を取り戻さなくてはならない。今の自分を見たら、きつとなにか異変があったことに気づくだろう。もし今日のことを知られたら、なんて言う？

自分の部屋で制服を脱いで、ハンガーにかけた。

汗で濡れたＴシャツを着替えながら、高校の入学式の前日の、あの時のことを思い出していた。

「玲二、ちょっと来なさい」

入学式を明日に控えた4月のあの日。母の声が響いた。

自室を出て階段を下りると、いつも食卓に使っているテーブルに父と母が並んで座っていた。飲み物ももう用意されている。

改まった雰囲気だ。とうとう高校生になるわけだから、今日からの心意気とか生活についてとか、なにかそういった類の話があるんだな、と考えて素直に両親の向かいに座る。

「はい」

返事をする、父は重苦しいため息を1度つき、母の方を見た。

母はそれに頷いて「私が話します」なんて答えている。

……なんだろう。思った以上に深刻な雰囲気だ。

様子を伺っていると、母さんが口を開いた。

「玲二に、大事な話があるの」

黙って母を見つめ、言葉を待つ。

「まずは、高校入学おめでとう」

「……ありがとう」

「単刀直入に言うわね」

母さんは息をはあつと吐いて、まっすぐ俺を見つめて言った。

「これから先のあなたの人生で、恋人を作ることを禁じます」

……何を言われたのか、意味がよくわからない。

「なんて？」

「恋人を作ることは禁止。厳密に言つと、子孫を残すこととその可能性がある行為を禁止するわ」

子孫を残す行為が禁止……。考えて、顔がカーっとなるのを感じた。

首をブルブルつと振って頬の熱さを振り払う。

言葉の意味はわかったが、なぜそんなことを言い出すのかはまったく理解できない。

「それはどうして……」

「それはね、あなたが……、人間ではないからなの」

母が大真面目な顔で言うのを見て、ますます混乱する。

母さんはこんなバカみたいな冗談を言うキャラクターだっただろうか。少なくとも今までにはないことだ。しかも父さんまで一緒に並んで……、そんな悪ふざけをするなんて。

そんないきなりのドッキリ企画の可能性と、自分が人間ではないなんていう荒唐無稽な話、一体どっちのほうか信憑性がある？

「こんなこと言われて、いきなり信じるわけないわよね」
母が立ち上がる。

「玲二、私はね、狼の一族なの。人間ではなくていわゆる狼男、わかるでしょ？ 私は男じゃないけど……、狼人間って言ったらいいのかしらね」

そういうと目を閉じ、目の前で狼へと変身を遂げた。銀色の毛並みが美しい獣になってしまった母を見た後、父へと視線をうつす。

父さんは、黙って頷いた。

……言葉が出てこない。これは、夢だろうか。

狼の姿のまま、母さんが話しかけてくる。

『信じてくれるかしら』

いや、話しているのではなく、なんだか頭の中へ直接語りかけられているような感じた。

『聞こえる？ テレパシーって言えばわかるかしら』

目の前の狼の瞳を見つめる。確かにそれは、いつも見ている母の目をしているように思えた。

狼の母から生まれたんなら自分は、……確かにただの人間ではなさそうだ。

「玲二は冷静だな」

父さんが呟いて、母さんも頷く。今そんなことに感心されてもな

……。

「それで、なんでさっきの条件になるわけ？」

狼が、普段見慣れた母の姿へと戻る。どうやらトリックの類はなさそうだ。

15年間知らなかったが、自分の母親は人間ではなかったらしい。

「本来はね、人間との混血であつても力を持って生まれてくるはずなの。」

「力？」

「狼の姿に変わることだけじゃなくて、私たちには色んな能力がある」

さっきの、テレパシーのようなものとか、か。

「でも、あなたにはどうやらそういう力がほとんどない」

その言葉に、目を閉じて考える。

確かに、自分になにか特別な力があると思つたことは今までの人生で1度もない。

人と違うことといえば、母が外国人だということくらい。そのせいでほんのちよつと色が白いし、髪も真つ黒ではないし、瞳の色も明るい。その程度だ。その程度のやつなら、他にもたくさんいる。

勉強だつて運動だつて、上達するために自分で努力して、その結果色んなことができるようになった。

それはごく普通のこととて、他の友人たちとなんら変わりはない。

「生まれた時に、あなたには特別な力が何も受け継がれていないと感じたわ。でも、成長したらなにか芽生えるものがあるかもしれない……。そう思っていたの」

苦しい表情を浮かべる母さんの次の言葉を、黙って待つ。

「でもその気配はない。だから、困ってるの。私たちは人間とは寿命も、持っている力も全然違う。そして、自分たちの存在をできる限り人間から隠しているわ。私のように人間と結ばれる者は時々いるけど、そのために厳しい掟を守らなくてはならない」

ここでまた言葉は途切れた。はあっと大きく息を吐いて、少し間をあけてまた話し出す。

「私はいつか、ここを去らなくてはならないわ。姿があまり変わらないから。ある程度までは『若く見える』で済んでも、あまり年を重ねてはそれでは通らない」

視線を父のほうにうつす。2人の間にそんな壮大な愛のドラマがあったとは知らなかった。

父さんは静かに、ただ妻の言葉に耳を傾けている。

「玲二がこれからどのくらい生きるのか……。いつか力が芽生えるのか、今の時点ではまったくわからない。こんなケースは一族始まって以来初めてなの。だから……。だから、子孫を残すことは阻止しないといけないの。あなたやあなたの子供に何の力もなかったとしても、その子供にはなにか異変が起きるかもしれない。薄い血筋を増やすことは、私たちにとって不幸の元になってしまうから」

母の言葉を頭の中で咀嚼する。人ではない存在を秘密にしておかなければいけないのなら、確かに不安定な要素が増えるのは歓迎できないことなんだろう。

どういふ事かはわかった……。だけど、だからって素直にはい、なんて言える気はしない。

それじゃあ、自分の人生はどうなる？

息子の恨みがましい視線を受けて、母さんは寂しげに下を向いた。父さんもなんとも申し訳なさそうな顔だ。

「絶対に……。ダメってこと？」

「絶対にじゃないわ。可能性は2つ。どちらかをクリアすれば、問

題はない」

母は続けた。

「玲二の中に眠っている力があって、それが覚醒した場合。私としては、玲二の力がまったくのゼロだと思えない。だから、そういう可能性も充分ありえると考えてる」

力の覚醒……。

今の自分にはいまひとつピンと来ない条件だった。大体「眠っているとしたら」という仮定の話だ。一体この体のどこに眠っているというのだろう。

「もうひとつは、力を失って、ただの人間になること」

「人間に？」

意外だった。

「そんなことが可能なの？」

「可能よ」

母さんはさらりと言う。

「そういう力を持った者が、少数だけこの世には存在するわ」

しかし首を横に振ってこうつけくわえた。

「わかりやすい表現で言えば、魔女かしら。彼女たちはとても気難しく、なかなか願いをかなえてくれることはないの……」

あの日から、自分の世界は変わってしまった。

ほんの数日前までただの中学生だったのに、今ではこの世界でただ1人、何者でもない存在になってしまっている。

父は「すまない」と手をとって言い、母も「ごめんね、玲二」と謝った。

しかしその後、母さんは顔をあげると「もしこの言いつけを破ろうとした時は、容赦しない」と続けた。

背中にゾクゾクツと冷たいものが走り抜ける。……母は本気だ。

だから、今日のこの少し浮ついた自分を見られなくなかった。

あの言いつけはちゃんと守るつもりでいた。毎日考えていたが、これは自分だけの問題ではない。

恋する相手がいるわけでもないし……。そう思っていた。

園田 いつき

今日のあの放課後の光景を思い出す。目を閉じると、キラキラ輝く瞳が思い出された。

女の子からの告白は、初めてではない。

今までは、恋愛にもその相手にも興味が沸かなくてすぐに断ってきた。

泣かれたり、付き添いだという友人に責められたりして困ったことはあったが、それでどうということとはなかった。

生まれて初めて、特別な誰かを気にかけている。それに気がついて、落ち着きかけていた鼓動がまた早くなっていく。落ち着け……。母さんはいつ帰ってくるかわからない。

母は「容赦しない」と宣言した。どんな手段を使うかわからないが、きつと、本当に容赦しないんだろう。そんな気がする。

目を閉じて、深呼吸。少しずついつもの自分に戻っていく。机の上に置いてある本を手を取った。火曜日に図書室で借りてき

たばかりの本だ。あと少しで読み終わる。

しおりのはさんであるページを開いて、ゆっくりと活字の中に没頭していった。

#01 「はじめの1歩」 &It;玲二>

階下から物音が聞こえてくる。母さんが帰ってきたようだ。

本にしおりをはさんで、部屋を出る。階段を降りると、大量の荷物が目に入った。

「ただいま」

「おかえり」

「今日は安かったわ〜！」

いつもより買い物の量が多い。重たい袋を持ってキッチンへと運んだ。生ものは冷蔵庫に入れていく。昔からずっと、買い物の後はこうやって手伝いをしている。

本当は顔を合わせたくはなかった。だが、いきなり避けた方がなにかあったと感づかれそうだ。

「今日は花壇のお手入れの日だったかしら？」

その言葉に一瞬ビクツと反応してしまった。気持ちを抑えて、黙って頷く。

「違った？」

母さんが振り返って聞いてきた。

「いや、そうだよ」

「どうせまた黙って頷いてたんでしょ。見てなきゃわからないわよ、その返事の仕方」

「ごめん」

よく言われることだ。無口な俺の、癖だ。

テレパシーが使えても、心は読めないのか、はたまた読まないようにしているのか……。

わからないが、とにかく勝手に心の中をのぞいたりはしていない

らしい。大体読まれていたら、とつくに釘を刺されているだろう。

「日焼け止め塗ったほうがいいわよ。赤くなっちゃうんだから」
「うん」

今度は声を出して返事をした。確かにそろそろ、日焼け止めの用意は必要だ。

「さてと、夜ご飯の準備、始めようかな」
いつもの母さんだ。少し、安心した。

「また本読んでるの？」
また黙って頷く。

「出来たら呼ぶわよ」
「わかった」

忘れ物が多いとか成績や素行が悪いとか、そういった要素がないからか母がこうるさく注意してくることはない。昔から宿題も明日の準備も自主的にやる子供だった。積み上げた信頼のおかげで、年頃の男子としては割りとか適な暮らしをしていると自分自身でも判断している。

机に向かって再び本を開く。少し読み進めたところで、また今日の出来事が思い出されてきた。

大きな瞳に、紅潮した頬。長い髪が頭のでっぺんで1つにまとめられていて、明るく快活な印象の、とびっきり可愛いクラスメイト。ずっと、好きだったって。

途端に文章が頭の中に入ってこなくなる。文字はバラバラとそこらじゅうに散らばって、まとまった意味を持たなくなってしまった。

ダメだ。全然集中できない。

本を読むのはあきらめて、目を閉じた。

次の日いつものように家を出ると、駅前には見覚えのある人影があった。

一瞬、足が止まる。すると人影はこちらに気づいて手を振ってきた。近づいていくと、可愛い笑顔が出迎えてくれた。

「立花くん、おはよ！」

「……おはよう」

今まで朝、会ったことはなかったのに。

「今日は早くに目が覚めちゃって」

いつきがちよつと照れたような顔で話し出す。

「でね、学校に着いたらいつも立花くんはもう来てるから、それで早めに来たら会えるんじゃないかって思って」

待っててくれたのか。

「さつき着いたところだったの。ちょうどタイミングバツチりだったみたいで嬉しい」

そう言うところりと笑って、首をちょこんとかしげた。

そんな可愛いことを、真っ正面から言われたら……。

どう考えたって好きになってしまっじゃないか。

顔がカーツと熱くなるのを感じる。

こんな赤面した顔を見られるのはイヤだった。恥ずかしくて顔を上げられない。しかし、先に行ってくれというのもおかしい。

少し下を向いたまま「行こうか」となんとか声を出すと、「うん！」と嬉しそうな返事が聞こえて、2人で並んで改札へ向かった。

朝の教室に、2人して1番乗りだ。

「立花くん、いつも早いんだね」

「いつも図書室に行くんだ」

「そうなんだ……。いつも本、読んでもんね」

よく見てるんだなど、やっと落ち着いたのにまた赤面しそうになる。

「こんなに朝早くから貸し出しなんかやってるの？」

「熱心な委員の人がいて、朝はいつも本の整理をしてるんだ。その人がいれば借りられる」

5月のはじめに、図書室への出入りの多い自分へ2年生の蔵元という図書委員が話しかけてきたのが始まりだった。男子だが色白で線が細く、本がよく似合う。

あんまりよく通うので早々に顔を覚えられ、「早朝も作業してるから、貸し出しも返却もできるよ」と声をかけられた。放課後は利用者が多く、騒がしいことも時にはある。いつも黙々と本を読んでいる1年生の姿を見て、親切に教えてくれたらしい。

ただ、わざわざ朝早く来て作業をしているのは彼1人だけのようなだった。いつ行っても他の委員がいたことはない。よっぽど本が好きなんだろう。図書室のすべてを知り尽くしている先輩は、お薦めの本を用意してくれたりもする。

「今日も行くの？」

この質問に、首を横に振って答える。

「まだ借りてる本を読み終わってないから」

気が散って読書に没頭できないなんて、生まれて初めてのこのように思う。

そんな話をしていると、ガラガラと教室の扉が開いた。

「あ、相原君。おはよう」

「おはよう、園田さん……」

相原 誠。クラスメイトだ。顔は知っているが、特に話したこともない。

いつきにならって挨拶をしようとする、と、相原は突然こちらを向いて怒鳴った。

「立花！ 話がある！」

「……お？」

おはようのおが疑問形になっちゃった。

いきなりこんな大声を出される覚えは、勿論ない。

「ちよつと付き合ってくれ！」

「……わかった」

なんだかわからないが、有無を言わせぬ迫力がある。

いつきを見ると、ちよつと戸惑った顔をしている。しかし、返事をした以上仕方ない。行くしかなかった。

怒っていますよ、というオーラを出しながらドスドスと歩く相原の後ろを歩く。

一体何の用だろう。そもそも、さっきの呼びかけが彼と初めて交わした会話に当たる気がする。

黙ったまましばらく歩くと、たどり着いたのは校舎裏のゴミの集積場だった。

着くなり相原はくるっと振り返り、こちらをビシッと指差して突然叫んだ。

「全部見ていたぞ！」

全部見ていた？

「僕は……、全部見ていた……！」

相原は叫ぶように言い、そして突然泣き出した。

「おい……、大丈夫か？」

声をかけると、相原は突然拳を硬く握って飛び掛ってきた。

さつとよけると、突然の襲撃者は勢い余ってもうすぐ回収されるであろうゴミ袋の山の中へとダイブしていく。

殴られる筋合いはないのでよけたが、この悲劇はやはり自分のせいになるのか？

「……相原」

様子をみようと近づくと、よろよろと立ち上がった相原はまた大声をあげながら突っ込んできた。

もちろん、殴られるいわれはない。さつとよける。

今度は地面へドタッと倒れこんで、その姿勢のままなるような声をあげる。

「なんでよけるんだ……！」

そんなことを言われても困るばかりだ。

「……なんでなんだよ……！！！」

搾り出すような声だった。わけがわからない。どうしようもない。ただ様子を見守る。

しばらくの静寂のあと、相原はのろのろと立ち上がった。ゴミ袋の山へ突入した効果で、制服と頭がすっかり汚れている。

「全部、見てたんだぞ……」

ようやく続きが始まったようだ。仕方なく、質問をする。

「何をだよ」

「昨日の放課後！」

昨日の……？

「お前が！」

「園田さんから!!」

「告白されたところ!!!!」

これにはさすがに驚いた。

「……見てたのか」

「見てたさ! ああ見てたさ!!」

相原は右手の人差し指をびしっと立てて、今日1番の大きな声で叫んだ。

「僕は園田いつきファンクラブの会長だからな!!」

「……」

ファンクラブがあったとは知らなかった。しかし……

「隠れて様子、見てるのか……?」

「当たり前だろう! 園田さんの一挙一動、チェックしないでなんのためのファンクラブなんだ」

色々と思うところがあつたが、今は言うときではない、か。

「いつか……、いつか彼氏の1人や2人、できても仕方ないとは思っているんだ」

相原が急にうなだれる。

「でも、悔しいじゃないか。だから、せめて1発殴らせてもらおうと……」

どうやらまた泣き出してしまったようだ。

殴りかかってきた理由はわかった。理不尽ではあるが、まったく理解できないわけでもない。

しかし、彼はどうやら自分たちがもう付き合いだしたと思つているようだ。最愛の人が告白した後のことは、ショックで耳に入らなかったのか、それともその場にいられなくなつたのか……。

「俺たち、付き合つてないから」

律儀に事実を報告すると、途端に相原の動きが止まった。

「付き合っ てない？」

黙って頷くと、更に怒りが増したようだ。

「お前、断ったのか!？」

「断ったわけじゃなくて……、保留というか」

「たちばなー!!!」

絶叫だった。大声記録はあっさりと更新される。

「あんな可愛くていい子の告白を保留だと!？ お前、何様だー!」

魂の叫びはあたりに響き渡った。その効果で、周りに人が集まってきたようだ。ただならぬ様子に、ザワザワしている。

「僕はっ！ お前を許さないっ!!!」

捨て台詞を叫びながら走っていく後姿を、黙って見送る。

しまった……。言わなければ良かった……。

良かれと思って言ったのに、完全に裏目に出ってしまった。後悔したが、もう、遅い。

教室へ戻ると、ちよつと心配そうな様子でいつきが声をかけてきた。

「相原君、何の用だったの？ なんだか怒ってたみたいだけど」

その怒りの主の姿は見えない。まだ戻ってないらしい。

「なんていうか……、あいつの思い違い、だったよ」

一応事実ではある。しかし、どんな状態で戻ってくるのかさすがに不安だ。

少しすると相原はジャージ姿で戻ってきた。残念ながら頭は、ゴミで汚れたまま。

級友にどうした？ と声をかけられても、彼は答えない。異様な空気を感じてか、皆それ以上触れないようにしている。

ホームルームの始まりを告げるチャイムがなり、担任の教師の荒

川がやってきて相原の服装に軽く突っ込んだ。

いつもより気の重い時間が過ぎていく。

ようやく放課後になり、いつきが立ち上がってすぐ横にやってきた。

「ねえ立花くん、今日はもう帰っちゃう？」

「図書室に寄るけど……」

「4時半くらいまで、学校にいるかな？」

いつも時間を決めていているわけではない。どうやら、残っていて欲しいような様子だ。

「うん。いるよ」

時間の都合なんていくらでもつく。そう答えると、目の前に笑顔の花が咲いた。

「よかった！ 私、今日部活があるんだ。終わったら図書室に寄るから、一緒に帰ろう」

視線を感じた。相原だ。斜め右方向から激しく攻撃的な視線を送ってきているのが目に入る。

しかし、だからと言って今更断ることもできない。

「わかった。待ってるよ」

「じゃあ、後でね」

嬉しそうな顔で、ウキウキと教室を出て行く。廊下で他のクラスの女子と合流しているのがチラッと目に入った。

「おいおい、今のなんだよ玲二！」

うしろから突然肩をポンッと叩かれる。

葉山 良太郎だ。高校に入って、席が前後になったことで仲良くなり、フレンドリーな彼にとって自分は既に親友になっているらしい。葉山は耳元に顔を寄せてわざとらしい声で聞いてくる。

「なに？一緒に帰ろうって……。あの園田ちゃん？何なの？」

「立花は昨日園田さんに告白されたんだよ!!」

自分の代わりに相原が答えた。席に座ったまま、前を向いたまま
で。

大声で叫んだので、まだ教室に残っていた他の生徒たちも驚きの
声をあげる。

葉山は嬉しそうにバシバシと肩を更に叩いてきた。

「玲二っ！　そういうハッピーな話題をなんで俺にしらせないんだ
よっ」

水臭いぜーと言いながら嬉しそうに前へと移動してくる。

そして相原が立ち上がった。椅子が倒れて、大きな音が響く。そ
れには構わず、こちらを指差してまた叫んだ。

「そいつは返事を保留してるんだ！　付き合ってないんだ!!」

更に教室がザワザワしだす。目の前の親友も驚いたようだった。

「そうなの？　なんでだよ、園田ちゃん、すっげえ可愛いのに」

他の男子生徒の叫びも聞こえる。

「もったいねえー!!」

相原が近づいてきた。今はとにかくあの大きい声をなんとかした
い。

「なんでなんだ!？　立花!!」

見苦しい顔がとうとう目の前まで迫る。

「落ち着けよ」

「これが落ち着いていられるかっ!!」

つばがたくさん飛んできて、机の上が水玉模様になってしまった。
一刻も早くふき取りたい。

更に周りの生徒たちが便乗して、何で何で？　と声をあげてく
る。

仕方なく、立ち上がった話した。

「確かに昨日、告白されたよ」

相原は目を潤ませながら見つめてくる。葉山もふんふんと興味深

そんな顔だ。

「だけど、俺は園田と話したこともほとんどないし、どんな子が全然知らないから……。知らない相手と、はいつきあいますなんて、すぐに言えないだろ」

なるほど」という声と、もったいない、という声が混ざり合う。

「それで断っちゃったの？」

誰かわからないが女子が聞いてきた。

「断ったわけじゃなくて、お互いどういいう感じか今は知り合う期間というか……」

こついつのをなんと表現したらいいのだろう。

「おまえ、マジメだなー！」

葉山がそれは嬉しそうに声をあげる。相原は渋い顔をしている。クラスメイトも周りでニヤニヤと好き勝手に話していた。

こんな状況、耐えられない。

「俺、もう行くから……」

後ろから「いつてらっしょい」という楽しげな声に見送られて、逃げるように教室から出た。

まさかあんなことになるなんて……。

図書室についてからも気持ちがあまつたく落ち着かない。

あの時、告白を断れば済んだ話だったのに。

自分が迷ってしまったせいだ。

この後、断ればきつと悲しませる。

中途半端にグラグラしてしまったことを、深く後悔していた。

今日、言わなくてはいけない。君とは付き合えないって。

いつもの席でため息をついていると、後ろから声がかかった。

「立花君、どうかしたの？ 元気ないみたいだけど」

蔵元先輩は両手で10冊ほどの本を抱えている。棚へ戻す作業の途中なんだろう。

「ええ、ちよつと……」

一応本を開いてはいたが、読み進めることはできずにいた。
今日はやめよう。

でも約束まであと1時間以上ある。黙って帰ることはさすがにできない。

しかし、このままボーッと座っていてもますます気が滅入りそう
だ。席を立て、カウンターへ向かった。

「蔵元さん、図書委員の手伝いしてもいいですか？」

思い切って聞いてみる。先輩は少しだけ驚いた顔をしたが、すぐ
ににっこり笑った。

「うん、いいよ。立花君なら問題ないでしょ。常連さんだし」

「すいません。ちよつとこのあと約束があつて本を読んでようと思
つたんですけど、集中できなくて」

「そんな日もあるよ。それに今日1人勝手に休んでるんだ。だから、
助かるよ」

なんだか嬉しそうな様子だ。指示を出してもらい、本の片づけを
手伝い始めた。

分厚い世界文学全集の2巻を棚に戻していると、また先輩が声を
かけてきた。

「立花君って、園芸委員なんだっけ？」

「そうです」

「図書委員になってくれたらよかったのに」

心底そう思っていそうな口ぶりに、まったく同感だった。

「ジャンケンで負けちゃって」

思えばあれが、今の混乱のはじまりだったのかもしれない。あの時、グーを出さなければ……。

「そうか。じゃあ来年は是非」

初めて図書室に来たのは、入学式の次の日だった。読書好きとしてはまずチェックしなければならない場所だ。その日も蔵元先輩はカウンターにいた。キョロキョロ様子をみている1年生に、親切に声をかけてくれた。

その時はてつきり、女子生徒だと思った。サラサラとした細かい髪に、長いまつげ。顔立ちも美しく、色も白い。制服のズボンを見るまで、男子だとは気がつかなかった。

「僕は力がないから、重い本は片付けに時間がかかっちゃって」

確かに、この細い腕では大変そうだ。特にこんな分厚い本は。

「立花君みたいに背が高くって、力強い本好きがいたら助かるよ」

他の図書委員たちも、確かにパワーがありそうなタイプはあまりいない。自分が力強いのかどうかは疑問だったが、他の面々よりはありそうだ。

「いつでも手伝うんで、声かけてください」

「ほんと？　じゃあこれからは遠慮なくお願いしようかな」

先輩が女の子だったら、もしかして恋に落ちてたかもしれないな、と美しい笑顔を見てちよつとだけ思ってしまった。

しかしその場合、ここには2度と寄ることができなくなっただろう。

「今日は……」

先輩が言いかけたところで図書室のドアが開き、誰かが入ってくる音がした。

すぐにこっちに気づき、早足で寄ってくる。いつきだ。

「立花くん、お待たせ」

嬉しそつだが、場をわきまえた小さな声で言ってくる。横にいる先輩には軽く会釈をした。

「用事って待ち合わせだったの？」

先輩はちよつと驚いた様子だ。

「はい」

「そつか。じゃあ手伝いは終わりだね。助かったよ、ありがとう」
頼まれた本はすべて棚へ戻してある。さっきので最後だ。

「いえ、こちらこそありがとうございました」

先輩はちらりといつきを見て、すぐに俺の方に視線を戻した。また、美しい笑顔を浮かべる。

「またお薦めの本があるから。来週用意しておくね」

「はい、ありがとうございます」

先輩がカウンターへ戻っていくのを見送って、いつきに言った。

「荷物、取ってくるよ」

いつもの席にカバンを取りに行く。時計をみると、4時20分だ。もしかして急いで来たのかな。

手を振っている先輩に軽く頭をさげて、図書室を出た。

「今日はね、クッキングクラブの日だったの」

校門を出たところで、いつきが話し出した。

「こんなに暑いのに、今日作ったのはクッキー」

そう言って、カバンから小さな袋を取り出す。

「いつももお兄ちゃんたちにあげてたんだけど」

笑顔で差し出された袋を受け取る。驚くほど可愛い顔をまともに見られず、下を向いたままなんとか声を絞り出した。

「ありがとう」

そこへ、リンリンと能天気な自転車のベルの音が響いた。

「れ〜い〜じ〜！」

葉山だ。乗り手が能天気だとベルの音まで明るくなるのだろうか。

「今お帰りなの!？」

ニヤニヤしている。

答えるかわりに睨んでやった。間違いなく、狙って通りかかったに違いない。

「お、それなに？ すんごい香ばしいんですけど！ 園田ちゃんの作ったスイーツかなにか？」

「そうだよ。クッキー作ったんだ」

いつきはちよつと苦笑いしながら答えている。

「クッキー！ いいね、俺にもちようだい」

「ダメっ！」

葉山の腕が伸びるよりも早く、いつきが先に袋を奪い取った。

「これは立花くんにあげるために作ったの！」

恥ずかしくて顔が真っ赤になる。対していつきは真顔だ。

「いやー！ それは申し訳ない！！ 遠慮させていただきますっ！

さ、玲二、早く食えよ！」

ほれほれ、とひじで突つかれる。どうやら食べる気なんかひとつもなかったようだ。

いつきの手から、改めて袋が手渡される。

「作り立てが1番うまいんだぞ！」

仕方なく袋を開けて、クッキーを1枚取り出した。恥ずかしげもなくまんまとハート型だ。

真っ赤な顔を戻せないまま、一口かじる。

甘い。

特に甘いものが好きなわけではなかったが、大嫌いというわけではない。

ましてや「自分だけのために作ったハートのクッキー」だ。文句を言えるわけがない。

「タチバナクン、オイシイ？」

無駄に目をキラキラさせてふざける顔を、またジロっと睨みつける。しかし効果は特にない。

「園田ちゃん、玲二のやつおいしいってさ!」

「立花くん、どうかな?」

いつきが顔を覗きこんでくる。ちょっと斜めにしたその微笑んだ顔は、ビクリするほど可愛い。

「……おいしいよ」

このままだと顔が爆発するんじゃないだろうか? そのくらい、顔が熱かった。きつとすぐ赤くなっている。もうどこに視線を合わせたらいいのかわからない。

「じゃ、俺はお邪魔だからここで! また来週ね!」

葉山は親指をビシッと立てて、自転車に乗ると猛スピードで去って行った。

「葉山君って立花くんと正反対のタイプみたいなのに、仲がいいなんて不思議」

仲がいいのかどうか、自分にはいまひとつわからなかった。が、確かに高校に入って1番話しているのは間違いなくあいつだ。だとするとやはり、仲がいいということになるのだろうか。

「立花くん、もしかして甘いもの苦手だった?」

「いや、そんなことないよ」

残ったクッキーも口に入れる。……甘い。本当は、少し苦手だ。お茶が欲しい。

「また作ったらもらってくれる?」

いつきは真剣な顔だ。

口の中のクッキーを急いで飲み込んで答えた。

「もちろん」

この答えでまた笑顔になる。それを見たら、とうとう顔が爆発したような気がした。

図書室で悩んでいた自分はなんだったんだろう?

彼女といると、ただひたすら恥ずかしくて、嬉しくて、楽しくて、浮かれた気分になっていく。

もっと一緒にいたいと思っている自分に、もう気がついていた。しかし、同時にあの日の母の言葉が脳裏によみがえる。今も母は様子を伺っているのではないだろうか？

「ねえねえ立花くん」

また、のぞきこむようにいつきが話しかけてきた。この角度はひどく効果的だ。

「メールアドレス、教えてもらってもいい？」

「え？ …… ああ、メールアドレスね」

いいよと答えようと思ったが、この場合はもしやと思い当たることがある。

「俺のアドレス、パソコンのなんだけど、それでもいい？」

可愛い笑顔がちよっと曇る。

「それって……、もしかしてまだ、ケータイのアドレスを教えるのは早いつてこと？」

「いや、違うよ。俺、携帯電話持つてないから」

葉山にも入学2日目に随分驚かれたものだ。

「あ、そうなんだ。なんか……ううん、確かに。立花くん、ケータイ持つてなさそう」

「そう？」

「なんていうかね、スティックな感じがするっていうか」

「……スティックね」

ある意味、大正解だな。

結局パソコンのメールアドレスを伝えて、その日は家に帰った。今日もまた、いつきを家まで送った。昨日はよくて今日はダメなんて、おかしい気がしたからだ。大体今日の方が時間も遅い。

もうすぐ夏本番だ。楽しい夏休みが待っているがその前に、期末試験がある。

「わからないところ、教えてね」と一緒に試験勉強する約束をさせられてしまった。

結局つきあいを断るどころか、ますます近づいていつている。

ハートのクッキーをかじりながら、顔の火照りをさますために少し遠回りして家へ帰った。

家に帰ると、台所から母の声が響いた。

「お帰り」

「ただいま」

顔がまだ赤いんじゃないかと、不安だ。それでも一応、顔を出す。

「玲二」

「……なに？」

「暑かったでしょ。今日そうめんでいい？」

そんなことか。いや、そんなことでよかった。

「いいよ」

「何かあった？」

「別がない」

母の返事は、ふーん、だ。ただそれだけ。

母はいつ気づくんだろう。いや、どうやって気付くんだろう。どうやって阻止しようとしているのだろう？

何せ人間じゃないんだから何でもアリなはずだ。想像もつかないことを考えるのは、無駄かな？

部屋へ戻ると、ベッドへ倒れこんだ。

2日間で、なんだか世界が一変してしまった気がする。

頭が疲れた。

明日は休みだ。

少し、休もう。

目を閉じる。

そのまま珍しく眠ってしまつて、次の日の朝目がさめると、ひどく空腹だった。

#02 「ガールズトーク」 &1t;いつき>

土曜日の朝。

朝食を取って部屋へ戻ると、メールの着信を知らせるライトがついていた。

こんな朝から誰だろう？

「千早か」

親友の、森野 千早。

枕詞の「ちはやぶる」を習った時に、あだ名がブルになってしまった。

なので、アドレス帳の表示はブル。外見はむしろチワワっぽいというのに。

今日はお昼にゆうかの家に集合！

小学校のときからの親友4人組の会合だ。時々休みの日に集まって、話して食べて盛り上がる。高校に入ってからはこれで3回目だ。突然の誘いなのにほとんど強制のような文章。だけど、それも気の置けない仲ならではだ。

ゆうか……早川 友香の家はすぐ近くにある。同じ高校に通っているけど、彼女は部活に燃える陸上少女なので行き帰りが一緒になることはなかった。クラスも別なので、同じ学校だというのに会うのは少し久しぶり。

了解、と返事を送る。

他にはダイレクトメールと、毎日送られてくる占いだけ。昨日の夜、玲二くんにメールを送ったのに。まだ見てないのかな？ ちょ

つと残念な気もするけど、仕方ない。なにせパソコンだもん。
ついでに占いのメールを見ておく。今日のいて座は……3位。頼
まれたことは気持ちよく引き受けるといいことが、か。

洗濯物を干している母に出かけることを告げる。今日も大量だ。
なにせ園田家は男5人と自分の6人兄弟。物干し場には大きなTシ
ヤツがずらりと並んでいる。その光景に、夏の到来を感じた。
せっかく親友たちと会うのだから、なにかおいしいものを作って
持っていこう。昼まで時間はまだまだある。冷蔵庫の中を確認して、
カップケーキを作ることに決めた。

生地を作っていると、2番目の兄の将二しょうじがやってきて、そばにあ
る椅子に座った。

「……いつき、今日はデートか？」

何か作るたびに必ず聞いてくる。まるで親戚のおじさんみたいだ。
「いつもの集まりだから。友香の家で」

「へえ。いつになったら彼氏ができるんだ？ お前は」

自分が彼女作ってデートにいけないのに。と思っただけど、妹の
情けで言わないでおいてあげよう。

3番目の兄の恵三けいそうも顔を出して声をかけてくる。

「お、いつき。何作ってんの？お兄様が味見しようか」

「間に合ってまーす」

「僕の分は？」

弟の六実むつみも顔をだす。

「ありませーん」

1番上の兄と、4番目の兄はやってこない。どこか出かけている
のかな。

いい年になった6人の兄弟なので、さすがに全員の予定は把握で
きない。完全に把握する気もそもそもないけど。

いちいちつまみ食いをしようとしてくる兄弟たちからなんとかケ

ーキを守り抜き、12時前に家を出た。

友香の家の前で、磯部 則子とちょうど出くわした。

「のりこー！」

「いつき、なんだかひさしぶり」

「ホントホント。近所なのにね」

則子は自分とは別の公立高校に通っている。ここから電車で30分と徒歩12分。なにせ電車が逆方向だから、なかなか会えないのも仕方がない。再会を喜びながら、早川家のインターホンを押した。
「いらっさい！」

すぐにドアが開いて、友香が顔を出す。

「千早ももうすぐ着くって」

4人の中で千早だけが私立高校に通っていて、土曜日も授業がある。とはいえ3時限だけなので、もう帰ってくる時間だ。おなじみの友香ママにも挨拶をして、部屋へと入った。

この家に集まった時の恒例の、ママランチが既に用意されている。メニューは大抵、おにぎりとか揚げ。今日はオマケにポテトサラダがついていた。

自分も持参したカップケーキを渡す。

「ありがと」

友香が笑顔でケーキの入ったカゴを覗き込んだ。

「ん、いいにおい」

則子も覗き込んで笑顔を見せる。

「出来立て？」

「うん、メールもらってから作ったから」

「じゃ、これはご飯の後で」

とりあえずお茶を用意して、暑いとか、もうすぐ試験で憂鬱だとか、他愛のない会話をして過ごした。
しばらくしてインターホンが鳴る。

「千早かな。出てくるね」

案の定訪問者は千早で、制服姿になにかビニール袋を提げている。
「アイス買ってきたよ」

3人で拍手をしてその偉業をたたえた。

友香が受け取り、冷凍庫へしまいに台所へ行く。親友4人がそろったところで、女だらけのランチが始まった。

ご飯を食べながら、お互いの近況や、時事ネタなんかを話す。

みんな使った食器をさげて部屋へ戻ると、いきなり千早がニヤリと笑った。

「いつき！ 聞いたよ〜。とうとうプリンスに告白したらしいじゃん！」

「えっ」

他の2人もニヤニヤ、いや、ニコニコしている。

「何で知ってるの……？」

自分史上、最高に小さい声だった。

「私の情報網を甘く見てもらっては困るわね」

千早によると、中学のとき通っていた塾の仲間が、実は私と同じクラスの中牧^{なかまき}翠^{みどり}だった、という。そういえば、そんな話を以前彼女から聞いたことがあった。

「え？ 中牧さんはなんで知ってるの？」

「なんか誰か男子がでっかい声で発表したって」

誰か男子が……って。

玲二くんがそんなことをするとは思えない。

じゃあ、もしかして葉山君……？ そういえば昨日の帰り道、やたらとご機嫌だった。

それよりも、でっかい声で発表ということは。

「じゃあ、もしかしてみんな知ってるのかな……」

「さあねえ。でも、昨日の放課後いきなりの大発表だったって」

「恥ずかしさで真っ赤になってしまっ。なんでそんなことが起きたんだろう？」

「でもお付き合いはしてないってどういうことなの？」

「え？ マジで??」

「プリンス断ったの？」

千早の言葉に2人が反応した。仕方なく、事の顛末を3人に話す。

「んわー！ じれったーい!!」

友香が頭を抱え、

「プリンス、おくゆかしい」

則子が目を輝かせ、

「チューでもしたら一発でしょ!？」

千早がシメる。

「そんなの無理だよ」

玲二さんとチューなんて。考えただけでも無理だ。ショックで心が止まってしまいそんな気がする。

「チューごときで照れるって!」

友香が呆れた顔をしている。そんなこと言っ、自分にしたことあるのかな……。

「でもでも、告白できたんだからすごいじゃん！ だってもう6年くらい言ってたでしょ。立花くんが好きって……」

則子がうつとりした目をしている。

そう。彼を好きになったのは、小学校3年生の時だった。

隣のクラスの立花くん。

ドッジボール大会の時に、気がついた。

色が白くて、スラッと背が高い、少し茶色い瞳と髪の素敵な男の

子。王子様みたいって思った。

それから時々、気にかけて見ていた。
頭もよくて、走るのも早かった。
見るたびに、少しずつ好きになっていった。話したこともなかったのに。

誰よりも素敵な私の王子様が、玲二くんだった。
みんなで好きな人を教えあった時に「王子様」と言ったせいで、
あだ名がプリンスになってしまった。

毎年4月になると、今年こそ同じクラスになれますように、と祈った。

でもいつも、隣のクラス。

誰か女の子が話しかけているのを見ると、胸が痛かった。

でも、あまり興味なさそうな態度でいるのを見ると安心した。

誰かが彼の話をしていると、気が気じゃなかった。

中学3年になってからは、どこの高校を受けるのかなんとか知ろうとこっそり調べた。

どうしても同じ高校に入りたくて、一生懸命勉強した。

「努力したもんね」

友香がうんうんと頷く。

「7年目の奇跡でしょ。同じクラスになるなんてさあ」

「で、どうなの、反応は？ ふられちゃったわけじゃないんでしょ」

千早が聞いてくる。

「うん……、昨日と、おとといは一緒に帰った」

「えっ」

「なんだ、ちゃんと攻めてるんじゃない！ いつきー！」

3人が一気に盛り上がった。

「あと、昨日は朝も一緒に行った」

3人がヒヤッホーと声をあげる。

「あと、昨日はクラブで作ったクッキーあげた」

3人はバンザイと両手をあげた。

「その、クッキーの形はもちろんハートですよね!」

友香が手をマイクに見立ててインタビューしてくる。

「はい! もちろんハートです!」

千早も続く。

「彼はなんて……? ちゃんと食べてくれましたか?」

「はい、……おいしいって言ってくれました」

「おいしい出ました〜!」

4人で大いに盛り上がる。

「いつき、プリンスは絶対落ちるよ!」

千早が親指をぐつと立ててウインクしてくる。

「そうかな……」

「そうだよ、無敵の美少女なんだから、自信もちな!」

友香が背中をポンポンと叩く。

「無敵じゃないよ」

「恥ずかしくなって、下をむいた。本当に無敵の美少女だったら、OKしてもらえたはずだ……」

「いつきは中身も可愛いもん。一緒にいたら、絶対好きになっくれるって」

千早の顔がなんだかやたらと優しい。

自分の容姿にはあまり自信がない。ごく普通、と思っている。

周りの扱いは良くても、自分にとってはただの見慣れたいつもの顔でしかない。

でも今、親友の言葉に元気と自信をもらったように思う。

「どう? 話した感じは。今まで話したことなかったんでしょ?」
友香が聞いた。

「私、同じクラスになったことあるけど、ほとんど声きいたことないよ。プリンスってば超々無口」

千早が言う。

「私も同じクラスになったことある。けど、確かに先生にあてられた時くらいだよ、話すのって」

則子も証言した。

「確かに無口かも。返事も短いし……」

玲二くんの様子を思い返す。黙って頷いてることもあるし、無口で間違いはない。

「でもね、告白した時も、クッキー渡した時も、真っ赤になって下向いてたの。すごく照れちゃってて、可愛くなって思った」

「えっ、真っ赤になって？」

友香と千早がニヤニヤする。

「萌えるねー!!」

則子は少し反応の仕方が違うみたいだ。

「じゃあさ、実は裏ですっごい女たらしとか、そういう別の顔はないってことかな」

そうかそうかと皆頷いた。

「あのビジュアルならモテるだろうにねえ。ハーフだし。ハーフってだけでもうモテるでしょ」

友香がうなる。

「そうだよ。背も高くってさ、カッコいいよね。運動神経もよかつたよね」

則子はなんだかうっとりしている。彼女のこのうっとりは恋ではなく、いつもの妄想癖だ。

「実は彼女がいるとかは、なかったんだよね？」

「うん……、いないって言ってた」

多分、本当にいないんだと思う。あんなに真っ赤になっちゃって、嘘がつけなさそうな感じがした。

「いつき、ばやばやしていると他の女に取られちゃうよー!」

「そうそう、攻めて攻めて、攻めまくっちゃうのよ！」

友香と千早は盛り上がっている。おかげで、私もガッツが出てきた。

「うん、頑張る！」

「夏休み、海に誘いなよ！」

千早がものすごくいいことを思いついた！　といった顔をしている。

「海に？」

「ビキニで悩殺しちゃえばイチコロでしょ」
うわあ。

「ビキニなんて無理だよ」

「だいじょうぶ、なんなら一緒に行くよ！　ね、みんなビキニで！」
千早の提案に友香が飲んでいたお茶をちよつと吹いた。

「みんなビキニって！」

「冗談に決まってんでしょ」

千早は友香を軽くあしらうと、笑顔で迫ってきた。

「ねね、4対4にしたら、シャイなプリンスだって来やすいんじゃない？」

玲二くんが海水浴というのは、あまりイメージできない。海辺で本を読む、とかなら似合うけど……。

でも確かに、みんなで、だったら来てくれるかな？

「ねえ、今日とか明日、デートしようって誘わなかったの？」

「ええ？　……だって、まだ、つきあってるわけじゃないし」

2日前にやっと友達になったばかりだ。もちろん、本当は誘いたい。どこか一緒に行けたら、確実に嬉しい。

「ねえねえ、プリンスも今頃、落ち着かないんじゃないのかなあ？」

千早が言った。

「今まで何回か、告白したって子の話聞いたけど、即お断りされたってみんな言ってたよ」

「そうなの？」

「いつきとは、ちゃんとお互いをよく知ろう！　ってことなんですよ？　OKに限りなく近いんじゃないかな」

もしそうなら、本当に嬉しい。

その後、付き合うことになったら即報告する約束をさせられた。ここまで見守ってくれたみんなには、こんな約束しなくてもすぐに伝えるつもりだ。

女ばかりの集会は盛り上がり、夕方までたくさんのくだらなくて深い話が続いた。

そろそろ5時になるうかという頃、まったりとしたムードの中で電話が短く鳴った。

「メールだ」

2番目の兄ちゃんからだ。帰りに釣りの雑誌を買ってきてくれ、と書いてある。

どうせヒマなんだから自分で行けばいいのに。

でも仕方ない、頼まれてやるか。

兄からのメールを閉じると、もう1件未読のものがあるのに気がついた。盛りあがっていたせいで着信音に気がつかなかったらしい。着信は13時5分。

件名は……「立花です」

「わっ！」

思わず、声をあげてしまった。みんないつせいに注目してくる。

「どしたの？」

「え……あた……」

なんだか口がうまく動かない。

「……立花くんからメールが来てた」
だれていた場が再びわつと盛り上がる。
「いつき、いいから早くみなよ！」
「うん」

立花です。

昨日の夜メールをくれていたのに、返信が遅くてごめんなさい。
確かに一昨日のことは驚いたけど、とても嬉しかった。
これから少しずつ、お互いのことを知っていけたらいいね。
あまり喋るほうじゃないから、こういう時なんて返したらいい
かわかりません。

こんな俺でよかったら、これからどうぞよろしく。

立花 玲二

玲二くんらしい、まじめな文章だなあ。

でもそのらしさがなんだかとっても可愛らしく感じられて、いつ
の間にか笑顔になっていた。

「固いな……」

すぐ後ろから声がする。振り返ると千早がのぞいていた。

「ちよつと！」

「いいじゃんいいじゃん！ 気になるんだもん！」

「ダメだよ」

とはいえ、きつともう全部読んでしまったんだろうな。

「きつとなんて書こうか悩みすぎて返事が遅れたのね」

千早はニヤニヤしている。

「どうかな。パソコンで見てるからかもしれないけど」

「パソコン？ ケータイは？」

「ケータイは持っていないんだって」

3人は顔を見合わせて、その後なぜか爆笑した。バンバン机を叩きながら、千早と友香は苦しそうに言う。

「あははは……、プリンスらしい……っ!!」

「期待を裏切らない男だよ！プリンスはっ！」

なんだか自分が笑われているようで少し悔しくなってきた。

「もう！いいじゃん、ケータイ持ってなくても!!」

「いいよ……。いいと思う。プリンスにはケータイない方が絶対いい……！」

そういつてみんなまだ笑っている。

段々自分もおかしくなってきた、最後は一緒に笑った。

大爆笑がやっとおさまったところで、今日の集会はお開きになった。皆、家は遠くない。外はまだ明るいので、それぞれ家路についた。

「じゃ、いつき！次のメール来たら転送してよねっ」

千早は乗ってきた自転車に颯爽とまたがり、風のように去っていった。

則子とは途中まで一緒だ。

「お兄ちゃんに買い物頼まれたから、私行くね」

「わかった。いつき、またね！」

本屋のある駅前の商店街へ向かう。

もうすぐ試験もあるし、自分用のノートも買おう。いつも寄っている海原書店は文具コーナーも充実している。

まずは雑誌が並ぶ棚の「趣味」のコーナーで「隔週刊 釣り野郎マガジン」を手に取った。しょっちゅう頼まれるので、もう場所はしっかり把握している。

そして文具のコーナーへと向かう途中、思わぬ神様からの贈り物に足を止めた。

「立花くん……」

その声で彼もこちらに気がついた。

「園田」

……やっぱり、散々ウワサをしたからかな。

お使いを頼んできた兄ちゃんに心の中で感謝して、急いで近くに駆け寄った。

「立花くんも、買い物？」

「うん。ちよっと芯を切らしちゃって」

手にはシャープペンシルの芯。なるほど……、玲二くんはBを使っているらしい。

「釣りが好きなの？」

「えっ!？」

思わぬところで会えた嬉しさで、つい、釣り野郎マガジンを胸にぎゅーっと抱きしめていた。

「あ、えーと、これは、お兄ちゃんに頼まれたもので……」

「ああ、そうなんだ。意外な趣味だなんて思っちゃったよ」

玲二くんが笑顔になった。いつもは少し鋭い目が、優しく細められる。

カッコイイ……。

今日のお買い物は芯だけらしく、もう会計に向かっている。もう今日はノートはいい。一緒に並ぼう。

代金を払って振り返ると、店のドアの前で待っていてるのが目に入った。

小走りで王子様の元へ向かう。

「立花くんはもう、帰る？」

「うん」

2人で商店街を歩く。すると出口に「痴漢に注意！」の看板が置かれてるのが目に入った。

黒い悪そうな影が女性を後ろから襲おうとしているイラスト付だ。

「……俺、送っていくよ」

「えっ……、いいの？」

「うん。急がないし」

うわあ。すっごく、優しいんだ……。

「ありがとう」

もう、手でもつないでしまいたい。

そんなことしたら、どんな反応するだろう？

まず真っ赤になって、……でも、手を振り払ったりはしない、かな。それで、黙って手をつないだまま、家まで歩く……。

そんな想像をしながら、隣を歩く玲二くんの横顔を見あげる。

茶色い髪が夏の日差しに照らされて輝いていた。同じ色の瞳も揃ってキラキラしている。

まっすぐ前を見ている横顔が、大好き。

じっと見ていると、玲二くんがこちらへ顔を向けた。

ドキっとする。

「メール、返信遅くて、ごめん」

「え？ ううん、いいよそんなの」

正面の顔も、もちろん大好き。

「返事くれただけでも、嬉しいもん」

かっこいい顔が、みるみる赤くなっていく。

また照れてる。

おかげでちよつと逆方向、しかも下を向いてしまった。しまった。照れさせると顔が見られない。

その時、メールの着信音がした。今はいいやと無視していると、まだちよつと顔が赤い玲二くんがまたこちらを向いてくれた。

「見なくていいの？」

今はこんなオジャマはいいんだけど。でも、せつかく言ってくれたわけだし見たほうがいいかな。

ちよつと考えて、とりあえず誰からかだけチェックしようと考えた。

「じゃ、ちよつとごめん」

千早からだ。

「あとでいいよ。友達からだから」

「そう？」

「さっきまで会ってたんだ。知ってるかな、千早。森野 千早」

「……ああ、ブルさんね」

知ってるんだ！ なんだか嬉しい。

「あと、友香と則子。いつも4人で集まるんだ」

玲二くんはなんとなく微笑んだような表情で話を聞いている。

散々あなたの話をしましたとはさすがに言えないな……なんて考えたところで思い出した。

「そうだ。……立花くん」

「何？」

「昨日、なんだかあの……、私が告白したこと、誰かがみんなに話したって聞いたんだけど」

「ああ」

玲二くんの顔がちよつと曇る。

「もしかして、葉山君が？」

「え？ ……いや、葉山じゃないけど」

違うんだ。葉山君じゃないなら誰なんだろう？

「ごめん、みんなにその、園田に告白されて……で、まだ、付き合
ってないって話はした」

玲二くんがわざわざそんなことをみんなに発表するかな？
いや、昨日一緒に帰る約束をした。こっそりじゃなくて普通に話
したんだから、聞こえた人だっただろう。もしかしたらそこか
らなにか言われたのかもしれない。

「そうだったんだ……」

申し訳なさそうな顔をしている。もうこれ以上突っ込んだらダメ
だ。きつと玲二くんは悪くないはず。

心配させないように、明るく言おう。

「えへへ……、なんか照れちゃうね。みんな知ってるなんて」
「……」

また赤くさせちゃった。

そんな話をしているうちに、家に着いてしまう。

「立花くん、ありがとう」

黙って頷いている。本当に無口だ。でも、そこがいい。

「また来週」

玲二くんは手を振って去っていった。それに、手を振り返す。
後ろ姿が見えなくなってようやく、家へ入った。

「ただいまー」

リビングには4番目の兄、幸四しんしがいる。

「おい、いつき！」

「なに？」

「今の男誰？ 彼氏できたの？」

むむ。見ていたのか。

「違うよ。彼氏じゃない」

「なに？ 男と帰ってきたの??？」

2番目も奥からやってきた。

「もうっ」

買ってきた釣りの雑誌を兄にポイッと投げ渡した。

でも、将兄ちゃんのおかげで玲二くんに会えたわけだし……。

「500円でいいよ」

「何っ？ いつもキツチリ取るのに！ ウキウキ気分で帰ってきたからか！？」

「もー、いいでしょ！ やっぱり680円！」

「えっ」

キツチリと雑誌代を受け取って、部屋へ戻った。そういえばメールが来てたっけ。

さっきはビキニって言ったけど、浴衣のほうがプリンス喜びそう！

花火大会に誘おうぜっ

確かにそうかも。

毎年恒例の、海でやる花火大会が8月にある。

浴衣か……。玲二くん、浴衣着たらかつこいいだろうなあ……。

いや、足が長いから、あんまりかな？

夜の海辺に2人で立っているところを想像するとたまらなく恥ずかしくて、ベッドで一人ゴロゴロと転がった。

「いつきー、帰ってるのー？」

母の声で現実へと引き戻される。夕食の準備の手伝い要請に違いない。

「はいー」

部屋を出て、台所へと向かってエプロンをした。今日も大量の食材が待っている。なにせ大の男が6人もいるんだから、多くもなる。

食事の用意の手伝いは、日課だった。

「友香ちゃんたちみんなかわりなかった？」

「うん。いつもどおりだよ」

この様子からして、今日はカレーだな。とりあえず、じゃがいもの皮むきからやろう。

「ところでさ……」

母が声を潜める。

「さっきの男の子、立花君だった」

ドキっとした。

兄ちゃんだけではなく、お母さんまで見ていたとは。

「え……？　そうだけど……」

返答に困る。なんてかえしたらいいの、こういう場合。

「送ってもらった？」

「……うん」

母はニヤ〜っと笑って肘でつついてきた。

「やめてよ」

「カッコイイわよねえ〜。いつもね、行事のたびにお母さんたちの注目の的だったわよ」

確かに玲二くんは目立つ。お母さんも学校へ来るたびに、あの子カッコイイわ〜と言っていた。

母の醸し出す微妙な空気にちよつと耐えられなくて、つい言い訳っぽい言葉が出てきてしまった。

「別に、付き合つてるとかじゃないから」

「そうなの？？」

ガツカリした声。私の方が、ガツカリなはずなのに。

「そうだよ……。たまたま本屋さんで会って……で、送ってくれただけ」

「まだ明るいのに？」

「だって、商店街に『痴漢に注意』って看板があったから。それで「ふーん」

お母さんはつまらなさそうに口をとがらせてる。

「別に彼氏の1人や2人、いたって文句言わないわよ？」

「いないもんはしょうがないじゃん……。大体2人とかありえないし……」

「あ、そうだ！」

お母さんはにんじんの皮を剥く手を止めて、冷蔵庫にはりつけてあった封筒を渡してきた。

「これ、伯父さんからもらったの。水族館のチケット」

伯父さんは水族館の館長をやっている。なので、たまにこうやって入場券をもらっていた。

「今回は2枚しかないのよ。六実が2枚いるっていうから。4枚あったらいつきについて思ってたけど」

そこでお母さんは口元に手を当ててニヤリと笑った。

「2枚でもよさそうなお年頃だから」

むっとした顔をしてみせたけど、本当はちょっと嬉しい。

玲二くん、水族館好きかな？ 顔がニヤけそうになってしまう。

来週末から試験が始まる。それが終われば夏休み。水族館でデートなんて、初めてのお出かけにはちょうどいいんじゃない？？

「……ありがとう」

「どういたしまして」

母はわざわざスカートをつまんで貴婦人風のお辞儀をした。

「がんばってね」

どうも、何もかも見透かされているみたいだ。エプロンのポケットに封筒をしまう。あとで忘れて洗濯に出さないようにしないといけない。

楽しい夏休みになるといい……。いや、その前に追試や補習にならないように頑張ろう。

夜になって、玲二くんにメールを送った。

立花君

今日は偶然会えて嬉しかったです。

来週からもう期末試験だね。

英語が苦手なんだ。わからないところ、教えてください。

そして今1番聞きたいことは……

立花くんのこと、玲二くんって呼んでいいですか？

打ち込んで消し、打ち込んで消す。

まだ早いかな……。でも、玲二くんって呼びたい。それでさらに、「いつき」って呼びたい。

さすがにそれはまだ早いかな……？

海辺に浴衣姿で立つ2人。聞こえてくるのは波の音だけ。

「玲二くん」

「……いつき」

見つめあって、そして……。

枕に顔をうずめて、ベッドの上でゴロゴロ転がった。

はああ〜っと大きく息を吐く。

そんな日が来るといいな。でもその前に、ちゃんと彼氏と彼女の関係にならないと。

焦らない焦らない。あんまりがつつくと、玲二くんはきつとひいちやう……。

悩みに悩んで何とかメールを打ち終わると、えいっと力をこめて

ボタンを押した。

友達へのメールに1時間もかけたのは初めてだ。
送信完了。

次の返事はいつ届くだろう？ 明日のお昼くらいかな……。

ワクワクしながら、また幸せな妄想に浸りつつ眠りについた。

#03 「君との距離感」 &It;玲二>

日曜の朝早くから、パソコンとにらみあっていた。

立花君

今日は偶然会えて嬉しかったです。

来週からもう期末試験だね。

私、英語が苦手なんだ。わからないところ、教えてください。

私のせいで、みんなに告白したこととか、色々知られちゃって、さつきは照れちゃうねなんて軽く言っちゃったけど、よく考えたら心配になってきちゃった。

立花君はイヤじゃないかな？ ごめんね。

私はなんとなくクラス公認で仲良くできるような気がして、ちよっと嬉しいです。

あと、1つ質問。

立花君のこと、下の名前で呼んでもいいですか？

玲二君って呼べたら、すごく嬉しいです。

それじゃあおやすみなさい。

いつき

顔が熱い。パソコン相手に赤面している。

……なんて返信したらいいんだ。

勉強は1人でします。

あんなことになって迷惑してます。

名前で呼ぶなんてなれなれしいことしないでください。

本当なら、返事はこうしなくてはならない。でもそれはできそうになかった。

いつきの顔を思い浮かべる。

無邪気な笑顔が大きな瞳を輝かせて、まっすぐこちらを見ている。

パソコンの前に突っ伏した。

……まだ、彼女とつながっていたい。

散々考えたのに、気持ちはまとまらなかった。

ダメだ。

YESにしろ、NOにしろ、なんと書いたらいいかまったくわからない。

ちよつと時間を置こう。時間を置いて考えよう。

パソコンの電源を切って、窓を見る。外は雨。雨の日の散歩も悪くはない。ちよつと歩いてみよう。

部屋を出て、階段を降りてリビングをのぞいた。父と母がのんびりコーヒーを飲んでいる。

「ちよつと散歩してくる」

「雨が降ってるわよ」

母が言った。

「知ってる」

玄関で傘を取って、外へ出た。

蒸し暑いかと思ったら、外は案外涼しい。どこへ向かうか少し考え、そのまま道なりに歩いた。

この町には海がある。海までは歩いて30分ほど。夏になれば毎年大勢の海水浴客でにぎわう。

夏の海はあまり好きじゃない。日焼けすると後々厄介なのと、そもそも人ごみが苦手だ。

なのでこれから行くのは、海の手前の図書館。1番落ち着くなじみの場所だ。

最近はその学校の図書室ばかりに寄っていて、ここへ来たのは少し久しぶりだった。

ここでたくさんの本を借りて読んできた。

小さいころは、子供向けの読み物や伝記。文学も、小説も、たくさん借りた。

慣れ親しんだ本棚の間を歩いて、足を止める。

この棚の本に世話になったことはない……。

「恋愛小説」のコーナー。

ズラリと並んだ本の背表紙を順番に見ていく。

「許されない恋」というタイトルで視線が止まる。しばらくその背表紙とにらめっこをして、小さくため息をついた。

図書館の中をぐるっと一周した。雨にも関わらず、日曜の朝から結構な人が図書館を訪れている。どうやら空いている1人用の席もないらしい。気持ちが落ち着いていないので、集中して本を読むことはできなさそうな気がする。

諦めて2階にあるロビーへむかった。ここ大きな窓からは海が見える。夏のビーチは好きではないけど、海を見るのは嫌いじゃない。

でも今日は雨のせいで、見える景色の色は暗い。

ぼんやりグレーの海を眺めていると、後ろから「あっ!!」という声がした。

振り返ると、見覚えのある女の子が立っている。

「立花君」

彼女はたしか……。

「磯部さん……、だっけ」

だっけ、はないかなと思ったが、相手は嫌な顔をせず答えてくれた。

「はい……。磯部です」

昨日いつきが仲良くしていると言っていたはずだ。

その後ろに、どこか同じような雰囲気の子がゾロゾロと階段をあがってくる。なにか学校の行事か、部活動でもやっているのかな。そしてそのうちの2人が、なぜか勢いよく近づいてきた。

「ちよつと磯部……!! どなたなの!？」

「素敵……!」

「中学の時の同級生で、えー、友達の彼氏なんです!」

自分のちよつと驚いた顔を無視して、3人は小さな声で盛り上がっている。

「友達の彼氏つ……!？」

「ちよつと磯部……! あとで相談があるから!」

見知らぬ女子生徒たちはなにやらヒソヒソと、しかしやや興奮したような様子で奥へと移動していく。

「まだ彼氏じゃなかったんだっけ……」

いつきが告白したものの、返事を保留されていることを知っているということか。

恥ずかしい。

「うん」

「あの、立花君」

うしろから、「おーい磯部ー」と呼ばれて、一旦振り返って手をあげている。

が、磯部はすぐに振り返って言った。

「いつき、すごくいい子なんで」

それはもうわかってる。

「……結婚式には呼んでね」

ニヤッと笑顔を浮かべると、こっちの返事も聞かずに去って行った。

結局なじみの場所でも落ち着かなくなり、諦めて雨の中を家路に着いた。

そして1日かかっても、メールの返事をかくことはできなかった。

次の日の朝、いつも通りの時間に家を出て、学校に向かう。

メールを送っていないことが心にひっかかっている。しかし、かけないものは送れない。会ったら一言謝ろう。

駅に着いたが、今朝は彼女の姿はない。金曜日は「たまたま早く目が覚めた」と言っていたはずだ。

待つべきだろうか……。

さわやかにおはようと挨拶して、軽やかに会話できるか？ 自分に問いかけてみる。

できそうな。できなさそうな。……いや、きっとできない。

「あ、立花くん！」

「っ！」

向日葵のような明るい笑顔が駆けてきた。夏の制服姿が眩しい。

「おはよっ！ 今日も一緒に行こうと思って……走ってきたんだけど」

ふうつと息をついている。

「ちよつと遅かったから、会えないかと思ってた」

どうやら足を止めて悩んだ甲斐があったようだ。

「あれ？ もしかして、待っててくれた？」

いつきが小首をかしげて言った。その可愛さと、ズバリ当てられた照れくささで顔が熱くなっていく。

「……うん。今日も早く来るかなって思ってた」

「うわあ！」

いつきが笑顔になる。とても嬉しそうな、こちらまで幸せになるような素晴らしい笑顔。

「嬉しいっ！」

頭の奥の方で、なにかが爆発する。

「行こ！」

なんとかギリギリのところで正気を保ちながら、いつきと改札をくぐった。

少し混雑した電車に揺られながら、いつきを見た。

整った顔立ちの中で、特にその大きな瞳の輝きに目が離せなくなる。

周りの乗客もチラチラと隣の可愛い女子高校生を見ているように思った。

いつきが顔をあげて、こちらを見た。そして微笑む。

「あのさ……」

顔が熱い。いちいち真っ赤になったりして、一体自分はどう思われているだろう。

「メールの返事、しなくてごめん」

「ああ」

「なんてかいたらいいか、悩んじゃって」

「いいのいいの！ 私も、なんか困らせちゃったかなって思ってたから」

確かに困っていた。が、こんなことに気を使わせてしまうのも悪い気がする。

「英語は……俺、多分得意だから、まかせといて」

「ほんと？」

「うん」

周りには一切知られていないが、ドイツ語と英語が話せる。

「あと」

「うん」

「呼び方は……、好きに呼んでくれていいよ」

「ほんと？」

「いつきがニコニコとする。」

「友達みんな、好きな呼び方で呼ぶだろ」

葉山もいつの間にか、玲二と呼び捨てにできていた。

いつきのニコニコはピタッと止まって、今度はくちびるをとがらせた顔になる。

「友達か」

少し不満そうな顔で、じっと見つめられた。

「早く友達以上……じゃなくて、『友達より上』になりたいな」

どうしてこう、ストレートになんでも言うてくるんだろ。早く、

いちいち照れて顔を赤くしないようになりたい。

「えっと、玲二くん、私のこともいつきって呼んでくれる？」

「え？」

それは……。

「ごめん、それはちょっと無理そう……」

断ったのに、なぜか笑顔だ。困って断るのがわかっていたんだろ

うか。

1時間目の授業が終わり、休み時間になった。
そういえば、一緒に勉強しようと思ったって、どこでしたものか……。
家に招くのはダメだ。母に堂々と挑戦状を叩き付けることになっ
てしまう。

「れ〜い〜じ〜くんっ」

後ろからぎゅっと、抱き着かれた。

「ねえねえ、お願いがあるの……」

「やめろよ」

こんなことをしてくるのは1人だけだ。頬を寄せてきたのを手で
押し返す。

葉山は、自分の前の宗田を押しつけて席に座った。宗田の文句は
一切聞き入れてもらえないらしい。

「なあ玲二、俺、土日で気がついたんだけどさ」

何を言い出すつもりだろうか。一瞬構える。

「俺、このままだと試験がヤバいわ」

眉間に寄せたしわを元に戻した。そんな話なら一安心だ。

「容姿端麗で成績優秀な玲二君！ 僕と一緒に試験勉強してくださ
い……」

下を向いて差し出しされたふざけた右手をペンっと叩く。

「ダメなの？」

ぷーっと口をとがらせる葉山は、いつきと違って全然可愛くない。
可愛くない友人は次の瞬間、いきなり立ち上がった。

「……あ！ おまえ、もしかして！」

おっと、といった面持ちで口に手をあて、続きは小さい声にした。

「園田ちゃんと……、ラブラブ勉強会する約束があるとか？」

その言葉に、赤くならないことだけに集中した。が、その結果随分微妙な表情になってしまったようだ。

「マジでか！？ 余裕なんだな玲二……！ やっぱり授業まじめに聞いていると、試験もちよろいってか？」

「なんだよそれ」

「えゝ？ だつて2人つきりでなんてお前……」

わざとらしく両手で顔をおさえ、腰をクネクネさせる。

「葉山」

「違うお勉強会になっちゃうだろっ」

「はや まっ！」

「どうしたの？」

宗田の右隣の席に座っているいつきが声をかけてきた。

「うおっ」

葉山は慌てて姿勢を直した。

「……いやね、玲二君と、試験のための勉強会を開催しようじゃないかって話をね」

冷やかな視線を葉山にぶつけてやる。それは華麗に受け流されてしまった。

「園田ちゃんも約束してたのかな？」

「うん。じゃあ、葉山君も一緒にやろうよ」

白々しいセリフに対して、いつきは清々しく答えている。

「え、いいの??」

ためしに言ってみただけの本人もちよつと驚いたようだった。

「いいよ。私も玲二さんと2人じゃ、緊張しちやいそうだし」

そういつてこちらをちらつとみる。

「玲二くん、いい？」

「……もちろん、いいよ」

一瞬拍子抜けしたような、でも安心したような気持ちになった。

「じゃあ、友香も誘っていいかな？ 部活ばかりしてて大変なこ

とになりそうって言ってたから」

「友香ちゃん？」

「1組の子なんだけど、小学校からの友達なんだ」

葉山はこちらへぱつと振り返った。

「可愛い？」

「え？」

「大丈夫、友香は可愛いよ」

いつきがうふふと笑いながら答える。

「葉山君って理科が得意なんじゃなかったっけ？ 教えてもらおうかな」

親友の表情がデレッと崩れる。

「園田ちゃん、マイエンジェルって呼んでいい？ っていうかもウ玲二なんか忘れて俺と付き合おうよ」

「それはダメ。両方ダメ」

いつきが真顔で答える。しかし、断られた葉山にたいしたダメーシはなさそうだ。

「お前って幸せ者だな……」

その言葉に、なんと答えたらいいかわからない。

「俺の家、今年の3月にじいさんが閉めた書道教室の部屋が空いてるんだ。会場はそこでどう？」

「へえ、いいの？ 使っちゃって」

「いいのいいの。なんだかんだ家族も集まりに使ってんだよね。勉強するっていったら喜んで使わせてくれるよ」

えっへんと威張っている。確かに、誰かの部屋よりもそういう場所の方が落ち着くだろう。

「その勉強会、僕も参加させてくれ」

「相原君？」

意外な乱入者だった。入ってきた理由は明らかに2つ。

いつきと過ごしたいのと、自分への牽制。まるでありがたくない相原の登場に、答えたのは葉山だった。

「えゝ、お前、勉強会なんて必要くない？ 前回の試験、学年2位とかだっただろ？」

「だから参加するんじゃないか。教えられる人間が多い方がいいだろう？」

そういつて視線をこちらに向けてくる。

前回の試験、自分は27位。

高校生活のモットーは「目立たず、目をつけられず、ほどほどに」だ。

試験も少しだけ、わざと間違えている。少なくとも5位以内に入らないようにした結果だ。……とはいえ、本気でやって何位になれるのかはわからない。

「いいでしょ、園田さん」

「え？ ……私はいいけど……」

相原がいつきに確認して、妙に勝ち誇ったような顔になる。しかし葉山がズバっと切り捨てた。

「いや、相原はダメゝ」

「え……、なんで??」

「相原ってさ、玲二のこと嫌ってねえ？」

そのセリフに、いつきが心配そうな顔を相原を向ける。

「いや……、そんなことは……」

「いや、あるね。玲二は俺の親友だから、悪いけどお前より優先順位は上！ 大体男女2対2になってちょうどいいところだから遠慮してくれ！」

思い切りのいい発言に、相原は言葉もなく去っていった。

どうやら葉山との友情は想像よりずっと深かったようだ。

しかしいつきは心配そうな顔をしている。

「葉山君」

「園田ちゃんも玲二の方が大事だろ？」

「え？ ええ……？ うん……」

いつきが赤くなつてうろたえる。

「じゃあ決まり！ 今日から始めようぜ。放課後寄ってって。うち
はここから歩いて15分くらいだから」

そこでちょうど休み時間が終わって、後ろの席に戻った葉山が囁
いてきた。

「なあ、女子の可愛いはあてにないだろ……。友香ちゃんって
マジで可愛いのか？」

先ほどの友情に感謝して、振り返って答える。

「マジでだ。安心しろ」

「あとさ、玲二」

もう教師が教壇に立つところだというのに、まだ用があるんだろ
うか。

「今日から、玲二君って呼ばれてんだな……」

鋭い指摘に体がピクつとなる。

「俺のことも、良太郎、って呼んでいいぜ」

少し呆れたが、でも、それもいいかもしれないなと少し思った。

放課後になつて、葉山家へと向かった。

古めかしい外観の葉山家は母屋と離れに分かれていて、元書道教
室は離れにあった。

歴史を感じるつくりだが、冷房はちゃんとつけられている。

「葉山くんって、字がキレイだね」

女子2人が感心している。

「書道部なんでねっ。書道家の孫なんでねっ」

葉山はスラスラとペンを走らせる。それをみる早川のノートに
走る字はなんとも言えないフォントで書かれている。

書道教室には大きなホワイトボードがかけられ、月間のスケジュールが書き込めるようになっていた。

そこには今日の日付から「良太郎 試験勉強会」と美しい字で書かれている。試験の最終日前日である来週の木曜日まで矢印がひっぱられており、会場はしつかり確保されているようだった。

「葉山君、予定バッチリ押さえてるんだね」

「そ、まかせといて。毎日来てくれ！　ともに勉学に励もうじゃないか！！」

やけに朗々とした声で葉山が答え、早川が呟く。

「助かるわ……」

どうやら試験がヤバいと言っていたのは本当だったらしい。

「ねえ、いつきも毎日来る？　ぷ……っと、立花君も」
いつきがこちらを振り返る。

「玲二くん……、いい？」

「ねえ、れいじくん……、きてくれる??」

葉山もふざけて続ける。それには特にリアクションもせずに質問をした。

「葉山、本当にいいのか？」

「いいよ。親友や美少女ならいつでも大歓迎だから」

実に調子がいい。しかしそれだけではなく、気もいい男だ。

「よかった。じゃあみんなで追試にならないようがんばろー！」

早川が右手を高く突き上げた。いつきも「おー」と応じる。葉山も続いたので、仕方なく自分も右手を上げた。

満足そうにうなずいた葉山は、立ち上がってホワイトボードの来週の金曜日の欄に「うちあげ」と書き込んだ。

「いい夏を迎えようぜ」

3人はまた「おーっ」と手を上げる。全員に見つめられて、仕方なくまた右手をあげた。

期末試験はあつという間にやってきて、あつという間に去っていった。

結果はまだ出ないが、最終日の金曜日、ホワイトボードにかいたとおり打ち上げをすることになった。

女子2人を待たせ、葉山と飲み物を買いに外へ出る。外は暑い。そろそろ梅雨が明ける。暑い中重いものをもつのは男の役目、らしい。

「今回は古文、結構できたわ。玲二、ありがとな」

「書道が得意なのに古文が苦手とはね」

「それとこれとは関係ないんだよ」

うんうんと頷き、コーラのペットボトルを手を取っている。

「そういえばさ、玲二」

自分も好みの紅茶を取って、カゴに入れた。

「相原さ、あいつあの次の日、また入れてくれって来たんだぜ？」

それは知らなかった。なんという情熱の持ち主だろう。

「しかも、佐々木も来るからって。佐々木って、女子の方の佐々木な。これで3対3だからいいだろうって」

クラスには男女2人の佐々木がいた。女子の方は佐々木 瞳。名前と姿はわかるが、どんなキャラクターなのかは知らない。

「断ったのか？」

「当たり前だつて！ あいつの狙いは園田ちゃんだろう？」

相原がいつきファンクラブの会長だということは、実は有名な話なんだろうか？ と思ったが、そうではなかった。

「いつつも見てんだろ？ 園田ちゃんのことをさ。バレバレなんだよあいつ。告白のこと大声で叫んだとき、何かと思ったね、俺は」
確かにあの事件は異常事態といえた。あの相原の態度でなにもないというのは通らないだろう。

「ああいうやつがストーカーになんだよ。園田ちゃんの告白も、覗き見でもしてたんじゃないの？」

その通りだ。相原クイズがあつたら、葉山が優勝してしまうかもしれない。

「玲二にあんな態度取つといて、仲良く勉強もねえよ。佐々木には悪いけど、断らせてもらった!」

親指を立ててビシッとポーズを決める姿に、感謝した。

「ありがとな、良太郎」

「……」

「ん？」

「俺も下の名前でよばれちゃうわけね! このタイミングで!」

親友は実に嬉しそうに肩に腕をまわしてきた。

「なあ、園田ちゃんのこと名前でも呼んじゃえよ……」

黙ってまわされた腕をはずす。

「それは……、恥ずかしいからできない」

「うほほ……。もう付き合っちゃえばいいのに」

もし自分がただの高校生だったら、きっと夏休みを前にいつきに返事をしただろう。

彼女は一緒にいてとても幸せな気分になれる相手だ。嫌な思いをすることはないだろう。楽しい夏が過ごせることは間違いないかった。

だが、自分には返事ができない。

いや、できるのかどうか分からない。していいのかがわからない。

「……玲二、どうかしたのか？」

「お前がいちいちからかうからだろ」

そう言つてごまかした。が、どうも葉山にはなにか見抜かれている気がする。

しかしそれ以上の追及はなく、2人で重たい荷物を持って打ち上げ会場へと戻った。

期末試験の結果は、上々だった。1学年190人のうち、19位。ちよつと上がってしまった。

他の3人も、追試や補習を受けるような事態にはなかった。

「ああよかった〜」

「友香、100位？」

「よかったよ〜！ いつき〜」

ヤバイと大騒ぎしていた早川が、今回の勉強会で1番の恩恵を受けたようだ。

「100位ピッタリで賞とかもあればいいのにな！ いや、俺があげようか？ キスとかでよければ」

葉山の若くて健康で少しアホな男子らしい一言に、早川が舌を出してレディらしくお断りした。

いつきは55位で、葉山は31位。2人とも、前回より少しいいらしい。

張り出された試験の結果を大勢の生徒が悲喜こもごもに眺める中、相原がこちらを見ているのに気がつく。

相原の順位は、堂々の1位。なのに笑顔はない。ひたすら挑戦的な視線が矢のように飛んでくる。

それに気がつかないふりをして、教室へと戻った。

結果に安心したものはみな、夏休みの話で盛り上がっている。

「ねえ、玲二くん、葉山君も」

いつきが笑顔でやってきた。

「8月の大瀬西海岸の花火大会に、一緒に行かない？」

葉山が背中を思いつき叩いてくる。

「いいねそれ！ いいね！それ！！」

「今年は20日なんだって。予定は大丈夫？ 空いてる？？」

「俺はオツケーさ！ 玲二は？？」

夏休みの予定は大体あいている。

今年は父が仕事で1ヶ月ほど海外へ行く。母も着いて行くので、今年は特に帰省などの予定もない。

その道中、母の故郷に寄ることになっていて、一緒にどうかと聞かれたが気が進まないで断っている。

昔から母方の祖父母が苦手だった。

可愛がつてくれてはいるが、どこか少しよそよそしいようにも感じていたからだ。

その理由は今年の春にわかった。中途半端な孫を、どうしたものかということなんだろう。

その中途半端な孫の状態は更に半端になっている。そんな状態で行きたいとはとても思えない。

「大丈夫だよ」

「じゃあ行こうよ。楽しみだな」

いつきが笑顔になった。

「友香ちゃんも来るの？」

「そうそう、他の学校に行ってる子と、私たちは4人で行く約束してるの。で、あの、男の子も同じ人数だといんだけど……」

「俺たちはハーレムみたいでいいけどなあ」

軽薄な一言に、いつきの目が一瞬冷たくなった。

「いやいや、玲二君はハーレムよりも1人の愛する人だね」

それには何も答えない。しかし、良太郎もたいして堪えないようだ。

「オツケー！ あと2人ね！ 玲二は、誰か呼びたいやついる？」
「そうだな……」

中学時代からの友人はいる。呼べばすぐに来てくれるであろう、
親しい間柄の何人かが頭に浮かぶ。

しかし、彼らを呼ぶにはやや問題があった。

高井戸と、北沢と……石神。みな気のいいやつらだ。きっと葉山
ともすぐ打ち解ける。

でも、少し状況が変わっている。

……高井戸と北沢の2人は、いつきにかなり本気で恋をしていた。
少し前まで、恋愛にもいつきにもまったく興味がなかった。友人
たちがいいと言うなら、うまくいけばいい。そのくらいにしか思っ
ていなかった。

彼らに、自分の今の状況はかなり言いにくい。

高校は皆、別だ。なので、それぞれ他に進展があったかもしれない。
いが、ないかもしれない。

特に報告もないので、多分それほど特別なことはないんだろうと思
う。

「玲二、もしかして友達いないのか？」

「いや、そんなことはないけど……」

「そうだよ、いるよ。ねえ、玲二くん」

どうやらいつきは知ってるらしい。その友人たちが自分に恋して
いることはどうやら知らないようだ。

「園田ちゃん、あとの2人はどんな子？」

「え?? うーん、そうだなあ」

「園田ちゃんのツレなら、きっと可愛いんでしょ。ふふふ、こつち
もイケメンが必要かな？」

「あはは。かっこいい人なら喜ぶよ」

「玲二クラスはちょっと無理だけどね」

2人は随分仲良くなったようだ。良太郎の軽くて明るいノリを、ちよつとだけうらやましく思った。

「千早と則子、玲二くんわかるよね」

「ああ。……そういえば、磯部さんには先週会ったよ」

「そうなの。どこで？」

「海の手前の図書館で」

「なにそのロマンの響き」

良太郎はいちいちうるさい。時々、あまりうらやましくないともし思う。

「そうなんだ。だからだったのか」

「何が？」

「メールがきたんだよね。玲二さんと……」

俺と？

「玲二と何？」

「……あ、ううん。なんでもない」

「えゝ教えてよ」

良太郎はイヤイヤと体をくねらせる。

「なんでもない、じゃなくて、これ以上は言えない、の間違いだった」

いつきのキツパリとした説明に、イヤイヤはおさまった。自分も多少気になったが、追求はしない。

「じゃあさ、園田ちゃん、メールアドレス教えて」

「ん？ うん、いいよ」

2人は携帯電話を取り出して操作を始める。

「玲二は？ ちゃんと園田ちゃんとアドレス交換してんの？」

「したよ」

「なにっ。じゃあ俺にも教えるよ」

「教えただろ。4月に」

「PCのかよっ！？ ケータイ買ったのかと思ったのに！ そろそ

る買えよ玲二。不便すぎ」

そんなことはないと思う。

でも、皆即連絡がつくのが今は普通だ。確かに自分は連絡の取りにくいヤツ、になるだろう。

「あれだ、PHSだと安いんだよな。どうせ玲二はゲームとかしないんだろ。後で見に行こうぜ」

そんな良太郎の言葉に、いつきの瞳も少し輝いた気がした。

#04 「自分史上最高に幸せな約束」 <it>いつき>

駅前のケータイショップで、玲二くんは店員の説明を受けている。

店の中にはずらつと色とりどりの電話機が並んでいた。どれもこれもキラキラと輝いて、予定もないのに次はどんなタイプにしようかついつい考えてしまう。店の外側に並んだ中に、可愛いブルの電話機を見つけた。これはなかなかいい感じだ。

「ねえねえ、一人？」

顔をあげると、金色の傷んだ髪 of 男の人が立っている。電話機を元の位置に戻して答えた。

「一人じゃないです」

「そうなの？ 一緒に遊ばない？」

「遊ばないです」

「ねえねえ」

こういうことはよくあった。よくもまあ、見知らぬ相手にこんな風に声をかけられるものだと思う。

「ちよつとちよつと。悪いけど彼氏が一緒だから！」

葉山君が間に割って入ってきてくれた。

「お前が？」

男はすこむように顔を近づけている。けど、葉山君はちつとも動じない。

「違うよ。あっち、ほら、あの眉目秀麗な男子高校生」

そう言つて、店の奥の玲二くんを指差す。まだ店員の熱心な説明を黙って聞いているようだ。

「頭もいいし、背も高いし、顔もいいし、しかも性格もいいの。この夏のお相手は間に合ってるからね。バイバイ！」

頼りになるクラスメイトは、男の背中を押して通りに追い出して

しまった。あんまりにも遠慮のないお断りに気を削がれたのか、チつと舌打ちをしてそのまま去っていく。

「葉山君ありがとう……」

「ふふ。俺のこと、良太郎君って呼んでくれて構わないよ」

いちいちこういうことを言ってきたても、不愉快に思うことがない。それが葉山君の強みだよな、なんて考える。

「中に入ってようぜ。またヘンなの来たらイヤだし」

「うん」

玲二くんは随分熱心な店員に当たったようで、まだ話をされている。

「玲二は男前だよなあ……」

いきなり横からそんな声が聞こえた。

「いやね、園田ちゃんの気持ちもわかるな」って思ってたね」

そして奥の方を指差す。

「ついであの店員さんの気持ちも」

熱心な若い女性店員の様子は、確かになんだか妙に楽しそうだ。だからといって玲二くんがどうにかなると思わないけど、ちょっと気になってくる。

「園田ちゃんの方が若くて可愛いんだから、大丈夫だって」

じゃあなんでそんなこと言っただろう。頬をふくらませて抗議してみた。

「お待たせ」

ようやく開放された玲二くんがやってきておやつという顔をしている。いけないいけない。慌てて笑顔にチェンジだ。

「お疲れ様、玲二くん」

「どうすんの？」

「帰って相談」

ヒラヒラと契約書を振っている。未成年者だけでは契約できない。

玲二くんって家でどんな感じなんだろう？ 想像もつかないや。

「買ったなら教えるよ。とりあえず俺と園田ちゃんには確実に」

「わかったよ」

ちよつと呆れたような、でも笑顔で答えた。それを見たら、胸がドキつとした。

玲二くんが笑うと、なんだか世界が輝いているみたいに思える。

試験が終わり、学校はなんともけだるいような落ち着かない空気に満ちている。明日はとうとう終業式で、校内のソワソワ感が最大級まで膨れ上がっていた。

朝の教室では、葉山君がまた玲二くんの前の席に座って話している。

私の席は、毎日席を奪われている宗田君の隣。なので、2人の会話に加わらせてもらう。

どうしていつも宗田君の席に座るのと葉山君に聞くと、「玲二が俺のほう振り返らないから」と教えてくれた。

「園田ちゃんは部活あるの？ 夏休み中は」

クッキングクラブは、食材の保管などの関係で休みの間は活動がない。

「ないよ。だけど、家の手伝いがあるんだ」

「家の手伝い？」

「うん。うちのお父さん、動物園の園長なんだ。だから、忙しい時期だけ手伝いに行くの」

「へえ〜！ そうなんだ。どこ？」

名前と場所を教える。ついでに伯父さんの水族館と植物園の宣伝もしておいた。

お父さんは兄弟で、それぞれ動物園・水族館・植物園の園長をやっている。多分、世にも珍しい3兄弟だろう。

「動物のショーでもするの？」

「まさか。中にあるレストランで、厨房のお手伝い。お父さんがとにかく接客業はダメだつてうるさくて……」

「はーん。なるほどねえ」

葉山君はなぜかわかったように頷いた。お父さんが禁止する理由がわかるのかな？

「玲二は？ 部活なんにも入ってないよな」

「ああ。でも、ちよつとだけアルバイトに行く」

「え、そうなの？？ なにやんの？？？」

なんだか意外だった。玲二くんがアルバイト……。

「大学の資料室の、資料整理」

「大学？」

「うん。父さんの紹介で」

「大学ではたらいてんの？」

「……世界史の教授なんだ」

知らなかった。

学校の先生らしいという話は聞いていたけど、大学のだとは知らなかった。

なんだか「玲二くんの父」にピッタリの職業だ。落ち着いているのも、そういうお父さんのいる家庭で育っているからなのか。

「1週間ちよつとだけなんだけどね」

「玲二にもつてこいのバイトだな。お前が笑顔でレジ打ちしてるどころとか、想像つかないぜ」

確かに。でも、笑顔でお釣りなんか渡してくれたら、無駄に来る女性客が増えそうに思える。もちろん自分も行く。間違いなく毎日でも行く。

「良太郎は？」

「俺、結構部活が忙しいのよね。なにか短期のバイトでもって思っ

たけど、スケジュールが合うのがイマイチなくて」

「書道部そんなに力入ってるんだ」

「そうなんだよ。合宿まであるんだぜ？　今なんか結構ブームらしくってさ。」

ブームなんだ……。勉強会で見た、美しい字を思い出す。あんな字が書けるようになるなら、自分もちよつとやってもいいな、と思う。

「でも園田ちゃんが呼び出したら即行くからね」

葉山君はニカッと笑顔を作って見せてきた。

「玲二もね。いつでも呼んで……」

そう言ってチュッと飛ばされた投げキッスを、玲二くんは顔をそらしてよけた。

本当は、夏休み中も玲二くんと会いたい。

このところ、ずっと一緒に登下校している。正直言ってもう付き合っているような気分だった。そう錯覚してしまいそんな距離感だった。

でも、夏休みに入ったらそれがなくなってしまう。思い切って告白したあの日から積み上げてきたものがリセットされてしまいそうだ。

言ってもいいかな。

毎日でも会いたい。

困った顔をしちゃうかな？

玲二くん、私のこと、どう思ってるの？

聞くのが怖い。決して冷たくされてるわけでもないし、もしかしたら、気持ちが届いてるような気もする。
でも、もし否定されたらどうしよう……。

結局この日はただただ普通に下校した。

せいぜい、バイト先の大学がどこなのか聞いたくらい。

よく考えたら、私も玲二くんのこと、あんまり知らないのかも。
気がついたら好きだった。ずっとずっと、理由もなくただ好きだった。

かつこよくって、頭もよくって、照れ屋で、無口で、本が好きで、結構優しくて……

えーと

玲二くんの顔を思い浮かべる。

少し鋭い目。でも、笑うととっても優しい感じになる。

……やっぱり好きだな。

実はよくわからないことに気がついて、それでも好きだ。……
それじゃダメかな。

たとえばすごく手が早いとか、女にだらしないとか、そういうこととはない気がする。

部屋もキレイそう。めがねをかけたなら似合いそう。スーツなんか着たら、すっごくカッコいいだろうな。

妄想に照れているところに、電話が鳴る。メールが来た音だ。

千早あたりかな。

「!」

見覚えのないメールアドレスに、件名は2回目の「立花です」だった。

慌ててボタンを押す。

立花です。

携帯電話を買ったので、メールを送りました。
よろしく。

短い。

でも、送ってくれただけで十分。いつ買いに行っただろう？
急いでアドレス帳に登録して、返信。

玲二君、メールありがとう。

今日電話買いに行ったの？一緒に行きなかったな。

でも、送ってくれてすごく嬉しい！

また明日、一緒に学校行こうね。

いつき

一気にウキウキした気分になって、浮かれる。

明日は終業式だ。一緒に電車で揺られる朝もしばらくお預けになる。

最近、すっかり朝の電車が好きだった。少し混んでいて、玲二く

んとの距離も必然的に近くなるから。

帰りは空いているので、朝よりちよつと離れている。

明日もちゃんと起きなくっちゃ。あと、ちゃんと夏休みの予定も聞こう。1日でも2日でも、一緒にいられる日があればいい。

まくらを抱いて横になる。玲二さんの夢が見たい。目を閉じて、大好きな明るい茶色の瞳を思い浮かべた。

朝の教室には、玲二さんと私と、葉山君。いつもの光景。いつものように、葉山君が玲二さんに絡んでいる。でも、今日はいつもと違って……なんだか……

「やめろよ良太郎」

「いいだろ玲二。へるもんでもないし」

葉山君がキスしようとしているのを、玲二くんがよけている。驚きの目で見てみると、葉山君が申し訳なさそうに言った。
「園田ちゃん、ごめんな。俺も玲二のことが好きなんだよね」
そういつて玲二くんの頬にチュっとしてる。

「良太郎……！」

「玲二、こつち見ろよ」

しぶしぶといった顔だったが、王子様は親友の唇を受け入れてしまった。

「やだ……玲二くん……」

私のヨロヨロとした声に、玲二くんは目だけをこちらに向けた。でも、2人は離れない。

それどころか、ぎゅうつと力強く抱きあい、ますます激しくキスをしている。

「やーだー！ー！」

気がつく、いつもの見慣れた自分の部屋の天井を見ていた。
息が荒い。汗びっしょりだ。夢だった。良かった……。

しかし、なんて夢を見たんだろう。

顔が赤くなる。あるわけないじゃん。そんなこと。よりによって
葉山君と。

しかし……、夢とはいえ男に先を越されるとは！！
体を起こして時計を見ると、目覚ましをセットした時間より5分
ほど前だ。

バタッとベッドに倒れる。こんな夢見るなんて、バカみたい。

夏休みの間のことが心配だから？

玲二くんのことをあまり知らないことに気がついたから？
なんとなく不安だったから、ヘンな夢見たのかな。

葉山君が昨日投げキッスなんかするからだよ。
大体葉山君は、玲二くんのこと好きすぎだ。

……まさか、女の子に興味ないとか、ないよね？

心に不安がよぎる。まさかね……まさか……。それはないよね……。

いや、それはなかったとしても……好きな人が他にいるとか？？
彼女はいないって言ったけど、好きな人がいるかどうかは聞いて

いない。

もしかしたら隠してるのかもしれない。かなわぬ恋をしていて、そっちに諦めがついたら私を見てくれるとか？

色んな可能性を考え出したら、不安の特急が猛スピードで走り出してしまった。

慌てて起き上がって、着替えた。

いつもよりだいぶ早く駅についてしまった。

でも、どうしても落ち着かない。家でのんびりなんてしていられなかった。

15分程経って、ようやく玲二くんが姿を現す。

「玲二くん！」

慌てて駆け寄る。私の勢いに、ちよつと驚いた顔だ。

「おはよう」

電車に揺られているうちに、元氣のない私に気がついて玲二くんは心配そうな顔だ。

「園田、どうかした？」

不安な心をわかつてくれるなんて。なんだかそれだけで心が温まる気がしてしまう。

「あの、ちよつと、……へんな夢見ちゃって」

「夢？」

少し笑顔になった。

「どんな？」

「へ？」

言っていいかな？ 気を悪くしないかな。

「……玲二くんが、ちよつと、他の人となんていうか……、好き合ってる夢だった」

相手が葉山君だというところは、さすがに伏せておこう。

「俺が？」

そう言つて、少し赤面している。もう、思い切つて聞いてみよう。
「玲二くん、好きな人っているの？」

「え？」

驚いた顔をしている。でも、真剣な顔に戻つて、答えてくれた。
「いないよ。……まだ今は」

ほつと安心する。

……あれ？ でも、いないつてことは、私のことも好きになつて
ないつてことだね。

心がしゅんとしおれてしまう。ああでも、「まだ今は」つて。可能性があるつてことだ。あれれ？ でも、それつてもしかして私に
気を使つたのかな。考えるとますますわからなくなつてしまう。

王子様は窓の外なんか眺めている。……くっそー、いい気なもん
だぜ、立花 玲二……！

多分ムつとした顔になつている私を見て、玲二くんは少し慌てた。

「園田？」

「……なんでもないっ」

学校についてから、1組の教室を覗いた。まだ、いない。

少し待つと、友香がやってきた。陸上部の朝錬が終わつたところ
だろう、首からタオルなんかかけている。

「あれ、いつき？ どうしたの??」

「友香」

「なにになに？ どした？」

「うつん。ちょっと。えっと」

友香が腰に手を当ててちよつと怒った。

「何なの？ ハッキリお言い」

黙ったまま親友の背中を押して、階段の踊り場へと連れて行った。1年生の教室は最上階で、その上は屋上だ。なので通りかかる人はいない。

「ちよつとき、玲二さんと……、えーと」

「なに？ ケンカでもしたの？」

「ケンカってほどじゃないんだけど」

朝の電車内でのことを話した。結局あの後一言も話さなかった。

玲二くんは戸惑った様子ながらも、つかず離れず、隣を歩いてくれた。

「いつきが勝手に考えすぎて気を悪くしたんでしょ。だったら謝ればいいじゃん」

「やっぱそうだよね……」

友香の言うとおりだ。玲二くんはなにも悪くない。

「全部素直に言っちゃえば？ プリンスの気持ちもわかるかもよ」

「全部って？」

「自分に気を使って『今はいない』って言ったのかどうか」

確かにそれが1番早い。

「でもさ……、もし私のこと全然可能性はないって言われたら……どうしよう」

そんなことを言われたらと考えると怖い。怖くて仕方ない。

これから先、玲二くんより好きになる人が現れるなんてことがあると思えない。

友香はムムッと腕を組んで少し考え、そして私の両腕をバンとはさむようにつかんだ。

「大丈夫だよ、いつき！ 心配すぎ！ だって自分のことよく知ってもらったために告白したんでしょ？ まだあれから1ヶ月も経ってないよ。ゆっくりやっていけばいいじゃん……ね？」

言葉が、じんわりと心にしみこんでくる。

「……そうか。……そうだね」

玲二くんを思い始めてもう6年以上経つ。お互いの思いの大きさが違うのは当たり前だ。

「プリンスにちゃんと言える？」

「うん。大丈夫」

友香はニカッと笑顔を見せた。日焼けして黒くなった顔の中に、白い歯が光る。

「愛される女子になるには、笑顔が1番！　ほい、笑って！」
よし。笑顔っ！

「固いつ。もつとほら……、プリンスのことと思って」
玲二くん。時折みせてくれる、優しい笑顔を思い出す。
でれっとしてしまった。

「ちよっといつき……、それはない」
チャイムがなり、階段の下からざわざわと声が聞こえてきた。
「おっともう行かなきゃ。校庭で集会だよね」
「うん」

階段を揃って降りる。だいぶ元気が出てきた。やっぱり持つべきものは友達だ。

「じゃね、いつき！　頑張って！」

「ありがと友香」

1組の教室の前を過ぎて、自分の教室へと向かった。

廊下へたどりつくと、もう外への移動が始まるところだった。

「おい、全員出席番号順に並べよ」

担任の荒川先生が声をあげる。社会科担当、32歳、独身。熱心でなかなかいい先生だ。

「お、園田、どこ行ってたんだ？　早く並べー」
にこやかに注意される。しかし男子には厳しい。

「こら、加藤！ お前はこっちだろう！？」

どうやら今は堂々と振り返って話しかけるのは無理そうだ。仕方ない、朝礼が終わったら話そう。

校長の気の利いた短い話が済むと、生活指導から休み中の諸注意や、登校日の説明が続く。

生徒たちのフワフワした雰囲気をおさえきれないのをよくわかっている先生たちの計らいで、朝礼は思いのほか早く終わった。

早く玲二くんに話しかけたい。少し後ろにいるはずだ。

ざわざわする中に、玲二くに話しかけているであろう葉山君の声が聞こえる。

思い切って振り返ろうとした瞬間、前から声をかけられた。

「園田さん」

「……なに？ 相原君」

何の用だろう？ 手早く頼むよ、とでも言っていきたい。

「あのさ、えつと」

胸ポケットからなにかを取り出して差し出してきた。映画の前売り券かな？ 2枚ある。

「これ、映画のチケットもらったんだけど……。よかったら夏休み中、一緒に行かない？」

「え？」

突然の申し出に、戸惑う。

「私と？」

「うん」

困ったな……。

「ごめんなさい……。私、行けない」

「え？ どうして？」

悲しそうな顔をされてしまった。どうして？ って、相原君と行く理由がない。

「僕は、園田さんのこともっと知りたいんだ。僕のこと知ってほしい。だから、1度つきあってもらえないかな」

相原君に興味はない。だから、どうしても断りたい。

でも、相手が知りたいとチャンスを求めている。私と一緒に。私も、玲二さんに自分のことを知ってもらいたくて、一生懸命についてまわっている。

そう思うと、この申し出をむげに断るのはなんだか悪い気もしてくる。

「あーいーはーらー」

「うわっ」

「なにこれ。あら！ ウワサの夏の大作『マリアナ海溝の秘宝を追え！』のチケットじゃないの」

後ろから相原君の腰に抱きついたのは、もちろん葉山君だ。

「いいね、これ。見たかったんだ。俺と行こうぜ相原」

そう言いながら、後ろ手をパタパタ振っている。下がるように指示しているみたいだ。

「葉山っ、放せ！」

そっと2人から離れる。後ろに玲二くんがいるかと思ったのに、もう教室に着いてしまった。仕方なく席につく。

まもなくホームルームが始まる。ななめ後ろを振り返ると、玲二くんと目があった。

そしてその後ろに座った葉山君が、親指を立てておそらく本人としては最高にかっこいい顔をしてキメていた。そのキメ顔に、ありがとうと合図を送る。

前の方へ向きを戻すと、右側からなんだか視線を感じた。右のほうには、間に3人挟んでいるけど、相原君が座っているはずだ。

申し訳ない気もしたけど、そちらは見ないことにした。

「夏休みだからといって、あんまり浮かれすぎないようにな！ 先生、悪い報告は聞きたくないぞ。みんな、安全に過ごせよ！」

荒川先生が笑顔でホームルームをしめると、教室にわっと開放感が満ち溢れる。

急いで、玲二さんの元へ移動した。早く声をかけたかったのもあるけど、相原君が来るのもなんとかかわしたい。

「玲二くん」

落ち着いた顔がこちらを見上げる。

「あの……、今朝はごめんね。なんか変な態度取っちゃって」
言えた。言えたけど、反応はどうだろう？

「謝るようなこと、あった？」

腰砕けだ。なんとも思ってたのかな。

「俺の方がなにか悪いこと言っちゃったかと思って」

違った。どうやら気にしてくれていたらしい。そう思うと途端に嬉しい気持ちになる。

「園田さん」

振り返ると相原君がやけにまっすぐに立っている。

「おいおい、相原。邪魔すんなよ」

「邪魔してるのはお前だろう！？」

間に入ってくれた葉山君に咆えるように言うと、相原君が一步步いて迫ってきた。

「さっきの返事、聞かせてくれる？」

映画の話だ。確かに、ハッキリ返事をしていない。

「俺と行けよ」

葉山君の声を、相原君は無視した。

ちらつと玲二くんを見ると、ちよつと心配そうな顔だ。心配そうな顔もかっこいい。

「ごめんなさい、相原君。やっぱり一緒には行けない」

さっきよりももっと、悲しそうな顔をさせてしまった。でも、仕方ない。

「私、立花君が好きな。だから、立花君以外の男の子と2人で出かけるのはできません。ごめんなさい」

もしかしたら悪い人ではないかもしれない。

でも、玲二くんを超えることは100%ないはずだと、思う。ここで曖昧な態度を取っては、かえって悪い。

「そうか……。わかった……」

ガックリと肩を落として、相原君は自分の席へと戻っていった。振り返ると、玲二くんが真っ赤になっている。葉山君はそのうしろでご機嫌な笑顔だ。私もスッキリして、ご機嫌だ。

「玲二くん、一緒にかえろ！」

「ごめん、園田……。ちょっと忘れ物した」

玄関でそう告げられた。忘れ物なんて、なんだからしくない。でも、そんなこともあるよね、人間なんだから。

「うん。じゃあ待つてるね」

玲二くんが早足で教室へと戻っていった、そこに入れ替わるように1人、やってきた。

「今日も一緒にお帰りなのね」

「葉山君」

ペコリと頭を下げる。

「ありがとう。さっき……、助かった」

「どういたしまして」

葉山君も真似をしてペコリとお辞儀をしてくる。

「奥ゆかしい友人のために一肌脱いでみました」

笑顔で答えてもらったのに、つい、今朝みたあの忌まわしい夢を思い出してしまった。

「葉山君で、……玲二くんのこと好きだよね」

「え？ まあそうだね。確かにね」

ニヤリとしている。

「チューくらいならできるかも」

思わずゲつと言いたくなる、タイムリーな発言だ。多分変な顔をしてしまったんだろう、葉山君が慌てた様子で否定してきた。

「うそうそ！ 冗談に決まってるっしょ！ 園田ちゃんなんちゅう顔してんの！？」

「え？ あつ、ごめん」

そんなに大変な顔になっていたかな。少し頬をもんで顔を整える。
「俺さ、たまたま玲二と席が前後になっただけだけど、少し話したらすっげーいいやつだってすぐわかったんだ」

葉山君が笑顔で話し出した。

「まー俺好みのイケメンが座ってるわって思ってた話しかけたんだけどさ」

好みのイケメン……って。

「いやいや、そういうんじゃないのよ。だってほら、性格って顔に出るでしょ？ やっぱ顔見たときの第1印象って大事だよ。そういう意味での『好みのイケメン』ね」

イケメンの部分はいらないんじゃないかな？ 誤解を招く以外の効果がないように思えるけど。

「あいつはさ、あんまりしゃべらないからわかりにくいけど……、人のこと悪くいったり、ウソついたり絶対しないだろ？ ああいうタイプのやつ、俺大好き。一生つきあっていけそうだなって思う」
実に清々しい笑顔だ。

もしかしたら本当にキスくらいはできちゃうのかもしれない。そのくらい好きそうに思える。でも、今の意見には同感だ。なんだか、同志のように思えて親近感が湧いてくる。

「お待たせ」

そこに、玲二くんが戻ってきた。2人でいたのを見て、特になにも言わない。

「良太郎も帰るのか？」

「なんだよ、2人で何話してたの？ とか聞かないの？？」 ジェ

ラシーって単語知ってる？」

葉山君が肘でツンツンと好みのイケメンをつつく。

玲二くんはこういうツツコミにはいつだって実にそっけない態度だ。何も言わない。

「もー。超いい話してたのにね！ 園田ちゃん！」

「そうなの？」

「うーん。葉山君は玲二くんにキスしたいんだって」

目の前の王子様は、今までに見たことのない嫌そうな顔を親友に向けた。

「ちよっ……！ 園田ちゃんなにそれ！？ なんでそうなるの！？」

あの悪夢の仕返しだ。

「あはは」

私が笑うと、玲二くんもちよつと笑った。

今日も大好きな人と2人で帰る。こうして帰るのも何回目だろう？でも、今日が終わるとしばらく会えない。ちゃんと、夏休みの間の約束をしないと。

「ねえねえ玲二くん。あの、アルバイトっていつからなの？」

「8月1日から10日まで。7日が休みだったかな」

それ以外は空いてるってことか……。

「あのさ」

「うん」

「水族館って好き？」

ドキドキしながら返事を待つ。短い時間だったろうけど、すごく長く感じた。

「水族館？ 好きだよ」

「ホント！？」

思いつきり食いついてしまった。でも嬉しい手ごたえだ。

「じゃあ一緒に行こうよ。招待券があるんだ」

「伯父さんが館長なんだっけ」

「うん。海の近くにあるんだけど。行った事ある？」

「何回か。遠足でも行っただし」

私には一体何回いったかわからない、超がつくほど御馴染みの場所だ。

じいつと隣のかっこいい顔を見つめてみる。目が合うと、ちょっと赤くなっただよに見えた。

「いいよ。行こうか」

やつ たつ……！！

デートの約束……！

飛び上がって叫びたいほど嬉しかったけど、電車の中なのでぐつと我慢する。

「今月の末くらいでいい？」

まさか、日程の事まで言ってきたくれるとは思わなかった。意外と玲二くんもノリノリだったりするのかな？

「えつと……、じゃ、28日でいい？」

動物園での手伝いの日程を思い出す。確か空いていたはずだ。

「いいよ」

待ち合わせの時間と場所も決める。玲二くんは手帳を取り出してメモをしている。自分も携帯を取り出して、スケジュールに登録しておく。

ちよつと指が震えて、玲二ちゃんと水族館、になってしまった。いや、後で直そう。

その後なにを話したのか、あまりよく覚えていない。

気分が浮かれすぎて、なんだか体まで浮いているような感じがするくらい。

改札を出たところで、玲二くんは「買い物があるから」と去っていった。

でも今日はいい。真昼間だし、送ってもらわなくても構わない。1人が良かった。

嬉しさをこらえきれなくて、誰もいない暑い道を全速力で走った。

大きな声で叫びたかったけどそれだけは我慢して、あっという間に家に帰った。

#05 「人生初の、デート」 &1t;玲二>

夏休みが始まり、まずは部屋の片づけにとりかかる。

さして散らかっているわけではないが、本棚がだいぶ詰まっていた。

読まないものは処分しないといけない。父さんと揃ってどんどん本を増やしてしまうタイプなので、定期的に片付ける約束を母さんとしている。

両親は昨日から海外へ旅立っていた。

「玲二、よろしくね」

母が去り際に言った「よろしく」。もちろん、「わかっているわね？」の意味も含まれているんだろう。

もしかしたら、デートの約束もなにもかも、全部知られているんじゃないだろうか考える。

そんな不安を払拭するために、まずは整理整頓だ。掃除で心もスッキリさせたい。

部屋の窓を開けると、深い青色のカーテンが風に吹かれて揺れた。本棚を眺め、もう読まなさそうなものをピックアップして出していく。何度も読んだ思い出深いものは、ちょっと悩む。

時間が静かに過ぎていく。

これが本来の自分の生活だった。この1ヶ月弱、色々あって騒がしかった。騒がしすぎるくらいだ。

……昨日相原がいつきの元に来た時、本当は自分が間に入りたか

った。

でも、別に『彼氏』じゃない。そんな資格があるだろうか？

結局、良太郎がいてくれて助かった。でも、そんな資格がなかったとしても、自分が言えばよかったと少し後悔していた。

もし自分が相原に詰め寄っていたら、事態は混乱したかもしれない。でもきつと、彼女は喜んでくれただろう。

喜んでくれただろう……？ そう考えて、赤くなる。

俺はどうしたいんだろう？

結局なんだかんだ、いつきと過ごしている。毎日一緒だ。一緒に登下校して、休み時間も話してる。試験の勉強会だって、とても楽しかった。

俺は、園田のことが、好きなのか？

そうだ。好きだ。間違いない。嫌いになんてなるわけがない。あの可愛さ、あの人懐こさ……。彼女を嫌いになる人間なんているだろうか？

じゃあそれは、特別な「好き」なのか？ 他に代えがたい、どうしようもない特別な「好き」なのか？

ダメだ。これ以上考えたら。わかってしまわないほうがいい。自覚しないほうがいい。特別にしちゃだめだ。自分も彼女も、みんな傷つく。うまくいくわけがない。

考える。彼女のこと。あんなに好きでいてくれる。俺のことばかりみてる。人前でも堂々と好きだって言ってくれる。どんなヤツだってイチコロなのに。俺を選んだ。ちゃんと応えるべき。

途端に頭の中がゴチャゴチャになる。ため息が出た。こんなに心の中がまとまらないのは初めてだ。

気を取り直して、また本の整理を始めた。

今すぐなんとかしようと思うからいけないんだ。今結論を出すのは無理だ。そういうこともある。

少しずつ本を棚から出していく。状態のいいものは図書館に寄付するつもりだ。用意しておいた紙袋に入れる。

何冊か入れたところで、机の上に置いてある電話機が短くなった。メールが来たようだ。

手に取りボタンを押して、メールを開く。

今からお前んち行っているかい？

実にシンプルな内容だった。差出人は、高井戸^{たかいど} 光希^{みつぎ}。小学校・中学校時代とともに過ごした親しい友人の1人。以前はよくお互いの家に行き来していたが、高校に入ってからには下校時に2回たまたま会ったくらいだ。メールはやりとりしていたが、それもそうしょっちゅうではない。

本棚を見上げた。片付けはまだ全部終わっていない。スッキリしないが、久々の友人の訪問をそれで断るのも悪い。大体、あいつの性格からいつてもうすぐそこまで来ているそうだ。

慣れない手つきでボタンを押して返信した。

いいよ。待ってる。

シンプルなメールだと、返事もシンプルでいいので助かる。リビングへ降りて、冷房のスイッチを入れた。

5分ほどして、インターホンがなった。ドアを開けると、すぐにドヤドヤと3人が入ってくる。

「よお玲二、ひさしぶりだなー」

なんとなく、1人では来ない気がしていた。

高井戸と、北沢きたさわ秀人しゅうと、石神いしがみ孝たかしの3人。自分を含めて、よくつるんでいた4人組だ。

3人は遠慮なく家にあがってリビングへと移動してくる。

「玲二、母ちゃんは？」

「今いない。父さんと海外に行ってる」

「そうなの？　じゃあ女子も連れ込み放題だな」

高井戸は小柄で、とても可愛らしい顔立ちをしている。そしてそんな子リスのようなビジュアルに似合わず下ネタが大好きで、下品な言動が目立つ。

「なあ、彼女できた？」

「……できないよ」

なんだよ、と後ろで北沢が声をあげる。

「これ、お土産」

ハンバーガー屋の袋が差し出された。男子高校生にはピッタリのランチだ。

「飯まだだよな？」

「うん」

ちようど空腹になってきたところだ。これで今日の昼食の準備はしなくてよくなった。

3人は買ってきたものを勝手にテーブルに広げている。2Lのペットボトルがドカドカと置かれていった。コップを4つ台所から持ってきて、それぞれ飲み物を注いだところで久々の友人たちとの会食が始まった。

「なあ玲二、マジで彼女できてないの？」

高井戸が再び聞いてきた。中学に入った頃から月に1回は聞かれていた定番の質問だ。

「できてないって」

「早く彼女つくってそのお友達を紹介してくれよ」

高井戸は相変わらず彼女が欲しくて仕方ないらしい。しかし悲しいかな、彼の通う高校は男子校だ。

「共学なんだろう？ 肉食系女子に襲われたりしてないわけ？」

「そんなやついないよ……」

呆れた声で答えた。少なくとも、そんな野獣はクラスにはいないと思う。

「また無駄にお断りしてんじゃねえの？」

一瞬ドキつとする。が、悟られるわけにはいかない。なんでもない顔をして矛先を変えようと言った。

「北沢は？」

高井戸と石神は同じ男子校に、北沢は別の共学の私立校へ行っている。

「もー、朝から晩まで野球の練習よ。可愛い女子マネは先輩のものだし」

ここでため息がひとつ挟まった。北沢は典型的な野球少年で、高校も野球の強い学校を選んで進学している。今日は貴重な休みの日らしい。

「夏休み前にさあ、クラスのやつら、どんどんカップル成立していつてんの。あれは恐ろしい現象だったぜ……！」

「お前は？ その波に乗らなかったの？」

「可愛い子はもう残ってなかったんだよ！ 気がいたらゴリラがカエルしか残ってないの」

「いいじゃんか……、お前はチンパンジーなんだからゴリラで！ 霊長類同士仲良くすれば！？」

高井戸がケラケラ笑った。

「チンパンジーじゃねえし！俺は人類じゃないとイヤなの！しかも可愛い人類がいい！」

そしてちょっと切なげな顔で、こちら向きなおって聞いた。

「玲二……、園田はどうなった？彼氏できた??」

来た。絶対聞かれると思っていた質問だ。高井戸と北沢はずっとずっと、いつきのことが好きだった。北沢は夢の中で結婚までしているが、現実では2人とも告白すらできていない。

「高校でもモテるんだろ？あんな可愛い子他にいないだろ？」

「玲二興味ねえもんなあ。知らないか？クラスは？」

「クラスは一緒だよ」

2人に途端に火がついた。

「なにっ!？」

「なんでそれを早く言わない??？」

「まあまあ」

石神が2人をなだめる。自分と同じくらい口数が少ない石神とは、幼稚園からずっと一緒だった。穏やかで、何も話さなくてもなぜか一緒にすごすことができる不思議な友人だ。

「玲二にそんな話期待するのがおかしいでしょ」

そして口数が少ない分、その言葉は実に鋭い。2人もそりゃそうかあゝと座り込む。

「なんだよ同じクラスってー。いいなあ」

「うらやましい……。毎日見られるだけでほっこり温泉気分じゃねえか」

2人がぐったりとうなだれる。

「俺もマジメに勉強してればよかった……」

来週2人で水族館デートなんて言ったら、一体どうなるだろう。想像するだけで恐ろしい。

「誰かちょっかい出してるやつとかいる？まだ園田は……、無事

なのか？」

北沢は実に真剣な顔だ。無事って何が無事なんだかわからないが、ちよっかいだしてるやつはいる。自分だ。出してるわけではないが、彼らからしたらそうなるだろう。

大切な友人たちに嘘は言いたくないが、ありのままを話すとややこしくなりそうだった。もしかしたら応援してくれるかもしれないが、つきあえないなんて言ったら……？ 相原みたいに怒り出したら、また困ってしまう。

やはり、今はいつきのことは話せない。黙っておくことに決めた。

そして思い出した。

「園田のファンクラブの会長ってやつならいるよ」

「はあ？ ファンクラブ？？」

「うん。同じクラスの相原ってやつが……。結構熱心に後をつけたりしている。そこはさすがに伏せておこう。」

「アイハラ？ どの中学のヤツ？」

「わからない。ファンクラブって言ってもなにかしてるのかもわからないし」

相原の言うファンクラブの詳細は謎のベールに包まれている。そもそもあまり知りたくない。

「ふーん。入学式で一目ぼれでもしちゃったのかね」

「絶対1人でやってるな、そいつ」

「で、ちよっかい出したの？ そいついい男なの？ 園田とつりあうほどの男なわけ？？」

高井戸の言葉はトゲトゲだらけになっている。

「……映画に誘って断られてた」

ビジュアルに関しては答えなくてもいいだろう。相原は決して不細工というわけではないが、特別かっこいいわけでもない。

この返事に2人に笑顔の花が咲いた。安心したのと、ざまあみろ、が半々の意地悪い笑顔だ。

「ああ〜！ 久々に会いたいな〜。園田に〜」

北沢がうなるように言う。

「俺もあいてえよ〜」

高井戸も続く。すぐく、複雑な気分だ。

「なあ、玲二、セッティングしてくれ」

「そうだ。花火大会とかさ。浴衣で来て下さいってさ」

確かに、花火大会には間に合う。しかし、誘い辛い。やがて、北沢はグツタリしたように呟いた。

「無理だよな、玲二には……。そんなガラじゃないよな」

「お前、ホントに思春期か？ 性欲とかあんの？」

高井戸もジロっと思ってくる。まったく、なんという質問をしてくるんだろっ。

「まあまあ」

石神が助け舟を……と思ったら、こちらでも意外なことを言い出した。

「ホントは俺も、玲二に彼女でもできたかと思っただけ」

「え？」

「だって携帯電話買っただろ？ 社会人になるくらいまで持たないだろうと思ってたよ」

実に鋭い意見だ。つい言い訳をしてしまった。

「色々不便だからさ……」

実際使い出すと便利だった。母から急な買い物を頼まれることもある。

「もし出来そうならいつでも呼んでくれよ？ グループデートでいいんだからな」

高井戸が念を押してくる。

「俺も！ 部活さばってでも行くからな！」

2人のいつきへの気持ちはまだまだ熱いようだ。

その後も4人で、高校生活のことなどを長々としゃべった。

部屋の片付けも終わり、夏の課題をほとんど仕上げ、穏やかな日々を過ごしていた。

が、それは昨日で終わり。

7月28日。今日はいつきと水族館へ行く。いわゆるデートというやつだ。

女の子と2人でどこかへ行くなんて、生まれてはじめての体験だ。鏡で自分の姿を確認する。いつもどおりの自分だ。これでいいんだろうか……。

一応昨日散髪には行った。無口な親父の理容室。いつもどおりに仕上げてもらった。

今更考えても仕方ない。待ち合わせの場所へと向かおう。

水族館までは歩いて行けなくはないが、1時間ほどかかる。駅からバスが出ていて、それに乗れば15分。もちろんバスで行く。

乗り場に着くと、いつきの姿はまだなかった。待ち合わせの時間まであと5分。日差しがとても強い。乗り場のそばの木陰に移動する。

そしてまもなく、いつきの姿が現れた。

うすいグリーンのワンピースに、白いカーディガン。足元は涼しげなサンダル。

私服を見たのは2回目だが、前はもっとラフな格好だった。

ひらひらとひざのあたりで揺れるスカートが、いつきの可愛らしさを彩るかのようだ。とてもよく似合っている。

そしていつもは頭の上のほうで結んでいる髪を、今日はおろしていた。背中の真ん中あたりまでの長さだったことを、知らなかった。

キョロキョロとあたりを見回し、こちらに気付く。駆け寄ってきて笑顔を浮かべた。

「待った？」

「うっん……。今、来たから」

いつも可愛いと思っていたが、今日は段違いだ。

「玲二くん？」

「はい」

変な返事をしてしまった。なんだか緊張している。

「あ、もうすぐバスが来るみたい」

駅前のロータリーにバスが止まっていた。終点で客を降ろし、またすぐに始発として出る。

いつきにうながされ、一緒に歩き出す。少し前を歩くいつきが、振り返ってまた笑顔を見せた。アイドルのグラビアみたいなその姿に、胸が高鳴る。

一緒にバスに乗り込んで、2人がけの椅子に座った。自分の足にいつきのスカートが少しかかる。

隣に座る可愛い姿を見つめる。直視できないと思っていたけど、いざ見ると今度は目が離せない。長い髪からはいい香りがした。

自分の様子がいつもと違うのに気がついたのか、いつきが俺の顔をのぞいてきた。

「玲二くん、今日……。どうかしたの？」

大きな瞳の中に自分が映っている。

「いや……。その、今日は……。すごく可愛いから……」

ひどく正直な言葉がそのまま口から出てしまった。言うてから、

カーッと体の芯から熱くなる。

「ホント？」

いつきが頬を赤くそめた。今更否定することもない。黙って頷いた。

「……えへへ。嬉しいな」

照れたのか、下を向いている。

困ったな。どうしよう。今日はいつものように、平静でいられないんじゃないだろうか。

バスのドアが閉まり、発車した。車内はほぼ満席だ。

「あのね……、デートするんだったらちゃんとオシャレしないとダメだって、友香たちに言われたんだ」

ちよつと恥ずかしそうな声が話し始める。

「いつももつとテキトーって言うか、あんまりこーいうの着ないからちよつと恥ずかしかったんだけど、でも……」

そういつて顔をあげる。目が合ってしまった。

「玲二くんにほめられたんなら、頑張ったかいがあったかな」

本当だ。だってずっと、目を離せない。あんまりにも輝いていて、あんまりにも可愛くて……。

「……うん」

また本音が口からポロリとこぼれ落ちた。

いつきは少し驚いたような顔をしたが、すぐ笑顔になった。

「えへへ。玲二くん、どうしたの？ あんまりほめられると私、なんか困っちゃうな。嬉しいけど、恥ずかしいや」

いつきはまた下を向いた。そのおかげで、ようやく前を向くことができた。

きつく閉めておいた心の中の奥の小瓶。そのふたが、グラグラして今にもはずれてしまいそうだ。

……いや、多分もうはずれている。

いつきのことが、好きだ。

間違いない。

すごく好きだ。これは、特別で、スペシャルな好きだ。生まれて初めてわかった。これが恋だ。

ゆっくり目を閉じた。

どうしよう。

どうしたらいい？

気がついてしまった。もうごまかせない。今までのように、ただの友達のように一緒に過ごせるか？

こんなに好きなのに、そんなことできるだろうか？ 隠していいのか？

バスが停まって、新たに乗客が乗ってきた。席はいっぱいだ。少し前に、年配の女性が大荷物でいるのが見える。

「園田……、いいかな？」

なにが？ という顔をされたが、構わず女性に席を譲った。ついでに荷物を運ぶのも手伝う。

いつきと一緒に座っていたら心臓が爆発してしまいそうだ。

水族館にはもうそろそろ到着する。すぐまた一緒に歩くことになる。それまでにもう少し、落ち着いておきたい。

外の風景を見ながら、必死で小瓶のふたを閉めようとした。だが、

サイズが合わないかのようにもっぴたりとははまらない。

バスが停留所に停まる。降りる客は、カップルと家族連ればかりだ。

席を譲った女性から何度も礼を言われ、自分も何度も頭を下げて2人で下車した。

並んで歩き出す。

海からの風が、いつきのスカートをまたひらひらと揺らした。髪もふわりと後ろになびく。

自分だけではなく、他の男性客も目を奪われているようだ。

本人はまったくその自覚がないのか、気にする様子もなくまっすぐに入り口へと歩いていく。

受付の女性が笑顔でチケットを受け取った。

「あ、いつきちゃん！　いらっしやい」

「こんにちは」

伯父さんが館長をやっているのなら、よく来ているのだろう。ごく親しい雰囲気だ。

一緒に入ろうとすると、胸に「山川」とかかれた女性が驚いた顔をした。

「いつきちゃん、彼氏！？」

「ちがうよ」

いつきは小さい声で答える。すると山川さんはなにか思いついたような顔をする。

「がんばって！」

と小さい声が聞こえた。俺には満面の笑みをプレゼントしてくれた。

「ずっと小さいころから何度も来てるから。みんな大抵顔なじみなんだよね」

さっきの山川さんのことを言っているのだろう。

「会ったびに、『彼氏できた〜?』だよ。もう、親戚のオバちゃんみたいな感じ」

そんな話をしながら、2人で水槽の間を歩いた。

小さい魚の群れを眺め、大きな水槽に感心し、巨大な魚たちを追いかける。

その間に何人かの館員にあつたが、その全員が声をかけてきた

「いつきちゃん、デート!?!」

「彼氏できたの!?!」

いつきはそなたびに、違うよ〜と可愛らしく否定する。

深海魚の展示室に入ると、他の部屋よりも温度が低く、空氣がひんやりとしていた。

不思議な形状の魚たちを眺める。

「すごい形だね。深海魚って……」

いつきが呟く。

「そうだな。同じものでできているのに、不思議だよな」

そうだ。同じもので構成されているだろうに……。俺はみんなとは違う。普通の人間ではないらしい。

同じような形をしているのに、一体どここの部分がどう違うというんだろう。そのせいで、いつきのまっすぐな思いに答えられない。隣で水槽をのぞいているいつきを見る。薄暗い室内ではのかな明かりに照らされた横顔は、きれいだった。

視線に気付き、いつきがこちらを向く。しばらく俺の瞳をじっと見て、そして少し微笑んだ。

水槽が並んだ展示室を順路通りに進むと、外に出た。この先はイルカショーのステージがあるらしい。

建物の2階部分のこの場所からは海が見える。風が吹いてきて、真夏の屋外でも少し涼しく感じられる。

ショーまではまだ少し時間があるようで、そのせいか人はあまりいない。

「なにか飲もうか」

先に売店が見えたので、そう提案した。少しでも気持ちを落ち着かせたい。

並んで歩いていると、いつきが突然早足で前に回りこんで立ち止まり、少し赤い顔で右手をグーにして顔の前にさしだしてきた。

「立花さん！　ここまで、園田いつきの印象はどうですか？」

突然のインタビューに、心臓がまた少し動きを早めだす。

「友達以上には、なれそうですか……？」

少しおどけたような口調。でも、瞳は真剣だ。それに気づいてしまった。

友達どころか、今この瞬間から正式にお付き合いを始めたい。

「……うん」

心の中で沸騰する気持ちを隠して、なんとかそれだけ返事をした。「やった！」

いつきが両手をあげてジャンプする。そしてとびつきり可愛い笑顔を浮かべた。

「ソフトクリーム食べよう」

走り出そうとするのを、思わず手を掴んで止めた。驚いた顔がこちらを振り返る。

「園田……」

時間が止まったかのように、静かだ。胸の鼓動ばかりが聞こえる。いつきは動かないで言葉を待っている。

「俺……」

もう、人間じゃないとか、そんなの関係ない。母さんに言われたからって、それを言い訳するのはやめだ。

俺も、園田と同じように、正直に言おう。

……好きだつて。

その瞬間、いきなり横からの大量の水に襲われた。

「きゃあああつ！」

いつきの悲鳴が聞こえる。2人揃って全身水浸しだ。

可愛いワンピースが体にピッタリとくっついてしまっているのが見えて、慌てて目をそらした。

目をそらした先、通路の下をのぞくとイルカが泳ぐプールが見えた。

ここで大きなジャンプをしたから？ でも、ここまで大量の水が飛ぶなんて信じられない……。

びしょぬれのお客を見つけた調教師が「うわっ」と声をあげて、すぐに大きなタオルを持った館員がやってきた。

水族館のロゴ入りのお揃いのジャンパーを着て、2人で水族館の応接室に座っている。

「いやいや、済まなかったね、本当に」

テーブルに熱いお茶が出された。

「いえ……」

相手は水族館の館長……つまり、いつきの伯父だ。

「ハッピー史上、最大のジャンプだったらしいよ」

伯父さんの園田飛男^{とひお}は強面だった。笑っていてもなんとも迫力がある。

「ビックリしたよ。ホント」

いつきは不満だ。ハッピーはイルカの名前で、普段はあまり高いジャンプはできないのに狭い待機用プールで大記録を作り上げた。どうやら今日は絶好調だったらしい。

「あの通路まで水が飛ぶとはね。開館以来初めてだよ。水よけを設置しないとイケないかな」

強面の館長は可愛い姪っ子に向き直って言った。

「いつき、悪かったな。せつかくのデートだったのに」

「ホントだよ。ま、でもしょうがない、こればかりは……ね」

確かに、ハッピーを責めても仕方ない。悪気があったわけでもないだろう。

「立花君、また来てくれ。いつきと一緒に」

やたらと迫力のある笑顔で言われ、それになんとか一言だけ返事をした。

「はい……」

「いつきのこと、よろしくな」

おつかない笑顔で前に出された右手をなんとなく緊張しながら、握った。

お詫びのお魚チョコやイルカのサブレをもらって、水族館を出る。

お揃いのスタッフジャンパーで歩くのはなんとも気恥ずかしい。
「水族館のあとは、海でも一緒に見たかったけど……。これじゃちよつとね」

蛍光グリーンの2人では、ムードも何もあつたもんじゃない。脱いでも真つ赤な水族館Tシャツだし、防水仕様のズボンは歩きたびにシャカシャカなつてやかましい。足元は休日のお父さんのようなサンダルというコーディネートだ。

「ビックリしたね、玲二くん。あんなマンガみたいなことがあるなんて」

いつきは笑顔だ。しかし、少し残念そうに見える。

「ねえ、また……。一緒にどこか行こうよ」

遠慮がちな声。様子を伺うように、少し上目使いでこちらを見ている。

「……ああ。行こう」

この言葉で、笑顔から少し残念な感じが消えた。いつもの眩しい、可愛い笑顔だ。

あのまま気持ちを伝えたかった。……。と、思っていた。
しかし、ほつとしていたのも事実だ。

あの時燃え上がった心の中の炎は大量の水で消火されていて、今はなんだかくすぶつていいるような状態になっている。

「8月12日」

いつきが切り出す。

「玲二くんアルバイト行くんたよね。その後で私空いてるのが12日なんだけど……。どう？」

「いいよ」

2週間か……。

その間に、もう少し気持ちをなんとかできるだろうか？

「どこがいいかな？ もう水族館はいいよね」

いつきは苦笑いをしている。確かに、もう水族館はいい。

あんなにいちいち「彼氏？」なんて聞かれるのもちよつと恥ずかしかった。

「園田の行きたいところでいいよ」

「……ほんと？」

「うん」

いつきは小首をかしげて考えている。その姿がまた可愛らしくて、ドキッとしてしまう。

「じゃあ考えておくね。メール送るから」

黙って頷くと、今度は心配そうに聞いてきた。

「電話、濡れてない？ カバンもビショビショだったでしょ」

「大丈夫だよ。ちゃんと使える」

サイフや手帳は端が濡れただけで済んだ。電話も動くし大丈夫だろつ。

停留所にバスがやってくる。

バスは蛍光グリーンの2人を乗せて、朝待ち合わせをした駅前まで走った。

家に帰って、まず借りたスタッフの衣類を洗濯する。
自分の服に着替えて、ベッドに倒れこんだ。

園田……いつき……

今朝のあの眩しいいつきの姿を思い出す。

すごく、すごく可愛かった。

俺のために、頑張ってオシャレしてきたって言うた。

ああ……

どうしよう……

俺は、彼女のことが大好きだ。

一生プラトニックな関係でいたら……、それでもダメだろうか？

あの瞳

あの唇……

バスの中で並んで座っているとき、思った。

キスしたいって。

頬が熱い。両手で顔を覆う。

今、いつきが自分を思う気持ちと、自分がいつきを思う気持ちを比べたら、どちらの方が強いだろう。

俺の方が強いんじゃないだろうか？

そう思えるほど、胸が彼女のことではいっぱいになっている。

8月12日……。

次会う時が待ち遠しい。

いや、待ち遠しくていいのか？

あの時は、母の言いつけなんてもういいと思った。

でも今はまだ、迷いが残っている。本当にいいのか……わからない。

気持ちちがモヤモヤとして、全然ハッキリしない。

ため息がひとつ、出てきた。

この日は、いつきのことばかり考えて、長い夜を過ごした。

#06 「夏休みのホラー・ズー体験」 &1t;いつき>

「……という感じ」

話し終わると、3人はあーっと息を漏らした。

聞いている間ものすごく力が入ってたもんね……。

「なによそのコントみたいなオチは」

千早が呆れたように言う。

「私だってそう思うよ……。でもしょうがないじゃん、ホントなんだもん」

水族館へ行った3日後、今日は則子の部屋で恒例の女子の集まりをやっていた。

直前にも、デートのたぐい対策会議を開いてくれた。今日は結果の報告だ。

「あと一息じゃない？」

友香が笑顔を見せた。

「だって絶対さあ……。ねえ」

他の2人もうんうん、と続く。

「園田……俺……、お前が好きだ……!!」

千早がやたら情熱的に言ってきた。

「や、やめてよ……」

恥ずかしくて、顔が熱くなってしまう。

でも、私もそう思っていた。

あの時、玲二くんが言おうとした言葉。ハッピーに邪魔されなかったら聞くことができたであろう続きは……。

何回も何回も想像した。あの日は本当に、ドキドキして眠れなか

った。

「水浸しでもなんでも、言ってくれりゃあいいのにね、プリンスも」友香が肩をすくめる。確かに言っただけ、あの時の自分の姿を考えると無理もない。

「水かぶつたらあのワンピース、ピターって体にくつついちゃったんだよね」

「あらやだ」

千早、おばちゃんみたいなりアクションだ。あの時は本当に恥ずかしかった。

「じゃあしょうがないかなあ」

「まじまじと見てきたの？ プリンス」

則子がとんでもないことを言う。

「違う違う！ 逆つ。見ないでおいでくれたの」

「ああ、そうなんだ。そっちに気を取られて言わなかったのかと思っただ」

「則子アンタ……、エロいわね」

友香がちよつと冷たい目で則子につっこむ。

「でもね、あのワンピース、玲二くんが可愛いって言ってくれたんだ。みんなありがとう」

事前のデート対策会議で、最初に議題になったのがどんな服で行くか、だった。

みんなでわざわざ、勝負服を買いに行こうとお店まで出かけた。プリンスの好みは絶対こういうの！ と千早が強力にプッシュしたのが、あのワンピースだった。薄いグリーンがとってもさわやかで、裾のレースがとても可愛い。今まで、あんなひらひらしたものを着たことはなかった。

可愛い服はいつもお母さんが買ってきていたけど、それを着る度に兄たちがからかってきたから。「女の子みたいな服着て」だの、

「学芸会ですか？」だの。そんなことばかり言われるのがイヤで、あまり可愛い服は着ないようにしていた。

だけど、今回はいつものファッションじゃダメだと全員が譲らなかった。

「いつきは可愛いんだから、絶対似合うって。はい、試着しようか」無理やり千早に試着室に押し込まれた。色々試して、勝負の1枚を決めた。そして、それにあう他のアイテムもみんなで探してくれた。白いカーディガンも合わせて買って、帰ってからは当日の髪型について熱い議論がなされた。

散々話し合って、あの形になった。結果は上々だ。だって、玲二くんは……。

『今日は……すごく可愛いから……』

思い出すだけで顔がでれっとなってしまう。嘘とか、お世辞って感じには思えなかった。

「ちょっといつき、何その顔……。思い出し笑い？」

友香が背中をバンと叩いてくる。

「もしかしてまだ話してないことがあるんじゃないの？」

則子もつつこんできた。

「いやいや、ないよ。ないない。ただ、玲二君が思いのほかほめてくれたっただけ」

千早は満足そうな笑顔を浮かべていた。

「やっぱりねー！ プリンスに限らず、男はああいう可愛い感じに弱いもんよ」

「でもでも、消化不良じゃない？ コントみたいになって終わりなんて」

則子が言うとおりで。最後は2人で水族館スタッフの服着てとぼとぼ帰ったわけだし。

「リベンジしないと、いつき！」

友香が力強く言う。そうだ。それも報告しないといけない。

「あのね、今度、12日にまた会う約束したんだ」

「えっ……！？マジで？」

「いつき……、腕を上げたじゃないの……」

3人は驚いた顔だ。興味津々で早速千早が身を乗り出してくる。

「次はどこに行くの？」

「まだ決まってるじゃないんだ。好きなところでいいよって言うてくれたんだけど……」

全員真剣な顔で考え出す。

「次こそ真の勝負だよ！」

「そうだよ。次こそ決めるよ、いつき！」

もしかしたらみんな、私よりもずっと力が入っているんじゃないのかな？

次回のデートに向けた王子様攻略会議は、夜まで続いた。

今日から8月。

本日の予定は……、動物園でアルバイト。

朝はまず、1番上の兄、一基かずきに車に乗せてもらって出勤する。

2番目の兄の将二も一緒だ。忙しそうな日は、兄妹でローテーションが組んである。

1番上の兄はもう22歳で、あまり話すことがない。今は大学4年で就職活動をしているはずだけど、どこかに決まったとか、決まってるのかその辺の事情はいまひとつわからない。

しかし2番目の兄はおしゃべりだ。20歳でこちらも大学の2年生。いつもちょっかいやらイヤミやらを中心に、口を出してくる。

車の2列目の席に並んで座っていると、案の定将兄ちゃんが話しかけてきた。

「なあいつき……、お前、彼氏とはどうなの？」

「別に。彼氏なんてまだいないもん」

チラッと視線を送ってきて、まだ続ける。

「この間ルンルンヒラヒラ出かけていったじゃないか」

「……ルンルンヒラヒラ出かけたよ。でもなんでもないもん」

「この間家まで来てたやつがいたじゃないか。あいつか？ 彼氏なんだろ？」

「もお、しつこいよ、将兄ちゃんは！ 黙秘します！」

「黙秘？ 生意気な〜！」

弟と妹のしょうもない会話を聞いて、運転席の上の兄がククッと笑いをこらえている。

「もー、一兄ちゃん、なんとか言ってよ！」

一兄ちゃんはまっすぐ前を向いたまま、弟をたしなめる。

「将二はいつきのこと、気にしすぎだろ？ いくら可愛いからってしつこくすると本当に嫌われるぞ」

「可愛い？ 誰が？」

まだ憎まれ口を叩いている。

「いつきは可愛いじゃないか。俺もいまだに彼氏いないなんて信じられないよ」

助け舟が出たかと思いきや、これでは路線の変更ができないじゃないか……。

「もーいいじゃん。お兄ちゃんたちこそ彼女いないの？」

将兄ちゃんは黙る。

「俺はいるよ」

一兄ちゃんはさらっとカミングアウトした。まったくの初耳だ。
「えっ!？」

2列目の2人で声を八もらせる。

散々質問をぶつけているうちに、車は動物園へと到着した。

今日の分担は、私はレストランの厨房の手伝い。将兄ちゃんはチケツト窓口らしい。一兄ちゃんは送迎のみで、家へ帰っていった。歩きなれた園内を進んで、動物園の真ん中にあるフードコートへに到着する。

飲食できる場所はどこどころにあるけど、ここが1番お客さんが多い。目の前はアフリカの動物のコーナーで、キリンの長い首が時々目に入ってくる。

「あ、いつきちゃん。今日もよろしくね」

すっかり御馴染みのフードコートの主、水沼さんに声をかけられる。頼もしい体型の52歳女性だ。

「どーしても手がまわらなくなったら、テーブルの方も頼むわ」お父さんにはとにかく接客にはまわるな、と言われていた。しかしたまにどうしようもなく忙しくなることはある。水沼さんがこういうのは仕方ない。

「はい。今日もよろしくお願いします」

しっかりとやらなきゃ。笑顔で答えた。まずは、テーブルを拭いてまわる。

そういえば、玲二くんも今日からアルバイトのはずだ。

大学の資料室って、どんなところだろう？「資料室」って響きだけで、なんだか玲二くんにあってる気がする。たくさんの難しそうな本が詰った棚の前で、メガネをかけて本を開く姿を想像した。

うん、……素敵だ。

あとで休憩時間になったらメールを送ろう。そう考えるだけで元気が出る。

屋根はあるけど、このフードコートは屋外。まだ午前中だけでも気温はだいぶ高くて、セミの大合唱が聞こえる。

暑くても、玲二くんのことを思えば何も気にならない。早く会いたい。

幸せな気持ちで、テーブルをピカピカに磨き上げていった。

昼前になると、驚くほど忙しくなる。

あれやこれや、指示をされ動く。あつちでお皿を下げ、こつちでカレー用のご飯をよそう。やることなくならない瞬間がない。

「いつきちゃん、ごめん。これ、5番テーブルに頼むわ」

とうとうウェイトレスの役目がまわってきた。仕方ない。この忙しさでは行くしかない。

「はい」

返事をしてから慌てて手を洗い、トレイを持って厨房を出た。

家族連れに食事を提供して、ついでにテーブルの上に残された食器を持ち帰る。

セルフサービスなんだけどなあ……。

なんていつても仕方ない。どこにでも多少マナーの悪いお客さんはいるものだ。

「すいません、お水が空なんですけど」

中年男性に言われ、慌てて空のポットを回収する。新しい満タンのポットを笑顔で渡すと、男性はなんだか嬉しそうに受け取ってくれた。よかった、苦情はなし。

他にも空のポットを見つけ、交換しようとテーブルへ向かった。

「あつ」

向かった先のテーブルに、見覚えのある顔。

「園田さん」

ものすごく幸せそうな笑顔を浮かべて立ち上がったのは……。

「相原君」

終業式のことを思い出す。はつきりいつて気まずい以外の何物でもない。

「来てたんだ。……じゃ、楽しんでね！」

ささっとポットを取って、厨房へと走る。後ろで呼び止める声があったけど、聞こえないフリをした。

厨房に入って、ポットの交換を他のウェイトレスに頼む。最初から頼んでおけばよかった……。お父さんの言うことに従っておくべきだった。

中からそっと、さっきのテーブルあたりの様子をうかがう。

……どうも１人みたいだ。１人で動物園に遊びに来た？ それとも他の人はお手洗いでも行ってるのかな？

厨房の中はあいかわらず戦争のような忙しさだ。

今は気にしても仕方ない。とにかくみんなのお手伝いをしないと家族特別価格になっているとはいえ、一応アルバイト代は出る。せめて他の従業員たちのジヤマにならないようにしないといけない。

午後２時を過ぎると、ようやく忙しさもひと段落してきた。

「いつきちゃんお疲れ様。一休みしておいで」

水沼さんが笑顔で声をかけてくれる。

手伝いは今日が初めてではないけど、この忙しさ、あわただしさにはいつも驚く。

そういえば……、と忙しさの中忘れかけていた懸念を思い出して、フードコートの方を見る。

「！」

……まだいる。

少し、テンションが下がるのを感じた。いや、少しじゃない。かなり下がった。いや、もうマイナスかも……。

やっぱり、１人なんだ。っていうか、動物見に来たってわけじゃないのかな。なにか本を広げて読んでいる。

休憩するのは厨房の奥の部屋だから、別に問題はない。でも、気持ちはスツキリしない。

「どうかした？」

水沼さんが声をかけてきた。

「いえ……、なんでもないです」

こんな個人的な不安を話すのはどうかと思う。大体、自分目当てで来ているとは限らない。そういう可能性もあるはずだ。

しかし、次の瞬間ほのかな希望の火は消えてしまった。

「なあ、あの子またいるな」

「ガリベンくん？ …… ホントだ。すごいな。これで何回目？」

ガリベンくんって、もしかして。

話しているラーメン担当の2人に、そっと近寄る。ラーメン担当は20代後半の男性2人組、岩田さんと樺島さんだ。パートのおばちゃんたちに大人気らしい。

「あの、ガリベンくんって、あそこに座ってる人？」

「ん？ ああ、いつきちゃん」

岩田さんはなんともいえない、緩んだ笑顔になった。

「そう、あそこの角にいる子ね。しよっちゅういるんだよ。あそこで勉強してんだよ。ヘンだろ？」

「しよっちゅういるの……？」

「毎日じゃないけど、夏休み始まったくらいから……、もう8回目くらいかなあ」

夏休みが始まって、まだ2週間くらいだ。確かに8回は多い。

ここにはもう3回来ているけど、今まではたまたま会わなかったのかな？

「まさかいつきちゃん、ああいうのがタイプってわけじゃないよね」

「まさか！ ちがうちがう」

とんでもない！ 慌てて否定する。

「ちよっと休憩してきます」

早足で、奥の部屋に引っ込んだ。

驚いた……。

相原君、何しにそんなに来てるの……？

いや、そんなの、私に会いに来ているに違いない。

でもなんでここでお手伝いしてるの、知ってるんだろう……。

かつてないホラーな気分になって、ブルッと震えた。

すごく不快で、ちよつと怖い。どうしよう。

賄いのチャーハンを出されたけど、食事はなかなか進まなかった。このまま中にいさえすれば、話しかけられたりすることはないだろう。動物園は5時で1度閉園する。7時から夏休み限定のナイトズー体験もあるけど、店は全部閉まってる。バイトはない。お客がはけた後に帰れば、問題ないはずだ。

だけど、次に来た時にまたいたら……。相原君がしょっちゅうここに来ていることそのものが問題だ。直接会いに来るとかじゃなくて、ここにこつそり来て1日中いる……。

鳥肌が立ってきた。気持ち悪い。これが生理的に無理ってやつなのかな……。

生まれて初めてこんな気分になった気がする。

ため息をついていると、ウェイトレスの夏子さんが声をかけてきた。

「どうしたの？ いつきちゃん、具合でも悪い？」

「え？」

「顔色悪いよ。……今日はもう忙しい時間も終わったし、帰ったら？」

その会話を聞きつけて、他の従業員も心配してくる。

「でも、あの、大丈夫だから」

「無理しなくていいよ。今日忙しかったもんね。暑いし」

具合が悪いわけではないし、大体、今ここを出たくない。

どうしよう。でも事情を全部話すのはちよつと気が引ける。

同級生がストーカーみたいなのをしているようで気持ち悪い……

……。うわあ、大事件だ。それに、もし相原君になにか他の事情があった場合は、すぐく申し訳ない。

いや、でも他の事情なんて……想像がつかないけど。

誰か兄ちゃんに迎えに来てもらおうかな。

ホントは一兄ちゃんがいいけど、一緒にいてもらえるなら2番でも3番でも誰でもいい。将兄ちゃんが帰れるなら、来てもらおうかでも園長の子供たちが途中でゾロゾロ帰るのってどうだろう……。……

誰かが伝えたのか、水沼さんがやってきた。

「いつきちゃん、どうしたの？ 具合悪いんだって？」

「うつん。違うんです。大丈夫です」

「顔色悪いよ。鳥肌立ってるじゃない……寒い？」

みんな勝手に話をすすめて、どうやら私はもう帰った方がいいという方向で動いている。園長に連絡だなんて声も聞こえた。段々事態が大げさになっていつてる。

玲二くん。

玲二くんが来てくれたらいいのに……。

時間はまだ2時半。玲二くんだって一生懸命働いているだろう。大体すぐ来てもらっても1時間くらいはかかりそうに思える。

もう1人、最近仲良くなった男子の顔が浮かんできた。

葉山君が来てくれたら、頼もしいなあ。相原君キラーだもん……。いつでも呼んでねって言うてくれたけど、本当に呼んでいいのかな？

メールを送って10分ちよつとしたところで、汗だくになった葉山君が現れた。汗で濡れた手で、ポンつと肩を叩いている。

「よっ、相原じゃんか！ 奇遇だな〜こんなところで」

叩かれた相原君はぎよつとして飛び上がっている。

「うわっ、葉山！」

「なにしてんの？」

思わぬ天敵の登場に、相原君は少し拳動不審だ。

「なんでもない……。お前に関係ない……」

「そう？」

葉山君は笑顔で手を振って、厨房の出入り口の方へやってきた。

「よっ」

「……葉山君、ごめんね。なんか、変なこと頼んじゃって」

「いいよいいよ、麗しの園田ちゃんのためなら、もー喜んでっ」

少し悩んだ末に、葉山君にメールを送ってみることにした。

「動物園でバイト中なんだけど、相原君がずっというて怖い！」
という内容だ。

それに対して、返事は即、返ってきた。

「わかった。ちよつと待ってて。バイトの場所ってどこ？」

中央のフードコートだと返すと、それ以降は返事がなかった。

でも、こうしてすぐに現れた。走ってきたのか、息が荒いし汗で服がびしょぬれだ。

「ビックリした？」

葉山君は汗だくだけど、笑顔だ。

「うん。ビックリした」

いくらなんでも来るのが早すぎる。

「俺さ、この動物園の裏の山にある旅館で、書道部の合宿中だったんだよ」

なるほど……。確かに旅館がある。

このフードコートまで、正面玄関から歩くと20分ほどかかるけど、旅館のある方角の裏門から入れば10分で来れる。でも、旅館から裏門までは結構あるはずだ。

わざわざここまで、走ってきてくれたんだ……。

「大丈夫？　すごい汗」

「あれ？　もしかして好きになっちゃった？」

「ううん、それはないけど」

正直に返事をする、葉山君はちよつとわざとらしい動きで肩を落とした。

「でも、ありがとう」

「園田ちゃんが笑顔でいてくれるなら、俺はなんでもしちゃうよ」
なんでそこまでしてくれるんだろう？　ちよつと不思議。

「さ、行こうぜ」

葉山君がいてくれれば心強い。フードコートのスタッフに挨拶して、早退させてもらった。

2人で並んで歩き出すと、相原君がビックリして固まっているのが目に入った。

「あ……」

その小さな声に構わず歩いて、出口へ向かう。
でもさすがに固まっただけではすまなくて、相原君は走って追いかけてきて両手を大きく広げて立ちはだかった。

「葉山……、なにしてるんだ……」

「何って、わかるだろ？　今から園田ちゃんとデートだから、ジャ

マしないでくれる？」

「でーとお？」

相原君が思いつき悲しそうな顔で、叫んだ。

「園田さん！」

周りの人たちが振り返る。イヤだ。早く終わらせないと……。

「私が葉山くんと一緒にだと、なにか問題あるかな？」

思い切って冷たい感じで言うと、通せんぼした体がまた固まった。突然、手をつかまれる。

「行こうぜ、園田ちゃん！ 2人の明日へ！！」

葉山君が楽しげに言って、走り出す。

手を握られて一瞬どうしようかと思ったけど、なんだか笑いがこみ上げてきた。

ああ、でも次のお手伝いの日、みんなになんて説明しよう……。

動物園の正面玄関。ここからバスに乗れば、家の近くの駅前まで行ける。

「園田ちゃん、大、丈夫？」

暑い中走ったので、2人で揃ってぜえぜえしている。

「葉山君こそ……、来るときも走ってきて……くれたんでしょ……」
さすがに途中で手は離していた。お互い汗びっしょりだ。

そういえば、葉山君、入園料まで払ってくれたんだよな。
さすがにありがとうの一言で済ませるわけにはいかない。

動物園の向かいに、カフェがある。

「葉山君、ちよっと、お茶でも飲んでいこうよ。おごるから」

「え？ ああ……、そうだな。ちよっどいい。行こうか」

葉山君は入り口のほうを振り返って様子を見ている。追っ手が来

ないか確認しているみたいだ。

2人でカフェに入って、外から見えないようにと奥のほうに座ることにした。

注文して席へ行くと、葉山君は電話をいじっている。誰かにメールを送っているのかなと思っただころで、はっとした。

「そうだ。合宿抜けてきてるんだよね？ 大丈夫？」

「ん？ ああ、大丈夫。俺の美しい字、見たでしょ。期待のホープだから。融通利くの」

いつもどおりすぎて、この返事はどこまで真実なのかよくわからない。

「あの、これ……動物園の入場料。ホント、ありがとう、葉山君」

「え？ いいのに。お礼はキッスとかでもう全然！ そのくらいで構わないよ！」

さすがにちよつと冷たい目でみてしまった。でも、気にしないらしい。

「ねえ葉山君、ホントに助かったよ。なんか迷惑かけちゃって、ごめんね」

「なんだよ水くさい。俺と園田ちゃんの仲じゃんか」

そんな仲だったつけ？ と一瞬思う。でも、葉山君は笑顔だ。

「なあ、玲二とはどう？ ちよつとは進んだの？」

「えっ……、ううん……どうだろう……？」

夏休みに入って以来、気持ち的にはものすごく進んだ気でも、物理的には特になにも変わってはいない。

「すごーくちよつとだけ、前進したかな？」

そう答えると、葉山君はニヤリと笑った。

「俺、玲二のこと好きじゃんか」

「え？ ……うん」

もうちよつと言ひ方を考えて欲しいな、と思う。でも、そういう意味じゃないんだろ。黙って続きを聞いた。

「玲二はさ、園田ちゃんのこと好きだと思っただよね、俺。これ、

ほぼ確信してますんで」

少し頬が熱くなるのを感じた。その言葉の通りだったら、どれだけいいだろう？

「だから、園田ちゃんのピンチも助けてあげたいの」

嬉しいけど……やっぱり、玲二くんのことを好きすぎじゃないかな。

「俺、入学式の時にさ、核爆弾級に可愛い子がいる！ って思ったの。園田ちゃんのこと」

「へ？」

「話してみたら、性格もいいじゃない？ 俺、お似合いだと思うんだよね。2人の事」

男の子に面と向かってこんなにほめられたのは初めてで、ちょっと照れくさい。

「俺、玲二がデレデレのろけてる姿、早く見たいわ。園田ちゃん、頑張つてよ」

「えー、なにそれ……」

今日、連絡したのは正解だったみたいだ。助けてくれる理由はちよつと不思議なものだけど。

散々笑って顔をあげると、そこにいつの間に来たのか、相原君がひどい顔で立っていた。

「わっ！」

つい、大きな声が出てしまう。

「おいおい、相原！ お前よくここがわかったな！ まったく気持ちの悪い！」

「園田さん……本当にそいつとデートしてるの？ そいつと付き合ってるの？」

「えっ？」

「そんな……何人もと付き合うような女の子だったなんてガッカリだよ！」

どうやら怒っているらしい。彼からしたら当然、になるのかな、

この反応は。

「なんだよお前。勝手に付きまとして、迷惑してるのは園田ちゃんのほうだろ？」

「お前は黙ってる！ この……バカ！」

葉山君は呆れたのを通り越して、哀れむような顔をした。

「バカってなんだよ。お前、……ボキャブラリー少なえんだな」

「黙ってるっていったら！ バカ！ バカバカっ！」

「やめて、相原君。私が頼んで来てもらったの。その、相原君がしよつちゅう来てるって聞いたから、怖くなっちゃって」

「怖い？ なんで？」

「なんでって……お前」

「うわあ……という顔になっている。なるよ。葉山君じゃなくなつて、そうなる。」

「僕は園田さんが好きなんだ。だから、いつだって君を見ていたい。そのどこが悪い？ 夏期講習の合間を縫って、ここまで来てるんだよ。来れる時間は全部来てる！ 君に会いたいから！ 何でそれが怖いのか？」

「逆に怖い以外のなんなんだよ……」

葉山君が立ち上がって、また手を引っ張ってきた。周りの客もドン引きしています、という雰囲気だ。確かにもう出たほうがいい。

「あ！ なに園田さんの手を握ってるんだ！」

「もう2回目だよ。うらやましいだろ！」

構わず葉山君は歩く。それについていて、カフェのスタッフに軽く会釈をして外へ出た。

後ろからは真っ赤になって怒った顔が追いかけてくる。

「園田さんが好きなのは立花なんだろ！ あいつとならともかく、お前がなんでそんななれなくしてるんだ！」

「じゃあ、俺ならいいのか？」

いきなり、声がした。後ろから。

ずっとずっと、聞きたかった声。慌てて振り返ると、玲二くんが立っていた。

「玲二、待ってたよ。はい、交代」

手が、玲二くんの手へのせられる。

「じゃ、俺行くな。合宿の途中だから」

葉山くんは笑顔でウインクしてきた。玲二くんの肩をポンと叩く。

「おい、相原、恋する2人の邪魔はすんなよ。じゃ、またな」

最後にそう言つとあつという間に走っていつてしまった。本当は合宿を抜けたらマズかったんじゃないのかな。

感謝の気持ちで友人の走り去る姿を見送って、突然現れた王子様の方を見る。

「お待たせ……」

玲二くんはそう言つと、相原君のほうへ向き直つた。

「相原、園田は俺が送っていくから。悪いけど、一緒には来ないでくれ」

ドキつとした。いや、ドキつくらいじゃすまない。胸が爆発しそうで、実際ちよつと痛いくらいだ。

言われた方は口をパクパクさせて、ようやくなんとか声を出した。「そんなの僕の勝手だろ……」

「園田がイヤがつてるのがわからないのか？ お前は好きでやってても、園田にはただの嫌がらせだ。本当に好きなら、相手が嫌がることはやめろよ」

すごく優等生的な発言だったけど、効果はあつた。相原君はすっかり黙りこんでしまっている。

「園田、行こう」

葉山君に交代と言つて握らされた手がそのままつながっている。

憧れの王子様に手をひかれて、バス停へと向かう。ちょうど乗りたい方向のバスが停まっていた。

乗り込むとすぐに発車して、窓からカフェの外に相原君が呆然と

立ち尽くしているのが見えた。

よかった……。

「園田」

隣から声がした。大好きで、1番聞きたかった声。

「……玲二くん」

「良太郎に呼ばれたんだ。アルバイト、ちょうど終わったところだったから、急いで来た」

「そうだったんだ」

粹な計らいに、ちよつと感動しそうになった。やるな……葉山君。2人で、2人がけの席に並んで座っている。まだ、握られたままの手にちよつと力を入れた。

それに反応して、玲二くんがこちらを見る。じつと見つめてきて……、何も言わない。

さっきまでの混乱や恐怖があつというまに消えて、今はただ手の熱だけを感じている。

繋がった手が離れたのは、家の前でだった。

「……あの、……ありがとう玲二くん」

「うん」

頷いて、そして、続けた。

「困ったときは、俺を呼んで」

胸がいっぱいというのは、こういう状態のことをいうのかな。今の言葉で、心がすごく幸せな気持ちで満たされていく。

「今日はもう、ゆっくり休んで」

「……うん」

本当はもうちょっと一緒にいたい。

けど、そういえば手伝いを早退してきたんだった。もしかしたら、この後事情聴取があるかもしれない。

「ありがとう」

お礼を言っと、玲二くんは優しく微笑んだ。そしてそのまま帰っていった。

今夜はいい夢が見られそう。手にはまだ、王子様がくれた熱いきめきが残っていた。

#07 「夏の日は赤く染まる」 <玲二>;

今日の夕食は、パスタにした。野菜を細かく刻んでミートソースを作ってみる。

初めての割りになかなかうまくいったようだ。

2週間やってみてわかったが、1人分の食事の用意はなかなか面倒だ。それでも自炊するのは楽しい。大量にできたソースの残りは冷凍することしよう。

食事中に2回、電話が鳴った。メールがきたらしい。

1人きりであっても食事中にカチャカチャいじるのは良くない気がして、しばらく電話機を待たせた。

食事を終え、食器を片付ける。皿を洗い終わってから、メールを確認した。

1件目は良太郎からだ。

どうだった？ あの後チューくらいしたの？ 報告タノム

まったくくだらない。

しかしこの言葉の裏に、心配している気持ちが隠れているのを感じる。

今日の昼間、メールが来た。良太郎からだ。

園田ちゃんにストーカー被害発生。希望が原動物園入り口まで至急きてー！

2時半すぎだった。仕事は3時までだったが、今日の分の作業は大体終わったし、そろそろ帰っていいよと言われていたところだった。

本家に帰っていいものかと少し迷っていたが、そのメールですぐに資料室を飛び出した。

大学を出たところで、また電話が鳴った。

俺が一時的に保護するけど、部活の合宿中だから玲二がおうちまで責任持って送ってね。

すぐに、わかった、と返事を送った。

ここから動物園までの最短ルートを考える。

まずは電車だ。ホームへ駆け込んで、電車が来るまでの間に電話機を操作して動物園行きのバスの時刻表を検索した。初めての携帯電話でのインターネットだ。あと3つ先の駅で降りれば、すぐ出るバスがあるらしい。

動物園の前のロータリーを、バスは円を描くように走る。

まわっている間に、入場口とは逆側のカフェの前に良太郎というき、そして相原の姿が見えた。

ドアが開くなりバスを飛び降りて、3人の元へ走った。

あの時の自分の言った言葉がいちいち恥ずかしい。家のリビングで1人照れた。

とりあえず、良太郎に感謝しないといけない。メールを返そう。

ちゃんと園田を家まで送った。今日はありがとう。

他にかくことが思いつかない。まあ、これでいいだろう。

本当は、少し悔しかった。いつきがまず良太郎に連絡をしていたこと。

きつと遠慮があるんだろう。俺よりも、確かになんでも頼みやすいだろうなと思う。

だからつい、あんなことを言ってしまった。

『困ったときは俺を呼んで』

いつでも駆けつけることなんて、できるだろうか？

けれど、彼女が困っているのに力になれないのは嫌だった。

言ってしまったんだからもう後悔するのはやめだ。いつでも呼ばれたら駆けつける。これからはそうする。

もう一通のメールを見る。こちらは、いつきからだ。

玲二君、今日はありがとう。きてくれて、ほんとにほんとに、すっごく嬉しかったです。

あの後色々聞かれて、結局全部事情を話すことになって、おかげで、夏休みのお手伝いがなくなっちゃったよ。

ちよつと残念だけど、でも、安心してます。

今日は、葉山君と玲二君が助けてくれてよかった。

もし次に困ったときは、玲二君のこと迷わず呼ぶから！

いつも一緒にいられたら、もっと嬉しいけど。

またメール送るね。

おやすみなさい。

いつき

また赤面する。

いつも一緒にいられたら、確かに駆けつける必要だっただけ……。ソファの上にゴロつと横になった。ため息が出る。

結局どんどんいつきとの距離は縮まっている。少しずつ、近づいている。

嬉しいが、恐ろしくもあった。母の「容赦しない」は一体どんな事態を引き起こすだろう。

自分はどうなってもいい。でも、いつきになにかあったら……。それだけはどうしたって避けなくてはならない。

しかし目を閉じると、やはりいつきの顔が浮かんできた。早く、また会いたい。

次の日もまた、大学へと出かけた。

家からは電車に乗って30分程だ。母と一緒に何回か来た事がある。

今年の夏、1人で残るというのは5月にもう決まっていた。それが決まってから、父さんがアルバイトの話を持ちかけてきた。多分父の心遣いなのだろう。ヒマすぎないように、とか、安全なアルバイトを、とか。

大学の雰囲気に触れてみるとか……自分に向いているとか、だろうか。

これ以上自分に合うアルバイトもないかもしれなかった。

高校生にできる仕事は限られている。接客業はあまりやれる自信がない。

「立花君、これ、頼むわ」

バイト仲間、になるのだろうか。大学生の桑原が声をかけてきた。
「あそこの上のところなんだよ。届く？」

「はい、大丈夫です」

アルバイトに来ているのは男子学生ばかりなので、気が楽だ。資料のファイルは分厚いものが多い。女性には多分、ちよつとキツイ。

休憩時間に、飲み物が配られる。

「立花君って何年生？」

桑原が声をかけてきた。

「なんかあんまり見ない顔だけど」

「高校1年です」

「へっ？ 高校生なの？」

驚かれてしまった。

そこに、現場の監督係を勤めている職員の北条が口を出してくる。

「立花教授の息子さんだよ」

「あつ、そうなの？ 教授の？」

そんなに驚かなくてもいいのに。

「いや、全然似てないから、気がつかなかったよ。みんな、教授の息子さんなんだって！」

桑原が大声で言うので、まわりに人が集まってきた。

「ホントに？ 似てくない？ しかも高校生なの？」

散々似てないといわれてしまった。

自分としては、結構父に似ていると思っていたのに。人から見ると違うのかな。

「純日本人じゃないよね？」

「母がドイツ人です」

「おお、教授、奥様は外国人なの??」

意外〜という声があちこちから上がった。

「こんなイケメンの息子がいるとはね……。じゃあ奥さん美人なんだね」

母親が美人かどうか答えるのは難しい。息子としては。

「ねえねえ、立花君は彼女いるの？」

「いえ……、いないです」

「可愛い女子高校生、紹介してよ」

「こら！ 高校生に絡むんじゃないよ。報告するぞ」

北条の言葉にみな口数がガクンと減った。

「あれだね、話し方は、教授と似てるね」

うんうんと学生たちは頷いた。

「ちよつと寡黙な感じね。落ち着いてるから、高校生だと思わなかったよ」

「教授の授業はわかりやすくていいよ。優しいし」

父の評判を生で聞いたのは初めてだ。なかなか新鮮な体験といえる。こうやってほめられるのは、悪くない。

「俺、1年の南川ね。教授によろしく言つといて」

「玲二君、覚えなくていいよ。こんなお世辞で評価水増しできるわけないからね」

北条が呆れた声で言った。

どうやら、気のいい学生たちが多いようだ。なんだかちよつと安心した。

午後3時をまわり、この日の作業が終わった。

帰り支度をして大学を出る。電車に乗るとメールが来た。いつきからだ。

玲二君、今日もお疲れ様！

12日の約束なんだけど、一緒にプールに行くの、どうかな？
ウォーターアイランドの大きなプールに行きたいです！

ご検討よろしく願いします」

いつき

プール……？

何故だろう。プールという案は予想外だった。

ウォーターアイランドといえば、海の近くの遊園地だ。何種類もあるプールが子供から大人まで人気のある施設、のはずだ。行ったことはない。

プールってことは、……水着がいるな。

いや、いるとかじゃなくて、水着で泳ぐということだ。自分だけではなく、いつきも。

なんとなく赤面してしまう。いや、水着くらいで赤面するなんて……。

ちよつと顔をふって、再びメールが表示されている画面を見た。どうしよう。一緒に泳ぐなんてできるだろうか。

もちろん、泳ぐことはできる。

水着姿のいつきと、泳ぐ……？

いや、水着と言ったって……そんなに、露出が高いものばかりじゃないはずだ。なんか……こう……、ヒラヒラして足があんまり見えないとかそういうのもある。

プール＝水着＝恥ずかしい　って、いやらしいことを考えているようじゃないか。断ったら、そんな風に思われてしまうだろうか。いや、……考えすぎか。

そんな考えがぐるぐると堂々巡りを始めた。

好きなところでいいよと言ったのは自分だ。

もしかしたら、泳ぐのが大好きなのかもしれない。だとしたら、無下に断るのも気が引ける。

散々迷った挙句、夜になってOKの返事を送った。

大学という新しい環境でのアルバイトはつつがなく終わり、とうとう12日が来てしまった。

今日の待ち合わせも駅だ。なんとなく、緊張が走る。

落ち着け、考えすぎだ。

自分が恥ずかしい。会う前から赤面して、どうするんだ……。

大体、体育の授業で水泳の時はみんな水着じゃないか。

あれは、体操着みたいなものだ。ただの、水泳用の衣類なんだ。

そんなことを考える自分に少々呆れながら、待ち合わせ場所へ向かった。

5分前に駅に着くと、今日はもういつきが待っていた。

水族館に行った時に自分が待っていた木陰に立っている。

「玲二くん！」

笑顔で手を振ってくるのに、軽く右手をあげてこたえた。

「おはよ。なんか久しぶり」
「うん」

今日もすごく、可愛らしい格好をしている。
動物園まで迎えに行ったときは、水色のＴシャツにジーンズだった。

今日は、薄いピンクのキャミソールに白いロングスカートだ。上になんと言っのかはわからないが、丈も袖も短い羽織ものを着ている。

とても可愛い。

きつい夏の日差しも、この美少女にかかれば爽やかな魅力の演出へと変わる。

「行こうか」

ウォーターアイランドへも、バスが出ていた。

「うん」

いつきが笑顔で着いてくる。バスはあと3分ほどで来るようだ。

「玲二くん、今日はどうかかな？」

スカートを両手でつまんで軽く広げて披露してくれた。ついでに首をちよつとかしげている。

「……いや……今日も、可愛いよ」

可愛いしぐさに、してやられてしまった。どう考えたって可愛かった。嘘など言えない。

その言葉に、ニツコリと笑う。とても嬉しそうだ。

「玲二くんも、今日もかっこいい」

顔が爆発しそうだ。いつきのストレートさは、そのまま武器になっている。

ひたすら照れながらバスに乗り込んだ。なんとか落ち着きたい。

「玲二くんは、夏の課題って終わった？」

「ああ、終わった」

「やっぱり。そういうの、先に終わらせちゃうタイプだね」
いつきが感心したように言った。

「私もすっかりスケジュールが空いちゃったから、ずっとやってる。
あとちよつとで終わるけど」

きつと動物園も1番忙しい時期だろうに。相原も罪なことをした
ものだ。

「あれから、大丈夫だった？」

「ん？ ああ、もうね、大変だったの！」

あの日のことを話してくれた。

兄が入場口で色々を見ていたらしく、結局全部話さなくてはなら
なかったらしい。

「ひどいんだよ。私が3人の男をたぶらかして、取り合いをさせて
たみたいなこと言うの！」

確かに、はたからみたらとんだ修羅場だったかもしれない。

「本当は、相原君のことも全部話すのはちよつとって思ったんだけど……、でも一から説明する場合、どうしてもはずせないじゃない
？ その事情って」

「確かに」

「で、話したら、もうお手伝いはいいよってことになったんだ。相
原君はちよつと話が通じなさそうってことになっちゃって」

そこでいつきは少し声をひそめた。

「だってね……、まだ来てるんだって」

「え？」

「もう私は来ないよって言っても、信じませんからって」
それは恐ろしい話だ。

「でも、売り上げに貢献してくれてるからいいかな？」

いつきは笑った。こうして笑えるなら、大丈夫だろう。

それに、今日も動物園に行ってるかもしれない。それなら、彼が
現れる可能性は0ということだ。

「えへへ。遊園地なんて久しぶり。楽しみだな」

子供のような無邪気な笑顔がひたすらにまぶしい。

素直でまっすぐないつき。飾らないところが1番の魅力だ。

バスはウォーターアイランド前に到着し、たくさんの客を降ろした。

まだ終点ではないのに乗客はもういない。

とうとう着いてしまった。

いつきと並んで、チケットを買って中に入る。

プールの中からは、大勢が楽しそうに騒いでいる声が聞こえてきた。

「じゃあ玲二くん、着替えたら、出てすぐのところで待ってて」

「……わかった」

わかったが、また緊張が始まった。いつきのことを、まともに見られるだろうか？

いや、大丈夫だ。裸になるわけではないんだから。これは……スポーツなんだ。

男子更衣室に入り、水着に着替える。

男の着替えなど、あつという間だ。コインを入れられる防水仕様のリストバンドをつけて、プールへの入り口へ向かう。

自分と同じように女性と来ているのか、そわそわと待つ男性が何人もいる。

色とりどりのさまざまなデザインの水着が目の前を通り過ぎた。たくさんの女性客が通っても、特になんとも思わない。

これなら大丈夫か。

緊張が少し収まってきたところに、とうとうその時がきた。

「お待たせ、玲二くん」

……鮮やかなブルーの、ビキニ。

大変だ。

考えていたよりもずっと露出が多い。

「いこ！」

柔らかい手にひかれて、プールの方へと歩いていく。

いつきは太くも細くもなく、とても健康的なスタイルの持ち主だったようだ。

水着姿もまったくいやらしさはなく、少し露出度が高いビキニもむしろ見ていて清々しくなるくらい爽やかで似合っている。

プールサイドに來ると、最高の笑顔が振り返った。

「えいっ！」

両手で水をかけてくる。

頭がクラクラした。

そのあまりの可愛さに、どうにかなってしまいそうだ。

いつきは自分にも水をパシャパシャとかけ、プールの中に飛び込んだ。

「うわー！ 気持ちいい！」

今日も暑い。水の中はさぞ快適だろう。

プールの中をぶかぶかと寄ってきて、ぼんやりしている自分の手を取り、引っ張ってきた。

水の中に落ちる。

「えへへ……、えいつ！」

また、いつきが水をかけてきた。

「およこ！」

人は少なくないが、泳げないほどの混雑ではない。

いつきは笑顔でスイスイと進んでいく。それに、慌てて着いていく。

笑顔で楽しそうにはしゃぐいつきを見ているうちに、自分の中にモヤモヤとしたものが生まれ、急速に大きくなっていった。

楽しそうに泳ぐ姿を追いかける。

水の抵抗で、なかなか距離が縮まらない。やがていつきが振り返った。俺を見た途端、笑顔が消える。

「玲二くん……？」

やっと追いついた。左手をぐつと掴む。

「園田……ごめん、もう無理」

そのまま、1番近いプールサイドへと向かった。

先に上がって、いつきの手をひいてプールから出す。

「どうしたの？」

肩を抱き寄せる。なんとか、胸が触れないくらいのギリギリで止めて正直な気持ちを告げる。

「俺、もうどこ見ていいかわからない……」

思っていることはもう一つある。それもちゃんと言おう。

「あと、……園田のこと、他のやつらに見られるのが嫌だ」

体を離すと、いつきは驚いた顔をしていた。

耳まで真っ赤になっている。多分自分も同じか、それ以上に赤いだろう。

一緒に更衣室の方へ移動した。男女別れる手前で止まる。

「プールはやめて、遊園地で一緒に遊ぼう」

「……はい」

時間はまだ10時半だ。プールへ入ろうとたくさんの人が中から出てくる。

もう出る客なんて、自分たちくらいだろう。

シャワーを浴びて、服を着る。着てから、自分のしたこと、言ったことに改めて赤面した。

抱きしめてしまった。

なるべく、密着しないようにギリギリにした……はずだ。
この場合、「抱きしめ」たわけではないか。

そんなことはどうでもよくて、あの魅力の塊みたいな姿をとにかくどうしても他の男から見えないようにしたかった。

真っ赤になった顔を冷やすために、顔を洗う。水はヒンヤリとしていて、心地いい。

タオルで顔を拭き、人の波に逆らって更衣室を出た。

しばらく待つと、いつきが出てきた。ちょっと照れたような笑みを浮かべている。

「ごめん、園田……、その……」

「いいの、玲二くん。だって……」

赤くなって、続けた。

「嬉しかったから」

2人で真っ赤になって更衣室の前で少し固まった。たくさん客が通っていく。多分、邪魔だ。

いつきがぱつと明るい笑顔を浮かべた。

「よし、じゃ、遊園地で遊ぼう！」

夏の日差しの中、2人で遊園地で過ごした。

ジェットコースターなんて、初めて乗った。

お化け屋敷で、何度もしがみつかれた。

ブンブンと振り回されたり、クルクルとまわったり……

すべてが、いつきの笑顔付きだ。

一緒に、たくさん笑った。こんな時間は初めて過ごした。

もうそろそろ夕方になる。締めにと観覧車に乗った。

「うわっ、暑い……！」

夏の観覧車の中は、恐ろしいほど暑い。

「そっか、窓開かないもんね……」

いつきはハンカチで汗を拭いている。それが無駄に思えるくらい、次から次へ汗の玉が浮かびあがっていく。

少しずつ上がっていくにつれ、海が見えてきた。

「わあ」

落ちてくる夕陽に照らされて金色に輝いている海は、美しかった。

向かい合って座るいつきを見る。

2人きりだ。

気持ちには、もう決まった。

散々悩んだ。やっぱり、言わないわけにはいかない。もう2ヶ月近く待たせた。返事を、ちゃんとしたい。

海を眺めていたいつきがこちらを向いた。

見られていたことに気がついて、ちよつと照れたような顔をする。

「園田」

なんとか声を出した。

すると、いつきは立ち上がって隣に移動してきた。すぐ横にちよこんと座る。

観覧車が少し、斜めになったような感じがした。

「えへへ」

近い。

うすいピンクのキャミソールの中がチラッと目に入り、慌てて視線を上にもらせた。

水着を見た時もあったが、……イメージよりも、ちょっと大きい……気がする。

「玲二くん、ごめんね。今日、プールなんか誘って」

「いや、俺の方が……ごめん。なんかへんな事言っちゃって」

「ううん」

こつちをじっと見ている。

視線をいつきの顔に合わせた。顔だ。顔に集中する。

「すごく、嬉しかった。そんな風に思ってくれるなんて、すごく、嬉しい」

大きな瞳がキラキラしている。

窓から入る光が全部この瞳に吸い込まれて、中から輝かせているみたいだ。

もう目が離せない。

じっと見つめる。

吸い寄せられる。

少しずつ、顔が近づいていく。

止められない。

唇が、勝手に近づいていってしまう。

もう少しで、いつきの唇に触れる。

そんないいところで、ガンッ！ という大きな音が響いた。

2人の距離が一気に元通りになる。

「なに……？」

なにかが当たったような感じだった。少し、揺れている。

しかし、こんな上のほうまで来た観覧車になにが当たるといいうんだろう？

「これ、落っこちたりしないよね……？」

不安げな声だ。

確かになにか部品が外れたとか、そういうアクシデントの可能性も0ではない。

いつきが手をぎゅっと握ってくる。安心させようとその手を強く握り返した。

観覧車はなにこともなかったような顔で、そのまま動き続けていく。

そろそろ頂上だ。

「大丈夫かな……？」

少し、不安が取れてきた。

気がつけば、ピツタリと寄り添っている。再び、目があつ。

たとえば、さっきのが本当にアクシデントの前触れだったら？
だったら、死ぬ前にキスくらいしたい。

もう1度顔を近づけた。

いつきは動かない。

いいのか……？

少し迷いながら、唇を近づけた。
可愛い大きな目が、閉じる。

そして再び、ガンッ！ という音が響いた。
いつきがビクッとして、離れる。

今度は見えた。

鳥だ。

鳥がぶつかった。

「玲二くん……！」

いつきは今にも泣きそう顔になっている。

「大丈夫……。鳥が、ぶつかったみたいだ」

「え？ 鳥？」

よくみると窓になにかこすったような白い跡がついている。

白い鳥だったと思う。海鳥だろうか？

「ぶつかって……どうなったの？」

「わからない。落ちていったのかな」

さっき見えた白い影は、下に落ちていった。地面まで落ちたかはわからない。

途中で飛んで無事に空へ戻っただろうか？

2回も鳥が激突して落ちて行ったかと思うと、さすがに気が重かった。

いつきも戸惑ったような顔をしている。

「こんなことって、あるんだね」

「……ああ」

しかし、違和感を感じる。いくらなんでもおかしくないか？

少し重たい空気のまま、観覧車は地上にたどり着いた。

いつきはきよるきよるとあたりを見回している。鳥が落ちていないか、気になるんだろう。

暑かったので汗びっしょりだ。

「園田、なにか飲もうか」

「え？ ……うん」

さっきまでの元気は鳥といっしょに落っことしてしまったかのようだ。

ゆっくりとした足取りで、飲み物を売っているワゴンまで歩いた。

イスに座ると、いつきはなんとか笑顔を出して言った。

「ビックリしたね」

それに、頷く。

「……でも、故障とかじゃなくて良かった。大きな音がしたから、ほんと、ドキドキしちゃった」

なんとか明るい雰囲気になろうとしているのが伝わってくる。

俺も、元気にしてあげたい。

「ほんと、残念だった……」

いつきが目をまあるくして、顔を赤くしている。

残念だった……。

キスできなくて、残念だった。そういうことになる、よな。自分で言うておいて、赤くなってしまった。

そうだ。言わないと。

今ここでさっきの続きはできないけど、気持ちを伝えることはできる。

「あのさ」

姿勢を正す。

いつきもつられて、背筋をピンと伸ばした。

言おう。

俺も好きだって。ちゃんと付き合おうって。

しかし、口が突然さえぎられた。

なにかフカフカしたものに。

横から大きな力が加わって、椅子ごと地面へと倒れた。ガシャー

ンと大きな音が響く。

「玲二くん！」

顔の上をなにかがベロベロと動いていた。

「あー！ モモちゃんダメよー！！」

おそらくモモちゃんという名の大きな犬が乗っかっていた。

顔をこれでもかというくらいなめまわされる。毛がもさもさとして、暑い。

やっぱりおかしい。

モモちゃんの飼い主が、何度も何度も頭を下げてきた。

頭を軽く打ったが、特にケガもない。大丈夫だと告げると、謝りながら去っていった。

「玲二くん、大丈夫？」

「大丈夫……」

だが、汗とよだれで顔がベタベタだ。髪もボサボサになっている気がする。

トイレを探して、顔を洗いに行った。案の定乱れている髪もなでつけて、少し整える。

なんとか少しマシな格好になって、心配そうに立っているいつきの元へ早足で戻った。

「あ、襟が……」

いつきが手を伸ばして、シャツをキレイになおしてくれた。白い腕が伸びてきたこの姿勢に、ちよっとときめいてしまう。

「玲二くん」

今日は声も、いつもより可愛く聞こえる気がする。

「……なに？」

「さつき、なにか言おうとしたよね？」

そうだ。言おうとした。

「ああ」

気を取り直して、気持ちを整える。

「俺……」

突然の強風が一带を襲った。

「きゃああゝ!!!」

いつきが絶叫する。

可愛いロングスカートが、完全に裏返っていた。慌てて横を向いて目をそらせる。

やっぱり。

絶対そうだ。間違いない。

風が収まった。

看板が倒れたり、売店の売り物が転がったりして、あたりは騒がしくなっている。

いつきもスカートを押さえた姿勢で固まっていた。

「やだ……もう……」

下を向いて、顔を赤くしている。かわいそうに、髪もボサボサだ。こういう時に、なんと言わなければならないか。見てないよ、とか？ ……いや、それはかえってよくないか。

こんなことが、偶然にこんなに続くわけがない。

母さんの邪魔が入っているんだ。絶対そうだ。

水族館の時のハッピーの大ジャンプ。

あれだって、そうだったんじゃないだろうか。

「玲二くん？」

急に黙って考え込んだ自分を、いつきが心配そうな顔で覗き込んできた。

「ん？ ……ああ、ごめん」

「そろそろ、かえろっか」

さすがに気持ちが悪かったのか、すっかり元気がない。

期待させたと思う。気持ちが通じたんじゃないかって、思ったことだろう。

2人でバスに乗り込んだ。いつきは無言で、なにか考えているようだ。

俺も考えていた。

こんな風に邪魔が入るなんて……思っても見なかった。まさかこ

んなお茶目な方法で阻止してくるなんて。

イルカに、鳥に、犬に、風。思い出すと、逆に笑える。

いつきは、しょんぼりと窓の外を見つめている。元氣のない姿を見るのはなんとも寂しい。

「園田」

声をかけると、ゆつくりとこちらを見てくれた。

なんて言ったら、元氣を出してくれるだろう？

「来週、花火大会だろ？」

「うん」

「楽しみだな。……浴衣で来てよ」

この言葉に少し驚いたようだが、すぐに全開の笑顔になった。

「……まかせといて！ 玲二くんのこと、うっとりさせちゃうからね！」

少し赤くなつて、にっこりと顔を斜めに傾けた。やっぱり笑顔が1番似合う。

「期待してる」

「うん！」

その日も、いつきを家まで送った。少しは元氣が戻ったようで、良かった。

が、どうやら、気持ちを伝えるのは無理だということがわかった。母が海外にいつているのに、監視はちゃんとしていて、何かしようとするば阻止してくる。

いつからかはわからないけど、いつきのことももう知っていた。黙ってずっと見てたのかな。

両親が帰ってくるのは、22日。花火大会の2日後だ。そのときに、なにか言われるかもしれない。

仕方ない。

交渉してみようか。

せっかくのイベントだが、いいムードになるのはあきらめよう。
そのつもりで行けばいい。そう決めていけば、少しは気が楽だ。
すべては、……母と話した後。

花火大会の日は、せめていつきの浴衣姿にうつとりしよう。
そんなことを考えながら、家への道をゆっくりと歩いた。

#08 「いざ、花火大会」 <いつき>;

「そういう冗談はもういいよ。ホントはチューしたんでしょ？」

「冗談じゃないもん……ホントにしてないし」

隣の駅のショッピングモールで「大浴衣市」というイベントが開催されている。

友香は帰省中なのと、浴衣はおねえちゃんのお下がりがあるからいいというので千早と則子と3人で来ていた。

花火大会まであと3日。そのせいか売り場は若い女性でこったがえしている。

「あるわけないじゃん！ 鳥とか犬とか……」

私だつてそう思う。だけど、本当なんだから仕方がない。

「でもさあ、いいじゃない？ 他の男には見せたくない！」

則子がうつとりと言う。

「萌えるね。萌えちゃうね」

目がハートになっている。少し遠い世界へ行ってしまったような雰囲気だ。

「私もそんなこと言われてみたいよ。……プリンスだったらもう、火がついちちゃってるよね」

千早もウキウキとしている。

次のデートは水着で落とせ、というのが女子会で出た結論だった。プリンスに火をつけるのだ！ と3人は相当盛り上がった。

「水着でチューが一番よかったけどねえ。夕日を背景に、見つめ合つて……」

「いやらしい！」

則子がイヤイヤしている。他のお客さんが見ている。やめさせな

いと。

千早が肘でドンと腰をついてきて、ニヤニヤしながら言った。

「もうつきあってるみたいなものだね。いや、もう付き合ってるでしょ？ この状態は」

「ええ？ ううん……どうかなあ」

確かにあの時、玲二くんはキスしてこようとしてたと思う。

あの大きな音がなかったら唇が触れていたはずだ。そのつもりで、私も目を閉じた。

「……そう考えていいのかな？」

「いいんじゃないの？ デートして、チューしようとして、水着姿は独り占め……」

千早はまだニヤニヤしている。

「花火大会、2人で消えていいよ。どれがいいかな。ちょっと大人っぽいやつにしたら？」

「何言ってるの……」

まったく、そんなことばかり言ってくる。恥ずかしいっとならない。

「いや、やっぱり爽やか系がいいかな。いつきに1番似合うのはそういうのだよね。可愛いなって思ったらプリンスがさらってくれるよ、多分」

「いいね。いつきはプリンスだね」

則子の興奮も最高潮のようだ。

さらわれて……どうなるんだろう？ 考えて、また赤面した。まだ正式にお付き合いしてるわけじゃないのに。そんな展開はきつくない。でも、あったら……嬉しいな。

「あ、これなんかどうかなあ。似合いそうじゃない？」

千早が浴衣をあててくる。

「あ、可愛いよ、いつき！ 絶対似合う」

「そうかな……」

「じゃあこれ、第1候補ね」

広い特設会場の中を散々探して、みんなそれぞれの浴衣を買った。

同じショッピングモールにあるファーストフード店に3人で入った。売り場を散々歩き回ったのでおなががすいている。

「でさ、男子は誰が来るの？」

千早が目輝かせている。女子高はもちろん女子しかいないので、男の子と一緒にするのはひさしぶりらしい。

「プリンスと、葉山君だっけ？ あとは？」

「うーん、葉山君が教えてくれないんだよね。サプライズとかいつて」

メールで連絡をくれたけど、詳細はWEBで！ と書かれていた。よくわからないけどとにかく秘密らしい。

「そうなんだ。その葉山君ってのは、いい男なの？」

「うん。いい人だよ。なんていうのかな、ユーモアがある中に、ちよつと知的な感じもするかな？」

「へえ。見た目は？」

「見た目？ 見た目は……」

そんなこと考えたことなかったな。

「普通なのかなあ？」

「いつきの普通ってどのくらい？ プリンス基準にしてないよね」

「うーん……、そんなことなんて考えたことなかったから。葉山君はね、うーん、優しくて、明るくて、気が利く感じ」

思ったよりも褒め言葉が出て、それに2人が大きく反応した。千早が腕を組んで首をひねる。

「それってすごくいいんじゃない？ しかも知的でユーモアもある？」

そしてかなり真剣な顔で、ぼそつと続ける。

「プリンスよりいいかも」

「ええ？」

シヨックな一言だ。

「プリンスはさ、カッコイイけど無口で何考えてるかわかんないからちょっと近寄りがたいし、冗談通じなさそうじゃない？」

「明るくはないし、気が利くって感じでもないよね。」

則子まで乗っかってきた。

「もお……なんでそんなこと言うの!？」

頬をふくらませて抗議する。

「そんな風に思ってたんだ！ 人の大好きな人のことを！」

「冗談だよ、いつき、怒らないでよ！」

「だって幸せそうなんだもーん！」

2人の肩を、それぞれ叩いてやった。

「で、プール以来会ってないの？」

「デートに誘いなよ。毎日会えばいいのに」

2人がまた突っ込んできた。

「なんか忙しいみたいなんだよね」

メールを送ったけど、ちょっと会えないという残念な返事が返ってきていた。

「へえ。浮気かしらね」

「ちよつとやめてよ」

千早の意地悪い笑顔に、苦情を申し立てた。

「バイト先で出会った女子大生に誘惑されてたりして……」

「またそういうことを言う」

「いいな、いつき。私も早く彼氏が欲しい。その前に、出会いが欲しい」

哀しき女子高の生徒はテーブルに倒れこんで呟いている。

「則子はどうなの？ いい人いないの？」

「いるけど」

「えっ」

千早と声がピッタリ合ってしまった。

「今はね、『果てしない世界の真ん中で』っていう本に出てくる騎士のフレード様」

「ああそう……」

千早の反応は冷たい。則子の好きな人は今までも全員が架空の人物だったので、これはいつもどおりのことだ。

「ね、いつき、プリンスにフレード様の格好してもらえないかなあ……。絶対似合うと思うんだよね」

「この間もそんなこと言ってたよね」

以前突然メールで「プリンスとつきあうことになったら、着てほしい衣装があるからよろしく」と送ってきたことがあった。

「あの時は別のキャラを想定してたんだけどね。でも今はフレード様だから。いつきも見たら、絶対かっこいいって言うよ。絶対ね」

「コスプレってやつ？ 確かに、プリンスが着たらなんでもかっこよさそう。足も長いし、決まりそうだよね」

さっき散々ケチをつけたわりに、カッコいいことは認めてるんだな。

「私だったら、制服がいいな。いや、軍服とか？ すんごい似合いそう」

「千早、わかってるじゃん」

則子は嬉しそうだ。

「いつきはどう？ どんな衣装がいい？」

「衣装??」

玲二くんに着てもらいたい服？

「えー？ わかんないよ」

「コスプレはロマンだよ！ いつき！」

やたらと力強く言われてしまった。よっぽど好きなんだな。

「いつきが見たいのは白いタキシードじゃない？ 自分はウエディングドレスでさ」

千早がニヤリと笑って言った。

ウエディング……！？

「それは……、いいね」

でれでれ……とした笑いが出てきてしまった。
そんな日が来たら、どんなにいいだろう？

8月20日。とうとう花火大会の日だ。

お昼からみんなで、友香の家に集まった。

友香のママに手伝ってもらって浴衣を着る。

待ち合わせは4時。花火大会は6時スタートだけど、どう考えても混雑するだろうから早めに海岸の近くの公園で待ち合わせをしていた。

「どうする？ バスで行く？」

「歩いても行けるけど、30分も歩けるかな？」

「どうかな」。草履で足が痛くなるかも……。大体歩いたら汗だくになっちゃうし」

4人でわいわい話し合って、やっぱりバスで行くことにした。行く前に故障しては話にならない。

「みんな可愛いわね」

友香のママは笑顔だ。

着付けにくわえて、髪の設定もしてくれる女子の頼もしい味方。私もアップにもらった。

「いつき、バッチリだよ。こりやもう勝負は決まったね」
友香がニヤニヤして言ってくる。

「あら、いつきちゃん、今日勝負の日なの？」

「ええ？ …… うーん。それは内緒」

「いつきはもうあと一押しで念願の彼氏ができるんでーす」

千早が大きな声でママにバラす。

「そうでーす。6年間片思いしてきた王子様に今夜さらわれまーす
則子まで！

「ちよつと……やめてよ」

「……さらわれるのはどうかと思うけど。でも素敵ね、そんなに片
思いしてたの？」

ママの発言に、顔が赤くなる。

「うん」

「いつきちゃんにそんなに好かれるなんてどんな子なの？ カッコ
イイの？」

「立花君だよ……あのハーフの」

友香がズバリばらした。

「えー！ あの？ カッコイイ？ まーやだ、もう！ お似合いね、
美少年と美少女で」

おほほ、と笑い声が響く。

「すつごく可愛いもん。今日で決まりね」
肩をポンと叩かれる。そうだったら、嬉しい。

駅前に出ると、浴衣姿の女性がちらほら見かけられた。

4人でバスに乗り込み、待ち合わせ場所へ向かう。公園に着くと
もう酒盛りを始めている集団がいた。ここからでも、花火は見える
のかな？

「あ、いるじゃんプリンス。おーい！」

友香が手を振った先の奥の大きな木の下に、男の子の集団がいる。

「ちよつといつき……！」

千早がひじでつついてきた。

「あっ」

葉山君が元気よく手を振っている。その横に、玲二くんもいた。

浴衣着てる……！

なんとも上品な渋い青の浴衣姿で、立っていた。

ものすごくカッコいい！

マンガだったら、目と心臓がハートになって飛び出しているところだ。

「おう！ 待ってたよ。園田ちゃん、友香ちゃん」

葉山君がにこやかに出迎えてくれる。申し訳ないけど、玲二くんしか目に入らない。

「玲二くん……」

声をかけると、なんとも柔らかい感じで微笑んだ。こっちに近寄ってきて、じっと見つめてくる。

「園田。浴衣、似合ってる」

「……玲二くんも」

「ちよつとそこ、いきなり2人の世界に入らない！」

葉山君が厳しく注意を飛ばす。

「まだ自己紹介終わってないからね」

そうだった。男子は2人がサプライズなんだった…。

「はい、じゃあ紹介します」

そういつて、葉山君はまず自分を紹介した。

「玲二はいいよね。みんな知ってるんでしょ？」

全員頷く。

「こちらは2組の島谷くん。陸上部だから、友香ちゃん知ってるよね。こっちは5組の澤くん。俺の中学からの友人です」

これがサプライズなのかな？

と、思ったらなんだか友香がちよつと動揺しているように見えた。

自分たちも順番に、自己紹介をした。葉山君が私は予約済みだなどと余計な一言を言ってくる。

「じゃ、行こうか？」

葉山君が言うと、男子が先に歩き出した。

「ゆうか……」

そつと声をかけてみる。

「なに？」

「どうかした？」

「……」

2人で歩くスピードを落として、集団からちよつとだけ離れた。

「島谷くん、ちよつと気になってるんだよね。実は」

「えー？ そうなの??」

それは知らなかった。言ってくれたらいいのに。人のことはあれだけやいやい言うくせに。

「それ知っててなのかな……。ちよつと葉山君おそろべしなんだけど」

サプライズって言ってたもんね。そんな調査をしていたのかな？

「あつちの澤くんはどうなんだろう？」

「さあね……」

隠し玉って考えていいのかな？ でも、バランスのいい4人だ。

クールでカッコイイ玲二くんに、爽やかなスポーツマン風の島谷君、いい人そうな葉山君に、ちよつとほんわかった感じの澤君。

「じゃ、友香も今日は張り切らないとね」

「やめてよ」

今までのお返しだ。えいえいと背中をつついてやった。

少し早足にして、みんなに追いつく。

そつだ、玲二くん。浴衣で来てる。

「玲二くん」

素敵な王子様が振り返る。

「浴衣で来たんだね。ちよつとビックリしちゃった」

「うん。良太郎のばあちゃんが作ってくれてさ」

「葉山君の？」

「家の掃除を手伝ったらお礼に作ってやるって言われて……」

玲二くんはそう言つて笑つた。今日もキレイな笑顔だ。

「3日間、葉山家を掃除してきたんだ」

そうだったんだ。それで、会えなかったのか。

「玲二にあう浴衣なんてあんまないでしょ。背も高いし足も長いし。そこでオーダーメイドだつて思つてね。いいでしょ。気が利くでしょ？」

葉山君が間に入ってきた。

「でさ、園田ちゃん、俺も浴衣なんだけど。そつちはノーコメントなの？」

確かに、葉山君も浴衣姿だ。

「え？……なんか自然すぎて、気がつかなかった」

「うーん。それは和服が似合つてほめてもらったと思つていいのかな？」

「じゃあ、それで」

玲二くんが笑う。葉山君はちよつと渋い顔をしたけど、特に文句は言われなかった。

玲二くんと並んで海岸へ向かつて歩く。

友香は島谷君と話しているようだ。気がつくと、則子は澤君と楽しげに話している。千早は仕方なくなのか、葉山君となにやら会話しているようだ。

「あの澤くんって、どんな人なのかな？ 玲二くん、知ってる？」

「ああ……なんか、職業はコスプレイヤーだつて言つてたよ」
なるほど、楽しいわけだ。

「葉山君、私立探偵かなにかなのかな……」

おそるべき調査能力、なんて思ってしまう。

「澤は、磯部さんと知り合いだって言ってたよ」

「え？ そうなの？」

「たまたまわかつたんだって」

「へえ」。則子があんな風に話してるなんてすごいって思ったけど、それなら納得」

則子が男の子と話しているところは、今までほとんどみたことがない。

すごく楽しそうに盛り上がっている。しかし、どこで出会ったんだろ。そういう集会があるとか？ 仮装パーティとか……なのかな。

「友香は島谷君のこと気になってたんだって」

小さい声で教える。

「へえ」

こんな他愛のない話にニツコリ笑った。なんだから、今日は機嫌が良さそうな感じがする。

「園田、今日もすごく可愛い」

「……」

なんだから、本当にご機嫌そうだ。

「この髪も似合ってる」

手が伸びてきて、髪に触れた。

……なんだから、信じられない。ちょっと、らしくない気がする。

「どうかした？」

「うつん。……照れちゃっただけ」

見あげると、優しくそうな顔で微笑んでいる。

なんか、調子が狂っちゃうな。

玲二くんの視線をずっと感じて、頬が熱くなる。どうしたんだろ

う、今日は……。

葉山君がかけた声にも、笑顔で答えている。いつもよりもずっと楽しそう。

なんだかテンションが随分高いみたいだ。

海岸へたどりつくと、既に大勢の見物客でごった返していた。

「ありやあ……、遅かったかな」

葉山君の小さい声が聞こえた。

出店もたくさん並んでいる。祭りの定番のメニューの匂いが、色々と漂ってきた。確かに大混雑しているけどなんだかウキウキしてくる。

「りんご飴、あるかなあ」

「りんご飴？」

「知らない？ りんごまるごと1個、飴にしてあるんだよ」

「へえ……」

玲二くんは興味深げに、きよるきよるとあたりをみている。

「お祭りとか、来たことないの？」

「小さいころに何回かあるよ」

浴衣を着てウキウキしている様子は、なんだか外国から来た観光客が初めて祭りに来ました、みたいな雰囲気だ。

「ダメだな、もういいところは場所取られちゃってる」

葉山君の言うとおり、見学用のエリアにはあちこちにブルーシートが置かれていて、もう宴を始めているグループがたくさんいた。それに、島谷君が爽やかに答える。

「しょうがないよ。あっちの高いところで見よう」

前日どころか、何日も前に場所を確保してような人たちもいるだろう。そこまでの情熱や時間は、高校生にはちよつとないものだ。海岸の少し上の方へ行く。次から次へと、人が増えていく。

「園田」

声と同時に手が伸びてきて、右手をぎゅっと握られる。

「はぐれないように」

あわわわ……。

どうしちゃったんだろう、今日は。いつになく積極的じゃない？
手をつないでるのに気がついて、千早がまたドンと肘で突いてきた。
た。

「今日で決まりだね」

小さい声で囁いてくる。

「これあげる。乙女のお守り」

なにか小さい袋を渡された。

「なにこれ？」

「お守りだよ。今はしまつといて」

言われるままに、持ってきた巾着に入れた。後ろから友香も顔を
出してくる。

「ちよつといつきちゃん……暑いわね」

その声に、玲二くんがこちらを見る。なんだか余裕の微笑だ。

「あらま」

そう言つて、友香は下がっていく。

なんだかんだ、自分も島谷くんと並んで歩いている。いい雰囲気
だ。

2人で一緒に、りんご飴を買った。

「大きいな」

「確かにね」

りんごがまるごと1個。ダイナミックなおやつだ。並んで、少し
かじる。手はつないだまま。

なんだか、カップルみたい。みんなが言うように、もうカップル
ってことでいいのかな。

玲二くんをちらつとみると、ガリつと飴をかじっていた。

「もうすぐスタートだぜ」

葉山君の声がした。ここに来てからもう2時間弱。正直言つと、ちよつと疲れていた。人もすごく多い。

でも、こんな風に手をつないで一緒に花火が見られると思うと、ワクワクする。

「ねえ、玲二くん」

顔を見上げる。楽しみだね、と言いたかった。

あれ？

「どうしたの？ 顔色が悪いけど……」

顔が、明らかに青くなっている。

「玲二くん？」

返事はない。どうしたんだろう？

白い大きな手に持っていたりんご飴が落ちる。

「玲二くん!？」

私の声で、みんなも振り返る。

「どうした？ 園田ちゃん」

「いつき？」

玲二くんはいきなり、前に倒れてしまった。

「きゃああ!」

周りの人が慌ててよける。

「どうしたの!？ 玲二くん! 玲二くん!」

体をゆさぶってみる。でも、反応はない。

「おい、玲二! どうした??」

葉山君の声にも、答えはない。周りがざわざわしだした。

玲二くんは真っ青な顔をして動かない。

「息はしてる？」

島谷君がしゃがみこんで、倒れている細長い体を仰向けにした。顔だけ横に向けて様子を見ている。

「すみません、ちよつとよけてください！」

周りでなにかと様子を見ようとするほかの客を制している。島谷君、ちよつとかつこいい。

「息はあるね……。何か食べてたでしょ？」

「うん、りんご飴だけど」

それをうつかり喉に詰らせるようなキャラではないはず。いや、でも今日は妙にハイテンションだった。そんなことだってあるかもしれない、けど……。

「おい、玲二……しつかりしろ！」

葉山君が一生懸命耳元で呼びかけている。

周りのざわざわが大きくなっていく。

「道をあけてください！」

誰が知らせたかわからないけど、救護とかかれたヘルメットをかぶった人たちが担架を持ってやってきた。

「どうしました？」

玲二くんの横にしゃがんで、事情を聞いてきた。

「わかりません……。突然倒れたんです」

「これは？」

よく見たら、頭に擦り傷がある。

「倒れた時についたのかも。さっきまではなかったです」

「頭動かさないように！」

救護班の人が手際よく、細長い体を担架に乗せた。

「俺、ついていくよ」

葉山君は真剣な顔だ。

「私も……」

「あんまりいっぱい来たら困っちゃうよ。誰か代表1人だけでいいかな？」

「じゃあ園田ちゃん、行つて」

「わかった。後で連絡するね」

みんなを置いて、急いで救護スタッフを追った。

海の近くの公民館の中に、花火大会用の救護室が用意されていた。玲二くんはベッドに寝かされている。

その横に座り、手に持った大きなりんご飴に気付いてどうしたのか悩んだ。

お医者さんが隣に座つて、飴をちよつと下の方に持ったまま問診に答える。

「うーん……、突然、倒れたんだよね？」

「はい」

「なにか、持病があるとか、聞いてる？」

「いえ……、聞いたことないです」

「そうか。血圧も脈も正常なんだよね。とりあえず、ちよつと様子を見ようか。あんまり目が覚めないようだったら、搬送するよ」

「はい……」

外からドーンという音がして、続いて大きな歓声も聞こえてきた。始まつちやつたねえ」

初老の医師がにこやかに言った。

みんなは見てるかな？ でもこの状況じゃあ、花火を楽しむどころじゃないだろうな。

しょんぼりした私を見かねてか、お医者さんはまた口を開いた。「ガールフレンドが可愛すぎて、頭に血がのぼったんじゃないかな？」

青くなつてたけどな……。

でももう、顔色は悪くない。

そこに、新しい患者が連れてこられた。転んだり、人混みで気分を悪くする人が結構いるらしい。

「ちよつとごめん、診てくるね」

「はい」

しきりになるカーテンを閉めて、お医者さんは次の患者の元へ行っってしまった。

「玲二くん……」

どうしちゃったんだろう？

確かに、今日はちよつといつもと様子が違っていた。やたらとご機嫌だった。いつもだったら、照れちゃってできなさそうなことをしていた。

じゃあさつきお医者さんが言ったとおり、のぼせたとか？

ベッドの横にあるパイプ椅子に座って、玲二くんの手を握った。

……そういえば、寝顔って初めて見た。

寝顔も凜々しい。長いまつげが、キレイ。

うつとりしている自分を咎めるように、携帯が短く鳴った。りんご飴を持ったまま、確認する。

友香だ。

プリンス大丈夫؟؟ どうなった？

心配して当然の状況だ。すぐに返信する。

まだ目が覚めないの。今様子見中です。

今はただそばについているしかない。

そうだ、今はいいとして帰りはどうしよう？　こんな風に倒れたのに、ぎゅうぎゅうのバスに乗ったり、歩いたりして帰れるかな？　それより、玲二くんのおうちに連絡するべきじゃない？

電話をかけようと立ち上がったけど、そういえば家の番号はわからない。

困ったな……。

そうだ。卒業アルバムとかに書いてあるはずだ。家に連絡して、お母さんに聞こう。

救護室の外に出て、家に電話をかけた。

『あら、いつき。どうしたの？　花火でしょ？』

『それがね、ちょっと、立花君が倒れちゃって……』

外は花火の音と歓声で騒々しい。何度も声を大きく、言い直して、ようやく状況を説明できた。

『わかった。お母さんが連絡しておくから。待つてなさいね』

確かに、ここからかけても相手にも聞こえづらい。

『じゃあ、あとはメールにして。やかましくて聞こえないから』

『わかった！』

電話を切って救護室に戻ろうとしたところで、入り口にゴミ箱が設置されているのに気がついた。少し残念だったけど、りんご飴をそこに放り込む。玲二くんの横でガリガリするわけにもいかないし、今はさすがに食べる気にもなれない。

カーテンの内側へ入ると、王子様はまだ目を閉じたままだった。

「玲二くん……」

もう1度、手を握った。

早く目を覚まして……。

玲二くんが今までに学校を休んだことなんて、記憶にはない。倒れたなんていう大事件も過去に起きた覚えはなかった。

外の盛り上がりは、最高潮になっている。連発して花火が打ち上げる音が響いて、歓声もそれに続く。

救護室には切れ目なく患者がやってきているようだった。医師やスタッフも忙しそうに動いている気配がする。

心の中に、ふっと悪魔のささやきが聞こえた。

王子様は、お姫様のキスで目覚めるんじゃない？

そんなことを考えた自分に、赤面した。

あんまり寝顔を見つめすぎたせいかな？ 自分の幼稚な発想に少し、呆れる。

玲二くん。

私の王子様……。

そう考えると、胸がドキドキしてきた。本当に、キスで目が覚めないかな？

そつと顔を近づけてみた。

くるつと振り返って、誰か来ないか確認する。スタッフはバタバタと忙しそうだ。

内なる悪魔が、また囁く。

せつかく楽しみにしてた花火大会が台無しだよ！だから、キスの1つや2つ、お詫びにさせてもらえ！

それはナイスアイデア！ なーんて考えちゃったりしてみたりなんかしちやったりして？

そうだよ。遊園地の時、鳥に邪魔された分だっと思えば……。

ドキドキが勝手に最高潮になる。

だって目の前に、玲二くんの顔がある。やっぱり、大好きな顔だ。あの凛々しくて、優しい目が大好き。でも、閉じていても、すごくキレイ。

キレイな王子様の唇に、自分の唇をそっと重ねた。でもすぐに離す。

わあ。

キスしちゃった……。

後ろを振り返って、様子を伺う。誰か来る気配はない。

こんなドサクサにまぎれて、私、なにやってんだろう！

だけど、……すごい達成感。玲二くんの唇、あったかい。柔らかくて、なんだか、すごく……

もう1回、したい。

そつと顔を近づける。玲二くんの目は閉じたままだ。自分も目を閉じる。そつと、また重ねる。

今度はもうちょっと長く……。

花火の音が、響いてくる。

玲二くん……。

そつと唇を離して、目を開ける。

薄茶色の瞳が、ぼんやりとこちらを見ていた。

「わああ!!」

大声をあげて後ろに下がると、パイプ椅子にぶつかって、転がって一緒に倒れてしまった。

「どうしたの!？」

大きな声と音に、救護スタッフが慌ててやってきた。アホみたい
に椅子と転がっている私に手が差し出される。

「いや、あの、なんか転んじやって……」

「ケガはない？」

「ないですないです!」

それよりなにより、恥ずかしい。体より心の方が痛い。

「あ、目がさめたの？」

目覚めた王子様に気がついて、スタッフが声をかけている。

「……はい」

いつもの玲二くんの声だ。慌てて立ち上がる。でも、どうしよう。
顔が見られない……!!

「先生、せんせーい!」

「ちよつと待ってね」

お医者さんの声がした。

同時に電話も鳴る。あわててメールをチェックした。差出人は
兄ちゃんだ。

連絡しました。今から迎えが行きます。 母

お迎えが来るんだ。よかった。

玲二くんのお父さんかお母さんが来るのかな……。また、ドキが加速し始める。どんな顔をして会えばいいんだろう！？

お医者さんはえっちらおっちらやってきて、笑顔を見せた。

「よかったよかった。気分はどうだい？」

「……大丈夫です。なんともない、です」

「突然倒れたらしいけど、覚えているかい？」

「なんとなく……ちよっとおなかの辺りが急にちよっと」

「おなか？」

「殴られたみたいな衝撃があつて」

「ふうん」

何で倒れたのかはわからないけど、受け答える様子はいつも通りの玲二くんに見える。

良かった。もう、大丈夫かな。それよりもさっきのことを気付いているのかいないのか……。

そうだ。みんなにも伝えないと。代表として友香でいいかな？

玲二くんが目覚めたことと、迎えが来るから心配ないということを書いて送る。

メールを打ち終わると、玲二くんが立ち上がっていた。よかった。本当に大丈夫そうだ。

「明日、念の為に検査に行くといいんだけど……」

お医者さんがそう言つて、こっちに振り返る。

「お嬢さん、頼んでいいかな？」

「え？ えっ、はい」

いきなり話を振られて、焦る。でも、玲二くんの健康管理をまかされたような気がして、ちよっと嬉しい。

「一応ね」

「……わかりました」

お医者さんはまたスタッフに呼ばれている。

「もう帰るのかな？」

「あの、迎えが来るので……」

「ああそう。じゃあ安心だね」

につこり笑うと次の患者の元へ行ってしまった。2人でお礼を言
って頭を下げた。

安心したらさっきぶつけたお尻がちょっと痛くなってきた、腰の
辺りを手でさすった。

#09 「抵抗してみる」 &It;玲二>;

「玲二くん、いきなり倒れたんだよ……」

いつきは真つ赤な顔で、でも心配そうに話しかけてきた。

「ごめん……迷惑かけた」

「迷惑じゃないよ！ 心配したけど」

りんご飴をかじったところまでは覚えている。こんなに大きいのも、全部食べられるのかなと思った。

その次の瞬間、いきなり頭を殴られたような衝撃があった。次は腹だ。こっちも、なんだか殴られたような感覚があった。

ただ衝撃があつて、そこで意識が途切れてしまった。

気がついたら、いつきの顔が目の前にあつて……。

今はなんともない。立って歩けるし、気分も悪くはない。

「大丈夫なの？」

いつきはなぜか、耳まで赤い。

「大丈夫だよ。気分も悪くないし」

「でも、倒れたんだよ。無理しないで……」

心配されるのも無理はない。俺だって突然いつきが倒れたら、その後元氣だと言われても無理はさせないだろう。

「……みんなは？」

「ここに全員でついて来られなかったから、私だけなの。さっき目が覚めたことは伝えたから」

そこでちょうど携帯が鳴った。ピヨピヨと可愛いメロディだ。

「友香からだ。……わかった、だって」

いつきはパタンと電話を閉じる。

「あのね、今、お迎えが来るから。玲二くんはもう帰ろう？」

「お迎え？」

「お母さんに、玲二くんの家に連絡してもらったの」

では誰が迎えに来るんだろう？

疑問に思ったが、その答えはすぐにわかった。

「いつき！」

救護室に、大きな声が響く。

「お父さん！」

カーテンが開き、水族館の館長とそっくり、いや、あれよりもちよつと強面の男が入ってきた。

思っても見なかったお父さんの登場で、全身に緊張が走る。

「どうしたの……」

「どうしたもなにもない。迎えに来たんだ」

「え？」

「立花君だね？ 大丈夫かい？」

「……はい」

背筋がピンとした。伯父さん以上に迫力のあるお父さんだ。

「君の家に電話したけど、誰も出ないんだ。家族は今日はいないのかい？」

「……父と母は、今海外に行ってるんです」

「何？ じゃあ家には誰もいないのかな？」

「ええ」

いつきの父は腕を組んで、うーんと唸った。娘とは驚くほど似ていない。

「じゃあ、うちに来なさい。いきなり倒れたのに、一人で帰せない」

「えっ！」

自分のかわりに、いつきが驚いた声をあげた。

「そんな……大丈夫です」

慌てて辞退する。家につて……さすがにそれは。

「遠慮しなくていい。うちには男ばかり5人もいるんだから。1人くらい増えたってどうということはない」

そういう問題ではない。男ばかり5人よりも、隣の美少女がいることが問題だ。

「夜中にまたなにかあったらいけないだろう？　せめて明日の朝まででもいいから、うちに来なさい」

その言葉をきいて、ちよっと戸惑っていた様子のいつきも心が変わったようだ。

「そうだよ、玲二くん。また倒れたりしたら、1人だと危ないよ……」

「でも」

いつきの父は、力強く肩をバンと叩いてきた。

「君を信用して言ってるんだ。いつきがいるからって遠慮しなくていい」

勿論、間違っても彼女の部屋に侵入しようなんて思っていない。

「じゃあおいで」

いつきの父に肩を抱かれて外へと押し出されてしまった。途中、医師とスタッフにお礼なんかも言っている。

園田家の大きな車になかば無理やり乗せられ、家へと連れて行かれた。

家につくと、いつきの母がなぜか大歓迎してくれた。

「いらっしやい、立花君！　大変だったわねえ」

ニコニコとした笑顔がいつきによく似ている。なるほど、DNAのほとんどはこちらから来たらしい。

「道、混んでなかった？」

「まだ花火大会の途中だったから。大丈夫だった」

父が答える。顔だけではなく、声まで渋い。

「あがりなさい」

今更走って帰るわけにもいかない。仕方なく、園田家に足を踏み入れた。

リビングへ通されると、いつきの兄たちが3人いた。

「将二、幸四、あー、一基か。こちらは立花君。いつきのボーイフレンドだ」

ボーイフレンドという言葉に、少し照れそうになる。なんとなくいいかわからず、とりあえず黙って頭をさげた。

「いつき……お前、なんだそりゃ！馬子にも衣装だな」

意地悪なセリフを言ったおそらく2番目の兄の頭が、他の兄にパッと叩かれる。

「今日は事情があつて、家に泊まるから。客間を使うぞ」

父のセリフに、兄たちの間に微妙な空気が流れた。

「あの、お世話になります」

こうなったら仕方がない。なんとかやり過ごすしかない。

泊まることになった客間に通されると、兄たちがせつせと布団などを出してくれた。なんとも恥ずかしくて居心地が悪い。

「倒れたつて？」

「……ええ」

どうやらこの人は、一基と呼ばれた1番上のお兄さんのようだ。

顔は父親にそっくりだが、穏やかそうな雰囲気で少し安心する。

そこに、着替え終わつたいつきが現れた。まだ髪型はお団子のままだ。

「玲二くん、これ、着替え」

「ありがとう」

新品のTシャツと短パンを渡される。

「これ、お兄ちゃんたち用のストックだから。新しいし、遠慮なく使って」

一基も笑顔で頷いている。仕方ない、これも使わせてもらおう……。いきなり泊めてもらうのに、澄ました浴衣姿で必要以上に浮きたくはない。

着替えを済ませたところに、いつきの母が声をかけてきた。

「ご飯食べれる？ 大丈夫なら、食べておきなさい」

食べれる？ と聞いてはきたが、答える前に手を掴まれ強引に食卓へと連れて行かれる。

大きなテーブルに料理が大量に用意されていた。いつの間に戻ったのか、それとも部屋にでもいただけなのか、園田家の兄弟が全員揃っていた。

「立花君、こっちが恵三で、こっちが六実」

ペコリと挨拶する。どうやらみんな数字が入っているので、順番がわかりやすくていい。

六実と呼ばれた唯一の弟が興味津々で声をかけてくる。

「姉ちゃんの彼氏？ っていうか外人？」

いつきが怒って手をバシッと叩く。

「じゃあ、食べようか！」

みな揃って挨拶をし、食事がスタートした。

男が6人もいると、食事の量は相当なものになるようだ。

「立花君、食べなさい」

隣に座ったいつきの母が勧めてくれる。確かに空腹だった。どかんと皿に積まれたから揚げをひとつつまむ。

「おいしい？」

「はい。おいしいです」

「よかったわ」

いつきの母は笑顔だ。娘とそっくりで、なんとも可愛らしい。

「いつもこんなに作るんですか？」

「そうよ。もう大変。毎日戦争」

そうついいながらも笑顔のままだ。見た目だけではなく、性格もそ

つくりな母娘なんだろうな。

「ねえねえ、立花君は外国人なの？」

まだ六実が聞いてくる。

「半分ね。日本とドイツのハーフだから」

「ハーフ？ かあっこいい！」

どうやら弟は少しお調子者のようだ。

「ねえねえドイツ語話せるの？」

「……話せるよ」

「まーじーでー！？」

「あらそうなの？ すごいわねえ」

お父さんは黙々と食べている。一基は微笑を浮かべている。将二はなにやら様子を伺うような感じだ。

「ドイツで暮らしたこともあんの？」

3番目の兄の、恵三も話に入ってきた。

「いえ……ないです」

「それでドイツ語もしゃべれちゃうわけ？ すごくない？」

こちらは4番目の幸四だ。

食事の間中、質問攻めにされてしまった。

いつも、立花家の食卓は実に静かだ。この1ヶ月はその静かな家族ですらいなかった。

こういうのも、たまにはいいのかもしれない。

それにしても、いつきの兄弟たちはみな父親似らしい。皆とても男らしい、ちょっと濃い顔立ちをしている。

いつきだけが可憐な花のように可愛らしかった。

なんだかんだと風呂まで入られ、客間で就寝することになった。「気分が悪くなったらいつでも呼びなさい。隣にいるから」
迫力満点のお父さんのセリフに、おとなしく頷く。

夜中にこっそり帰るわけにはいかないだろう。ここまでよくしてもらって、そんな恩知らずなことをするわけにはいかない。

横になると、畳の香りがした。布団で寝るのは中学の修学旅行以来だ。

目を閉じる。

今の状況を思うと、小さく笑いがこみあげてきた。

とにかく、いつきの家族から敬遠されるようなことはなさそうだ。それはいいことに思える。まさかいきなり泊まることになるとは思わなかったけど。

お父さんと伯父さんは、ほとんど同じ顔をしている。もう1人の伯父さんも、同じ顔だろうか？ いつきが、お父さんにそっくりにならなくてよかった。

……そうだ、着替え。

良太郎の家に置きっぱなしだ。明日、寄らないといけない。その前に、連絡しないと……。

気がつくと、深い森の入り口に佇んでいた。

振り返ると見覚えのある家が並んでいる。母の故郷だ。深い深い森の奥。祖父母たちの暮らす場所。

再び森のほうを向くと、目の前に自分が立っていた。穏やかな優しい表情をしている。

「玲二、いつきのこと、好き？」

そう、問いかけてきた。

「……ああ」

好きだ。好きどころじゃない。もう、彼女がいない生活なんて考えられない。

目の前の俺は、じっと瞳を見つめてくる。

なにもかも、全部見透かされているような感じがした。でも、イヤではなかった。

むしろ、すべてを理解してもらえている、安心感のようなものを感じる。

「わかった」

もう1人の自分は、優しく微笑んだ。

見覚えのない天井が目に入る。

そうだ、ここは、いつきの家だ。

カーテンの向こうはもう明るい。部屋の奥のほうから音がしている。これはきつと、朝食の準備の音だ。起き上がって台所の方へ向かった。

「おはようございます」

「あら！ 立花君おはよう。……気分はどう？」

「大丈夫です」

「よかったわあ」

優しい笑顔だ。いつきも20数年後くらいに、こんな感じになるのかな？

「朝ごはんもうすぐできるから」

いただいていいものだろうか？ でも、おそらく断ること

はできない。

「あの……」

「ちゃんと食べていつてよ？ 今帰ったら許さないからね」
先手を打たれてしまった。

「ありがとうございます」

「もうね、立花君みたいになかつこいい子なら、大歓迎なんだから。
もう1日いてもいいくらい」

それはさすがにできない。心が消耗してしまう。

「おはよ」

いつきがあくびをしながら入ってきた。

「ちよつといつき、着替えてらっしゃい！」

振り返ると、Ｔシャツにショートパンツ姿だ。もちろん可愛いが、
ちよつとだらしない。ついでに言っていていいなら、生地が薄すぎる。

「ん？ あっ！」

いつきはうつかり昨日宿泊することになったクラスメイトに気が
ついて、慌てて180度回ると部屋へと戻っていった。

「も、ごめんなさいね。みつともないところ見せちゃって！」

「いえ……」

すぐに兄弟全員が揃って、朝食が始まった。

全員にスケジュールを確認したり、わいわいと大騒ぎだ。そして
あの強面のお父さんの姿はない。

「お父さんは？」

いつきが聞いた。

「出産よ」

出産……？ もしかして動物の出産のことだろうか。兄弟たちは
ふーん、くらいの表情だ。

一基が声をかけてくる。

「立花君は、大丈夫？ 調子はよくなった？」

「はい、大丈夫です」

その隣から、2番目の兄の微妙な視線を感じる。

「後で送っていいとか」

「どうやら、1番上の兄は結構な紳士らしい。」

「いえ、遠くないし、大丈夫です」

「送っていくわよ。大丈夫、一基の運転は丁寧だから」

さすがにそこまでしてもらうわけにはいかない。

「いえ、10分もかかりませんから。もう気分もいいし、大丈夫です」

「そう？ ご両親は、いつ戻るの？」

「明日です」

いつきの母はうーんと考え込んでいる。

「母さん、いいんじゃない？ 立花君だって家の方が落ち着くですよ」

「そうねえ。まあ、一基が言うんならねえ」

娘と同じ笑顔で、いつきの母は言った。

「じゃあ、なにかあったら連絡してくれる？ 遠慮はいらないからね」

はい、と返事をした。助かった。これ以上はさすがに落ち着かない。

食事を終え布団の片づけをして、園田家を後にした。

「私、一緒に行こうか？」

いつきが少しまだ心配そうに言うてくる。

「大丈夫だよ……」

ここからは少し、声を落として話す。

「俺、この格好ちょっと恥ずかしいから……走って帰る」

借りたTシャツと短パンに、足元が下駄だ。あんまり人に見られたくない。

「そっか」

いつきがふふつと笑った。

「わかった。気をつけてね」
「ありがとう」

いつきの母と兄たちに何度もお礼をして、角を曲がってから走って帰った。

カランコロンと場違いに鳴る下駄の音がやかましい。

良太郎に連絡をすると、今日は家にいるから来いと返事があった。着替えて、すぐに出かける。

「玲二よ、心配したぜ！」

つくなり、良太郎が熱く抱きしめて歓迎してくれた。

「大げさだよ」

「大げさじゃねえよ。何の前触れもなく倒れたんだぞ。普通じゃないだろ？」

確かに、あそこまでは絶好調だった。なんだかきざったらしいことも平気で言っていた気がする。

「これ、借りてた下駄」

「おう！ これお前の服な。靴も入れといた」

たたまれた服が入った紙袋を渡される。靴はビニール袋の中で窮屈そうだ。

「ちよつとあがつて茶でも飲んでいけよ。暑かったろ？」

「……でも」

「ばあちゃんと母ちゃんも心配してたからさ。顔見せてって」

葉山家にはこの5日間毎日来ていた。

いきなり呼び出されて採寸され、浴衣を作ってやるから掃除を手伝え、と命令を受けたのだ。良太郎の祖母があまりにも優しくよくしてくれたので、そんな強引なやり方も断りきれなかった。

母も、かっこいい友達がやってきたと大興奮する。そして姉2人もしょっちゅうのぞきに来た。園田家と逆で、こちらは女性だらけ

だ。

「わかった」

そういわれてしまつては断れない。葉山家の面々に挨拶をし、良太郎の部屋へ入った。

「昨日あれからどうしたの？ 病院行つた？」

「行つてない」

「行つたほうがよくねえ？ なんか重大な病気だったら……うつ……」

わざとらしく泣きまねなんかしている。

病院へは行きたくない。いや、行けない。これまで病気をしたことなんかなかった。風邪ひとつひいたことがない。そしてなにか病院へ行かなければならない時には、必ず母に相談してからと念を押されていた。

どうしてなのか疑問に思っていたが、今ならわかる。人間ではないからだ。詳細な検査は、ピンチにつながる。そういうことなんだろう。

「じゃあ昨日、家に帰つたのか？ まだ家族誰もいないんだろ？」

「……ん？ うん……」

「あれ？ 迎えて誰が来たの？」

良太郎は鋭い。相変わらず鋭い。とぼけた顔をして、実に油断のならない相手だ。

「玲二……お前にか隠してるだろ」

「園田のお父さんが来てくれた」

隠しても無駄だと判断して、正直に告白する。

「マジで？ 園田ちゃんの？ ……へえ」

良太郎はニヤニヤとこちらを見ている。さすがに泊まつたことは秘密だ。

「それより、昨日は心配かけてごめん。みんな、花火見られたのか？」

なんとか話題をそらそうと努力を試みる。

「ん？ ああ、心配したけどなあ。一応なんとなく、盛り上がって
みたりはしたよ」

「そうか」

それならよかった。安心したところで、意外な事実を告げられた。

「お前、プリンスって呼ばれてんだな。笑ったぜ」

「は？」

「友香ちゃんたち、お前のことプリンスって呼んでたよ。玲二は、
園田ちゃんの王子様なんだって」

顔がカーッと熱くなっていく。それは……初耳だ。

「知らなかった？」

「当たり前だろ……」

王子様って……。そんなことを言われているとは、まったく驚き
だし恥ずかしい。

「で、お父さんには挨拶したの？ いつきさんと清い交際をさせて
いただいてます！ ってさ」

「……するわけないだろ」

さっきの努力は無駄だったらしい。あっさりと話題がまたここに
戻ってきてしまった。

「なんだよ。まさかもう、清くない関係なの？」

「付き合ってるわけじゃないから」

「はあ？」

大きな声だ。ちょっと咎めるような雰囲気。

「千早ちゃんはその言ってたけど」

「それは、勘違いだろ……？」

「玲二よ」

良太郎は腕組みをして、首を横にぶんぶん振った。

「お前バカだろ？ メロメロじゃねえか、園田ちゃんに」

その言葉で、また頬が熱くなるのを感じた。

「赤くなってる場合か？ 今すぐ言ってちゃんと返事して来いよ。」

あんな可愛くていい子待たせるなんて鬼じゃねえの、お前」

言葉がいちいち心に突き刺さる。

「……好きなんだろ？」

じいっと、目を見られた。なぜだろう。嘘は通じない気がする。

「……ああ……」

返事をして、改めて自分の心が確認できた。親友の目を見ていられなくなり、うなだれてしまう。

「すげえ好き」

「やっぱりなあ。正直に言えよ、玲二。今すぐ行ってチューして来いよ」

その言葉に、更につくりとうなだれる。良太郎が、怪訝な顔をした。

「なんだ？ そんなに意気地なしなのか、お前」

「そうだな。俺は、意気地なしだ……」

言えるものなら言いたい。一緒にいたい。キスしたい。それ以上のことだって……したい。

「なんだよ、なんかあるのか？ 玲二」

「……ある。俺は、園田には……好きだって言えないんだ」

心の深いところにしまつてあつた誰にも言えない、秘密。

必死で抱えてきたが、少し疲れてしまったのかもしれない。つい、口からこぼれおちてしまった。

「どうしたんだよ……なんだよ。玲二」

自分の様子に、良太郎も戸惑っているようだ。

「親友の俺にも言えないのか？」

「……ああ。言えない。ごめん、良太郎」
「そうか」

しばらくの沈黙の後、良太郎が呟いた。

「どんな理由があつても、俺はお前のこと応援するよ」
顔をあげて、友を見た。真剣な顔だ。

「いつでも味方にいるからな」

どうやら、良太郎は本当に自分の親友だったようだ。まだ出会って4ヶ月だというのに、なんて深い友情だろう。自分は、同じように友情を返せるだろうか？

「ありがとう」

礼を言つて、立ち上がった。

「帰るよ。なあ、良太郎……」

「何も言わなくていいよ、玲二」

力強い声だった。母と祖母にも挨拶をして、葉山家を後にした。

次の日、両親が家に戻った。かわりはなかったか聞かれて、なにもなかったと答えた。

なにかお土産を園田家に持つていこうと思ったが、あまり気の利いたものはないようだ。

2人は荷物を片付けたり、洗濯を始めたりにして落ち着かない様子だ。もちろん手伝う。夜は休み中の経験を活かし、全員分の夕食を用意して久しぶりに食卓を3人で囲んだ。

次の日の朝、決意をした。階段を降りながら考える。
なんて切り出す？

……まあいい。セリフなんてなんともなるだろう。

両親は揃ってリビングでコーヒーを飲んでいる。

「玲二、どうした？　なんだか顔色が悪いな。風邪でもひいたか？」
父さんが言い、母さんが続ける。

「違うわよ。恋してるのよね、玲二は」

父さんが驚いた顔でこちらを見た。やはり、わかっていた。意を決して前へ進む。

「そうだよ」

一瞬父さんが少し嬉しそうな顔をしたが、母さんにジロリとにらまれて真顔に戻る。

「玲二」

母が立ち上がって強い瞳をこちらに向けた。

「覚えてるわよね。入学式の前に言ったこと」

「……覚えてる」

「じゃあ、私の言いたいこともわかるわよね」

ものすごいプレッシャーを感じる。なんだか、肌の表面がビリビリしているような感覚があった。

「わかるけど……、納得できない」

負けられない。母を強く見つめ返した。

返事は大きなため息だった。

「まあ……、そうよね」

食卓の大きい方テーブルへと移動して、椅子を引かれた。

「座りなさい」

再び、部屋に戻ってきた。ベッドに倒れこんで、そのまま動けない。

力が出ない。

結局なにも変わらなかった。とにかく、うかつなことはしないように釘をさされてしまっただけだ。

「じゃあ……その……要はセックスしなきゃいいんだろ？」

必死の思いで言葉を吐き出す。

「あなた、我慢できるの？」

「必要なら……する」

「どうかしらね？ キスしようとしてたじゃない。大体、相手から求められたら、どうするつもり？」

相手から求められたら？

「体を求めるのが男だけだと思ったたら大間違いよ」

「母さん」

父さんがさすがに口をはさんだ。15歳の男子高校生にとって、今の発言は刺激的すぎる。

「結婚したいって言われたら？ 結婚しても、まだしないでいるの？」

「それは……」

「子供が欲しいって言われたら？ 相手に我慢させるの？」

母さんは構わず続ける。

「あなたの寿命や年の取り方だってまだわからないの。場合によっては、一族の元へ一緒に帰ってもらわないといけないわ」

深い森の中にある、あの家……。

帰る？ あそこに？ あそこで一生暮らす？

自分のような半端モノがどうやって、あそこで生きていくんだろ
う。そんな人生に意味があるのか？

「とにかく、今の状態であまり誰かと深い仲になるのは好ましくない」

母の言葉が心を貫く。なんだか、心から血が出ているような気がした。

それでは、今の生活は一体何なんだろう。何のために学校へ通って、何のために友達と過ごしている？

いつきの笑顔が浮かぶ。

良太郎の深い友情を思う。

「じゃあ俺は、なんのために生きてるんだよ……」

自分の口からもれた小さな絶望を聞きつけて、父さんが慌てて隣へやってきた。

肩を抱き、握り締めた拳の上に手を重ねてくる。

そこに、母さんの悲しげな声が降ってきた。

「……私たちもずっと、なんとかできないか方法を探してきたのよ。あなたにこんな思いをさせたくなかった。今ももちろんそう思ってる。だけど、まだわからない。……もしかしてあなたが自分で自分の可能性に気がつくことができたらと思って、話をしたの」

苦しげで、悲しそうで、申し訳なさそうな声だった。

「お願い…… まってちょうだい。せめて20歳になるまでは。必ず方法は探して見せるから」

そんなことを言われたら、もうどうしようもなかった。

何年も、いつきへの返事をしないままできて許されるだろうか？

そんなに待ってもらえるのか？ 待たせていいのか？

そして、散々待たせて、黙って去っていくのか？

気分が落ち込んでいく。

もう、きつぱり断るべきなんだろうな……。目を閉じると、いつきの顔が浮かんできた。大きな輝く瞳がまっすぐこちらを見ている。可愛らしい花のような笑顔。自分の中ではもう代えるものない美しい宝石。諦めないといけない。

彼女はきつと、……悲しむ。

散々期待させとお断り。良太郎の言うとおり、鬼だな。

なんとか立ち上がって、階段を降りて玄関へと向かった。

「玲二」

母さんが声をかけてきたけど、返事をしないまま外へ出る。

夜の間に雨が降ったせいで、地面にはところどころ小さな水溜りがあった。おかげでひどく蒸し暑い。

着いたところには汗だくになっていた。

最近すっかりおなじみのこの場所……。いつきの家を見上げる。そっぴいえば家にいるかどうかわからない。インターホンが目に入ったが、押すのがためらわれた。

門の前で悩んでいると、ドアが開いて誰かの姿が現れた。お兄さんだ。でも、何番目の兄さんだったか……。

4番目の兄の幸四は自分と目を合わせると、そのまま後ろに下がってドアを閉めた。

まもなくドドドと音がして、かわりにいつきが出てくる。

「玲二くん!」

慌てた様子で、走ってきてくれた。

「どうしたの……？」

驚いたような、でもどこか嬉しそうな顔だ。

「これ……借りた着替え、返しに来たんだ」

一昨日借りたものを洗濯して、畳んで紙袋に入れて用意してあった。

「ああ。こんなキレイに。……適当でよかったのに」

いつきが微笑む。

その愛らしい笑顔のせいで、口から本音が勝手に飛び出してしまった。

「あと、園田の顔が見たくなって」

いつきの頬が真っ赤に染まっていく。

大きな瞳がまっすぐ見つめてきた。

自分も、まっすぐ見つめ返す。

少しして、いつきが首をかしげた。

「玲二くん、なにかあったの……？」

「え？」

「なんだかすごく、悲しそう」

「……」

「……に、見える」

少し、嬉しくなった。

「うん……ちょっと」

この返事で、心配そうな顔になってしまった。

「だから、園田に元気わけてもらおうと思って」

こんなことを言って大丈夫だろうか。付き合えないと伝えなければいけないのに。

「わかった！ 玲二くん、ちょっと待ってて。出かける準備してるから！」

再び慌しく玄関へ戻って行く姿を目で追うと、ドアのところでは人が様子を伺っているのが見えた。いつきはそれに「もう！」と怒りの声をあげ奥へと消えていく。

思ったよりもずっと早く、ドアが再び開いた。

「お待たせ！」

急いで出てきたからか、デートの時のような可愛らしい格好ではない。

Tシャツに、ちょっと短めのジーンズ。それに、青いラインの入ったスニーカーだ。

「玲二くん、元気が出ないときに行く、とっておきの場所があるんだ」

いつきはいつもの笑顔で、手をぎゅっと握ってきた。

「行こう！ 元気わけてあげるから！」

手を引かれて、歩き出す。

母がどこかで見ていないだろうか？ なんとなく辺りを見てもいつもと変わらない、通りなれた道。

イルカはいないが、犬や鳥くらいならどこからでも飛び出してきた。そうだ。

……次はネコか？

そんなことを考えながら、2人で暑い道を歩いた。

#10 「元氣を出して」 &It;いつき>

「玲二くん、ちょっと寄ってくよ」

手を引いたままコンビニに入る。暑いから、水分はちゃんと取らないと。

自分の分のお茶を手にとって、玲二くんの分は……そうだ、これ。ストレートタイプの紅茶。

そして、元氣のないときは甘いものだ。

この夏新発売になった、リッチなタイプのアイスクリームを2つ取ってカゴに入れる。

この間食べてみたらすごく美味しかった。濃厚なバニラ味にサクサクのコーン。なにせ230円だ。100円のは味も食感も違う。

「あ、玲二くん。ここは私のおごりだからね」

少し元氣のない顔が薄く笑って、黙って頷いた。

コンビニを出て、また歩く。目的地はもうすぐそこだ。通っていた小学校の裏にある、小さな山の上。大きな木が、大きな影を作っている。

「ここ、来たことある？」

「……うん。昔、何回か」

「私ね、イヤなことがあった時はいつもここに来るんだ。なんか落ち着くんだよ」

この大きな木の下にいと、なんだか自分が優しく守られているような気がした。そこに並んで座って、アイスクリームを1つ渡す。「溶けないうちに食べよう。これね、夏の新商品なんだよ。売り切れ続出なんだって」

玲二くんはカップをはずして、アイスクリームを食べ始めた。よかった。ちゃんと食べてる。

安心して、自分の分のカップを外す。一口食べると冷たくて心地よくて、やっぱり美味しかった。

玲二くんはどこか、遠いところを見ている。

なんだろう。もしかして泣いてたのかな。少し潤んだような、いっつもとは違う目。

2人で黙ったまま、サクサクのコーンまで食べ終わった。

「ごちそうさま」

「うん」

紅茶のペットボトルを渡すと、玲二くんは呟くような声で言った。

「俺が好きなの、よく知ってるね」

そんなの、知ってて当たり前だ。

王子様は微笑むとボトルのふたをあけて一口紅茶を飲んで、はあっと息を吐いた。

見たことのない、切なげな顔。

「なにがあつたの？」

玲二くんは遠くを見たまま、呟くように答えた。

「それは……ちよつと、話せない」

「私にも？」

ちよつと冗談めかして聞いてみる。でも効果はなくて、玲二くんは相変わらず真剣な表情のまま、前を向いたまま、答えた。

「うん……」

しばらく間があく。そしてこちらの方を見て、更に言った。

「園田には……絶対言えないんだ」

胸の中に、不安がこみあげてくる。

どうしたんだろう……？

……もしかして、なにか病気とか？ 突然倒れたのも、そのせい

なのかな。

どうしよう。

玲二くんが、死んじゃう……？

最悪の想像に、体の中が震える。涙が出そうだ。

いや、だめだ、泣いたら。

玲二くんは今日、つらくて、元気をわけてもらいたくて来たんだから。

なんとか気を取り直して、声を出した。

「そつか……。私は、玲二くんのことなら、なんでも知りたいけどな」

綺麗な薄茶色の目を見る。

「どんな大変なことでも、どんなにつらいことでも……」

心がブルブルと震えている。それを、必死でこらえた。

「知らないほうが多分、つらいもん」

私の言葉を聞き終わると、玲二くんはまた前を向いた。なにか考えているようだ。

黙って、次の言葉を待った。

「園田の家族って、いいよな」

「え？」

意外な言葉が出てきたな。

「みんな優しそうで、いい家族だなんて思った」

「そうかな……？ 玲二くんの家族だって、いい家族なんじゃない？」

玲二くんの両親に会ったことはない。お母さんを見たことはある。外国人だしちよつと大柄なので目立っていた。でも、話したことはないし、母親同士の交流もない。

あまり知らないけど、玲二くんの物腰や人となりを思うと、悪い家庭で育っているなんて考えられない。

「……まあ、そうかもね。自分の1番当たり前の部分だから、自分からだど、よくわからない」

「うちの家族はね、そうだな……、あの通り兄弟いっぱいだから、もう毎日大騒ぎ」

両親には特に文句はない。父も母も好きだし、尊敬している。

「もう2番目のお兄ちゃんなんかね、いつもケチつけてくるんだよ。その服は似合わないとかさ」

「それは、園田が可愛いからだろ？」

「へ？」

このシリアスな空気に似合わない、変な声が出てしまった。

「園田みたいな可愛い子が妹だったら……、気になっちゃって色々言うの、わかる気がする」

玲二くんは至極まじめな顔だ。

「そうかな？」

確かに、一兄ちゃんもそんなことを言うけど。

「あんまり可愛くしすぎて、変な男が寄ってきたらって心配してるんだと思う」

顔が熱くなってしまう。間接的に、可愛いって言ってもらえていく気がする。

「玲二くん、……私のこと可愛いって思う？」

「思うよ。園田って、ビックリするくらい可愛いよな」

元氣のない声だ。嬉しいけど、複雑な気分になる。

「俺、園田のこと全然知らなかった。同じ学年にいるのくらいは知ってたし、可愛い子だってみんな言ってるのも知ってた。だけど、どんな子かは全然、知らずにいた。意識したこともなかった」

元氣のない顔がまたこちらを向く。

「園田は？ 俺のこと、知ってた？」

「……え？」

「なんで俺のこと好きになったの？」

こんなことを面と向かって聞かれるとは思わなかった。普段は平気で好き好き言ってるくせに、なんだか急に恥ずかしくなってしまう。

「ええとね……」

全部、話すのかな。なんか照れるな。

「小学校の3年生の時に、ドッジボール大会があつたでしょ？」

「ああ」

「あの時、玲二くん大活躍してたよね。投げられたボールは全部捕って、どんどん相手のチームにぶつけていくの。だけど、女の子にはちょっと優しく投げた」

玲二くんがちょっと微妙な表情になった。違つたかな？ でもそ

の時はそういう風に思った。

「髪の毛がちょっと茶色くて、目もみんなより明るい色で、すごくカッコいい男の子がいるなって思ったんだ。それから気にして時々見てたの。朝礼の時とか、行事の時とか、廊下歩いてる時とか。千早や則子が玲二くんと同じクラスの時には、用もないのに声かけに行つて……」

小学校時代を思い出す。そういう細かいところに努力を惜しまなかったつけ。

「いっつもね、カッコいいな、素敵だなんて思ってたの。1人でいる時も、誰かという時も、静かで、穏やかで、王子様みたいって思ってた。毎年毎年、同じクラスになりたかつたのになれなかつたら、すごく悔しかった」

王子様は神妙な顔をして、じつと私の話を聞いている。

「中学の時も、おんなじ。ずっと、そーつと見てたんだ。ずっとずっと、好きだなんて思ってた……」

そこまで言って、ちよつと首をかしげた。

「あれ？ 私、全然、玲二くんがどんな人かは知らなかったみたい」

2人の間を、風が吹き抜けていった。心地よい涼しさを感じる。

「告白してからだよ。玲二くんのこと、よく知ったのって……でもね、全然イメージと違うとか、そんなことなかったよ。一緒に帰ったり、話したり、出かけたりして、ますます好きになったもん。私が、玲二くんのこと好きになったのは、間違いじゃなかったなっと思ってる」

最後は声が小さくなってしまった。

恥ずかしかったのと、玲二くんがこつちを真剣な目で見ているから。

「……ありがとう」

小さな声が聞こえた。

「そんな風に思ってもらえるなんて、……嬉しいよ」

なんでそんなことを言うんだろう？　なんでこんな質問をしたんだろう。

やっぱり、なにか悪い病気なのかな？　どこか遠いところにも行ってしまいそうな雰囲気が出て、段々怖くなってくる。

「……玲二くん」

声が震える。

「園田？」

「……玲二くん……どうしたの？　何か、悪いことがあったの……？」

こらえたかったのに、こらえきれなかった。涙がボロボロっと落

ちはじめる。

「重い病気とかなの？ 玲二くん、何があつたの……！？」

とうとう、声をあげて泣いてしまった。止めたかったけど、無理だった。

「園田……、病気なんかじゃないよ。大丈夫だから、ちょっと落ち着いて」

穏やかな声が聞こえる。

「だって……、一昨日だつていきなり倒れたし、隠さないで教えて」
「違うつて。そういうことじゃないから……」

「……ホント？」

「本当。病気なんかじゃないよ。……心配させたんだな。ごめん」
なんとか涙を止める。でもまだ、体がブルブルする。

「ほんとにほんと？」

「……うん」

「じゃあ、なんなの？ なんだかお別れみたいなんだもん。もう一生会えないとか、そういう感じがする」

玲二くんはちよつと、困った顔をした。

「それは……違う」

「じゃあ、もしかして引つ越すとか？」

「どこかへ行っちゃうの？」

「……」

「玲二くん」

「いや、どこも行かないよ……。俺、まだ……」
「まだ？」

下を向いてしまった。なんだろう？

「もっと園田のこと、知りたいから」

「……どこにも、行かない？」

「行かない」

「ほんとに行かない？」

「……行かないよ。絶対」

はあつと息を吐くと、なんとか震えも止まった。手の甲で涙を拭く。

「わかった。じゃあ、いつか、玲二くん……話せるときが来たら、話して。なんでも聞くから。玲二くんの言うことだったら、どんなことでも信じる。絶対絶対、味方になるから……」

「……ありがとう。園田」

「……いつきつて呼んで欲しいな。友達でも、下の名前で呼ぶんでしょ。葉山君のこと良太郎って呼んでるし」

どさくさにまぎれて、お願いしてみる。

「それとこれとは……」

「ダメ？」

玲二くんはちょっと顔を赤くした。少し、いつもの感じに戻った気がする。

「ちよつと」

ダメか。

それに、もっと知りたいって……。その言い方だとまだ、彼女への昇格は無理そうに思える。

すっかり彼女になったような気でいたけど、それは間違いだったらしい。

「泣かせて、ごめん。心配させて……悪かった」

「じゃあ、チューしてくれたら許してあげる」

ちよつと頬をふくらませて、葉山君の真似をして言ってみた。どうせしてもらえないのはわかってる。そう思えば、軽く言うことができた。きつと葉山君だってそんなつもりで色々言うんだろう。

そう考えて言ってみたんだけど、意外なことが起きた。

玲二くんは、そつと前髪に触れて、そして、額に唇を当ててきた。

「……」

ビククリして、言葉が出ない。

「これでいい？」

「え……」

おでこに、された。

玲二くんのきれいな瞳は、じつと、私を見ている。

「……違う……唇の方にしてくれないと……」

思わず、言ってしまった。おでこじゃイヤだ。玲二くんと、キスしたい。

手が、頬に触れてくる。

あれ……ホントに？

キスしてくれるのかな。

彼女にはなれないのに？

顔が近づいてくる。

目を閉じようとした時、バンっという音がして玲二くんは突然横に倒れた。

「う……」

こらえるような唸り声が聞こえて、慌てて閉じかけていた目を開けた。

耳のあたりを押さえて倒れている王子様の横に、野球のボールが落ちている。

「嘘！？ 玲二くん！」

頭に当たった？ 大変だ。

坂の下から、男の子が走ってきた。ユニフォーム姿だ。確かに、下には小学校のグラウンドがあつて、地元の少年野球チームの練習場になつてゐるはずだ。でも、あそこから飛んできたのかな？ だとしたら、記録的大ホームランになる。

男の子は倒れている人がいるのを見て、事情をすぐに察したようだ。

「大丈夫ですか!？」

よろよろと玲二くんが起き上がる。

「大丈夫……」

そうは思えない。頭に直撃したんだつたら、相当痛いはずだ。

「見せて」

手を無理やり動かすと、額のはしに赤くボールの跡がくつきりとついていた。

小学生は慌てて坂を駆け下りていった。

木の下に玲二くんを寝かせて、水でぬらしてきたタオルをあてる。野球チームのコーチや保護者がやってきて、大騒ぎになつてしまつた。2人きりの時間は完全に終わり。

しばらく休んだ後、玲二くんは少しよろめきながらもなんとか立ち上がり、家まで送るとかお詫びとか、そういったものを全部断つた。

2人で並んで、一緒に歩く。

玲二くんが立ち止まつた。お互いの家に続く、分かれ道。

「園田……、また学校で会おう」

今日は家まで送ってくれないらしい。確かにまだ、昼だけど。そして、夏休みはあと1週間あるのに、その間にもう会うことはできないということだ。

こんなに元気のない姿をみたのは初めてだった。誰にもいえない

悩みがあつて苦しんでいるのに、自分の要求ばかりいうわけには
いかない。おでこの傷も痛むのかもしれない。早く帰らせてあげな
いと。

「少しは……元気出たかな？」

様子を伺つてみる。玲二くんは痛々しい姿で、でも、優しく微笑
んでくれた。

「ああ。ありがとう。ちゃんと、わけてもらった」

「よかった」

もつと会いたいって言つたら困るかな？　そう考えて、ぐつと我
慢して違つてセリフを口から出した。

「また、メール送るね」

「ああ。俺も、送るよ」

そついうと、手をあげて帰つていつてしまった。

元気が出たと言われたのは嬉しかったけど、少し寂しい。

またキスできなかったし。すごいタイミングで、思わぬ邪魔が入
る。まるで呪われているみたい。

もしかして、玲二くんの言えないことって、そついう超常現象的
なことなのかな……？

いやいや、何考えてるんだろつ。くだらない。

私たちつて、いいところではかならず邪魔される運命なのかな。

恋の神様が、嫉妬でもしているのかもしれない。そんなことを考え
ながら、1人とぼとぼと家へと歩いた。

帰つてからまた兄ちゃんたちに色々と言われたけど、全部無視し
て部屋にこもつた。

だらだらと夏休み最後の1週間を過ごす。

友人たちは部活や趣味などで忙しいらしく、会うことができな

った。仕方なく、家の手伝いに精を出す。

メールを送ろうかと思ったけど、何と書くべきかわからない。結局、あれからまだ送れていなかった。玲二くんからもメッセージはない。

そしてとうとう31日がやってくる。今日で、夏休みは終わり。

そうだ。

思い立って、本屋へと出かけた。

つい、玲二くんの姿を探してきよろしてしまう。今日はどうやらないらしい。そう偶然が続くわけもない、か。

ファッション雑誌のコーナーへ行って、分厚い本の山の前に立つ。どれもこれも付録が挟まっていて、すごいボリュームだ。いつか千早の家で見た10代向けのファッション雑誌を探す。

夏休みのことを順番に思い出していた。

水族館と、プールと、花火大会。玲二くんはすぐくほめてくれた。照れちゃって、こつちを見てくれないくらい。

今までいわゆるオシャレに気をあまり使ってこなかった。でも玲二くんが喜んでくれるのなら、なんでもいいから努力したい。

雑誌売り場でこれと思うものを手に取った。

表紙や書かれた文句を見比べて、2冊に絞る。よし、帰って研究だ。付録もかわいいポーチと、ヘアアクセサリーがついている。

明日からも頑張ろう。玲二くんが、少しでも元気が出るように。

帰ってから、今までで1番短いメールを送った。

玲二君

明日の朝、一緒に学校に行ってもいいですか？

返事は1時間くらいしてから返ってきた。

いつもの時間に待ってる

携帯電話を胸に抱きしめてベッドに転がった。明日、会える。

明日も笑顔で会おう。そう、決めた。

次の日の朝、張り切って早起きして駅へと向かった。

通勤や通学の客が次々と改札へ吸い込まれていく光景を久しぶりに眺める。

しばらく待つと、玲二さんの姿が見えた。

右手を高く上げて、ふる。それに軽く手をあげて応えてくれた。

「おはよう、玲二くん」

「おはよう……」

いつも通りに見える。もともと、いつだって元気全開！ みたいなタイプじゃない。

でも、なんだか少し痩せたような気がする。おでこの傷は治っているみたいだけど……。

「行こうか」

いつものセリフだ。頷いて、一緒に改札をくぐった。

玄関で靴を履き替えていると、荒川先生が通りかかった。

「おう！ おはよう！」

なんだかとても機嫌が良さそうだ。

「立花、ちょっと頼んでいいか？ 後で職員室に来てくれ」

「はい」

教室へ着くと、玲二くんはそそくさと職員室へ行ってしまった。

と思ったら、すぐに戻ってきた。

「どうしたの？」

「いや、もし相原が来たら1人じゃイヤかなって思っ」

すっかり忘れてた。確かに、2人きりになったらイヤだ。

「一緒に行く？」

「うん」

そんなことを考えて戻ってきてくれたなんて、すごく嬉しい。

一緒に職員室まで行って、ちょっと遠慮して入り口で待つことにした。

先生のところには見たことのない女の子が立っている。制服も、学校指定のブレザーじゃなくてセーラー服だ。このシチュエーションから言うとなっぴり彼女って、アレだよね。

玲二くんは大量のプリントを抱えて、先生と話している。大荷物で戻ってきて、教えてくれた。

「転校生だっ」

どうも表情が冴えない感じだ。まだ、元気がないのかな。

職員室をもう1度ちらつとのぞくと、転校生がこちらを見ていた。

同性のはずなのに、ドキっとした。

まっすぐに切りそろえられた前髪。肩まで伸びた後ろ髪も、まっすぐだ。制服の上からでも、メリハリがきいているのがわかるスタイル。そしてネコのような印象の、大きな目。なんとも色っぽい厚い唇。

総合評価SSS、くらい。

ものすごい美人だ。しかも、高校生らしからぬやけにセクシーな

美人。

「玲二くん……」

「何？」

「あの子、すっごくキレイだね。ビックリしちゃった」

玲二くんは眉間にしわを寄せて答えた。

「そうか？」

あれ。反応が悪い。別に照れ隠しとかそういう感じではないみたいだけど、……趣味と違うのかな。

「園田の方が可愛い」

しれっとそんなことを言ってきた。

ハートに火がついちゃうじゃないか。

それどころか、私をまじまじと見つめて、更に顔をちょっと近づけてきた。

「今日、なんかちょっと、いつもと違う気がする」

昨日買った雑誌を参考に、一夜漬けながら色々した効果が出たのかな？

唇のケアとか、髪の毛の結び方をほんのちょっと変えたんだけど。気がついてくれたのかな。

「ねえ、それ、ちょっと持とうか？」

「いいよ、重たいから」

優しい微笑みに、新学期早々うつとりしてしまった。

教室へ戻ると、葉山君が来ていた。

「おう！ おはよー、おふたりさん」

もう宗田君の席に座り込んでいる。

「元気だった？」

「うん。葉山君は？」

「もちろん。玲二は？」

教卓にプリントの束を置いて、玲二くんも答える。

「ああ。この通り」

ちよつと目を伏せて言う姿は、どう見ても元気ではなさそうに見える。でも、葉山君は何も言わなかった。

「そうだ。葉山君、転校生がいるみたいだよ」

「へえ……男子？ 女子？」

「女の子。すつごく、美人だった」

瞳がキラリと光る。

「マジで？ 玲二も見た??」

「見たけど……別に美人とは思わなかったよ」

「どつちななの？」

なんだか自信がなくなってきた。だって、玲二くんのほうが近くで見たはずだ。私は入り口からのぞいて見ただけ。見間違えたのかな？

「私は遠くから見ただけなんだ。玲二くんは近くで見たんだから、玲二くんの方が正しいかな？」

葉山君はあからさまにガツクリと肩を落としてしまった。

「なによ……期待させないでよ、園田ちゃん」

新学期の全校生徒で行う始業式が終わって校庭から教室へ戻ると、荒川先生がニコニコと笑顔で教壇に立った。

「よし、全員揃ってるな！ 先生は嬉しいぞ」

いつも以上にご機嫌でテンションが高い。

「しかも、今日から仲間が1人増える。みんな、仲良くしてくれよ」
そういつて、ドアを開けて転校生を中に入れた。黒板にカツカツと音を立てて、名前を書く。

みんなが、息を呑んだ。教室の中が、どよめいている。

……やっぱり、ものすごくキレイじゃん。

隣の宗田君は口をあんどりと開けている。

そつと後ろを振り返る。玲二くんはいつも通りの顔だ。いや、いっつもよりなんとなく険しい。

葉山君はなんだか、目がとろんとしている。

その後ろの氷室君も同じようにぼーっとしている。

教室中の男の子から、ハートがフワフワと飛び出してきているかのようだ。

女の子たちも見とれている。やっぱり、驚くほど魅力的な容姿の持ち主だった。

「ももい さやです……」

声も、少しハスキーで妙な色気がある。

「どうしたどうした！ みんな、百井がきれいだからってボヤーっ
と見とれるなよ！」

先生も顔が赤い。ご機嫌な理由が、よくわかった。

「とりあえず、あそこ、…… 由井の後ろに座ってくれ」

窓際の女子の列の1番後ろに新しい机が用意されている。

セクシーに歩く姿を、みんなうつとりと眺めた。玲二くんだけが彼女を見ていない。

「今日から2学期だし、心機一転！ この後席替えるからな」

先生の声で教室は途端にガヤガヤし出す。まずは夏の課題が回収されて、2学期からのお知らせのプリントが配布されていく。

休み時間に、教室の落ち着きのなさは最高潮になった。

みんな転校生の周りに集まっている。緊張しながら、定番の質問を次々にぶつけているみたいだった。葉山君も輪の外側から様子を

見ている。

玲二くんだけがじつと自分の席に座って動かない。

私も転校生がちよつと気になるけど、玲二くんの不機嫌そうな顔の方が心に引かなかつた。

「玲二くん……」

呼びかけに反応して顔をあげる。やっぱりどうも顔色が冴えない。

「……何？」

なんだか機嫌もよくなさそうだ。

「どうかしたの？ 気分が悪いとか？」

その言葉で、なぜか玲二くんはピンと姿勢を正した。

「大丈夫だよ。なんでもない」

「そう？ なら、よかった」

その言葉に、少し笑顔を見せてくれた。

「……また席が近いといいね」

「そうだな」

小さい声だったけど、嬉しい返事もあつた。

しかし願いもむなしく、席替えの結果は……とにかく、最悪だつた。

私の席は、廊下側の1番後ろ。玲二くんの席は、窓側の1番前。

対極の、1番遠い位置関係。そして隣がまさかの相原君だ。なんだか、冷や汗が出てくる。

葉山君の席も窓側で1番後ろ。こちらも遠い。そして玲二くんの隣は、転校生の百井沙夜。

ガックリ。

いやだ……こんな席順。

でもすぐに、ちよつとした希望があるのに気がついた。

どうやら、相原君もあの転校生に釘付けになっているようだ。遠

いからか、右へ左へ体を動かして、なんとかあのセクシーな姿を見ようとしている。

少々拍子抜け……というのは贅沢だろう。ちょっと、ほっとした。

席替えが終わって教室の空気が少し落ち着いたところで、今日は終わりとなった。

活動熱心な部活に入っている人以外は、みんな帰る支度をしている。

私も玲二さんと一緒に帰ろう。

家が近いんだし、一緒に登下校するくらいいいよね。

1週間散々考えて、そういう結論に至った。朝も一緒に来たわけだし、帰りも一緒にいいはずだ。

嫌われているわけではないし、頼ってもらえることがわかって嬉しかった。

だから、少しでもそばにしようと決めた。

自分の気持ちを押し付けるのはやめる。支えてあげられるなら、それだけでも構わない。

カバンを持って王子様のもとへ行こうと思ったら、隣の転校生の席にはまた人だかりができていた。

特に男子が何人か熱心に声をかけている。さりげなく相原君もその中に混じっている。

教壇のある前の方は通れなさそうだったので、窓側に回る。1番後ろには葉山君の席があって、席の主が机につっぱしているのが目に入った。

「葉山君……どうしたの？」

「ん？ ああ、園田ちゃんか」

初めて見る覇気のない姿だ。はあーっと大きなため息をついて、小さな声を漏らす。

「沙夜ちゃん……って、ヤバくない？」

完全に恋に落ちている顔だ。目がうつとりと、とろけたみたいになっっている。

「葉山君、ああいう感じがタイプ？」

「うん……そうね。ストライクバッターノックアウト！」

これはそつとしておいたほうがよさそうだ。前へむかつて歩くと、玲二くんが帰り支度を終えて立ち上がったところだった。

「百井さん、よかったら学校の中、案内するけど」

「俺が案内するよ。学級委員だし」

すぐ隣の人だからから、そんな声が聞こえてくる。すごいな、モテモテだ。

そして、実はそんな風に感心している場合ではなかったのに気がつかされた。

「私、立花君にお願いしたいな……」

ハスキーでスイートな声が、教室に沈黙をもたらす。みんながいつせいに、玲二くんに注目した。

「……」

当人は寝耳に水、といった表情で固まっている。

「いいでしょ？」

百井さんが立ち上がり、玲二くんに近づく。妙に艶かしい動きの手が、胸に触れようとしている。

その光景に、全身が、ゾワゾワッと震えた。すごくイヤだ。

玲二くんが……取られちゃう！

「悪いけど……俺は帰るから。誰か、他のやつに頼んでくれ」

玲二くんは青い顔でそれだけ言っと、こちらへ早足で近づいてき

た。

「園田、帰ろう」

手が掴まれて、引っ張られるように教室を出ていく。

玄関までノンストップで下りていく途中、小さい声が聞こえた。

「なんだあいつ……」

すごく険しい顔だ。

私も、心臓が激しく動いていた。

あの転校生に玲二くんを取られてしまう。本気でそう思った。胸の奥に突然、氷の塊が落ちてきたような感じ。

あんな気持ちになったのは初めてで、すごく怖かった。その氷はなんとか、つないだ手の熱さで少しずつ、溶け始めている。

黙ったまま、駅まで歩いた。なかなか心が静まらなくて、ただ着いて行くことしかできない。

電車に乗ったところで、突然玲二くんがこちらを見て言った。

「園田……、あいつ、そんなにきれいか？」

この場合のあいつは、百井さんのこと、だよな。

「……うん、すごく、美人だと思うけど」

「そうか」

玲二くんはあの子のこと、そう思えないみたいだけど……本当かな？

他の男の子たちみたいに心をつかまれてるんじゃないのかな？

私の前で遠慮してるとか？

心にどうしようもない不安が渦巻く。

会話ができないまま、駅に着いてしまった。改札を出たところで、足が止まる。

「ねえ玲二くん、また明日も一緒に行ってもいい……？」

そつと聞いてみる。……我ながら情けない、小さい声。

なんだか自信がない。一夜漬けの努力なんて何の意味もないように思えてきた。

「どうしたんだよ、園田。いいに決まってるだろ」

聞くまでもない、そんな雰囲気玲二くんが答える。

「ごめん。俺、もしかして心配させてるかな……」

「え？ ううん。そんなことない。大丈夫だよ」

少しずつ不安が晴れていく。そうだ、笑顔。笑顔見せるって決めてたのに。

「席替えのせいかな。離れちゃったから、残念だっただけ」

そう言って、笑顔を作った。いつもの私に戻る。不安がる必要なんてない。今だって、こうして一緒にいるんだから。私の方が可愛いつて言ってくれた。玲二くんの言葉を信じないで、どうするの？

「……やっぱり、いつきの笑顔っていいな」

王子様が最高に優しい顔で微笑んだ。

「じゃあまた、明日」

風のように帰っていく、スラッとした後姿を見送る。

……今、いつきつて言ったような。

顔から火が出そう。嬉しくて、みるみる元気が出てきた。

さっきまでの落ち込みが嘘のように、心が軽い。

明日も一緒。それを思うと足取りも軽くなる。

すっかりご機嫌になって、家へと帰った。

「ごちそうさま」

半分くらいで箸をおいた。食事を残すのは、あまりいいこととは思えない。

思えないが、どうしようもなく食欲がなくて、口にはこれ以上入れられない。

「玲二……もうちょっと、食べれない？」

「ごめん。だけど、もう……無理」

「ねえ、こういうのが1番効くわ。もう1週間もろくに食べてないじゃない。ちよつと痩せたでしょ？」

母の声は心配そうだ。昨日までは苛立ちの方が強かった。

悪いと思っている。あの日以来、家で過ごすのは少しづらかったし、食事も喉を通らなかった。しかし大切な家族だ。心配させたくない。だから、今日はちゃんと食べようと思っていた。

「ごめん。今日、ちよつと気分が悪いんだ」

「学校で何かあった？」

「転校生が来て……」

百井 沙夜。

今まで、他人の容姿や造詣について、深くなにか感じたことなんてなかった。

目が大きいとか、口が小さいとか、そういうことは見たそのままが感想だ。それでイヤだとか、いいとか、あまり考えたことはなかった。

いつきのことは特別に可愛いと思っているが、それは容姿だけの

問題ではなく、仕草や、言葉や、自分に向けられている愛情があつてこそだ。

だが、今日やってきたあの女。

他人を見て初めて、醜いと思った。

ギョロつとした目、いやらしく歪んだ口元、あのまっすぐ切りそろえた気取った髪型も、妙に強調された体のラインも、なにもかもが不愉快に感じられた。初めて会う人間をそんな風に思った自分に驚いた。だけど、見られるとどうしようもなく不快だった。

不思議な事にいつきも良太郎も、他のクラスメイトたちも彼女を美しいと思っているようだ。

隣に座るあの気持ちの悪い女。相原まで必死に話しかけていた。

夏休み中に見せたいつきへの情熱はどこへ行ってしまったんだろう。

「転校生がどうしたの？」

「いや……ちよつと、なんていうか多分、苦手なタイプで」

さすがに、気持ち悪いやつが来たとか、そういう表現をするのは憚られる。

なにかされたわけではない。彼女だって、見た目だけでそんなことを言われたら傷つくだろう。あまり差し支えない表現を必死に探す。「生理的に無理」というのは、ダメ……だろうか。

「男の子？」

「いや……女だよ」

「ふうん。女の子ね」

母さんの目が少し冷たい。

きつと、あの木の下でいつきにまたキスしようとしたことも知っている。

おでこに関しては、なぜ見逃されたのかわからない。もしかして、

母の温情なんだろうか。触れることができたので、つい無謀な試みをしてしまった。

あの日は、もう一緒にいられないと言おうと思っていた。ただ、言えなかった。

いつきが自分のことを心配して泣き出したのを見たら、たまらなかった。

もうちょっと待とう。解決できる可能性は0ではないはずなんだから。そう、考えた。

額のあざを、母さんは見て見ぬフリをした。仕方ない。自分が悪い。警告を無視したのはこっちなんだ。

「明日はちゃんと食べるよ」

ちよつとため息混じりに言うと、母さんはまた少し悲しげな目をした。

「本当？」

黙って頷く。

「約束よ」

「わかった」

椅子から立ち上がると、部屋に帰るのを止められた。

「紅茶入れようか」

「……うん」

リビングのソファに座って、2人で紅茶を飲む。

母さんはちらっとこちらを見てくる。何も言うことはない。これ以上、事を荒立てたくはない。

「あなたって……」

母さんが呟いた。目だけ動かして、顔を見る。

「わからないのよね」

「……何が？」

「心が。全然わからない」

何を言っているんだろう？ よく、理解できない。

「どういう意味？」

「普通はね、相手がどんなことを考えてるか、読めるのよ」

母さんはまっすぐこちらを見ている。自分と同じ、明るい茶色の瞳だ。

「心を読むってこと？」

「完全にはわからないのよ。大体、どんな感じなのか掴めるだけ。たとえば、嬉しそうとか、悲しそうとか」

「へえ……」

「玲二は全然、わからないわ」

「なにも思ってたなければ、わからなくて当然なんじゃないの？」

「そういうことじゃない。何も思ってたないなら、そう感じるもの。あなたは本当にわからない。読めないのよ。なんでかしらね？」

そんなこと、知るわけがない。大体親子だから遠慮があるとか、年頃の息子なんだからとか、そういうメンタルな部分は関係ないのか？

「母さんって本当に人間じゃないんだね」

母は鋭い目を、少し細めた。

「……あなたもね」

黙ってまた一口紅茶を飲んだ。ため息が出そうだった。

「今は？ 俺、どんな感じ？」

「わからないってば」

……自分でもよくわからない気がする。

悲しいし、切ないし、寂しい気もするし、億劫な感じもある。ついでに苛立ちも。こんな複雑な気持ちはどんな風に見えるんだろう。父さんのはわかるわけ？」

「わかるわよ。まあ、読まなくてもわかるけど」

母さんも紅茶を一口飲んだ。

「読む必要もないし」

父と母は仲が良い。お互いを思いやっているのがわかる2人だ。もしかして、共に過ごせる時間が限られているからだろうか？

自分もいつきと同じく、両親のことが好きだ。尊敬もしている。だけど今はどうしても恨めしい。2人は深く愛し合っていて、強い絆も持っている。でも、息子にはそういう相手を得ることを禁じている。……理不尽だ。禁じている母もその理不尽さを理解しているはずだ。だけど、許すわけにはいかない。

きつと、母さんも辛い。それを思うと、更にまた苦しくなる。

「他にどんな力があるの？」

こんなことを聞くのは初めてだ。でも、知らなくてはならない。今までは自分が人間じゃないなんて信じたくない気がして、知りたくなかった。だが問題の解決のために、まずは自分の可能性についてよく理解しなくてはいけない。

「私？」

「うん」

「そうね……。狼の姿になると、心を読むのはわかるわよね」

「ついでになんか、テレパシーみたいなのも使えるよね」

「狼と人間のミックスみたいな姿にもなるわよ。いわゆる狼男みたいな姿」

「へえ……」

「必要ないから、随分長いことなっていないわ」

母が遠い目をする。その変身が必要な状況とは、一体いかなるものだろう。

「あと、心を操ることもできるわよ」

つい、目を見てしまった。

「なに？」

「いや……操れるなら、俺のことも操作すればいいのに」

「そんなことしないわよ。気持ち悪い。親として最悪じゃないの」
そんな理由で力を使わないのか。

「……本当はしてみようかと思ったんだけど」

母はちらつとこちらを見て、また紅茶を一口飲んだ。

「なに？」

「やつぱりやめたのよ。趣味が悪いと思ってね」

「へえ……」

「あとはそうね……。こうして人間の姿をしていても、力が強いし、早く動ける」

確かに母さんは力持ちだ。重い荷物も平気で運ぶ。体も大きいし、ただ単にパワーがあるのだと思っていた。しかしずっとそんなレベルの話ではないのだろう。

「それくらいよ」

「……ありがとう」

今聞いた力のすべてが、まるで心当たりのないものだった。夢の中ですら狼になったことはない。力だって人並みだ。自分の中に、そんな力があるだろうか。目覚めていない力が潜んでいる可能性があるだろうか？

「ねえ、明日も一緒に行くの？」

突然母さんが言った。主語が抜けているけど、言いたいことはわかる。

「行くよ。別にいいだろ、一緒に学校に行くくらい」

「いいわよ」

カップがそつとテーブルに置かれる。

「これ以上あなたが弱っていくの、見たくないしね……」

朝の駅前に、いつきの姿はまだない。

学校に行くのは嫌いではない。勉強するのは好きだ。でも、今日はひどく憂鬱だった。あの隣の席の転校生。彼女のせいに間違いない。すぐ右隣、黒板を見れば必ず視界に入る位置にいる。

耐えられるだろうか……。

それとも、少し話せば案外いい子で、印象も変わったりするかな？

「玲二くん！」

明るい声がした。今、自分にとって1番の救いの主だ。

「おはよう！」

笑顔がまぶしい。今日も、とても可愛い。

「おはよう」

昨日も思っただけど、夏休み前と少し印象が違う気がする。どこがどうかはわからないが、ちょっとだけ輝きを増したような、そんな気がした。

今日も教室へ2人して1番乗りだ。新しい席に着く。

「遠くなっちゃったね」

いつきの声がした。本当だ。1番遠い場所。

2人してどうやらくじ運はよくないらしい。

いつもなら、大抵この後良太郎がやってくる。

自分が早く来るのは図書室に行くからだが、良太郎がやたらと早く登校してくるのはただ単に早起きしてるかららしい。家だつてすぐそばだ。自転車なら5分で着く。

しかし今日は違った。自分たちの次に教室に入ってきたのは相原

だった。

ドアを開けた正面に立っていた俺と目が合うが、勿論何も言わない。

そして、自分の席へ向かっていく。その先にはいつきがいる。

「おはよう園田さん」

「……おはよう」

微妙な空気が流れた。相原は昨日随分と転校生に熱を上げていたように見えたけど……。いつきのことはもうどうでもよくなったのだろうか？

今日は図書室へ久しぶりに行くつもりだった。転校生の隣にいる時間を少しでも短くしておきたい。いつきも誘って一緒に行った方がよさそうだ。席を立てて教室の後ろへ向かう。するといきなりドアが開いた。

「あら、おはよう。立花君」

百井 沙夜だ。最悪のタイミングだったらしい。

「ああ」

なんとか返事を搾り出す。目を合わせないように、いつきの方を向く。話しかけようとした瞬間、腕をつかまれた。

「ねえ……今日は放課後、空いてる？ 昨日頼んだ学校の案内して欲しいんだけど」

全身がゾワゾワつとする。鳥肌が立って、吐き気までした。

「今日は委員の仕事があるから……」

今日は木曜日。久しぶりに園芸委員の仕事がある、はずだ。

「他のやつに頼んでくれ。園田、俺図書室行くから。一緒に行こう」
「えっ？ うん。わかった」

百井の手が離れた。憎らしげにこちらを睨んでいる。慌てて2人で教室を出た。

少し早足で図書室へ向かう。

「玲二くん……大丈夫？ 今日、もしかして、具合悪いの？」

「え？」

足を止めた。いつきは心配そうな顔で覗き込んでくる。

「顔色悪いよ」

「大丈夫だよ。あいつがいきなり触ってきたから……」

気持ち悪かった、という言葉は飲み込んだ。それは言うてはいけない。

「あいつって、百井さん？」

「うん……。ちょっと、驚いたんだ」

「そう」

いつきは不思議そうな顔をしている。だが、それ以上特に追求はない。

図書室へ向かった。ギリギリまで、教室には戻りたくない。あの、怒りの形相……。思い出すだけで寒気がする。

「あ、立花君おはよう。久しぶりだね」

図書室に入ると、蔵元先輩がいた。試験前以来なので、2ヶ月ぶりくらいだろうか。

「蔵元さん、おはようございます」

いつきも、挨拶をした。先輩は一瞬黙ったが、すぐにいつもの笑顔で「おはよう」と返す。

「立花君にお薦めの本、3冊になったよ」

相変わらずの美しく柔らかい笑顔で話しかけられる。

「ありがとうございます。後で、借りていきます」

まだ気持ちが落ち着かない。とりあえず、奥の方の椅子に座った。いつきもすぐ隣に座る。

「ごめん、勝手につき合わせて」

「え？ ううん、いいよ。大丈夫」

すごく気弱になっている。自分でも驚きだ。この心のざわめきを、

早く落ち着かせたい。

「ちよつとだけ一緒にいてくれ」

「え……」

いつきは驚いた顔で、少し赤くなっている。

「いいよ。玲二くんだったら、いくらでも一緒にいる」

しばらく黙って2人でただ、座った。少しずつ、落ち着いてきた気がする。

ホームルームまであと10分ほどだ。先輩の言っていた本を借りて、そろそろ教室へ戻らなくては。

「俺、ちよつと、本を借りてくる」

「うん」

いつきが明るい笑顔で答えた。その可愛らしさを見たら、また少し落ち着いた。

教室へ戻ると、自分の机の手前に人ばかりができています。もちろん、百井の周りに集まっているんだろう。

人の少ないルートをたどって、自分の席へと向かう。が、途中でまた腕をつかまれた。

一瞬、構えてしまう。が、今回の手の主は相原だった。

「なんだよ」

「お前……百井さんを泣かせやがって！」

相原の目がギラギラとしている。

「何？」

「さっき！泣かせただろう？」

泣かせた覚えなどない。憎らしげに睨まれましたが。

「断るにも態度つてものがあるんじゃないのか？」

「相原くん、やめて……」

百井が間に入ってきた。なんとというおぞましい展開だろう。

「私が無理言つたのが悪いんだもの……。そんな風に言ったらいけ

ないわ」

「……百井さんがそう言うなら」

周りの男子の目がやたらと厳しい。いつの間にか、美しい転校生を泣かせた悪者になっていたようだ。

チャイムがなり、みな席へ戻る。何人かが、わざとぶつかっていく。

仕方なく席に座ると、不気味な顔がこちらを見ていた。

「ねえ立花君。いつならいい？ 私、どうしてもあなたに頼みたい……」

血の気が引く、というのはこういうことなんだな。一気に体が冷たくなっていく。

どうしたらいいんだろう。なんと言え、断れるんだろう。

さすがにお前のような気持ち悪い女の頼みなどお断りだ、などと馬鹿正直に言う訳にはいかない。

「わかった。明日。でも、葉山も一緒にいいか？」

「え？」

目をギョロつと動かし、後ろの方を見ている。

「2人がいいのに……」

「それは、ちょっと」

百井はしばらくこつちを睨んだ後、今度はニヤリと笑った。

「ああ……そう。わかったわ。じゃあ明日、お願いする」

やっと前を向いてくれた。

母さんに何と言ったら明日学校を休めるだろう？ 初めてそんなことを真剣に考えた。

休み時間になるたびに、隣の席には大勢が集まってくる。

自分の席にいるのが苦痛で、1番後ろの良太郎の元へ休み時間ごとに逃げ出した。

「玲二、どうした？」

「いや、人が多くて……」

「なんか顔色悪いよな、今日。大丈夫か？」

そう言いながらも、どうやら百井のことが気になるようだ。目が俺の向こう側を見ている。

お前もか……と思ったが、それを口に出すことはできない。

「良太郎、明日の放課後、時間あるか？」

「ん？　なんで？」

「百井が、学校の案内してほしいって」

「……マジか？」

「ああ。行つてくれるか？」

「当たり前だろ？　行くよ」

顔が赤い。目がうつとりしている。途中でなんとか抜けて、あとは全部任せてしまおう。

「なあ玲二、女神って英語でなんていうんだっけ？」

まさか、あの百井　沙夜のことを女神と呼ぶつもりなのか？

嘘でも教えてしまおうかと思ったが、それはさすがに悪い気がして、返事はしなかった。

今日の授業は午前中だけだ。園芸委員の仕事があるとは言ったが、本当にあるかは把握していなかった。担当の教師である吉田に聞きに行かないとわからない。

帰りの支度をしている間、右から視線を感じた。あの転校生がこちらを見ているようだ。

自分の何が気になるというんだろう。態度の悪いやつだと、早く嫌われてしまいたい。カバンに教科書を入れて、帰り支度を済ませる。右側は見えないようにして、いつきの元へ急いだ。

しかしその手前で、相原がなぜか立ちふさがる。横へよけようすると、相原も動く。幼稚な通せんぼにため息が出た。

「何か用なら早く言ってくれ」

「……明日の学校案内は僕に代わってくれ」
初めてこいつがいいやつに見える。

「そんなことなら喜んで。こっちから頼みたいくらいだ」

良太郎と一緒にだが、やってもらえるだろうか。いや、ここは黙っておいて引き受けてもらいたい。

「なあ立花、なんで百井さんの願いを聞かないんだ？」

「……？」

「あんなに素敵な人のお願い、なんでお前は断る？ 転校生で右も左もわからないんだぞ？ 隣になったお前と打ち解けたいって思ってるのに……なんで親切にしないんだよ！」

相原の声は前と変わらず段々大きくなっていく仕組みのようだ。もちろんそれは教室中に聞こえて、周りの生徒たちもそうだそうだと声を合わせて詰め寄ってきた。

なんなんだこれは。頭がクラクラする。

「答えろよ、立花」

「やめて、相原君」

いつきが立ち上がった、間に入ってきてくれた。

「立花君はここのところちよつと、調子が悪いの。それに、こんな風にみんなで責めるようなことじゃないと思う。おかしいでしょ、こんなの。お願いだからやめて」

「園田さん……」

さすがに相原が少し引く。他の生徒たちも黙った。

「玲二くん、大丈夫？ やっぱり顔色が悪いよ。保健室行く？」

いつきが顔を覗き込んできた。自分ではわからないが、本当に青くなっているかもしれない。

「大丈夫だよ」

「園芸委員も休んで。私が行ってくるから。もう帰ったほうがいいよ。ね？」

心底心配していそうな顔が、少しかすんで見える。

一緒にいたい気持ちもあったが、確かにそれよりも帰って休んだほうがよさそうに思えてきた。

「わかった。ありがとう」

一人で駅まで歩く。どうやら、あのおぞましい転校生が着いてくるようなことはないようだ。

電車で揺られ、フラフラしながらなんとか家にたどり着いた。

夕食は一口も喉を通らず、母との約束は破ることになってしまった。

目の前にいつきがいた。優しく、微笑んでいる。

手を伸ばして、頬に触れる。恥ずかしそうに、いつきが下を向く。あごに指を添えて、自分のほうを向かせた。

そつと唇を重ねる。いつきはそつと目を閉じて、俺を受け入れた。

ああ……

夢をみているんだな……。

唇を何度も重ねながら、ぼんやりとそう感じた。

夢でもいい。幸せだ。

柔らかい草の上に、2人で寝転んだ。そして、またキスをする。

腕が伸びてきて、抱きついてきた。

柔らかい体を感じて、たまらなく愛おしくなって、いつきの首筋に唇をつけた。

「あ……」

甘い声に、腕に力を入れる。強く強く、抱きしめた。

「玲二くん……」

目覚ましが鳴って、ぼんやりと目を開ける。

……いいところだったのに。

汗びっしょりだった。

息も荒い。

体が熱いし、寒いし、頭が働かないし、動けない。

しばらくして、ドアをノックする音が聞こえた。

「玲二、入っていいか？」

父さんの声だ。返事をしようと思ったのに、声が出ない。

ドアが開く音がした。部屋に入ってきたようだ。

「どうした？ まだ寝てるのか？」

顔を動かすこともできない自分に気がつく。どうしたんだろう……

……？ こんなことは初めてだ。

カーテンを開けて、ベッドの横まで来た父さんが顔をのぞきこんでくる。

「ひどい汗だな」

額に手が置かれた。

「……ちよっと待ってなさい。母さん！」

慌てた様子で部屋を出て行く。すぐに母さんと一緒に戻ってきた。

「玲二、大丈夫？」

すぐになにか冷たいものが額に乘せられた。濡れたタオル、かな。

「こんなこと、初めてじゃないか？」

「そうね……」

2人が話しているのが視界の端に入ってきた。

「ご飯だって全然食べてないし……」

母の目には涙が浮かんでいる。

死ぬわけじゃあるまいし。大げさだな。

タオルで顔の汗が拭かれる。

「学校には連絡するから、今日は休みなさい。なにか飲む？ 食べれそう？」

首を軽く横に振る。なにも欲しくない。

でも、そうか。休みか。なら安心だ。あの素敵な人のお願いとやらを聞かなくて済む。

「どうしたの、笑ってるの？ 大丈夫？？」

「うん……」

なんとか声を出した。なんだか、ぼんやりしている。まぶたが重くて、もう目を閉じたい。

「もうちょつと寝る」

「そう？ わかったわ。また様子を見に来るから。ここにお水、置いておくわよ」

母さんが出て行き、少ししたところでメールが来た音がした。のんきな電子音を聞き流してしばらくしてから、はっと気がつく。いつきからじゃないか……。

重い体を動かして、机の上にある電話を手を取った。

もしかして、今日はお休みなのかな？

今から電車に乗ります。

いつきへの連絡があるわけがない。

いつもよりもゆっくり、ボタンを押してメッセージを打った。

今日は休みます

連絡しなくてごめん

また来週

送信してから、またベッドに横になった。

頭が重い。なんでこんなことになったんだろう。

熱が出たとか、起き上がれないなんていうのは初めての体験な気がする。学校でもずっと、皆勤賞をもらっていた。

あの転校生がイヤで、それでこんなに弱ってしまったのか？

昨日ズル休みする方法を考えたっけ。じゃあこれはストレスつてやつか……。

深い森の中を歩く。

大きな獣と一緒にだ。

暗い森の中で、自分と、隣の狼の足音しかない。木の枝や落ち葉を踏みながら歩いていく。

時々、大きな鳥が上空を飛ぶ。影が地面を走っていった。

やがて木々がなくなり、突然目の前に崖が現れた。下をのぞきこむと真っ暗で、底は見えない。裂けた地面の向こうにはまた森が広がっている。この崖を越えなくては、先へは進めない。

狼は行こうと促してくる。

……無理だ。

少し後ろに下がると、狼は助走をして地面の裂け目を軽々と飛び越えて行ってしまった。

「待って……」

声をかけると、狼は振り返ってこちらを見た。
早く来い

そう言っている。

向こう岸までの距離は、かなりある。同じようには飛んでいけない。

振り返ると、歩いてきた道は霧に包まれていた。

じわじわと白いもやが周りに忍び寄ってくる。少しずつ、狼の姿も見えなくなっていく。

遠くから自分の名を呼ぶ声がした。

ドアが開く、ガチャっという音で目が覚めた。

「玲二、具合どう？」

母がお盆を持って立っている。なにか作ってきたようで、いいにおいがした。

「スープ作ったの。飲めるかしら……」

首を動かして時計を見ると、もう12時だった。結構な時間眠っていたようだ。

大量に出ていた汗は引いていて、気分も朝よりだいぶいい。体を起こすと母さんはほっと息を漏らした。

「朝より良さそうね」

「うん……」

「食べられる？」

黙って頷いた。おなかがすいたな、と思った。

スープはとても美味しかった。

「ごちそうさま」

皿が空になったのを見て、母さんは安心したように笑みを浮かべた。

「良かったわ、ちゃんと食べられて。大丈夫そうね」

「気分もだいぶいいよ」

汗をかいたせいか、体が気持ち悪い。シャワーでも浴びに行こうか……。

そんなことを考えていると、ベッドの横で母さんがじっと座って悲しそうな顔をしているのに気がついた。

「母さん？」

「玲……ごめんなさいね……」

「どうしたの」

「私たちのせいで、あなたを苦しめてるのよね……。勝手なルールであなたを縛ったりして」

ポロつと1粒、涙が落ちた。

「母さん……」

「こんなに追い込んだりして、ごめんなさい。無力な私を許して……」

母さんは自分のせいで息子が弱ってしまったと思っていたように、確かに一昨日までは母を恨むような気持ちがあり、落ち込んでいた。けれど、いつきに会って、気持ちを入れ替えて前向きにと決めた。

今調子が悪いのは、母さんではなくあの転校生のせいだ。

「俺は平気だよ。わかってるから。俺1人の問題じゃないし」

母さんが顔を上げる。目が赤い。

「母さんが俺のこと考えてくれてるってわかってるから。だから……」

泣かないで」

この1週間で2人も女性を泣かせてしまった。相原の言ってることが正しいのなら、3人ということになるだろうか。

「ありがとう」

母さんは涙をエプロンで拭いて、ちょっと微笑んだ。

「スープ美味しかったよ」

「よかったわ」

「シャワー使っていい？」

「いつてらっしゃい。シーツ変えとくわね」

階段を降りて、風呂場に向かった。

熱いシャワーを浴びながら、ふとさつき見た夢を思い出す。

あの森は……母さんの故郷の森だった。

俺には、あの崖を越えることはできない。でも、あの向こうになにかがある。そんな気がした。

部屋へ戻ると、ベッドがキレイにセットされていた。掛け布団や枕カバーもさっぱりと乾いたものに変わっている。

机の上では電話が着信を知らせるランプを光らせていた。

確認すると、メールが2通来ている。

玲二、具合はどうだ？？

これから沙夜ちゃんをご案内するぜ！

あとでまたメール送るからな！

良太郎からだ。実に嬉しい報告だった。滞りなくご案内が済むといい。

もう1通は、やはりいつきからだった。

玲二君、具合はどうですか？

少しはよくなったかな。

土日もゆつくり休んでね。

月曜日、また駅で待ってます。

いつき

あの、木の下で一緒に過ごした時、どうもいつきは俺が不治の病かなにかにかかっていると思っただった。違うとは言ったが、信じているのか信じていないのか……とにかく、こちらの具合にひどく敏感になっている気がする。

そのおかげで昨日はあのクラスメイトたちの包囲網を抜けられたわけだが。

しかし、病気なわけではない。そんな勘違いであまり心配をかけたくはない。

来週はちゃんと元気な姿を見せよう。いつきを安心させたい。無理に作ったものじゃなく、心からの笑顔が見たい。

少し考えて、ある作戦を思いついた。月曜日に実行するでしょう。うまくいくかはわからないが、何もしないよりはマシだ。

週末はいつきの言うとおり、体を回復させるのに努める。

いつきだけではなく、父さんと母さんも安心させないといけない。

電話のボタンを押して、だいぶ元気になったといつきに返事を送った。

月曜日は、なるべく大きな声でおはようと言おう。そう、決めた。

#12 「待つって決めたから」 <いつき>

日曜日は千早の家に集合、というメールが届いたのは土曜のお昼だった。

メールを見てすぐに、パウンドケーキを作り始めた。一晩寝かせたほうが美味しいから。なにを入れようかちよつと考えて、ドライフルーツに決めた。

今日は珍しく、兄も弟も皆いない。将兄ちゃんすらいらないなんて、稀に見る珍現象だ。

お母さんも子供たちが出払っているので気楽なのか、買い物に出たつきり戻ってこない。どこかでお茶でも飲んでのんびりしているんだろう。たまにはそういう贅沢も必要だ。

オーブンをセットして、テレビをつけた。

この秋のトレンドについて、美容研究家なんていう人が解説している。

これまでは気にならなかったけど、今日はしっかり見てみる。流行のアイテムやメイクのテクニックが次々と紹介されていく。いつもは見えていなかったというか、兄たちがいるとこういうコーナーは大抵チャンネル変更でみるのができなかった。

モデルの女の子がメイクで別人のようになっていてのを見て驚く。目が大きくなって、やたらめったらキラキラしている。

私もバッチリメイクしたら、玲二くんは可愛いつて言ってくれるかな？

買ってきた雑誌にも、化粧品の類はたくさん紹介されている。だけど全部揃えるにはお金がかかりそうだ。

次の日、お昼に千早の家に向かった。インターホンをならすと、笑顔ででてきたのは千早の妹だ。

「あ！ いつきちゃん、いらっしやーい」

「茜ちゃん、ひさしぶり」

「おねえちゃん！ いつきちゃんだよー」

姉も奥から出てくる。

「待ってたよ。いつきが1番。入って」

持ってきたパウンドケーキを渡すと、茜ちゃんの方が大喜びした。可愛い小学5年生、と思ったら千早が苦々しい顔をしている。

「この子もう彼氏いるんだよ……」

「え？ ホント？」

おませな小学生はニヤッと笑って答える。

「うん。ヤマトくん。カッコいいんだよ。サッカー部なの」

実に遠慮なく自慢されてしまった。

「イヤだよね、最近の小学生って……」

「いつきちゃんは？ 彼氏いるの??」

「生意気なっ。いるに決まってるでしょ！ いつきっ、みせてやりな写真を」

無茶なことを言ってくる。

仕方ないので、携帯電話を取り出す。友人の「姉の威厳」がかかっているんだから。せっかくなので、こっそり撮ってこっそり待ち受けにしている最高の1枚を見せよう。

「はい」

「へへ……、わっ！」

茜ちゃんは口を大きく開けて、両手をあてたポーズでしばらく止まってしまった。

「すっごくかっこいい！ モデルの人……?」

「おほほ……！！ 実物はもっとかっこいいのよ。スラッとして頭もいいのよ」

なぜか千早が勝ち誇ったような顔をしている。

茜ちゃんはシュンとして部屋を出て行った。小さい子をだまして少し大人気ないかなと思う一方、玲二くんをほめられてなんとなく嬉しい気もする。

「ちはやく、ピザどれにする？」

今度は千早のママがカタログを手に入ってきた。この家に集まった時の食事は、宅配ピザと決まっている。

「いつきちゃん、私にも彼氏の写真見せてよ」

茜ちゃんが言ったのかな。仕方なく、もう1度携帯を取り出した。

「わお……あ、これって立花君？　だよ。あの、ハーフの」

「そうです」

「そうなんだ〜！　いつきちゃんの彼氏なのね。相変わらずかつこいい……。背も高いんだよね！」

お母さんたちの人気が本当に高い。本人はきつと知らないんだろうけど。

「今度連れてきてよ。会いたいわ〜。今でもいいけど。っていうか今呼んでほしいわ」

「ああ……、今ちよつと具合が悪いみたいで」

その前に、まだ彼氏ではないんだけど……。というのは今更言いつらいな。

「え？　そうなの？」

親子でハモる。妹と揃って、本当によく似た親子だ。

「金曜日も休んでたから。もう元気になったよってメールは来たんだけど」

「そうなんだ〜。じゃあ無理はさせられないよね。こんな女だらけのところでは落ち着くわけないもん」

千早のママはアハハと笑うと、ピザを頼んでくると言って部屋を出ていった。

そこにインターホンの鳴る音がして、友香と則子が揃って現れた。

届いたピザをみんなで食べながら、またダラダラと会話する。新学期が始まってけだるいとか、そういう話だ。

おなが膨れたところで、友香がオホンと咳払いをした。

「わたし、大事な報告があります！」

ちよつと照れたような顔。もしやこれは……。

「島谷君と付き合うことになりました！」

3人でおおっつと声をあげ、拍手をした。まずは千早がつっこみを入れる。

「なによ……花火大会で？ うまくいったわけ？」

「あの日ってわけじゃないけど、まあきっかけにはなったよね」

ふんふんと3人で話を聞く。

「プリンスが倒れたでしょ、あの時、島谷がこう、救助しようと思った動いてたのがね」

確かに、玲二くんの様子をシャキシャキ確認してた。

「頼もしいな〜って思っちゃって。それで、その後部活の日に思い切って告白したんだ……」

友香がこんな風に照れながら話すのは珍しい。そして、とっても可愛い。

「葉山君のおかげだね。あの日、島谷が来た時はなんで気になってるの知ってるのか、ちよつとコワっ！ って思ったんだけど。でも呼んでくれてすごくよかった」

則子や千早が恋愛の進捗具合を根掘り葉掘り聞く。まだなんにもないよ〜と友香は赤くなりながら話した。

これは葉山君、お手柄だなあ。あとで報せてあげよう。

「そういえば、則子もあの澤君つてのと盛り上がったよね」

千早に言われて、則子もなんだかデレっとしだした。

「そうなんだよね……えへへ」

「なに？ こつちも成立したわけ？」

「まだそういうわけじゃないけど……。でも、お互いのコスプレ写真を送りあったりしてるよ」

「へえ」

いいような、別にうらやましくないような、そんな感じで千早が短くコメントした。

「いいなー！ みんな……。私だけまだ1人かあ」

「葉山君はどうだった？」

「まあ、面白かったよ、話してたら。でもプリンスが倒れちゃった後は、なんかそわそわしてずっと心配してたから。……もちろん、私も心配だったし」

そうか。確かに、あの玲二好き具合を思えば、盛り上がってる場合じゃなかっただろう。

「大丈夫だよ、千早だってすぐ会いくらいあるよ」

「そうだよ。もうすぐ文化祭じゃん。いっぱい他の学校の人も来るでしょ」

秋は学園祭のシーズンだ。みんなで、お互いの学校を行き来しよう、なんて話していた。

「うちは男子はダメなんだよ。もう、イヤになっちゃうつ！」

「……」

もつかける言葉もない。

「で、いつきはプリンスとはどう？ 進展あった？ ないよね？」
どうもヤケになっているようだ。

「そうだ。倒れた後はどうだったの？ 大丈夫なの？」

則子が聞いてきた。……コスプレ写真の交換って、どんなものなんだろっ。

「具合悪いってさっき言ってたけど、なんか倒れたのと関係あるの？」

千早が言うと、2人も反応した。

「そうなの？」

「うん。なんかずっと元気ないから私も心配だったんだけど……。病気とかじゃないからって」

本当はまだちょっと不安だった。言えなくて、隠してるだけなん

じゃないかと思っている。

一昨日も休んだし、百井さんへの態度だっておかしかった。

「そっか。でもま、暑かったし、夏バテかもしれないよ。明日は元気だといいね、いつき」

「うん」

しばらく学園祭の話なんかをして、友香が急に思い出したように言った。

「そういえばいつき、転校生が来たんだよね？」

「え？ うん。来たよ」

「すごい美人ってホント？」

「……ホントだよ。しかも妙にセクシーで、男の子はみんなポヤーっとしてる」

則子と千早も、興味を示した。

「セクシーな転校生？　なんかスゴイキャッチフレーズだね」

「うん。髪型もね、ビシーっとまっすぐなの。前も後ろも。自信がないとできない髪型だと思う」

「島谷ものぞきに行ったらって言ってたんだよね。ちょっとムカついちゃった」

それで聞いてきたのか。確かに、他のクラスの男の子もよく見に来ている。

「プリンス大丈夫？　ヤラれちゃってんじゃないの？」

「ああ、玲二くんは……」

興味を示すどころか、すごくイヤがつているように見えた。

「隣の席なんだよね」

「えっ」

3人が声を合わせた。

「しかも、玲二くんに学校を案内してほしいとか、言ってくるの」
3人が揃って、悲劇的な顔をしている。

「でもね、すごくイヤそうなんだ。美人に見える？　って聞いてく

るの」

「なんだ……、ノロケか……」

千早がうつろな目をして呟いた。

「違うよ……！ 私もすごく焦ったんだから。声もなんか妙に色っぽい感じで、玲二くんの腕を掴んでさ、お願い、とか言っただよ。へんな汗が出て大変だったんだから」

「そうなんだ」

反応がだいぶお寒い。すっかりのろけていると思われているみたいだ。

「要は、いつきのことが大好きなんでしょ？ やあねえ……幸せ者って」

どうやらもう取り合ってもらえそうにない。

「プリンス、花火大会の時いつきとベツタリだったよね。見てて恥ずかしいくらい」

友香がニヤニヤして言った。確かに、あの日はやたらと甘い感じだった。

「うん……でも、あの日だけだよ」

「そうなの？ もう、抱かれちゃったんじゃないの？」

千早はすっかりやさぐれてしまったようだ。それにしても、なんていうことを言っただろう。

「やめてよ。それどころかまだまだ彼女にはなれそうにないもん……」

「え？ なんで？」

「わかんない……。話せないんだって。なにかわからないけど、事情があるみたい」

「なにそれ、プリンス、ひどくない？ あんなに『可愛いよ』とか言っというて、どういうこと？」

「うん……」

私がしょんぼりしたのを見て、千早は追及の手を止めた。

「わかんない。どうしても言えないからって、すごく苦しそうだっ

たの。だからそれ以上聞けなくて」

思い出すと、私も胸が苦しくなる。あんなに不安な気持ちになった日なんて、今までなかった。

「でも、いつか話してくれるって思ってるから。待ってるんだ……」

「いつき……」

友香が泣きそうな顔をしている。

「友香、どうしたの？」

「だってもう6年以上も片思いしてるのに……。てっきりうまくいってると思ってたのに……。こんなに可愛いいつきをこ待たせるなんて許せないよ！」

「泣かないでよ……」

友香の涙を見たら、なんだか泣けてきた。

それを見てなのか、千早もなぜか泣き出す。則子も、うるうるしている。

4人でおいおいと泣き出すと、驚いたのか千早のママが様子を見にやってきた。

「どうしたの？ 何があったの」

「うう……女の友情だからこれは……。ママはあっち行つて……」
千早が泣きながら言うと、部屋のドアはそっと閉まった。

散々みんなで泣いて、ちょっと落ち着いたところで友香が聞いてきた。

「いつき、まだ待つなの？」

「……うん。待つ。玲二くん以外、考えられないもん。それに、すぐくつらそうだから。ちよつとでも、力になりたいんだ」

「そっか。……わかった。引き続き応援するよ。ね」

2人もうんうんと頷く。

みんなが使ったティッシュで、ゴミ箱がいっぱいになっている。

その後、気を取り直してパウンドケーキを切り分けて食べた。また少しずつ、くだらない話で盛り上がっていく。

「ねえ、千早。今度メイクの仕方教えて」

この中で1番しつかりオシャレをしているのは千早だ。

「え？　なんで？」

「……可愛くなりたいって思ってた」

「それって、プリンス向け？」

「うん」

千早は大きなため息をついた。

「いつきはそのままでもいいよ。メイクなんかしたらもったいない。ちゃんとお肌キレイにして、髪とか眉毛整えるくらいでいいよ」

なぜか、横の2人も頷いている。

「メイクした顔が好きっていう男もいるだろうけど、プリンスは違うと思う。多分しないほうが可愛いつて言われるよ」

「そうかな……」

「そうだよ。だって、あんなに可愛いつて言ってたじゃん。あの日だけだったとしても、きつと本気で言ってたでしょ？　プリンス、嘘つけなさそうだもん。だからいつきは今のままでいいよ」

「ありがと」

千早がにっこり笑う。

「無敵の美少女なんだから、自信持つて。長期戦になるんだったら、余計にお肌は大切にしないとね」

優しい言葉に、黙って頷いた。

「そのかわり、学園祭に行った時にいい人紹介して」

「うん。わかった」

とはいえ、あまり心当たりがない。

「友香、誰かいい人いる？」

「え？　うーん」

「ちよつと2人とも……。真剣に頼むからね！」

4人で、大きな声で笑った。

メールの着信音がして、目が覚めた。

朝イチ占いメール。これが、いつも目覚まし代わりになっている。今日のいて座は12位。最下位か……。朝からなかなか憂鬱な気分にさせてくれるじゃないの。

……なにもかもうまくいかない1日。でも、笑顔を忘れなければ最後にいいことが！

笑顔ね……。

玲二くん、元気になったかな。今日は来れるかな。またげっそりしてたらどうしよう。

いやいや……。だからこそ、私が笑顔でないと。12位なのは嬉しくないけど、占いメールのアドバイスに従って忘れないようにしよう。

部屋から出て、母におはようと声をかける。朝食の準備を手伝って、1番に食べ終わって洗面所に移動した。早くしないと混んでしまう。少しでもキレイにして行かなくっちゃ。

部屋に戻ると、電話のランプがチカチカしている。メールが来たらしい。誰だ誰だ、急いでるのに。

今日はいつもどおり行きます。

玲二

「玲二くん……！」

つい、声が出た。わざわざメールをくれるなんて。しかも、玲二、
ってかいてある。

今日の占いは多分ウソだな。笑顔をおさえきれず、急いで着替え
て弾む足取りで家を出た。

もうすぐ駅というところで、電話が鳴った。ポケットから出すと、
家からだと表示されている。

なんだろう……？

「もしもし」

『いつき、どこにいるの？』

お母さんだ。

「もうすぐ駅だよ」

『カバン忘れてるけど？』

持つてるけど……と思つたら、確かにつけているはずのキーホル
ダーが見当たらない。

「すぐ帰る！」

慌てて家に戻る。これは、弟のカバンだ。

玄関で靴を履いている時に置いて……そこにちょうど、弟のカバ
ンもあった。おさがりであげた自分の中学の時のものだったから、
何の違和感もなく持つていつてしまったらしい。今更随分つまらな
いミスをしてしまった。

でも、間違つたまま学校に行かなかったことは本当に良かった。
中学の教科書持つて途方にくれるところだった。弟だって困つただ
ろう。

「早起きしててよかったわねえ」

お母さんが笑って言う。確かに。玲二くんにつきあって早く行っ
ているおかげだ。

また慌てて、駅へ向かう。途中また着信音がして、走りながら確
認する。

玲二くんからだ。

今日は用があるので、先に行きます

ガクつと力が抜けて、走るのをやめた。

こんなに急いで行こうとしなければ、カバンのミスもなかったかもしれない。なにが早く行っているおかげだ……。ダメじゃん……。ため息をついて、とぼとぼと駅まで歩く。

「いつき！」

後ろから声がした。幸四兄ちゃんが自転車で見れる。

「どうしたんだよ。お前の背中、マイナスオーラ全開だぞ」

兄は3年生で、自分とは違う高校に通っている。高校までは自転車ですら30分らしい。

「なんでもない」

「シケた顔だなあ。元気出せよ、ほれ」

小さなチョコレートを手渡される。

「じゃあな」

兄から渡されたチョコを食べた。カリつとかじると、異様な味が口に広がる。

包み紙を確認すると「新感覚！　たくあんチョコ」と書かれていた。

確かに新感覚かもしれないけど……。

気遣いは嬉しかったけど、味はちつとも嬉しくない。結局元気が出ないまま、改札をくぐった。

電車で揺られて、2つ目の駅に着いた。高校まではあと3駅。

ドアが開いて、何人かの客が降りる。そして、大勢が乗ってきた。

「園田さん」

……この声は！

「おはよう」

「相原君」

今は隣の席の、相原君だ。動物園から「夏の間よく来てくれたで賞」をあげようか検討された、相原君だ。

「おはよう……」

一番苦手なクラスメイトが笑顔で目の前に立っている。どうやら今日の占いは大当たりらしい。

確かに、彼も来るのは割りと早い。逃げ出したいけど、混雑した車内でそれは無理だ。

「いつもこの電車なの？」

「ううん、もうちょっと早いかな……」

相原君がこの駅から乗っているとは知らなかった。顔を直視できずに、少し下を向いてしまう。

「園田さん、僕ね」

チラッと見ると、やたらとにやかな顔をしているのが確認できた。

「夏休みのこと、怒ってないからね。いつか、わかってくれるって信じてるから」

「え？」

何言ってるの？

「今度、一緒にどこか行こうよ。映画が好きじゃないなら、プラネタリウムとか、博物館とか」

てつきり、魅惑の転校生にシフトしたと思っていたのに、そうじゃなかったの？

「百井さんは……？」

「え？ 百井さんが何？」

「なんでもない」

相原君はどこがいいか、次々と候補をあげはじめた。美術館だの、サッカー観戦だの、思いつく限りを言っている。

「園田さん、隣の席になれて本当に嬉しいよ。何か困ったことがあったら言ってね。僕がどんなことでも助けてあげるから」

ゾワゾワつとしながら、電車を降りた。このまま学校まで一緒に

歩くの？ それは……無理！

「私、急ぐから！」

そう叫んで、全速力で走った。

一気に階段を駆け上がって、教室のドアを開ける。

誰もいない。玲二くんの姿もなかった。どこに行ったんだろう。

図書室かな？

カバンを置いて、息を整える。図書室をのぞいてみよう。もうすぐ相原君が来るだろうし……。教科書を出して、机の中にしまふ。段々、呼吸も落ち着いてきた。

どうやら、数学の教科書を忘れてしまったようだ。仕方ない、後で友香に借りに行こう。はあーっとため息をついた瞬間、すぐ後ろのドアが開いた。

もう来た！？

「おはよう」

この声は、……百井さんだ。振り返って、挨拶をする。

「おはよう」

「……園田さんだっけ」

「うん」

大きな瞳がこちらを見ていた。やっぱり、すごい美人。大人向けのちよっとセクシーなグラビアで、挑発的なポーズなんかさせたら似合いそうだ。

「園田さんって、立花君と付き合ってるの？」

「え？」

突然の質問に戸惑う。百井さんは自分の席に行くそぶりもみせず、じつと返事を待っている。

「……付き合ってはいないけど」

「そうなの？ 仲、良さそうだけど」

「仲はいいと思うよ。友達だもん」

なんとなく自信がない感じになってしまった。どうも迫力があっ

て1歩ひいてしまう。

「そうなの。ただの友達なんだ」

おでこにキスされたことはあるぞとか、色々思うことはあったけど言えなかった。その程度？ と鼻で笑われてしまいそんな雰囲気がある。

「じゃあ、私が付き合っても文句、ないよね」

「玲二くんと……？」

「一目ぼれしちゃったから。カッコイイじゃない？ 彼」

その意見には異存はない。でも、すごくイヤだ。なんだかわざと不愉快にさせようとして言ってるような感じがする。

でも、ダメだと言う権利はない。それは全部、玲二くんが決めることだし。

言葉が出せないでいると、くすくすつと笑う声が聞こえた。

「あなたは彼のこと、好きなんでしょ？ もしかして、相手にしてもらえないのにつきまとってるの？」

「そんなこと、……ないもん」

「ふふっ」

小さく笑う。そしていきなり、胸を右手でガシッと掴んできた。

「ひゃあっ！」

変な悲鳴をあげて、慌てて離れる。

「貧相な体……」

余裕の笑顔で、百井さんが歩き出した。自分の席に行くようだ。

ひどく惨めな気分になってしまった。なんだかやけに悲しくて、涙が出そうになる。

そうだ……、1組に、友香に教科書借りに行こう。

教室から急いで出ると、廊下の向こうから葉山君がやってきた。

「園田ちゃんおはよー！ ……あれ、どうかしたの？」

「……え？ ううん、なんでもないよ」

葉山君は百井さんに好意を持っていると思う。なので、さっきの

ことは言えない。

本来なら1番の相談相手になってくれそうだけど、今回はダメだ。1組をのぞくと、友香の姿はない。部活の朝練に行ってるんだろ
うな……。少し、時間が早い。戻ってくるのはまだ先だろう。

ずっとよそのクラスをのぞいているのもなあ。

でも、教室に戻るのはイヤだ。

そうだ。図書室に行ってみよう。玲二くんがいるかもしれない。

しかし、そこに求める人の姿はなかった。

「おはよう」

横から声がする。木曜日に、玲二くんが話していた図書委員の人だ。あれ、男子の制服着てる。てっきり女子生徒だと思っていた。

「おはようございます」

「……立花君なら、今日は来てないよ」

にこやかに言われた。でも、少しトゲを感じる気もする。確かに、図書室は待合室じゃない。

「そうですか……。ありがとうございます」

仕方なく、図書室も出る。玲二くんはどこにいるんだろう？

とぼとぼと廊下を歩いていると、後ろから声がした。

「いつき？」

友香の声だ。なんだかすごく安心した気持ちになって振り返る。

「友香……」

友香は島谷君と並んで立っていた。なんだか照れたような、でも嬉しそうな顔。

「……島谷君も。おはよう」

「おはよう、園田さん」

陸上部の2人は爽やかだ。

「どうしたの？ 元気なさそうじゃん」

「うん……。ちょっとなんか、朝からイマイチ」

本当に、なにかもつまらないかな。占いは大当たりだ。

「そんな顔してたら、プリンスが心配するよ。笑顔はどうした！
笑顔は」

背中をバン！と叩かれる。

「いたっ！……もー、ちょっとは手加減してよ」

でもそうか。あの占いが大当たりなら、笑顔でいればいいことがあるんだよね……。

「友香、あとで数学の教科書借りてもいい？」

「え？ ああ、今日私数学ないよ。教科書も置いてないし」

「ええ？」

声をあげると、島谷君が笑った。

「俺の貸そうか？ 何時間目？」

「……2時間目」

「わかった。俺1時間目が数学だから、休み時間に来てくれる？」

4組だから」

「ありがとう。島谷君っていい人だね」

友香がニコニコしている。くっそう……！ 幸せになっちゃって……。

悔しいので、背中をバシッと叩いてやった。

「なにすんの？」

「……別に」

そう言ってちょっと、笑った。

友香と会ったおかげで、少し元気が出た。

気がつけば、ホームルームまであと5分。気が重いけど、教室へ戻ることにした。

後ろのドアだと自分の席がすぐだけど、隣に相原君が座っているかもしれない。

それを思うと憂鬱で、前のドアから入ることにした。そっと中の様子を伺う。

「……あれ？」

相原君の席に、玲二くんが座っている。

こちらに気がついて、右手を軽くあげてくれた。慌ててそばへ行く。

「おはよう」

「……おはよう玲二くん。なんだか、元気そう」

「もう元気だよ」

先週とは違ってかわって顔色もいい。ちょっとゲッソリしてた頬も、なんとなく元に戻ってきている気がする。

「親切的な相原君に、席を替わってもらったんだ」

「……え？」

「今日からよろしく」

そう言って笑顔で、手を差し出してきた。みるみる嬉しくなつて、両手でぎゅっと握った。

「うん。よろしくね、玲二くん」

席に座ると、すぐにホームルームが始まった。

「おはようみんな」

荒川先生が入ってくる。今日も笑顔だ。

「今日は全員揃っているな」

視線を感じて、窓のほうを見た。

相原君がこつちを見ている。なんだか複雑な表情だ。そしてその手前には百井さんがいる。

……睨まれている気がする。

「園田」

横から声がした。優しい顔の玲二くんがいる。

「見るんなら、前か、真横にしとけよ」

「……やだもう。なんか最近、キザな感じだよね」

呟くと、照れたのか赤くなつてしまった。

そうそう、こういう玲二くんのほうが絶対落ち着く。

1時間目が終わって席を立った。島谷君のところに教科書を借りに行かないと。

「立花君」

不吉な声に、つい立ち止まった。

「どうして相原君と席、変わったの？」

もちろん、百井さんの声だ。

ふりかえると、玲二くんの前に女豹が立っている。そして周りにはなぜか男子生徒がいっぱいだ。

「俺、窓際だと日焼けして痛いから」

「ウソ」

「嘘じゃないよ。……肌がちょっと弱いんだ」

みんな、様子を伺っている。

「それに、座高が高いから後ろの清野に悪くって。だから足の長い相原と変わってもらっただけ。なにか問題ある？」

急に名前を出された清野君はきょとんとしている。

全体的にすぐウソっぽさが漂っていた。間違いなく足は玲二くんの方が長い。背が高いから確かに座高は高いかもしれないけど。

美人転校生は玲二くんをじっと見ている。次に、私をじろつと見てきた。思わず後ずさりしそうになってしまう。

「相原、ありがとうな。これで左側だけ肌荒れしないで済むよ」

爽やかな言い方に、少し後ろにいた相原君が驚いたように頷く。

「そう」

百井さんは諦めたのか席に戻っていった。取り巻きの男子生徒たちもそろそろとついていく。

窓際まで戻って行ったのを見届けてから、玲二くんが声をかけてきた。

「ウソってなんだよなあ」

「ウソっぽかったけど？」

この返事に、王子様はちょっと笑顔を浮かべた。

そしてチャイムがなって、休み時間が終わったことを報せてくる。

「あ……！」

教科書を借りにいけなかった。

「どうした？」

「数学の教科書忘れたんだ。借りにいこうと思ってたのに」

「俺の見たらいいよ」

そう言っ、机が寄せられてきた。一気に胸の中がぽかぽかと暖かくなる。

私って、現金だな……。

いつもは退屈な数学の授業も、今日だけは楽しく受けられそうだった。

13 「あの娘のご指名」 & l t ・玲二 & g t ;

「なにちゃっかり隣になってるんだよ」

前の席がまた宗田になり、その宗田はまた良太郎に席を奪われることになった。

「たまたまだよ。俺は窓際じゃなかったらどこでもよかった」

「嘘くせえな」

朝、まず職員室へ向かった。色々な理由を用意して、どうしても席を替わりたいと申し出た。

1番強く主張したのは日焼け問題だ。実際、あまり日に当たると赤くなつてあとがキツイ。

「本当だよ。たまたま相原が来たから、お願いしたんだ。クラスメイト思いみたいだから」

「俺と変わってくれたらよかったのに」

「お前も窓際だろ？」

「そうか……」

良太郎は、はあ〜と大きくため息をついた。

どうやらあの転校生が随分気になるようだ。積極的にまわりに集まることはしないらしいが。

「金曜日にさ、学校の案内したんだよ……」

そういえばそうだった。

「なんかつまんなそうでさ、沙夜ちゃん。途中でいなくなっちゃうし、最悪よ」

目の前にうなだれた頭頂部が現れる。結果報告がなかったわけだ。

「いなくなるなんて、感じ悪いな」

「沙夜ちゃんを悪く言つなよ。俺が気が利かなかったんだよ……。多分」

そういつてまたため息をついている。重症だ。俺にはどうしても、その気持ちを理解できそうにない。

「良太郎の良さをわからないなんて、あいつの目が節穴なんだろ」

「……なんだよ玲二。俺を慰めてくれてんのか？ 嬉しいぜ！」

良太郎は立ち上がって真正面から頭を抱いてきた。

「葉山君……。何してるの」

ちようど教室へ戻ってきたいつきが呆れたような声をあげた。

「園田ちゃん、今だけ玲二を貸して」

「ええ？ ……うーん。ちよつとだけだよ」

そう言つてうふふと笑っている。

「どこ行つてたの？」

「ちよつと島谷くんのところ。教科書借りる約束だったのに、行かなかったから」

「え……なに？ どういう仲？」

「そうだ。言うの忘れてた。友香と島谷くん、付き合い始めたんだよ。葉山君のおかげ」

いつきは嬉しそうにカップル誕生の報告をしている。良太郎は頭を抱くのをやめないまま、喜んでいる。

「そついや園田ちゃん、相原のやつ、もう心配なさそうだな」

ようやく体が離れた。髪がボサボサだ。

「う……、どうかな。なんかまた、どこか行こうつて誘われたんだけど」

いつきは困った顔をしている。

「ええ？ あんなに沙夜ちゃんにデレてるのに？ 気持ち悪いやつ

だな、ホントに……」

「そつなのか？」

聞き捨てならない話に、つい口を出してしまった。

「今日、朝電車でたまたま一緒になっちゃって……。なんか、色々」と

「ま、大丈夫だろ。玲二がいるんだから。なあ」

そうであつてほしい。彼女がいいという相手なら口を出すことはできないが、相原はそのケースには当てはまらない。そんな話をしているうちに、昼休みが終わった。

月曜日は特になにも用事はない。

図書室へ本を返しに行こう。蔵元先輩のオススメ図書も土日で読み終わっていた。探したい本もある。

しかし、いつきをつき合わせていいか少し迷っていた。時間を持て余してしまわないか、1度聞いたほうがいいかもしれない。

「立花君」

突然、頭の上から声がした。

「約束でしょ。学校の案内、頼むわ」

不吉な声の持ち主は、勿論百井だ。

「金曜日に、……葉山にしてもらったんじゃないのか？」

「私はあなたに頼んだの。休んだのはそっちの都合でしょ」

どうしても案内しないといけないのか？

「早く」

馴れ馴れしく腕を掴んでくる。

「やめてくれ……！」

慌てて手を払う。また、あの顔だ。憎らしげな顔。鳥肌が立つ。

「どうしてそんなイジワルするの……？」

わざとらしくうつむき、悲しそうに言っている。

周りの男子生徒たちの視線が痛い。良太郎も複雑な顔でこちらを見ている。

「ごめん。いきなりだったから、ちょっと驚いて」

イジワルした覚えはなかったが、仕方なく謝る。すると今度はニヤリと笑った。

「じゃあお願い。行きましょ？」

周囲の視線が鋭くささる。振り返ると、いつきが不安げな顔をしているのが見えた。

「ちょっと待ってくれ」

「ダメ！ 行くの」

背中を押され、無理やり教室を出される。

「……葉山も一緒って話だろ？」

「彼は来る気、ないみたいよ」

確かについてくる気配はない。先ほど言っていた事を気にしているんだろうか？ そのまま背中を押され、廊下を歩き出した。

仕方ない。さっさと済ませるしかなさそうだ。

主な特別教室を案内して、早足で歩く。

校舎裏の花壇まで案内させられ、最後にはもうつんざりの塊になっってしまった。

「これで終わり。全部案内した」

「ありがと……」

気取った言い方だ。ただその一言だけだというのに、ムカムカとする。

「もういいだろ。俺は帰る」

「ねえ！」

振り返ろうとしたが、また腕をつかまれた。

「お礼をしたいんだけど」

「いない」

「どうして？ どうしてそんなにそっけないの？ あの園田って子に遠慮してるんだったら、別にいいのよ」

何の話だ。いきなりいつきの名前を出され、ますますイラ立ちが強くなる。

「園田に何の関係があるんだよ」

「あの子、あなたのことが好きなんですよ？」

答えに困る質問だ。確かにその通りだが、そうだと自分の口から言っているものだろうか。

「つきまとわれて困ってるんじゃないの？ 付き合う気もないのに

……」

「そんなことはない」

「正直に言っているのに」

ニヤニヤと笑う顔を、殴ってしまいたい衝動に駆られる。

「立花君、私と付き合って欲しいの」

身の毛もよだつとは、このことだろうか。思わず、一歩後ずさってしまった。

それに構わずに手を取ってきて、それを自分の胸にむぎゅっと当てる。

「好きにして」

慌てて手を引っ込める。

「何するんだ!」

「何って……。したくないの?」

変な汗がだらだらと出てくる。寒気がする。気分が悪くて、地面がぐにゃつとしてるように感じられる。

「何の話かわからないけど、全部お断りだ!」

慌てて振り返って、走った。教室へ戻って、カバンを取って、また玄関へ向かう。

そこにはまた悪夢が待っていた。

「どうして逃げるの……?」

「……お前が変なことするからだろ?」

「変なことって……。立花君、モテそうなのに。女の子の扱い方知らないのね」

そう言ってまたニヤニヤと笑っている。吐きそうだ。

「知らない! お前みたいな女の扱い方なんて……知りたくもない!」

なんとかそれだけ言った。自分の靴を出して急いで履き替える。

「ねえ、全部お断りって、付き合ってたっていうのもお断りなわけ?」

「そうだ。お断り」

「どうして?」

黙ったまま外へ出た。駅へと走る。明日また絡まれるだろうか。考えるとまた、寒気がする。

駅の手前でようやく足を止めた。しまった、図書室に寄るのを忘れた。本は机の中に置きっぱなしだ。

ため息が出る。せつかく土日で回復したと思っていたのに、また気分が悪い。

「玲二」

顔をあげると、良太郎が立っていた。アイスクリームを手に持っている。

「どうしたんだよ……。走ってきたのか？」

「良太郎」

2人で近くのベンチへと移動した。駅前の待ち合わせに使われるコーナーだ。

「ヤバい顔色だな」

「ああ」

「あ、園田ちゃん、こっち！」

いつきがアイスクリーム屋から出てきた。

「玲二くん！」

「一緒にいたのか？」

「うん。園田ちゃんとお互いを励ましあおうと思って」

ベンチに並んで座る。なぜか、良太郎が真ん中だ。

「沙夜ちゃんがお前を連れていつちゃっただろ？ 心配しちゃってさ……。俺も、自分の出る幕がないってしょんぼりよ」

自分が連れて行かれたことに、2人はそれぞれ落ち込んだということか。2人を落ち込ませる原因になった自分もまた、落ち込んでいる。

「お前も食う？」

「いや……。今は無理」

「ほれ」

アイスのかわりに、お茶のボトルを渡される。

「唇が乾ききってる」

確かに、指摘のとおりだった。一口飲むと、喉が渴いていたことに気がつく。ついたくさん飲んでしまった。

「ごめん。なんか……半分くらい飲んだ」

「いいよ」

背中をポンと叩かれた。

「園田ちゃんが、宣戦布告されたって言うてさ」

良太郎の言葉に、いつきがしょんぼりとする。

「いいよな……お前つて。やっぱりいい男は得だな」

そういつた本人もしょんぼりした。3人の若人は揃ってうなだれ、元気のかけらもない。

「玲二くん、百井さんになにか言われた？」

「……言われた」

胸までさわらされてしまった。が、2人にはとても言えたものではない。

「でも断ったから」

良太郎がチラッと見てくる。

「お前、沙夜ちゃんにちよつと冷たくねえか？」

いつもより声が少し控えめだ。いつきがその声に反応して顔をあげた。

「ごめん、園田ちゃん。でも俺、どうしても聞いておきたいんだ」

「良太郎には悪いけど、俺、あいつのことすごく苦手だ。相性が悪いのかな……？ 全然、美人だとかって思えないし、触られると……」

「鳥肌立つほどイヤ？」

「仕方ないだろ。そうなっちゃうもんは」

少し、納得のいかなさそうな顔をしている。だけど仕方ない。嘘をついたって意味なんてないんだから。

「まあ……そうか。相性ね。確かに、どうしても悪いやつもいるか」
アイスクリームのコーンをバリバリと食べて、巻いてある紙をクシャッと丸める。

「しょうがねえか！ 沙夜ちゃんも相手が悪かったんだな」

ふっきれたように言うその様子に、少し安心した。

「よかったな、園田ちゃん。どうやら敵じゃあなかったみたいだぜ？」

「……うん」

歯切れの悪い返事だ。良太郎の気持ちを思えば、手放して喜べるような状況ではない。

「ゴミ捨てに行ってくるね。葉山君のも、いいよ。私行ってくるから」

丸めた紙を受け取り、いつきは店の前のゴミ箱へ歩いていく。

「お前が園田ちゃんと付き合っちゃえば問題ないのにな」

小さい声が聞こえた。確かにその通りかもしれない。

いつきの方が好きだとか、誰が何と言おうと関係ないとか、そういうことを言うのに今の状況は半端すぎる。付き合っているわけでもないのに、そんな無責任な発言は出来なかった。

「わかってる」

我ながら弱々しい声だ。情けない気分、また少し落ち込んだ。

良太郎が自転車で去り、いつきと2人で電車に乗った。

「はあ……、今日は大変だったなあ」

そんなセリフと一緒に、可愛らしいため息も聞こえる。

「……ごめん」

つい、謝ってしまった。

「ん？ ……やだな、玲二くんは何も悪いことしてないじゃん。今日は本当に、タイミングとか全部悪くってイヤなことばかりだったんだ。まあ、百井さんには驚かされたけど」

「ああ」

本当に驚かされた。あんなに恐ろしい思いをしたのは初めてだ。
「ねえ玲二くん……。あのさ……」

いつきの方を振り返る。なにやら赤くなって、もじもじしたような様子だ。

「何？」

「えっと……」

かつてない恥ずかしがりようだ。一体どうしたんだろう。

黙って言葉を待つ。1 駅分経過したところで、ようやくいつきが口を開いた。

「私たち、つきあってるってことに、しない……？」

「え？」

「そうしたら、百井さんだってさすがにあきらめるでしょ？ あと、相原君だってもう何も言わないと思うんだ」

いつきは上目使いで、こちらの様子を伺っている。
たくさんの勇気を動員して、ようやく出した言葉のようだ。そんな申し出をさせてしまったことを、ひどく申し訳なく思った。

いつきは俺のことを強く思ってくれている。自分に向けられた愛情は驚くほど大きい。俺にとっても、彼女はもうかけがえのない存在になっている。

それを黙っているのはこちらの事情だ。言いたいのに言えない。言う事は許されない。もどかしさでどうにかなってしまいそうだ。
「本当に付き合うのは、玲二くんの気持ちが決まったらでいいから……違うか。付き合うか、付き合わないかは、玲二くんの返事待つから。それに、つきあってるフリも、玲二くんがイヤになったらすぐやめていいし」

いじらしい言葉に、胸がしめつけられる。

フリを受け入れるのは、いつきと付き合う気がないという返事になっってしまう。気が進まない。でも、フリすら受け入れないのは、

もつと悲しませることになってしまっただろう。

「園田、ごめんな……」

「え？」

「今はまだ、フリでもいいかな」

いつきが微笑んだ。

「いいよ。えへへ、フリでも玲二くんの隣にいられたら、嬉しいもん」

その笑顔と言葉に、心がまた爆発しそうになった。

「いつか必ず、ちゃんと返事はする。俺のこと見限るときは、園田も言ってくれ」

「見限るってなに？ 絶対そんなことしないもん！ 絶対玲二くんの彼女になるからね」

軽く頬をふくらませて、怒ったフリをしている。それをすぐにやめて、今度はビクリするほど明るい笑顔を浮かべた。

「よろしくね。玲二くん」

「よろしく……」

また頬が熱い。多分、真っ赤になっているだろう。

電車が止まって、2人で並んでホームへと降りた。

「ねえ、じゃあさ、いつきって呼んで？」

「え？ それは……、ちょっと恥ずかしいな」

いつきはいたずらっぽい笑顔だ。どうやら、答えはわかっていたらしい。

「ちょっと図書室に行ってくる」

次の日の朝、1人で図書室へ向かった。

一緒に行くか聞いたが、いいと答えられた。もしかして、暫定彼女になったからいちいちついていかなくてもいい、そんな余裕が生まれたのか……。

1人で図書室に来るのは久しぶりな気がする。ドアを開けると、カウンターにはいつものように蔵元先輩がいた。いつでも姿があるので、ちゃんと授業に出ているのだろうかと思うほどだ。

「おはようございます、蔵元さん」

「おはよう立花君」

先輩がいつもの笑顔で本を受け取って、返却手続きを済ませる。

「どうだった？」

「面白かったです。あつという間に読み終わりました」

「先週、なんだか様子がおかしかったけど。どうしたの？」

微笑を浮かべたままの顔に、質問される。

「ちよつと、具合が悪くて」

「そうなの？ なにか病気でもした？」

「いや、そういうのじゃないです。夏バテかな……」

なんとなく誤魔化すような言い方になってしまった。

「もう大丈夫です。あんなに具合が悪くなったのは初めてで、心配されましたけど」

「そう。確かに、今日は元気そうだね。先週はすごく顔色も悪かったし、少しやせたように見えたから心配したよ」

そこまで心配してもらっているとは思わなかった。本当に、女性だったらあやうく恋に落ちているところだ。

「ありがとうございます」

礼を言って、立ち上がった。探したい本がある。

妖怪や、日本古来の神についてかかれたものだ。人ではないものだと考えれば、なにか参考になるかもしれない。高校の図書室にどんなものがあるかはわからないが、そもそもそんな本を探したこともない。ためしにみてみる価値はありそうだ。

と思ったものの、結局あまりよさそうなものはなく、手ぶらで図書室を出ることになった。

ドアを開けると、目の前に史上最高にム力つく顔が立っている。

驚きの声をあげそうになるのをこらえ、横を通り抜けようとした。

「おはようも言ってくれないの？」

今朝も実に気取った言い方だ。イラっとしてしまう。

「おはよう……」

「立花君、おはよう」

心のこもらない挨拶にも動じないらしい。口の端をキュッとあげて、笑顔を作っている。

「ねえ、園田さんと付き合い始めたって本当？」

「本当。百井のおかげだな。ありがとう」

笑顔が消えて、百井の目は一気に冷たくなった。

「そんなに私のこと、イヤなの？ 付き合ってるフリするくらいイヤ？」

「フリじゃない。俺は園田のことが好きなんだ。百井は関係ない」

「嘘つき……。でも、嘘つきな男って嫌いじゃないわよ」

最後は怒った口調になっている。高校生とは思えない、恐ろしい強がりという女だ。

百井は足早に去っていく。行き先は同じ教室だ。一緒に歩くのがイヤで、しばらく図書室前に留まった。

「立花君、どうしたの？」

蔵元先輩が出てきた。初めて図書室以外で姿を見た気がする。

「いえ、ちよっと」

「もうすぐホームルームが始まるよ」

笑顔で促され、一緒に歩き出す。

「またキレイな子と話してたみたいだけど……？」

もしかしてあいつのことだろうか。

「やっぱり立花君、モテるんだね」

「そんなことは……」

「色んな女の子が、僕に名前とクラスを聞いてくるよ」

「そうですか」

こういう時にどういったらいいか、模範解答集はないものだろう

か。

自分の困った様子に、蔵元先輩はふふつと笑った。

教室へ戻ると、いつきが笑顔で迎えてくれた。

「百井さんにイヤミ言われたから、昨日から付き合いだしたって言っちゃった」

「さっき、聞いたよ」

「え？ いつ？」

「図書室から出たら立ってたんだ」

いつきの眉間にしわが寄った。驚いたような、困ったような顔だ。
「そうなんだ……」

前のドアが開き、担任が入ってくる。

「よう！ おはよう！」

すぐにホームルームが始まり、日常に戻る。

来月、学園祭がある。クラスで何をするか決めるように話があった。

こういったイベントは苦手だ。積極的に参加したことがない。

「楽しみだね、玲二くん。何がいいかな？」

いつきは楽しそうだ。きっと、仲の良い友人たちを招待するだろう。

頭に、高井戸と北沢の顔が浮かぶ。いつきに会いたいと言ってくるかもしれない。

いや、今の状況は好都合かもしれない。

つきあってるフリは、相原対策でもある。いつきと2人でいても、ストーリー対策だと言えば一応嘘にはならない。

そんなことを考えている自分が、なんとなく情けなかった。

それからしばらく、幸いなことに不愉快な転校生から絡まれることはなかった。

時折鋭い視線を感じたが、直接話しかけてくることもない。

学園祭では、喫茶店をやることに決まった。

可愛いメイド服のウェイトレスと、執事風のウェ이터がいるのがウリということにしようと、話し合いで決まる。当然のように、自分にはウェ이터の役が回ってきた。そんな恥ずかしいことをしたくはなかったが、勝手に役割の中に入れられてしまった。

この喫茶店の最大のウリは、百井といつきのウェイトレスらしい。百井はなんの異存もなく引き受け、いつきは少々恥ずかしがりながらも、最後は了承した。

予想の通り、高井戸からメールが届いた。

学園祭の日程の確認だ。隠したところで調べればすぐにわかる。

正直に日程を書き、ついでに喫茶店をやることも伝える。

返信はすぐにあつた。

喫茶店って、もしかして園田がおもてなししてくれたりする？

これも当日になればわかることだ。仕方なくまた正直に返事をする。

絶対行くことと、北沢にも練習を休ませるという内容のメールが返ってきた。

にわかに放課後の教室があわただしくなる。メニューや内装、当日のローテーションや役割分担など、決めることもやることも盛りだくさんだ。

部活動に参加していない者は強制的に動員される。帰宅部の俺ももちろん参加だ。

メイドや執事がいるのだから、落ち着いた内装にしようという話

になる。飾りつけはバラだのなんなの、特に女生徒たちが大騒ぎしている。内装のコンセプトに反して落ち着かない自分の救いは、いつきがいてくれることだった。金曜日はクラブ活動があるが、それ以外は毎日一緒に参加している。

もちろん百井も参加しているが、周りを男子生徒が囲んでいるのであまり動きがない。少し離れたところに座って、あまり視界に入らないようにしておけば問題なく過ごせた。

「メニューはこんな感じでどう？」

良太郎が自慢の達筆でメニューをかきあげて、女生徒たちが拍手を送る。

「葉山君って字がキレイなのね」

百井の声がする。他の女生徒たちも同意の声をあげる。

相原は張り切って予算の配分について熱く語っていた。相原もいつきのファンクラブ以外は特に活動がないらしい。

「立花君、ちょっとこっち来て」

江川 のの花に呼ばれた。彼女は衣装の担当だ。仕方なく近くに行くこと採寸が始まった。

「ピシっとしないとかつこ悪いもんね」

どうやら安いパーティ用の衣装を用意して、そこにアレンジをくわえるということをするらしい。

「足長いね！ これは盛り上がるよ」。立花君目当てで女の子っぱい来ちゃうね」

他の女子もきやあきやあ言って盛り上がる。ウェイター役は他に3人いるが、彼らはノーコメントで採寸されていた。

こういう時に役に立つ特技はないので、放課後飾りつけのバラ作りなどを手伝う。そんな作業なので、いつの間にか女子に囲まれてしまっていた。

「ねえねえ……、立花君って園田さんときあってるんだよね？」

中牧 翠が声をかけてきた。

「ああ……、うん」

恥ずかしくて、キレのある返事ができない。

「いいなあ〜！ 園田さん。こんなカッコイイ彼氏がいたら自慢だよねえ」

その言葉に、いつきも顔をあげる。いつきは、実行委員の綿貫たちとお茶と一緒に出すメニューについての話合いをしている。

「えへへ」

少しでれつとした笑顔で答えている。たまにああいうだらしのない顔になるのはご愛嬌だろう。

「ねえねえいつから？ 夏休みになにかあったの？」

「いや、2学期から」

「へえ〜。いつきちゃんすごい可愛いもんね。やっぱりなあ。付き合うと思ってたー」

「夏休み中に愛をはぐくんじやつたわけ？」

「デートはどこ行ってんの？」

女子たちは勝手に盛り上がり始めてしまった。こんな風に女性の群れに混じるといふのは、なかなか大変なことなようだ。洗濯機の中の洗濯物のように、もまれまくっている。

しかし今、男子生徒たちの俺に対する当たりはやたらと厳しい。

いつきのような可愛い彼女がいて、セクシーな沙夜さまの誘いを断った男の敵。それが今のステータスだ。味方は良太郎くらいしかない。

「できたできた！ ささ、試着してみて！」

江川が満面の笑みでやってきた。どうやら衣装が用意できたらしい。

「どこで？」

「いいじゃん。男子なんだから」

「いや……、それはちよつと」

女子たちの前でズボンを履きかえるのは遠慮したい。衣装を受け取って、男子更衣室へ向かう。他のウェ이터たちも一緒だ。

「いいよなあ……立花」

山野が呟く。目は冷たい。

「俺たちただの引き立て役」

松川の声も冷え冷えとしている。

「なあ、百井にあんなに誘われて、グラッと来ないなんてどういうこと？」

最後の1人、市ノ瀬が質問してきた。

「そう言われても……、なんとも思わないもんは仕方ないじゃないか」

「なんとも思わない？ 確かに園田とはタイプがだいぶ違うけどさあ」

「下半身に訴えるものもないの？」

「ないよ。ない。そんな質問やめてくれ」

「なんだよ。上品ぶっちゃってお前。いやだねー！ モテる男は。女に不自由したことないんだろ」

品のない質問をなんとかやりすごし、着替えを終える。

ペラっとしたスーツのような、スーツではないような衣装だ。ベストを中に着たことで、なんとか少し改まった感じが出る。

教室へ戻ると、女子がうわつと歓声を上げた。

「いい！ いいね！」

「これはいいよー！」

上のジャケットは脱いだほうがいいのか、首にまくものはどれがいいかとか、衣装係は実に嬉しそうにはしゃいでいる。椅子に座らされて、されるがままになる。

「やっぱりこれかなあ」

なにやら細いネクタイのようなネクタイではないようなものがつけられた。

「じゃあ立花君はこれで決まりにしよう！」

他の3人もそれぞれ小物を用意されていく。どうやら、全員が同じ衣装ではないようになっていいるらしい。江川はなかなか凝り性なようだ。

教室のドアが開き、また歓声があがった。振り返るとウェイトレスの衣装を着た女子たちが入ってくる場所だった。

黒いふんわりとしたワンピースに、丸い袖の白いブラウス、そして白いヒラヒラのエプロン。頭にも、白いヒラヒラがついている。髪形も、頭の高いところで2つにわけて結んでいる。メイドというよりは、ゴスロリと言ったほうがよさそうだ。

「うわー！ 可愛い〜」

入ってきたいつきはとても可愛らしかった。恥ずかしそうだが、ヒラヒラも良く似合う。ひざよりも長い黒い靴下に、下は上履き。これはきつと当日もつとちゃんとしたものになるだろう。

その後ろには仁谷 紗江と木下 美祢が立っている。2人もヒラヒラの衣装が楽しいようだ。そして最後に、百井が入ってくる。こちらは実に禍々しい。黒と白のコントラストはおどろおどろしく、ある意味1番似合うかもしれない。

「このリボンつけてみようか」

また衣装係が張り切りだす。黒や赤のリボンや、バラの飾りをつけて試している。それぞれにあったアイテムを決めて、衣装担当の江川はやりきった感じの笑顔を見せた。

「これでいいね！ うん。これはいいよ……。素晴らしい出来だね！」

襟元に黒い大きなリボンがつけられて、完成らしい。いつきはこちらをふりかえると、少し恥ずかしそうに笑顔を浮かべた。それに、微笑んでしまう。

「いいですね……。可愛い彼女さんで」

後ろから声がする。良太郎だ。

「さすが園田ちゃん。衣装に負けないね。ツインテールもいい」

そして俺のことも上から下まで見て、呟いた。

「お前も負けないんだな。その首元、普通のやつは似合わないぞ？」
そこに、ひらひらとスカートを揺らしながらいつきがやってきた。

「玲二くん、すつごくかつこいいね。よく似合ってる」

ヒューッと良太郎が口笛を吹く。いつきはちつとも気にしない様子で、机に戻りカバンから携帯電話を取り出した。

「葉山君、写真撮って」

そういうと、腕にぎゅっとしがみついてきた。

「へいへい。幸せなお2人に乾杯！」

チロリンと電子音になり、2人の姿が記録される。

「どう？」

「玲二くんが笑ってないよ」

いつきは不服そうだ。しかし他のクラスメイトの手前、笑顔を作ることは正直難しい。

「玲二！ スマイル！！」

どうやら開放もないらしい。仕方なく、カメラのほうを向く。

「うーん。……まあいいかな。ほら」

携帯の画面に、非日常的な格好の2人が写っている。

「すつごく笑ってる玲二くんも違和感あるもんね」

「確かにな」

そうか、そんな風に思われているのか……。

そこに、学園祭実行委員の綿貫がカメラを構えてやってきた。

「写真撮ろうぜ。ポスターにして入り口に張っておけば、お客さんもいっぱいくるだろ！」

ウェイターとウェイトレスが並べられる。背景が教室丸出しなので、黒い紙を用意して慌てて壁に貼った。

「よし！ いくぞー！」

「あ、足元はうつさないで！ 上履きだから！」

江川の声が飛び、ポスター用の撮影が終わった。

なんだかんだ、学園祭にすっかり参加してしまっている。本番まで、あと2週間ほどだ。

もしかしたらこういうのも案外いいのかもしれないなと少しだけ思った。

#14 「学園祭での攻防」 &1t;いつき>

学園祭当日は準備のためにいつもよりも更に早く家を出た。なにせ、メイクもヘアアレンジもするよ、と言われてる。一体どんな風にされてしまうんだろう。少し、ワクワクしながら駅へ向かった。

土曜日の早朝の電車には、いつもと違って通勤客の姿はほとんどない。

「楽しみだね、玲二くん」

「ん？ ……うん」

うん、と答えてるけど、そうでもなさそうな感じだ。

「もしかして緊張してる？」

「ちよつとね。慣れないことするわけだし」

小さくため息をついている。どう考えても玲二くんの性格からいって、苦手なことをさせられていると思う。いつも通りのクールな感じでと言われて昨日まで練習させられていた。嫌そうな顔はしていなかったけど、ちよつと疲れてるのかもしれない。

「私もあんな格好初めてだもん。思い切って、いつもと違うのを楽しんじゃえばいいんじゃない？」

「……できるだけ頑張るよ」

玲二くんは微笑んで答えた。それについて、顔が赤くなる。

楽しみだな。だって、絶対カッコいい。

ヒラヒラの衣装に着替えて更衣室を出ようとしたところに誰かが入ってきた。

「おはよう、園田さん」

百井さんだ。ピシッと揃った前髪の下から大きな瞳がこちらを見ている。

「おはよう……」

「ねえ、今日、楽しみね。学園祭なんてワクワクするわ」
「うん」

なんだかヘンな雰囲気だ。案の定、出ようとすると、腕で行く手を塞がれてしまった。

「何？」

「私、立花君のことあきらめてないから。ついでに言うと、今日私の物にするからね」

大きな目が、ギラッと輝いた気がした。迫力に押され、つい後ずさってしまふ。

「何も言わないってことは、異存はないのね？」

「あるよ。そんなの……」

「彼が決めることでしょ？」

余裕の笑顔で道をあけてきた。何か言い返したいけど、言葉が出てこない。結局何も言わないでとぼとぼと教室へと移動した。

「いつきちゃんこつちこつち！」

衣装係の横の机には色んなアイテムが用意されている。

玲二くんはまだ着替えずに、教室内の飾りの取り付けをしていた。高いところのものをまかされているみたいだ。

「あれ、どうかしたの？ 元氣ないじゃん」

「え？ ううん……。大丈夫だよ」

「いつきちゃんの笑顔がないとお客さん来なくなっちゃうよ」

江川さんがニコニコしながら、手に持ったヘアアイロンの電源を入れた。

「よし、じゃあ髪の設定からいきますか！」

椅子に座って、髪を梳かされる。教室の中では、係が内装の最終確認をしていた。

私がいなくても、多分百井さんさえいれば盛り上がる。
しかも、再びの略奪宣言。

あの大きな瞳で見つめられたら、玲二くんだって……。

みるみる元気がなくなっていく。

「いつきちゃん、百井さん見かけた？」

「え？」

「百井さん、見てない？」

「……見たよ。更衣室から出ようとしたら、会ったけど」

髪が2つにわけられて、頭の高いところで結ばれていく。

「そっか。百井さんはまあ、ヘアメイクはいらないから……」

言葉が遠く感じられる。心の中に、焦りと不安が渦巻いている。

玲二くんは彼女のことをまったく受け付けないと言っていた。信じたけれど信じていいのか、一体何をされるか、自分はもうしたらいいのか、わからない。

「園田……」

顔をあげると、玲二くんが自分の前にいた。どうやら中腰になっているようで、顔が目の前にある。

「どうかした？」

「え？」

「さっきから泣きそうな顔してるから」

心配して来てくれたんだ。急に恥ずかしくなる。しかも、顔が近い。

「大丈夫だよ！ なんだろ……。緊張しちゃったのかな？」

「いつきちゃん、動かないで！」

江川さんの鋭い声が飛んで、ピタッと動きを止めた。玲二くんも呼ばれて窓のほうへ行ってしまった。

しばらく大人しく髪を巻かれる。その間にウェ이터役の男の子

たちも着替えるよう指示が出て、みんな更衣室へ行ってしまった。
そういえば、百井さんはまだ現れない。一体何をしているんだろう？ 着替えにしている時間がかかっている。

髪を巻き終わると、次は口紅が塗られた。ついでにこれもと、まっつけがビューラーでぎゅっと挟まれる。初めての体験に、つい目をパチパチさせてしまった。

「よし、いつきちゃんこれでオッケーよ」

首元には黒いリボン。靴も今日は可愛い黒いコロンとしたフォルムのものが用意されている。どうやら演劇部から借りてきたらしかった。

「百井さんまだかな？ ……じゃあ男子からやっちゃうか」

ちょうど、ウェイターたちが着替えを終えて戻ってきた。教室に入ってきた玲二くんは、なぜか少し顔が赤くなっている。さっきからずっと渦巻いている不安な気持ちを抑えられなくて、そばに寄った。

「玲二くん……」

「園田」

大好きな、優しい笑顔を浮かべている。

「可愛いな。いつもと全然違うけど、よく似合ってる」

周りからヒューっという音が聞こえた気がする。この一言であり、さっきまでのモヤモヤが一気に晴れてしまった。顔が勝手に笑顔になる。

「ほんと？」

「……何回も言わないよ」

玲二くんは照れながら、江川さんに引っぱ張られてイスに座った。

「いつきちゃん可愛いー！」

「ほんと、これは今日は盛り上がるだろ」

周りの評判も上々のようだ。

王子様は髪をいつもと違って少し後ろに流している。初めて見る前髪のない姿はだいぶ大人っぽく見えて、見慣れた顔のはずなのに

ドキドキしてきた。

スラっとした長い足に、白いシャツと黒いベストでビシッと決まっている。首もとのタイも効果的だ。

これは女の子のお客さんも盛り上がるに違いない。

教室のドアが開いて、葉山君が入ってきた。

「お、園田ちゃん！ 決まってるね」

そういう自分は袴姿だ。頭には長い長いハチマキ。書道部のパフオーマンス用の衣装らしい。

「あら……、玲二君もかつこいい」

「葉山君もきまってるよ」

「そう？ やっぱ俺に似合うのは和服なのかな」

「一緒に写真撮ろ！」

江川さんに頼んで、3人で撮ってもらう。今日は兄ちゃんに借りたデジカメを持参していた。

「俺も頼むわ」

葉山君も宗田君に携帯電話を渡している。

「後でメールで送ってやるから、玲二は待ち受けに設定しろよ」

また、3人で撮った。後で2人でも撮ってもらうて私も待ち受け画面にしちゃおう。そろそろ開始時間も迫ってきている。教室の中にはいつの間にか人が増えて、開店の準備が進んでいた。

そこに、再び悪夢が訪れる。

開いたドアから女豹が入ってきて、一瞬で教室が静まり返る。

男子生徒が2人ばかり倒れた。

他の生徒は皆、口をポカーンと開けている。私もちょっと、呆然……。

百井さんは用意された衣装を大胆にアレンジしていた。

まず、下に着るはずのブラウスがない。中になにか着ているようにみただけど、ワンピースとエプロンの下に、大きな胸の谷間が堂々と披露されている。

足にはセクシーな粗い目の網タイツと黒いハイヒール。頭には、真っ赤なバラをつけていた。メイクもしてあるのか、猫のような瞳がいつもよりもずっと強く妖しく輝いている。

「ああ、それはちょっと……、マズくないかな？」

相原君がアワアワした口調で、なんとか言った。

確かに、見とれている場合じゃない。ちょっと刺激的すぎる。

「どうして？」

「ブラウスはどうしたの？」

江川さんも慌てて駆け寄る。タオルで胸元を隠そうとして、払いのけられた。

「だってあれ、ボタンがしまらないんだもの……。大丈夫よ、中にちゃんと着てるから」

着てるのかな？ だとしたら、何か胸を強調するようなものなのかもしれない。

「おう！ おはよう！」

荒川先生がやってきた。そして、のけぞる。

「も、百井……お前それ……」

顔を真っ赤にして、しかも、なんとなくニヤけるのを我慢しているような顔だ。

「それはちょっと……、高校の学園祭なんだから」

「どうしてですか？ このほうがみんな、嬉しいでしょ？」

「それはそうかもしれないが」

どうやら先生でもあの谷間の魅力には完全には勝てないようだ。すごい存在感に、女子生徒たちも目を向けてしまっている。

チラッと玲二くんの方を見ると、眉間にしわをよせて下を向いている。1人だけ、あの誘惑を受けていない。

「これ！ これ使って……！」

江川さんがなにかを取り出して、露出した肩にかけた。薄い白のシヨールのようなものを巻いて前でとめる。ただの結び目になるのは美意識が許さないのか、1度外して胸元で重ねてバラの飾りをつけて留めた。

「こんなのいいのに」

「ダメだよ……。いくらなんでもやりすぎ。参加禁止にされちゃいそう」

胸元が隠れたおかげで、なんとなく教室が落ち着いた。先生も額の汗を右のこぶしでぬぐっている。

「ああ……。ビツクリしたなあ、みんな。さあ、気を取り直して準備するか！」

クラス中のみんなが赤い顔をしていた。何をしたものか、なかなか落ち着かない。

気がつくと、百井さんは玲二くんの元に寄っている。

「ねえ立花君、こっち、手伝って……」

そう言って手を取っている。しかし、その手はさっと払われた。

「わかった」

玲二くんは1人で机の移動を始めた。

百井さんはそれを黙ってみている。そして、いきなりこちらの方へ振り返った。

「……」

何も言わずに、ただ見つめられる。いや、睨まれているの方が正しい。収まっていた不安が心の中にまた満ちていく。

「園田、こっち持つて」

玲二くんの声で我に返った。机にクロスをかけようとしているのを見て、慌てて反対の端を持つ。

「あいつのことは気にするな」

小さい声が聞こえる。

「俺には園田だけ」

照れたのか、これは下を向いて言った。不安の中に、少し暖かい

火がもった気がした。

学園祭が始まり、校内が一気に活気づいた。提携してもらっているクッキングクラブで昨日のうちに作ってあったお菓子が教室に届く。

ケーキを切り分けていると、視界の端に百井さんの姿が入ってきた。気にしちゃダメだと思うのに、どうしても目に入ってきてしまう。

肩にかけられたショールを邪魔そうにつまんで揺らしている姿を、男の子たちはチラチラと見ながらそれぞれの作業をしていた。

開始すぐにはあまり客は来ないだろうと見込んで、他の部活やクラスを見たい人間は外出している。11時過ぎくらいから、全員集合する予定になっていた。

葉山君が書道部でパフォーマンスをするのは、10時半・1時・3時からの3回らしい。自分のローテーションは開始から2時までなので、3時の回を観に行く。玲二くんは先に自由時間をもらっているんで、今はいない。一緒に行きたかったけど、それよりも恋敵と玲二くんが一緒にいる時間が少ないほうがいい。

「お客さん来るかなあ？」

ウェイター役の市ノ瀬君と山野君が話している。

「来るだろ。今、相原が看板持つて呼び込みしてるし」

相原君は宣伝係で入り口や廊下を回っている。先日撮った写真を大きくプリントして、プラカードを作っていた。

「あの写真見たら来たくなくなると思うけどね」

そう話しながら、2人の視線はセクシーウェイトレスの方にむけられている。谷間は見えないけど、逆光で妙に魅惑的なシルエツトが浮かび上がっていた。

いつも彼女を見る男子たちからはハートが出ているけど、今日は

そのハートがいつもより大きく多い気がする。あの露出じゃ仕方ないかな……。つい、自分の胸元を見てしまう。そういえば「貧相」って言われたっけ。

つまらないことを考えているのに気がついて、ブンブンと首を振った。気にしてどうするの？ 玲二くんが見ていてくれていたら、それでいいじゃない……。

さっきのセリフを思い出す。恥ずかしそうに、私のことだけって言った。

そこに、お客が入ってきた。どこかで見た顔……。笑顔で声を出した。

「いらっしやいませ」

男の子の2人組だ。絶対会った事がある。

「園田さん……！」

そうだ。玲二くんの友達だ。名前はえーと……

「あつ、高井戸君と、北沢君、だよね？」

2人が、ぽーっとした顔で笑った。

「覚えてくれたんだ」

「うん。どうぞどうぞ、お客様第1号だよ。座って席へと案内する。」

「あ、違った。先に食券を買ってもらった」

慌てて会計に案内しなす。葉山君のかいた美しいメニュー表を渡すと、中にいた市ノ瀬君が会計の席についてくれた。

「ごめんね、初のお客さんだから……。慣れてなくて」

「いいのいいの！ 園田さん！ 気にしないで！」

北沢君はものすごい笑顔で手を振った。

「オススメはね、カップケーキだよ。頑張って作ったんだ」

「……園田さんが作ったの？」

「うん、クッキングクラブでね。男の子だったら、コーヒー風味のとかがいいかな？」

2人は嬉しそうに、あれこれ注文している。やった。売れたぞー！席に再び案内して食券を受け取る。

「玲二くんは今、いないんだ。あと1時間くらいしたら戻るけど…」

…」

そういつた瞬間、高井戸君が真顔になった。

「玲二君？」

「……？ うん、今はいないよ」

「……玲二君って呼ぶような仲なの？」

高井戸君が言った瞬間、北沢君も真顔になってしまった。

「彼氏だから……、ね？」

突然、百井さんが乱入してくる。

「かれし……」

2人の視線が、魅惑のボディに向く。途端に、ハートがすごい勢いで飛び出し始めた。

「あの……」

「沙夜です。ただいまお持ちしますね」

百井さんはパチンとウインクすると、食券を奪っていつてしまった。

ゆるるヒップとスカートに、男子の心は驚づかみになる。もう自分の出る幕ではなかった。

相原君の呼び込みの効果なのか、早い時間にもかかわらずその後もお客が少しずつやってきた。

男子生徒が来るたびに、百井さんが案内をしに出て行く。その勢いに押され、とうとう奥にひっこんでしまった。まだ混んでいるわけではないから、わざわざ出て行くほどの仕事もない。

仕方なく飲み物を注いだり、お皿にお菓子を載せたりして渡す。

百井さんは自信満々の笑顔でトレイを受けとって運んでいく。

心にぽっかり穴が開いてしまっているみたいになって、笑顔もど

こかへ行ってしまった。ウェイターの男の子たちの目もひたすら彼女の動きを追っている。いや、もう全員の目がセクシーダイナマイトなウェイトレスを見ていた。自分なんかいないみたいに、1人ぽつんと黙って座る。

裏方ですっかりしぼんでいると、お客さんが増えてきたのか外が騒がしくなってきた。会計の前に列が出来ている。手伝わないと、と思うのになんだか力が出ない。

「すみません、混みあってきたのでそろそろよろしいですか？」

玲二くんの声だ。

立ち上がると、カップもお皿も空のお客に退室を促している。

高井戸君たちにも、声をかけている。

「おい玲二……お前」

「あの子すっごいな……」

2人は百井さんを見つめてぼんやりと呟いている。

「そうかそうか。来てくれてありがとう。ちよつと混んできたから、悪いけど出てもらっていいか？」

ぽーっとした2人を立たせると、教室の外へ連れ出していく。出されたお客たちは、廊下でまだ百井さんの姿を見ている。

玲二くんは手早く食器類をトレイに乗せて、目の前へとやってきた。

「園田も手伝ってくれよ」

優しい笑顔。

「入れ替わりでお客が入るから、テーブル拭いてもらっていい？」
「……うん！」

そのスマイルで、元気が出た。立ち上がって言われたとおりテーブルを拭いていく。

玲二くんは次々と食事の終わった客を外へ出していつている。

いつの間にか１１時半になっていた。ウェイターの松川君と、ウエイトレスの仁谷さんと木下さんも戻ってきた。

「いらつしゃいませ」

玲二くんだけが声を出していた。この場にいる男の子はみんな、ぼーっとしてしまっている。裏のスタッフ用のコーナーにいるばかりで何もしていない。どうやら頼りになるのは１人だけのようで、お客から見えると困る光景になってしまっている。

「木下、会計係頼んでいいか？」

上の空の市ノ瀬君は、玲二くんに奥へ連れて行かれてしまった。「わかった」

木下さんがちよつと頬を赤くして、会計の席に着く。

演劇部や吹奏楽部の午前のプログラムが終わったからか、校内に人が一気に増えだした。いつの間にか女子生徒がたくさん列に並んでいる。

会計を済ませた女の子たちが玲二くん席へ案内されて、みんな目をハートにしていた。席に着くとひそひそと話している。カッコイイとか素敵とか、そういう言葉が飛び交っているに違いない。

「これ、お願い」

回収した食券を渡してくる。丁寧に、ちゃんとテーブル番号を書いてくれていた。

あんなに恥ずかしがっていたわりに、熱心に仕事をこなしている。

「仁谷、これ頼む」

他のテーブルの分を、仁谷さんに渡す。こちらもちよつと顔が赤い気がする。

「おい、みんな……、しっかりしろよ」

玲二くんが奥のぼんやり軍団の肩をゆすつて声をかける。それでようやくみんな、目が覚めたかのようにはっとして慌てて片付けななかの作業を始めた。

注文どりのメニューを用意して、テーブルへ運ぶ。教室はいつの間にか女子生徒であふれていた。そして、さっきまで圧倒的な存

在感を放っていたセクシーダイナマイトの姿がない。どこに行ったんだろう？ 奥にはいない。勝手に休憩に入っちゃったのかな。

「あの、写真撮っていいですか……」

客席から声がした。玲二くんがその前でちょっと困った顔をしているのが見える。

食事を終えた女子生徒が、カメラを持って立っていた。そこに奥から実行委員の綿貫君が飛び出す。制服につけた真つ赤なラメの蝶ネクタイがキラリと光った。

「いいですよ。僕がシャッター押しますね！」

さっきまでぼーっとしていたのに。名誉を回復させるためなのか、笑顔でカメラを受けとった。

玲二くんを教室の奥へと押して、女子生徒たちと並ばせる。写真を撮って、カメラを返す。

「あの……私たちも……」

他の女子生徒たちも、カメラや携帯を綿貫君に渡し始める。

「じゃあ順番で」

教室の後ろには、なぜか素敵なウェイターとの記念撮影大会がスタートしてしまった。そのおかげで、回転率はあがる。入り口には女子生徒の列がまだまだ続いているようだ。

みなフル回転で動き始める。女子生徒ばかりが並んでいるせいか、お客にの列に男子の姿はない。

「大盛況だな」

松川君が言った。確かに想像以上の混雑だ。このままでは、用意した物もすぐに尽きてしまいそうな気がする。

「ケーキ、追加でもらえないかクラブに聞いてこようか？」

この提案に、松川君が頷く。本当は実行委員で一応トップである綿貫君に一声かけたいけど、写真を待つ女子の数が多くてそんな隙はなさそうに見える。

「いいんじゃない？ この調子だと、もうすぐなくなるよ」

用意したケーキはあと少ししかない。あとはクッキーがあるけど、お昼時ならケーキの方が需要が多いはずだ。

「ちよつと行つてくるね」

急いで教室を出る。後ろでは、玲二くんが妙にマジメな顔で女子生徒と並んでいた。

廊下に出て、クッキングクラブのある調理実習室へと向かう。

途中で何回か声をかけられた。玲二くんと同じように写真を一緒にと頼まれる。快く応じて、ついでにクラスの喫茶店の宣伝もした。クラブへ行くと、仲間が歓迎してくれた。

「いつきちゃん、可愛い」

「似合うねー！」

ここでも何人かに記念写真をせがまれた。笑顔で一緒にうつる。結構こんな格好も楽しいものだ。

事情を話して、カップケーキとパウンドケーキをそれぞれ譲ってもらふことになった。

「その格好じゃ歩きにくいでしょ。届けてあげるよ」

副部長が笑顔を浮かべる。確かに歩きなれない靴で少し足が痛かった。ここは甘えることにしよう。

教室へ戻ろうと階段を登っていると、目の前にふつと影が現れた。

「園田さんっ」

笑顔の百井さんがまず目に入る。声の主は、横にいる相原君だ。

今の自分にとって最凶で最悪のコンビの登場に、ちよつと怯んでしまう。

「どう？ 教室は……。盛り上がってるの？」

「……うん。大盛況だよ」

「相原君の呼び込みが効果あったのね。さすがだわ」

女王様の言葉に、相原君がでれりとした笑顔を浮かべる。いやいやそんな……とか、ブツブツ呟いていてちよつと気持ち悪い。

「園田さんはもう休憩なの？」

「うつん……ちょっと、なくなりそうだからケーキの補充してきたの」

「そうなんだ。もう休憩に入ったら？ 役に立たないんだから」

心に言葉が突き刺さった。そんなことはない。一生懸命やってる。百井さんの方が、勝手にいなくなったりして何をやっているのかわからないはずだ。

なのに、心が震える。どうしてだろう。彼女と向かい合うと、普段からそれほどあるわけではない自信がみるみる縮んでしまう。しばらく、手が震えているのに気がついた。いや、気にしちゃダメだ……。玲二くんの言葉を思い出すとほんのちよつと、勇気が出てきた。

「私もう行くから」

2人の横を通り抜けて教室へ戻ろうとすると、後ろからまたトゲのような声が刺さった。

「ねえ、あなたがいると邪魔なんだけど」

いけないと思いつつ、でも、体が勝手に振り返る。

「立花君、教室にいるんでしょ？ 一緒に過ごしたいのにあなたがチヨロチヨロしていると目障りなのよね」

そう言つて、相原君を肘でドンと突いた。

「……園田さん、僕と一緒に学園祭回らない？」

それだけは絶対にイヤだ。

2人の言葉には答えず、慌てて階段を駆け上がった。

教室の入り口には相変わらず列ができています。

入り口のドアはふさがっているの、後ろから入る。玲二くんと写真待ちの列もまだ続いていた。

会計のところに行つて、ケーキの追加が来ることを伝えた。
奥に入つて、少しだけ休ませてとイスに座つた。さっき投げかけられた言葉が胸に蘇る。

相原君もあんな、手下みたいになつて。無性に腹が立つ。落ち込んで、苛立つて、不安で、なんだか涙が出てきそうだ。どうしよう。こんなところで一人で泣いてたら、何かと思われちゃう……。

なんとかこらえて立ち上がった。自分の役目はちゃんとある。笑顔を作つて次の注文を待った。すぐにウェイターの山野君が食券を携えて戻つてきた。

「園田さん。これ頼むね」
「うん」

役立たずなんかじゃない。アイツなんかよりずっとマジメに働いているんだから。

そこに、追加のケーキが届けられた。受け取りに行くと、届けてくれた副部長は玲二くんを見て目をハートにしている。更にそこに千早と則子も現れた。

「いつきー！ 可愛いじゃん！」

親友たちの笑顔に、心からほつとする。

「つていうか、混んでて入れないんだけど」

「ああ、ごめんね……。なんか想像以上に盛り上がつて」

則子は奥を見て、頬を赤く染めていた。

「ちよつと……。プリンスかつこよくない……？」

案の定今日の衣装は則子のツボだったらしい。

「いいでしょ。玲二くん、似合うよね、あの格好」

「写真は……？ 写真撮つてもいい……！？」

「何時まで大丈夫？ 後で、終わってから一緒に撮ろうよ。」

今は大混雑中なので、ちよつと難しそうだ。則子はきつと、玲二くんだけの写真を撮りたいんだろう。

「わかった。待つわ。素敵なプリンスに免じて待つてあげる……！」
いつになく情熱的な則子にちよつと驚く。3人で話していると、
友香が走ってやってきた。

「いつきー！ わつ、いいね。可愛いじゃん」

そう言った笑顔は汗だくだ。そういえば、陸上部でなにか演し物を
をすると言っていた。

「で、入れないの？」

「うん、ちよつと混んで……じゃあさ、ケーキを取っておくから
後で食べようよ」

「私はプリンス様を撮れたらなんでもいいよ」

則子の様子に、2人があきれて肩をすくめた。

「じゃあそうしよつか」

千早が教室をのぞく。

「いい男はいないの？ プリンス以外に」

「どう？ 千早好みの人はいるかな」

4人でキャッキャしていると、実はお客の邪魔になっていること
に気がついた。しかも、ケーキを持ったままだ。いけないいけない。
「これちよつと届けてくる」

「じゃ、後でまた来るよ！ いつき、頑張つてね！」

3人は笑顔で去っていった。時計を見ると、もう2時だった。店
内はまだまだ盛り上がっている。

慌ててパウンドケーキを切り分ける。できあがった個数を数えて、
会計に伝えた。回収した食券を手分けして数えて再び使えるように
する。

行列には少しずつ、男子生徒が増えてきていた。もしかしたら、
相原君と一緒に百井さんが宣伝を始めたからかもしれない。素敵な
ウェイターとの撮影会も、どうやらそろそろ終わりになりそうだ。
開放された玲二くんが奥へと戻ってきた。イスに座って、一休み
している。

「お疲れ様」

声をかけると、顔をあげて微笑んだ。

「疲れたよ」

「後でもう1回写真撮らせてね」

ちよつと困った顔になってしまった。でも、そんな顔もいい。

「園田、そろそろ交代の時間だろ。少し行ってきたらどうだ？」

「そうだ。葉山君の書道部の、どうだった？」

「ああ。面白かったよ。あいつ、すごいんだな。驚いた」

「何がすごいのか……？」

「それは実際に見たほうがいいよ。かつこよかったから」

「そうなんだ」

店内に先ほどのまでのような大混雑はない。いや、あれは玲二くんとの撮影会のせいで人が留まっていたせいなんだろう。これなら、抜けても問題なさそうに思える。

「市ノ瀬、山野、2人も休憩に入れよ」

玲二くんに声をかけられて、2人もああ、という顔をした。

「綿貫も少し休んだらどうだ？」

「ああ……立花、ありがとうな」

みんな笑顔だ。いい雰囲気だった。

友香たちにメールを送って合流して、書道部のパフォーマンスを見学した。

巨大な紙に、大きな筆で文字をかく葉山君の姿を見た。こういうのは、ちらつとテレビでみたことがある。しかし実際に目の前で見ると、迫力が全然違った。長いハチマキも効果的で、キリつとして見える。いつもはちよつとお調子者のイメージだけど、真剣に書道に打ち込んでいるんだって、よくわかった。

パフォーマンスを終えると、こちらに気がついていつもの笑顔で手を振ってきた。

「園田ちゃん！ それに美少女3人組じゃない。見てくれた？」

「見たよ！ 玲二くんがかっこよかったから是非みてきなよって言うてたんだ」

「ホント？ あいつがほめるなんてよっぽどカッコよかったんだな、俺！」

ご機嫌そうにニカッと笑う。どうやらご満悦のようだ。

「どっかで一休みしようぜ。よかったら一緒にどう？」

「いいんじゃない？ いつきもお疲れなんですよ？」

そういう友香もお疲れなんじゃないのかな。さっき、汗だくだったし。

4人で他のクラスがやっている喫茶店に寄ってみる。1年3組に比べるとだいぶ地味だ。

「クラスはどうなってるの？ 盛り上がった？」

「うん。なんかもうね、すごかったよ」

のんびり話していると、あっという間に時間が経ってしまった。そろそろ戻った方がいいかな。

学園祭の終了まであと30分のアナウンスがかかる。

さすがにお客はもう1組しかいなかった。天敵の姿もない。良かった。安心だ。

「玲二くん、運んでもらっていいかな？」

「いいよ」

王子様は笑顔で引き受けてくれた。だいぶウェ이터役も慣れたのかもしれない。奥をのぞくと、疲れたのか何人が座ってグッタリしている。ケーキは見事に完売したようで何にもなかった。

こっそり取って置いた分を運んでもらう。

「どうぞ」

玲二くんのクールな微笑みに、則子がポヤーンとしている。友香と千早も、ちょっと赤いような気がした。

そして4人で乾杯して、学園祭の終了まで楽しく過ごした。

#15 「ファーストインパクト」 <玲二>

「玲二くん、写真撮らせて」

振り返るといつきが立っていた。うしろには親友3人も揃っている。

学園祭の終了は5時。あと3分ほどだ。

「則子がぜひ撮りたいからって」

確かに、目が爛々としてるのが1人いる。

ついでに5人でもということになって、すっかり撮影係と化した綿貫が張り切って撮ってくれた。

磯部はさながらハンターといった面持ちで、色んな角度から俺を撮りまくっている。妙なポーズを要求されたところで、担任がやってきた。顧問をしている演劇部の仕事は終わったらしい。

「おや、もう学園祭は終わったよ。そろそろ帰りなさい」

帰宅を促され、ハンターはひたすら残念そうに去っていった。

「さ、みんなで片付けるぞ！」

先生が笑顔で声をあげる。

「随分盛り上がったんだって？ 先生も昼のぞきにきたけど、入れなかったもんな」

わははと笑う。みんな笑顔だった。学園祭は大成功だ。

片づけが始まり、教室の飾りが次々と外されていく。高いところのものを取るよう、頼まれる。

「立花、先に着替えてこいよ」

綿貫から声をかけられた。それもそうだ。靴も借り物だし、汚しではまずい。どうやら他のウェ이터やウェイトレスたちは先に着替えに行ってしまったようだ。

「わかった。行ってくる」

教室から出て更衣室へ向かう。廊下を曲がったところで、ムカつく顔が待っていた。

「立花君、お疲れさま」

澄ました態度にまた苛立つ。そういえばこいつは、一体どこで何をしていたんだろう？

「ああ」

そっけない返事で済まそうとすると、百井が肩にかけられたシヨールを取って近寄って来た。

「なんだよ。何か用か？」

「何か用って……、わかるでしょ。片付けなんかいいから、一緒にどこか行きましょ」

そう言っただけで胸のあたりを触ってきた。慌てて離れる。

「やめてくれ。そんなことはしない」

「まったく固いんだから……。ちよつとくらいいいわよ。2人はいくらいい、誰も気にしないって」

「お前とどこかに行く気なんてない。そうやって体を見せたらどんな男もホイホイ着いていくと思うたら大間違いだ。馬鹿にするなよ！」

強い言葉を投げかけると、怒りの表情が浮かびあがってきた。通りかかった男子生徒は、ポーっとした顔で胸の谷間に見とれている。「あの園田って子より、私のほうが魅力的でしょ。今日だってあなたのお友達、私に見とれてすっかり彼女のこと忘れてたわよ」

高井戸たちのことか。確かにあの時、2人ともぼんやりとしていた。様子がおかしいとは思ったが、いつきに会えて嬉しかったんだろうと思っていたのに。

しかしなんだろう、今の言い草は。2人のことを知っているとも思えないが。

「ねえ、そろそろ認めたら？ やせ我慢もいい加減にして……」
そう言っただけでまた近づいてくる。顔に手を伸ばしてきたので、払い

のけた。

百井は驚いたようだ。信じられない、という顔をしている。

「やせ我慢なんかじゃない。なんなんだお前……自信満々みたいんだけど、俺はお前に何の興味もない。ヘンな誘い方して、気持ち悪いぞ！」

「気持ち悪い……？」

震えている。こんな風に、男から断られたことがないんだろうか。

相手にするのをやめて、更衣室へと移動した。

ムカムカしながら着替えを終えて、教室へ戻る。途中の廊下にも教室にも百井の姿はない。少し安心するが、どこへ行ったのかも気になった。いつきになにか、危害を加えたりしないだろうか。

しばらくすると、ウェイトレスの3人も戻ってきた。楽しげに今日の感想などを話している。どうやらなにもなかったらしい。安心して片付けの手伝いを再開した。

準備には時間がかかったが、片付けるのはあつという間だ。飾りなどが次々と処分されていく。途中から、部活に参加していた者が次々と合流していき、良太郎も制服姿で帰って来た。

「もうほんと終わってるじゃん」

「葉山君遅いよ」

いつもの声を横に聞きながら、最後に借りた靴をキレイに磨いた。その姿を見て、他のウェ이터たちが俺のも頼むと靴を渡してくる。黙ってそれもついでに磨くと、衣装係の江川がやってきた。

「立花君、細かい……！」

「偉いよね。やっぱりできる男は違うわ」

他の女子も混じってほめてくる。

「衣装だって、立花君だけよ、キレイにたたんでるのは」

「今日は男子はみんなポヤーとしちゃってさ！ 頼りになるのは

立花君だけだったよねえ」

気がつくとも女子に囲まれている。

「いや……、申し訳ない」

そばにいた綿貫が神妙な顔で謝る。

「でも、あれで惑わされない立花の方が俺はおかしいと思うね」

この発言に女子の反応は厳しかった。やだね〜と何人かがハモる。しかし、でれでれとした男子の視線の先にいた人物の姿はない。

どうやらクラスの中で、百井と相原だけがないようだ。

「お疲れ様ー！ みんな、1本ずつ取ってくれ」

担任が大きなダンボールを抱えて入ってきた。どうやら、飲み物を用意してくれたようだ。

片付けはほぼ終了していて、あとはゴミを集積場に運ぶだけになっている。

「全員揃ってるか？」

その声がしてすぐに、ドアが開いて行方のわからなかった2人が入ってきた。

全員自分の席に戻って飲み物のふたを開ける。

「よし、今日は大成功でよかったな！ 先生なにもしてないけど……

……。かんぱーい！」

いつきが笑顔で乾杯してきた。自分もそれに笑顔を返す。

綿貫がやってきて、こちらニコニコとボトルをぶつけてきた。

「この後ファミレスで打ち上げしようってことになったんだけど、

立花も来てくれよ。園田も」

「行こうよ、玲二くん」

「今日1番働いたの立花なんだから。来てくれないと困るぜ」

そう言って肩をバンバン叩いてくる。

「もう今日は立花の写真撮りすぎて、恋する一歩手前くらいだよ」

「お前も？ 俺も恋しちゃってるんだぜ、仲間だな」

良太郎が間に入ってくる。その発言で綿貫が真顔になった。

「冗談に決まってるんだろ！ で、どこのファミレス？」

駅の近くにある、「ファミリィダイナース」にはパーティールームがある。急いで出席者を確認し、予約をしたいらしかった。

「わかった、行くよ」

百井が来たらイヤだなと思ったが、行ってみると相原とともに彼女の姿はなかった。

「なあなあ、来週もう中間試験始まるだろ。このスケジュールって鬼だよ……。また勉強会やろうぜ？」

良太郎が笑顔で話しかけてきた。いつきがいいね、と答える。

「友香はどうか。島谷君と2人がいいかなあ？」

「聞いてみて。って、俺だけひとり者……？」

良太郎は微妙な顔をしている。書道部にも可愛い子がいるように見えたけど……。

こちらにチラチラと視線を送ってくる。もしかして、あの女を呼びたいのか？ それは困る。黙って首を振るとため息が聞こえてきた。

「わかったよ……」

「何がわかったの？」

いつきが不思議そうな顔をした。申し訳ないが、2人の平和のためにはどうしても遠慮してもらいたい。

「じゃあ友香には聞いておくね。部活に夢中だから、またヤバイって言っと思うけど。島谷君って成績いいのかな？」

「さすがにそこはノーマーク」

「何の話？」

江川が聞いてきた。さっきまで話していたが、演劇部の衣装担当だったらしい。

勉強会の話をする、参加したいと申し出てきた。他のウェイトレスの2人も聞きつけて参加を表明する。

高校生の打ち上げは、おおいに盛り上がった。学園祭の1日は楽

しく過ぎていった。

月曜日は振り替え休日で、授業は火曜日から再開する。

1人でいつものように図書室へ入ると、いつものように蔵元先輩がカウンターに座っていた。

「おはようございます、蔵元さん」

声をかけると、いつもの柔らかい笑顔が挨拶を返してきた。

「おはよう、立花君。学園祭、どうだった？」

「なんだか盛り上がりました」

「そうらしいね。カッコイイ男の子と可愛い女の子がおもてなしするって、宣伝してるの見たよ。のぞきに行ったら女の子だらけの行列ができてたから、あきらめて帰っちゃった」

なかなか恥ずかしい宣伝をされていたようだ。相原の仕業だろうか。

「立花君、いっぱい女の子に囲まれてたでしょ」

「え？」

確かにそれは事実だ。しかし改めて指摘されると実に恥ずかしい。

「ええ、なんか……、なんででしょうね」

「だってかつこいいもん」

先輩は下を向いて小声で言った。そんなことを言われるとは思わず、なんとなく照れてしまう。

「……最近、よく女の子と一緒にいるけど」

「え？」

いつきのことが。

「彼女？」

彼女ではない。つきあっているフリだ。

なんと答えようか迷った挙句、つい真実が口について出てきた。

「付き合ってるわけじゃないんですけど」

じつとこちらを見ている視線に気がつく。「けど、」の後のセリフを待っている？

しかし答える前に、先輩のほうで口を開いた。

「そっか、彼女じゃないんだ……」

なんとなく気まづくなつて視線を横へそらした。こんなことを聞かれるなんて意外に思える。

そらした目の前に、足が現れた。カウンターから出てきた先輩が目の前に立っている。

顔をあげると、思いつめたような表情が見えた。

「……よかった」

そういうと、先輩は抱きついて、キスをしてきた。

あまりにも意外な展開に、頭が混乱している。体がすぐに反応しない。

なんとか体を離そうと、脇の辺りを掴んで押す。が、見た目からは想像のつかない強さで抵抗されてしまう。なんとか離れようと体を反らせたが、一緒についてくる。バランスを崩して倒れ、ちょうどカウンターの上に押し倒される形になってしまった。

熱いくちづけはその間もずっと続いた。激しく唇をむさぼられている。

思いつきり突き飛ばして、平気か？

迷っている場合ではないとわかっていたが、華奢な体つきを思い出すと気持ちが悪くなる。いや、……でも今押さえつけられてるじゃないか。

その逡巡の間にも、唇が思いつきり吸われていた。

だめだ。

そう思った瞬間、図書室のドアが大きな音を立てた。先輩が慌てて離れる。しかし遅かった。

そこに立っていたのは……百井 沙夜。驚いた顔で、口に両手をあてて立っている。それを見て先輩はカウンターの奥の準備室へ逃げていってしまった。

「立花君……」

態度といい、セリフといい、ひどくわざとらしい。嫌なやつに嫌なところを見られてしまった。

「そういうことだったんだ」

百井は薄く笑っている。

「何がだよ」

気分が妙にイラつく。ついでに、違和感を感じる。

百井はすぐに、ドアを閉めて去っていった。

後を追いたかったが、先輩のことにも気になる。迷った末、奥のドアの前に立った。

準備室のドアを開けようとすると、鍵がかかっている。少しためらってから、ノックを試してみた。

「……蔵元さん」

返事がない。もう1度、強くドアを叩いた。

「立花君……ごめん……」

消え入るような声が答えた。どうやら泣いているようだ。

「蔵元さん、開けてください」

ドアの裏側にもたれているのか、すぐ下のほうから声がする。

「ダメだよ、合わす顔がないよ……」

確かにそうかもしれない。が、はいそうですかと去るのも違う気

がした。

「立花君」

小さい声が聞こえる。

「……はい」

「ごめんね……僕、立花君のことが好きなんだ」

どう答えたらいいかわからない。さすがに同性からの告白は初めてだ。

「最近可愛い子と一緒にくるから」

グスグスと鼻をすする音が時々混じっている。

「なんだか……焦っちゃって……、でもあんなことするなんて……」

どう答えたらいい？

大丈夫ですよ、気にしませんから

……いや、これはないな。

好きになってもらって、嬉しいです

……これもおかしい。

もう2度としないでくださいよ！

……なんか、これも違うな。

「最低だよ……立花君、本当にごめん……」

「蔵元さん、俺……」

言うべき言葉を必死で搜した。……何か言わないと。

「あの……なんていうか、気持ちは嬉しいんですけど、その……」

しどろもどろとはこういうことか。まるで気の利いた言葉が出てこない。普段あれだけ本を読んでいるのに。美しいセリフの数々を知っているはずなのに。自分にひどくガッカリしてしまう。

「出てきてください。怒ったりとか、してないですから」

少しして、中だなにか動く音がした。目を真っ赤にした先輩がゆつくりとドアを開け、出てくる。

そしてこちらをまっすぐ見つめると、胸に飛び込んできた。

「ごめん、今だけ、ちょっとだけこうさせて……もう2度としないから」

また誰か来たら困るシチュエーションではあったが、断れなかった。

少ししたら落ち着いてくれるだろうか？

胸にピツタリくっついていて顔を見つめる。長いまつげに、涙のかけらが光っていた。

ここまで好意を寄せられているとは思ってもみなかった。同性同士の恋愛なんて、自分にとっては現実離れたものでしかない。大体、男女の恋愛自体、ようやく最近身近にあることに気がついたくらいなのに。

よっぽど思いつめていたんだろうか。いきなりこんな不意打ちをしてくるなんて、予想外だ。

本来なら早く終わらせなければならぬいつきとの関係を、浮かれて楽しんでいたりしたせいかもしれない。

「蔵元さん……ごめんなさい」

小さく呟くと、先輩が顔をあげた。

「立花君、どうして謝るの？」

「え……？」

「優しいんだね」

そう言って一歩下がり、深々と頭を下げた。

「本当に、ごめん」

「蔵元さん、もういいです。そんなことしないでください」

先輩は顔をあげると、おそろおそろといった様子でたずねてきた。
「……また、図書室に来てくれる？」

一瞬、間が空いた。どうだろう。平気な顔をしてできるだろうか。

悩んだが、なんとか返事をした。

「ええ。……また来ます」

少しほっとしたように、先輩の顔の緊張が解けた。その様子に、少し安心する。

さらになにかを言おうとしているような顔に気がついて、黙って言葉を待った。

「……が、続きはない。」

「俺、行きますね」

まだ問題は残っている。百井だ。さっきのあの態度、どう考えてもこれから先いい展開が待っているとは思えない。

しかし、歩き出すと予想以上に自分がショックを受けていることに気がついた。

足が重い。

人生で初めてのキスが男になるなんて……。

軽く頭痛を感じて、頭を抑えた。

なんて悲しいんだ。

どうしようもなく、情けない。

そして、同性となら恋愛もお咎めなしということなのか。そういう疑問がわいてきた。

今までいつきといいムードになると必ず邪魔が入った。今回はノーチェックだった？ そんなザルな監視なのか？

確かに、男同士なら肉体関係になっても子孫ができるようなこと

はない。じゃあ、敢えて見逃されている？

そんなことを考えて、腹の下あたりがムズ痒くなるのを感じた。母のルールは驚くほど非情で、冷静らしい。道ならぬ恋を許してくれるなんて、ある意味寛大と言えるかもしれないけど。

全然嬉しくない。

なんとかたどりついた教室には誰もいない。いつきの姿もない。今はそれどころではない。百井だ。どこにいったんだろう？ 早く探さないと……。

しかし、今のモヤモヤとした状態でなんとかできる気もしない。自分の席に着いて、心を落ち着かせようと目を閉じた。

しばらくして、教室のドアが開く。

「……玲二！」

良太郎の声だ。

親友だとわかってても顔を上げられなかった。まだ気力が足りない。カバンを置いた良太郎が、すぐ後ろに来て囁いてきた。

「玲二……お前、マジかあの話」

閉じていた目を開け、顔をあげた。

「……あの話って？」

振り返って見ると、真剣な顔をしている。

「百井がなにか言ったのか？」

「そうだよ、沙夜ちゃんが下駄箱のところに立っててさ」
教室にいないと思ったら、玄関にいたのか。まさか……。

良太郎は言いにくそうに続けた。頬をぼつと赤く染めている。

「お前が図書室で……その、……男と愛し合ってたって」

顔を両手で覆って、大きくため息をついた。あいつは登校してく

るクラスメイト全員にその話をするつもりか？

「百井は？ まだ下駄箱にいるのか？」

「ん？ どうだろうな。それより玲二、マジなのか？」

こんな真剣な様子をみたのは初めてな気がした。

「あいつの見間違いだよ。ちよつと……行ってくる」

立ち上がった玄関へと向かった。

廊下に出ると何人かのクラスメイトが立っている。自分が出てくるのをみて、わっと驚いた。多分、良太郎と同じ話を聞いたに違いない。

下駄箱に到着すると、探していた人物がちょうど相原に耳打ちしているところだった。

「百井！」

大きく声をあげると、2人はぱつと離れる。

「あら、立花君。もう図書室の御用は終わったの？」

「終わったさ。……で、お前はあることないことみんなに吹き込んでるのか？」

フフンと鼻で笑われる。

「なにそれ？ 自意識過剰ね、立花 玲二君」

隣の相原は燃えるような瞳でこちらを見ている。

「大体、ないことなんて言っていないし」

「おい、立花」

相原が間に入ってきた。

百井は今のうち、とばかりにさりげなく階段のほうへ移動している。

「百井、待て！」

しかし相原が腕をつかんできて、相変わらずの大声で怒鳴った。

「ほんつとくに最低だな！ お前は！！」

「なんだよ、その言い方」

「園田さんの気持ちをもてあそびやがって！ 許せるか！」

騒いでいる声が聞こえたのか、体育教師の佐藤がやってきて声をかけてきた。

「どうした？ ケンカか??」

「違います」

「そうです！ ケンカです!!」

相原が威勢よく答えて俺の声をかき消す。

「なんでもめてるんだ？ 2人ともちょっと来い」

「すいません、それどころじゃないんです」

今すぐ百井の後を追いたいのに。この状況でアイツを野放しにするのは危険すぎる。

「ダメだダメだ。2人とも、だ。ケンカ両成敗だろう?」

このまま連れて行かれて相原と話をしたところでただの時間の無駄だ。

……仕方ない。

「先生、こいつ、俺の彼女のことが好きなんです。それでいちいちつかかってくるんです」

「なっ……！ 彼女じゃないだろう!？」

「しかも、彼女の後をつけて、行動を逐一監視してるんです!」

「お前！ なんでそれを言うんだ!」

相原が叫ぶ。

「そんなことしてるのかっ!？」

「え？ あ、いや、先生、誤解です。僕はですね……」

「それはいくらなんでも聞き捨てならないぞ。ちょっと来い」

「お前！ 立花！ この卑怯者!!」

相原が正直で助かった。これから先もつとにらまれるだろうがやむをえない。止めをさそう。

「このストーカー！ 卑怯者はそっちのほうだろ！ どこで個人情報調べてるんだよ、この変態!」

佐藤は相原の胸ポケットから生徒手帳をひょいと取り出した。

「お前は、1年3組の……相原か。よし、こつちだ」

相原は引きずられていつてしまった。

これでいい。階段を上り、急いで教室へ向かった。

1年生の教室のある階に来る。廊下には百井の姿はない。

ふと上を見ると、階段をあがる影が見えた。スカートの影がひらりとみえる。ということは女子生徒だ。後を追って階段を駆け上がると、屋上のドアが開く音がした。後姿が見える。制服が違う。やはり百井だ。

慌てて追いかけて、ドアを開けた。

「あら、見つかったやつだ」

百井はこちらを向いて立っていた。わざとらしい態度。

「でも、これでハッキリしたわね。私に興味がわかないなんて……おかしいと思った!」

黙ってニヤついた顔を睨む。

「わあコワイ」

そう言つと、黙って2枚のカードを投げてきた。俺のすぐ目の前でハラリと落ちる。

「なんだよ」

「まあまあ、拾ってみてよ」

仕方なく拾うと、カードの正体は写真だった。1枚目には見たことのない女性が映っている。驚くほどの美女だ。

もう1枚も見ると、こちらは胸焼けがしそうになる。笑顔の百井の写真だ。対極の2枚だった。

「私の写真、返してくれる?」

黙って2枚とも差し出すと、突然怒り出した。

「私が写ってるのだけ! 渡しなさいよ!」

2枚の写真を並べてみる。よくみると2人はまったく同じ髪型に

同じ服を着ている。もしかして、憧れのモデルか女優かなにかなのか？

そんなことは今はどうでもいい。早く終わらせたくて、おぞましい方の写真を差し出した。

「……あんた!!」

百井の髪の毛が、静電気にふれたかのように逆立った。そして、体をぶるぶると震わせている。

なんなんだ一体。なんでこんなに怒っている？

そう思った次の瞬間、不気味な目がカツと開き、叫んだ。

「あんた……人間じゃないわね……!!」

あまりにも意外な言葉に、さすがに驚く。

「なんだお前……」

「ごまかしたって無駄よ！　こんなこと……ありえないんだから！！」

そついうと、右手の人差し指で顔をさしてきた。

「私の素顔が見えるなんて……！！　『完全な遮断』の持ち主なのね！　何者なの！？」

最後は絶叫に近い声だった。

「なんだよ……完全な遮断って。お前、大丈夫か？」

「なによ、まだしらばっくれる気？　まさかこんなところに、あんたみたいなのが紛れ込んでるとはね！　しかも……。マスターだつて気がつかないはずよ！」

何を言ってるんだ？

まさか、……こいつも「人ではない者」なのか？

「お前、なんなんだ？」

「わかってるんでしょ！？ からかつもり？」

そう吐き捨てるように言うと、百井の姿は突然消えた。

慌てて左右を見渡す。しかし、どこにも姿はない。消えてしまった。

しばらく考えたが、事態がまったく飲み込めない。

あの言動といい、姿が消えたことといい、あいつが人間でない可能性は高い。

しかし何者で、何にあんなに怒っているのかは見当もつかなかった。

仕方なく教室へ戻る。ドアを開けて教室へ入ると、クラスメイトが一斉に自分を見て黙ってしまった。

しまった……そうだった。図書室でのことを言いふらされている。きつとみんな、もう知っているに違いない。

居心地の悪い空気の中、力なく自分の席に座った。いつきはいない。どこへ行っただろう？ 朝は一緒に来た。元気だったはずだ。もうすぐホームルームが始まる時間だった。教室は、妙な静けさに満ちている。

やがて、担任の荒川が入ってきた。その後に、少し遅れて百井も入ってくる。

「お、百井、遅いぞー！」

相変わらず女子には甘く、にこやかに注意をしている。

「すみません。園田さんが気分が悪いって言うから……、保健室に連れて行ったんです」

そう言って、こちらを一瞥してきた。

しまった……。

「よし、欠席はいないな？」

「先生、相原君がいませんけど」

相原の後ろの席の清野が手をあげて言った。

「ん？ ああ、相原はちよつと……野暮用です」

まだ事情聴取でもされているんだろうか？ いや、相原のことはどうでもいい。いつきのことが心配だ。

どうする？ 今気分が悪いといって、保健室に行くべきだろうか？ 行って、無理やりキスされたんだなんて言うのか？ ……情けない言い訳だ。

軽く落ち込んでいるうちにホームルームは終わってしまった。すぐに1時間目が始まる。

その時、手に何か握っているのに気がついた。さっき渡された美女の写真だ。

百井は自分の姿が見えるなんて、と言った。改めて写真を見る。あいつと同じ髪型のなんともセクシーな美女だ。大きなネコのような瞳に、ぷっくりとした唇。

……もしかして、これが、皆が思っている百井の姿？

もし人間ではないのなら、姿を偽るとかそういうことができたとしても不思議ではない。それが、自分にだけは通じない？ それが『完全な遮断』？

仮説は立てられても、肝心の部分は謎だらけだ。

1時間目はやたらと長く感じられた。ようやくチャイムがなって、立ち上がる。確認しないといけない。

「良太郎！」

俺の声に、なぜかビクつとしている。先ほどの話が効いているん

だろう。

「なんだよ玲二……。そんな大きい声出して珍しい」

「これ、見てくれ」

先ほどの美女の写真を出す。

「沙夜ちゃんの写真じゃないか。どうしたんだ、これ？」

ちよつと頬を赤く染めて、良太郎が答えた。やはり、皆にはこう見えているのか。

「百井の写真？」

良太郎の前の、綿貫が振り返る。

「ほんとだ！ よく撮れてるなあ」

その声に、百井が立ち上がった。こちらの様子を伺っている。

「どうしたの、これ？」

「……本人に渡されたんだ」

「へえ。俺、学園祭の時何枚か百井をとったんだけど、なんかちゃんと撮れてなくてさ」

「いつの間にお前、なんだよ……」

良太郎がニヤニヤと綿貫をつつく。

「だって葉山、お前も見ただろ？ あの姿を」

コソコソと2人で話しているところに、白い腕が伸びてきた。写真をひったくるように取る。

「ありがとう、返してくれて」

百井は怒った顔のまま去っていく。

「なんか怒ってた？」

「怒っててもいいな」

2人はうつとりと後姿を拝んでいる。

どうやら仮説その1は正解だったようだ。自分にだけ「素顔」とやらが見えているのなら、周囲と反応が違うのも納得がいく。そしていつきのことが心配になった。あいつに聞いてもきつと答えてはくれないだろう。次の休み時間に様子を見に行こうか……？

チャイムがなり、2時間目が始まった。次は現代国語だ。

「えーと、園田さんが早退だそうです」

教師の口からガツカリなお知らせが飛び出した。

「相原君は……まだかかる、と」

なにが？ という声がある。よく考えたら、あいつも何を話すのかまったく予測がつかない。いつ戻ってきて、どんな怒りをぶつけられるか、面倒くさそうな予感がする。

いつきは帰ってしまったようだ。どうしよう。帰りに寄って話すべきだろうか？ とりあえず、メールを送ろうか……。

授業中は携帯の電源を切っており。もしかしたら、なにか送ってきているかもしれない。昼休みに確認することにしよう。

#16 「じめんね、玲二君」 &1t;いつき>;

ベッドの上に倒れこんだ。

そつえば、どうやって帰ってきたんだっけ……。

今、何時かもよくわからない。靴もそろえてない気がする。最悪の気分。何もかももう、どうでもいい。

「いつき、帰ってきたの？」

お母さんの声がする。そつえば、ただいまも言っていない。階段を登る足音がして、ドアの前で止まる。

「いつき？」

「帰ってる……」

小さい声。こんなの、聞こえるわけがない。

ドアが開いて、お母さんが部屋に入ってきた。

「どうしたの……。早退したのね？ 気分でも悪いの？」

そう。まるで、世界が終わってしまったような気分。

「うん……」

「頭痛い？ おなか？」

「違う……。ちょっと、そつとしておいて」

「え？」

「ほつといて！」

ベッドにうつぶせに倒れたまま、叫んだ。

こんな返事の仕方したのは初めてだった。きっと、ビックリしただろう。

「わかった。……ご飯作るから、食べたくなつたら言つてね」

なんとなくいつもより力のない足音がする。その音もみるみる小さくなっていつて、辺りが静かになった。

朝は玲二さんと2人で学校へ行った。

学園祭が楽しかったとか、散々一方的に話しながら。学校に着いて、玲二くんは図書室に行った。全部いつものことだ。

そして百井さんがやってきた。青い顔をしてた。私のところに来て、突然言っただ。

「園田さん、今までごめんなさい」

じわじわと涙が出てきた。

「今までイジワルして本当にごめんなさい。私、立花君と園田さんが仲良さそうにしているのがなんだか……、悔しくって。あんまりお似合いのカップルだったから。あんな素敵な彼が、私も欲しいなって思っちゃったの」

今までの挑発的な態度が嘘のように、しおらしかった。

「許してくれる？」

大きな瞳がうるうるとしている。

本当かな……？ なんとなく不思議な気がしたけど、結局その目の力に負けてしまった。

「いいよ……。私もなんか、ごめんね。百井さんがキレイだからちよつと焦っちゃって」

「キレイなんて。園田さんの方がずっと可愛くて魅力的なのに。私、ずっと嫉妬してたの」

そう言っ、手をぎゅつと両手で握ってきた。

なんだかちよつと、誤解があつたみたいだ。可憐な仕草に、胸がキュンとなる。

きつと玲二くんもわかってくれるだろう。ちよつと過激なところもあるけど、本当はただの乙女だったみたい。

「やっぱり、思ったとおり。園田さんって優しい人なのね。みんな

に人気があるの、わかるな」

それはそれは美しい笑顔に、ついつられて微笑んでしまう。

「……だからね、私、許せないの。こんなに可愛い園田さんを騙すなんて」

「なんのこと？」

今度は深刻な顔をして、カバンから携帯電話を取り出した。ビビッドなピンク色のライNSTーンがたくさんついた派手な携帯だ。黙ったままボタンを押して操作して、黙って差し出してきた。

思い出すと、泣けてくる。全部嘘だったのかな。

涙がポロつと落ちる。

確かに、玲二くんは苦しんでいた。その苦しみの理由は今回わかったこと、だったの？

携帯の画面に映し出されていた写真。

「これって……」

私の唸るような声に、返事はない。

「これって……、図書室？」

「うん。この人は、図書委員の2年生の人。知ってるでしょ？」

知ってる。確か、クラモトさんって呼んでいた。すごくキレイで、全然男の人には見えないあの人。

「なにこれ……」

「何って、見たまんまよ。ただの図書委員の人が、どうして毎日朝早く図書室にいるのか、これがその理由」

じゃあ、玲二くんが放課後じゃなくて、朝図書室に行っている理由もこれ？

そういえば、このクラモトさんの視線、ちょっと厳しいなっと思っただことがあった。

「私、さっき図書室に行ったの。もうすぐ試験でしょ？ ちょっと探してる本があって……。そうしたら、ドアの窓から見たの。…」

…すごく激しく、してた」

「嘘」

「嘘じゃないよ。私、絶対園田さんにしらせなきゃって思ったの。騙されてたんだもん！好きなふりして、自分の秘密がバレるのがイヤだっただけなんだよ！利用されてたんだよ！？……ひどいっ！」

百井さんが涙を流し始めた。大粒の涙が、ポロポロと落ちていく。真珠のような美しい涙を見て、キレイだな、なんてぼんやり考える。「園田さん、顔色が悪いよ。大丈夫？ ショックだよね……保健室いこ。休んだほうがいいから」
支えられて、椅子から立ち上がった。うながされるまま、保健室に行った。

先生に色々質問されたような気がするけど、何て答えたか覚えていない。

送迎を頼むか聞かれて、いらなかったと思う。電車に乗って、家まで歩いた。

……カバン、学校に忘れた気がする。
携帯電話も入れっぱなしだ。
でも、どうでもいい。

騙されてたんだ。

本当は、女の子に興味ない人だったんだな、玲二くんは。

笑いがこみ上げてきた。
すごく似合うじゃん。美少年だもん。誰が相手でも絵になる。

あのクラモト先輩なんて、超お似合いだ。私よりも。則子に教えたら喜びそう……。

園田には、……絶対言えないんだ。

こんなことだったんだ。そりや言えないわけだ。
あの日おごつてあげたリッチなアイス代、返して欲しい。

ゴロンと転がって、上を向いた。
はあ、とため息が出てくる。

こんな惨めな気持ちなのに、玲二くんの顔が頭に浮かんできて、
なんだか悔しい。

やっぱり私は彼の事好きなんだな……。だって、悪い人じゃない。
こうなったら、応援してあげようかな。なにがあっても味方する
って、言っただから。

ぼんやりしていると、足音が聞こえてきた。

「いつき、ご飯食べる？」

机の上においてある時計を見た。12時半だ。

ついでに、その隣にある写真が目に入った。もちろん、愛しの王
子様が写っている。

「うん……。食べようかな」

のろのろと起き上がって部屋を出ると、お母さんが心配そうな顔
で立っていた。

「じゃ、いらつしやい」

階段をゆっくりと降りた。食卓に座る。平日に母と2人でお昼な
んで、珍しいことだ。

「ご飯終わったら、着替えたら？」

確かに、ぼんやりしすぎてまだ制服のままだった。

お昼ごはんは焼きそばだ。

「いただきます」

小さい声で言っ、食べ始める。お母さんも黙って一緒に食べた。食べ終わってからまた部屋に戻った。着替えて、制服をハンガーにかける。

また、ベッドに転がった。

あーあ、もうすぐ試験なのに。これじゃ勉強に集中できないよ。玲二のせいだ。恋だけじゃなくて、学業までジャマするのかな…！

静かだった。自分の家で、こんなに静かに過ごすことなんて滅多にない。

もうちょつとしたら兄弟たちが続々と帰ってくる。

また、やかましくなる。イヤだな。静かな方がいいのに……。

あの木の下に行こうか？ 落ち込んだときに必ず行く、秘密の場所。

ああ、でも、玲二くんとの思い出が絶対蘇ってくる。結局落ち込みそうだ。

枕に顔をうずめる。もういいや。今日はこれで。今日はひたすらぐったりでいい。

明日になったらまた頑張ろう。玲二くんに会ったら、キレイな先輩とお幸せに言ってやる。

なんて弁解するんだろ？

園田、ごめん

とか言っのかな。

……？

勢いよく起き上がる。

すっかり騙された気になっていたけど、百井さんの言ったことは全部本当なのかな？

一気に信じちゃって全部が真実のように思ったけど、自分で見たわけじゃないし、玲二くんに直接なにも聞いてない……。

なんでなんだろう？ 全然、自分で考えてない。

おかしい。大体、あの百井 沙夜がいきなりごめんなさいって言うってくる方がちよつと胡散臭い。

学園祭でのあの格好、挑発してきて、挑戦してきて、イヤミ言われて……。どうして彼女を信じるの？

いつもそうだ。一緒にいるとなんだか妙に押されちゃって、自分の考えが潰されてしまう。

あいつの言うことを気にするな。そう、言っただじゃんか。

玲二は嘘を言う人間じゃない。

葉山君の言葉も思い出す。

そうだよ……。多分、本当に女の子に興味がない人だったら、きっと苦しくても言ってくれたはずだ。

メールだ。メールを送ろう。

あれ？ いつもの位置に電話がない。

……学校に置いてきたんだった。どうしよう？ 取りに行こうか？
時計を見ると2時半だった。もう授業は終わっている。今から行
ったら、3時半には着く。

誰か教室にいるかな。

百井さんがいたらどうしよう？

どこに住んでいるんだっけ？ わからない……。何か部活に入っ
てるような気配はないけど。

もしかして、今日のことは罠だったのかな。あの写真は捏造で、
その隙に玲二くんを狙ってるのか！？

慌てて立ち上がる。階段を駆け下りて、駅に向かって一目散に走
った。

しまった。

定期がない。制服のポケットに入れっぱなしだ。財布は……カバ
ンの中だ。

改札の前で、1人ガツクリと肩を落とした。間抜けすぎる。今日
の、自分の何もかもが。

走ってきたせいで、息が苦しい。

ベンチがあるのが目に入って座った。

駅前の大きな木が見える。

夏のデートを思い出す。玲二くん、あそこに立ってた。そうだよ、
あんなに……愛情表現、してくれてた。恥ずかしそうだったし、い
つも寸止めだったけど。楽しい時間を一緒に過ごしたのに。あれが
全部嘘なわけない。知ってたのに。

はあ、と大きく息をついた。体が重くて動けない。自分ひとりで
勝手にうちのめされて、バカみたいだ。

ベンチに座ったまま、自分のひざに突っ伏した。

誰か連れて帰ってくれないかな……。

電話もないし、電話代もない。誰でもいいから兄ちゃんが通りかかって、見つけてくれないかな？

がつくりと落ち込んだまま、全然動けずにいた。どのくらい経っただろう。

突然、隣に誰かが座った。

こんな落ち込んでる人間の隣、私だったら絶対座らない。

もしかして、親切な人なのかな？ 心配してくれたりするのかな……。

「園田」

慌てて顔をあげた。心配そうな顔が目飛び込んでくる。

「……」

口をパクパクしたけど、声が出ない。

「……もしかして、俺には会いたくなかったかな？」

玲二くんの顔は、真剣そのものだ。

「カバン、忘れただろ？ 電話が入ってるみたいだったから、届けようと思って」

そう言うとかバンを差し出してきた。愛用のキーホルダー。おじさんの水族館で買った、ピラルクがついている。こんなのつけている女子高生なんて、きつと私くらいしかない。

黙ってカバンを受け取る。何か言いたいけど、言葉が全然出てこなかった。

「百井になにか、言われたんだろ？ ……写真も見た？」

うん、と頷く。

「こんなこと言いたくないけど、無理やりされたんだ。俺も驚いた」
苦しそうな声だ。

「百井がクラス中にメールで送ってたんだ、あの写真。最悪だよ。」

先生たちまで知ってて、生徒指導室なんか初めて呼ばれてさ……」
大きなため息をはさんで、珍しく長く話し続けている。

「蔵元さんと2人で、不純同性交遊かってね。ほんと、哀しかった。蔵元さんは自分が無理やりしたことだって言って、俺、そうですって答えた。そんな風に言うの、ちよつとつらかった。お世話になつてたし、嫌いな人だったわけじゃない……。でも、合意の上ですなんて死んでも言えないから」

いつものきれいな薄茶色の瞳がこちらを見ていた。
やっぱり、嘘なんて言ってない。

「玲二くん、私、百井さんにだまされてるって言われたの。自分の趣味を隠すために、利用されたんだって……」

玲二くんは黙って頷いた。

「なんでかな……？ それを信じちゃったんだよね。すごくショックで、朝のこと、あんまり覚えてない。カバンを忘れてたのも、帰ってから気がついたの。今ね、取りに行こうって思ったんだ。玲二くんに連絡したかったから」

こんな情けない告白を、黙って聞いてくれている。
体が少し震えた。でも、ちゃんと話さないと。

「……帰ってから気がついたんだ。どうしてあんな話、信じちゃったのかなって。今日、私、玲二くんに何の確認もしないで、百井さんのことまるごと信じちゃったから。だから、謝らなくちゃって思ってた」

「謝ることなんかない。あいつが悪いんだから。俺、すごく嫌われてるみたいだし……」

すごく苦しそうな、渋い顔をしている。なにかあったのかな。

「園田はそのせいで巻き込まれたただけだろ……？ ごめんな」

「そんな。玲二くん、私が信じなかったからいけないんだよ。ごめん」

「いって。謝らないで」

玲二くんが立ち上がった。こちらを振り返る。

「なあ園田、俺もう……、最悪なんだ、今日は」

そう言つと手を差し出してきた。その手に自分の手を重ねる。ひっぱられて、立ち上がった。

「だからさ、元気わけてくれない？」

優しい笑顔だった。思わず、つられて笑顔になる。

「うん……」

「帰ろう。送っていくから」

2人で並んで歩き出した。もう10月。日が落ちるのも随分早くなった。

「明日から、早く行くのもうやめるよ」

「なんで？」

「蔵元さんは停学1週間。図書室は朝は閉めるってなるほど……」

「じゃあ、どうしよう。何時がいいかな？ ……あっ」

「なに？」

「いつもより3本くらい遅いと、相原君が途中で乗ってくるかも」

あの悪夢の1日を思い出す。今日も悪夢の1日だったけど、どっちの方がマシだろう？

「そうなの？」

「うん。9月の初めに、玲二くんが先に行っちゃった日、偶然会ったんだよね。あの時はイヤだったな」

「一緒に行けば、別に大丈夫だろ」

なんだか嬉しいことを言ってる。でも、すぐに何か思い出したようにこつ続けた。

「ああ、ダメかな……。俺、多分今日相原のことすごく怒らせたし」

私も最悪の日だと思っていたけど、玲二くんも随分色々あったみ

たいだな。

「いつもどおり行くか。早いほうが、電車も空いてるし」

「うん。もう、早起きの習慣もついたから。いいよ」

2人であまり元気なく歩く。でもすぐに、家に着いた。

「玲二くん、ありがと」

「よかった。元気出たみたいで。駅で見つけた時、どうしようかと思った」

ああ、確かに。駅のベンチであんなグッタリしてたら、なにかと思っただろう。

……でも、見つけてくれてよかった。

「また明日」

「うん。また明日ね、バイバイ」

大好きな人が手を振って去っていく。後姿を見送ってから、家に入った。

「ちょっといつき……。どこ行つてたの？」

「学校にカバン忘れちゃって、取りに行こうとしたんだ」

「その格好で？」

母の言葉で、自分の姿を確認する。

「うわっ」

玄関横の姿見の大きな鏡の前に行くと、だらしない部屋着に頭がボサボサの自分がうつっていた。

「どうしよう……」

「どうしようもないでしょ。学校まで行つたの？ 違うよね、時間が早いもの」

「立花君にちょうど駅で会つたの。カバン持ってきてくれて」

「その格好じゃ、立花君も驚いたんじゃない？」

恥ずかしい……。我ながら、ひどい有様だ！

さすがにこれはないと思われたんじゃないかな。そんな様子はま

「まったく見せなかったけど……」。

「でも元気出たみたいね？」

お母さんはにっこり笑っている。そうだ、何も言わないで早退したんだった。心配させただろうな。

「今日ちよつと、シヨックなことがあったんだけど……、勘違いだったみたい」

「勘違い？ やあねえ、それであんなに落ち込んだの？」

「うん……」

「ま、勘違いで済んだならよかったわね。ビックリしたわよ。この世の終わりみたいな顔してたもの」

まったくそのとおり。そんな気分だった。お母さんにはかなわない。

「髪だけでもとかしなさいよ。さすがに家の中でもそれはないわ」

「はあい……」

洗面所によつて、髪を整える。ホント、ボサボサだ。よくこんな格好で大好きな人の前に出られた。

もうちよつと乙女にならないと……。

部屋に戻つて、カバンを開けた。

玲二くんは勝手にあげたりしないだろうけど、百井さんは油断できない。

中に特に異常はない。サイフや携帯電話も無事だ。

着信ランプが光っている。ボタンを押して、来ているメールを確認する。新着は3通。

1通目は葉山君からだ。お昼休みの時間に来ている。

園田ちゃん、もしかしてあの写真がシヨックで早退したのかな？

俺もビックリしたけど、玲二は誤解だって言ってたから。

俺はあいつを信じるぜ。

だから一緒に信じよう、ということなのかな。

玲二くんはさっき、クラス中にメールがまわってたと言っていた。あの、写真つきの。

よく考えたらすごく恐ろしいことだ。本人がどんなに否定したって、聞いてない人もいれば、面白半分で転送する人だっているだろう。先生まで知ってたなんて、誰かが見せたに違いない。

せめて、2人だけでも味方でいようというメッセージだった。

葉山君がいて、よかった。

2通目は友香だ。こちらもお昼休みの時間に来ている。

あのメールなにー？ プリンスどうなってんの！？
なにかの間違いだね？

やっぱり。他のクラスにもまわってる。他の学年にもいつてるのかな。だとしたら、あのクラモト先輩は……大丈夫かな。これでいじめとかが始まったら最悪の展開だ。ちょっとナイーブそうな感じの人だし、玲二くんがつらいと言ったのもわかる気がする。だからって勝手にあんなことするのは困るけど。

3通目は玲二くんだ。

カバンを忘れたみたいだから、届けてもいいかな？

午後の授業のあとの時間だ。この後に、カバンが置いてあるのに気がついたのかな。音で気がついたのかもしれない。

俺には会いたくなかった？ って最初に聞かれたのを思い出す。会いたくない、と言われるかもしれないと思っていたのに、届けてくれたんだ。

……優しいな。

ボタンを押して、まず葉山君に返事をかいた。

葉山君メールありがとう。さっき玲二君に会いました。

私も気が動転しちゃって早退したけど、今は落ち着いたし、大丈夫。

私も玲二君を信じてるから！ 同じ玲二好きの仲間がいて心強いよ！

次は友香だ。

あのメール、みんなにまわってるのかな？

百井さんがわざと、クラス中に送ったみたい。

玲二君に対する嫌がらせだから、気にしないで。

ただ、キスされたのはホントみたい。モテる男って大変だね。

写真がついている限りただの誤解というだけじゃ納得いかないだろう。

ちよつと苦い気持ちで、最後は本当のことを書いた。

玲二くんがモテるのはわかっていたはずだ。まさか男の人にまで魅力をふりまいてとは思わなかったけど……。いや、葉山君だってあれだけ好きなんだから、好きの性質がちよつと違うだけで同性にだって人気があってもおかしくはない、かな。

明日のことを考えると、なんだかため息が出る。

私はいいけど、玲二くんは大変なんじゃないのかな……。

そんなことを考えていると、玄関のチャイムがなった。お母さんの足音と、話し声がする。

「いつきー！ 則子ちゃんよー！」

「はい！」

返事をして階段を降りると、則子が笑顔で立っていた。

「いきなりごめん」

「いいよ。あがつてつて」

「うん。じゃあ、ちよつとだけ」

髪をちゃんとかしておいてよかった。

則子を部屋に招き入れると、お母さんがお茶を持ってきてくれた。

「いつきにこれ、あげようと思って」

分厚い封筒を渡される。中には写真がたくさん入っていた。

「これ、学園祭の時の」

「そう。カッコイイよね……。プリンス！ って感じ」

則子がうつとりして言った。恋してる……。わけじゃないんだよね。写真にはウェイター姿の玲二くんが写っている。すごくかっこいい。しかし、何枚あるんだろう。

「本当は秘蔵のコレクションにしようかと思ったけど、いつきに渡さないのは筋違いかなって」

「秘蔵のコレクションって何？」

「だって、これもコスプレみたいなもんでしょ。出来のいいのは、コレクション行きなんだよ」

かつてないほどの笑顔だ。

確かに、コスプレみたいなものか……。私も普段とは違う格好で一緒に写っている。

「いつきも可愛かったけど、ゴスロリっていうほど徹底してなかったからな」。惜しいよね」

どうやら、コレクション行きの基準はなかなか厳しいらしい。

「澤君とはどうなの？」

「来月一緒にイベントに行くよ。今衣装作ってるんだ」

そっというイベントなんだろうな。則子が男の子と一緒に、なんて

初めて聞いた。

「プリンスといつきも来て欲しいな。2人がビシツと決めたら大変だよ。カメラに囲まれて動けなくなるね……。間違いなく」

「行かないよ。大体、玲二くんが行くとは思えないし」

「そうだよねえ〜！ いつきが頼んでもダメかな？」

「私も興味ないもん……」

「そっか、と則子がしょんぼりする。

「澤君とは付き合ってるの？」

「いやあ……、そういうわけじゃないけど。ほんのちょっと、趣味がズレてるんだよねえ」

性格とかはその次なのかな。みんな、価値観はそれぞれだ。

「いつきは？ プリンスとはどうなの？ もうつきあってるフリから昇格した？」

「……うつん。まだ。それどころじゃないし」

「なにかあった？」

今日の色々を思い出す。……が、則子にだけは話せないな、と思った。

則子が帰って、家には兄弟が続々と帰ってくる。

夕食の準備を手伝わなくちゃいけない。台所に行って、エプロンをつけた。

「あら。いつき、今日も手伝ってくれるの？」

「当たり前だよ」

私が休んだら準備が大変だ。やっぱり手伝わないと。

「そっか。則子ちゃんは？ なにか用があったの？」

「学園祭の時の写真、持ってきてくれたんだ」

「へえ。見せてよ。見たいなあ」

あの、立花 玲二写真集を見せる……？

「ダメ？」

「うつん、いいよ。持ってくるね」

みんなで写ってるやつを持つてくるか。

写真の束をチェックすると、あれだけ渡されたのに玲二くんだけの写真をのぞくと4枚しかない。

「はい」

「あら！ いつきこんな格好したの？ 可愛いじゃない。それにこれ、立花君よね。素敵……」

わあ、思いつき笑顔になっている。

「いつきは可愛いんだから、服も可愛いを買おうよ」

今までも、こうやって提案されてきた。なんとなく面倒くさくて流してきたけど、これからはやめよう。

「うん。そうする」

「わっ、嬉しい！ じゃあ試験終わったら買いに行こう！」

お母さんはすごく嬉しそうに笑った。

「夏に可愛いワンピースきて出かけたでしょ？ 嬉しかったよ。やっと女の子らしい格好で出かけたわ！ 兄ちゃんたちも可愛い可愛いって言ってたわよ」

「ホントに？」

「本当よ。特に恵三と幸四がねえ。将二はだまーってたから、やっぱり可愛いなって思ってたんでしょね」

この「やっぱり」はどこにかかるんだろう？ 母にしかわからない、息子の傾向があるのかな。

「うちが男の子ばかりだからって、遠慮しなくていいからね。立花君とつきあってるんでしょ？ 可愛くしとかないと」

「付き合ってるじゃないよ……」

「そうなの？ でも好きなんでしょ？ だったらやっぱり、可愛くしとかないとね。もう今日みたいにあんな格好で会ったらダメよ」

確かに、今日みたいな姿で会うなんて2度とあつてはならない事だ。反省の一言に尽きる。

「じゃあ試験、終わったらね。約束」

2人で見つめ合って、にっこり笑った。すごく嬉しい約束だ。

そういえば、試験の勉強会はどうしよう。友香は島谷君と一緒に来るよって言うてたけど、今日の騒ぎで気が変わったりしてないかな……。

まあいいや。明日、葉山君と相談しよう。
そう考えて、まずたまねぎの皮をむいた。

夕食を終えて部屋に戻るとメールが来ていた。

1通目は友香からだ。

そんなことがあったの<(@x@)>!?
大変だったね！ 私も回してきた子に一言いつとくから！
勉強会も参加するからね。プリンスに教えてもらわないとヤバ
いもん！

よかった。メールの拡散はきっと止められないだろうけど……。
でも、少しでも誤解は少ないほうがいい。

2通目は葉山君からだ。

よかった。安心したよ。まあ、クラスのやつらも何かの間違い
だろって感じで落ち着いてたから。

学園祭の時活躍したのが効いてるな。安心して明日ラブラブ登
校してきてね♪

こっちもよかった。この話が本当なら少し安心だ。ラブラブ登校
は余計だけど。いや、まあラブラブ登校はしたいけど。

もう1通ある。玲二くんからだ。

今日は大変な1日だったけど、最後は笑顔が見られてよかった。
ひどい格好だったけど、やっぱり園田は可愛いな。
また明日。

嬉しいような悲しいような。ひどい格好とかいてある。ハッキリと。

自分がしでかしたことなんだから仕方ないけど、もしかして一緒に歩いてて恥ずかしかったかな？

でも笑顔が可愛いってほめてもらってるんだから、いいのかな…。

明日はキレイにしていこう。

あと、笑顔でいこう。

誰が何と言ったって、どんな目で見たって、玲二くんの味方でいるんだから。

#17 「完全な遮断って？」 &1t;玲二>

食事の後、いつものようにリビングで紅茶を飲む。

向かいに座る母をじっと見つめた。今日のあの事を、確認しなくてはならない。

「母さん、完全な遮断、って何？」

「何？」

「完全な遮断」

「……カンゼンなシャダン？」

なんだそれは？ という顔だ。

「今日、俺、人間じゃないやつに会ったんだ」

「その相手に、言われたの？ その『カンゼンなシャダン』ってやつを」

「うん。だから、自分の素顔が見えるんだって」

「どういうこと？」

母さんに百井とのことを説明した。自分以外にはとても美しく見えるらしいこと。写真で確認したこと。そして屋上で言われたこと……。

「ああ。あの子ね」

「知ってたの？」

「知ってたわよ。あなたのことは注意深く見ていかないといけないんだから」

こちらのムツとした態度に、母さんが言った。

「それに何かコンタクトがあつたら、あなたにもなにかいい方の影響が出るかもしれないでしょ」

泳がされていたということか。

あれだけ敵意のある相手なら、教えてもらってもよさそうなのに。

「あの子、顔を隠しているのはわかったけど、あなたには見えるの？」

「そうらしいよ」

「それが、その『完全な遮断』のおかげだって？」

「そんな言い方をしていた」

「そう……」

「母さんには見えないの？ あいつの顔」

「見えなかったわ。本当の顔が別にあるのは感じたけどね」

心を読む力の話と同じ流れだ。

じゃあ、母さんが俺の心を読めないのも、そのせいなのか？

「ちよつとお父さんと相談するわ」

この場合のお父さんとは、祖父のことだろう。

「長生きしてるし顔も広いから。なにか知ってるかもしれないわ」

「長生きね」

そういえば、何歳なんだろう。母さんだって本当は42歳じゃない可能性が高い。

「遠いから集中しないと」

「電話じゃないんだ」

「電話？」

フフンと母さんが笑った。じゃあ心で直接話すとかなんだろうとかファンタジーだ。

「そういえば今日、なんで……見逃したの」

「何を？」

「先輩と……」

詳細を言うのは憚られて、言いよどむ。

「ああ、あれね。ビックリしたわ」

なんだか白々しい感じた。母さんは肩をすくめて答えた。

「しょうがないでしょ。あなたの心がわからないんだから。もしかして嬉しかったらいけないと思って止めなかったの」

「……男が相手なら別にいいってこと？」

この質問に返事はなかった。子孫ができる恐れがないなら、いいと解釈してよさそうだ。

「止めて欲しかったけど」

この言葉に、母さんは紅茶を一口飲んでから答えた。

「じゃあ次からは助けてあげるわよ」

よく考えたら、あんな一部始終を見られていたわけだ。恥ずかしいったらない。

「それより玲二、気をつけて。これからなにか動きがあるかもしれないわ」

「何が？」

「百井 沙夜って子よ。彼女の素顔、醜いんでしょ？」

「……うーん。まあ、そう、かな？」

女性の顔を醜いなどと表現していいのだろうか。忌まわしい相手ではあるが、顔のことは本人の責任ではない、はずだ。

「あれだけの怒りを見せるってことは、素顔を見られることがよほど屈辱なんだろう。男はみな、自分をみてうつとりする……。そういうことに快感を感じてそうなる舞いだっただわ。あなたに効果がないことに、焦ってムキになっていた」

確かに、散々誘惑しようとしてきた。何故だろうと思っていたが……。

「効かなかったんだから、あなたのことを目障りに思っている。それに彼女、あなたが強い力を持っていると勘違いしてるようだった」
確かに、しらはつくれるなどか、そんなことを言っていた。

「あいつの正体はなんなの？」

「あの子、自分以外の力に守られててよくわからないのよね。魔女の一族あたりだとは思っけど」

「魔女……」

それは、人間に変えてくれる力を持っていると母が言っていた存在ではなかっただろうか？

「言ったわよね。魔女は気難しい者が多い。一筋縄じゃないわ

よ。あの子自体はさほど強くはなさそうだけど。とにかく性格の悪いものばかりなの。仲間もいるみたいだし……ね」

「わかった」

もしかして、過去に魔女となにかトラブルがでもあったのだろうか？ ひどい言いようだ。

とはいえ、自分に何ができるだろう？ 人外の力でなにか仕掛けられて無事でいられるものだろうか。

あいつの協力が得られれば、もしかして人間になれる？

いや、協力なんて……母さんの言うとおり、一筋縄ではいかないだろう。いや、それどころか完全に無理なんじゃないか。

今日は散々だった。しかし、ヒントも得られた。「完全な遮断」がなにかわかれば、自分の進むべき道がわかるかもしれない。

次の日、いつもと同じ時間に学校へ行った。

玄関で靴を履き替えていると、担任の荒川が通りかかる。

「おはよう。ちようどよかった。園田、ちよつと来てくれるか？」

「はい」

いつきが返事をして、職員室よりも向こうの部屋に通されている。あそこは自分も昨日行った。生徒指導室だ。なんだろう？

教室で待っていると、良太郎がやってきた。

「よ！ 玲二」

いつも通りの笑顔だ。

「今日から勉強会しようぜ。もうすぐ試験だもんな！」

「ああ」

「昨日は大変だったな……。ホント、モテる男は大変だ！ 俺、モテなくてよかったぜ」

そういつて、ニヤリと笑う。これが葉山流の励まし方なんだろうな。

「そうだな。次生まれ変わるなら、俺も良太郎くらいにしとく」

「そりゃねえだろ？」

そう言つて、2人で笑った。

とりあえず周りが敵しかいないような状態ではないらしい。ほんの少し安心することができた。

その後続々とクラスメイトがやってきたが、表立っておかしな反応をするものはいない。

もうちょつと色物扱いされるかと思つていたが、その心配はしなくてもいいのかな。

しばらくしてから、いつきがようやく教室へやつてきた。

「あ、おはよう、葉山君」

「園田ちゃん、どうしたの？ 生徒指導室に呼ばれるなんてさ」

良太郎が小声で言う。すると、いつきも小さい声で返した。

「相原君に後つけられてたの、本当か？ って聞かれたんだ」

そうか。昨日の相原の事情聴取の裏付捜査だ。

「昨日、相原君が私のことを……、なんていうか、ストーカーをしてるって話が出たらしくて」

「マジで？」

「それ、俺が言つたんだ」

「玲二くんが？」

「あいつに絡まれたんだけど、急いでたからなんとかしたくて」
それで体育教師の佐藤にバラしたんだと2人に教えた。

「それでいなかったのか。あいつ、結局授業出てないもんなあ」
そうだった。結局教室には戻つてこなかった。一体どんな話をどれだけしたのだろう。

「先生、すごく疲れたって言つてた。ちよつとげっそりしてたよ」

「園田ちゃんは何を話したの？」

「夏休みのことと、この間電車で言われたこと、かな。私、バイトのことも話してないのに知ってたって言ったけど、……悪かったかな？」

「そこは遠慮なく言っていていいところだろ。園田ちゃん、変な情けはいらないぜ？ 告白した時も覗き見してたみたいだし」

「え！？」

いつきが大きな声を出した。

「あれ、知らなかったの……？」

「告白って……、玲二くんにした時の？」

良太郎が困った顔でこちらを見る。

「本人がそう、言ってたよ」

仕方なく答えると、いつきはひどく苦い顔をした。

チャイムがなり、良太郎が自分の席に戻っていく。

窓際の1番前の席が、2つ空いていた。相原と、百井の席だ。

「おーし、おはよう！」

先生はいつもと違って渋い顔だ。

「今日は欠席は百井だけかな？」

2つの席以外はちゃんと埋まっている。

「えー、残念な話がある。相原は、停学1週間になりました」

その言葉に、教室がざわざわし始める。

「理由は、素行不良です。もしかしたら、もうちょっと期間が伸びるかもしれません」

それ以上の詳しい理由は語られなかった。いや、語れなかったというべきか。

「みんなも普段の自分の行動、よく見直すんだぞ。自分がよくても他人が困らないか、そういうことも考えられる大人になってください！ 以上！」

なんとなく落ち着かない雰囲気でホームルームが終わった。

「みんな、試験前なんだから、勉強に集中だぞ！ 気持ちを引き締

めてな！」

その日の放課後から、また勉強会を始めた。

いつきと俺、早川と島谷以外に、江川や綿貫などクラスの男女5人が参加している。どうやら昨日の事件の影響はなかったようで、辞退者はいなかった。

「いいなあ、葉山の家。風情があって」
綿貫が笑顔で言った。

「感心するのは試験終わった後な！ 今回もお疲れ様会をしようぜ」
そう言って良太郎がまた、ホワイトボードに「打ち上げ」と書き込む。相変わらず美しい字だ。

試験までの日々はあっという間に過ぎた。

勉強会も10人でわいわいと盛り上がってやっている。

新しく加わった5人とも、時に笑い、時に大いに盛り上がり、お互いの得意分野を教えあった。

試験のことは心配はない。ただ、百井がずっと欠席を続けているのが気がかりだった。

何をしているんだろう？ 何か仕掛けては来ないんだろうか……？

結局、試験が始まっても宿敵が登校してくることはなかった。

不思議なことになぜか、誰も彼女の話をしない。まるで最初からいなかったかのようだ。

あえて自分から話を振ることもないと思い黙っていたが、少し腑に落ちない。みんなあんなに夢中だったのに。

試験も無事に終わり、また打ち上げをすることになった。

「葉山の家、学校に近くていいよなあ」
綿貫が笑顔で言った。

「俺んち1時間以上かかるから、うらやましいよ」

「1時間以上は長いな。玲二は？」

「40分くらい」

「立花の話仕方、そっけないな」

「そっいいながら、綿貫は笑っている。」

「そこがいいだろ、玲二は」

良太郎も笑う。

「そうか……。ミステリアスなところが女子に受けるんだな」
そんなつもりはないんだけどな。ミステリアスなのか？

「でも狙って黙っててもダメなんだよな。やっぱり持って生まれたものが違うんだよ、綿貫くん」

学園祭のおかげで、良太郎以外にもなんだか友人が増えたようだ。
「飲み物ってこんだけで足りる？」

もう1人の新しい男子の参加者、市ノ瀬が声をかけてきた。

「どうかな……。10人だろ？ あとちょっとあったほうがいいかな」

「これこれ、これも入れといて。玲二の好きなやつだから」

良太郎が紅茶のボトルをカゴに入れる。それをみて、綿貫が言った。

「葉山って立花のこと、すげえ好きじゃない？」

「お前も一緒にいれば好きになるぜ」

「良太郎、気持ち悪いこと言うなよ……」

軽く釘をさし、買い物をして戻る。荷物は島谷が張り切って持ってくれた。

葉山家に戻り、打ち上げを開始する。

まだ結果は出ていないが、試験が終わった安心感で大いに盛り上がった。

いつきも笑顔だ。

「今回はどうか。結構できた気がするよ」

「今回は100位以内になりたいなあ」

早川も笑っている。島谷も、自分もと相槌を打つ。

「そういえば今日、百井さんを見たよ」

突然、仁谷が言った。皆、顔を見合わせる。

「ずっと休んでたんだっけ。でも今日もいなかったよね？」

「帰る前に職員室に入っていくところみたんだ」

「ふうん……。そういえば、なんで休んでるんだろうね？」

「それよりも、メールきたでしょ？ アドレスどうやって知ったのかな」

「ああ、ホントだ！ クラス中みんな来たって言ってたけど、誰か教えたのかな？」

ここで百井に関する話題は終わった。みな、それ以上気にはならないようだ。

あんなに夢中だったはずの良太郎たちも何も言わない。

不思議だ。……。もしかして本人がいる場所でなければ、みな気にならないのだろうか？

改めて考えると、本人がいる時だけ周囲の人間の様子がおかしくなっていたような気がする。

それが、あいつの力？

「相原も来なかったな」

「あいつは自業自得でしょ。素行不良だもの」

「素行不良ってなんだったの？ 葉山は知ってたの？」

「あいつはちよっと、他人の迷惑を考えられないやつだったことは知ってるよ。園田ちゃんの告白のことも大声で叫んだろ？」

綿貫も、市ノ瀬も、あゝと頷いた。それを見ていつきが赤くなる。

「みんな聞いたの？」

「聞いたよ。聞いたってどうか、聞かされたってどうかねえ」

「あれはなかったわよね。デリカシーもないし、気持ち悪いって思った」

江川が参加してくる。仁谷と木下もうんうんと同意する。

「その後の立花君はカッコよかったけど」

「結局今日まで来てないよね？ 停学1週間って言ってたけど」

「伸びたんじゃねえの？ 荒川っちも言ってたじゃん」

確かに、ストーカー行為をしていた生徒とされていた生徒を一緒のクラスのまま、というのはどうかと思われる。更にいつきからの情報も入って、処分が厳しくなった可能性は高い。

そういえば、蔵元先輩はどうなっただろう。もう、登校しているんだろうか……。

試験中だったこともあり、結局図書室へは1度も行っていない。

打ち上げから帰ると、母さんが待っていた。

「おかえり玲二、話があるんだけど」

「わかった」

「ご飯食べる？」

「いや、……いいよ」

2人でリビングに向かう。父さんはまだ帰っていないようだ。

もうすでに2人分のお茶が入っていた。母の90度隣、いつもの位置に座る。

「試験お疲れ様。今回はどうだった？」

「……まあ、いつもどおりかな」

「今回は30位くらいかしらね」

黙って紅茶を一口飲んだ。話とはきつと、あれのことだろう。

「完全な遮断のこと、何かわかったの？」

母はゆっくりと頷いた。

「あちこち当たってくれたみたい。3日前に聞いたんだけど、試験が終わってからって思ってたね」

祖父の顔を思い出す。厳格です、という雰囲気を持ち主だ。

「どうやら、こちら独特のものみたいね。完全な遮断っていうのは」「こちら？」

「日本独特のつてこと。日本は狭いののに、種族も能力も種類が多いわ」

「母さんたちは知らなかったの？」

「知らなかったわ」

そう言つて肩をすくめている。

「完全な遮断というのは、精神的にと心理的に、外部からの影響をまったく受けない力のことみたい」

「影響をまったく受けない？」

「心を操るとか、探ろうとする術をかけられても、まったく効かないつてこと」

「……かける側の技術力みたいなものは、関係なく？」

「関係なくつてことみたいよ。普通ならば、かける側が集中して相手を操ろうとする。かけられた側の心は、その人の意思や主義なんかによつて程度は違うけど、無意識のうちに抵抗をする。特別に強い抵抗力を持つている者もいるけど……。とにかく、その勝敗で結果が決まる。かけた側の力が強ければ、その術は成功」

「催眠術みたいな感じ？」

「そうね。同じような感じかしら。その勝敗以前の問題で、まったく受け付けない。抵抗することすら必要ないのが『完全な遮断』つてことらしいわ」

それが、自分の中にある力？

「だから、俺の心は読めないの？」

「あの子のいう事が正しいなら、そうなんでしょうね。あなたの抵抗力がものすごく強いわけじゃないなら……多分」

抵抗力か……。無意識にしているのだとすると、自分の強さがど

のくらいか知るのは難しそうだ。

「効いたことを証明するのは簡単だけど、効かないことを証明するのは難しい。私も確信できないわ」

確かに、効果がない理由を確定するのはどんなことでも難しそうだ。

「じゃあなんであいつは断定してきたんだろう？ よつぱど自分に強い力があるのかな？」

「わからないわ……。私たちが知らないだけで、こちらのほうではなにか確かめる方法があるのかもしれないし」

母はそういつて俺をじつと見つめた。

「あなたにはそういう自覚はないの？」

「ないよ……。大体、外部からの影響を受けないっていうのは、どいう事なんだかわからない。嬉しいとか哀しいとか、そういう感情とは別なの？」

「感情は自分の中から沸き起こるものでしょ？ それは別なんじゃないかしら」

なるほど……。

「あくまで誰かの意思で勝手に操作しようとした場合に有効……とかかしらね？ 私もわからないわ。こっちに知り合いもないし」

「会合とかないの？」

「あるんじゃないの？」

母は実に適当な言い方で答えた。

「……私はいつか故郷に帰る。ここに永遠にいるわけじゃない。家族で暮らしている間は、あくまで人として過ごしていきたいの。だからここに来てから力を使うことなんてほとんどしてない。仲間も必要ない」

息子の恋愛には色々ちょっかいを出しているようだが、そのところはどうなんだろうか。

玄関のドアが開く音がして、父さんの声が聞こえた。

「ただいまー」

母さんが立ち上がって出迎えに行く。俺もなんとなく、着いていた。

「おかえりなさい」

「おかえり」

「玲二、試験終わったか？」

「うん」

母さんがカバンを受け取って、上着をハンガーにかける。

「どうした、難しい顔して。出来が悪かったのか？」

「今ちよつと玲二の力について話してたの」

「わかったのか」

興味津々な様子だ。

「お夕食は？」

「後でいいよ。わかったなら聞かせて欲しい」

3人でリビングに移動して、ソファに座る。母は紅茶を全員分淹れて持ってきた。

「父さんも気になるんだ……」

そう呟くと、父は驚くほど真剣な顔をした。

「当たり前だろう？ お前の人生がかかってるんだ」

そう言って、俺の手を強く握り締めた。

「外部からの影響をまったく受けない……」

あごに手をやり、父さんはしばらく目を閉じてなにか考えている。

「玲二らしいな」

「なにそれ」

父さんは優しい顔でニツコリ笑う。

「小さいころから、やけに冷静な子だと思ってたからな。いつだって静かで、いつだって注意の必要がなくて、ただ大人しいというわけじゃなくて、動じない子だと思ってた」

母さんも頷く。

「その力の影響なのかもしれないぞ。お前のその落ち着きは」

「そうね……。抵抗する必要がないから、いつも動じない、のかしらね」

「確認する方法はないのか？」

「わからないわ」

「それに、力はそれだけなのかな」

父さんが疑問を投げかけてくる。母さんは首をかしげて考えている。

「そうね……」

「他人からの干渉が効かなくて、自分は他人を思い通りにできるなんてことになったら最強だな」

それは恐ろしい存在だ。しかし、「完全な遮断」と組み合わせるには最適な力のように思える。

「どうかしら玲二」

「そんなの……やったことないし、わからないよ」

「試してみたらどうだ？ 父さんのこと操って構わないぞ」

父さんは至って真剣な顔だ。しかし、この世でこんなセリフが使われることはそうそうないだろうな。

「やってみる？」

母さんも真剣だ。

「やってみるつたって……、どうしたらいいかわからない」

「相手の目を見て、心に直接触れるのよ」

心に触れる？

父さんの黒い落ち着いた瞳を見つめる。心に触れることなんてことが、できるだろうか？

「できると信じて、やってみなさい」

確かに、やらないよりはやってみた方がいい。

心を静める。父がやらなさそうなこと。集中して考える。

何分経っただろうか？　どうやら、何も起きないようだ。

「ダメか？」

「ダメみたいね……」

2人の言葉で、はあっと大きく息をついた。なんだかだいぶ、疲れている。

「たまに試していこう、玲二。もしかしたらある日、ふっとできるかもしれないだろう？」

「俺にそういう力があるかどうかって、わからないもんなの？」

「わからないわよ。あなたの中身は完全に防御されてるんでしょ？　完全な遮断も、いいことばかりではないのかもしれない。」

それがなければ、自分の力の全容説明はあつという間だったろう。

ベッドの上で、目を閉じる。

人の心を操る、か。

もし自在に人をコントロールできたら……。

いつきの顔を思い浮かべる。自由自在……。

なんという恐ろしい力だろう。しかしそんな力を使えたら、世界のすべてが虚しいものになりそうだ。

百井は、男を魅了する力を放っているんだろうか。みんな目を奪われ、彼女以外のことは疎かになっていた。しかしいなければ、その効果はない……　ような感じがする。

女性にはどうなんだろう？　なにも影響はないのか？

いつきは言っていた。

百井さんのことまるごと信じちゃった。

学園祭の時、教室へ戻るといつきは座り込んでいた。悲しそうに、力なくしていた。でも、百井の姿が見えなくなっただけはいつも通

りになっていた。

魅了はされていなくても、なにかしら心に影響を受けていそうだと自分で判断ができなくなるような、そういう力が効いている？

すべては推測でしかない。あいつ本人に確かめることはできるだろうか？

……考えるだけで気が滅入る。完全に敵として見られている、と思う。

ふいに、母の言葉が思い出された。少しひっかかったあの表現。

ああ……、あの子ね

母さんはあいつのことを知っていた。

しかしあの言い方はなんだろう？　もしかして、人ではない者はまだ他にも近くにいます？

人でない者の気配は、特別に感じ取れるのかもしれない。

ズルいな。知っているのなら、教えて欲しい。警告しておいて何故言わないのだろう。

新しい可能性か……。

未知の力に触れて、なにか影響を受けるかもしれない。眠っていた能力が開花するかもしれない。そんな風に、期待してもいいんだろうか。

こここのところ、土日はあちこちの図書館へ通っていた。文献を調

べるためだ。しかしどうやら、あまり参考になるものはないらしい。いつきは気を使っているのか、どこかに行こうと誘ってくるのがなかった。

学校では、俺たちは付き合っていることになっている。しかし二人の仲は、夏休みの間よりもだいぶ後退しているような状態だ。彼女がどう思っているかはわからないが、俺はそう思っている。そんなことを考えているのが、彼女に伝わったのかもしれない。

「ねえ玲二くん。来週の日曜日、どこか行かない？」

いつきは実に控えめな笑顔で言った。

「来週の土曜日はね、千早の学校の学園祭に行くの。あそこは、男の子は入れないんだって」

「女子校なんだっけ」

「うん。ちよつと校則も厳しいんだよね。……そういえば、高井戸君や北沢君の学校には行かないの？」

「え？」

そういえば、何も言ってこない。特に行きたいとも思っていないけど、向こうから誘ってきそうなもののに。

いつきと一緒に来いとか、無茶なオーダーをしてきそうに思える。「うちの学園祭には来てくれてたよね？」

「そうだな。……ちつとも話せなかったけど」

ぼんやりしているところを廊下に出した。でも、百井を見れば一つとしたまま、話しかけても生返事が返ってきただけ。結局会話は成立しなかった。

「あの時、百井さんにうつとりしてたんだっけ」

「……そうか」

確かに、うつとりされていた本人もそう言っていた。それでどうなったんだろう。すっかり恋して帰って、いつきのことは忘れてし

まった？

段々と、友人たちのことが気になってきた。あの時は、高井戸と北沢の2人には会ったけど……。

「石神も来てた？」

「石神君？ ……私が見たのは2人だけだよ」

じゃあ、2人で来たのか。なんとなく気にかかる。石神にメールを送ってみよう。

「日曜日はどう？ 玲二くん、行きたいところってある？」

行きたいところは今は特にない。図書館だって近場のは全部行きつくした。大体図書館ではいつきはきつとヒマを持て余してしまう。
「特に思いつかないな……」

「じゃあ考えとこうかな。行こうぜって言ってもらえるところ」
いつきはとびっきりの笑顔で言った。

夏休みの最後に、元氣のないところを見せてしまった。あれ以来、いつきは少し離れて、しかし一定の近さのところにいてくれている。そんな遠慮をさせてしまっているのは申し訳なかった。たまには一緒にでかけるくらいいいだろう。

メールの返事はすぐに返ってきて、帰りに石神と会うことになった。

駅でいつきと別れ、待ち合わせをしたファーストフード店に入る。少し待つと、見慣れた顔がやってきた。手を挙げると、すぐに気がついて手を振り返してくる。

自分の分のトレイを持って、石神が向かいの席に座った。

「玲二、久しぶり」

「ああ」

「ごめんな、学園祭行かなくて。用事があったさ」

「いいよ、別に」

石神とは幼稚園から一緒の仲だ。お互いあまりしゃべらないので、会話はとても簡素になる。

「なあ、園田と付き合ってるの、なんで黙ってた？」

「え？」

単刀直入な質問に、一瞬驚く。

「高井戸たちが言ってたぞ。玲二君なんて呼ばれてるって」

「……そうか」

それで連絡を寄こさないということなのか？

「みずくさい。言ってくれたら、あの2人だって応援するだろ」

「違うんだ。ちよつと訳があつて……」

クラスの2人の問題児の話をする。今は、つきあってるフリをしている。嘘ではなかった。

「……俺は花火大会の時、楽しそうなお前を見たけどな」

石神はマジメな顔で言った。

「手、つないで歩いてただろ？ 嘘を言うなんてお前らしくない」

見たのか……。報告してくるのを、待っていてくれたということだろうか。

なんと答えたらいいんだろう。何を言っても、嘘っぽく聞こえてしまいそうだ。

仕方ない。正直に言うしかない。

「嘘じゃないんだ。俺……園田とは付き合ってない」

その言葉に、自分が1番ガツカリする。つい、顔が下を向いてしまった。

「園田は俺のこと、好きだって言ってくれた。俺もそれに応えたいけど……できないんだ」

「なんで？」

「なんでだろうな……。どうしようもない、理由があるんだ」
石神の表情は変わらない。信じてもらえなくても仕方ない。

「そうか」

「……」

「あいつらは怒ってた。自分たちに黙ってこそ園田と付き合ってるなんてっさ」

「……そう」

「俺が言っておくよ。誤解だったって」

石神はコーラをストローでちゅうつと吸った。

「そのかわり、なにかあつたらちゃんと言えよ」

そして、二つと笑う。

「ありがとう」

「狭い町内だからな。いちやついてたら目撃するぞ」

確かに、みな近い範囲に住んでいる。今まで見られなかったのが不思議なのかもしれない。

「せつかく玲二に初の彼女ができたかと思ったのにな」

「なんだよそれ……」

石神は肩をすくめてみせた。

「お前今まで何人告白断ってきた？俺が知ってるだけで、25人」
そんなものを覚えているのか。なんだか、やたらと恥ずかしい。

「で、高校は何人？」

「そんなの……ゼロだ」

いや、ゼロではない……か。初の男の告白があつた。

「園田は？」

「……保留中」

「言えなかつたんだな。あいつらに遠慮することはない。むしろその方が傷つく」

石神の言うとおりだ。良太郎といい、なぜこんなにお見通しなんだろう。もしか、人間ではないとか？

「なんでもわかるんだな」

「お前が単純なんだよ」

単純と言われたのは初めてだ。なんだか、妙に恥ずかしくなる。

「マジメで意外性がない。だから、すぐわかる」

「そう……か」

石神と2人で話すと、始終低いトーンの会話がづく。でも、久しぶりになんだか落ち着いたような気がした。

「俺たちのところの学園祭、もう終わったんだ。玲二に会いたくないからって……高井戸に口止めされてた」

小さな声だった。いつも通りだけど、いつもとは違う声。

「ごめんな」

「いいよ……。俺が悪いんだから」

「きつと高井戸、お前の家に行くって言っただろうから。俺も一緒に行くよ」

「わかった。待ってる」

しかし、来週の日曜日の話はやはり、秘密にしておくべきだろうか？

そんなことを考えながら、その日は眠りについた。

試験の結果が廊下に張り出されている。

今回の順位は、49位だ。やったやった！　とうとう50位以内に上がった！

玲二くんの名前を探す。20位のところに、探し物はあった。

「いいね。勉強会の成果が出ているね！」

葉山君が笑顔でやってくる。

「園田ちゃん着々と上がってきてない？」

「葉山君も前より上がってるよね」

葉山君は27位だった。確か前回は、30位台だったはずだ。

「ああ」

冴えない声が後ろからした。

「いつき、110位だって」

友香だ。2ケタという目標は果たせなかった。

「仕方ないよ。島谷君としゃべってばかりだったもん」

友香が渋い顔をして動きを止める。勉強会に来てはいたけど、
2

人のところは時々ハートが飛んで手が止まっていた。

「追試はないんでしょ？」

「もーギリギリね。それは助かった」

「島谷君は？」

「島谷もギリギリ大丈夫だって」

「ギリギリね」

葉山君が間に入ってきた。

「葉山君、成績いいよね。上位じゃん。上位」

友香の言葉にニカッと笑う。

「そうね。そろそろ俺の時代が来るのかもしれないね」

「だといいね」

「もうちよつと心こめて言ってもらえる？」

苦情を受けながら教室へ戻ると、玲二くんが自分の席にじっと座っていた。

「玲二くん、20位だったよ」

「……ああ」

気のない返事だ。なんだか試験が終わった次の日から、少しぼんやりしていることが多い。

「なあなあ園田ちゃん」

また宗田君の席に座ってる。本来の席の主はもう諦めたのか、基本的にどこか他の友人の席にいるようになっていた。

「来週の土曜、玲二とデートしたりする？」

「来週の土曜は千早のとの学園祭に行くけど」

「なにっ！？ 千早ちゃんって女子高じゃなかったっけ？」

「そう。あそこはね、男の子はダメなんだ」

「そうなの……じゃあ、玲二とは行かないってことね」

「うん」

私の返事を聞いて、葉山君は玲二くんの方に向き直った。

「よし、じゃ来週の土曜、俺とデートな」

「……ん？」

「映画観に行こうぜ。新しく出来たシネコン、知ってるだろ？」

新しく出来たシネコン……。確か、聞いたことがある。

家からだと電車で40分くらいかかる、この辺りでは1番賑わっている月浜駅の駅ビルが大規模に改修されて、そこにできたはずだ。

「シネコンって何？」

「お前……、知らねえの？」

「シネはシネマのシネか」

玲二くんの言葉の後に、おおげさにため息をついた音が聞こえた。
「お前みたいなインテリジェンスのあるやつが何だよ」

「……映画なんて観ないし」

「だったらたまには観ようぜ。もうチケットもあるし」

玲二くんはなんとなく、面倒くさそうな顔だ。

「映画観て、一緒に飯食って、その後はボーイズトーク。もう決まり」

とうとう、イヤそうな顔になっている。

「ボーイズトーク？」

「お前と2人で心行くまで話したいんだよ」

いつもよりもやけに情熱的な感じ。なにかあったのかな、葉山君……。

「いつも園田ちゃんといちゃついていたんだろ？ いいじゃんか。たまには男同士でもさ」

「そりゃ、いいけど」

「じゃ、決まりな」

来週の日曜日は、一緒にでかける約束だ。

まだどこにしようか決まらない。とりあえず、映画はなしになった。

いつもいちゃついていると言われたけど、夏休みが終わってから2人で過ごしたことはなかった。ずっと遠慮していたからだけど、来週はとうとう久々のデート。どうしても、やっぱりちよっとくらい一緒に過ごしたい。本当に、断られなくてよかった。

一応、好意は持っていてくれる証拠、と思おう。

あさつてはお母さんとの約束で、服を買いに行く。

来週玲二くんに可愛いつて言ってもらえるようにするんだ。成績だつて上がってるんだから、ちよっと奮発してもらおう。

玲二くんは授業中も少し、ぼんやりしているように見えた。

落ち込んでいるわけではなくて、何か考え込んでいるように見える。

しかし、ぼんやりしていても、先生にあてられればちゃんと答えている。

勉強会の時に思った。何を聞いてもわかりやすく教えてくれて、誰のどんな質問にも教科書を開かなくても答えられる。もっと成績、良さそうなんだけど。

5位以内とかでも全然不思議じゃないのに。20位でも充分上位だけど、なんとなく腑に落ちない。

「園田、今日クラブがあるんだっけ？」

授業が終わって、玲二くんが声をかけてきた。

「うん。あるよ」

「……俺、先に帰っていいかな？」

一瞬答えに困る。帰っていけないとは言えないけど、やっぱりガツカリしてしまう。

「ごめん。ちょっと、行きたいところがあつてさ」

「え？ ううん、いいよ。用事があるならそんなそんな」

多分、ガツカリって顔をしちゃったんだな。謝らせちゃって、申し訳ない。

「……玲二くん、なにか悩みでもあるの？」

「ん？ ……やっぱり、わかるか」

悩みがあるのに、なぜか少し笑顔になった。そして、やっぱり笑顔がかつこいい。

「ちょっとわからないことがあつてさ。考えてもしようがないんだけど」

「わかる。そんなの、私もしょっちゅうだもん」

「……今日は何、作るの？」

「クラブで？ うーんとね、マカロンだよ」

「マカロン？」

「知らない？」

顔の感じからすると、さっぱり見当もついていなさそうだ。

「あとで写真送ってあげる。流行ってるんだよ。可愛いお菓子なんだ」

「楽しみにしてる」

玲二くんは手を挙げると、カバンを持って去って行ってしまった。何作る？　なんて初めて聞かれた。一緒に帰れないから、サービスで聞いてくれたのかな。

お菓子なんか、興味なさそうなのに。

可愛らしいマカロンを箱に詰めて、帰る支度をする。上手にできて、満足満足。

玄関で靴を履き替えていると、後ろに誰かが来た気配がした。

「あ、……園田さん、だよな」

振り返ると、どこかで見たような気のする男子生徒がいた。

下駄箱の位置からすると、4組の人だ。

「そうだけど……」

「覚えてないかな」。俺、園芸委員で一緒の本城」

「え？」

確かに最初の頃に見たような見てないような。そんな気もするけど……。

「覚えてないよね。はは」

本城君とやはらは困ったような顔で笑った。

「今日は1人？」

「……うん」

「いつも背の高い、目立つやつと一緒にでしょ？　立花だっけ」

この人、なんでこんな話をしてくるんだろう。

「彼氏なの？」

「……」

「ごめん。めんどくさいやつだと思ってる？　ほんとゴメン。でも

気になつてて」

本城君とやは声を潜めて聞いてきた。

「あいつ、男の先輩とデキてるんじゃないの？」

「……違う！ 私の彼氏だから！」

つい、大きい声で言つてしまった。本城君は驚いた顔をして、すぐに謝つてきた。

「マジでごめんね。いや、なんかメールがまわってきたからさ。でも園田さんといつとも一緒にいるでしょ？ どうなつてんのかな、なんてね」

こんな野次馬に付き合つてなんかいられない。うわばきを自分の場所に入れて、外へ向かった。

「あ！ ちょっと待つて、ほんとにゴメンつて」

慌てて着いてくる。それに、ちよつと強い声で文句を言った。

「あなたみたいな人がいると、本当に困るの！ 面白がつて人の写真勝手に送つたりするなんて最低だと思う！」

「だからゴメンつて。それに俺は、あの立花つてやつのはどうでもいいの。園田さんが彼氏いるのかが気になつて聞いただけ」

「え？」

我ながら可愛くない声で、雑な返事をした。

「前からね、可愛いなゝつて思つてたの、君の事！」

私のガラの悪い返事にも堪えずに、本城君は笑顔で着いてくる。

「いつも一緒にいるけど、あんまりさ、あいつと付き合つてるように見えなかつたから……」

ちよつと、ギクつとした。つい、顔を見てしまう。

「もしチャンスがあるなら、俺なんかどうかなゝつて」

「ありません！」

つい、足を止めて大声を出してしまった。

「わお……。そんなキヤラなんだ。園田さんつて」

本城君はなぜか、まだニコニコしている。

「いいね。可愛くつてからかいがいのある女の子つてさ。ねえ、俺

と付き合わない?」

驚くほど軽いノリだ。彼氏がいるとわかって、こんな風に言えるものなのかな?

「悪いけど、タイプじゃないから」

「そんな、まだちょっと話しただけじゃん。1回デートしようよ。そしたらわかってもらえると思うけど」

再び歩き出す。できるだけ早足にしているのに、すぐ横に平気で着いてくる。

「学園祭の時、可愛いかっこしてたでしょ? すっごく似合ってた」
「ついてこないで!」

また立ち止まってしまった。

「俺も電車だから。一緒に駅まで行こうよ」

ああ……

どうして今日、玲二くんは一緒じゃないんだろう。
やだやだ一緒に帰りたいって、わがママを言えばよかった。

「イヤなんだけど」

「そんなこと言わないでよ。ヘンなことはしないからさ」

「当たり前でしょ」

「怒った顔もいいね」

走っても多分、着いてくるに違いない。

仕方ない。今日は我慢するしかないか……。駅までなんとか我慢
だ。

「ねえねえそれなに?」

カバンと一緒に持っている小さな紙袋。マカロンが入っている。

「……」

別に答える義理はない。

「お料理クラブに入ってるんだよね? お菓子?」
なんで知ってるんだろう。ムカムカしてきた。

「俺、テニス部なの。部活中にさ、調理室が見えるんだよね」

本城君は勝手にしゃべっている。

「みんなで園田さんのこと見てるんだよ。エプロンしていると可愛さ倍だよねって」

「……」

「俺テニス部やめて、お料理クラブに入ろうかな？ 男子でも入れるんでしょ？」

思わず、げっと思ってしまった。なんてことを言い出すんだらう。もう、本当にイヤだ。

「そんな顔もするんだ……。いつものほうが可愛いよ？」

もうすぐ駅につく。果たして、この無礼者はどこに住んでいるんだらう？

「園田さんって駅はどこ？ 俺はね」

勝手にどこで降りるか説明してくれた。私の家とは逆方向の、例のシネコンのある月浜駅。少し、安心する。もうこれ以上付き合いたくない。

「私、逆方向だから。じゃあさよなら！」

ようやく別られる。と、思ったら後ろから引っ張られた。

「これ、彼氏にあげるの？」

いつの間にか、紙袋が取られている。

「ちよつと……」

「へえ、マカロンか。いいね！ 可愛い園田さんにピッタリ」

勝手に箱を開けて、1つ食べてしまった。

「これ、俺ももらっていい？」

もう食べてるくせに、何言ってるんだらう。

「全部どうぞ！ どうせ弟にあげようと思ってたから！」

勝手に取られて、勝手に食べられてしまった以上、もう取り戻すのもイヤだ。

本城君はニコッと笑って、もう1つ手に持っている。

「美味しい」

ムカムカしたけど、怒るより相手をしない方がマシだ。
改札に入って、ホームを走る。閉まりそうな電車のドアに慌てて
飛び乗った。

駆け込み乗車を注意する声が聞こえる。
ドアの向こうでは、本城君がマカロンを片手に笑顔で手を振って
いた。

家に帰っても、ムカムカは収まらなかった。
相原君はコミュニケーション不能でどちらかというと恐怖を感じ
たけど、本城君はずうずうしくて腹が立つ。
どいつもこいつも、好きな相手ならもっと丁寧に接するべきじゃ
ないのかな。

ムカムカのまま夕食の準備を手伝って、ムカムカのままご飯を食
べて、お風呂に入った。
ため息をついて部屋に戻ると、メールが来ているのに気がつく。
玲二くんからだ。
ウキウキとボタンを押す。

今日は一緒に帰れなくてごめん。
明日は北沢の学校の文化祭に行ってきます。
マカロンはうまくできた？
写真待ってる。

しまった……！ 忘れてた！
本城め……！

慌ててキッチンに降りた。マカロンの材料はあるかな？

ちよつと足りない。ああ、がっかり。

「いつき、どうしたんだ？」

「一兄ちゃん……」

1番上の兄ちゃんが心配そうな顔で見ている。

「ちよつと……材料が足らなくて」

「何の？ 買ってきてやろうか？」

「ううん、いい。多分、揃わないもん……」

どうせなら、ピンクとか黄色とか、可愛い色を揃えて撮りたい。その辺のコンビニくらいでは、材料を揃えるのはちよつと無理だ。

「今日はちよつと怒ってたみたいだけど、なんかあったのか？」

「ちよつとね……。クラブで作ったお菓子、ひったくられたの」

「ひったくり？」

一兄ちゃんにしては珍しい大声だった。おかげで、他の兄弟もわらわらと集まってくる。

「ひったくりにあつたのか！？」

「いつき、大丈夫だったか？」

「違う違う。……普通のひったくりじゃなくて」

仕方なく、無礼な同級生にされた仕打ちを話した。

「なんだ。心配したよ」

兄弟はまたわらわらと去っていった。

「可愛くできたから、写真撮りたかったの。しょうがないから、また今度作り直す」

「そうか」

落ち込む妹に気を使ったのか、お茶を淹れて持ってきてくれた。

「ありがと」

「そいつ、お前のことが好きなんだな」

思わずお茶をぶつと吹いてしまった。

「おいおい……」

「ごめん」

慌ててテーブルを拭く。

「一兄ちゃんが変わなこと言うから」

「いや、当たり前だろ？ 好意もないのにそんなことする男いないよ」

「兄ちゃんもする？」

「俺はしないな。だってそんなことしたら嫌われちゃうだろ」

本当だ。今、本城とやらの好感度はゼロどころかマイナスになっている。

「ま、でも、覚えてもらうにはいい手だよな。その後すごくいいことしたら、いいやつに思えちゃうし」

「なにそれ」

「いつもは素行の悪いやつもさ、ある日いきなりマジメに掃除したり、捨て猫を雨の中で抱いたりしてるの見たら『もしかしていい人かも！』って思うパターンだよ」

一兄ちゃんはその言って笑った。私もおかしくて、一緒に笑う。
「なるほどね。わかった、そのパターンにはひっかからないことにする」

「そんなにイヤだったのか？」

「食べ物への恨みは恐ろしいんだよ」

だって玲二くんは写真を送れない。なんて返事しよう。

本当のことかいたら、心配してくれるかな……？ でもなんか、詳細をかくのはなんとなく気が進まない。兄ちゃんたちには悪いけど、勝手に食べちゃったことにしようかな。

「ん？」

「なんでもない。一兄ちゃんもそんな手、使ったことあるの？」

「ないよ。俺、基本的にいい人だから」

「自分で言う？」

一兄ちゃんは大人だから、安心して話せる。なんとなく気持ちもほぐれて、自分の部屋に帰った。

日曜日、お母さんと2人で家を出た。

2人でお出かけなんて、2年に1回あるかな、くらいだな。

電車に揺られながら、学校の話なんかをする。なんだかお母さんはすごく楽しそうだ。

「嬉しいわ。どんな服、買おうかしらね？」

来週玲二さんと葉山君が行くと言っていた、月浜駅に向かう。

駅前が大きくリニューアルされて、シネコンの他にもショッピングモールが出来たばかりだ。地下には食品街、上にはレストラン街とオールスター勢ぞろいの施設に生まれ変わっている。

今はちょうど、オープンセールの真っ最中。

もちろん混雑しているだろうけど、いっぱい買うチャンスだとお母さんは張り切っている。

昨日は一緒にファッション誌を見て盛り上がった。

駅は人でごった返している。もちろん、ショッピングモールも人だらけだ。

「すごい人ねえ」

「ホント、さすがオープンセール……」

しかし負けるわけにはいかない。2人で戦場へと乗り込んだ。

「これどう？」

「ええ？ 短いよ」

お尻が隠れるくらいしかないように思えるスカートに、異議を唱えた。

「下に履くんでしょ？ スパッツとか」

「レギンスね」

「同じでしょ？」

「うーん……」

同じなのかな。ちょっと、わからない。同じような気もする。

「こっちはどうかな？」

「可愛いわね！」

お母さんは本当にノリノリだ。セール会場用のバッグがいっぱいになっていく。

「ちよつと多くない？」

「確認しようか」

中身を2人で出して確認してみる。同じように、会場の隅でとりあえず確保してきたものを厳選している人たちがちらほら見られた。

「うーん。全部買おうか、いつき」

「え？　こんなに？」

「いいよ。今までとは路線が変わったんだから。これからいっぱい着なさいよ」

それは、ものすごく太っ腹な話だ。

「大体安いし。そこから7割引とかよ？　お会計してくるわね！　そこで待ってて」

レジには列が出来ている。少し、時間がかかりそうだ。

辺りを見回すと、少し離れたところにカフェがあるのが見えた。

飲み物を買っておいてあげようか。それとも、この後どこかで一休みしようって言うかな？

「うーわっ！　偶然！」

後ろから突然声がした。振り返って、一気に気分が冷める。

「本城君……」

「そんな顔しないでよ。一昨日はごめんね。すごく反省してまーす」
能天気な言葉にまた、ムっとする。

「今日は買い物？」

「……そう」

「私服、いっつもそんな感じなの？　もっと可愛いのが着たらいいのに」

まったくもって余計なお世話だ。つい、返事をしなくなる。

「もしかして、怒ってる？」

「当たり前でしょ。私がイヤだなんて思うことばかり言うて来る

「んだもん」

「そう？」

お母さん、早く戻ってきてくれないかな。いや、こっちから行けばいいのか。

……もしかして、着いてきたりして。

こいつなら、やりかねない。

「俺も買い物しにきたんだ。女の子の服はこんなにいっぱいあってうらやましいよ」

私のむかついた顔をまったく気にしないで、勝手にしゃべっている。

やっぱり、男はちよつと寡黙なくらいがいい。つい、じろつと睨んでしまった。

よく見ると、大きな紙袋を3つもさげている。

……あれ

カッコイイ服着てる。チャコールグレーのジャケットがなかなか決まっていた。

「ん？ なに？」

「うっん」

玲二くんも、こんなファッション似合うかも。

こっそり紙袋のロゴをチェックしてみる。参考に覚えておこう。

「おまたせ、いつき」

お母さんが大荷物で戻ってきた。

「あれ？ お友達？」

「お母さん……？」

同時に質問される。答える間もなく、本城君はまたしゃべり出す。
「お母さんだね。そっくりだし！ お母さんも可愛いですね。僕、本城といます」

「まあ、調子がいい子ね！」

お母さんは笑っている。可愛いとほめられて、まんざらでもなさそうだ。

「一昨日、告白して、振られちゃいました」

「え？ そうなの？ ……この子、大好きな人がいるから。ごめんなさいね」

「いえいえ、そんな。これからもアタックさせていただきます」

なぜか本城君は丁寧に挨拶している。まったく、何を言われても懲りないようだ。

「よかつたら一緒にお茶でも」

「ダメ！ お母さん、いこ！」

「いいの？」

「いいのいいの。本城君、さよなら！」

慌てて母の背中を押す。3人でお茶なんて、とんでもない展開だ。結局地元の駅まで戻ってから、商店街の喫茶店に寄った。

「さっきの本城君だっけ？ ノリのいい子だったわね」

「ほんと……。やんなっちゃうよね、もう」

ため息をつく、笑われてしまった。

「悪い子じゃなさそうだったけど」

「私はああいう人はイヤ。一昨日だって、勝手にお菓子取って食べるし」

「大胆ねー！」

「男の子は、口数が少ないほうがいいと思うな」

「……そう？」

「お父さんだってそうじゃん」

「まあねえ。そうかもね。でも、そんなのわからないでしょ。好きになつたら」

本城君を？ 好きに？

「ならないよ」

そう言うと、ふふつという笑い声が聞こえた。

「ま、でも、人に好かれるのは悪いことじゃないじゃない。それにあんなに明るいい子なら安心よ。勝手に後つけまわされるよりいいでしょ」

「それはそうだけど……」

「あの子、どうなったの？ 動物園に来てた子は」

相原君の停学は伸びて、2週間になっていた。多分、週明けから来る……、と思われた。

そうか、明日から来るのか。そう思うとなんだかブルーだ。

「まあ、大丈夫よ。さすがに懲りたでしょ」

「懲りたかな？ 懲りてくれないと、困るけど。」

「帰ったらいらない服、処分しないとね」

お母さんはずっと笑顔だ。よっぽど楽しかったんだろうな。

「女の子の服はいいわよね、可愛くて。これからは洗濯も楽しくなりそう」

「お母さん……。ありがとう」

「いいのよ。来週、千早ちゃんの学校行くんでしょ？ 楽しみね」

実はその次の日がもつと楽しみなんだけど。

玲二くんは喜んでくれるかな？

その前に、みんなのチェックを受ければきつと完璧だ。

「おはよう玲二くん」

「おはよう」

穏やかな笑顔。やっぱり、安心するな。

「学園祭、どうだった？」

「うん、そうだな。……女装のミスコンテストがあつてさ」

玲二くんはなんだか、赤い顔をしている。

「そのステージに無理やりあげられた」

「え？ ……女装したの？」

「いや、女装した人たちの相手って言うか……。北沢が出てて、エスコートする係にされた」

北沢君といえば、「ザ・高校球児」といって差し支えのないビジュアルの持ち主だ。

「キレイだった？」

答えはわかってるのに、つい聞いてしまった。

「わかるだろ？ 断れなかったからしょうがないけど。恥ずかしかったよ」

そう照れながら話す姿を見て、つい図々しい本城君のことを思い出す。

やっぱり玲二くんの方が絶対いい。控えめで、でもやる時はやる。そういう男がいいよ。

「あと、マカロンも見たよ」

「え？」

「売ってたんだ。なんだか食べ物じゃないみたいだった」

確かに、特に色がついてるやつはそうかもしれない。

「園田みたいな感じだった。可愛くてさ」

あれれ。そんな事言われると、照れてしまう。最近、ちょっと寡黙な男じゃなくなってきたような。

でも、よく見たら言った本人もだいぶ照れているみたいだった。

「無理してそんなこと、言わなくていいよ」

「無理があるかな？」

赤い顔で、私をじっと見ている。

「でも、本心だから」

すごく小さい声が聞こえた。

なんだかこれだけで1週間頑張れそう。よし、マカロンみたいな、可愛い女の子でいることにしよう。

玄関で靴を履き替えていると、荒川先生の声がした。

「おはよう！ 2人とも毎日早いなあ」

先生とは大体毎朝ここで会う。挨拶も日課になりつつあった。

「園田、ちよつといいか？」

「はい」

後ろをみると、玲二くんが小さく頷いた。

「先に行ってる」

「うん」

先生についていくと、職員室の隣へ通された。2度目の生徒指導室だ。

「あのな、相原のことなんだけど……」

やっぱりそうか。悪いことをした覚えはなかったけど、自分への注意じゃないことに少し安心する。

「本当は、クラス替えも検討したんだ。だけど、それだとクラスみんなに詳細な説明が必要になっちゃうだろう？ そうなると、相原もだけど、園田もイヤかなって思ってたな」

確かに。いきなりクラスが変わるとなったら、何があったかと思われるだろう。

「あいつも随分反省してる。いい大学に進学したいって言ってるし、今回の停学処分はすごい効いてる。どうかな、園田、同じクラスでやっていけるかな？」

そういえば相原君は前回の試験で学年1位だった。いい大学についていうのは、きっと本当だろう。1回目の勉強会に参加したいって来た時も、玲二くんに妙に対抗心燃やしてたっけ。

「もし次があつたら、退学処分も考えてるとは伝えてる。園田がどうしても嫌なら、クラス替えもするけど」

「えっと、大丈夫です。助けてくれる友達もいるし……」

先生は安心したような表情を浮かべた。

「そうか？ 良かった。じゃあもしまた何かあったら、どんな小さなことでもすぐ相談してくれ」

教室へ戻ると、玲二くんが静かに本を読んでいた。

ドアの開く音に気がついて、顔を上げる。

「なんだった？」

「ん……。相原君が今日からまた来るからって」

「そうか」

隣の席に座る。玲二くんの持っている本をちらつとのぞくと、英語がずらーっと並んでいた。

何の本なのかはまったく見当がつかない。読めるのかな。全部英語みたいけど。

「あいつもさすがに懲りただろ」

「そうだね。先生もそう言ってた……」

「おっはよー」

葉山君が明るく声をあげて入って来た。毎日、大抵この順番で揃っていく。

カバンを置くと当然のように宗田君の席にやってきて、3人で話した。

少しずつ、クラスメイトが揃っていく。

もうすぐホームルームが始まるという頃、相原君がそっと入ってきた。

みんな、なんとなくスルーだ。元々誰かとわいわい話していた姿も見たことはない。

「あ、いつきちゃん！」

いきなり、廊下から声がした。

「おはよう」

ドアの横に立っているのは本城君だ。

……いつきちゃんって呼ばれた。

「昨日、楽しかったね。あのさ、俺、現国の教科書忘れちゃったんだけど、貸してくれない？」

「え？」

「現国、今日ないの？」

国語の授業はある。持ってるけど……貸したくない。大体、昨日楽しかったねって。誤解の元になる爆弾が、すでに2個も投げ込まれている。

どうしよう。振り返ると、葉山君と玲二くんが揃って微妙な顔だ。「どちらさま？」

「俺、4組の本城。いつきちゃんの、彼氏……になるつもり」

葉山君の質問に、本城君はニコニコと笑顔で答えた。

「ちよつと、やめてよ！」

なんとかそれだけ言ったところで、隣で椅子がぎぎーっとなを立てた。

「4時間目だから。それまでに返して」

玲二くんが立ち上がって、教科書を差し出している。本城君はそれを、きょんとした顔で見てる。

「遠慮するなよ。委員で一緒だろ」

「なんだよ……。かつこいいじゃん」

本城君はそう呟いて、でもちゃんと教科書を受け取って、玲二くんのことを見つめた。

「悔しいから返さないでおこうかな」

「いいよ。その時は園田に見せてもらうから」

葉山君がひゅーっとなを鳴らした。

「……わかった。じゃ、次の休み時間に返しに来るから」

サンキューと言って、無礼な来訪者は去っていった。

「ありがとう」

照れたのか、玲二くんは下を向いた。

「よく覚えてたね、委員が一緒だったこと」

「誰？ あの新キャラ。いつきちゃんなんて呼ばれてんの？」

「え？ 今日初めて呼ばれたよ。あの人だね、先週の金曜日にちよつと……」

どこまで言うべきなんだろう。悩んでいると、玲二くんが口を開いた。

「もしかして、マカロン勝手に食ったのってあいつ？」

あれ……。なんか怒ってる？　ちよつと不機嫌そうな顔だ。

「うん」

メールには、勝手に食べられちゃったとだけ書いていた。本城君のことは書いていない。

ホームルームの始まりを告げるチャイムがなって、葉山君が席へ戻っていった。

相原君が片付いたと思ったら、今度は本城君か。困ったな。でも、玲二くん、怒ってくれるなんて。ちよつと嬉しいかも。

って思っのは、不謹慎かな……？

#19 「W a t e r Sへの招待」 &l t・玲二&g t；

本城のことは1度しか会ったことがないのによく覚えていた。園芸委員の最初の集まりの時。確か、同じクラスの女子の委員とやたらいちやついていたやつだ。

裏庭の花壇で教師が説明している間、木の陰でキスまでしてた。

こんなやつもいるんだなあ……と思ったつけ。

そして2回目以降、来なかったんだ。

本城は1時間目が終わった後、ちゃんと教科書を返しに来た。

いつきの席は廊下側の1番後ろでドアが近い。通りかかるたびに「いつきちゃん」と声をかけてくるようになった。

それをイヤがって、とうとういつきは他の女子のところに逃げるようになってしまった。空いた席には気を使ってか、良太郎が座るようにになっている。それでも本城は実にこまめに顔を出し、俺たちにも笑顔で挨拶してくるようになった。

木曜日の園芸委員にも、顔を出す。

「あれ、ジャージでやるんだっけ？」

「汚れるからな」

「そっか。じゃあ着替えてくるよ」

笑顔で本城は校舎へと戻っていく。どうやら、2人だけの委員会活動は終わりのようだ。

「玲二くん……」

いつきがなんだか、悲しそうな、怒ったような顔だ。

「今のうちに帰ってやるうか」

「え？」

「冗談だよ。せいぜいこき使ってやるう」

そういうと、やっと少し笑顔になった。少しすると、本城がジャージ姿で戻ってきた。

「よかった……。この隙に帰られたら……。どうしようかと思った……」

息を切らしながら、そんなことを言っている。

「で、何したらいいの？」

笑顔で聞いてくる。いつきは、そつと俺の影に隠れるようにして答えない。

仕方なく、雑草を抜いてくれと指示をした。

「立花つて、部活は何やってんの？」

いつきが答えないからか、なぜか会話の相手にされてしまう。

「別に何も入ってない」

「そうなんだ。バスケットかバレーとかやればいいのに。背も高いんだし」

「興味ないんだ」

「勿体ない」

どうやらいつきが好きという以前に、随分人懐っこいタイプなようだ。他にもあれやこれや色々と聞いてくるが、そんなにイヤな感じはしない。

1人増えたおかげか、花壇の手入れはあっという間に終わる。

「もう終わり？」

「ああ。いつもこんなもんだよ」

「毎週やる必要ってある？」

「……冬はないかもな」

へえ、なんて返事が返ってきた。いつきは、なんとなくまだ俺の影に隠れている。

「なあ、一緒にどこか寄って帰らない？」

本城の言葉で振り返ると、イヤそうな顔が目に入った。

「あれ……またそんな顔して。いいじゃんいつきちゃん。行こうよ」

「悪いけど、私はイヤだから。玲二くん、いこ」
腕を引っ張られる。

「えー、ダメ？ 立花は？」

いつきがイヤなら、応じるわけにはいかない。それに感じが悪いやつではないが、もちろんひっかかる部分もある。

「いつきちゃんって呼ぶのやめてくれたら、行ってもいい」

「……そっか。じゃあ、しょうがないな」

わざとらしく、肩をすくめている。どうやら寄り道はなしのようだ。

いつきが腕をひっぱるので、作業は終わり。教室へと戻った。

次の日はどうしても言われて、教室でいつきのクラブの終わりを待つことになった。

買ったばかりの新しい本もある。時間を潰すのは問題ない。

「じゃ、行ってくるね。ごめんね玲二くん」

「いいよ」

図書室にはどうも足が向かない。蔵元先輩はもう、図書委員に復帰しているだろうか？

また行きますなんて言ってしまったが、実際には無理だった。まだ時間が必要だ。

しおりをはさんであるページを開こうとすると、目の前に誰かが立った。

「……相原」

良太郎かと思いきや、まさかの相原だ。顔色が悪い。げっそりしている。

「立花、あいつ……、なんなんだ？」

「あいつって？」

「4組の、本城ってやつだよ。園田さんに声かけまくって、あいつなんなの？」

一瞬、答えに詰まる。

わざわざそんなことを自分に聞きにくるなんて。意外な展開だ。

「園田のこと、気になってるらしいよ」

「気になってる？　そういうレベルか、あれ？」

噛み付かれるかと思うような勢いに、ちよつと体を引く。

「お前は平気なのか！？　あんなやつが園田さんの周りをウロウロしてて」

お前が言うのか？　と、言ってしまったていいだろうか。少し悩んだ。

「日曜日だって、あいつは園田さんに絡んでたぞ！」

「日曜日？」

買い物に行ったら、偶然会ってしまった、といつきは言っていた。新しくできたショッピングモールならばそんなことだってあるかもしれないと思うが。

「お前もあそこに？」

「行ったよ。園田さんが出かけたんだから。どこに行くか気になるじゃないか」

どこに行くか気になった……？

「……後、つけてんのか、まだ」

「え？　いや、そんなことはないよ。たまたまだよ」

「お前、全然懲りてないんだな。なあ、もうやめろよ。大体いつもどこで園田のこと見張ってるんだ？」

こいつはまた停学になりたいんだろうか。いつきにはとても聞かせられない。

「立花はあいつの味方なのか？　おかしいだろ、あんな……、軽薄なヤツ」

「お前よりだいぶいいと思うけどな。少なくとも話は通じる」

「なんだよ……、お前……大体、園田さんと本当に付き合ってるの

か！？ 土日だって、全然会ってないじゃないか！」

また、相原の声が大きくなる。数人残っているクラスメイトたちは、勿論驚いている。

「付き合ってるっていうの嘘なんだろ！ 百井さんの言うとおりだ。なんでそんなことするんだよ。僕を陥れるためか！？」

その名前……久しぶりに聞いた。試験の時に見たという話もあったが、ずっと登校してきていない。

「相原、ちょっと落ち着け」

「落ち着けだって？ 落ち着いてるさ！」

「声が大きい。お前のために言ってるんだぞ。また停学になりたいのか？」

その言葉で、ようやく相原の口が閉じた。

「お前が園田の行動にそんなに詳しいってことは、どこかで見てるってことだろ。停学の理由はなんだ？ もう忘れたのか？ 学年1位なんだろ、お前。記憶力は大丈夫か？」

「……僕は、園田さんが好きなだけだ」

「好きでもやっていいことと悪いことがある」

クラスメイトたちはそつと成り行きを見守っている。このままだと、いつきに話が伝わってしまう。そして、相原がまた処分を受けるのは構わないが、後をつけるのをやめないのは困る。むしろ、野放しになったり逆恨みされるなんて展開になったら最悪だ。

「そう、言われたんじゃないのか？ お前は、好きでもなんでもない相手に後をつけられて、何をしたとか誰と会ったとか、全部把握されて口出しされて気分は悪くならないのか？」

「情熱的でいいじゃないか……」

「じゃあそういう相手がいたら、お前は全員受け入れるんだな」
「……」

相原が黙る。青い顔に、だらだらと大量の汗をかいていた。

「どうなんだ？ 全員、受け入れるか？」

「全員は無理だ……」

「1人だつて、好意をもてない相手なら無理だ」

「それでも、いつか気持ちが伝わるかもしれないじゃないか……」
本当に困ったやつだ。

「そうか。じゃあ仕方ない。俺は今から職員室に行くよ。お前がまだ、園田の後を付回してるって報告する」

「なっ……、やめろ！ 大体お前のせいで停学になったんだぞ！？ 僕の人生をどうする気だ」

「お前は自分の気持ちを満足させようとしてばかりで、園田のことなんかひとつも考えてないじゃないか。あいつはもう、つけまわされてるなんて思つてないぞ。すごく嫌な思いをしたのに、お前のことを信じたんだ。先生たちだって同じだ。もうしないって信じてくれたから、今こうやって学校に来てるんだろ？ それを裏切つていて何を言つんだよ」

「……」

相原が歯をぎりぎりとならしている。

「俺は園田の悲しい顔を見るのはいやだ。園田のためなら、俺はお前になにを言われようと、どう思われようと、なにをされようと構わない。……お前も、やるなら何もかも失う覚悟でやれよ」

握ったこぶしをブルブルと震わせている。もしかまた殴りかかれたら、今度は真正面から受けてやろう。そうしたら、本当に相原の高校生活は終わりだ。

「じゃあ、ひとつだけ教えてくれ」

「？」

「さっき僕が言つた事……。どうなんだ？ 園田さんとは本当に付き合ってるのか？」

「……土日に必ず会わなくなつて、そんな俺たちの自由だろ」

ちよつとずるいいい方をしてしまった。しかしここで真実を言えば、また話が堂々巡りになってしまう。

「わかつた……。もうやめる」

小さな声がやっと、聞こえてきた。

「先生には、言わないでくれ」

「……わかった」

周りを見ると、クラスメイトたちはうんうんと首を縦に振ってくれた。

「信じてもらってること、忘れるなよ」

「本城のことは……、いいのかよ」

「日曜にはたまたま会ったんだろ？ お前と一緒にするなよな」

「あんなにちよっかい出してもいいのか？」

「嬉しくはないけど……、ちゃんと引き際を知ってるやつみたいだから」

お前と違ってな、という部分は言わないで置いてやろう。

相原は納得いかなさそうな様子だ。なにやらブツブツ言っている。「本当にもうやめろよ。百井になにを言われたのか知らないけど、よく考えて自制してくれ」

もしかして、あいつの力の影響なんだろうか。

学園祭の時も、ずっと2人はいなかった。もしかして一緒にいて何かされたとか？ だとしたら、相原は気の毒な犠牲者になるわけだが……。でも元々制御の効かないタイプみたいなので、全然関係ない可能性も高い気がする。

「自制？」

「ああ。それがないと、人間同士やっていけないだろ。……俺も自制して、今日は先生には言わない」

相原は肩を落とし、すすすこと自分の席に戻っていく。カバンを持つと、教室からのろのろと出て行った。

もしかして、クラブをのぞきにいたりしないだろうな……。不安になってそつと後をつけてみると、玄関で靴を履き替えている。

校門を出て行ったところで、ようやく安心した。

教室へ戻ると、残っていたクラスメイトたちが寄ってきた。

「相原、帰った？」

「多分ね」

「立花、かつこいいなあ」

「いつきちゃん、幸せだねえ」

まったくもって恥ずかしい。あんなにしゃべるなんて、ガラじゃない。

しばらくまた本を読んで待っていると、廊下から話し声が聞こえてきた。

いつきと、本城がやってくる。

「よ、立花！」

本城はご機嫌だが、いつきはかなりムカついた顔をしている。

「いやー、女子ばかりのクラブっていいな。お前もクッキングクラブに入らない？」

入部したのか？ そこまでするとは思っていなかった。さっき相原に言った言葉を取り消さなければいけないかもしれない。

いつきにせかされて、急いで帰ることになった。帰り道、可愛らしい口からはため息ばかりが出てくる。

「本城君、テニス部はやめたんだって」

「そうか。あいつ、彼女がいたように思ってたけど」

「夏休みに、別れたらしいよ」

「どうやら、だいぶ疲れているようだ。」

「大丈夫か？ 疲れてるなら、あさつては休んでもいいよ」

「え！？ そんなばかな！ 玲二くん、元気わけてよ」

途端に笑顔になった。どうやら、これなら安心してよさそうだ。相原のことにももう心配ない。家まで送ると、いつきは元気に手を振った。

「あさつて、楽しみにしててね！」

土曜日は、良太郎との約束の日だ。

約束の1時間前に駅に着いた。人が多い。待ち合わせの場所を確認してから、歩き出した。

事前に調べたところ、少し歩くと大きな図書館があることがわかった。待ち合わせ前に、ぜひ寄っておきたい。

自分が住んでいるのは違う市になる。大きな月浜市の最大級の図書館……、楽しみだ。

人は俺とは逆の方向へと流れていく。ほとんどがリニョールされた駅前へと向かっているようだ。

図書館までは10分ほどの道のりだ。慣れない場所を1人、歩く。

人通りがなくなってきたところで、突然後ろから声をかけられた。「ねえ君！」

振り返ると、若い男が立っている。俺よりも頭1つ分くらい背が低い。

「モデルの仕事って……興味ない？」

こんなところで、モデルの勧誘？

男は、ジーパンに黒い無地のパーカーといういでたちだ。大きな眼が爛々と光り、大きな口の端をきゅつとあげて笑顔を浮かべている。

あまりの違和感に、不快感が募る。笑顔だが、目が笑っていないのにも気がついた。

返事をせず黙って睨むと、男はおどけたような顔をした。

「ありや。やっぱこの設定は無理があつたかな」

また笑顔になって、男が言った。

「じゃあ正直にいくか。立花……玲二くんだよな？ 一緒に来て欲しいところがあるんだけど」

誰だこいつは。なんだろう。まったく心当たりがない。

「なんの用？」

「それは来てもらえればわかる」

「説明がないなら、行けない」

「やっぱり？」

男がそういつた瞬間、突然腹部に衝撃が走った。

「う……」

足から力が抜けて、地面に倒れこむ。吐きそうになるのを、必死でこらえた。

「あれれ？」

なんとか顔をあげると、今度はその顔の左側に衝撃が加わった。

横に吹っ飛ばされ、狭い路地裏に置いてあるクーラーの室外機に頭がぶつかる。

何が起きたのかわからない。頭がクラクラして、目も霞んでいる。

「なにこれ……。全然じゃんか」

男の声がかるうじて聞こえてくる。

「気をつける。そう見せかけてるだけかもしれないぞ」

他の男の声もする。

ぼんやりと、近づいてくる足が見えた。なんとか立ち上がろうと顔を上げるが、めまいがしてうまく動けない。

「そんなことなさそうじゃない？」

声と共に、足が頭の上に降ってきた。左の耳の上を、踏まれている。

「反撃するならしてくれろ？　どうかな、できる？」

「……ん……だよ」

踏んでいる足を掴もうと手を伸ばすと、足はすばやく動いて顔面

を蹴ってきた。

今度は、仰向けで倒れる。意識が朦朧として、それ以上なにもできない。

「カラス、どうだ？」

「効果なし。驚いたな」

「聞いてた以上じゃん。でも、戦いは全然ダメなのかな？」

「イワ。頼む」

「わかった」

どうやら3人いるようだ。しかし、視界はぼんやりとかすんで、どんな人物がどこに立っているのかは見えない。

影が近づいてきて、体を持ち上げられた。両手を押さえられるような形で担がれる。

……どこかへ連れて行かれるようだ。

「ごめんなあ。全然できないって知ってたら、ここまでしなかったんだけど」

最初に声をかけてきた小柄な男の声が聞こえた。

「できないとは限らないだろう。イワ、クロも、油断するな」

こっちは誰なのかさっぱりわからない。

こちらも姿を確認できなかった俺を担いでいる男が歩きたびに、頭がグラグラと揺れた。気分が悪くて、吐き気がする。

暗い路地裏をしばらく進んで、一瞬表通りに出る。男たちは素早く、どこかわからないが屋内へと入った。

ドアが開いて、鈴の音が鳴る。

「おいおい、丁寧に連れてきてくれと言ったのに。人選ミスだったかな」

落ち着いた男の声がした。

また鈴の音がして、ドアが閉まった音がする。

「ええ？ だってカラスの術が効かなかったんだぜ？」

「だからってな、クロ」

「もしかしたら、油断させといてくってパターンかと思ったから」
「イワ、奥に頼む」

どうやら自分を担いでいるのはイワと呼ばれた男らしい。しばらく進んだところで、体を下ろされた。

ソファらしき物の上に、寝かされた。まだ視界はぼんやり霞んでいる。

雰囲気と匂いからすると喫茶店のように思えるが、暗くてよくわからなかった。

頭と、腹がひたすら痛い。

「どれどれ」

落ち着いた男の声が上からした。顔をのぞきこんでくる。よけたののに、体が動かない。

なにやら白いものが目の前に現れた。

「っ……！」

あつい。タオルのようだ。しばらく、顔を拭かれた。

「冷たいの持ってきてくれ」

「はいはい」

新しい声がした。蹴られた顔の左側に、冷たいタオルがあてられる。じんじんと痛みが主張してきた。

体を起こそうとすると、力強い手がそれを抑えた。

「何する……！」

「心配いらない。我々は、君の仲間だ」

「仲間？」

なんて白々しい言葉だ。訳のわからない展開に、腹が立つ。

「信じないか。感じるだろう？ 仲間の気配を」

左目はタオルで半分隠れているが、段々、様子が見えてきた。

やはり喫茶店のようだ。カウンター奥にはカップがずらりと並び、コーヒーの匂いが漂っている。目の前にいるのは中年の男性。

奥には、ぼつぼつと人影がある。

「立花、玲二くん」

目の前の中年男性の口から俺の名前が出てきた。

「間違いないよな？」

返事をするのは癪に障る。

「何の用でこんなこと……」

「本当にすまない。君みたいなタイプは初めてで、勝手が違ったんだ。許してほしい」

男は深々と頭を下げた。

「私は遠屋流。ここのマスターをやっている」
喫茶店の、ということだろうか。

「この喫茶店……『ウォーターズ』は、人ではない者が集まる場所だ。君を仲間に迎えたくて、今日は来てもらった」

「……」

「百井 沙夜、君のクラスにいるだろう？ 彼女も我々の仲間だ。彼女から君の事を聞いた」

「百井から……」

知っている名前が出たところで、安心するわけもない。よりによって、あの百井。むしろ一気に不快感と不信感が増す。

「君から聞きたいことがたくさんあるんだ。少し落ち着いてからでいい。なにか飲むかい？」

「……いらない。話すことなんて、何も……」

声を出したら、また頭がクラクラとした。ソファに倒れこんでしまふ。前の方から笑い声がした。

「クロ、お前は外に出ている」

遠屋が怒った声で言った。

「大丈夫かい？」

大丈夫ではない。ここから出られないなんて……、最悪の気分だ。しかし体はまだ動きそうにない。

「ミツは？ 今日はいないのか？」

「ミツは出張中です」

「すぐ来れないのか？」

「無理でしょ。あいつはのんびりやだし」

「クロ！」

クロと呼ばれた男は、肩をすくめてドアのほうへ向かった。

その時、ドアがガタガタと揺れる音がした。誰かが開けようとしているような雰囲気音だ。

「今日は休業ですよ」

クロが言くと、揺れは収まった。しかし次の瞬間、ガンという大きな音がして、薄暗い店内が一気に明るくなる。ドアがなくなっただけから。

「ええ？ ちょっと……」

クロが言い終わらないうちに、その体が吹っ飛んだ。人影が現れ、あつという間に吹っ飛んだクロを踏みつけた。

「なにしゃ……！」

「あと1発残ってる」

聞き覚えのある声だ。

ゴンという鈍い音の次に、クロという男の悲鳴があがる。
「いつてえ！」

一瞬の出来事だった。

「母さん……」

「玲二！」

声の主は間違いなく、母だ。駆け寄ってきて横にいる遠屋をおしのけ、俺の顔に手を添えた。

「驚いたな……」

遠屋が呟いた。

「狼だったのか」

母さんは立ち上がって、遠屋と向かい合う。

「あなたがこのリーダーね」

「そうだ」

「よくもこんなこと……。許さないわよ！」

「待ってくれ。我々はただ……」

「ただ何だっというの？ 人の息子にこんな怪我させといて！」

「もうお返ししたくせに」

床からクロの声がした。

何人かが店の入り口でドアをなんとか閉めようとしている。店に入ってきた光が、少しずつ細くなっていた。

「私たちは、仲間がどこでどんな風に暮らしているのか、ちゃんと全員把握したいだけだ」

「仲間？ そんなの、私たちには必要ない」

「君はどこから来た？ 日本ではないな」

「そうよ。ここで改めて把握される必要はないわ」

「それは困る。それに、彼の力……初めてみるものだ。あんな状態の者を見逃すわけにいかない」

母さんは大きなため息をついた。

「わかった。じゃああなたと2人だけで話をさせて」

「我々は……」

「2人だけでよ。それができないなら、力づくでも帰る」

しばらく2人は見つめあったまま動かない。

「仕方ない。奥で話そう」

「玲二、待つてなさい。すぐに話をつけてくるから」

何かなんだかわからない展開だった。大体、待つていられると言われなくても落ち着く状況ではない。

母さんと遠屋は店の奥へと移動して行く。

反対側では、クロがやれやれといった顔で起き上がっている。

「いつてえ……。お前の母ちゃん、すげえ強いな」

誰かを殴っているところなんて、初めて見た。いや、正確には、何も見えなかったけど……。

「狼とはね。予想外だな」

誰かわからないが、声がした。

「ゲンさん、どう？」

「そうだなあ……。わしは2回目だが、あの時もなんの一族かはわからなかったからな……」

セリフからは、なにが2回目なのかわからない。ゲンさんとやらの姿も話しかけた者が誰でどんな姿かも俺からは見えない。

しかし、たくさんの視線は感じる。一体ここには何がどれだけいるんだろう。

「ダメだ。壊れちゃってるよ」

「カラスの術でなんとかできないの？」

「人を便利屋みたいに言うなよ」

こちらはドアの修理の話のようだ。

少しずつ、体を起こす。まだめまいがするが、なんとか座った状態にはなれた。

痛む顔面に手をやると、手にべったりと血がついた。鼻血が出ているようだ。

よくみたら服も血だらけになっている。そばにあったおしぼりを取って顔を拭くと、白いタオルはみるみる赤く染まっていた。

痛みのせいで頭がいつもよりもまわらない。なにが、どうなっている……？

とにかくここは、人ではない者が集まる場所。

百井が屋上で言っていた「マスター」は、先ほどの遠屋という男のことか？

人ではないものを全員把握したいから、俺を呼んだ？

呼んだというか、殴られて拉致されたわけだけど……。

そして母さんが駆けつけてくれた。本当にいつでも、見守ってくれたということか。

そんなことを考えていると2人が戻ってきた。思ったよりもだいぶ早い。

「玲二、帰りましょう。手当てしないと」

「手当てならここで」

「結構よ！ 話は終わった。もう勝手なことはいしないで」

「……承知した」

遠屋が引き下がる。母さんが手を差し出てきた。

「立てる？」

「うん……」

なんとか肩を借りて、よろよろと立ち上がる。

「よかつたら送っていくが」

「結構って言うてるでしょ！」

母さんはかみつかんばかりの勢いだ。こんなに怒っている姿を見るのは初めてな気がする。

ふらふらと歩いて、なんとか入り口までたどりついた。

……こんな調子で帰れるかな？

「ドアの修理代は出さないわよ」

「……わかった。玲二君、またの機会に会おう」

後ろからした遠屋の言葉を、母さんは完全に無視した。

店の外へ出る。こんなボロボロの状態で歩くなんて、なんだか恥ずかしい。

が、幸いなことに人通りはほとんどなかった。

「喫茶店 Waters」とかかれた看板が置いてある。こんなところに、人ではない者が何人も集っているなんて……。

「少しだけ頑張つて。こつちよ」

母さんに促されてなんとか歩く。少し行った先のバス停のそばのベンチに座らされた。

「かわいそくに……痛む？」

「……………」
痛い。黙って頷くと、また痛みが走った。頭を動かすと眩暈がする。

ハンカチで鼻をおさえられる。まだ、血が出てるのか？ 感覚が鈍くなっていて、自分ではわからない。

しばらく待つと、バス停に見覚えのある車が止まった。

「玲二！」

父さんだ。慌てて降りてきて、俺の様子に顔をしかめた。

「どうしたんだ……。ひどいな」

「帰りましょ」

2人に支えられ、車に乗り込んだ。家族でドライブなんて久しぶりだな。

途中でどうとう座っていらなくなり、後部座席で母さんに膝枕をしてもらうことになってしまった。

気がつくと、家の1階の客間にいた。頭がガンガン痛む。

「玲二……。気がついた？」

母さんの優しい声が聞こえた。

「……うん」

「今は休んで。もう少しよくなったら、全部話すわね」

見慣れた家の天井の模様に安心する。家がこんなに落ち着くなんて、知らなかった。

ぼんやりと時計をみると、3時をさしている。

しまった。

良太郎と待ち合わせしてたんだっ。

「俺の電話は？」

「ここよ」

渡された電話を確認する。しかし、メールや着信は特にない。

「お友達には連絡済みって言ってたわよ」

「え？」

「まったく、いけすかない連中だわ」

そういえば、百井も仲間だと言っていた。もしかしたら……今頃デートしているのかもしれない。

目を閉じると、あちこちがジンジンと痛むのを感じた。

この分だと、明日のいつきとの約束も果たせそうにない。

どこに行くか明日のお楽しみ、なんて嬉しそうに言ってたのに。

断りのメールを送ろうとして、やめた。

3時なら、まだ学園祭を楽しくまわっている最中だろう。その楽しい時間に、水を差すのは申し訳ない。もちろん、いつ知らせてもがっかりさせるのは間違いないだろうけど……。

電話を横に放り出して、目を閉じる。また、痛みが強く感じられた。

こんな風に人から殴られて怪我をするなんて初めての経験だ。

殴られた時のことを思い出す。まったくなんにも見えなかった。

少し離れた位置にいたと思ったのに。

あれも、人ではない者の力。

母さんがドアを壊したのも、クロという男をボコボコにしたのも……。

ほんとうに、俺も人間じゃないんだな……。

母さんの手が伸びてきて、髪に触れてきた。あたまを撫でられている。

高校生にもなって恥ずかしい。

しかし、触れられていると痛みが和らいでいった気がした。

目を閉じると、静かに闇が忍び寄ってくる。

次に目が覚めたのは、夜が訪れてからだった。

#20 「どうして？」 &1t;いつき>

学園祭が終わり、4人でファミレスに寄った。

私立の女子高の文化祭は自分の学校とは違った不思議なパワーに満ちていて面白かった。

「すごいねえ、女子高って。ホントに女の子しかいないんだね」

「そうだよー。団結するとすごいんだよね」

千早が笑って言った。

学校がなんだかキレイで可愛らしく感じられたのも、やっぱり女子高だからなのかな。

「チアリーディング部っていいね。うちにもあればいいのに」

友香が笑顔で言う。

「自分で作ったらいいのに。友香なら出来そう」

「なるほど……。作ればいいのか」

「いつきもやる？」

「ええ？ 恥ずかしいよ」

あんまり体を動かすのは得意じゃない。ダンスなんて……1番苦手な分野だ。

他にも、あれがよかったこれがよかったと盛り上がる。

「でも1番良かったのは、いつきが可愛かったことだな」

千早がいきなり言い出した。

「その服はどこで買ったの？」

「これはね、新しく月浜に出来たショッピングモールあるでしょ？」

あそこに行ったんだ」

「そうなんだ。いいなあ！ どうだった？」

「混んでたよ。セールのおかげで安かったけど、やっぱり人が多いよね」

私も今度行こう、なんて則子が言う。

「映画館もできたんだよね」

「ああ、うん。確か今日、玲二くんも行っただよ」

「へえ……、誰と？」

「葉山君と。ボーイズトークするんだって」

「ボーイズトーク……？」

3人が変な顔をした。まあ確かに、なんだそりやと私も思う。

「で、その可愛い服をいつプリンスに見せるわけ？」

「えへへ……。明日ね、デートの約束してるんだ」

わあっと3人が拍手する。

「いいね！ いいねえ！」

「どこ行くの？」

「あのね、すごく悩んだんだけど……」

どこに行くかはものすごく悩んだ。

兄たちに、彼女と行くならどこ？ とリサーチした。

「俺ならボウリングだな。あと、カラオケ」

「俺はそうだな、映画とかかなあ……？」

映画はない。前日に行くんだから。

ボウリングは……なんだか、玲二くんがやっているとこを想像できなかった。

カラオケなんか行くかな？ こちらも想像できない。

「相手によるだろ。いつき、相手は立花君か？」

一兄ちゃんの言葉に、つい真っ赤になってしまった。

「そうなの？ いつき、立花さんとデート？」

「もう……六実、呼び捨てにしないでくれる？」

「動物園でいいじゃん。ただで入れるし」

その意見はもちろん却下だ。大の動物好きならいいかもしれな
けど。

「立花君なら、博物館とかが好きそうじゃないか？」

なぜか真剣にデートに選ぶ先を検討する会議が始まってしまった。
参加してないのは将兄ちゃんだけだ。

「結局ね、海の近くにあるでしょ、大きな公園。あそこに行こうと思ってる」

「公園……」

「お弁当作って、持って行くの」
「枯れてるー！」

千早が呆れたように言う。

「いやいや、考えようによつては、1番エロいプランだよ……」
則子は何を考えているんだろう。

「なによ、エロいって」

友香もつつこむ。

「ええ？　だって公園でお弁当食べてまったりして……チューして
その後は愛の暴走特急だよ」

「則子は想像力が常識の範囲をもう超えてるよね」
「だね」

2人がもはや感心しちゃっている。

「暴走特急なんてありえないよ。玲二くんに限ってそんな……」

「何いってんの。プリンスだって健康な男子高校生なんだよ？　十分ありえる展開だよ。ね、友香！」

「えっ、なんで私に振るの？」

「島谷君だって愛の暴走特急でしょ？」

「えっ、えっ？　そんなわけないじゃん」

友香は真っ赤になっている。

「あれ？　もしかして特急に乗っちゃったわけ？」

千早がニヤニヤして友香の肩をツンツンしだす。

「やめてよ……！　周りに聞こえるじゃんか」

「よし、じゃあ詳しいことは今度また集まった時に聞こうか」

あれ。本当に島谷君は暴走特急とやらなんだろうか。

「あの、あれだよ、いつきは料理得意だし、いいんじゃない？
お弁当ってさ」

友香が真っ赤になったまま、言った。どうやら話題を変えたい様子だ。

「そうだねえ、胃袋つかんどけて言うもんね」

則子はうんうんと頷いている。

「えへへ……。朝もう、ちょっと仕込んできたんだ。明日も早起きして頑張る」

「いつき、可愛いわー。可愛いいつきに、美味しい手作り弁当じゃ、プリンスも参っちゃうね」

千早がふって、友香も嬉しそうに乗っかる。

「また真っ赤になってさ、園田……これ、美味しいよ、とか言うね」
「いつきもついでに食べられちゃうよ」

則子はまたそんなことを言ってる。背中をちょっと強めに叩いてやった。

レジで会計をして、皆で並んで帰る。もう11月で、夜は寒い。

「スカートはスースーして寒いな……」

「保温系のインナーがいいよ。あったかくて、着膨れしなくて済むから」

「保温系？」

「最近あるでしょ、薄いのにあったかいやつ。冬場は大活躍だよ」
そうか。覚えておこう。

「短いスカートなら、ブーツ合わせるといいよ。いつき、持ってる？」

「持っていない。ブーツもか。おしゃれにはお金がかかるもんだな……」。

冬休みになにか、アルバイトでもしようかな。

3人と別れ、家に帰る。靴を脱いでリビングに顔を出したところで、メールの着信音がした。

「ただいま」

「おかえり〜、どうだった？」

家族はみんな食事中だ。

「楽しかったよ。着替えてくるね」

せめて一緒にお茶でも飲もう。部屋に戻って、上着を脱いだ。

ついでに、メールを確認しておこう。……玲二くんからだ。

嬉しいな、と思った瞬間、件名の「ごめん」が目に入る。

ごめん？

慌ててボタンを押す。

ちよつとケガしちゃって、明日行けそうにありません。

せっかく約束してたのに、ごめん。

また今度、一緒にどこか出かけよう。

玲二

えー……？

行けないガツカリと、ケガしたなんてという心配がこっちゃんになる。

ベッドにどかと座りこむと、心臓がやたら早く動き出したのに気がついた。

ケガって、出かけられないほどひどいのかな？

なんでケガなんて……。ボーイズトークしてたんじゃないの？
どうしよう。なんてメール送ろう？

ケガってひどいの？

明日、楽しみにしてたのに……。
着ていく服も、もうハンガーにかけて飾ってある。
から揚げ用にお肉も漬け込んだ。
悲しいな……。

残念だけど、無理しないで休んでね

いい子ぶってこんなこと書いてみる。

どうしよう。お見舞いに行ったりしたら迷惑かな……。？
お弁当作って持っていったらどうだろう？ 嫌がるかな……。

明日行ってもいい？

……ケガってどこにどう、したんだろう。葉山君知ってるかな？

先に聞いてみよう。

ボタンをぼちぼち押して、メールを作った。

「いつきー。お茶淹れてるよー！」

下から母の声がする。

「わかったー！」

今はそれどころじゃない。安否確認が先だ。

まず葉山君宛てにメールを送ってから、着替えた。部屋着になつた時点で返事はまだ来ない。

電話を持ったまま、階段を降りた。

リビングではみんな、食事を終えてテレビなんか見ている。

「どうかしたの？ さえない顔して」

「うん……。ちよつとね」

お茶を一口飲んだところで、電話が鳴った。

慌てて確認する。

今日は玲二は急用が出来たからって会えなかったんだよね。

ケガしたのってマジ？ 大丈夫なの……？？？

会えなかった？ ボーイズトークはしなかったのか……。

じゃあ本人に確認するしかない。

さっき書きかけたメールを開いて、ぼちぼちボタンを押す。

「いつき」

父の声がする。団欒の場でメールなんてやめなさい、という警告の一言だ。

「お父さんごめん……。ちょっと緊急事態だから！」

「緊急なら電話すればいいだろう？」

「電話番号知らないんだもん」

聞いておけばよかった。いざとなれば、メールで聞けるんだからなんて思っただけで油断してた。

「家にかけたらどうだ？ 連絡網とかでわかるだろう」

家に……。かけたらお母さんが出るよね、普通。

あれ。もしかして、ケガして入院とかしてないよね？ 車にはねられたとかだったら、どうしよう？

慌ててメールを打つ。送ってきたんだから、とりあえずメールなら返せるはずだ。

ケガってひどいの？

もしかして、病院にいたりする？ 心配だよー。大丈夫ー？？

こんな、ちょっと深刻さに欠ける文章でいいかな？ いいや。とにかく送ろう。

夏に倒れたのとは関係ないよね。心配し出すと、キリがない。

「いつき、どうしたの？」

お母さんが心配そうに聞いてきた。

「玲二くんがケガしたって……」

「ケガ？ ひどいの？」

「わかんない。今それを確認しようと思って……」

涙が出そうだ。お父さんももう何も言わない。

テレビではお笑い芸人が何でか知らないけど穴に落ちている。あんなことして、危ないよ……。

兄たちはみな気を使つてか、静かにしている。いつもならゲラゲラ笑う六実も神妙な顔だ。

「ごめん……いいよ、大丈夫。だってメール送ってこれるんだから」「いや、ケガしたなんて心配だろ」

一兄ちゃんがテレビを消した。少しして、また着信音が鳴る。

そんなにひどくない。家にいるよ。

顔が腫れちゃってちよつと外に出るのが難しただけだから。

心配しなくて大丈夫。また明後日の朝、駅で会おう。

顔が腫れちゃった？

でも、ひどくないって言うなら……大丈夫かな？

「なんて？」

「ひどくはないって」

「入院してるのか？」

「ううん、家にいるって」

あの玲二くんのかっこいい顔が、腫れちゃってるなんて。大丈夫かな。

「ならよかったわ。でも、なんでケガしたのかしら？」

「わかんないけど……」

転んだのかな。そんなキャラじゃないけど……。

葉山君との約束を断って、何してたんだろ。

ただ単にボーイズトークがイヤだったとか？ 映画も観ないって言ってたし。

考えても、わかるわけないか。

どうしよう。明日、家に行ってみようか。お弁当持って。

いいかな。家に行っても……。男の子の家なんて、小学校の低学年の時くらいだな、行っただの。

「明日どこか行くんじゃないやなかったの？」

「うん……それは無理みたい」

「残念ねえ」

「うん……」

その日は遅くまで、玲二くんの家に行ってもいいかしばらく悩んだ。

折角用意したから揚げちゃんたちをどうしよう。勿論作れば誰かしらが食べるだろうけど……。

結局早起きして、お弁当を作った。

迷惑ならすぐ帰ればいいよね。どうせ近所なんだから、すぐに帰って来られる。

小学校の時の卒業アルバムで住所を確認した。大体の場所はわかる。

番地をメモして、お弁当を持って出かけた。お昼前に持っていけば、迷惑にはならないよね？

静かな住宅街を歩く。特に迷うこともなく、家の前についた。

「Tachibana」とかかれたかかれたプレートがついている。ここだ。

なんだかちよつと可愛らしいお家。庭には、花がたくさん咲いている。お母さんの趣味なのかな。

ドアの手前には薄いブルーの車が停めてある。これはあれだ、エコカーのやつだ。

緊張しながら、インターホンを押す。

どうしよう、押しちゃった……なんて考えていると、ドアが開いた。めがねの男性が出てくる。

「はい」

優しいような笑顔。玲二くんの、お父さんだ。多分。

「あの……私、園田いつきと言います」

「玲二の友達かな？」

そう言って門を開けてくれた。友達……。友達でいいよね、ここは。

「はい。あの、ケガしたって聞いて、それで、その、お見舞いっていうか」

「そうか。わざわざありがとう。入って入っていいの？」

ドキドキしながら、玄関へ入る。

花の香りのするキレイな玄関。うちみたいに汚いスニーカーが散乱していない。

「玲二ー！ 起きてるか？」

お父さんが声をあげた。奥から誰か出てくる。お母さんだ。

「あら……」

慌てて頭を下げた。

「初めまして、園田いつきといいます。玲二君のクラスメイトで……あの」

「いらっしやい」

お母さんもニッコリ笑った。玲二くんと同じ色の髪と瞳。顔もそっくりだ。

「ごめんね、ちょっと待っててくれるかい？ 動けるか聞いてくるから」

お父さんがそう言って去っていった。階段を登る音がする。玲二くんの部屋は2階なのかな。
「どうぞ入って」

お母さんに促される。

「はい、お邪魔します」

上品な青いスリッパを用意してもらって、履いた。スリッパか。うちじゃ絶対出ない。

ゆったりしたソファが置いてあるリビングに通される。

「ちょっと待っててね」

お母さんが奥の台所へ移動した。思わずきよろきよろしてしまう。落ち着いた色のテーブルとソファ。テレビは薄型の大きいものが壁にかかっている。サイドボードにはキレイなグラスやカップが並んでいて、つい、高そうだなと思ってしまった。壁には写真が何枚か飾ってある。

「えーと、園田さん」

「はい！」

お父さんがやってきて、写真を見そびれた。

「玲二、ちょっと降りて来られないんだ。部屋に来てもらってもいいかな？」

部屋に！？

むしろこつちがいいんですかと聞きたい。

その前に、降りてこれられないなんて、重傷なんじゃないのかな…

…

「はい」

どうしよう。緊張してきた。

「母さん、玲二の部屋に持ってきてくれ」

お父さんはそう言うのと階段へと案内してくれた。あとをついて登る。

本当にキレイなお家。

階段の途中にも、壁に絵や花が飾ってある。

階段を登ると踊り場のようなスペースがあった。大きな天窓から光が入って、明るい。

「玲二、入るぞ」

お父さんが左側のドアをノックした。

「どうぞ」

ドアが開く。ここが、王子様のお部屋……。

「ちよっとビックリするかもしれないけど、大丈夫だから」

ビックリ？

部屋の中に入る。ああ、玲二くんの部屋だ。

8畳くらいの広い部屋。第一印象は、とにかくきれい、だった。何も床に落ちてない。本棚の本も、机の上もピシッと片付いている。深い青のカーテンとカーペットはすごく玲二くんのイメージに合っていて、部屋を落ち着いた雰囲気になっている。

そして右側の奥のベッドの上に、部屋の主が座っていた。

「あ」

部屋に入ったという興奮と、ビックリがごっちゃになって足が震える。

「どうしたの……ひどい」

顔の左側が紫色になっている。

「いや……、ちよっとね」

ちよっとじゃない。全然ちよっとじゃない。鼻のところもあざになっている。

近づいてよく見ると、ますます痛々しい。

「何があつたの？」

「へんなやつに絡まれちゃって」

「ケンカしたの？」

「ケンカじゃない……よ。一方的にやられただけ」

これじゃあ、確かに外出は難しい。キレイな顔が台無しだ。

「起き上がれないってお父さんが言ってたけど」

「起きると眩暈がしてさ。それでちよっと……。結構よくなつては

きたけど」

想像よりもだいぶひどい。玲二くんをこんなひどい目にあわせるなんて……！　どこの誰がやったんだろう。とてもじゃないけど、許せない。

「泣くなよ……。大丈夫だって」

あれ、しまった。涙が出る。

そこに、ドアをノックする音がした。

「いいかしら？」

お母さんが入ってきて、テーブルの上に紅茶を置いてくれた。すごくいいにおいがする。

お茶を置いたら、黙ってお母さんは出て行った。

しまった。玲二くんにこんなに近づいて、しかも泣いてるところを見られてしまったけど、よかったのかな……。

「なんかいいにおいがする」

「え？」

紅茶の？

「何か、持ってきた？」

「あ……うん。これ」

違った。お弁当だ。

「今日、一緒にでかけて食べようと思って作ったの。昨日もう用意してたから、せっかくだして作って持ってきてちゃったんだ」

「もしかして弁当？」

「うん」

玲二くんは笑顔を浮かべた。優しい顔だ。この笑顔は、お父さんに似てる気がする。

「葉山君と会えなかったのって、そのケガのせい？　心配してたよ」

「ああ、昨日の夜メールが来たよ」

色々気になることはある。ケンカの相手が誰かとか、病院には行ったのかとか。

「それ、園田が作ったの？」

「え？」

「弁当」

「うん」

「食べていい？ 俺、昨日起き上がれなくて何も食べてないんだ」

「うん。うん！ もちろん、食べて！」

「どうしよう。すごく嬉しい。包んでいたハンカチを取って、玲二くんのひぎの上に置く。」

入れた後、いらないじゃんって思った割り箸もちゃんと活躍できそうだ。

「いただきます」

里芋のにつころがしを、ころっと落とした。恥ずかしそうに、箸で拾いなおしている。

可愛い。

食べてる……けど、顔がなんか、難しい感じになってる。

「もしかして、美味しくない？」

「いや、食べると顔が痛くて……」

渋い顔でもぐもぐして、そして、笑顔になった。

「うまい」

ドキっとする。

どうしよう。

大好き。

なんだか体が熱い。

玲二くんは痛そうにしながらも、色々と食べている。

いつもお母さんの手伝い、してて良かった。

半分くらい食べたところで、ふうっと息をつくのが聞こえた。

「もういっぱい……」

玲二くんはニコつと笑って、こっちを見た。

「また後で、食べるよ」

2人分なんだから余るのは当然だ。でも、全部食べてくれるつもりなんて嬉しい。痛そうだったのに……。

「料理、上手いんだな」

そう言いながら、お弁当箱のふたをしている。

「また作ってくれる？」

優しいまなざしに、我慢が出来なくなった。

玲二くんの胸に飛び込んで、抱きついた。ぎゅっと力を入れる。

「あうっ……」

想像とは違う、ロマンとはかけ離れた声がした。

それでも気持ちを止めることができなくて、2人でベッドに倒れこんだ。

玲二くんは驚いた顔をしている。でも、どうしても……抑えられない。無理やり、唇を重ねた。

すぐに体を押されてしまった。玲二くんは真っ赤になって、すごく困った顔になっている。

慌ててベッドから降りた。下にお父さんとお母さんがいるっていうのに、何やってるんだろう。

「ごめん……」

本当はずっとずっと、イヤだった。あの、蔵元先輩との写真。心に焼き付いて消えないまま過ごしてきた。あんなことするなんて、ずるい。そして、うらやましい。

彼女のフリなんて……つらい。本城君がちよこまかと邪魔してくるのもムカつく。

最近、我慢ばかりで、限界だった。

「今日、デート行けなかったから……」

「……」

「だから……」

「園田……」

しばらく沈黙が続く。

段々冷静になってきて、自分のしたことがものすごく恥ずかしくなってきた。

なんてことしちゃったんだろう。

「ごめんな……」

玲二くんが真っ赤な顔のまま、言った。

「ううん。玲二くんは何も悪くないのに、ごめん、変な事言っちゃって……」

これが愛の暴走特急ってやつなのかな。私もすっかり乗っちゃったみたいだ。

「わたし、もう帰るね」

「園田」

「ごめんね、痛かったよね……、あんなことしちゃってホントごめんなさい」

返事を待たずに慌てて立ち上がって部屋を出た。

階段を降りると、お母さんがいた。

「あら。帰るの？」

「はい、あの、失礼します」

こんな赤い顔して何してたんだって思われたらどうしよう。

慌てて靴を履いて脱いだスリッパをそろえていたら、お父さんが玄関までやってきた。

「来てくれてありがとう」

「いえ……あの、迷惑だったかもしれないです」

「そんなことないよ。玲二も元氣、出るだろうから」

ニコニコ顔だ。お父さん、ごめんなさい。はしたない客で……。

「失礼します」

慌てて頭を上げて、慌てて外へ出た。お父さんが出てきて見送ってくれたので、またペコつとして帰った。

家に戻って自分の部屋のドアを閉めると、なんだか力が抜けて座り込んでしまった。

玲二くんの部屋での出来事を思い出す。

すごく痛そうだった。

いっぱい食べてくれて嬉しかった。

最近のことを思い出して、なんだか不満になって、

……で、つい押し倒してしまった。

あの時、苦しそうな声が聞こえた。もしかして痛かったのかな……

……。顔以外にも、もしかして怪我してたとか？

また勝手にキスしちゃった。

カーッと顔が熱くなる。

なにやってんだろ……私。

玲二くん、困った顔してた。

そりゃそうだ。弱つてるところを女の子に押し倒されて、痛いし、

両親もご在宅。困るに決まってる。

明日どんな顔して会ったらいいんだろ。

悩んでいるうちに、顔がニヤけてきた。

玲二くんに抱きついちゃった。がっしりしてたな……。細く見えるのに。なんか、いいにおいがした気がする。

お家、キレイだった。お母さんの趣味なのかな。
お弁当、また作ってって言ってくれた。ああ、そくだ。あそこま
では良かったのに。

自分でぶち壊しにしちゃった。

でも……キスしちゃったなあ……。

そんな風に、反省とニヤニヤと繰り返しながら、1晩過ごした。

ニヤニヤしてる場合ではない。

月曜の朝、少し緊張しながら駅前に立っていた。

特に連絡はないから、玲二くんは多分登校してくるだろう。正直、
どんな顔をしてたらいいかまだ悩んでいた。

何事もなかったかのように、いつもの笑顔で？

ちよつと照れて、乙女っぽくはにかみながら？

それともまず、ちゃんと謝ろうか……。

どうしよう……。どうしようかな。

「おはよう」

慌てて顔を上げると、もう目の前に玲二くんが立っていた。

顔はやっぱり、紫色になっている。左目の横のあたりと、鼻の真
ん中あたり。左目のまぶたはちよつと腫れて重たそうになっていて、
目も充血していた。

「おはよう……。玲二くん、大丈夫？」

「うん。もう大丈夫。クラクラするのはなくなった」

ホントかな。すごく痛そうだけど。一体どうして、こんなひどい
目にあっちゃったんだろう？

絡まれたからって、挑発に乗ったり、ましてや自分からしかけた

りするとは思えない。そんな一方的な暴力がこの世に存在するなんて、信じられない気分だ。

「大丈夫だよ。そんな顔しないで」

「え？ ……うん」

「弁当ありがとう。全部食べたよ。旨かった」

「……うん」

一緒に改札を抜けて、やってきた電車に乗り込む。

「あのさ」

「何？」

とうとうあの話かな。やたらめったら緊張する。

「もうちょっと治ったら、出かけような」

「え？」

「どこ行くつもりだったの？」

「……大瀬東公園」

「ああ、あそこか……いいね」

玲二くんは優しい笑顔を浮かべた。それを見て、またやたらとドキドキする。

「じゃあ、寒くなる前に行こう」

「うん」

「また作ってくれるの？」

「お弁当？ うん、作る」

例のことには触れてこない。

安心したけど、ちょっと悔しい気もする。

下駄箱で、今日も荒川先生と遭遇した。

「おはよう……立花！ どうしたんだその顔は！？」

「あの、ちょっと……絡まれちゃって」

「どこでだ？ 大丈夫なのか？」

「はい。大丈夫です」

「本当か？　かなり痛そうだけどな……いつだ？　昨日？　一昨日か？」

「土曜日です」

荒川先生に色々聞かれて、答えている。

月浜駅の近くでつて、葉山君との約束は断つたのにあそこには行つたのかな？

「気分悪くなつたらすぐに言っただぞ」

「はい」

やっと事情聴取から開放されて、教室へと向かう。

席についてから、気になったことを聞いてみた。

「葉山君は急用ができたって言つてたけど……」

「ん？　ああ、良太郎との待ち合わせの前に、あそこの駅の近くにある市立図書館に行こうとしたんだ……。その途中でいきなりね」なるほど。朝からとんだ災難だ。急用なんて言つたのは、心配させないためだったのかな。

「おはよー！　おお！？」

葉山君が教室へ入ってくるなり、大声をあげた。

「玲二！　なんだその顔は！」

玲二くんはちよつとうんざりした顔だ。多分、これが1日続く。うんざりするのもし方ないかもしれない。

「絡まれた」

「誰に？　ひでえなあ、どんだけ相手強かつたんだよ。こんなに腫れるなんて異常じゃねえ？」

葉山君は自分の席に行くのも忘れて、傷を心配している。

他のクラスメイトも少しずつ登校してきて、みんな玲二くんの姿に驚いて声をかけてきた。

「あら……！　どうしたの？」

久々に聞く不吉な声。

「百井」

「ひどい顔……。喧嘩でもしたの？」

玲二くんは不機嫌な顔で黙ってしまった。

「あら、こんなに腫れちゃって……。見かけの割りに、弱いよね」
百井さんは最後にフンと笑った。その態度に、私もムカムカしてしまふ。

そういえば、久々の登場じゃないか。どうして長い間休んでいたんだろう。なんか、元気そうだけど……。

授業中も、時々玲二くんの様子を気にかけてながら過ごした。

時々痛むのか、苦しそうな顔をしている瞬間がある。でも、倒れたりすることはなくて、なんとか最後まで無事に授業に参加した。

今日はもう、すぐに帰ろう。痛そうだもん……。

帰り支度をしていると、後ろのドアがガラッと開いた。また本城君かな？ 今日は相手するヒマなんかない。

「あの……あ、立花君」

どこかで聞いた声だ。

「……蔵元さん」

「どうしたの、その顔！？」

「いや、あの……ちょっと」

蔵元さん？

慌てて振り返ると、相変わらずのキレイな顔がのぞいていた。悲しげで、心配そうな顔をしている。

先輩は後ろを振り返って誰かに話しかけている。

「ちょっと、ケガしてるし今日は……」

「ん？ 大丈夫だよ、紹介して」

「え……？ でも」

「大丈夫だって、龍ちゃんお願い」

先輩がまた顔をのぞかせる。それに何人かが気がついて、なんと

なくざわざわし出した。

「立花君、ちよつとだけ……いいかな」

「……はい」

玲二くんが立ち上がって、廊下へ出て行く。

この状況を気にするなという方が無理で、顔を出して廊下の様子をのぞいた。

「あの、この人はライヘイ君。同じクラスなんだけど、どうしても立花君に会いたいつて言つて」

「ライヘイ カケルです。よろしく」

「……？ よろしくお願いします」

蔵元先輩とは対照的な、快活を絵に描いたような男子生徒が立っている。

背は玲二くんよりも10センチくらい低い。すらつとしているけど、肩幅が広くてなんとなく力がありそうな雰囲気だ。

ライヘイ君と呼ばれたその人は、大きな丸い目をクリクリさせて笑顔を浮かべている。

「今日、ちよつといいか？ 話したいことがあるんだけど」

ええ？ あの大ケガが見えないのかな？ どうしよう、止めに入ろうか？

「今日ですか？」

「ああ、早いほうがいいから。いいだろ？」

そう言つて、ライヘイ先輩は玲二くんに何か耳打ちした。

「……」

「決まり。じゃあ一緒に来てくれ」

「……はい」

ええー！？ 何の用だろう？ あの状態で、一緒にどこに行くつもりなの？

「園田、ごめん、俺寄り道して帰るよ。先に、帰つて」

「どこ行くの？」

「その、ライヘイ先輩の家」

初対面なのに、家に？

「大丈夫、心配しなくていいよ。無理はしないし。帰ったらメール送るよ」

「……わかった」

そう言われちゃったら仕方ない。なんなんだろう。蔵元先輩も一緒に行くの……？

後でもつける？ いや、それはちょっとどうだろう。……ダメだよね。

結局、不安を抱えたまま家へ帰った。

本城君が来なかっただけ、マシかもしれない。仕方ない、メールが来るのを大人しく待つとしよう。

#21 「鳥の巢にて」 <玲二>;

「昨日、W a t e r sで会っただろ？」

耳元で、来平と名乗った男が囁いた。

会っただろうか。そんな自覚はないが、あの店の名が出るということはこいつもそうなんだろう。

俺の前を、来平という男となぜか蔵元先輩と一緒に歩いている。

「龍ちゃん」なんて呼んでいるけど、仲がいい、のか……？

「来平君の家は、すぐだから」

蔵元先輩が振り返って笑顔を浮かべた。少し遠慮がちに距離を取っているのは、やはり気を使っている？ そしてその隣で、人の良さそうな顔が頷いた。

「うん。すぐだ」

顔の痛みはまだ完全には引いていない。授業に全部出て、少し消耗していた。歩いていたらため息が漏れた。

「立花君、大丈夫？」

「はい。大丈夫です……」

まさか、こんな仲介の為に再会するなんて。

「ここだよ」

目の前には、ボロボロのアパートが建っていた。人が住んでいるようには見えない。

しかし2人は気にせずに入っていく。2階の奥の部屋のドアを、来平が開けた。

中は外観に反して小奇麗な状態だ。小さなキッチンと、10畳分くらいの部屋が広がっている。もともと2部屋だったものを1つにしました、という雰囲気だ。

フカフカした絨毯の上に、クッションが何個も並んでいる。男子
高校生の部屋にしては、ずいぶんとファンシーな雰囲気だった。家
具は、壁際に棚が1つと小さなテーブルが1つあるだけ。

「その辺に座ってくれ」

蔵元先輩が慣れた様子で端のほうに座ったので、自分も仕方なく
その横に腰をおろした。

しかし、何故この人まで一緒なんだろう。まさか、彼も……仲間？

「お待たせ」

来平がやって来た。お茶を用意したようだが、3つのグラスのうち1つは空だ。

その空のグラスは蔵元先輩の手に渡る。

「龍ちゃん、ありがとう」

来平が額に人差し指を当ててそう言うと、蔵元先輩は目を閉じて
そのままクッションの山に倒れた。

きれいな手から落ちて床に転がったグラスを拾うと、今度はこちらに笑顔を向ける。

「さ、話を始めようか」

はい、とお茶の入ったグラスが渡される。

自分の分は横にあったちゃぶ台に置いて、先輩になにやら小さな
毛布のようなものをかけた。俺の視線に気が付いて、また笑顔を浮かべる。

「大丈夫だ、眠ってるだけだよ」

「……何のために蔵元さんを連れてきたんですか？」

「君に会いたそうだったから」

それだけの理由で？

「可愛いよな、龍ちゃんは。最近の人間にしては純粹で」

俺には同意しづらい意見だ。

「何からいこうか。俺は聞きたいことがいっぱいあるんだけど……」。

君にもあるか。じゃあその前に」

来平はニツコリ笑って言った。

「まず何て呼ぶか、だよな。立花 玲二だから……れいちゃん？」

「……それは、ちよっと」

そんな風に呼ばれたことは1度だつてない。

「ダメ？　じゃあ花ちゃんにしておこうか？」

「玲二でいいです」

「玲二？　ちゃんはいらないの？」

「いりません」

いまいちこの来平のキャラクターが掴めない。

「俺のことはライでいいよ。本当の名前だから、そう呼んでもらえたほうが嬉しい」

本当の名前……。

「玲二は……実年齢は何歳？　もしかして、本当に高校生なのか？」

「はい。15、です」

「そうか、若いなあ！　2ケタなんて久しぶりに会った」
「はあーっと、なんだか大げさに驚いている。」

「来平さんは？」

「ライでいいって。あと、そんな丁寧な言葉使わないで」

「……ライは、何歳？」

「俺は308年。あのW a t e r sに集まる中では、かなり若い方」
「……」

冗談みたいだな。このノリに慣れるまでどのくらいかかるだろう。

「玲二のお母さんは？　結構長そうだな」

「知らない。聞いたことないし」

「そうなの？　それに強いよな。クロがやられてるのを見られるなんて、貴重だ」

ライは笑顔だ。あの程度の戦いなんて、彼らにとってはたいしたことがないんだろうか。

「玲二のその傷、治りが遅いな。もう完治してると思ったのに」

まさか。何を言い出すんだろう。

「俺は……」

「ちよつと待った。順番にやっていこう。マスターとお母さんが何を話したか聞いたか？」

「少し。多分、全部は聞いてないと思う」

「そうなの？」

母さんに聞いたことを話した。

あの店には、この辺り一帯に暮らす人ではない者たちが集っていること。

皆互いの存在を把握し、何か困ったときには助け合うようになってい

る人間に危害を加えるようなことは許されていないこと。

ほぼすべての者が、人間として社会の中で暮らしていること……。

「うんうん。俺たちの基本だな。基本っていつても、ここ100年くらいのことだけだ」

ここ100年ね……。

「それだけ？ 聞いたのって」

「あとは、母がここじゃなくて、故郷の方のグループに入ってるってことを聞きました」

「故郷ってどこ？ ヨーロッパとかの方？」

「多分。ドイツの辺りに家があるから」

「お父さんは？」

「父は……日本人だけど……」

「いや、何なの？ お父さんは」

「何なのって？」

質問の意図がわからない。次の言葉でようやく理解ができた。

「お母さん、狼だろ。あっちの方の。お父さんは？」

「父は人間です」

ライの顔がおやつという感じで止まった。

「あ……そう」

お茶を一口飲んで、上の方を見ている。

「そうか……なるほどね」

「……」

「だからそんなに傷の治りも遅いのか」

ライは俺の顔をじっと見つめてきた。大きな丸い瞳が、まっすぐ瞬きもせずにこちらを見ている。

「てつきり最強のミックスなのかと思ってた。なるほどね」

「どういう意味……ですか？」

「そういう言葉使いしないで」

ライは腕組みをして、目を閉じて何かを考え始めた。

「じゃあ玲二は、狼と人間のハーフなのか。お母さんにはなかったけど……どこから来たのかな」

独り言のようにぶつぶつと言っている。

「ああ、でもそのせいでわかんなかったんだもんな。しかもマスタ―もなんか黙っちゃってるし……」

「あの……」

「変身は？　するよね？」

「俺……はしない。したくない」

「しないのか。他は？」

「他って、何か能力があるかってこと？」

「そう」

「何も……ない、と思う。今のところ」

「んー……、戦いは？　あの日はわざとやらなかったの？」

「戦ったことなんかない」

ライは急に、きよろきよろと左右を見始めた。

「そうか」

おもむろに立ち上がって、壁際にある棚からなにかを探し出して

持ってきた。

小さな平たい瓶だ。ふたを開けると、ほんのりといい香りが漂ってきた。ライは中からクリームのようなものを指につけて出すと、おもむろに俺の顔の腫れている部分に塗りつけてきた。

「いたっ！」

「よく効くから。これですぐ治る……」

さつきとは打って変わって、なにやら深刻な顔をしている。

「玲二から話すのはこれで終わり。ここからは俺から話す」

そう言つとライは俺の右手を取って、力強く掴んだ。

「君のお母さんは、俺たちの仲間になることを拒否した。でも、マスターはそれを許さない。俺たちには守らないといけない掟がある。結局話し合つて、掟を必ず守ることだけ誓ってもらった。君については、責任を持って見守つていくつていう事で……」

ライの瞳が、燃える様な赤い色になつていく。

「そういうケースは初めてだから、みんな納得いつてない。それは、君の力のせいだ。俺たちは仲間がどこにいるか感じあえるし、どのくらいの強さなのかもわかる。君だけが特別に、まったく感じるこゝとができない。それを恐怖に感じているやつらがいる」

そこまで言つと、手を離れた。

「お互いの存在を確実に把握するようにしてるのは、俺たちの間で
の争いを避けるためでもあるんだ。もし誰かを傷つけるような奴がいれば、全員が敵になるぞつて……、そういう抑止力を持つとつて
ことなんだ。だから、1人だけ例外がいるつてことになる、不平
等感がでる。それでもマスターが詳しく話さなかつたのは、君に力
がないからだつたんだな。誰かが面白半分で手を出さないように……
。守るために、なんだな」

「守るため？」

「残念ながら俺たちは、人間ではないということ以外に共通点はな
い。残虐な性格のやつもいるし、悪趣味なやつもいる。掟はあるけ

ど、本当に絶対守らないといけないのは、人間に手をださないってことだけだ」

何が言いたいのか、いまひとつよくわからない。でも、ライの顔は真剣だ。何か自分を案じ、危機を知らせようとしてくれているのだということだけは伝わってくる。

「……どういう意味？」

「弱いと知れば、ちよっかいを出すやつがいるかもってこと。なにせ、玲二のことは誰も感知できないんだから……。こっそり手を出さば、バレないって思うやつがいるかも」

「そんなことして何か意味がある？」

「俺にはわからない感覚だけだね。まあストレス発散かな、戦いが好きなヤツらの。人間でいうところのスポーツみたいな感じでお互いに腕を磨いてるやつらもいるけど、一方的に誰かを傷つけたいやつもいるから」

つまり、感知できないことを愉しみのために利用される可能性があるということか。

恐ろしい話だ。土曜日に受けた傷がまた痛みだしたような気がした。

「俺たちが人間に手を出さないようにしているのは、争いを避けるためだ。ここところ、科学っていうのか？ 随分進化してるから本当の姿のまま過ごしていれば、大抵なにか映像にうつるようになっちまった。逃げたら追われるし、戦ったらきつと負ける。人間たちは俺たちを恐れるから」

恐れるから、排除しようという動きになるということか。もしかしたら、知らないところでそういう攻防が世界には存在しているのかもしれない。

「今みんな、人間として暮らしているのは……正体の方がバレないからだ。どこか山の奥深くに潜んでいたとしても、きつと見つ

かる。もちろん見つからない地域も、見つかったても大丈夫なところもあるだろうけど……。日本だとそうはいかない」

「どこか、みんなで移住するとか、そういう手はないの？」

「それでいいやつはみんな移動してる。少ないけどな。どこにでも適応できるなんてやつは少ない。大体、長い間ここで暮らしてるし、ゲンさんなんか4000年とか言ってるしなあ」

「冗談みたいな話だ。4000年って、何者なんだ、ゲンさんとやらは。」

「信じないのか？」

「いや……。そんなことはないけど」

「まあ15年じゃな」

ライはマジメな顔で言った。

「俺は……。自分が人間じゃないなんて、4月に初めて知ったんだ。だから、力がどうかとか、全然ピンと来ないよ」

「それ本当か？　なんだ……。もしかして、ほとんど人間なんだな」
そう言ってまた、左右をきよるきよると見渡す。

「どこかで聞いてるとマズいから、一応警戒中」

どこまで本当なんだか、まったくわからない。

「玲二、今日から俺と友達になろう。仲間に入れたくない理由はわかったけど、お前のお母さんだけじゃ限界がある」

「友達に……？」

「仲間って言われても、ピンと来ないだろう？　お前の言ってることが本当なら、普通にあの中に入るのは多分無理だ。特別扱いで警戒させるくらいがちょうどいいよ。俺は人間が大好きなんだ。だから、学校にまぎれこんでるんだけど……。そこに玲二が来たのも、なにかの縁なんだと思う。龍ちゃんの好きな相手だし」

「それは……」

「言わなくてもいいのに。どうしてもあの時のことを思い出してしまう。」

「完全な遮断は、特別な力なんだ。俺たちの中では、伝説っていう

か……それこそ神様級に強い奴が持てる能力みたいな、そんな認識なんだ。だからまあ、ビビっててもらおう。みんなには」

「土曜日ボコボコにされたけど」

「大丈夫だ。みんな半信半疑だったし」

本当だろうか。あんなに無様にやられて、まだビビるなんてこと、あるか？

「それにお母さんがな……。やたら強いだろ。だから多分、みんな警戒してると思うよ。日本以外の仲間なんてほとんど会ったことないし、勝手が違うから。大体ここに住み始めてから、誰にも見つからなかったんだろう？ 結構な実力の持ち主だよ」

ライはそこで、ニコッと笑った。なんとも人懐っこい、柔らかな雰囲気だった。この人の良さそうな人ではない者。信じて、いいのか？

「なにか聞きたいことはあるか？ 俺でよければ、なんでも教える」

「……ある」

「何？ 言って」

「人間になる方法って……ある？」

ライは目をまん丸にしている。

「人間になる方法？ 人間になりたいのか？」

「俺、この先どうなるかがあんまりにもわからないって母さんに言われてる。寿命とか、力がどの程度あるのかも全然わからないって。母さんは父さんが年を取って一緒にいられなくなるまで日本にいるつもりみたいなんだ。だから、俺もそれにつきあわなきゃいけないんだけど……」

「うん」

「いつどうなるかわからないから、誰かと深い関係になるのはやめろって言われてるんだ。特に、子孫ができるようなことはダメだつて」

「当然だ。薄い血の拡散は1番よくない」

「母さんも同じことを言ってた」

「玲二の場合、力がまったく読めないから余計にダメなんだろうな」

「ライは……？」

「俺は卵から生まれたからな」。その辺は、人の姿を基本的に持つてるかどうかでだいぶ違う」

卵から？

「俺は鳥だから。大体、人の姿になれるようにするのも結構時間がかかったし。種族によって、それぞれ人間との付き合い方も違うよなあ……」

ライはうーんと唸っている。散々唸って、こう答えた。

「その辺はお母さんの言うとおりにするべきなんだろうな」

結局今の考えた時間に意味はなかったようだ。

「ライは？ その……人間と、っていうのは？」

「俺はないよ。人間は卵産まないし。だから惹かれることもない。どこかで鳥の一族の美女を捕まえないと子孫はないな。そろそろいい出会いが欲しいよ」

そうなのか……。その辺の事情はまるで想像がつかない。

「人間になるっていうのは、ウワサ程度なら聞いたことあるけど」

「ウワサ程度でもいいから、教えてほしい」

「……いや、意味ないよ。玲二にはあらゆる外部からの力、効かないんだろ。どんな強力な力の持ち主でも多分、お前を人間にするのは無理だ」

「え？」

希望が1つ、消えるのか。胸の奥をぎゅっとつかまれたような変な感覚になる。

「本当に？」

「本当だよ。カラスが言ってた。お前には何にも効かないって。あいつほどのやつが無理っていうんじゃ、多分無理だ」

「何も効かないって？」

「完全な遮断っていうのは、あらゆる心理的な操作が効かないって
もんだと思ってた。心を読み取ったり、操ったりできないって聞いて
た。まあ……本当にそんな力が存在するのかどうかがあやしいっ
て思ってたくらいだけど」

「俺は？ 何が違う？」

「カラスが使うのは、物理的な操作だ。たとえば物を宙に浮かせる
とか、手足を勝手に動かすとか」

物理的な操作……。

「本当はそれで、店まで誘導する予定だったんだ。だけどそれは出
来なかった。だからクロがお前を殴ることになった」

「でも、殴られたら吹っ飛んだ……けど」

「それとは違う。あくまで、俺たちの使う能力としての、直接触れ
ないでする物理的な操作がってことだ。カラスは細かいやつだから
色々他にも試してるはず。だから多分お前にはあらゆる力が効かな
いと思う」

「俺が望んでも？」

「抵抗する必要もなく、勝手に遮断するんだろう？ 存在まで感じ
られないし」

じゃあ、人間になるのは本当に無理なんだろうか？

それに、存在を感じないって言うのはどんな感覚なんだろう。ま
るで、死んでるみたいじゃないか。

「ところで、沙夜の素顔が見えるんだって？」

「……多分」

「あいつには気をつけてくれ。……またなにかしてくる。あの兄妹
は」

「兄妹？」

「沙夜には兄がいる。妹を溺愛してるから、沙夜の機嫌を損ねると
厄介だ。沙夜自体はたいした力を持ってないんだけどな。あいつは

自分をよく見せる目的以外の力はほとんど使えない」

「……兄の方は？」

「基本的に悪趣味で、かなり強い。あまり他のやつと交流しないから、どんな力を使えるのか全部はわからないし。でも、意識しないほうがいい。あいつらは物理的な戦いをするやつじゃないから、玲二の力があれば本来は怖くはないんだ」

「……」

「だけど、誰か他人を使ってきた場合が厄介だな。あいつらの趣味の悪さはみんな知ってるから、なにか仕掛けようとしたら大抵誰かが止める。マスターも特に気をつけてるし。学校では……なるべく俺も気をつけるよ」

「ライ……」

突然現れたこの謎の鳥。本当に、人がいいらしい。急に提示された友情に戸惑うような、ありがたいような気分になっている。

「沙夜は人間にちょっかいを出すのが大好きなんだ。前にもあれこれやりすぎて、人間に混じるのをしばらく禁じられてた。9月にようやく解禁になったんだけど……。また、玲二を試す為に色々やったから。昨日まで謹慎だったわけ」

それで学校に来なかったのか……。こんなところで謎がとけるとは思わなかった。

「龍ちゃんもいいように使われただろ。だから、俺がマスターに報告したんだ」

「……じゃああれは」

「玲二に思いつきり吸い付いた時のこと。力、強かっただろ」

吸い付いた……か。赤面してしまう。確かに、強く抱きつかれてふりほどけなかった。

「じゃあ蔵元さんは別に俺のことは……」

「いや、そこは本当。大好き」

ライはなぜか笑顔だ。

「ああ、そう」

「他に気になることは？」

「……隠れた力を覚醒させる方法は？」

「隠れた力を……ね」

ライはまたうーんと首をかしげて唸った。

「その力によるけどなあ。なにか、玲二に隠れてるのか？」

「それはわからない」

「だろうなあ。それは多分、この世の誰にもわからないと思っぜ」

そうか。完全に他人からはわからないのが、俺、か。

「完全な遮断か……。他の力によっては、間違いなく最強の存在になっちゃうな」

色々と一気に話したせいで、頭がごちゃごちゃしていた。

本当はよくわからないこともまだたくさんあるが、1度噛み砕いていく必要があるだろう。

母さんに聞かなければならない話もある。

「ライ、ありがとう。……俺、また話を聞きにきてもいいかな？」

「もちろんだ。友達だからな。今日聞いたこと、他の仲間には言わない。安心してくれ」

黙って頷いた。

「今度、電話持ってきてくれ。つながるようにするから」

「……？」

意味がわからない。

「電話って？」

「携帯とか、持ってるだろ？ アレだよ」

「持ってるけど……、つながるようになってどっいう意味？」

「いつでも俺につながるようにするってことだ」

「今持ってるけど」

「今は無理。準備がない」

アドレス交換ではない、ということだろうか。それともこれから契約するのか？

「傷はどうだ？ 痛むか？」

そういえば、あまり痛くない。

「これ、やるよ。傷薬。よく効くから。1日1回までね」

さっきの小さい瓶を渡された。何でできているのだろうか。優しい、いい香りがほのかに漂う。

「……ありがとう」

「龍ちゃんを起こしていいかな？」

「いいよ」

ライはまた、人差し指を蔵元先輩の額につける。

「あ、いや、ちょっと待って」

慌てて指を離すと、俺をまっすぐ見た。

「人間になりたいって、……もしかして、好きな相手でもいるの？」

「え……」

「そうなのか？」

これから付き合っていくなら、きつとすぐにわかる。言っておいた方がいいかもしれない。

「……うん」

「そうか。なるほどね」

うんうんと頷いている。

「さては相当好きだな。愛してる？」

「え？ いや……それは……」

「正直に」

「わからないよ……そんなの」

顔を赤くして黙る俺に、そうか、とライは小さく言った。

「龍ちゃん、そろそろ帰ろうか……」

再び額に指をあてて、声をかけている。ゆつくりと蔵元先輩が目を開けた。

「あれ、もうこんな時間？」

時計をみると、もう7時半だった。4時間近くもいたのか……。そんなに話していたとは思わなかった。

「立花君、来平君って不思議な人でしょ？ 物知りだから、話してて面白いよね」

先輩は美しい笑顔で言った。ライを見ると、いいから話をあわせておけという顔だ。

「ええ……。面白かったです」

「いつもついつい長居しちゃって……。明日も学校あるのに。早く帰らないとね」

一体どういう状態なんだろう。これも今度聞かないといけない。

2人と、駅まで一緒に歩いた。

改札前で、ライが手を振る。

「玲二、またな！」

やっぱり、人の良さそうな笑顔だ。

「龍ちゃんも、また明日」

先輩も笑顔で手を振っている。どうやら、電車は同じ方向のようだ。

「よかった、立花君とまた話ができて。来平君のおかげだ」

「……ええ」

やってきた電車に2人で乗り込む。ラッシュの時間帯で、混んでいた。

やたらと密着しているせいか、先輩が真っ赤な顔をしている。それにかなり、焦るし困る。

「玲二君、図書室行ってる？」

「いえ…… 最近はちよっと」

「そうなんだ。僕も委員、外されたから
そうだったのか。それは知らなかった。

「だから今日は嬉しかったな」

電車が1つ目の駅に止まる。

「僕、ここだから。また今度話そうね」

目がキラキラしている。一応、はいなんて返事をしたが、……違和感を感じる。

ライに眠らされている間に、なにかいい夢でも見ていたのだろうか。

「ただいま」

「遅かったじゃない」

母さんが出迎えてくれた。父さんの靴ももうある。

「鳥の巣に行ってた？」

「え？」

「臭いがするわ」

……そりゃ、そうか。わかっているよな。それとも本当に臭いでわかるのか。

「うん」

「まずは、ご飯食べなさい」

「わかった」

リビングにいる父さんに挨拶をして、部屋に戻って着替えた。

脱いだ制服のにおいをかいでみる。いつも通りに思えるけど……。

やはり狼の嗅覚は鋭い、か。

食事を終わると、いつものように母さんが紅茶を淹れて持ってきた。

「どうだったの？ あの子に色々聞いたんでしょ」

「うん」

「あの子って？」

父さんが声をかけてきた。なんと説明したものか。

「学校の先輩に、人間じゃない人がいたんだ」

「……へえ」

「母さんは知ってた？」

「そうね。まあ、人の良さそうな鳥がいたもんだと思ってたわ」

人の良さそうな鳥……か。やっぱり、まだ何かいるのを知ってたんだな。

「だから今日あなたが呼ばれて行った時も、心配はなかった」

「……何を話してたかは聞かなかったの？」

「ご飯作ってたから」

まあ、確かに作ってはいただろうが。

「私の知らなさそうな事、なにか聞いた？」

「母さんの知らなさそうな事か」

今日の話を、心の中で反芻してみる。

「……俺は、人間にはなれないだろうって言われた」

2人が、同じタイミングでこちらを見た。

「そう」

「あとは……母さんがやたらと強いつてさ」

「ははは」

父さんがなぜ愉快そうに笑う。

「今日、あの人……ライって言うんだけど、友達になろうって言われたんだ。仲間に入らなくていいから、個人的に助けるって」

「いいんじゃないの？ 私たちと鳥は相性もいいし」

「そうなの？」

「土曜日にあそこにいた中では、1人だけ雰囲気違った。あの子なら安心していいと思うわ」

そういえば、何の違和感もなく招かれてしまっていた。最初、警戒しようと思ってたのに。

「私に聞きたいことある？」

「……そうだな」

「昨日の、いつきちゃんだっけ。あの子のこと、聞かなくていいのか？」

思ってもみなかった父の不意打ちに焦る。

「何、いきなり……」

「可愛い子だったから。私としてはぜひうまくいつてほしい」

「結構大胆なことする子みたいだけど……？」

やっぱり知ってるのか。

あの時は、すごく驚いた。そして危なかった。怪我してなかったら、抱きしめてるところだった。

「よっぽどあなたのことが好きみたいね」

父さんはなんだかニコニコしている。しかし、ふと真顔に戻った。
「ああ、でも困るのか。あんなに可愛い子が相手だと大変だな、玲

二」

「何が？」

「我慢するのが」

真剣な父のまなざしに、返答に困る。確かに大変だけど、はつきりそんな返事はしづらい。

「母さん、ちゃんと事情を理解して受け入れてくれる相手なら、付き合ってもいいってことにはならないのかな……？」

「私だって出来るなら、いいわよって言いたいだよ」

母さんは寂しそうな顔で呟いた。

「理由もなくダメって言うてるわけじゃないの。……その話は、また今度しましょう」

自分の部屋に戻ると、9時を少しまわったところだった。

そういえば、いつきにメールを送ると言ったのを思い出した。
心配させないように、ちゃんと送ろう。

8時過ぎに帰りました。
腫れはだいぶひいてきて、もう痛くないよ。
また明日、駅で待ってる。

玲二

何をしたとか、何を話したとかは一切書けない。
こんな文章でいいのか悩んだが、これ以上書くこともない。そのまま送信した。

ベッドにゴロつと転がって、今日のことを考えた。
ライ。学校の先輩で、308歳。正体は、鳥……か。
なんとなく、笑いが出てきた。本当なのかな？ 実は全部嘘だったりしないのかな。

目を閉じて考える。

ライはなんで、俺の力になってくれるんだろう？
何もいいことなんてないのに……。気まぐれみたいなものだろうか？

あの話しぶりからすると俺の味方なんかしたら、他の仲間にはよく思われなさそうだけど、大丈夫なのか。

狼と鳥は相性がいいから？

狼と鳥……？ そんなに相性が良さそうには思えない組み合わせだ。

そして、俺は人間にはなれない。
あとは覚醒するしか道はない。隠れた力があればだけど。そんな
あるのかな？

……いや、でも確かライは言っていた。

人の姿になれるようにするのも、結構時間がかかったし……。

生まれつきの力以外に、なにか技術を習得するとか……そういうことも可能？

次会った時に、聞いてみよう。

聞きたいことをまとめないと。色々ありすぎる。完全な遮断のことも、どうして百井があのに気がついたのかも気になる。

とにかく今の中途半端な状態の自分をなんとかしたい。

焦るなど言われても、やっぱりイヤだ。

あのW a t e r sに集まるやつらに目をつけられるのも困るし、いつきや良太郎たちとの親交がなかったことになるのは悲しい。

いつき……。

キスしてきたな……。

両手で顔を覆った。恥ずかしい。女の子に押し倒されてしまった。髪から、いい香りがした。昨日はすごく、可愛い服でやってきた。なるべく考えないようにしてたのに……。とうとう思い出してしまった。

思いつきり抱きしめたいな……。

キスしたい。

好きだって言いたい。

そんな日が来たら、どれだけ幸せだろう？

諦められたら、ラクなのに。どうしても……諦めたくない。驚く

ほど彼女が好きだ。

目を閉じて、いつきの笑顔を思い浮かべた。
せめて、夢で、……会えるかな。

#22 「屋上で抱きしめて」 &1t;いつき>

「おはよう玲二くん」

メールの通り、だいぶ腫れがひいているように見える。

重たそうだったまぶたも今日はスッキリしている。よかった。いつもの玲二くんに戻ってきた。

「昨日、あの、なんだっけ……先輩の家に行ったの？」

「来平さんね。行ったよ。学校のすぐそばだった」

そうだ。ライヘイさんだった。昔話みたいな感じの名前。

「何の話だったの？」

「え？」

「だって、随分遅くまでいたんでしょ？」

初対面の先輩の家まで行って、長い時間何してたんだろう。

いや、来平先輩はいい。問題は、蔵元先輩の方だ。あの人も一緒だったのが気になる。

顔を見上げると、なんだか玲二くんは困った顔をしている。

「……」

「どうしたの？」

「いや……」

返事がない。してはいけない質問だったのかな？

「何を話したってこともないよ……。なんかダラダラ長居しちゃっただけ」

なんだか嘘っぽい。玲二くんがそんなことするなんて、イメージじゃない。

つい、じっと見てしまう。

玲二くんも、じっと見返してきた。なぜか顔を赤くしている。

「なんで赤くなるの？」

「え？ いや……あの」

「なんだろう。怪しい。なにか、隠してる？」

「蔵元先輩も一緒だったの？」

「え？ ……うん、まあ一緒だったけど」

「明らかに動揺してる。なんだろう。何で動揺しちゃうの？」

「変な心配してる？ もしかして」

「え？ ……うん。変な心配してるよ。だって玲二くん、いつもと全然違う」

「蔵元さんはその、全然関係ないよ。俺が話したのは来平さんだけだし」

「いたのに？」

「ん？ うん……うん、いたんだけど」

「怪しい。……けど、本当に嘘をつけないんだな。こんなに慌ててしどろもどろになってるところ、初めて見た。なんだかおかしくなってくる。」

「ふふっ」

「？」

「なんでもない。何してたの？ 先輩たちと」

「玲二くんはとうとう、下を向いてしまった。すごく困っているのが伝わってくる。」

「何か言いにくいことでもしてたのかな……？」

「でも、初対面の先輩と、そんな言いにくいことなんかする？」

「ごめん。うまく説明できない。ちょっと……専門的な話」

「専門的？」

「世界の色んな……生き物について」

「今度の言葉は嘘っぽくなかった。けど、すごく唐突。世界の、色んな生き物だなんて。」

「俺は知らなかったんだけど、来平さんは俺のこと前に見て知ってて……」

玲二くんは鼻のあたりを軽く抑えている。

「それで、ちよつと話したいって思ったって。蔵元さんはたまたま同じクラスだから、紹介っていうか」

……なんだそりゃ。世界の生き物の話を玲二くんとしていいって？
本当かな？

「……信じないか」

「え？」

「信じられないよな。変な話、だもんな」
そう言われちゃうと困る。

「うつん。ごめん。なんか責めるみたいな感じになっちゃって……」
「いや、俺もなんか……なんて言ったらいいかわからなくて」
なんとなく気まずい空気のまま、学校まで歩いた。

教室に入って、席に着く。

「そうだ。園田、12月の26日から3日間、もう予定ってある？」

「12月？」

なんだろう3日間って。

旅行とか？ スキー旅行とか！？ ……いや、まさかね。

「まだなんにもないよ」

「父さんが園田にアルバイト頼みたいって」

「アルバイト？」

大学の学食とか？ 掃除とかかな。もしかして、玲二くんと一緒にアルバイト？

「卒業式にさ、袴とか着るだろ？ 女子は」

袴？ たしかに、3月になるとよく見かける。

「父さんの知り合いに、そういう衣装のレンタルやってる人がいて、カタログのモデルを探してるって」

「モデル！？」

「うん。で、どうかなって」

モデルか……。そんなアルバイトがあるなんて、考えたこともなかった。

でもそんなの、私にやれるのかな？

「出来るかな？ それに、お父さんたちに相談しないと」

「勿論、園田さえよければって言ってたよ。バイト代も出すし、興味があつたら詳しく話すって」

モデルなんて興味はないけど、玲二くんのお父さんからいうところが最大級にひっかかる。

なんていうか、ぜひお受けしたい。そんな気分だ。

「玲二くんはやらないの？」

「え？ まさか。男はいらないってさ」

そう言つて笑顔を見せた。よかった、傷、本当に良くなってる。

「男の子もたまに、和服の人っていない？」

「……いても、俺じゃああんまりね。ヘンじゃない？」

そうか。どちらかという外国顔の玲二くんじゃ、違和感があるか。

「じゃあ、帰ったらちよつと相談してみるね」

「よろしく」

なんとか空気が戻ったな、なんて安心していたのに。

後ろのドアが開いて、また気分が落ち込んでしまった。

「玲二君」

その声につい、一緒になって振り返ってしまった。

「蔵元さん、……おはようございます」

「おはよう」

ものすごく幸せそうな笑顔の蔵元先輩が立っている。玲二くんが立ち上がって、そばに行った。

「昨日、楽しかったね」

「え？ ……ええ」

「あのね、来平君がまだ話があったから、今日も来れるかなって」
「今日もですか」
そう言っ、クルッと振り返った。私の様子をうかがってるような感じがした。

玲二くん……！ 行かないで！

「おい、玲二！」

蔵元先輩の隣に、来平先輩が現れた。

「おはよう。昨日思い出したことがあったんだ。あと、電話の準備もできたから」

「ああ、それで……」

また、行くのかな？ 行かないでほしい。一緒に帰りたい。

「ん？」

来平先輩と目が合った。大きな丸い目が、まっすぐこちらを見ている。

先輩はニコニコと笑うと、いきなりこう言った。

「玲二、この子か！ お前の好きな子って」

「ちよつと……！」

玲二くんが慌てて来平先輩の背中を押して、廊下の奥へと移動していく。

何、今の……。

様子を伺おうとすると、2人の手前に蔵元先輩が立っていた。目が合ってしまった。なんとなく冷たい顔だ。さっきまでの笑顔はない。

気まずい。そつと、前へ向きなおる。

後ろから玲二くんたちの声が聞こえる。聞こえるけど、小さいので何を言ってるのかは聞き取れない。

お前の好きな子って……。
そう言ったよね。

顔がニヤけてしまいそうだ。両手で頬を押さえる。

でも、蔵元先輩の「昨日は楽しかったね」も気になる。大体、昨日までは立花君って呼んでたような……。

……なんていうか、恋する乙女みたいな笑顔に見えた。男の人だけど。

世界の生き物の話を、来平先輩としてたんじゃないの？
でも、私のこと話したりもした……？

わからない。なんなんだろう？

「おーっす。園田ちゃん」

葉山君が前から入ってきた。

「玲二、何やってんの？」

「……わかんない。なんか先輩たちにご招待されてて」

「誰？先輩って。1人は……例の人だよな。もう1人は？」

「わかんない。昨日突然来て……」

「突然来て？」

説明が難しい。なんて言ったらいいんだろう。

そこに、玲二くんが戻ってきた。顔が真っ赤だ。

「玲二、おはよ。今の誰なの？」

「今の？今は、2年の蔵元さんと、来平さん」

「蔵元先輩はわかるけど。来平先輩ってどいうつながり？ 園芸

委員？」

「いや、ちょっと、たまたま知り合ったというか……」

「なんだよ、やけに顔が赤いけど。何照れてんの？」

「照れてない……」

そういつて大きな手で顔を覆った。どう見ても、照れている時の玲二くんには見ええない。

「なんだよお前。ますます赤くなってるけど？」

「いいだろ、もう」

王子様はちよつと怒ったような顔で教室を出て行ってしまった。

「あら……珍しいこともあるもんだね。何があつたの園田ちゃん？」

「えゝ？ えつとね。……へへ」

「なんだよ、園田ちゃんまでデレデレした顔して。何かいいことしてたの？」

「何にもしてないよ……！」

葉山君は肩をすくめている。玲二くんはどこに行っちゃったんだろ？

結局どこに行つたか不明なままホームルームが始める直前に、ようやく戻ってきた。

顔は一応、元通りになっている。けど、こちらを見てはくれなかった。

休み時間、玲二くんは親友のところに行つてしまつて隣にはいない。

最近、私も自分の席にはいなかったわけなので、文句は言えないけど。

「いーつきつ！」

後ろのドアから、友香が顔を出した。

「友香」

「葉山君いる？」

あれ。私に用事じゃないのか。

「葉山君はあつち。1番奥の1番後ろ……」

「あれ、席つてあそこなの？ いつもそこに座ってるのに」

友香が宗田君の席を指差す。いつだって座ってるんだから、間違

えて当然だ。

「本当はあつちなの」

「わかった。サンキュー！」

友香は教室の奥へと歩いていって、なにやら2人に話しかけている。

何の話だろう？ 私も行ってもいいかな？

「いつきちゃん！」

後ろからしたのは、本城君の声だ。

「やっと声かけられた！ 最近席にいないんだもんさ」

今日はやたらとお客さんが来る日だな……。それにしても、今日の占い、最下位だったわけ？

「何か用？」

「うわ……冷たいんだね。そんな言い方して。クラブの仲間じゃんか」

まだ1回しか来てなくせに。仲間なもんか。

「今週のクラブの持ち物、教えて」

「え？ 毎回、エプロンだけだよ。先週聞いたでしょ」

「そうだね。聞いた。じゃあこの質問はもう使えないか」

本城君はニコニコ笑っている。どんなに適当な返事をして、まるで堪えないようだ。

「今週は何作るんだわけ？」

「……お赤飯」

「マジで？ そうだったわけ？」

本当はマドレーヌ。

「そんな冗談言っちゃってさ。可愛いなあ、いつきちゃんって。俺のこと、どう思ってたんの？」

「嫌い」

「嫌い？ ホント？ 嬉しいな」

嬉しい？ もしかして、マゾな人なの？

「俺に対して特別な感情があるってことでしょ？ これが大好きに

なる瞬間、楽しみだな」

「何言ってるの……？」

「なんとも思われてなかったらどうしようかと思ってたから。すっげえ嬉しい」

なんだろう。ポジティブに考えたらこうなるのかな。

つい、窓際に目をやってしまう。3人はなにやら真剣に話をしている。

玲二くん……。戻ってきて……！　テレパシーよ、届け！！

「いつきちゃん、今度デートしようよ。2人でボートとか乗らない？」

「ボート？」

「そ。で、うつかりおぼれちゃって、びしょ濡れになってっていうハプニングはどう？」

くだらなーい。ムカムカして、ついイヤミで答えてしまう。

「ついでに風邪こじらせて入院でもしたら？」

「そしたらお見舞いに来てくれる？」

「行かない」

「ねえ、いつきちゃん。本当にあいつと付き合ってるの？」

「え？」

本城君は玲二くんの方を見て、また私の顔に視線を戻した。

「寂しそうな顔してたから。ほっとけなくて話しかけちゃった」

「……」

「彼女なら遠慮せずに行けばいいのに。ケンカでもしたの？」

「してないよ。余計なお世話」

ぶいっと横を向いてやる。もう、お前の顔など見たくない！

「ほんと、怒った顔も可愛いね」

いきなり、頬に何かが当たった。一瞬で離れたけど、今の柔らかいのはもしかして……。

慌てて本城君の方を振り返る。

「今何したの……？」

「何って。わかるでしょ？」

無礼な顔が二カつと笑って、手を振って去っていった。

嘘……。

イヤだ……。

誰か、見てたかな……？

辺りをきよるきよる見回す。特別、誰か変な反応をしてる人はいない。

慌ててハンカチを出して、右の頬を拭いた。

休み時間の終わりを告げるチャイムがなって、みんな席に戻っていく。

ハンカチを机の上に置いたら、涙が出てきた。

手で顔を覆う。

どうしよう。

「……園田、どうかしたのか？」

玲二くん……。

泣いてるのを気付かれない。授業も始まるし、心配させたくないし、ほっぺにキスされたなんて知られたくない。

でも、怒ってほしい。ぎゅっと抱きしめて、安心させて欲しい。

「泣いてるの？」

慌てて首を振る。自分でもどうしたいか、全然まとまらない。

なんとかこらえて、涙を止めた。もう先生は教壇に立っている。

机の上のハンカチでささと涙を拭いた。いそいで教科書を出して、授業の準備を終えた。

4 時間目の授業が終わって、昼休みになる。

「園田、何かあったのか？」

玲二くんが心配そうに声をかけてきた。

泣くのはこらえたけど、気持ちは悲しくて、混乱したままだった。どう答えたらいいのかわからなくて、下を向いたまま首を横に振ると、玲二くんはじつと黙ったままで止まっている。

「屋上行こうか」

大きな手が、左手をつかんだ。ひっぱられるように教室から出て、階段を登る。

屋上に出ると、誰もいない。玲二くんは少し膝を曲げて、私の顔を覗き込んで言った。

「どうした？ 泣いてただろ？」

「う……」

また、涙が出てきてしまった。これは一体、何の涙なんだろう？

「俺の態度が悪かったかな……。ごめん」

「ううん……。玲二くんは悪くないもん」

「昨日のことは、本当に説明が難しくて。でも、何もないよ。蔵元さんとは、何もないから」

一生懸命しゃべってくれている。

「あとはその……。朝のことだけど……」

玲二くんは手を、ぎゅっと握ってきた。

「あんな態度取っちゃって、ほんとにゴメン。恥ずかしくて、園田の顔見られなくて……」

顔をあげると、朝と同じくらい真っ赤になっていた。

じゃあ、私のこと好きって言うのは、ホントだと思っていいのかな？

「玲二くん」

「何？」

「ぎゅってして」

そう言って、思い切って抱きついてみた。

そういえば、一昨日もこんなことをしたっけ。あの時は、すぐに離されたけど……。

抱きついた玲二さんの胸から、心臓の音が聞こえた。なんか、だ
いぶ早い感じがする。

しばらくして、玲二さんの腕が背中にもわつてきた。

優しく、そーっと。全然、ぎゅっとはしてこない。

それも、すぐに終わった。ゆっくり、体が離れる。相変わらず王
子様の顔は真っ赤だ。

「俺にはこれが精一杯」

11月の屋上は少し寒い。でも、玲二さんの額には汗が浮かんで
いた。

……どうして、好きなのに、ダメなの？

抱きしめられたいし、キスしたい。玲二さんにだったら何をされ
たって構わない。

そう言っていていいか、悩んだ。言ったら、追い詰めちゃうのかな。
待つって決めたのに、実際に待ってみるとすごく辛い。

目の前にいて、たくさん一緒に過ごして、好きな言葉が聞い
たから。我慢できなくなる。

「玲二くん、今日も来平先輩のところ、行くの？」

「え……？」

「行っちゃだ。一緒に帰りたい」

「……園田」

「さっき、本城君にキスされた」

「え？」

玲二くんが珍しく大きな声を出した。

「いつ？」

少し、怒りが混じっているように聞こえる。

「さっきの休み時間。……ほっぺにだけど」

「……それで泣いてたの？」

黙って頷くと、いきなり抱きしめてきた。

さっきの精一杯はどこへいったのか、強い力で抱き寄せられる。

「ごめん……。気がつかなくて」

ぎゅうつと胸の中に閉じ込められた。顔が、すごく近い。

上を見ると、目があった。ものすごく、ドキドキする。

あれ……。これって……。

すごく期待した瞬間、屋上のドアが開く音がした。

途端に体がぱつと離れる。

「お……。邪魔したか！？」

荒川先生の声だ。どうしよう。見られちゃったかな？

「若いつていいなあ。でも、校内であんまり、いちゃいちゃするなよ？」

そう言つてちょっと笑いながら、すぐに校内へと去っていった。

気を利かせてくれたのかな……？ 先生なのに。

お互い真っ赤になって、玲二くと顔を見合わせた。

またいいところで邪魔が入った。やっぱり呪われてるんじゃないかな……。もしかして。

「園田……」

今度は玲二くんらしい、静かな声。

「ごめん……。悪いんだけど、俺、今日も来平さんのところに寄る」

「え？」

ビックリした。この流れで、それはないと勝手に思っていた。

「駅まで是一緒に行くよ。本城がいたら、一言言わせてもらっ
「なんで行くの？ 何の話があるの？」

「……」

玲二くんは困った顔をして、答えない。

「蔵元先輩も一緒なの？」

「それは、わからない」

「昨日、楽しかったねって言ってたけど」

「うん？ …… ああ、なんで、かな」

「今日から先輩、『玲二君』って呼んでるじゃん……。昨日ホント
は何があつたの？」

「何もないって」

そんなわけない。あんな顔して、なにかいいことがあつたしか
思えない。

「もういいよ……！」

秘密なんだ。なにかやましいことがあるんじゃないかって、どう
しても思ってしまう。

つい大きい声を出してしまった。

玲二くんを置いたまま教室に戻って、自分の席についた。

お弁当を食べてない。昼休みが終わる前に、食べなくっちゃ。

「園田ちゃん、玲二は？」

ガツガツ食べていると、葉山君が声をかけてきた。

「知らない」

「どうしたんだよ……怒ってんの？」

「怒ってない！」

「痴話げんか？」

やれやれという感じのジェスチャーをして、葉山君はそれ以上は
何も言わず教室を出て行った。

お弁当を全部食べて、後片付けをした。

まだ戻ってこない。お昼ごはんはいららないのかな。

ケンカか。ケンカだな。……ケンカしちゃった。

玲二くんが悪いんだよ。何か隠してるんだもん。

せつかくぎゅってしてもらったのに。ついでに、キスするかと思
ったのに。あそこまでは、すごくよかった。

なんであの先輩のところに行かなきゃいけないんだろ。理解でき
ない。

昼休みが終わるギリギリに、ようやく隣の席の王子様が戻ってき
た。

こっちを見てる。チラッと見ると、相変わらずかっこいい顔が、
困っていた。

プイッと顔をそむける。

授業は全然、頭に入ってこない。

可愛くないな……全然。

玲二くんが用事があるからって、怒ることないのに。

自分はクラブの時、待っててもらってるのに。駅まで一緒に行っ
てくれるって言ったのに。本城君にも一言言っただけ……。

優しい玲二くん。

だけど、あの蔵元先輩のことが気になって仕方ない。

あの人がいなければ、ふーん、ってくらいで行かせてあげるのに。

いつの間にか授業が終わっている。

しまった。なんにも聞いてない。先生に指されなくて良かった。

帰りのホームルームも、つつがなく終わる。

チラッと左側を見るといつも通りの横顔があった。どうしよう。なんて言ったらいいのかな……。

のろのろと帰り支度をしていると、すぐ横のドアがいきなり開いた。

「玲二！ 行くぞ！」

開くなり、明るい声が響く。来平先輩だ。大きな声でみんなの注目を一身に浴びている。

玲二くんは立ち上がった、先輩を連れて廊下へ移動していった。気になる。軽く振り返ると、2人で話していた。蔵元先輩は……いない。

2人の様子を見てみると、その向こうから本城君がやってくるのが見えた。玲二くんもそれに気がついて、声をかけている。

気になる！

でも、声は聞こえない。

「何見てんの？」

「わっ」

いきなり声をかけられて、驚いてしまった。

「玲二と本城じゃん。なにあれ、修羅場？」

こつこつのを、修羅場なんて言うのかな。

「俺の園田に手を出すのはやめてくれ！ ……いいじゃないか、恋愛は自由だろ！？」

適当なアテレコをする葉山君をジロつと睨んだ。

「あれ、……ゴメンね。風のように去りまーす」

そそくさとしてしまったクラスメイトを見送ってもう1度廊下の様子をのぞくと、本城君は笑顔だ。なんだろ、どうなったの……？

玲二くんは横で待っている来平先輩に何か言っていると、こちらに戻っ

てきた。

「……まだ怒ってる？」

また、困った顔だ。今日は1日中こんな顔をさせてしまっている。
「うっん」

「全部説明するのはちよつと、難しいんだけど……。来平さんと話すのは、今の俺にはどうしても必要なことなんだ。おかしいことは全然、してないから。そこは信じてくれないかな」

そんなこと言われたら、もう怒ってはいられない。

「うっん、私、あんなに怒ったりして……。筋違い、だよ。ごめんね」

「駅まで一緒に行ってもいい？」

行ってもいい？ だって……。

「うん。一緒に行く」

2人で立ち上がる。廊下にいる先輩に、玲二くんが「後で行きます」と声をかけた。

会話もないまま、駅についてしまった。

ここでお別れか……。なんか、やだな。

「玲二くん」

「何？」

「あのね……」

なんて言おうか考えないまま、あのね、なんて言ってしまった。どうしよう。なんて言おう。

「おーい！ 玲二ー！！」

さっきも聞いた声だ。来平先輩が笑顔で駆けて来る。

「お前んちで話すか！」

「え？」

「その方が早いから。お母さんもOKだって」

お母さんもOK……？

昨日初対面なのに？ わからない。また謎が増えた。玲二くんもちょっと、あっけに取られたような顔だ。

「わかりました」

「きつぷ、がいるんだよな。電車に乗るのに」

先輩は「ごそごとポケットを漁っている。」

「そんなに昨日、仲良くなったの？」

「え？ …… うん、まあ…… そうだな」

そこは否定しないんだ。じゃあ、仲良しなのかな。

とりあえず蔵元先輩がいないから、ちょっと安心することができた。

来平先輩はニコニコとずっと笑顔をたたえたまま、玲二くんと話している。

ただ、会話の内容は何かなんだかまるでつかめない。何の話なんだろう。そして時々、こつちをじっと見つめてくる。何も言っていないので、対応に困る。

駅について、電車を降りる。改札を抜けると先輩がいきなり振り返って言った。

「君のことはなんて呼んだらいい？」

「へ？」

「名前は？ 園田、なんていうの？」

「いつきです」

「じゃあいつちゃんかな。いつちゃんじゃ男の子みたいかな？」

なんだろう突然。

「玲二はさ、れいちゃんじゃイヤだって言うんだ。しょうがないから玲二って呼んでる」

そういえば、蔵元先輩のことも「りゅうちゃん」って呼んでいた気がする。

「いつき？ いつきちゃん？ そのちゃん？」

まともに話したこともない人に、突然愛称を決められるなんていう経験は初めてだ。

「園田でいいです」

「そんな。そっけない。大体、玲二と同じ呼び方でいいの？」

「え？」

そういえば……苗字で呼び捨てにしてくるのなんて、先生か玲二くんだけだな。

「じゃあ園田ちゃんて」

「うん？ それでいいの？」

その前に、そんなに交流がこれからあるのかな……？ 疑問だ。

「よし、じゃあ決まり。玲二、行こうか！ 園田ちゃん、またな！」
笑顔で手をブンブン振って、2人が去っていった。

仕方なく、1人で家へ帰った。

今日はプチ事件が盛りだくさんだったな。

玲二くんがなんとなく隠し事してる風で……

蔵元先輩の態度が妙にあやしくて……

本城のヤツが勝手にほっぺにキスしてきて……

へこんでるのに、玲二くんはまた来平先輩の家に行くとか言うし、行かなかったけど。

来平先輩はかなりマイペースな人みたいだ。

先輩的には、玲二くんはもうマブダチみたいな感じなのかな。家に押しかけてるんだもんね。

あの先輩と話すことが今の自分にすごく必要って、どういうことなんだろう。

なにか将来のこととか、関係あるのかな？

マイペースだけど、悪い人じゃなさそうだった。あの人という分

には、別に心配はないと思える。

蔵元先輩は……仲が良いからただ一緒にいたのかなのかな。でもなあ……。なんだろうあの態度。恋人を見るみたいな目に見えて、困る。

今朝のあの冷たい視線。来平先輩の言葉に反応して、急に表情が変わった。

やっぱり気になる。

だって玲二くんを押し倒して勝手にキスしちゃうような人なんだから。

あれ、もしかして仲間？ おんなじこと、自分もしてる。しかも3回も。勝手に……してる。玲二くんからしたら、ハタ迷惑なやつらなんじゃ……。

悶々としながら夕食の準備を手伝った。家族みんなで食卓を囲んで、今日あったことを話す。

「いつきは？ なにか今日はかわったことなかった？」

「なかった」

「そう」

自分にあったことは、ひとつも家族には話せない。ロクでもない上に、スキヤンダラスな話題ばかりだ。

食事が終わってから、リビングでは兄弟たちがテレビを見ている。いつものくだらないバラエティだ。今日はゲストで、ナントカって雑誌の専属モデルとやらが出ている。

「可愛いよなあ〜！ フツチー」

「お前、こういうのいいの？ 化粧濃くない？」

兄同士でどの子がいいとか、そんな話で盛り上がっている。モデルか……。

「そうだ！ モデル！」

アルバイトの話、すっかり忘れてた。

食卓でお茶を飲んでいる両親の元に移動する。

「あのさ……お父さん。私、アルバイトしたいんだけど」

「アルバイト？」

「うん、冬休みに」

「どんなアルバイトだ？ 接客業はダメだぞ」

「なんでダメなんだろう。接客業をのぞくと、高校生ができるアルバイトの数はガクンと減る。」

「モデルの、アルバイトなんだけど」

「モデル??」

兄弟たちの視線が急に自分に集まる。

「なんだ……。勧誘でもされたのか？ ああいうのは全部罠だぞ！
最後は裸にされてあれやこれや……」

将兄ちゃんがおどろおどろしい口調でおどかしてきた。

「違うよ。あのね、玲二くんのお父さんの知り合いが……」

今朝された話を思い出しながら、説明する。

「やってみたいのか？ いつき」

「……うん」

モデルがやりたいんじゃない。玲二くんのお父さんが言ってくれてるから、やってみたい。

お父さんの覚えがめでたい状態になりたい。

「わかった。じゃあ、ちょっと電話してみよう」

「え？」

「それだけじゃどんな仕事かわからないだろう？ 返事だってあんまり待たせたら迷惑だ。詳しく聞いてから決めよう」

そう言ってお父さんが立ち上がった。部屋の端に置かれた電話のところに行く。

「母さん、電話番号は？」

「ああ、ちよつと待って」

なんかすごく、緊張するシチュエーションだ。こんな半端な覚悟でよかったのかな。

「こんばんは。園田と申します……」

お父さんは色々と話しながら、メモなんか取っている。

緊張しすぎて、会話が耳に入ってこない。お父さん同士の会話なんて。なんかなんか、なんかアレじゃないかな。

ふわふわ考えているうちに、電話はもう終わっていた。

「どうだった？」

お母さんが、お茶を新しく淹れてお父さんの前に置いた。

「立花君のお父さんは、大学の先生なんだな」

「あら、そうなの。立花君のイメージ通りね」

本人のイメージ通り？ 変な言葉だけど、そういえば自分も同じ事を思った。

「毎年むいてそんな学生にお願いしてるそうだよ」

お父さんはそう言ってお茶を一口すすった。

「モデルといってもレンタル用のカタログで、お店でしか使わないと言っていた。いつきがやりたいのなら、やったらいいんじゃないか」

「いいの？」

「いいと言っただろう？」

なんか、意外だ。ケチつけられると思ってたのに……。

「ビックリするほど可愛いお嬢さんですね、って言ってたぞ」
兄ちゃんたちが黙ってこちらを見ている。

お父さんがそんなこと言うと思わなかったので、驚きと照れくささで真っ赤になってしまった。

玲二くんのお父さんが、そんなこと言うてくれたのか……。

お世辞でも嬉しいな。優しそうなお父さんだった。
たったこれだけなのに、嫌なことも全部吹っ飛んだ気がする。

明日はこれで、笑顔で玲二くんに会えそうだ。

#23 「ようこそ先輩」 & It・玲二 & gt ;

「お、いいにおいの家だなー!」

玄関に入るなり、ライはそんなことを言い出した。

「そう?」

「うん。いいにおいだ」

「いらっしやい。待っていたわよ」

母が出てくる。

「おかえり、玲二。鳥さんはなんて呼んだらいいのかしら?」

「俺はライ」

「ライね。よろしく」

2人は握手を交わしている。そういえば、事前にコンタクトを取ったようだが……。

「あなたは? お母さんじゃ、なんだよな」

「私の名前はテレーゼよ。そう呼んでくれていいわ」

「テレーゼね。わかった」

下の名前で呼ぶのか、人の母親を。なんだか妙な感じた。

「玲二は着替えていらっしやい。リビングで話しましょう」

「わかった」

自分の部屋に戻り、制服を脱いだ。

まさか家に来るとは。蔵元先輩のことを聞きにくくなってしまった。

着替えを済ませて階段を降りると、ソファの上にライが寝転がっていた。

「お、玲二。いいな、これ。気持ちがいいな」

母さんがお茶を持って入ってきて、ちよつと嫌そうな顔をした。

「座ってもらえる？」

「ん？ ああわかった」

大人しく座りなおしているライの隣に、腰を下ろした。

「どうぞ」

「これなんだ？」

「紅茶だよ」

ふーんと言って、一口飲んでいる。ニコニコしだしたところを見ると、美味しかったんだろう。

母もソファに座った。

「始めましょうか」

「ああ！」

2人が俺の方を向いて、言った。

「俺が今日来たのは、昨日話した後思い出したことがあるからだ。

あと、お母さんもいた方が話が早そうだと思って」

ライは笑顔を浮かべている。昨日初めて会ったばかりだというのに、良太郎以上のフレンドリーさだ。

「でも今はそれより気になることがある。テレゼ、上にいるのはあなたの友達？」

「そうよ。私の古い友人」

上にいる……？

「後で紹介して」

「……いいわよ」

「やったぞ玲二！ 出会いがあつた！」

何の話だ？ まったくわからない。

「さあ、じゃあはじめようか」

出会いの話は説明はないのか？ ……まあ、後で聞けばいいか。

「お前の大好きな、あの園田ちゃんのことだけど」

1番最初の話題には、いきなりNGワードが含まれている。

「え？」

母さんの視線がなんとなく鋭くなった。しかしライはまったく気にしないらしい。

「思い出したんだ。こう表現するんだろ。運命の相手」

「？」

「俺たちが人間と恋に落ちた場合、それは確実に運命の相手だって話だ」

確実に、運命の相手？

「俺たちは、まあ種族によるけど、人間と恋に落ちることが稀にある。そういう場合、その相手の人間とは絶対に結ばれるんだよ。相手はすべてを捨てて生涯をささげてくれる」

「……なんだよそれ。薄い血の拡散はダメなんだろ？」

「そうだよ。だから、どんなにお互いが好きになっても、やむを得ない理由がある場合以外は諦めるってことに、最近はなってる」

「もしくは、血が薄くならない場合には許される」

母さんが呟いた。

「テレーゼの家は、薄くならない家系？」

「大抵はね」

「あれ、今何歳？」

「あなたの3倍くらいかしらね」

308の3倍……か。

「大抵ってことは、絶対ではないの？」

「ご覧の通りよ」

俺のことか。

「二人はどうやって出会ったの？ テレーゼと……」

「息子の前でそんな話できないわ」

母さんはプイッと顔を横にむけた。照れているのか。そんな母を、初めて見た。

「園田ちゃんは玲二の運命の相手じゃないかと、俺は思っただけど」

「どうかしらね。玲二はちょっと例外過ぎて、私たちと同じように考えていいかわからないわ」

「そうかな」

なんでそんなにこだわるのか、気になる。

「どうしてそう思うんだ？」

「あの子、いまだき珍しい純粹さの持ち主だ。玲二、そういうタイプの人間ほど、俺たちに惹かれるようになってる」

「そうなの？」

「そうだよ。お前のクラスにもう1人いる。あと、龍ちゃんも」

「もう1人……」

「いつも話してるやつだよ。男の」

良太郎のことか。

「あいつ、玲二がすごく好きだろう？ 多分、理由はない。どうしようもなく惹かれるんだ」

確かに、そんな感じだ。こっちが何も言わないのに、ずっとそばにいる。

「龍ちゃんもそうだ。どうしようもないんだ。まあ龍ちゃんの場合は、女性的な好きみたいだけど」

いくら全部筒抜けになっているとはいえ、母の前で自分の周囲の恋愛関係の話をここまで全部話されるのは恥ずかしい。

しかし昨日話した感じからしても、ライに「配慮」なんて期待はできそうにないと思える。ならもう全部スッキリさせよう。

「蔵元さんは」

「何？」

「昨日の、眠ってる間……、あの間ってどういう状態だったんだ？」

「ああ。眠る前と、起きた後、その2つの時間が違和感なくつながる内容になってる」

「え？」

「眠る前、俺と玲二と、3人でいただろう？ そして起きた時。その間の時間分、一緒に過ごしたような記憶を持つようになってる」

んだ」

「……夢を見てるような感じ？」

「夢みたいなものだけど、本人にとっては夢じゃない。確信の持てる現実だ」

「内容は？」

「自分にとって1番幸せな時間」

「……それって、蔵元さん本人がこうだったらいいと思うような内容になるってこと？」

「ああ。そうだ」

蔵元さんにとって、1番幸せな内容……。

「ちよつと様子が変だったようだけど」

「ああ、幸せそうだったな。玲二とにかいいことあったんじゃないか？」

「……困るんだけど」

「そうか。でも、その話はまた後に」

ライは空になったカップをもちあげた。

「これ、もう1杯ちようだい」

紅茶を笑顔で一口飲んで、ライはまた話し始めた。

「あれだけを惹き付けられてる人間がいるあたり、可能性を感じるんだよね。俺としては」

可能性。それは、俺が何か、力を持っている可能性ってことだろうか。

「今日あの子と話して、わかった。玲二のことが好きだよな。かなりどうしようもないくらい」

「そうね」

母さんが小さい声で答えた。

あの木の下で聞いた話を思い出す。どうして自分のことを好きになったか……。なんでかわからないけど、とにかく好きなんだって

言っていた。

「運命の相手なんじゃないかなあ」

「人間同士だって、そんな風に惹かれあうことはあるでしょう？」

「そうなの？ 大体俺、人間とは恋しないからな。俺が何言っても仕方ないか」

ライはふう、とため息をついた。

「玲二はどうなんだ？ そういう相手だって感じるか？ 愛してる？」

だから昨日も、そんな風に聞いたのか。

「わからないってば」

「わからないんじゃないや違うのかな？ 俺は玲二と園田ちゃん、一緒にしてあげたいんだけど」

なんでそんなにこだわるんだろう。顔が赤くなってくる。

「じゃあ子孫を残せないようにしたら？ そういう事もできるんだろ、今の人間は」

「やめてちょうだい、まだ15なのよ。人生のすべてを決めるような時期じゃない。それに、可能性はまだ残ってる」

「覚醒、か」

「だから、未来の選択肢を減らすようなことはしたくないの。私たちは、玲二に幸せになってほしい。もしいい相手がいて結ばれることになったら、子供だって、……できたら素晴らしいもの」

これが母さんの本当の気持ちなんだな。

自分の未来のために、今、我慢してくれと言っているんだ。

最後まで可能性を信じて、なんとかなればいいと思ってくれていい。

俺は焦ってたのかな。確かに、まだ15だ。15でしかない。

玄関が開く音がした。

「ただいまー」

「誰？」

「父さんだよ」

母さんが立ち上がって、玄関に出迎えに行く。

「お客さん？」

コートを脱ぎながら父が入ってくる。

「初めまして。玲二の友達かな？」

「はい。ライ……ヘイ カケル、です」

「……君はもしかして、鳥の？」

「さすが！ 察しがいい」

ライは目をクリクリさせて父の観察を始めた。

「夕食の用意、するわね」

もうそんな時間か。

「ライくんも食べていくかい？」

「あ、俺はもう、木の実とかで十分なんで」

「木の実か……」

父さんは台所のほうに向かって声をあげた。

「母さん、木の実あるか？」

なかなか聞かないセリフだな。

「玲二はお父さん似だな」

ライはニヤリと笑って、肘でつついてきた。

「夫婦の馴れ初めを聞こう。運命の相手の具体的な例なんだからな」

「テレーゼと出会ったのは、私が20歳の時だ。教授が企画したヨーロッパ旅行に参加してね。その途中、市場で会ったんだ。テレーゼは花を売ってた」

母は花が好きだ。庭も、家の中にもあちこち飾っている。

「目が合った瞬間、時間が止まったような気がした。言葉も交わし

てないのに……どうしてか、すごく心が惹かれたんだ。でも結局、片言の会話で花を1輪買って、それで終わり」

「それで終わり？」

「なにせスケジュールの厳しい旅行だったからな。すぐに集合時間だったし、話してる時間なんかなかったんだ。せめて名前だけでも聞けば良かったとずっと思いながら、日本に帰った」

2人でふんふんと話を聞く。

「帰ってから2ヶ月くらいしてからかな……。私はその時、田舎から出てきてアパートで1人暮らしをしてただけ、夜いきなり、テレゼが来たんだ」

「……来たって？」

「来たんだ。ドアをノックする音がしたから出たら、立ってたんだ。そりゃあ、驚いたよ」

「へえ……」

「何にも持つてなくてな。パスポートもないし、どうやって来たのかもわからないし。誰かを頼って来たわけでもなさそう。とにかく、私に会いに来たってだけらしくて。もうどうしたものか」

「どうしたの？」

「仕方ないから、家に入れて、居候させるような感じかな。そういう風になった」

「……」

2人の始まりがそんなにドラマティックなものだったなんて、知らなかった。

「私はすごく心を奪われていたけど、テレゼもそうだったとは思わなかったし、いきなり男の家になあ……。住まわせるっていうのも問題があるだろう？ 大体、何にも持つてないなんて怪しいじゃないか。どうやって私のところにたどり着いたのかもわからないし」

確かに。ドラマティックというよりは、かなりホラーな展開か。

「でも一緒にいると、そういう疑問は全然気にならなくてな。しばらく一緒に暮らしたんだ。アルバイトしながら学校に行って……、

家では一緒に過ごした。そうしたらある日、全部わかったんだ」

「何が？」

「どういう存在なのかが、だ。人間じゃないことも、あの日お互い恋に落ちていたことも、わかったんだ」

「……？」

「信じられないだろうが、本当だ。それですぐ、結婚したんだ」

「はあ」

気の抜けた声を出してしまった。

父が嘘をつくとは思えないが、とても信じられた話ではない。とんでもないファンタジーだ。

それこそ、なにか心を操られたりしたんじゃないのか？

「結婚って、パスポートもないし、……戸籍とかそういうのはどうしたの？」

「どうにかしてたんだよ。私が気がつくのを待ってたような感じがな」

「その辺の詳しい話はなかったの？」

「なかったな。必要なかったというべきか……」

なんだろう。愛の奇跡とか、そういう類の話なのかな。

「すごいな、玲二。まさにこれだ、運命の相手ってというのは……」

じゃあ、いつきがある日俺の事情や正体に気がつく日が来て、問題は解決なんてことがあるんだろうか？

とてもそんな事、あるとは思えない。

「……父さん本当に人間なの？」

「だと思っけどな。でも、薄い血を引いてる人間も多いんだろう？ 案外そういうのかもしれないな」

ははは、なんて軽く笑っている。とぼけたふりして、もしかして超能力でもあるんじゃないのか。

「ライ、父さんも純粹？」

「ああ、そうだな」

「純粹って？ 何の話だ？」

「心が純粹な人間ほど、人でない者に惹かれるって」

「へえ。そうなのか……。純粹なんてこの年で言われるとはなあ」

「そういえば、父さんはどんな話でも頭から否定するということがない。」

良太郎もそうか。あいつも懐が広い。何を話しても、本当に信じ
てくれそうに思える。

「なあライ、運命の相手って、人生の中で1人だけしか出会わない
のか？」

「うん？ さあな。そうかもしれないな。何人もいたよって奴は見
たことないし」

台所の方をチラッと見る。

「母さんには聞いてないのか？」

父さんも知らないのかな。聞く必要なんて、ないのか。

「恥ずかしいらしくて話してくれなかったから」

「そうか。可愛いな」

父さんは笑った。息子の前だというのに、実に正直だ。

「そうだ。ライ、元々持っていない力も、後から習得するとかそうい
うことはできるのか？」

「習得？ ああ、そうだな。できるものもあるぞ」

それはぜひ、確認しなくてはならない。

「昨日、人間になれるようになるのに時間がかかったって言ってた
から」

「そうだな。かかったぞ。なにせずと本当の姿でいると、厄介で
な」

本当の姿とは、鳥なんだろうけど……。普通の鳥ではないってこ
となんだろうな。

「人間になれるように色々工夫して、なんとかできるようになったんだ。ほかのヤツに教えてもらって」

「俺にも、なにかできるようになるかな？」

「うーっーん」

ライは大きな声で唸った。

「ライくん、ダメなのか？」

父さんも興味津々なようだ。

「後から習得できるものは、元々持つてる能力によるんだ。俺は普段の姿から、また別の姿になれるから、その変形の力を応用して人間になれるようになったんだ。だから、玲二はちよつと難しい」

「……」

言葉が出ない。

「お前の力は外部の力を無効にするものだろ。そこから応用できるものっていうとなかなか……」

「無効の応用ね。なんだろう。バリアーを作れるようになるのか？」
父さんも一緒に考えている。2人は腕組みをして同じ方向に斜めになっていた。

その時、電話が鳴った。

「私が出よう」

父が立ち上がり、電話のほうへ移動して行く。

「お前のお父さん、面白いな。ああいう柔軟な人間はなかなか貴重だぞ」

「……そうみたいだな」

ライは上の方をチラチラと見ている。たまに、左右もキョロキョロしている。

「なあライ、なんで俺のこと、そんなに心配っていうか……、その……」

「うん？ なんだ？」

「なんで園田とうまくいけばいいって思ってるんだ？」

「ああ」

ライはニコニコと笑顔だ。

「玲二があの子のこと、随分好きそうだからさ」

「……」

「今日も抱きしめてたじゃないか。ついでに口も」

「っ！」

慌てて口を押さえる。押さえた手はすぐにつかまれて、苦情を言われた。

「何するんだよ……。だってそうだろう？　しようとしてたじゃないか」

「何でもかんでも口に出して言わないでくれよ……！」

ライは目をまんまるにして、黙った。

「どうしたんだ？　何してるんだ？」

「どうやら電話は終わったらしい。」

「いや……、なんでも」

ライから離れ、座りなおす。しかし、先ほどのセリフに効果はなかったようだ。

「お前は全然読めないんだから、全部聞いて答えてもらわないと俺はわからないんだよ」

そういう理屈なのか。だからと言って人前でさらけだされまくってはかなわない。

今朝だって、いつきに聞かれたはずだ。好きな子はこの子か？
って。

あそこから全ての調子が狂ってしまった。

「なんだよ、怒ってるのか？」

「怒ってなんかない……。ちょっと、今日はそれで困っただけだ」

「でも全部見ちゃったからな。いいじゃないか。雄として当然だろう？　交尾したいとか」

「ライ！」

「え？　なんだっけ、人間の言葉だと違うんだよな」

「違う。そこじゃない。それ以上は本当に頼むから言わないでくれ」

顔が熱い。父さんの前で何てこと言うんだ。

「なんだ？ いつきちゃんの話か？」

「父さん」

「モデルのアルバイト、引き受けてくれそうだぞ。今電話があった」

「ああ、そう……」

力が抜ける。もう話題を変えなくては。

「口をくつつけるだけじゃ子供はできないんだから、したらいいんじゃないか？」

ライが懲りずに言う。もう、何もいう気が起きない。

「ライくん、それはダメだ。そんなことしたら収まりがつかなくなるもんだよ」

なぜか父さんがかわりになだめてくれた。助かるけど、とてつもなく恥ずかしい。

「食事にしましょうか」

母が入ってきた。

「ねえライ、あなたサイズは？」

「うん？ 今よりちよつと大きいくらいかな……」

「そう。じゃあ2階でゆつくり食べてくる？」

何の話かはわからない。が、ライには伝わったようだ。

「いいのか？」

「もちろんよ。こつちへどうぞ」

母さんに促され、立ち上がった。なにやらウキウキした様子だ。

「木の実がちゃんとあったのかな？」

父さんも不思議そうな顔だ。

階段を登って降りて、母が戻ってきた。

「じゃあ私たちも食べましょう」

「ライは？」

「あの子は人間の姿でいるより、本来の姿の方がラクなのよ」

同じ食卓では狭いとか、勝手が悪いとかそういうことなんだろう

か。

昨日行った家の中のことを思い出す。何もない部屋。あれは、本来の姿でくつろぐ為？

いつもと同じように、両親と食卓を囲んだ。

「ねえ玲二。いいお友達ができて嬉しいけど、それとこれとは別。恋愛はダメよ。我慢して」

思わず手が止まる。今日の、屋上での出来事だろうか。結局全部筒抜けなんだから、ライに言つなと言ったところで無意味なのかもしれない。

「……わかってるよ」

荒川先生が意味もなくやってきたのは、母さんが仕向けたのかな。ライは妙に応援傾向にあるようだし、そう考えるのが自然な気がする。

「わかってない。最近随分距離が縮まってるわよ」

「確かに」

そうだ。待ってくれと言ったのに。結局、自分からも近づいていつてる。

「気をつけるよ」

我ながら、暗い声だ。さっきまでライに色々言われすぎて、自分の立場を少し忘れかけていた。

気をつける、か。

「玲二」

「……何？ 父さん」

「冬休み、またアルバイトするか？」

カタログのモデル、ではないはずだ。なんだろう。

「大学の図書館で、大規模な整理をしないといけないんだ。ついでに傷んだ本の修理も」

「図書館の？」

「時期的になり手が少なくてな。12月の20日から28日までなんだが」

「クリスマスか……。」

「学校は何日までだったかな？」

「わかった。登校日以外に行く」

「そうか」

予定を入れておけば、クリスマスもスルーできる……。そういう心遣いだろうか。

「ありがとう父さん」

「本好きなお前にはピッタリだろう？」

「うん」

食事を終えると、ライも上から降りてきた。

「ご馳走様！ はあ……素晴らしい夕食だった！」

なにやらご機嫌だ。一体上に何があるんだろう。

「玲二、電話！ 忘れるところだった」

「ああ……」

そういえば、電話をつながるように言っていた。電話は力バンと一緒に置いてきた。

「じゃあ俺の部屋で」

2人で階段を上がった。ライは口笛を吹いてご機嫌だけど、とてもなくへたくソだ。鳥のくせに。

「素晴らしい夕食って？」

「ん？ それは秘密だ！ 口止めされてるからな」

それを言ったら半分泌密じゃなくなっている気がするけど……。

いつでも心を読むからなのかな？ 隠し事するのは苦手そうだ。

部屋に入り、電話を取るとメールの着信ランプがついている。それを確認する前に、ライがさっと取ってしまった。

「ちょっと待っててくれ」

カードの差込口に何かを入れている。

慣れない様子でボタンを押し、たまに首をかしげながら作業を進めていく。

……まさか、壊したりしないよな。

「よし、これでいい。ちょっとかけてみて」

電話帳には、「らい」という項目が増えていた。一見、普通の番号にみえる。

「あ、下の階から試してくれ」

「わかった」

階段を降りて、通話ボタンを押す。普通の呼び出し音はしない。が、突然ブツツと音がした。

『玲二か』

「ああ」

『よし、うまくいった。もういいぞ』

電源ボタンを押し、通話を終える。

階段を登って部屋に入ると、ライは満足そうな顔をしていた。

「よかったよかった。ちゃんとできた」

「今のつてどこにつながってた？」

「え？ 俺だよ」

「え？」

「俺に直接つながるの。すごいだろ」

確かにすごい。どういう仕組みなんだろう……。

「これはカラスが作ったんだ。お前には心に直接呼びかけることができるけど、離れてる時にはどこにいるか全然感知できないから。困ったときはこれで呼び出してくれ」

心に直接呼びかけることができない？

「それは……、できるはずだ。母さんのテレパシーなら聞いたことがある」

「何？」

「前に、できたけど」

「待ってくれ」

ライは目を閉じた。

『龍ちゃんのことと話がある』

「聞こえたよ」

「え？ ホントに？ なんて聞こえた？」

「蔵元さんのことで話があるって」

「あれ？ お前全部無効なんじゃないのか？」

「……俺には無効なのかどうかはそもそもわからないけど」

「おかしいな。前飛ばしたときは全然無反応だったのに……」

「前って、いつ？」

「今日だよ。屋上にいた時、先生が来るぞってさ」

あの時か。つい、渋い顔になってしまう。わざわざ警告してくれていたなんて……。

「聞こえた？」

「いや、それは聞いてない」

「テレーゼに確認しよう」

2人で階段を降りる。

「テレーゼ！」

ライの呼びかけに、父さんが驚いた顔をした。

「玲二、心に声が聞こえるけど」

「え？ ああ。そうね」

「無効じゃない？」

「多分だけど……。すぐそばにいる時には届くみたいよ」

「なんだ。知ってたなら早く言ってくれよ。いやでも、……沙夜のは届かなかったみたいだけどなあ」

ライは腕組して唸っている。あいつもなにか、試していたのか。そばにいて、心を許した相手だけ届くのかなのか？」

父もなにやら興味深げに聞いている。

「心の操作じゃないものなら、効くんじゃないか？　そういうこと
はないかな、ライくん」

「操作じゃないから効く……ね。なるほど。沙夜のは悪意があった
から通じなかったとか？　そういう仕組みなのかな」

はあ、と大きなため息が聞こえた。

「謎だな、玲二」

本当だ。自分でもっとわかればいいのに。

「ところでお父さんは？　なんて呼んだらいいかな」

「ライくんは、みんな名前で呼ぶのかい？」

「大体は」

「私は速音だ」

「速音ね。わかった。ちゃんはいらないんだろ、この家のみんなは」

玄関でくたくたのスニーカーを履いて、ライははっと思い出した
ような顔をした。

「そうだ。龍ちゃんの話忘れてた」

「さっき言ってた？　試しに言ってみただけじゃないのか」

「ああ。龍ちゃんのこと、怒らないで欲しいんだ」

「怒ってはいないけど」

困ってはいる。

「龍ちゃんはある写真が出回った上に、停学になったせいでそりや
あもう傷ついたんだ。周囲の見る目も変わったし、くだらない言葉
でわざと傷つけてくるやつも出てきた」

ライの顔が悲しげに歪んだ。

「そう、だろうな……」

自分にはそういう害がなかった。もしかしたら、聞こえてこない
だけなのかもしれないが……。

「それは全部、沙夜のせいだ。あいつが龍ちゃんにああするように

仕向けて、写真を撮って、周りに送った。玲二を動揺させるためだったが、1番犠牲になったのは龍ちゃんだ。俺たちはそういうことを絶対にしてはいけないんだ。自分たちの力で、誰かの人生をダメにするようなことをしてはならない」

力を持つ者の掟か……。

「だから今、龍ちゃんは俺が守っているんだ。誰かの言葉で傷つかないように、皆が忘れる頃まで」

「それで、今朝も一緒に？」

「そうだ。昨日随分玲二と仲良くなったみたいだったから」
仲良くなったって……。

「蔵元さんを守るのはいいけど、俺の知らないところで変な仲になってるのは困る」

「そうか。どうしようかな。今更なかったことにはできないし」

あの様子。ただごとではなかった。いつきとも微妙な雰囲気になっ
っていたような気がする。

「龍ちゃんにとって1番の癒しはお前と話すことだと思ったんだ。

あの時何故、お前に無理やり吸い付いたのか、後悔して苦しんでるし、嫌われたと思ってたから」

「……」

「龍ちゃんのこと、嫌いかな？」

「嫌いってことはない」

「なら良かった。じゃあ、あんまり変な風にならないよう調整してみるから」

「頼むよ。……なるべく早く頼む」

「人間の心理の操作が1番難しいんだぞ」

そんなこと言って、無責任なことをしたのは自分じゃないか。

「じゃあ俺は帰る。またきていいか？」

「いいよ。また色々、教えて欲しい」

「まかせとけ」

いつもの笑顔に戻る。人のいい鳥、か。

「ドア開けてくれ」

「? …… ああ」

ドアを開けると、ライは黄色い小鳥の姿になって空へと飛び立って行った。

「あら、可愛いわね」

母がそれを見て言った。

部屋に戻って、そういえばメールが来ていたのを思い出した。
いつきと、良太郎からだ。

純粹な2人組か。

玲二君

お父さんが言ってたアルバイト、やってみたいので詳細を教えてください。

モデルなんてやったことないけど、できるかな?

お父さんに、ほめてくれてありがとうってお伝えください!

いつき

あんなに怒っていたのに、ちゃんと思いついてくれたんだな……。
なんとなく安心する。

ほめてくれたというのは、父さんがさっきの電話で何か言ったのかな。

もう1通は、良太郎から。

今週の土曜、俺んちで打ち合わせしようってことになったから
予定空けといて〜。

あなたの良太郎より

また、しょうもないことを書いている。

今月の24日は、いつきの誕生日だ。今日、早川がやってきてサプライズの誕生パーティをしたいと持ちかけられた。ぜひ参加したいし、協力したい。

でも、その前に蔵元さんや本城をなんとかしないといけなさそう
だ。

本城には今日会ったときにやめてくれと言ったが、あんまり可愛
いからつい、なんてへらへらと笑っていた。

いつきには手を出すなと強く言いたい。でも、自分の立場を考
え、強く出られない。ついでにいうと少し恥ずかしい。

小さなため息について窓の外を見る。今日は雲に隠れて月は見え
なかった。

暗い夜の空を、ライは無事に飛んで帰れただろうか。

少しずつ、日常が、非日常に変わってきている。

またため息をひとつついて、カーテンを閉めた。

#24 「尾行」 &1t;いつき>

「これ、父さんから」

封筒を手渡される。中を見ると、モデルのアルバイトの詳細が書かれていた。

日付と、場所と……1日12000円！

思ったよりも、高い。

「……こんなにもらっていいのかな？」

「え？」

玲二くんが手元をのぞきこんできた。

顔が近い。どさくさにまぎれて、顔を間近から見つめてみた。傷はすっかりいいみいだ。よかった。

じっと見ているのに気がつかれて、慌てた様子で顔が離れた。

「本当だ。結構高い」

「いいのかな……？」

「いいんじゃないの？ プロに頼んだらもつと高いだろうし、時間も長いから」

そついわれて、改めて紙をしてみる。

本当だ。朝9時から、夜8時まで？ 長い。休憩1時間の、10

時間労働か。

でも時給1200円。かつてない数字だ。

確か、玲二くんの誕生日は2月6日。

このアルバイト代があつたら、なにかいいものをプレゼントできるかもしれない。

ここは張り切ってやるしかない！

モデルなんかやったことないけど、できるだけのことをしよう。

なにせ、お父さんのご紹介だし！

「私、やるね。お父さんに伝えてもらっていい？」

「ああ、いいよ。きつと喜ぶ」

「ホント？」

「うん」

本当なら嬉しい限りだ。昨日の怒りはどこへやら、うきうきした気分が1日が始まった。

と、思ったのに。

ホームルームが始まるというところで、百井さんがやってきた。

「おはよう、立花君」

長い間来なかったし、最近は男子に囲まれてない。なぜかすっかり地味になってたからすっかり存在を忘れてた……。

「明日、W a t e r s に集合だから」

ウォーターズ？

「集合って？」

「あなたももうメンバーに入ってるんだから。来なさいよね。5時からよ」

なんだろう。メンバーって。

私の視線に気がついて、百井さんがこちらを向いて言った。

「秘密のクラブ活動よ」

相変わらずのネコのような目で、じっと見つめられる。なんだか挑戦されてるような気分。

秘密のクラブなんて……。本当に玲二くんもそんなのに参加してるのかな？

「いいわね。ちゃんと伝えたから」

そうだけ言うのと去って違ってしまった。玲二くんは眉間にしわを寄せている。

「ウォーターズって？」

「……なんでもないよ」

気になるよー！

そこで、ホームルームが始まるチャイムが鳴った。仕方なく、更に質問したい気持ちを引っ込めた。

休み時間になると、玲二くんは立ち上がってどこかへ行ってしまった。

1人で座っていると、本城君が来ないか心配で落ち着かない。

誰かと話でもしよう。立ち上がろうとすると、廊下から友香が顔を出した。

「いつき！」

「友香。何？ 忘れ物でもしたの？」

「違うよー」

教室へ入ってきて、空いている玲二くんの席に座る。

「あのさ、23日空いてる？ 千早と則子と、4人でパーティしょ」

「パーティ？」

「そ。いつきの、16歳になる前夜祭」

そうか。誕生日だ。毎年皆の誕生日は、それぞれ用意して集まるのが恒例になりつつある。

「嬉しいな。23日は空いてるよ」

「今ね、企画中だから。楽しみにしててよね！」

友香が笑顔を浮かべる。

「何かご希望はありますか？」

「え？ 希望……ねえ」

……玲二くんと、2人きりで過ごしたいな

とは、さすが言えない。4人でパーティなのに。

「ケーキはいちこのがいいな」

「うんうん。OKOK!」

「あとはねえ、……うーん」

それ以上は出てこない。

「なにかあったら言つてよ。直前まで受け付けるから」

「うん」

遠慮なく言える仲なので、毎年色々みんなで注文を出し合う。けど、さすがに好きな人と呼んでは言いづらい。

そういえば、玲二くんは私の誕生日なんか、知ってるかな。

知らなさそうだ。

こっそり誰か伝えてくれてるかな……？

友香、誕生日だって教えといて！　っていうのは、ちょっと図々しすぎる。

お昼ごはんの直前の体育の授業は、みんな力が入らない。

普段の体育は3組・4組が一緒に、男女に分かれてやっている。でも今日は珍しく男女揃って体育館でバスケットボールをやっていた。

男子のほうを見ると、玲二くんが上手にシュートを決めている。

かっこいいな……。

「かっこいいね」

声をした方を向くと、堂々と女子の方に本城君がやってきていた。「そんな顔しないでよ。謝ろうと思ってきたんだから。立花にも怒られたし」

多分、すごくムカついた顔になっている。無意識に、口が「へ」になっているし。

「ごめんね、この間。キスしちゃって」
「ちよつと！」

周りに聞こえたら最悪だ。誤解されちゃう。
慌ててちよつと集団から離れた。

「あれでしょ、もしかして、立花ともしたことないんでしょ？ そんな感じるもんね」

「……そんなこと！」

「あれ？ ないの？ いや、あるの？」

「あるもん。そのくらい」

勝手にだけど。もしかしたら玲二くんは迷惑したかもしれないけど、一応3回はある。大体、おでこにだったらしてもらったこともある。

「そういう事平気で言ってくる人って、感じ悪い」

「ええ？ そう？ わかった。もう言わない」

笑顔だ。なんなんだ。この状況で笑顔って。

「いつきちゃんて、すぐ拗ねちゃったりしてすっげー可愛いね。デートしてくれない？ いつでもいいから」

「お断りです」

ホイッスルが鳴る。集合がかかって、本城君はじゃあと手を振って戻っていった。

玲二くんのかっこいい姿を見逃しちゃったじゃないか。

女子の列に戻ると、声がかかった。

「いつきちゃん、本城君と仲いいの？」

「よくないよ……、別に」

「本城君いいじゃん、結構カッコイイよね」

「まあ立花君よりは少し落ちるかな」

皆、好き勝手に言ってくる。

男子のほうを見ると、4組の男子がシュートの練習をしていた。ちよつとさっきの無礼者がボールを投げている。

カッコイイ？ 別に、そんなことないと思うけど。

「本城君って彼女いないの？」

「……夏休みに別れたらしいよ」

「私同じ中学だったけど、あそこの、中村さんと付き合ってたんだよね」

「え、どういうこと？ 同じ高校入ったってこと？」

「そうそう、で、同じクラスになったのにね」

みんなの噂話は続いている。

「みんなよく知ってるね」

「いつきちゃんがチエックしなさすぎなんじゃないの？」

「まあ立花君みたいなカッコイイ彼氏がいればね。必要ないか」

ねー、なんて合唱が聞こえてくる。本当は彼氏じゃないんだけど

……。

複雑な気分。

玲二くんは体育館の端の方に並んで、葉山君や綿貫君たちと話している。

やっぱり背が高くって、スラっとしてて、キレイな色の髪で、立ってるだけでカッコいい。

早くホントの彼女になりたい。

いつまで待てばいいんだろう？ 何十年もかかるとしたら、私、待てるかな……。

それどころか、散々待った挙句、ダメなんて言われたらどうしよう。

ため息が出てきた。

さっき百井さんが言ってたウォーターズってなんだろう？

玲二くんも特に、返事はしてなかったけど……。

気になる。

昼休み、隣の王子様はどこかぼんやりとしているように見えた。
物憂げな表情も、また魅力的……

だけど、朝の百井さんの言葉のせいなんじゃないかと思ってしまう。
う。

思い切って聞いていいかな。ダメかな。あんまり根掘り葉掘りきいたら、ウザいかな。

全部知りたい。でも、迷惑だと思われたらイヤだ。……嫌われたくない。

「何二人でたそがれてんの……？」

「へっ？」

葉山君があきれたような顔で立っている。

「玲二はぼんやり。園田ちゃんは玲二をみてぼんやり」

そんな状態だったのか……。はたから見たら、ちよつと間抜けだったかもしれない。

「体育のとき、本城と何話してたの？」

「え？ 何も別に……」

「話してたじゃん。玲二が気にしちゃってさ」

ぼんやりしていた玲二くんもこの言葉に反応する。

「なあ、本城がすぐちよつかい出してきた、気にいらねえよなあ」

葉山君は親友の肩に手を回して、妙に顔を近づけている。近づかれた玲二くんは、顔を赤くして黙っている。

「なんでもないよ。またデートしようとかしょうもないこと言ってきたから、断っただけ」

「そ？ なら安心だ。なあ玲二」

「……」

返事はないけど、顔を真っ赤にしてるあたり、凶星なのかもしれない。

気にしてくれたんだ。

良かった。

でも結局、たいした会話もないまま一緒に帰った。ウォーターズがなんなのか、聞けなかった。

心がモヤモヤする。やっぱりメールを送ってみようか。でも……、なんでもないって言われちゃったし。あんまり追求するのもな。

その日はあまりよく眠れなかった。変な夢を何回も見た気がする。起きたばかりなのに、妙に疲れている。

朝、いつも通りの時間に、玲二くんは駅で待っている。いつも通り一緒にいるのに、スッキリしない。

やっぱり聞こうか。それとも、聞かないほうがいいかな。ぐずぐずと悩んでいるうちに、放課後になってしまった。

玲二くんは普段通り、帰る準備をしている。

……行かないのかな。

百井さんもあれから1度も話しかけてこない。

「どうかした？」

「え？」

「いや、なんかぼんやりしてるから」

玲二くんはもう帰り支度を済ませている。じゃあ、今日はまっすぐ帰るのかな？

「もう帰るの？」

「帰るよ。園田、何か用事があつた？」

「ううん！　ない、ない」

慌てて教科書をカバンに入れた。心配することないじゃん。なんでもないって言ってたし。

蔵元先輩も、来平先輩だって来ない。本城のやつも今日は来ない。

絶好調じゃん。何の邪魔もない。

「今日も一緒にお帰りですか」

葉山君が笑顔で一声かけて、去っていく。これもいつもの光景。一緒に電車に揺られる。

駅に着くと、玲二くんは笑顔で帰っていった。

私も家に帰って、まずは着替えた。

でも、なんとなく気持ちが悪く落ち着かない。

「ちょっと出かけてくるね」

お母さんに一言声をかけて、すぐに家を出る。走って駅に向かった。

改札が見える物陰で、じっと待つ。

やっぱり……

玲二くんの姿が現れた。久々に見た私服姿。シンプルなグレーのシャツに、黒いジャケットを着てる。

切符を買って、改札に入っていく。

気付かれないようにそっと後に続こうとして、ちょっと考える。どこまで買えばいいのかな……？

とりあえず、定期でいいや。後で精算しよう。そっと同じ電車に

乗る。学校のある方向だ。

隣の車両から、見失わないようにそつと様子を伺う。
座って、じつと本なんか読んでいる。……ただ単に図書館とかに
行くんだったらどうしようかな。

シヨッピングモールのある、月浜駅で玲二くんは降りた。

ここ？

それより、精算してるうちに見失いそうだ。慌ててお金を放り込
んで、玲二くんの姿を探す。

改札から出て左右を見回すと、東口出口の方に薄茶色の頭を見つ
けた。柱の影に隠れて様子を伺うと、誰かと合流しているのが見え
た。

…… 来平先輩

先輩と会うだけ？ それとも、彼も秘密のクラブとやらの仲間な
のかな……。

2人は何か軽く会話を交わして、駅の外へと去っていく。ゆっく
りと後を追う。

人が多い。

ぶつからないように避けながら、最後は慌てて外へと移動した。
駅を出ても、人の多さは変わらない。シヨッピングモールだけで
はなく、映画館もレストラン街もある。通路と人の流れが複雑に入
り組んで、一瞬で2人の行方はわからなくなってしまった。

尾行は失敗か。

諦められず、高い位置から2人の姿がないか探した。

玲二くんならどこにいても見つけられる自信があったのに、結局
見つけることはできなかった。

……ガツカリだな。

駅のすぐ横の通路の真ん中でガツクリしていると、肩をぽんと叩かれた。

「ねえねえ、1人？」

顔をあげると、赤茶色い頭のお兄さんがニコニコしている。

「可愛いねー！一緒にカラオケ行かない？」

「……行きません」

「いいじゃんいいじゃん！なにかイヤなことあったの？ぱーつと騒いで忘れようよ」

人が多いとこんなことがよく起きる。慌てて早足で駅の方に向かった。

「ちよつと待つて」

追いかけてくるタイプが1番困る。どうしよう。帰るには切符買わないと……。

改札横の券売機まで来ても、男は着いてきた。女子トイレとかに入ればよかったかな？

「ねえ、一緒に行こうよ。カラオケ嫌い？じゃあさ、他のことでもいいよ」

「行かないってば！」

「なんだよ……。そんな大きい声出すことないだろ？」

最悪だ。怒り出した。どうしよう。

おまわりさんとかいなかったつけ。駅員さんは……？

「来いよ！」

手をつかまれる。イヤだ。怖い！

「やめろ！」

男の手をパン！と誰かが払った。

「いつきちゃん、お待たせ」

振り返って、顔を見る。

色んな感情が、ごちゃ混ぜになった。

「本城君」

「俺の彼女に何すんだよ、お前……」

「……」

男はちよつと悩んだみたいだったけど、結局すぐに舌打ちをして去って行った。

安心して、力が抜ける。

「大丈夫？　いつきちゃん」

「うん。……ありがとう」

「こつち。歩ける？」

改札のそばのベンチに引つ張っていかれる。確かに、ちよつと体に力が入らない。

ベンチは人で埋まっていた。

「すいません、ちよつとこの子気分が悪いんで、座らせてもらっていいですか？」

本城君は鏡で自分の姿を夢中でチェックしているお姉さんにそう声をかけた。慌てて、お姉さんと他の何人かが立ち上がる。

「いつきちゃん、座つて。ちよつと落ち着くといいよ」

言われるままに、腰を下ろした。ちよつと、ほつとする。

いつも困らされている相手だけど、ちゃんとお礼を言わないと。

「ありがとう、本城君。助かった……」

「よかったよー！　ちよつと通りかかってさ」

本城君は制服姿だ。学校のカバンのほかに、可愛いサイズの紙袋をさげている。買い物してたのかな。

「俺んちここの近くなの。いつきちゃんは、買い物？」

「……ううん、ちよつと」

玲二くんを尾行してた、とは言えない。慌てて言い直した。

「買い物、しようと思ったんだけど」

「この時間は人が多いから、ナンパも多いよ」

「そう」

はあっと息をついた。ああいう風に怒ったりする人だと、本当に困る。

本城君が来なかったらどうなってただろう？ 想像すると、寒気がした。

「今日は可愛い格好してんだね。それじゃあ声もかけられるって」
そう言ってから、はっとしたように本城君は続けた。

「もしかしてこの間ダサイ格好してたのって、わざとだった？？」
そういえば前会った時も服装のことを言われたっけ……。ちよつとムカつとしたけど、好意的にとらえてくれる気もする。大体助けてもらったんだから、文句を言うのは筋違いだ。

「いや、でも嬉しいな。こんなところで会えるなんて。運命的じゃない？」

……この近くに住んでるって、さっき言ってた。
ためしに聞いてみるくらい、いいよね。

「ねえ本城君、ウォーターズって知ってる？」

「え？ そんなブランドあったかな？」

「ブランドじゃなくて、どこか人が集まるようなところっていうか

……」

「お店かなんか？」

本城君はうーんと考えて、また、はっとしたような顔になった。

「そういえばそんな名前の喫茶店があったような」

喫茶店か……。秘密のクラブの喫茶店？

「この近くにあるの？」

「ちよつと歩いたらあったと思うよ。入ったことないからどんな店かは知らないけど」

「他には、心あたりない？」

「うーん、別にないけどな」

どうしよう。行ってみようか。他に、てがかりはない。もしかしたら違うかもしれないけど……。

「その喫茶店まで、案内してもらえないかな……」

そういうと、ものすごく嬉しそうな顔が目の前に現れた。

「いいよいいよ！ 勿論、ご案内させていただきます！」

手が差し出される。

「立てる？」

「立てるよ」

手は無視して、立ち上がった。

「あれ、手はつながないの？」

「つながないよ！ つなぐわけないじゃん！」

とんだお調子者だ。助けに入ってくれたのは、ちょっと嬉しかったけど。

駅の東口から出て、5分ほど歩いたところで目的の喫茶店を見つけた。

「W a t e r s」とかかれた看板が置いてある。外観はちょっと古めかしい。

「ここだけど、……今日はやってないみたいだね」

ドアには「定休日」の札が下がっている。中は暗いし、何の物音もしない。

なんとなくコーヒーの香りはするけど、誰もいなさそうだった。

ここじゃないのかな？

「この店を探してたの？」

「ううん……、わかんない」

「？」

「ありがとう本城君。もう……帰る」

「そう？　じゃあ、行こうか」

こんな訳のわからない展開に、何も言わない。結構気が利く人なのかもしれないなんて、ちょっと思った。

「そうだ。ちょっと付き合ってよ」

駅への階段を登りながら、本城君が笑顔を浮かべる。

「え？」

「いいでしょ。ちょっとくらい」

「……うん」

助けてもらったし、案内もしてもらった。さすがにここでバツサリ断るのは気がひける。

駅の通路を抜けると、フードコートのような場所に出た。その入り口近くにジューズスタンドがある。

「コウ！」

「お、モトキじゃん。ひさし……何その子？　超可愛いんだけど……。新しい彼女？」

「違う違う。ぜひなってほしいんだけどね」

店員とそんな会話をして、笑顔が振り返ってきた。

「中学の時の同級生なの。ここのジューズ美味しいからさ」
また振り返って今のオススメを2つ、なんて頼んでいる。

「友情価格で頼むわ」

「しょーがねえなあ……。じゃあ500円でいいよ」

コウと呼ばれた店員はそういつて、少し紫がすけて見えるカップを2つ出してきた。

「サンキュー」

1つを差し出して、渡してくる。

「秋のおすめはぶどうだって。ここ、下にある果物屋さんのやつ
てる店だから。美味しいよ」

「……ありがとう」

少し歩くと、自由に飲食できるスペースがある。

そこに2人で座って、ジュースを飲んだ。すごく美味しい……けど。

何やってんだろう。

玲二くんを尾行しようとして失敗して、本城君に助けられて一緒にジュースなんか飲んでる。

しかもさっきメニューを見たら、1杯400円もした。高級フレッシュジュースだ。

こっそり値引きしてもらってみたいけど……、この場合いくら払ったらいいんだろう？

お財布を取り出すと、本城君の手が伸びてきた。

「いいよ。俺のおごり」

「でも」

「いいよ、だって友情価格にもらったし。大体いつきちゃんとかうやって向かい合って座れるなんて1万円払ってもいいくらい」

「なんだそりや……。お店じゃないんだぞ！　と思っただけど、まあ、

……そういう意味じゃないんだろう。

「帰り、よかつたら送っていくよ」

「ええ？　いいよ。それは、大丈夫」

「遠慮しないでいいよ。またヘンな奴が絡んできたら大変でしょ？」

「……お兄ちゃんにきてもらうからいい」

「へえ。お兄さんがいるの？」

「うん」

4人もね。

「こんな可愛い妹が呼んだら、喜んで来てくれるんだらうな」

「そうでもないよ」

「はは。俺も妹いるけど、可愛くないもんなー！　お兄さんたちがうらやましいよ」

妹がいるのか。可愛くないなんて、きつと本音じゃないな。優し

そうだもん。

結局改札まで送ってもらって、本城君と別れた。

「お礼にキスさせて」

「それはダメ！」

「やつぱり？ 大丈夫、言っただけ……。あれ、言うのもダメなんだっけ？ 以後気をつけます」

笑顔のまんまそんな軽薄なことを言ってきた。とりあえず反省の色はない。

「でも、今日は本当に助かったから。……。ありがとう」

「うん。今日は助けられて本当によかった」

「……」

「もし1人で来るなら、俺を呼んでよ。害虫よけくらいにはなるよ？」

1人でまた来ることなんかあるかな……。

「メールアドレス、教えて。よかったら電話番号と住所も」

また調子に乗ってる。プイッと顔をそむけると、笑い声がした。

「ごめんごめん。でもアドレスくらいは教えて。今度でいいからさ。そういうと、じゃあねと手を振って去っていった。

しつこすぎない、ちょうどいいタイミングだ……。なんか、女の子の扱いに慣れているように思える。玲二くんとは正反対、だな。

電車はちょうど帰宅ラッシュの時間帯で混んでいる。ぎゅうぎゅうになりながら、家へと帰った。

途中でメールの着信音がした。お母さんかな。何も言わずにでかけちゃったし、心配してるかも。

ご飯の準備のお手伝いも出来なかったし……。やつぱり尾行しようなんて考えたのが悪かった。

ホントに何やってんだろ、私。

来平先輩となにか、用があつたのかな。
そういえば大きい図書館があるって言ってたっけ。
もしかしたら、世界の色々な生き物について2人で熱く語り合
てるのかもしれない。

家に帰ると、お父さんに軽く説教をされた。
自業自得だ。元氣のないままご飯を食べて、最愛の人を疑ったり
したことをじっくり反省して、その日は眠った。

メールの着信音で目を覚ます。
いつもの朝の占いメールだ。目をこすって画面を確認すると、新
着メールが2件と表示されている。
そういえば、帰りの電車で音がしたっけ。お母さんからだと思っ
て見てなかった。

ん？

名前がない。件名は……Date？
写真がついている。なんだろう。詐欺とかそういうやつかな……。
削除しようか……。悩む。でも、なんとなく気になって、写真を
確認した。

「……！？」

私と本城君と一緒にジュースを飲んでいる写真だ。

……なんで？ 誰が撮ったんだろう？ しかもこんなの送りつけ
てくるなんて……。いつ撮られたんだろう？
すぐ横から撮ったみたいなのに。気がつかないなんてありえる？
心臓の音がドンドンといつもより大きく、早くなっているのを感じ
た。

こういつのつて、誰が送ってきたかって調べてわかるんだっけ……？

前、将二兄ちゃんがヘンなメールがどうのこうのつて言ってた。どこから来たかつきとめてやったぜとかなんとか。兄ちゃんに頼んだら、わかるかな……。でも、イヤだな。この写真も見られちゃう？

でもわからないのはもっと気持ち悪い。

電話を握り締めたまま、階段を降りた。

リビングをのぞくと、もちろん誰もいない。台所にお母さんがいるだけだ。

どうしよう。起こそうか。でも年頃の男子の部屋に入ったら怒るかな。大体、兄ちゃんの部屋なんて、何年も入ったことない。お母さんに頼もうか……。将兄ちゃんはギリギリまで寝るタイプだから、起きるのを待ってたら時間がなくなっちゃう。

「お母さん……」

「おはよういき。どうしたの？」

「将兄ちゃんに頼みたいことがあるんだけど……」

「将二に？」

意外そうな顔だ。確かに、将兄ちゃんは兄弟の中で1番相性の悪い相手で、せいぜい使いつ通りにされるくらいの仲。

「……わかった。ちよつと起こしてくるわね」

理由も聞かずに、お母さんはトントんと階段を登っていった。兄たちはそれぞれ2人部屋・3人部屋だ。1人で部屋を使ってるのは私だけ。

少しすると、不機嫌そうな顔の将兄ちゃんが降りてきた。

「何？」

「……ごめんね、将兄ちゃん。ヘンなメールが来て」

「ヘンなメール？」

「送ってきた人、わかるかな」

電話を差し出すと、一瞬戸惑った顔をした。

「見ていいのか？」

意外とデリカシーがあるじゃないか。ちょっと見直した。

「差出人の名前とか、全然ないの」

ポチポチとボタンを押して、じっと画面を見ている。そして、私の方をちらつと見て呟いた。

「なるほどね」

そう言つて更に、またボタンを操作している。

「んー？」

「何？」

「……なんだこれ。全然わかんねえな。こんなの初めて見た」

「どういうこと？」

なにがなんだかわからない、アルファベットが並んでいる画面を見せられる。

「差出人の情報が全然ない」

その前に、何がかいてあるのかが全然わからない。

「これ、普通に送られてきたの？」

「うん」

「ふーん……。すげえな、これ。怪現象だな」

怪現象つて……。

「俺みたいな素人じゃわかんねえよ。携帯会社に問い合わせとかしないと無理じゃねえ？」

「ホント？」

返事はせず、電話機が返却された。

「ほんと」

「そっか……。兄ちゃんゴメンね、わざわざ起こしちゃって」

「……いいよ。この程度で謝らなくても」

なんだか照れてるような感じだ。

「ありがと」

結局メールの正体はわからない。なんだろう。わざわざ写真撮って、送ってきて……。

あれ？

どこかで聞いたような話だ。

そうだ。玲二さんと蔵元先輩の写真。あれを送ったのは、百井さんだったはずだ。

どうやってアドレス調べたのかわからない……って誰かが言っていた。

今日学校に行ったら、確認しないと。でも、誰に聞こう。
玲二くんにはちよつと聞けない。じゃあ……葉山君かな、やっばり。

気が重い。

電話を開くと、未読のメールがもう1通あった。そういえば、占いはまだ見てない。

開くと、今日のいて座は絶好調！ と書かれている。
ホントかな。そんなことなさそうだけど……。

憂鬱な気分のまま朝食を食べて、制服に着替えた。カバンを持って玄関へ行く。

「いってきます……」

大きな声が出ない。靴を履いたところで、将兄ちゃんがやってきた。

「いつき」

「……なに？」

「これ、やるよ」

なにかが差し出されてきた。細長い紙。チケットかな？

「何これ？」

「釣り雑誌の懸賞で当たったんだ。お前にやるよ」

豪華客船で行く　大瀬湾1周クルージングご招待券　ビュッフェ
ランチ付

チケットは2枚あった。裏に開催日がズラッと書かれている。有効期限は今年いっぱい。

「いいの？」

「いいよ。俺は釣竿が欲しかったのに。そういうのはいらないからぶいっと顔をそらして、奥へと戻って行ってしまった。

クルーズだって。豪華客船だって……！

「将兄ちゃん！　ありがとー！！」

玲二くんが行っていいかな。この間の中止になったデートの代わりに、誘ってみよう。

ちよっと元気が出てきた。我ながら単純だ。

今日も玲二くんが待ってるはず。

早く、会いたい。

#25 「タイフーン」 & 1 t・玲二 & g t ;

「おはよう、玲二くん！」

いつも元気だけど、今日は特に「ご機嫌なようだ。」

「おはよう……」

可愛い笑顔がこつちを見ている。それだけなのになんだか、ちょっと照れてしまう。

「行こうか」

「うん！」

何かいいことがあったのかな？ 一緒に改札をくぐって、電車に乗った。

だけど気になることがある。ご機嫌なところに水を差しそうで聞いているか迷うが、やはり確認したい。

「昨日日本城と一緒にだった？」

「へ？」

さっきまでのご機嫌はどこへやら、一瞬でフリーズしてしまった。戸惑った顔が、答える。

「……もしかして、玲二くんのところにもメールが来たの？」

メール？

「本城君との写真だったら、来た」

そういつて、電話を取り出した。画面には、2人でジュースを飲む写真が映っている。

俺が見たものとは別の写真だ。本人にも送りつけていたとなんて……悪趣味だ。

しかし、百井が嫌がらせで捏造したとか、そういうことではなかったということだ。

昨日はW a t e r sでの会合に出席した。

毎月1度、必ず集まるらしい。ライに来たほうがいいといわれて、仕方なく出席した。

どういうやつがいるのかくらい、確認した方がいい。それがライの意見だった。本当はもつと頻繁に会合はあるらしいが、この月に1回のはみな必ず出る。これに行かないとなると、反発が大きくなるから、と説得された。

前は無理やり拉致される形で行ったので、場所がわからなかった。なので、駅で待ち合わせをした。いつきを心配させなくなかったので、1度家には帰ったが……。

俺が見せられた写真は、駅前をいつきと本城が2人で歩いているものだ。

百井はニヤニヤしながら、さつき撮ったものよ、なんて言っていた。

家に帰った後、本城と会いに出かけたのか。昨日からずっと気になって、よく寝られなかった。

「……ごめんなさい。私、昨日、玲二くんがどこ行くんだろうと思っ
て、後つけてったの」

「え？」

「1回家に帰ったんだけど、駅で待って……」

そんなことをするなんて。百井のあの一言を、そんなに気にしていたのか。

「でも、改札出たところですぐ見失っちゃって……。で、男の人に
しつこく声かけられて困ってたところに本城君がちょうど通りかか
って助けてくれたの。ちょうど買い物してたらしくて」

「そう」

たまたま会っただけだったのか。ほっとした。それに、変な男に

絡まれてどうにかならなかったのもよかった。本城に礼を言わなくてはいけない。

「玲二くん、ごめんね。勝手につけたりしたのがいけなかったんだと思う。来平先輩と待ち合わせてたんでしょ？ 図書館でも行ったの？」

「ああ……、来平さんと一緒だったよ」

「百井さんと一緒だったらやだなって思っちゃって……。玲二くんのももつと信じたらよかった」

「しょぼんとしてしまった。実際には百井も一緒にはいたが、心配するようなことはまずない。」

昨日の会合も、全員の所在確認のようなものだった。各自気になることがあったら報告するとか、そういう流れですぐに終わった。全員の名前と姿を覚えることはできなかったが、全部で何人くらいいるかは把握できた。

「いや、俺も……ちゃんと言えばよかったよ」

「この後ライと会うといえ、いっきも心配しなかったかもしれない。」

「玲二くん、私が本城君と会ってたって思って、心配した？」

「え？ ……いや」

「もしかして、やきもち焼いてくれたの？ ……嬉しいな」

「いっきは笑っている。」

言葉が出てこない。結局黙ったまま照れた顔で、電車で揺られた。

木曜日の放課後は園芸委員の活動がある。

ジャージに着替えていると、更衣室に本城がやってきた。

「立花！」

いつもの笑顔だ。

「昨日、いつきちゃんとプチデートさせてもらったよ。……聞いた？」

「ああ」

「聞いたのか。2人の秘密！ に、したかったのにな」
笑顔から、やれやれといった表情になった。

「何でも話しちゃうんだな。信頼しあってる証拠ってやつ？」

そんなことを言われても、困るばかりだ。

「ホントにキスしたことあるの？」

「は？」

いきなりのおかしな質問に、思わず声が出してしまった。

「聞いたんだよね。ほっぺにチュってしただけで随分怒ったからさ

……。2人はまだ、手を握ったくらいしかないのになって思って」

「そんなの……。面と向かって聞くのは悪趣味だと思う」

「いつきちゃんもそんなこと言ってた」

あははと本城が笑い出す。

「でも、ちゃんとあるもん！ って言ってたよ」

まあ、確かに……。あるはあるけれども。

「そんなに照れるなよ！。立花って可愛いやつだな！」

黙ってロッカーをバンと閉めて、先に部屋を出た。

「待てよ！ 一緒に行こうぜ！」

声は聞こえたが、無視して裏庭に向かった。

下駄箱でいつきと合流して裏庭に行くと、ジャージ姿の女子が立っていた。

「あ」

いつきの口から小さな声が漏れる。

見覚えがある子だ。そうだ、本城といちゃついていた……。4組の女子だ。

名前はわからない。いつきの方を見ると、こちらも困った顔をしている。

2人で黙々と作業していた頃が懐かしく感じられた。

「今日はもう、雑草も元気ないね」

気を取り直したようにいつきが呟く。花壇は、もしかしたらもう委員の活動は必要ないかもしれないくらいの様子だ。

担当の教師である、吉田は顔をなかなか出さない。そろそろどうするか聞きに行ったほうがいいのかもしれなかった。

「先生に聞きに行こうか？ このお花ももう、咲かないよね
いつきも同じ意見なようだ。」

「そうだな」

そこに、遅れて本城がやって来た。

「いつきちゃー……あれ、ユイ！」

「モトキ……」

どうやら本城の下の名前はモトキだったらしい。

「園田、行こうか」

そつとその場を離れようとすると、ユイと呼ばれた女子がそれを止めた。

「ちょっと待って」

いつきの手を掴んでいる。

「おい、ユイ……」

「二股かけてんの？ この人とモトキと」

「そんなことしてないよ」

慌てていつきが否定する。

「昨日デートしてたんでしょ？ コウから聞いたんだからね！」

「コウ？ 誰だ？」

「違うよユイ、たまたま会っただけだし、一緒にジュース飲んだだけだし」

「モトキは黙ってて。この人に聞いてるんだから」

「二股なんてかけてないよ！ 私が好きなのはこっちの……玲二くんだけだから！」

大声でいつきが否定する。恥ずかしいことこの上なかった。

「何で昨日一緒にいたの？」

「たまたま会ったの。それだけだから」

「やめろって」

本城が腕を掴んで、ユイを押さえた。

「文句があるなら俺に言えよ」

「だって……！」

2人がもめはじめたところに、少しのんびりした声がした。

「お、今日は4人もいるのかー！ 感心感心」

園芸委員担当の、吉田だ。理科の教師で、いつも白衣を着ている。「じゃあやるか。今日はね、もう枯れてるやつ全部抜いてもらうよ。それで2学期の作業は終わりにしよう」

ユイは気がそがれたのか、あげていた腕を下ろした。

吉田はのんびりした笑顔で、スコップを1つずつ渡してくる。

仕方なく4人で並んで、花壇の手入れを始めた。しかし吉田が去ると、また文句が聞こえ始める。

「モトキが言ってた、新しく出来た好きな子ってこの子なんでしょ？」

「お前にはもう関係ないだろ？」

「関係ある！」

いつきがそつと、2人から離れて俺の影に隠れる。

「どうしよう？ どうしたらいいのかな」

「……本城にまかせるしかないだろ」

今日のことは完全にとぼちりだ。いつきは本当に、二股なんかかけていない。そういうことができないタイプだと信じている。

しかし頼みの本城にも手に負えないようで、更なるとぼちりがいつきの元にやって来た。

「あんたのせいでモトキと別れることになったんだからね！ 1年付き合ってきたのに！ せっかく同じ高校に入って同じクラスになったのに！」

「やめろって……！」

「ひどいよモトキ！ まだ好きなのにー！！！」

とうとう泣き出す。可哀想だが、どうにもできない。

「園田、先に帰れよ。いないほうがいい」

「でも」

「いいって。多分もつと荒れる」

「わかった」

いつきが立ち上がったので、スコップを受け取る。

「ちよつと、どこ行くの！」

鬼のような形相でユイが叫んだ。それを慌てて本城が押さえる。

「あんたのせいだからねー！！！」

「やめろって……。悪かったよユイ。俺が悪かった」

「じゃあまた付き合ってくれる？」

「それはちよつと無理」

その言葉でまた暴れる。もう委員会活動どころではない。

「ごめん立花、あとは頼む」

本城がユイを連れて、裏庭の奥のほうへと移動していく。

仕方なく、1人で作業を続けた。奥のほうからは取り乱した声が散々聞こえてくる。

「玲二」

スコップで根っこを掘り返していると、声がした。振り返ると最近すっかりおなじみの顔が立っていた。

「ライ」

「大丈夫か？ あいつ、自分でなんとかできる？」

「何のこと？」

ライは横にしゃがんだ。心の中に直接、声が聞こえてくる。

『あの子は沙夜に力を使われてる……』

思わず顔を見ると、ライは静かに頷いた。

『昨日園田ちゃんが後をつけて来たのに気がついて、面白がつてやつてるんだ』

「なんでそんなこと……」

というか、ライも気がついていたのか。まったく、教えてくれた

らしいのに。

『あいつはこんな風に、人間同士がもめてるのを見るのが好きなんだ』

見たいから？ ただそれだけのために？

まるで理解できない。

『さつき注意してきたから、これ以上はもう多分しない。あいつはどうだ？ 収められるか、あの子を』

どうだろう？ 本城ならやれそうな気もするが……。

「できなかつたら？」

『ちよつと介入するけど……できたらやりたくない』

「もうちよつと様子を見よう」

そういうと、ライは頷いた。ついでに、スコップを持って手伝いを始めてくれた。

作業が終わる頃、本城が1人で戻ってきた。

「はあ……。あれ、誰？」

「2年の来平先輩」

「ああ。そうですか。こんにちは……」

本城は疲れた様子だ。

「参った参った。ちゃんと別れたつもりだったのになあ。なんで今更怒っちゃってんだろ」

「大丈夫か？」

「ま、大丈夫だろ。諦めて帰ったよ」

いつきと更衣室で鉢合わせするようになったことはないだろう。……ちゃんと帰っていれば。

「ごめんな、なんか変なことになっちゃって。いつきちゃん帰った？」

「帰ったと思う」

「モテる男って大変だよな」

そう言ってニヤリと笑った。そういうことを言えるくらいなら、

まあ大丈夫だろう。

「もう作業は終わった？」

「終わったよ」

「じゃあ帰るか……。やれやれ」

本城は伸びをしている。ライも立ち上がって、スコープを渡してきた。

『安心したよ』

そういうと、去っていく。用具置き場にスコープを置いて、自分も校舎へと戻った。

着替えをしようとする、電話の着信ランプが光っている。確認すると、いつきからだった。

駅前のコーヒーショップで待ってるね

「立花、一緒に帰ろうぜ」

その声に慌てて電話をしまつ。本城がジャージの下を半分脱いだ状態で近づいてきた。

「いいだろ？」

「……いいよ」

駅まで一緒に歩くくらいは構わない。が、それより早く今のだらしな性格好をやめてもらいたい。

「あの子はいいのか？」

「何言ってるんだよ。一緒に帰るとか無理無理」

本城は手を横にブンブンと大きく振って否定した。

「別れたの、夏休みに入ってすぐだぜ？ 何ヶ月経ってるんだって話だよ」

「そうか」

返事をしながら、さっさと着替えを済ませる。本城はけだるいのか、着替えるスピードが遅い。

「立花といつきちゃんっていつから付き合ってたの？」

「え？」

「やっぱり夏から？ たまに園芸委員2人でマジメにやってるの見たけど、全然そんな感じなかったのに」

「……2学期に入ってから」

「そっか。もうちょっと早く告白すべきだったなー」
はあーっと大きなため息が聞こえた。

駅までの途中も、散々質問をぶつけられた。

「どっちから告白したの？ 立花から？」

「え？ ……いや」

「いつきちゃんから？」

「……まあ、そう」

「そりや即OKだよな。あんな可愛い子、そうそういないだろ……」

へーとかふーんとか色々言いながら、本城は勝手に納得している。

「立花、お前って男前だよな……。私服はどんなの着てんの？」

あまりのおしゃべりぶりに頭がクラクラする。ようやく駅に着いて、開放されることに安心した。

「俺、ちよつと、寄るところあるから」

「え？ どこ行くの？」

「もういいだろ……。お前のしゃべりに付き合つとちよつと疲れる」

「あれ、そうか。じゃあしょうがないな。今日はホント、迷惑かけたよ。ごめんな」

しつこくないのは、本城のいいところだな。

またなー、と手を振って、おしゃべり男は改札のほうへ消えていった。

行ったのを確認してから、いつきの待っているコーヒーストップに入った。

2階席をのぞくと、少し疲れた可愛い顔が見えた。

「玲二くん！」

気がついて、笑顔で手を振ってくる。

「もう帰る？」

「いや……、俺も注文してくる」

ここで一息つくのも悪くはない。1階に戻って、紅茶を頼んだ。

「大丈夫だった？ 中村さん」

「中村さん？」

「あの、本城君の元彼女の人」

あのユイと呼ばれていた子か。

「大丈夫って言ってたけど」

大体、彼女は悪くない。百井が悪趣味な悪戯をしたせいなんだから。本城もいいとぼっちりだ。元はといえば自分のせいでみんなが嫌な思いをしてしまった。

「怒られちゃった」

「園田は悪くないだろ」

「あんな風に言われたの初めてだし、ほんとビックリしちゃった」
すごい迫力だったし、驚くのも仕方ない。まるで安っぽいメロドラマのようだった。

「まあ、本城がちゃんとなんとかしてくれるだろ」

「うん」

いつきにちよっかいを出してくるのは困るが、なぜか自分にもフレンドリーな本城を悪くは思えない。

「あのさ、玲二くん。船乗るのって、平気？」

「船？」

唐突な話題に少し戸惑う。

「船ね……。乗ったことないな」

「そうなんだ。あのね、これ、もらったの」

いつきがカバンから何かを取り出す。クルージングのチケットだ。一体、こんなものどうしたんだろう。

「一緒に行こうよ。この間、玲二くんがケガして行けなかったデー
トの代わり」

「ああ」

「そうだ。忘れるところだった。」

「でも、これじゃあ弁当作ってもらえないな」

「あ。ホントだ。それはそれで、別に……」
「いつきがちよつと慌てる。」

「別にいこ。ね？」

小首をかしげる。この仕草に、正直弱い。

「うん」

また赤くなつてないだろうか。このすぐ照れるのを、なんとかし
たい。

「いつならいいかな。来週は？」

「……来週は、ダメだ」

しばらく、いつきの誕生日パーティーのために色々用意がある。土
日は良太郎や早川に予定を押さえられていた。

「月末でいい？」

「今月の？ いいよ」

「あ、いや……すぐ試験か。試験の後の方がいいかな」

「そっか。じゃあ、そうしようよ。嬉しい。楽しみだな」

「いつきはにこにこしている。すごく、可愛い。」

「来月の方が、きっとクリスマス仕様になつてて素敵だよ」

クリスマスか。最近では11月に入ると、早々と町がクリスマス
化していく。世間はすごく、気が早い。

「クリスマスも一緒にパーティできたらいいな」

「いつきが何気ない感じで言つて、それに何気なく返事をする。」

「俺、12月末はずっとバイトなんだ」

「へっ？」

ビックリした顔でいつきが固まった。

「そうなの……？」

次は悲しげな顔になる。

「バイトって……、何の？」

明らかにガツカリした声で質問された。

「父さんの大学の図書室の、整理」

「図書室の……」

しょんぼりとしてうつむき、いつきが呟くように言った。

「図書室じゃしょうがないか」

しょうがないかと来たか。しかし、こんなにガツカリさせてしまうとは思わなかった。

図書室に敗北したと思っっているいつきは、最後の悪あがきをしてきた。

「大学の図書室なら、玲二くんだって行きたいよね。いつからなの？」

「20日から28日まで」

「そつか。……じゃあせめて、一緒に初詣行こうよ」

「初詣か」

行ったことがない。そんな習慣もなければ、人ごみも好きではない。

「いい？」

また、首をかしげて見つめてくる。やめてもらえないだろうか、この可愛い角度を。

「わかった。行こう」

「良かった……」

安心したような笑顔。それを見て、俺もちょっと安心する。

結局近づいていってる。どうしようもない引力が働いている。

近づけば近づくほど、好きになっていく。やめようと思っているのに、やめられない。

放課後の教室に、いつきと2人きりになった。
大きな瞳を見つめると、微笑みが返ってきた。

「いつき」

声をかけると、少し頬を赤くして目の前に歩いてきた。
我慢できなくて、そのまま抱き寄せて唇を重ねた。
顔を離すと、いつきは恥ずかしそうに目を伏せている。

まつげが長い。

少し下から、顔をまた近づける。

再び唇が重なった。

柔らかい髪が額に当たる。

また少し離れて、正直に白状した。

「好きだ」

いつきはにっこりと笑う。世界で、1番可愛い笑顔。

「玲二くん……」

やっぱり、いつきは運命の相手だ。

どうしようもない。もう止められない。俺のものだ。誰にも、渡さない。

何度も何度もキスをして、柔らかくて優しい体を強く抱きしめた。

目を開けると、自分の部屋の天井が目に入った。

……夢か。

そうだろうな。何の邪魔も入らないんだから。

いつも起きる時間よりも10分ほど早い。だいぶ寒くなってきた。
シャワーでも浴びよう。上着を1枚はおって、階段を降りた。

金曜日は、クッキングクラブの活動日だ。今日も待ってほしいと頼まれ、持ってきた本を開いた。

そつえば結局、あの月浜にある大きな図書館には行けていない。今度こそ行こう。

そんなことを考えながらしおりの挟んであるところを開くと、横から声がかかった。

「あの……玲二、さん」

聞きなれない声と呼び方に顔を向けると、昨日散々怒っていた顔が見えた。

「中村さんだっけ」

「そつ。中村 結。……昨日のあの子は？」

「部活だよ」

中村はそつか、と小さく呟いて、いつきの席に座った。

「玲二さん」

「苗字は立花」

「立花さんね」

何故さん付けなんだろう。しかし、昨日と違って随分大人しい。ちよつと気の強そうな目をしているが、ショートカットの似合う可愛い子だった。

「昨日はごめんなさい。なんか……取り乱しまして」

「別にいいよ。驚いたけど」

もうあんなに人前で暴れないなら、別にどうも思わない。大抵の人間はそのくらいにしか思わないだろう。

大体彼女の本意じゃなかったはずだ。心の中で、ちよつと謝っておく。

「モトキ、ここに入ってからすぐに好きな子ができたとか言い出して……。1学期の中間試験終わってすぐに、別れようって言われたの。ずつと仲良くやってきたのにさ」

勝手に話して、勝手にグズグズし出してしまった。

クラスメイトたちは驚いた顔でこちらの様子を見ている。

「イヤだつて言ったのに、結局夏休み入ってすぐに別れることになっちゃって。もう悲しくってさあ。最近だいぶ落ち着いてきたんだけど、でも同じクラスじゃん。だからどうしても吹っ切れなくて」

「そう……」

他にコメントのしようがない。一体なんで俺にこんなことを話してくるんだろう。

ただ単に、愚痴を聞いて欲しいのだろうか。だとしたら人選に誤りがある。

「あの子って、立花さんと付き合ってるの？」

「……うん、まあ。その、さん付けで呼ぶのやめてくれないかな」

「そっか。同級生なんだもんね。なんか大人っぽいから緊張しちゃって」

中村は頭をポリポリとかいた。よく見ると、短いスカートなのに足を大きく開いて座っている。これもなんとかしてもらいたい。

「モトキはあの子のこと好きなんでしょ？　なんか一生懸アタックかけてるみたいだしさ。でね、昨日私もいっぱい考えたんだけど、やっぱり応援しようかなって思ってた」

「……？」

「だからね、お願いしに来たの。2人が付き合えるように一緒に応援してもらえないかな」

そんな斬新な考え方があったとは知らなかった。

大体、さっきまで未練タラタラだという話をしてたのに。その未練はどこへ行ってしまったんだ。

「それって、俺が園田と別れて、本城と付き合うようにしろっていう事？」

「そう」

大真面目な顔だ。いっぱい考えて出た結論なんだから仕方ないの

かもしれないが。

「その場合、俺や園田の気持ちは完全に無視されてるんだけど……。そこはいいわけ？」

「え？ ああ、そうか。立花君はあの子のこと好きなの？」

「まあね」

「まあね、くらいだったら良くない？」

「園田の方は？」

「だから今日確認しにきたんだけど」

「なんだか宇宙人かなにかと話してるような気分だ。大体、セリフ通りの「まあね、くらい」ってわけでもない。

「悪いけど協力できない」

「え？ なんで？ そっか、もう来月クリスマスだもんね。彼女いないとイヤだよな！ じゃあさ、私と付き合おうよ。立花君ならかつこいいから、問題ないよ。モトキと違ってあんまりしゃべんなさそうだけど。ねえ、その目の色ってカラコン？」

さて……何から答えようか。

「この目は元々。ハーフだから。それと、中村と付き合っつていうのはちょっと」

「ダメ？ 結構尽くすタイプだよ。で、どことこのハーフなの？ アメリカ？」

「いや、まあ、中村がダメってわけじゃなくて……」

「玲二君」

困った相談者の後ろ側から声がした。顔をあげると、ライと蔵元先輩が立っている。助かったような、助かってないような複雑な気分になる。

「取り込み中だった？」

「ええと……」

取り込み中というか、困惑中だ。

「あれ……どこかで見た。この人」

中村は蔵元先輩を見つめている。ついでに、俺の方も見る。キヨロキヨロと視線を往復させて、大騒ぎを始めた。

「あ、写真の人？ あれ、立花君もじゃない？ あの写真の？ あれ？ マジで??」

「中村……！」

慌てて肩を掴む。

「あれは単なるアクシデントだから。そういう風に騒がれると困るんだ」

「え？ そうなの？」

ピタツと動きを止める。

「ごめん」

素直な性格なようだ。ライもほつとした顔をしている。中村は笑顔を浮かべると、蔵元先輩に言った。

「すみません。あの、用事だったらどうぞ」

「ありがとう」

安心した顔で先輩が寄ってきた。

「これ、よかったらどうかと思うて……」

1冊の本が差し出される。キレイな、真新しい本。話題の新作だと、本屋の店頭でポスターを見た。

「ありがとうございます」

「あげるね」

「え？」

先輩はニコニコしている。それを、中村がなんともいえない表情で見つめている。

「玲二、明後日ヒマか？ また話がある」

ライが後ろから声をかけてきた。

「夜なら大丈夫」

「わかった。行くからな」

じゃあ、と2人が去っていく。

「ビックリしたー。二股かけてるのかと思っちゃったよ」

中村はニヤニヤしながら胸をつついてきた。手でそれを押さえてやめさせる。

「やめてくれ」

「で、どことどのハーフ？」

本城と中村、2人の時は一体どんな風に過ごしていたんだろう。おしゃべり同士でさぞ、やかましかったんじゃないだろうか。

そんなことを考えながら、質問には無難に答えた。

「日本とドイツ」

「ドイツ？　へえー。ドイツか。ドイツって言ったら……ソーセージ？」

「まあ、そうかな」

「今度ちようだい。本場のソーセージ美味しそう」

段々疲労を感じてきた。一体いつまでいるんだろう？　そんな思いはまったく届かないようで、横でずっとピーチクパーチク話が続けている。

「ふふつ。玲二さん、無口なんですね！」

「中村がおしゃべりなんだろ？」

「中村じゃなくてさ、結でいいよ。結って呼んでよ」

もう返事も出ない。早く、いつきに帰ってきて欲しい。本城が戻ってきてこの子連れ去ってくれないだろうか。

「ねえねえ、考えといて。私と付き合おうよ。玲二さんのこと気に入っちゃった。カッコイイしさ、なんか可愛い。しかも男も女もイケルなんてヤバイよね！」

「イケないよ……！」

「あは。そこは突っ込むんだ。別にいいのに。私は気にしないよ？」
机の上の開いただけの本を閉じる。大きなため息が出てきた。

「ねえねえ玲二さん！　バイトとかはしてるんですか？」

「してない」

「そうなんだ。私ね、新月浜の駅前のナイスバーガーで働いてんの。

月・水・土つて。今度遊びに来て？」

すっかり玲二さんと呼ばれている。このマシンガントークについていくのは無理だ。白旗はないのか？ どこに置いてある？

「お返事は？」

「……新月浜なんて、用がない」

月浜の1つ手前だったはずだ。小さなローカル駅で降りたことはなかった。

「えー！？ なんで！？ 来てねって言ったのに。用がないってなに？ しんじらんないっていうか新しい！」

帰ってくれと言ってもいいだろうか。時計を見ると、4時。クラブはまだ終わらないのかな。このままのペースで話されたら、頭が爆発するかもしれない。

「玲二さん、話してたらなんか元気出てきたよ。モトキのことで相談にきたのに。すっかり忘れちゃってた」

これは一応、相談だったのか。そうか……。

「良かったね」

「そっけなーい！ そろそろまたいい……！」

中村はそういうと抱きついてきた。顔が、胸にぎゅうつと押し付けられている。勿論、ものすごく慌てた。

「ちよっ……」

「なにしてんの！？」

離れてくれ、という前に、驚いた声が廊下の方から聞こえた。胸に埋められたままの状態ですぐに聞こえる。

「モトキじゃん。どこ行ってたの？」

本城が来た、ということ。

「やめろよ、早く離れろ！」

元彼氏の注意で、中村の体が離れる。助かった。

「なにすんの？ せっかく仲良くしてたのに」

「どうせ勝手に抱きついたんだろ？ やめてやれよ」

「やだ！」

再びおかまいなしに抱きついてきた体でふさがれた視界の端っこに、いつきの姿が見えた。

#26 「乙女の夢」 & l t ; いつき & g t ;

帰り道、玲二くんは疲れた顔をしていた。

中村さんとほっぺをくつつけている姿を見たときは驚いた。驚いて作ったマドレーヌを落としてしまったけど、もちろん望んでそんなことをしてるわけではないのはわかってる。

本城君も慌てて元彼女の蛮行をやめさせていた。

「ねえ玲二くん、明日は何か用事あるの？」

なんとか空気を変えたい。なるべく明るい声で言ってみた。

「明日は、良太郎と」

「葉山君と？」

「……ボーズトーク？」

思わず噴出す。玲二くんもなんだか苦笑いしている。

「こんな言葉使うもんじゃないな」

「ホント、全然似合わないよ」

よかった。笑ってくれた。

しかし、本城と中村の元カップル、2人してやってくれる。

揃ってお邪魔しに入ってくるなんて。もしかしてそういう計画なんじゃないのかな。

でも本城君は、クラブの間はそんなにちょっかいを出してこない。女子ばかりのクラブでみんなにちょうどいいくらいに愛想をふりまいて、重いものは率先して持ったり、全員の受けがいい状態になっている。

世渡り上手ってやつかな。玲二くんにも、なんだかすごくフレンドリーだし。

家に帰ってから気がついた。
マドレーヌを持って帰っちゃった。あげようと思ってたのに……。
なんだかんだ動揺してたのかな、私も。仕方ないからお母さんと
2人でおやつに食べよう。

何の用事もない土日過ごす。

タンスの整理をしないといけない。買ってきた新しい服は嬉しく
てつい、壁にかけてある。早くしまいなさいよと散々注意されてい
た。それから、もう着なさそうな服は処分しないと。どうせヒマだ
し、今日のうちにやっておこう。

タンスから服を取り出す。

……ダサい服っていわれたやつだ。

本城君にナンパ男から助けられた時に言われた言葉を思い出す。
服でそういう災難を避けられるのなら、この服も置いておいていい
かもしれない？ ……いや、ダサいってハッキリ言われたんだから
これはやつぱり、なしだ。

タンスの中身を全部出したら、部屋が服でいっぱいになった。

全部捨てたら、いくらなんでも少なくなってしまう。

ここはコーディネートを考えてみよう。組み合わせ次第では使え
るとか、そういうことがあるはずだ。

ファッション雑誌を参考にしながら服を重ねて置けると、こ
れがなかなか楽しい作業だった。

色々と組み合わせを試していくうちに、今度は小物が段々欲しく
なってくる。

アクセサリーがあつたらな、とか、柄の入ったタイツもいいな、とか。ブーツもいいよって言われたっけ。

雑誌を見ているとどんどんそういう気持ちが出てくる。なるほど、そういう仕組みなのか……と1人で納得した。とてもお小遣いじゃ追いつかない。

なにかいいアルバイトないかな。こつそり勝手にやっちゃおうか。いや、そんなの、すぐバレる……よね。簡単でラクな儲かる仕事なんて、うまい話あるわけがないし。

使えなさそうなものを思い切って捨てることにして、紙袋に詰めた。ダサいの烙印を押されたものだ。リサイクルショップみたいなところに持っていくてもどうせ売れっこない。

階段を降りて、ゴミ袋を取りに行く。

「なんだなんだ。大掃除でもしてたのか？ ガタガタうるさかったぜ」

テレビの前から将兄ちゃんが声をかけてきた。そんなにうるさくしたつもりなんかない。いつものイヤミだ。

「いらない服を片付けてただけだよ。そんなにやかましかったかな」

「……服、捨てるのか？」

「そうだけど」

「ちゃんと全部はさみで切つとけよ」

苦々しい顔。眉間にシワがよると、お父さんそっくりだ。

「なんで？」

「だってお前……、常識だろ」

常識かな。そんなこと、したことないけど。

「周りにチヨロチヨロしてる変なヤツがいるんだから、油断するなよ」

「なに？ 変なヤツって」

「夏休みに動物園によく通ったで賞のやつだよ。お前の服だって気がついたら持つてくぞ」

口は開いたけど言葉が出ない。

相原君のことだね。ちよろちよろしてるの？ まだ？

「将兄ちゃん……、どういう意味？ 相原君のこと見たことあるの？」

「最近は見ないけど、前はたまに見たぜ。気をつけるよな」

布切る用のハサミ、どこだっけ。慌ててお母さんに聞きに台所へ走った。

兄ちゃんの言葉で少しブルーになった週末も終わり、月曜の朝。ずっと見たかった顔を駅前で見つけた。今朝はだいぶ冷えるけど、大好きな顔を見れば一気に暖かくなる。

「おはよ、玲二くん！」

「おはよう」

一緒に改札をくぐって、一緒に電車に揺られる。土日で散々服の片づけをしたことを話した。

「すごいよね、やっぱり。雑誌みてるって、どんどんどんどん欲しい物が増えちゃって。見事に戦略にはまってる気がしちゃった」

「はは」

玲二くんは優しい顔で笑っている。

「アクセサリーとか、靴とか、色々欲しくなっちゃった。全部買うお金もないし、全部ファッションにつきこむのも無理だし……」

そういえば、玲二くんは服はどこで買ってるんだろ？ 自分で選んでるのかな。もしかしてお母さんが用意してたりして？

玲二くんと買い物をかけあわせると、本屋さんのイメージしか浮かんでこない。

いつも通り教室に着くと、やはり1番乗りだった。

将兄ちゃんの言葉のせいで相原君に対する不安が少しある。玲二くんに言っておくべきかな……。

停学から復帰して以来、特に何も感じるところはない。視線を感じるとか、話しかけてくるなんてこともない。最近見ないって言うてたし、大丈夫かな。

「おーっす。おはよーさん」

ご機嫌な様子の葉山君がやってきた。

「おはよう、葉山君」

「おはよう」

カバンを置くとまた、宗田君の席に勝手に座り込んだ。

「土曜日のボーイズトークは盛り上がったの？」

「え？ ああ……。もうね、この玲二君が盛り上がるとこなんか想像できないでしょ？ 照れちゃってもう大変よ。会話を引き出すのにそりやあもう努力しました」

「そんなことないだろ？」

玲二くんは恥ずかしそうに否定している。

「あるよ。あるある。まったくもう、素直じゃないのよ、この子は！」

時々葉山君はなんだか口調がヘンだ。

「玲二さーん！」

今度は後ろから声がした。

「中村さん……」

「えっと……、何さんだっけ？ その……なんだっけ？」

「園田です」

「園田さんね」

「こちらは？」

葉山君が間に入ってくる。

「中村さん。……本城君の前の彼女の」

「あ。もしかしてでっかい紙になんか書いてた人？」

「……学園祭の時のこと？ 書道部のエース、葉山です。よろしく
かつこよくキメた葉山君は無視して、中村さんは笑顔でこちらに
向き直った。

「あのさ、園田さんに金曜日聞き忘れたことがあったから」

「中村……」

玲二くんが渋い顔をしている。

「園田さん、モトキと付き合いなよ。私はもういいから」

「え？」

「で、私は玲二さんと付き合うよ。それで万事オッケー！ でしょ
？」

「そんなバカな」

底抜けに明るく提出された奇策に、葉山君が突っ込んだ。

「バカって何よ」

「いや、中村さんがバカなんじゃなくて、提案がバカバカしい」

「中村……、先週も言っただけど、こっちの気持ち無視しないでくれ
よな」

玲二くんがあきれたように言った。

「ダメかな」

「ダメだよ」

「ダメ？ ねえ、玲二さん、ダメ？」

なんだか甘えた様子で玲二くんにはベタベタ触っている。なんてう
らやましい図々しさだろう。

「やめてくれよ」

「ちえーっ。先週おっぱい触ったんだし、いいじゃん」

葉山君が隣で目をまん丸にした。もちろん、私もビックリだ。

「な……んだよ、そんなことしてないだろ？」

玲二くんは困った顔を真っ赤にしている。

「ぎゅーっしてした時、顔に当たってたじゃないか」

「そっちが勝手にやっただんじやないか」

「ダメかあ。わかった。また来るね」

中村さんは元カレ同様にあっさりと、バイバイと手を振って去っていった。特に何のダメージも反省も感じない笑顔だ。

「玲二……。聞いてないぜ」

「あいつが勝手になんか……。くつついてきたんだよ」

いつもよりも小さい声だ。性格上、そんなことをラッキーだったぜ！　なんて笑いながら言うとは確かに思えない。

「玲二くん」

「園田、ごめん。なんか……。なんなんだろうな」

この日から中村さんはちょこちょこ顔を出すようになった。私や葉山君は完全にはないもののように、玲二くんにだけ話しかけている。

本城君もたまにやってきて、2人が鉢合わせになることもあった。そういう時はなぜか、本城君が中村さんをいさめて連れて戻る。

「あの2人、別に共闘関係じゃないんだな」

葉山君が呟く。きょうとうが、教頭じゃなくてなんだろうとちょっと考えた。そうか、共に闘う、か。

確かに。目的からすると手を組んでも良さそうなのに。

なぜなのかは、本城君が木曜日の昼休みに教えてくれた。

「ごめんなあ、立花。あいつちょっと天然っていうか……。変わってさ」

「お前が謝ることないだろ」

「お前って、ホントいいやつだな！　なあ……。アドレス教えてくれないよ。友達になろうぜ」

玲二くんは微妙な顔をしている。

「え……。ダメ？」

「別に、ダメじゃないよ」

そう言って電話を取り出した。不思議な光景を、葉山君と一緒に眺める。

「いつきちゃんのことはおいといてもさ、俺、立花と友達になりた

「かつたんだよね」

玲二くんは黙って本城君の顔をじつと見つめていた。

「……葉山君と話合いそうだね」

「そうかもね」

2人は赤外線でアドレスの交換なんかしている。それを見て思い出した。

「玲二くん、私にも電話番号教えて」

「え？」

3人が同時に言った。代表して、葉山君が切り出す。

「園田ちゃん、知らないの？」

「うん」

「教えてやれよ玲二。そりゃねえだろ……」

「ああ、ごめん」

「葉山君知ってた？」

「知ってるよ」

私だけ知らなかったのか。本城君にすら先を越されている……。

最初パソコンのメールだったのがよくなかった。あれでこっちもメールアドレスしか教えてなかったからだ。

「いつきちゃん、ほら」

本城君が勝手に玲二くんの携帯を操作しだす。

「本城、中村に勝手に教えたりしないでくれよ」

「そんなことしないって」

なんだか、もう仲が良さそうな雰囲気だ。このメンバーで玲二くんのファンクラブが作れそう。

「立花、アドレスの登録少くない？」

「なんだよ、勝手に見るなよ」

さすがに携帯を取り戻している。

「……ウォーターズって？」

「え？」

「いつきちゃんが言ってたやつ？」

思わず、本城君のほうを向く。

その横で玲二くんは少し怒った顔になっている。

「おしゃべりだな、本城」

そう言つと、立ち上がったどこかへ行つてしまった。

「あらー、珍しい。怒つてたぞ。本城、やつちまったな」

「え？ やつちやつた？」

「玲二が怒つてるところなんてほとんど見ないぜ。いや、初めてかな。大体、人の携帯勝手に見るってなんだよお前」

「いや、つい……手が当たつて見えただけなんだよ。あんなに怒るなんて思わなかったし」

葉山君がお説教をし始める。

ウオーターズつて、百井さんが言つてたやつだよな。やつぱり。

じゃあ、秘密のクラブ活動にはやつぱり行つてゐるのかな？ あの日は来平先輩と一緒にたつて言つてたのに。もしかして来平先輩も仲間なのかな？ 蔵元先輩も、もしかして……？

忘れかけていた不安が、また大きくなつてきた。

百井さんに聞くのはイヤだ。大体、教えてくれないに決まつてる。じゃあ、来平先輩に聞く？ あの人だったら、答えてくれそうな気がする。でもクラスに行ったら蔵元先輩もいる。……困つたな。

玲二くんに聞いたら教えてくれるのかな。

昼休みが終わる頃、ようやく王子様が戻ってきた。

本城君がひたすら謝つて、玲二くんは少し不機嫌な顔のまま、もういいよ、と言つた。

放課後、木曜日だけど委員の仕事はもうない。次は2月ね、と前回吉田先生に言われたことを教えてもらつてゐる。

玲二くんは帰り支度をして、こちらを向いた。

「もう帰る？」

「うん」

「なあ、本城がさつき……」

そこで言葉が止まる。

「本城君が、何？」

「いや、……なんでもない」

こんな風に途中で話すのをやめるなんて。なんだろう。もしかして、ウォーターズの話かな。

……いつきちゃんが言ってたやつ？　って本城君は言った。つまり、私が本城君とその話をしたってことが、玲二くんにかわったってことだ。

知られたくない話なのかな。

どうしよう。この機会に思い切って聞いてちゃおうか。でも、さっき本城君に対して怒ってた。すぐ照れるけど、普段玲二くんはあんまり感情を出すタイプじゃない。よっぽど触れられたくないことなんだったら、……言わないほうがいいのかな。

ちらつと様子を伺うと、なんとなく機嫌が悪そうに見える。眉間に力が入ってるような気がする。でも気になる。

「園田？」

「えっ？」

「どうかした？」

……気になるけど、やっぱり聞けない。

「なんでもないよ。なんか、ぼーっとしちゃった」
そう、と玲二くんが呟く。

結局聞けないまま、家に帰った。

怒った玲二くんなんて、見たことない。相原君に対して厳しく接していたけど、あれは怒りというよりは説教みたいな感じだ。ブンブンしていたわけじゃない。

怒ってどこかへ行っちゃうなんて、初めての事だ。やっぱり本人には聞きづらい。

次の日、1日悩んだ。

やっぱり来平先輩に聞くのが良さそうだけど、クラスに行けば蔵元先輩もいる。どう考えても気まずい。できたら会いたくはない。敵意を感じたもん……。まだきつと、玲二くんのが好きなんだと思える。

悩んでいるうちに放課後になってしまった。

今日はクラブがある。また、待っててもらおうようにお願いして、教室を出た。

調理室は、1階にある。

階段を降りていくと、2階に着いたところで、誰かに呼ばれたような気がした。なんとなく止まって、階段の隣にある玄関の方に移動した。その奥には職員室や生徒指導室なんかがある。

「園田ちゃん」

声の方を向くと、下駄箱の横に会いたかった人が立っていた。

「来平先輩……」

「もう帰り？」

「いえ、今から部活です」

蔵元先輩の姿はない。質問する、絶好のチャンスだった。

来平先輩は目をクリクリさせて笑顔を浮かべている。まるで、待っていてくれたみたいな感じ。

「あの、来平先輩」

「なんだ？」

「ウォーターズって……知ってますか？」

先輩は笑顔のまま、上半身をちよつと傾けた。考えているポーズ、みたいな感じだ。

「先週、玲二さんと月浜駅で会ってましたよね」

「ああ。会った」

「ウォーターズってところに、行ったんですか？」

クリクリの目が、パチパチつと瞬きした。

「……着いてきてたもんな。玲二のこと、気になるか？」

「え？」

知ってるの……？ 尾行してたこと。

「そうだよな。だって、すぐ好きなんだもんな」

まさか、こんなことを言われるなんて。予想外すぎて、つい、顔が赤くなってしまった。

「園田ちゃんが、玲二のことを本当にどうしようもなく大切に思えるなら……いつか全部、わかる」

目が、すごく真剣な感じに見える。

「その日を待ってもらいたいんだけど。ダメか？」

「全部わかるって……？」

「それに、聞くなら俺なんかより、玲二からの方がいいだろ？」

それは勿論、その方がいいに決まってる。

「でも」

「心配しなくていい。俺は……、いつか君に全部わかる日が来ると思ってる」

「……」

なんだろう。来平先輩、何者なんだろう？ なんなんだろう、今のセリフ。

「玲二も君のことがどうしようもなく好きだ。今はちよつと言えないみたいだけど」

そこで、いきなり来平先輩は頭をおさえた。

「あの……」

「ごめん。なんでもない。大丈夫」

また、まっすぐに立つ。そうだ、やけに姿勢がいいんだ、この人。時が必ず解決する。苦しくても……、待ってて」

「……はい」

優しい眼差しに、思わず返事をしてしまった。謎めいたセリフを残して、先輩はクルッと背中を向けて去っていく。

「あ！」

またクルッとまわる。

「沙夜のことは心配いらない。玲二は、あいつに負けない」

「……」

なんだろう。ますます不思議。百井さんとも知り合いつてことだよね。

それとも、玲二くんが全部、先輩に話してるのかな。

大体、本城君と会ってたかどうかも聞かれた。あれだってなんで知ってたんだろ？　そういえば、あの写真の送り主もわかってないのにほったらかしだ。

わからないことが多すぎて、色々忘れちゃってる。

集中できないまま、クラブに参加した。

今日作るのは、プリン。カラメルを焦がした上、穴だらけのものが出来上がる。完全に失敗だ。

ぼんやりしていると、本城君が隣にやってきた。

「どうしたの、いつきちゃん」

先輩は謎だらけだけど……でも、1つすごくいいこと言ってた。

「いつきちゃん？」

玲二も君のことが、どうしようもなく好きだ

「本当かな……」

「何が？」

「玲二くんが……」

目の前に、お邪魔虫の顔がある。

「わあ！！」

「わあ！」

大きな声を出してしまったせいで、本城君もビックリして声を出した。

「なに……？ いきなり大声で」

「本城君がいきなり目の前にいるからじゃん！」

すごく驚いた。ええい、腹の立つ……！

大失敗のプリンは食べられないまま、目の前に並んでいる。みんなは試食して笑顔なのに。

「珍しいねえ、いつきちゃんがそんなに失敗するなんて」

副部長が声をかけてきた。

「すいません……」

鍋も焦がしてしまった。うっかりにもほどがある。

美味しくないプリンを捨てようとすると、横から手が伸びてきた。

「捨てちゃうの？」

「……だって、絶対美味しくないもん」

「俺にちょうだい」

本城君がさつと容器を奪い取る。スプーンで一口すくって、口に入れた。

「……」

マズそう。

「せっかくいつきちゃんの手作りだもん。立花も食べれない、貴重な味だし」

さぞかしマズいだろうに、全部食べてしまった。

「まだあと3つあるけど?」

「え。それは困ったな……」

黙って、スプーンでかきだして残りは捨てた。

玲二くんにはこんな味、提供できない。本城君があんなこと言うたからって、食べてなんて言えない。

……しかしキザなことするな、本城君って。

こういうタイプが好きな人には、たまらなさそうだ。たとえば、則子とか?

結局お邪魔虫と並んで、教室まで戻ることになってしまった。

今までは他のクラスの女の子と一緒にだったのに、最近なぜか来てもらえない。

「いつきちゃん、土日はヒマ? よかったら遊びに行こうよ」

「悪いけどヒマじゃないの」

「ホント? 俺とデートするのはイヤ?」

「うん。イヤ」

ちえつという苦情を受け流しながら教室へ入ると、玲二くんが本を読んでいる。

でも、その横に中村さんが座っていた。

「あ、園ちゃん。おかえり」

ずつと一緒にいたのかな。確かに、金曜のこの時間は本城君が止めに入らない貴重な時間かもしれない。そして、いつの間に「園ちゃん」になってしまったんだろう。

「終わった?」

「うん」

「園ちゃん、今日なに作ったの? 美味しくできた?」

玲二くんもこちらを見ている。

「今日は失敗しちゃった。だから何にもなし」

「えー。なにか作ってくるっていうから期待してたのに」

食べるつもりだったのかな。ホントに、本城君といいコンビだ。同じおしゃべりに、同じ図々しさ。

玲二くんはさっさと本を閉じて、帰り支度を始めた。

「中村、また来週」

「えっ！？ 私と一緒に帰るよ」

もう1人のお邪魔虫はバタバタと立ち上がると、慌てて隣のクラスに走っていった。

「行こうか」

「……うん」

「急ごう」

走って玄関まで向かった。早くしないと、2人が来てしまう。靴を履き替えて、外に出てもまだ走る。

「園田！」

玲二くんの声がして、いきなり手を握られる。引つ張られたまま、一緒に走った。駅までランニング？でも、手をつないでる。

駅前で軽く息を切らしながら、顔を見合わせた。笑ってる。

つられて、一緒になって笑った。

11月も中旬だというのに、2人で汗をかいていた。

「最近、邪魔が入ってばかりだったから」

突然、玲二くんが言った。

だから、一緒に走って逃げたんだ。逃げたわけじゃないけど……、邪魔が入らないようにしたんだ。

本城君だけじゃなくて、中村さんまでもんな。

「なに話してたの？」

「え？」

「中村さんと」

「全然、話なんてしてないよ。一方的にしゃべってれば満足みたいだから、本読んでた」

「そうなんだ」

「全部つきあってられないよ。ずっと話してるんだから」

「軽いため息なんかついている。玲二くんの無口ぶりを考えれば、当然の感想だ。」

「玲二くん、明日とか明後日は？ 用事があるの？」

「うん。ちよっと、出かけるよ」

「そうなんだ。つまんないな。」

「来平先輩と？」

「いや、違うけど」

つい言ってしまった。2人はなんだか、ただならぬ間柄に思える。私に言えない秘密も知っているとかが、そんな感じだ。

本当についてこの間であつたばかりなのかな。そういえば、先輩の方は先に玲二くんを知ってたって言ってたような。

「先輩って、玲二くんとどういう関係なの？」

「……え？」

「なんだか、不思議な感じだから」

玲二くんがちょっと困った顔になる。ちよっとしてから、ようやく口を開いた。

「俺にとつては……未来への道しるべ、かな」

未来への道しるべ？

なんだろう、1年先輩だけで、そんなおおげさな存在ってありえるかな。

「園田は将来の夢とかつてある？」

「夢？」

「俺は、翻訳家とか、編集者とか、そういうのになりたいんだ」

「そうなんだ……」

本当に本が好きなんだ。そういえば、英語の本も普通に読んでた

つけ。いや、わかんなかっただけでドイツ語かもしれないけど。

玲二くんは軽く笑顔を浮かべている。じゃあ、来平先輩も同じような道を……とかなのかな。

そういえば、自分の将来なんて、なににも考えてない。

「園田は何か、ある？」

「ううん……なんにもない」

高校だって、玲二くんが受けたから、今のところにしたんだ。他の私立校に進んだらどうしようって思いながら、賭けたんだ。

あ、でも……。

「ある。玲二くんのお嫁さんになりたい」

「……」

目の前にある大好きな顔が耳まで一気に真っ赤になる。言っておいて、自分も恥ずかしくなった。……幼稚園児みたいなこと言うてる。

「ごめん」

「いや……」

恥ずかしそうに横をむいたまま、玲二くんは小さな声で言った。

「ありがとう」

帰ってから、ご機嫌で家の手伝いをした。

ありがとう、だって。

嬉しい。

イヤじゃないってことだね……！

来平先輩の言葉、本当なのかもしれない。ただ、言えない理由はさっぱりわからないけど。

玲二くん、大学にきつと進むよね……。外国語とか、そういう専門の方に行くのかな。

ただ、一緒にいいから着いていく、なんてもうできなくなりそう

だ。

自分のしたいこととか、やりたい仕事とか、探さないといけない。来週には、もう16歳になる。そろそろ真剣に考え始めないといけない。

でももし結婚できるとしたら……1番早くて、2年3ヶ月後か。いや、それはないよね。まさかね。玲二くんが応じるとはとても思えない。15歳の妄想だ。

……でも、妄想の中ならいいか。どこか小さな可愛い教会とかで、2人っきりで結婚式とか。考えるだけで、恥ずかしくて嬉しくなってくる。

なんか、則子の気持ちがわかってきた。

明日、みんなヒマかな……。

メールを送ると、みんなすぐに返信してきた。明日は、私の家で集合だ。

お昼ごはんは何にしよう？　ちらし寿司でも作ろうかな。

みんなが集合する時は、私の部屋は狭いので客間を開放してもらう。

友香と則子、千早は3人揃って現れた。おみやげはシュークリー

ム。
「いらつしゃい」

女子が3人もやってくるのを聞きつけて、兄たちはそれぞれ出かけていった。珍しく、家の中が女だけになる。

「いつき、これ」

則子が封筒を渡してきた。

「なに？」

あけてみると、招待状が入っている。

いつきの16歳バースデー前夜祭

場所は、駅前のレストラン「Blue Melody」のパーティールームになっていた。時間は17時〜20時、か。

「ありがとう！　すごく楽しみ」

みんなそれぞれの誕生日をこんな風に祝い出して、4年目だ。なぜか全員下半期生まれなので、高校に入ってからのパーティは初めてだった。

「夜やるっていうのが、なんか大人な感じだよね」

「大人じゃないけどね！」

みんなで笑う。今まではお昼に開催されてたもんな。さすが、16歳は違う。

「可愛いかっこしてきて。ドレスとかでもいいよ」

友香が微笑む。

「ドレスって」

「そういう仮装も面白そうだね。いつかいつペンやってみよ」

千早が言って、またみんなでケラケラ笑った。仮装と言えば、この人しかない。

「じゃあ則子の誕生日にやろうよ」

「半端な衣装は許さないよ」

おっと。さすがに厳しいな。

「ねえねえいつき、最近プリンスにちょっかい出してるのって誰なの？」

友香が聞いてきた。

「あ、それ気になってた」

千早も続く。

「千早、誰に聞いたの？」

「え？ 友香だよ」

則子もうんうんうなずいている。

「あれはね、4組の中村さんって言って……」

私にちよつかい出してくる本城君の元カノ……、の部分は言いにくい。

「そうなんだ。やっぱりアレのせいなのかな？」

「アレって？」

「これこれ」

千早がカバンの中から何かを取り出した。雑誌のようだ。

「ほら」

ぱつと開かれたページに、玲二くんの写真が載っている。

「何これ？」

ページの上には「学園祭で見つけたイケメン写真館」と書かれている。

「誰かが投稿したんでしょ。確かに、あの時のプリンスはかつこよかつたもん」

本当だ。この写真、すごくよく撮れてる。めっちゃめっちゃカッコいい……。

名前は載ってないけど、県立〇高校1年と書かれていた。

「これでファンが増えちゃったりする？」

「そうかもよ。だって準グランプリってかいてあるし」

ホントだ。準グランプリ！ 学園祭で見つけたイケメン準グランプリ？

黙ってみていると、友香がニヤニヤしながら言った。

「もしかして、準が余計だとか考えてないよね？」

「え？ そんなわけないじゃん！」

でも確かに。グランプリのチャライ感じの人より、絶対玲二くんの方がカッコいい。

中村さんは最初、本城君の応援のために来たみたいだったけど、今はなんだか普通に好きになっちゃってるみたいだ。

こんな写真が載っちゃって、更にライバルが増えたら……困っちゃうな。

#27 「波乱の1日」 &1t;玲二>

携帯が短く鳴った。メールだ。

開いてみると、予想通り良太郎からだった。

風呂入ったかー？

ちゃんとおめかししたかー？

開始1時間前にちゃんと来いよー！

今日は5時から、いつきの誕生パーティだ。女の子4人だけでやると見せかけて、俺と良太郎も参加することになっている。早川から、サプライズで来てくれ、そしてちゃんとおしゃれをしてきてくれと頼まれた。

おしゃれと言われても、困ってしまう。が、せつかくのパーティなんだから、協力はしたい。

結局新しい服を用意した。慣れない店で、チャラつとした店員にアドバイスしてもらった。茶系のスーツで渋くまとめて、ついでにネクタイもした。少しキラキラした素材がなんとも慣れない。果たしてこれで、彼女に喜んでもらえるだろうか。

そんなオシャレスタイルで、月浜駅に降りた。誕生日プレゼントを受け取るためだ。

いつきは、アクセサリが欲しくなったと話していた。何がほしいか見当もつかなかったたので、あの情報はとても助かった。高いものは用意できないので、かわりにオーダー品にした。可愛い花のモチーフのついた、名前入りプレートのネックレスだ。

オーダーしたせいで、当日ギリギリの出来上がりになってしまった。午後1時以降の引渡しということだったが、この格好でウロウ

口して汚してはいけない。4時に会場へ行くと考えて、3時前に駅に着いた。

ショッピングモールを歩き、頼んだ店に向かう。キラキラとした店内には女の子がいない。

注文した時の控えを渡して、ネックレスを確認する。ついでに可愛くラッピングしてもらった。

小さな紙袋を受け取って、また歩きだす。すぐに戻れば4時前に着く。良太郎たちもちょうど集合しているはずだ。

券売機のそばまで来たところで、いきなり行く手をふさがれた。

「よー！」

こいつは確か……。

「名前、まだ覚えてもらってないかな？ クロだよ」
覚えている。最初にしてやられた相手だ。

「何、今日はおめかししちゃって。お出かけ？」

「そう。どいてくれないか？」

「その前に、ちょっと付き合ってくれないかな？ 話したいことがあるんだけど」

「悪いけど急ぐんだ」

「そんなこと言っちゃうの？ 無理やり付き合ってもらうことになっちゃうよ」

それは困る。行く前にまたボコボコにされたら、たまらない。

「いやあ、たまには人ごみに混ざってみるもんだな。気になる少年を発見できちゃうなんて」

「……待ってたわけじゃないんだな」

「当たり前だろ？ お前の居場所なんてつかめないんだから」

そうか。ライも他の仲間みたいに感知できないと言っていた。…

…本当だったんだな。

「来月の集まりまで待てなくって。ぜひ仲良くしておきたいからさ」

クロは後ろに回ると、背中を押してきた。

「こっちこっち」

振り返って、苦情を申し立てる。

「急ぐから……、また次の機会じゃダメかな」

「ダメだよ。次の機会ってなんだ？ 信用できるかつーの。ママを呼ばれたらかなわないしな！」

母さんはどこかで様子を見ていてくれているのかな。ピンチになったら、助けに来てくれるだろうか……。情けない発想に、心の中でため息をつく。そういえば、その前に感知できない俺をどうやっていつも見ているんだろう？

そんな疑問は解決しないまま、しかたなくクロに連れられて移動する。

あの喫茶店の方へ向かっているが、その前の角で曲がって、更に進んだ。帰り道を覚えておかなければいけない。黙って集中して歩くと、工事現場にたどり着いた。

大きなビルを建てるのか、敷地は広そうだ。

クロは勝手に車が入る出入り口のゲートをあけて、中に入っていく。

今ダッシュで戻ったら、見つからずに帰れないだろうか？

いや……多分すぐに気付かれる。間違はなく追いつかれるだろう。早く帰るためには、大人しく言う事を聞いた方がよさそうだ。

建設途中の建物の1階部分の少し入ったところまで進んで、クロが振り返った。

「ここは今日、休みだから。ゆっくり話せるぜ」

「ゆっくり話してる時間はないんだ。……手早く頼むよ」

そう応じると、奥から更に誰かがやってくるのが見えた。

カラスと、イワと呼ばれていた2人だ。カラスは背の高い、20代後半くらいに見える男性。イワは……年齢不詳だが、とにかく体

が大きい。

イワは少し奥で立ち止まり、カラスだけが前へ出てきてクロと並ぶ。

「お前は、レイジって呼べばいいのか？」

「……構わないよ」

「お前の本当の姿、見せてくれよ」

本当の姿……。

狼の姿ということだろう。

「できない」

「なんで？ 誰からも見えないよ。心配すんなって。大体、狼なら平気だよ。見られたところで、でっけえ犬だなーくらいで済むし」

できないというのは、勿論、やらないということではない。本当に変身力がないのだということを言って大丈夫なのか。

ライと話した時のことを思い出す。自分に力がないことを、やたらと明かすのは危ないはずだ。

でも、できないものはできない。そういうタイプもいるとか、そういうこともあるんだとかでは通らないだろうか？

「見せてくれよ。俺たちはそうやって、お互いを確認してるんだ。お前だけやらないっていうのはないんじゃないかねえの？」

やっぱり、正直に言う以外ない。だって、無理なものは無理なんだから。

「……できないんだ。やらないんじゃない」

「できない？ そんなわけあるか。狼なんだろ？」

クロはカラスの方を見ている。

「どうだ？」

「わからない」

心を見ようとしているんだろうか。困った。もし心が読めたら、嘘じゃないとわかってもらえるのに。

「クロ！ カラス！！」

建物の奥から、また誰か現れた。この声には聞き覚えがある。

「ライ」

「玲二！」

ライが、間に立つ。

「ライ、なんでお前が来るんだよ」

「私が呼んだんだ」

奥から、イワの声がした。

「2対1じゃ、不公平だからな」

クロはあからさまに不満気な顔をしている。

「ライ、お前は引っ込んでろよ。俺たちはそいつに用があるんだ」

「玲二は変身はできないんだ。だから帰らせてやってくれ」

「それが本当だって、お前にはわかるのか？」

ライは動かない。全身に力を入れているようだ。握った拳が少し、震えている。

「わかつているだろうが、私には勝てないぞ」

カラスが小さい声で言う。

何が起きているのかはわからない。でも、ライが体を張って守ろうとしてくれているのはわかる。

「ライ、いいんだ。俺のことは」

「いいってよ。そこをどけ！」

クロが跳んで、ライと組みあう。

「どうしたんだ今日は。そいつのためか？　どうしてそこまで肩入れするんだ？」

ライは答えない。どうしたらいいかわからず、ただ立っていることしかできない自分がひどく歯がゆい。

バシっという音がして、2人が離れる。クロが急に後ろを向いた。そして、ライが振り返って叫んだ。

「玲二、俺から離れろ！」

真剣な表情に押され、よくわからないが後ろに下がった。

ライも急いだ様子で離れていく。と、思った瞬間、突然変化が起

きた。

ライの体が、少しずつ光を放ち始める。

変化はすぐに終わった。頭から尾にかけて、黄色から夕陽のようなオレンジ色のグラデーションに彩られた、美しい大きな鳥が現れた。

ライの本当の姿……！

ライは空に向かって大きく一声鳴くと、こちらに向かって飛び掛ってきた。

驚くヒマもない。

鋭い爪が、体を掴む。

両腕を押さえ込まれる形で、体が空へ浮かび上がった。

「ライ！」

下から驚いたような声が聞こえた。

背中に何箇所も、爪が刺さっている。

すごいスピードで飛んでいて、声が出せない。

もう、多分、落ちたらただではすまない高さまで来ている。

浅い呼吸の中で、なんとか声を出した。

「……ライ！」

美しい黄金の羽が、目の前で輝いている。

そして、白い小鳥がライの少し上に飛んできて、並んだ。

体が痛む。息はできるが、苦しい。

ライ……

助けに来てくれたのに
……どうして？

上を飛ぶ白い鳥が、ライの周りをクルクルと回り始めた。
上へ、下へ、寄り添うように飛んでいるのがチラチラと見える。

『玲二……』

ライの声だ。

いつもよりも、遠く聞こえる。

『すまない……！ 今降ろすから、しつかり……』

体を掴む足の力が、少し緩んだ気がする。しかし、爪は刺さった
ままだ。

少しずつ、高度が下がっていく。早かったスピードも、少しずつ
落ちていく。

とうとう、地面の上についた。ひんやりとした土の上に降ろされ
る。

『少し我慢してくれ』

爪が抜けて、激痛が走った。寒気がして、体が大きく震える。

「うっ……」

ライの姿が人間に変わる。

「玲二！」

目の前に、ライの顔が現れた。泣いている。

「許してくれ！」

自分では動かせない体を横向きにされた。傷を確認しているよう
だ。

「助けが来るから。なんとか……それまでこらえてくれ」

「大丈夫だ……思ったより、痛くない」

「何言ってるんだ。痛くないわけないだろ」

自分で起き上がろうとすると、押さえつけられた。

「大丈夫だつて」

確かに痛い。手も震えている。でも、立てそうな気はする。さっきの白い鳥が、横に降りてきた。ツンツンと、手をつついてくる。

「玲二、無理するな！」

ライの声が闇の中に響く。なんだか、焦っているようだ。

「……すまない。頼んでいいか？」

……？

「玲二、ごめん、俺行かないと」

「どこに……？」

「そういうルールなんだ。目撃者がいたらマズイから」

急いだ声で言うと、ライは走り去ってしまった。

姿をさらしたからか。たしかに、あんなに大きく輝いていたら目立つだろう。本当の姿だと不便で、って言ってたっけ。理由がよくわかった。

白い鳥と、薄暗い林の中に残された。

体が震える。傷のせいだけではなく、冷たい土と、秋の夕暮れの空気のせいもあるのかもしれない。

少し落ち着いてきたら、背中のおちこちから血が流れているのを感じた。思ったよりも傷は深くなさそうだが、そう浅くもない。ドクンドクンと、やたらと血が流れる感覚がある。

なんとか体を起こす。ブルブルっと、全身が震える。

しっかりしろ、とばかりに、白い鳥が寄ってきた。可愛らしい目をした小さい鳥だ。そっと手を伸ばすと、人差し指の上に乗った。

頼んでいいか、と言っていた相手は、この鳥……？

さっきのライの周りを、心配してるかのように飛んでいた。あのスピードにもついてきたわけだし、普通の鳥とは思えない。

急にめまいがして、手をついた。鳥が慌てて、地面に着地する。早く止血しないとマズいかもしれない。でも、背中のキズは見えない上、使えそうなものもあたりにはない。

一体ここはどこだろう？ 5時までに行かないといけけないのに……。

なんとか立ち上がろうとしたけど、足がふらついて無理だった。近くの木まで這うようにして近づき、つかまって足に力を入れる。腰の辺りに濡れている感覚があった。さわると、手のひらが赤黒く染まった。

せつかく買ったオシヤレ着が台無しだ。

そういえば、いつきへのプレゼントはどこに行ったんだ。

……なんでこんなことになったんだろう。ライが自分を襲うなんてとても信じられない。誰かが、なにかしたのか？

あの時、クロは驚いた声をあげていたように思う。イワという男も、中立を守っている感じだった。

カラスは……わからない。でも彼の仕業だとしたら、クロが驚くだろうか？

大体、もし誰かがどうにかしてライを操ったんだとしたら、それは仲間内で許されることではないんじゃないのか？

背中に急に激しい痛みを感じて、ひざの力が抜ける。木に寄りかかるようにして倒れた。

なんとか、移動したい。いつきのところに行きたい……。

白い鳥が、肩に乗ってきた。ピイピイと、可愛い声で鳴く。

『もうすぐ助けが来る』

声が響いた。なんだいきなり。もしかしてこの鳥の声？
『じつとしていて……傷に響く』

何者かはわからないが、この鳥の言うとおりだ。助けが来るのなら、無理をしない方がいい。

仕方なく、座る。

鳥は素早く動き回り、枯れ葉を集めている。確かに、地面に直接座るよりはよさそうだ。痛みをこらえて、枯葉を集めるのを手伝う。

集まった枯葉の上に倒れこんだところで、足音がした。

白い鳥がピピッと鳴いて、肩にとまる。

「玲二君！」

男の声だ。顔を上げられない。でも、聞いた声だ。
そばにきた影に背中に触れられている。痛みで、口から唸り声が漏れた。

「ミツ、ミツ、来てるか？」

わかった……遠屋だ。マスター自ら、お出ましか。

「急がないと。出血が多そうだ。ここでやるぞ」

その声に反応して、なにかが現れた。視界の端に、突然。

「この場所ならちょうどいいわ」

女性の声だ。

「頼む」

急に、体が温かくなった。

背中の中の痛みが、少しずつ遠のいていく。

白い鳥がまたぴいぴいと鳴いている。

「玲二……！」

今度はすごく、聞き覚えのある声がした。母さんだ。

「大丈夫だ、今、傷がふさがった」

「大丈夫ですって!？」

母の喉がグルル……と鳴ったように聞こえた。

「すぐに移動しよう。いつまでもここにいない方がいい」

「玲二、帰りましょう」

「ダメだ。一緒に来てくれ」

見えないが、多分母さんはすごく怒っている。そんな雰囲気が漂ってきた。

「こつちだ。立てるかいい？」

「触らないで！」

2人が争うようにして、立たせてくる。ひきずられるように移動すると、大きな車が止まっていた。

後部座席に乗せられるとすぐに車は走り出した。隣には母さんが座って文句を言っている。

「家に帰らせてちょうだい」

「ダメだ。何が起きたのか、ちゃんと把握しないと」

家に帰りたい。

少し休んで着替えたら、いつきの誕生パーティに行くんだ。

「玲二」

母さんが手を握ってくる。……少し、震えている。

「母さん、俺、大丈夫だよ」

「そうよね、まだ……15だもの。……大丈夫よ？」

15だったら、なんなんだろう。

母さんが道中何回か文句を言ったが、結局車はウォーターズの前で停まった。

店の裏の隠された階段から、下の階へと降りる。この地下の部屋

が「仲間」の集合スペースになっていた。

なんとか自分で歩いたけど、頭がクラクラしている。
キズはふさがったらしいが、流れた血の量は変わっていない。こ
れが、貧血ってやつなのかな。

中に入ると、長椅子にライが座ってうなだれていた。こちらに気
付いて、慌てて立ち上がる。

「玲二……！」

「ライ、そこから動くな」

遠屋の声が飛ぶ。しゅんとして、ライはそのまま座った。

奥には、クロとカラス、そしてイワが隅の方に座っていた。

「玲二君、ここに」

背もたれのついた1人掛けのソファを勧められる。ゆっくり座る
と、母さんがすぐ横に立った。

「さて……何があったのか話してもらおうか」

「たまたま駅前で見かけたんだ。だからちょっと、本当の姿をみせ
てもらおうと思ってさ」

クロが話し出す。

「玲二君、本当か？」

「……本当です」

工事現場で対峙して、ライが間に入ってきた。問題はそこからだ。
「急に、変身が解けたんだ。そこからはよく覚えてない。気がつい
たら玲二を掴んで飛んでた」

ライは力なく、肩を落としたまま言った。

「どうしてだ？」

「マヤだろ。マヤがやったと、思った。来たのを感じた。クロだっ
て気付いたはずだ」

「……マヤはいるのか？」

マヤとは誰だろう？ その名を聞いた覚えがない。

「いるよ」

どこからか声がした。

「ライの言ってることは？ どうなんだ？」

「本当さ。そいつが気に入らないから、ちょっと悪戯しちゃった」

遠屋の顔が厳しくなった。

「お前もこっちへ出て来い」

奥の壁から、黒い影がスッと現れた。明かりに照らされて、姿が見えてくる。

マヤと呼ばれた影は、歩みを進めてライの横に優雅に腰掛けた。

見たことのある顔……だ。

ネコのような大きな瞳が爛々と輝いて、きゅっと口角を上げて笑っている。いつか百井にみせられた、偽の顔の写真そのものだ。髪型だけが違う。まつすぐの長い髪は額の真ん中でわけられ、腰の辺りまで伸びている。

もしかして……こいつが百井の兄、なのか？

「悪かったなライ。お前はホント、効きがいいから面白い」

そういつて、マヤと呼ばれた男はライの肩に手を回す。まわされた方は怒って手を払いのけた。

「あんなことさせるなんて……。危うく殺すところだった！」

ライが髪を逆立てて怒鳴った。

「殺す？ そんなわけないだろ。どこか適当なところにポイって投げて来いって命令したんだぜ？ 殺せなんてそんなバカな」

「マヤ！」

遠屋が一喝した。

「とにかく、お前はしばらく謹慎だ。ライ、お前は今回は仕方ないしかし、もっと力をつける努力をしろ」

マヤはフンと鼻を鳴らす。

「お前が弱いからだぞ」

「うるさい……！」

ライが怒っている。

「クロ、カラス、お前たちも勝手なことをするな。文句があるなら私を通して言うんだな」

「……なんでそいつをそんなに特別扱いするんだよ」
クロから苦情が出た。

「特別扱いしてるわけじゃない。玲二君は若いんだ。まだこの世の中にすら慣れてない。少しずつ馴染んでいってもらおうと思っているだけだ」

「若いって？ まさかティーンエイジャーなわけ？」

クロが軽く言う。

母さんも、ライも、遠屋も何も言わない。そこから、推測がついたようだ。

「え、マジ？ すごいね。そうですか」

「カラスもいいか」

「……了解した」

最後に、こちらに向き直る。

「玲二君、傷はどうだ？」

「多分、大丈夫だと、思う」

もう痛みはない。何が起きたのかわからないが、とにかくふさがっていた。

「ミツの力は効くんだな」

「ミツ……？」

「ミツは草の一族だ。とにかくなんでも癒す。効果がなかったらもうお手上げだと思ったが……」

悪意のない力なら、効果がある？ ライが言っていた通りなのか
もしれない。

「気分はどうなの？」

母さんが心配そうに言った。

よくはない。頭がいつもより働いてない感じがするし、地面はい

つもと違ってまっすぐになってない。

「服がボロボロだわ……」

だろうな。大きな爪が刺さったんだから。

ボロボロ？

慌てて、自分の姿を見る。前の方に穴はないが、血がしみてあちこち赤黒くなっている。

「背中、どうなってる？」

「どうもなにも、穴だらけよ」

「鏡は？」

遠屋が入り口のドアに手をかざす。すると、ドアだったはずのものが鏡のようになった。

自分の全身を見る。

ひどい有様だ。

後ろを見ようと、体をひねる。チラッと見えただけでも、最悪の状態だった。母の言うとおり、ズタズタに裂けている。ズボンも血が染みて変色していた。

「今、何時？」

「5時30分だ」

「5時30分……」

力が抜ける。あやうく、転びそうになった。

「玲二、これ」

ライが寄ってきて、何かを渡してきた。

電話だ。ヒビだらけになっている。開いてみると液晶も割れていて、電源も入らない。

「落としたんだ。なんとか探したんだけど、壊れたみたいで……」

一体、どこで落としたんだろう。飛んでる間に？ ……よく見つけられたものだ。

とにかく、友人たちに連絡をすぐ取るのは不可能らしい。それと、

もう1つ大事なものがない。

「ライ、もう1つ、紙袋を持ってたんだ」

「これか？」

マヤが奥でブラブラと、プレゼントの入った袋を揺らした。

「返せ……！」

取り返すと、こちらも悲劇的な状態だった。

外の袋からもう、泥だらけでしわくちゃだ。中を見ると、リボンはほどけて箱が潰れている。

なんで潰れたんだ。落としただけでこうなるわけがない。わざと、誰かが踏んだとしたか思えなかった。

「なんだよその目は……。誰からも見えない、亡霊のくせに」

ライが怒って、マヤを突き飛ばした。

「やめろ！ 謹慎と言っただろう。マヤ、お前は中へ入るんだ」

遠屋の声で、マヤの姿が消える。

これで、「何があつたかの把握」は終わりなんだろうか？ 結果的に助かったが、危うく死ぬところだった。謹慎だけで済むなんて、なんだか納得いかない気がする。

「玲二、本当にすまなかった。お前を傷つけるなんて……」

「ライのせいだなんて思ってたない」

ライの目からは涙がどんどんこぼれ落ちている。

「泣くなよ」

「玲二、帰りましょう」

母さんが肩に手をかけてくる。

「……俺、行きたいところがあるんだ」

「こんな状態で無理よ。休んだ方がいい」

「ダメだ。今日は特別なんだ。絶対に行く」

「そうだ……。絶対に行かなくちゃ。」

初めてここに来た時のことを思い出して、少し前へ進んだ。

「なあカラス……この服、元通りに戻せないか？」

「は？」

「ドアは戻せるんだろ」

思いつきり睨まれている。図々しいのは承知だ。でも、元はと言えば彼らのせいなんだから、このくらいの責任は取ってもらいたい。夏のアルバイト代をはたいているんだから。

そして自分ではなく、服になら力は効くんじゃないのか。そう思っ
て言ってみた。

「わかった。直してやるよ」

よかった。本当に直せるんだな。あの時、ドアを実際に直したのをみたわけではない。もしかして誰かの冗談だったらどうしようか
と思っていた。

「じつとしてるよ」

言われたとおり、動かないようにする。体がどうしようもなく重
くて、フラつきそうになるのを必死にこらえた。

めまいを感じて、一瞬目を閉じる。

「終わった」

下を見ると、血の染みはなくなっている。背中
の穴は……？

「大丈夫、キレイになってるわよ」

母さんの声がする。

「便利ね」

カラスは不満気な様子だ。

「これも頼む」

思い切って、紙袋を差し出す。あからさまにムカついた顔をして
いるが、受け取ってくれた。

カラスは目を閉じ、黙って集中している。

紙袋は少しずつ元通りになっていく。不思議な光景だった。

「ありがとう」

礼を言うと、フンという声が返ってきて、カラスの姿は消えてし
まった。しまった。携帯も頼みなかったのに……。

紙袋の中をのぞくと、プレゼントは元通りになっていた。ピンク色の包装紙も元の輝きを取り戻し、リボンでしっかりとおめかししている。

安心すると、力が抜ける。ふらつく足で出口に向かった。

「玲二」

母さんの声は不安そうだ。

「止めても行く。大体、家の近くだし」

会場は駅前の商店街だ。すぐに、帰れる。

「わかった。じゃあ一緒に行くわ」

「車で送ろうか？」

遠屋が言う。

「いい」

もう返事をする時間も惜しい。でも、そうだ。言わなくちゃ。上半身だけ振り返る。

「ライ、また明日……来て欲しい」

「わかった。必ず行く」

涙を腕で拭いているライに手を少しだけあげて、ドアの方へ向かう。

頭がクラクラする。階段を登るのも一苦労だ。

なんとか電車に乗って、なんとか改札を抜けて、なんとか目的の店にたどり着いた。

駅に着いたところでもう7時前になっていた。連絡もしないまま、

3時間も遅刻か。

「玲二」

「大丈夫。すぐ、帰る」

「顔色が悪い。心配されるわよ」

「いい。行かないよりマシだ」

「……」

母さんの方を振り返る。

「今日だけはちょっと、目をつぶって」

生まれて初めて、こんなワガママを言った気がする。

「わかったわ。……必ず帰ってくるのよ」

諦めたのか、母さんは心配そうな顔をしながら去って行った。

店のドアを開け、中に入る。パーティールームは1番奥。案内してもらって、部屋に入った。

「玲二くん！」

いつきが、ものすごい笑顔で迎えてくれた。そばに駆け寄ってきて、そして、急に表情を変えた。

「どうしたの……？ 真っ青だよ」

「ちよつとね」

「ちよつと何？ 大丈夫なの？」

「大丈夫。ちよつと……貧血なだけ」

他のメンバーにも遅いと文句を言われながら、席に着いた。

「立花、何やってたんだよ！」

本城が笑顔で背中を叩いてくる。

「……お前、なんでいるの？」

「なんでいるのはないだろー？ サプライズで参加だよ！」

確か、参加者の中に本城は含まれていなかったはずだ。どこでかぎつけてきたんだ？

「今日、オシヤレじゃんか！ かつこいいぜー」

「バッカ……本城！ そういうのは園田ちゃんが言うセリフだろ、このおしゃべり野郎！」

良太郎がバシッと頭を叩いた。いつきはそれを見て笑って、そして俺に向かって微笑んだ。

「ホント、玲二くん、今日……すごくカッコイイね」

それはよかった。思い切って修理を頼んだ甲斐があった。

「ちようどよかったよプリンス。今からケーキだからね！」

森野が、笑顔で言ってきた。

ケーキか。食べられるかな。

みんなで歌い、いつきがろうそくを吹き消す。隣で微笑むいつきは、いつになく美しく見える。

時折こちらを見ては微笑み、それを見るたびに少し、具合が良くなつていく気がした。

「私、ちょっとお手洗い……」

いつきが立ち上がると、早川がやってきて声をかけてきた。

「プリンス」

いつの間にか、平気でプリンスと呼んでくるようになったな。

「もう、みんなプレゼントあげちゃったの。プリンスもあげて。今行ったら2人きりであげられるから！ お願い！」

本城に聞こえないようになのか、小声だ。

2人きりで……。

「わかった」

ここに来てからもう30分は経っている。もう少しでパーティはお開きだ。今日のコンディションで、終わった後どうこうというのはどう考えても無理だった。

小さなプレゼントを持って立ち上がる。いつきの後を追って部屋を出た。

洗面所の横に小さな扉が見える。非常階段のようだ。

いつきが出てきて、俺に気がついて笑顔を浮かべる。

「園田、こっち」

手を引いて、扉を開けた。ちょっと殺風景だが、他の客に見られるのも少し恥ずかしい。ここで渡そう。

「玲二くん、……よかった、来てくれて。どうしたのかと思った」

「ごめん。ちょっと、携帯も壊れちゃって」

「何があったの？」

「今はいんだ。そんなこと」

プレゼントを差し出す。

「誕生日おめでとう」

いつきが少し照れたように微笑んだ。

「ありがとう」

大きな瞳は小さな包みをまじまじと見つめている。

「あけてもいい？」

「うん」

こんなところであけさせるのは悪かったかな。でも、そう思ってももう遅い。

いつきは包みをあけると、にっこり笑った。

「わあ」

取り出して、そして……

「あ」

なんだろう。のぞいてみると、名前を入れたネームプレートがポツキリと折れていた。

カラスめ。

「ごめん。……直してもらっよ」

「ううん、いいよ。だって可愛いお花、ついてるし」

「でも」

「いいの。玲二くん……ねえ、今日、何かあったの？」

「……」

黙って遅刻して、顔色も真っ青で、プレゼントが壊れてて……心配されないわけがない。

「ちよっと、危機一髪だった」

「……何それ」

いつきが笑う。今日は本当に可愛い。髪形もいつもと違って、少し横の方で結んでいる。

「これ、どうして割れちゃったの？」

ネームプレートは、tとsの間で割れている。とても簡単に割れ

るような素材には見えない。包装は完璧だったんだから、いつきの疑問はもつともだ。

「でもこれ、『suki』になってる」

折れたプレートを見て、微笑んでいる。

「好き」が落ちてしまったら、ダメじゃないか。

「やつぱりこれ、直してもらうよ」

「いいよ。かわりに、他のもの、もらおうかな」

そういつて、腕を首の後ろに回してきた。

唇が近づいてくる。

今日は、邪魔が、入らない……。思わずいつきの背中に腕を回した。そつと、抱きしめる。

残念ながら、そこでどうしようもないくらいひどい眩暈がして、倒れた。

#28 「狼と小鳥」 &1t・ライ>

カーテンの隙間から、光が入ってくる。

朝か……。

昨日はマスターに懇々と説教をされた。

いくら戦いが起きないようにしているとはいえ、油断しすぎていると。

「特にお前の弱点は致命的だ」

そんなことは、わかってる。だけどどう考えたって仕掛けてくる方が悪いじゃないか。

おかげでなかなか眠ることができなかった。夜行性だった昔を思い出す。

朝は来たが、まだ少し早い。

昨日のことを思い出す。

玲二……。

本当に悪いことをした。昨日は園田ちゃんのパーティだったはずだ。

俺があそこに行ったせいで、かえってよくなかったのかもしれない。あの様子で、今日は学校へ行けるだろうか？ フラフラしてたし、顔色もひどかった。

明日来てくれ、と玲二は言った。それはきつと、放課後のことだとは思う。でも様子が気になる。大体、休むかもしれない。こんな

気持ちでのんびり授業なんて聞いてられない。

少し早いが行ってみるか。

窓を少しあけて、姿を小鳥に変える。隙間をくぐりぬけ、空へと飛び出した。

可愛らしい家に着くと、2階の窓が少し開いていた。そっと中に入ると、愛しい彼女が出迎えてくれた。

『ライ』

『リア』

そばによって、くちばしをツンツンとしあう。実にハッピーな瞬間だ。

しかしすぐにドアが開き、テレゼが入ってきた。

「ライ、いらつしゃい」

一瞬、間があく。恥ずかしいところを見られてしまった。ちょっと気まずい。

「随分早く来たのね」

『玲二が気になって……』

この状況では白々しいか？

「まだ寝てるわ」

『具合はどう？』

「自分で見てきたら？」

『わかった。じゃあ行く』

小鳥の姿のままだとおかしい。姿を変えよう。

「リア、また後で……」

麗しの彼女に一声かけ、部屋を出る。玲二の部屋は向かいだ。テレゼがそっとドアを開けてくれた。

ベッドに近づく。玲二は眠っている。

テレーゼが静かにカーテンを開ける。部屋に明かりが差し込んで眠っている顔を照らし出す。

……顔色が悪い。いつもよりも、確実に青い。

これが、俺のやったことだ。

「ライ、玲二はあなたのせいだなんて思っ
てないわよ」

「……わかってる」

そんなこと、思うやつじゃない。それはわかってる。だけどそれとこれとは別だ。自分の弱さのせいで、大切な友人を傷つけた。動かしようのない事実だ。

「玲二についてて、いいか？」

「……いいわよ」

「昨日は、ちゃんと行けたの？」

「ええ。行っ
たわよ。フラフラで帰ってきたけどね」

しばらく玲二のそばについて座った。

玲二の部屋は落ち着いていて、とてもきれいだ。人柄がよく表れている。

そつと手をとって握った。少し冷たい。

何も、感じない。普通の人間なら必ず伝わってくる感情。眠っているにも、不安に思っていることや、嬉しい事があればわかるのに。

しばらく、手を握ったまま座っていた。

早く回復するように……。

俺にも、癒しの力があればいいのに。

「ライ……？」

目が覚めた。

「玲二」

「……」

起きていきなり俺がいたら、変な感じが。

「気分はどうだ？」

「……良くはない」

「そうか。そうだな」

玲二は目を閉じている。しばらくしてまた目を開けた。

「心配して来てくれたの……？」

「ああ。眠れなかった」

「大丈夫だって言ったのに」

青い顔のまま、微笑んでくれた。

そうか。大丈夫か。でも、その大丈夫なのは俺が弱いからで……、少し複雑な気分になってしまふ。

「玲二、起きたの？」

「テレーゼが入ってきた。」

「うん」

「どう？ 起きられるかしら？」

玲二は体をゆっくりと起こした。が、辛そうだ。頭をおさえて、目を閉じてしまった。

「無理しなくていいのよ」

「……うん」

「今日は休みなさい。ご飯持って来るわ」

「テレーゼが出て行く。頭をおさえた姿勢のまま、玲二が言った。」

「ライ……、ライは、メールって送れるのか？」

「メール？」

字を送るやつか。

「いや、送れない。よくわからない」

「そっか……」

玲二はゆっくりと起きて、フラフラしながら立ち上がった。机の上に乗せてある、パソコンの電源を入れる。

「どうした？」

「園田に、ちよつと連絡する」

玲二が食事をしている間に、自分も朝食をもらうことになった。リアの部屋に行き、一緒と言われたが……。玲二があんなに具合が悪そうなのに、自分だけいい思いをするのは少し気が引ける。結局可愛い彼女の魅力が勝って、二人で木の実をつついてみた。した。

食事を終えて、玲二の様子を再び見にいった。
あんまり食べられなかったようだ。ますます、申し訳ない気持ちになってしまう。

こちらの申し訳ない心情は知らずに、玲二は真剣な顔で口を開いた。

「なあライ……、聞きたいことがいっぱいあるんだ」

「なんだ？ なんでも聞いてくれ」

「昨日のあいつ、……マヤって、百井の兄貴なのか？」

「真夜か。そうだ、あいつが沙夜の兄だ」

「あいつは、ライに何をしたんだ？」

「……」

俺の勝手な沈黙に、玲二は少し悲しそうな顔をした。

「ごめん。ライには、辛いことなんだな」

「いや、確かに辛いけど、玲二には知る権利がある」

昨日、真夜にされたこと。それは、意識の操作だ。変身を解いて、玲二をどこか遠くへ放り出しに飛び立った。

「……じゃあ、足で締め付けて止めを刺すような指示じゃなくて助かったんだな」

「……そうだな」

実際には、かなりの力で締め付けているはずだ。だけど、玲二はひどいダメージは負わなかった。

要するに俺がかなり弱いということだ。生まれてこの方、誰かを傷つけようとしたことはない。仲間内の争いがあっても、間に入って止めるようなことはしてこなかった。

「傷、見せてくれ」

玲二は体をひねって、背中を向けてきた。寝巻きを持ち上げて、肌の様子を見る。

傷の痕は、残っていない。

「もう痛くないか？」

「昨日治してもらった時から痛みはないよ」

よかった。やっぱり俺の爪の威力なんか、たかが知れている。

それもわかった上で真夜は俺を操ったんだろうか。まったく腹立たしい。

だけど、運が良かった。助けが遅かったらきつと玲二は死んでいた。俺のせいで死んでしまうところだった。

思わず、玲二を後ろから抱きしめる。

「どうしたんだよ、ライ……大げさだよ」

「大げさなもんか。今だってこんなに弱ってるじゃないか」

弱い爪が開けた穴から、血がたくさん流れていた。

「昨日、あんな暗くて、寒いところに置いていきたくなかった。お前が死んでしまうんじゃないかって、心配で心配でたまらなかった。助けが来ても、間に合わなかったらどうしようかと思った。ミツの力すら効かなかったら……どうしようかと思った」

弱っている玲二の背中にしがみついて、泣いてしまった。昨日待っている間は本当に、不安でどうにかなりそうだった。不思議なくらい、この新しい友人のことを大切に思っている。まっすぐでなければに自分の運命と向かい合っている玲二のことが、俺はすごく大好

きで、大事にしたいと感じていた。

「泣くなよ……」

玲二に言われて離れる。背中を濡らしてしまった。もしかしたらこんなことをされたら嫌だったかもしれない。

「昨日すぐに行ったのは、誰かに見たやつがいて、探しに来られたら困るからだっただろう?」

「……ああ、そうだ。あんな風に本来の姿を晒した時は、すぐにその場から立ち去るのが決まりになっている」

「昨日の白い鳥、あれは……?」

リア……。

「声がしたんだ。励ましてくれたし、枯葉を集めてくれた」

「……枯葉?」

「多分寒くないようにって事だったと思うんだけど」

リアのことは、秘密にする約束だ。言っていないのか迷う。

役割のことを言わなければ、平気だろうか。いや、ダメか。

『ダメよ!』

ダメだった。でも、友達に嘘をつくのは辛い。

「……あれは俺のガールフレンド。心配して、来てくれたんだと思う」

「ガールフレンド?」

言えるのはここまでだ。嘘ではない。

「出会いがないってボヤいてたくせに」

「たまたまあったんだよ」

玲二がなんとなく、疑惑の目で見ている。もしかして、読めるんじゃないのか……?

「でも、結局……遠くに放りださなかったよな、ライ」

「俺もそこは不思議に思っていたんだ」

頭に霧がかかったような状態で、無茶苦茶に飛んでいた。どこに

行くかなんて考えず、スピードをあげて……。

「玲二が呼ぶ声がして、気がついたんだ」

確かに、あの時、声がした。

「呼んだら？」

「呼んだよ」

あの状況で、俺を信じる声がしたんだ。それで、気がついた。自分が一体、何をしてるのか。

不思議に思っ、ずっと考えていた。

「呼んだら、正気に戻るとか？」

「違う……そんなわけはない。真夜は集まっている中でもかなり強い。多分、マスターとゲンさんについて3番目くらいに強いと思う」
「……」

「ついでにいうと、俺との相性は最悪なんだ。真夜は、心を操るエキスパート。俺は、そういう操作に滅法弱い。戦いも弱いんだけど……、とにかく操作されやすいんだ」

玲二は黙っている。昨日、マスターや真夜が言ったセリフを覚えているだろうか。

「呼ばれたくらいで目は覚めない。前にも1度やられたことがあるけど……本当にひどかった。何をしたかも全然覚えてなかったし」
「思い出したくない記憶だ。あれ以来、真夜もそのオマケの沙夜も、天敵だ。」

「じゃあなんで、昨日は覚めたんだ？」

「ずっと考えてたんだけど……」

なんとなく、こうなんじゃないかと思うことはある。

「推測でしかないんだけどな。玲二のおかげだと思う」

「俺の？……友情の力とか言わないよな」

「さあな。それももしかしたらあるかもしれないけど」

玲二がなんだか変な顔をした。

「お前の力……他人にも影響を与えてるんじゃないのか？」

「俺の力って……完全な遮断が？」

「昨日は、俺にかけられた真夜の力」

「無効にしたってこと？」

「推測だけだな。だから、テレゼのことも長い間、誰も感知できなかったんじゃないかと思って」

玲二の表情からは、今の話をどう思ったのか推測できなかった。勿論、心も見えない。そもそも本人には自覚のないものなんだから、ピンとこないのは仕方ない。

「なあ玲二、前に家に来た時、そして、この家に初めて来た時……、誰も俺のこと気がつかなかったんだ。お前と一緒にいること。お前の遮断は、すぐ近くの他人にも影響を及ぼしてるんじゃないかって思うんだ」

「そんな力なの？ 完全な遮断って」

「わからない。誰も知らないんだ。だからそういう可能性だってある。俺はそう考えてる」

1つ、気になっていることを聞いておこう。

「昨日、マスターの力は効いたか？」

「何のこと？」

「……マスターも癒しの力を持つてるはずだ。最初に来たの、マスターじゃなかったか？」

「そうだったと思う」

玲二は少し、考えているようだ。

「……確かに、背中に触られた。痛いだけだったけど」

「多分、治そうとしたんだろう。でも効かなかった……」

マスターは、まだ玲二とテレゼのことをちよつと怒っているふしがある。長い間、この辺りのリーダーを任されている最強の龍だ。言う事を聞かない新参者のせいで事件が起きるんだから、多分気を悪くしていると思う。

「でも、ミツとかいう人の力は効いたよ」

「ミツの力は特殊なんだ。あいつは近くに傷があつたら無意識に治

しちゃうくらいの、ひたすら癒しまくる存在だから……。そこに、敵とか味方とか、そういう自分の感情は入ってない」

「悪意がないから効くってやつ？」

「マスターにも悪意はないと思うけど、雑念は入ってる。だから癒せなかった。沙夜のテレパシーが届かないのも同じ。テレゼはお前の母親だから、純粹にお前のことを思ってる。だから、声が届くんじゃないかと思う」

玲二がまた、ちよつと変な顔をしている。

「じゃあライも、俺のことよっぽど思ってくれてるんだな」
「……」

そうか。そんなことを考えてくれたのか。

座っていた玲二が、ゆつくりと横になった。

「すまない。辛かったか？」

「ちよつと……頭使いすぎたみたいだ」
そう呟くと目を閉じてしまった。

少しすると、静かな寝息が聞こえ始めた。

今はちよつとでも休んだほうがいい。そつと音を立てないように部屋を出た。

階段の下にはテレゼが立っている。

「ライ、下で話しましょ」

わかった、と返事をして階段を降りた。

ふかふかのソファの前に、この間すっかり気に入ってしまった紅茶が用意されていた。

「ライの話、なかなか興味深かったわ」

「玲二の力のことか？」

「そう。私もいつか、誰かに見つけれられると思ってた。それはそれ

でいいと思ってはいたけど……。15年も気がつかれないと思わなかった」

「ありえると思うか？ 周りにも影響を及ぼすなんて」

「わからないわ。大体、完全な遮断っていうのがよくわからないわ。何故そんなに特別扱いするの？」

それは……。

「俺たちにとつては、それは王の力なんだ」

「王なんていないじゃない」

「そうなんだ。とにかく強くて、時々現れるって言われてる。玲二が現れてみんな混乱してるのはそのせいだ。だから、弱いなんて考えもしてない」

「その王がいたことなんてあったの？」

「俺は知らないけど。マスターやゲンさんは知ってそうだ。テレゼのところにはいないの？」

「王なんて表現する者はいないわね。強い者がリーダーになるけど」

「そっちのリーダーは？ どんな人？」

「私の父よ……。もう随分、長い間ね」

「ああ、そう」

だからテレゼもあんなに強いのか。

「こつちとは全然違うわね」

目の前の顔をじつと見つめた。玲二と、本当によく似ている。

そもそも、完全な遮断について、俺だってあまりよく知らない。

ただ、そういう力があるらしいこと、そして、やたらと強いものしかないことだと、教えられてきたただけだ。それを持つ者が、王になるんだという言い伝えがある。

「なあ……。なんで玲二に何も教えてこなかったんだ？」

テレゼは黙っている。

「最初からちゃんと知らせてれば、今みたいに悩まなくて済んだんじゃないのか？」

それに、力を伸ばす可能性だってあったはずだ。

「……それは」

悲しそうだ。なにか、よくない理由があるんだろうか。

「それは言えない」

心の中が、真っ黒い雲に覆われている。よっぽど言いたくないらしい。

「そうか」

これ以上は聞けない。こんなにあからさまに隠されているし、俺くらいの力で探るのは無理だ。

テレーゼは険しい顔のまま、こちらを向いた。

「リアとはどうなの？」

「え？ ああ……、おかげさまで、いい感じた」

「初めての相手？」

「ん……うん……うん」

変な返事になってしまった。どうもまいるな。こつこつなのは。

しばらくして、階段を降りる足音が聞こえてきた。

慌ててテレーゼが立ち上がる。

「玲二、起きたの？」

「うん」

よろよろと、玲二が姿を現す。

「ちよっとトイレ」

部屋の入り口を通り過ぎて、行ってしまった。

少しすると、戻ってきて隣に座った。

「大丈夫なの？」

「大丈夫だって……。母さん、最近ちよっと過保護じゃない？」

「過保護にもなるわよ。相手が悪いんだから」

玲二は少し考えて、悲しそうな顔をした。

「ごめん。心配かけたよな……」

「そうよ。あんなにボロボロになって……。しかも出かけちゃって」

「昨日は仕方なかった」

「……」

テレーゼは玲二を睨んでいる。もしかして、なにかあったのだろうか。

「俺、園田と付き合いたい……」

小さな声だった。玲二の苦しそうな顔が、目に入る。

「ダメよ」

「母さんが心配するようなこと、しない」

「ダメよ!!」

大きな声に、玲二が驚いた顔をした。

しばらく、静寂が続く。

「わかった……。もう、言わない」

両手で顔を覆っている。読めなくてもわかる。悲しみが、伝わってきた。

『普通の親子ならケンカになるんでしょうね……』

テレーゼの声が聞こえてきた。

『私、間違ってるのかしら?』

そんなの、俺にはわからない。なにか理由があるのなら、教えてやればいいのに。

それとも玲二に教えたら、よくないようなことなんだろうか。

「なあライ、俺、まだ聞きたいことがあるんだ」

「なんでも聞いてくれ」

そうは言ったが、顔をあげた玲二は真っ青だ。まだまだ回復していない。

「部屋で休みなさい」

テレーゼがそれだけ言った。

元氣のない足取りで、玲二が黙って階段を上がる。部屋に着くと、ベッドに倒れこんだ。

「ライ、俺、夢を見たんだ……」

ベッドに仰向けに倒れたまま、つぶやくような声で話します。

「園田は俺の、運命の相手だっと思ってたんだ」

運命の相手か。

「それって、俺のただの願望なのかな。それとも、本当にそうなのか……教えて欲しいんだ」

「……わからない、俺には。本人たちにしか、わからないことだ」

玲二は倒れこんだまま、全然動かない。

気分が落ち込んでいるからなのか、具合が悪いからなのか。……

両方かもしれないが。

「運命の相手でも、諦めることになってるって言ったよな」

「……ああ、そうだ」

「じゃあそんな相手に出会ったって、無意味なのかな？」

諦めることになったのは、血の薄い、中途半端な人間を増やさないためだ。そういう人間は、ある代で突然化けることがある。予測のつかない存在は、厄介だ。悲劇の元になる。だから、ここ最近では皆自重するようにしようということになっている。

玲二の質問に、何も答えられずにいた。

軽はずみだったかもしれない。運命の相手なんて、教えない方がよかったのかもしれない。

つい応援したくて話してしまったが……かえって苦しませているような気がしてきた。

「ごめん、ライ……。困らせるようなこと、聞いて」

ゆつくりと、玲二が起き上がった。ベッドの上に座り込んで、うなだれている。

「いや、玲二。お前は……強いな」

「どこが？ 俺は人間として普通に暮らすこともできないし、人じゃないものの中でも、いない扱いだ。亡霊なんだろう。強いとか弱い以前に、もう……中途半端すぎてどうしたらいいのかわからない」
「それでも、俺や家族や、友達を思いやってるじゃないか。普通なら、もうイヤになって何もかも投げ出して。だから、俺は玲二が強いやつだと思える」

「……ありがとう」

弱々しい声だった。

ゆつくりと、玲二がこちらを見た。ふつと微笑を浮かべて、聞いてきた。

「なあライ。ライって一体、何なの？」

「何って？」

「ライの本当の姿……すごく綺麗だった。金色に輝いてて」

「ああ」

どういう種類の鳥かってことか。

「ライって名前だから、雷でも落とすのかと思ってた」

「そういうことは出来ない。俺の名前は……」

玲二の手のひらに、漢字で書いた。

「来？」

「俺の羽根を拾った人間には、幸福が訪れる。福が来る、の来だ。」

「……本当に？」

「本当だ。昔はよく、追いかけられたもんだよ」

玲二は微笑んでいる。信じているのか信じてないのか、とにかく話を楽しんでいるようだ。

「みんな羽根を欲しがって？」

「ああ。あと、生き血を飲むと不老不死になるって勘違いされてな。飛べてよかったよ」

あの頃はほんとに、おちおち眠れなかったな。どこに隠れていて

も、誰かしらがやってきて見つかった。それで人間の姿になれるよう、努力したんだ。

「俺にもくれよ。ライの羽根」

「なかなか抜けないんだ。むしつたって無駄だぞ。取れるやつには自然に取れるけど」

「……素敵だな。ライの力、いいな」

そんな風に言われたのは初めてだった。

弱くて、気楽な、ただのんきなだけのヤツ。それが、俺だ。人ではない者たちの戦いに巻き込まれないように、波風立たせないように生きてきた。人間と同様、弱いやつは生き残れない。その中では何とかやってきた。今は争いが起こらなくなってきた、本当に助かっている。本来の姿に戻れないのは窮屈だが、そんな贅沢は言っていられない。

「ライ、いつまでも友達でいてくれよ」

玲二は小さい声で呟くように言った。

「そんなこと言わなくなつて、ずっと友達だ」

「今の俺が、ずっと付き合っていけるのはライだけなんだ……」

いつか自分にやってくるかもしれない、途方もない孤独。それを、玲二はもう覚悟しているようだ。

ほんの数ヶ月前まで知らなかった、自分の正体。

自分が人間ではないことを知らずに育ったこの15歳には荷が重過ぎるように思える。

玲二の家を出て、駅から電車に乗った。

電車に乗るのは好きではない。きつぷを買ったり、自動改札に入れたりするのが面倒だし慣れないから。

でも今日は仕方なかった。荷物を持っているから、小鳥の姿では移動できない。

ウォーターズのドアを開ける。マスターがこちらを見た。いつものようにカウンターに座る。

「紅茶頼むよ」

「……紅茶？　いつから飲むようになったんだ？」

「いいだろ、別に」

特にそれ以上追及はなく、上品なカップに注がれた紅茶が出てきた。

「玲二君のところに行ったのか？」

「ああ。行ったよ」

「具合は？」

「よくなかった。つらそうだった」

「傷は治ってたみたいだったか？」

「傷はよかったけど……。ちょっと、多かったんだろ」

普通の人間のお客さんもいる。小さい声で、「出血」という単語は抜かしておいた。

「カラスはいる？」

「ああ。いつものところにいるよ」

よかった。一応連絡はしたが、返事がなかったから来てないかと心配した。

紅茶を飲み干して、店を出る。地下への入り口に回って、中に入った。

「よお、ライ！」

入るなり、クロが出てきた。イヤだな。苦手なのに。

「何の用だよ？」

「お前にじゃない。カラスにだ」

奥のほうに黙って立っているカラスに、袋を差し出した。

「なんだ？」

「玲二の携帯電話、……直してくれないか？」

「そんなことを頼みにきたのか？　くだらない。私は便利屋じゃないと言ってるだろう」

睨まれて、身が縮む。クロ以上にこいつの方が苦手だ。

「お前らが呼び出したせいで壊れたんだ。玲二も不便な思いをしてる。直してやってくれ」

「あいつ、どうなったんだ？　もう回復したのか？」

クロがニヤニヤしながら口を挟んできた。

「いや……、まだ本調子とは言えない」

「へえ。若いのに、だらしねえなあ！」

クロは笑っている。カラスはこちらをまだ睨んでいる。

でも、負けるわけにはいかない。袋を、前へ突き出した。

「まったく……やはり昨日頼まれるんじゃないかった」

しぶしぶといった様子で、カラスが電話を受け取った。

しばらく待つと、電話は元通り綺麗な状態に戻っている。

「ありがとう」

ボタンを押して電源を入れてみる。電源が入った瞬間、電子音がしてなにやら画面に表示された。どうやら、ちゃんと動くようだ。

安心して、閉じた。

「玲二が、お前らと仲良くなりたいてって言った」

2人は、怪訝そうな顔でこちらを見る。意外だったようだ。

「なんだそれ？　仲良くってなんだよ」

「そのまんまの意味だよ。いちいち絡まれたらやっていけないんだろ」

「お前はいいのか？　俺たちのこと、怖いくせに！」

クロがひつかいてくる。そうだ。怖い。

「玲二のためなら我慢する」

「……そんなにあいつと、いつの間に仲良くなったんだ？」

カラスがフンと笑った。

「いつでもいいだろう？　とにかく、次来た時には話をしたいって
言ってた」

「そりゃあ俺たちだって、願ったり叶ったりだよ。なあカラス」

「ああ……」

そういつて2人はニヤリと笑う。やはり、玲二のことを知りたい
という気持ちが強そうだ。

「ライ、あいつ何歳なんだ？　お前は知ってるんだろ？」

「15だ」

「確証は？」

「ないけど……間違いないと思う」

2人は顔を見合わせている。

「珍しいな。新しいやつなんて、一体どれくらい見てないだろう」
ここのところ、新人の加入はなかった。本当に久しぶりだ。

ウォーターズに集まる仲間の中で、1番若いのは、ヒョウだ。そ
れでも、180年。

その次は俺で、308年。

「どう扱えばいいんだよ」

「ビギナーってことで……頼む」

「ビギナーねえ」

なにせ、15年だ。自分たちの何十分の一。何も知らなくて、何
もわからなくて当然なんだ。

「わかったよ。とにかくなんにもわからないよりマシだ。仲良くし
てやるぜ」

クロはそう言っ、玲二の携帯電話を勝手にいじり出した。

「……やっぱカラス、頼むわ」

「便利屋じゃないと言ってるだろう？」

そっいいながら、なにやらボタンを押している。カラスはこうい
う機械を騙すのが得意だ。

俺も、苦手だとか怖いだとか、そういうことを考えるのはもうや

めだ。

強くなるために努力をしよう。それが……友達のためになるのなら。

カラスに直してもらった電話を持って、また玲二の家を訪れた。家に入れてもらうと、玲二はリビングに降りてきていた。少しは心が落ち着いただろうか。

「玲二、これ」

「何？」

小さな袋の中を覗き込んで、少し驚いた顔をしている。

「俺の？」

「そうだ。直してもらってきた」

「……カラスに？」

「ああ」

「カラスとは、仲がいいの？」

「いや、良くない。俺はあいつが苦手だ」

「鳥同士なのに？」

玲二は黙って電源を入れて、ボタンを押している。

そしてしばらくいじった後、こちらを見た。

「黒は、クロ？」

「ああ」

「枯って？」

画面を見せてくる。

「カラスだ」

玲二は不思議そうな顔をしている。

「あいつは鳥じゃない。蛇だ」

「そうなのか……」

そう言って、ふっと笑った。

「じゃあ小鳥には、天敵だな」

「クロモネコだから。2人は苦手だ」

「それなのに、会ってきてくれたんだな。ありがとう」

「いいんだ。俺にできるのはこれくらい」

玲二はパタンと電話を閉じた。

「いいのか？ なにかきてたみたいだけど」

「いいよ。あとで見る」

「ライ、夕食食べていく？」

テレーゼがやってきた。ううむ……それはなんて魅力的なお誘いだろう。

「いや、今日は……いい。遠慮しておく」

朝からお世話になって、ちよつと颯摩モノだったかもしれない。さすがに夜ご飯までご馳走には……。

「そう？」

愛らしい彼女の顔が浮かぶ。でも、今日はちよつと我慢だ。

玲二に体を休めるよう言って、また空へと飛んだ。

悩める友人が早く回復するように。薄く姿を現している月に願った。

#29 「冬の日のデート」 &1t・いつき>

全然楽しくない誕生日が終わって、次の日。朝の準備を終えたところでメールが来た。

今日は休みます

玲二

……これが、2日続いた。

ああ。

どうしちゃったの、玲二くん？

昨日はパソコンから。そして、今朝は携帯からだ。

駅までの道が遠く感じられる。学校までも、いつもより長い。1人で歩くのって、こんなにつまんなかったっけ。

あの日玲二くんは真っ青だった。

思い切ってキスしてみたけど、触ったと思った瞬間、倒れた。まったく、うまくいったためしがない。……やっぱり呪われているのかも。

すぐに起き上がったけど、すごく辛そうだった。貧血だよって言うってたけど、おかしい。

2時間遅れでも来てくれたのはすごく嬉しかった。

女子3人と葉山君。どんなメンツだと思ったもんな。葉山君がいるなら、玲二くんだってきつとメンバーに入ってると思った。みんなそわそわしていたし。

だから、始まって30分したところでドアが開いた時、すごく嬉しかった。あやうく本城君なんか抱きつくところだった。

壊れてても、あのネックレスは宝物だ。「suki」の部分は、メッセージだと思うことにしてる。

でも倒れちゃったせいで、心配で仕方ない。

誕生日当日は家族に祝ってもらったけど、心から嬉しいとか楽しいとかそういう気分にはなれなかった。

左隣の席が2日連続で空いている。

「園田ちゃん」

「おはよう、葉山君」

「玲二はまた休みなわけ？」

シヨンボリ具合から判断してくれたようだ。

「うん……。どうしたんだろ？」

「何で休みかは聞いてないの？」

「……」

夏に感じた不安を思い出す。やっぱり、なにか病気なんじゃないのかな。

「葉山君は、何か聞いてないの？」

「俺？ 聞いてないよ、全然。メールも返ってこないしさ……」

「携帯、壊れたって言ってた」

「あ、そうなの？ それで返ってこないのかな」

でも、今朝は使えるようだったことを伝えた。性格的にもし送ってくるとしたら、昼休みとか放課後になってからだろう。

「寂しいねえ、園田ちゃん。玲二がいないとさ」

「ホントだね」

2人でなんとなく気持ちを共有してみる。

あとから中村さんがやってきて、また玲二さんはお休みですかー、

なんてのんきに声をかけてきた。

「もしかして、なにか病気だったりするのかな……」

「そんな心当たりある？」

「だって花火大会の時も倒れたし、一昨日もひどい顔色だった。それに、なにか言えないことがあるって言ってたし」

「うーん。まあ、そういう可能性もなくはないだろうけど」

もしそうだったらどうしよう。

「玲二くんは病気なんかないよって言ってた……。でも、やっぱり心配だよ」

「お見舞い、行ってみる？」

「え？」

「様子見に行ったら、ちょっとは安心できるんじゃないの？」

……ケガした時に、お弁当持っていたのを思い出す。

あんな無体なことはもう、できない。

「どうかした？　なんか赤いけど。お見舞いだよ？」

「わかってるよ……！」

つい、怒ってしまった。葉山君はビックリしている。

「やっぱり行かない。明日は元気になってるかもしれないし」

「ホントは行きたいんじゃないの、玲二の部屋にさ。あ、もしかして行ったことある？」

「え？　えっと……あるけど、ちょっとだけ」

「あるんだ。ちょっとだけなんてわざわざ言わなくていいのに」

葉山君はちょっとニヤリとした。

「ちょっとだけでもん！　ホントに！」

ムキになって言ったら、笑われてしまった。

でも、本当に明日元氣に来てくれたら、それが1番いい。

そして、その願いは叶わなかった。

「今日も休みかあ」

2人で、並んで考えた。

「今日クラブだよ、園田ちゃん」

「うん……」

でも、もう心は決まっていた。玲二くんの様子が気になって、クラブどころじゃない。

どうしたの？ とメールを送っても返事はないし、電話をかけてみても出てくれなかった。

「放課後行ってみる。部活は行かない」

「そう？」

黙って頷いた。

「俺も行つていい？ 一緒に」

「え……？」

葉山君もいつもよりちょっと元気がない。

「俺も部活は行かない。3日も休むなんて……長いでしょ？」

確かにその通り。長すぎる。どれだけ具合が悪いんだか、と思つてしまう。

「明日まで待てないから。一緒に行こうぜ」

「うん」

葉山君と一緒になら、無茶なことはできない。前回の事を思えば、その方がいいと思つた。もう愛の暴走特急に乗るわけにはいかないから。

「お見舞い何がいいかな。紅茶にあうもの？」

「ケーキとか食べるかな、あいつ」

結局、食べやすそうだという理由でアイスクリームを選んだ。季節に合わないひんやりした袋を提げて、インターホンを押す。

応答がないまましばらく待つと、玄関のドアが開いた。

「玲二！」

冴えない表情の玲二くんが出てくる。黙ったまま歩いてきて、門を開けてくれた。

「……いらつしゃい」

そう言つて、家の中に通された。よく見たら、王子様はパジャマに上着を着ただけの姿だ。

「家の人、いないのか？」

「うん」

お母さんと同じように、スリッパを出してくれる。リビングに通されて、葉山君と並んでソファに座った。

「お茶入れてくる」

「いいよ、無理すんなよ」

「大丈夫。もう、平気なんだ」

そう言つて、行つてしまった。

「手伝うよ」

慌ててキッチンに行くと、やっぱりすごく綺麗だった。ピカピカで広い。全体的に物が置いてない。全部ちゃんと片付けてあるみたいだ。

玲二くんは黙つてやかんを火にかけて、人数分のカップを棚から出している。

確かに火曜日みたいに顔色は悪くない。

「玲二くん」

「……3日も休んだけど、ほんとにもう平気なんだ。母さんが心配しちゃって、一応休んだだけ」

「そう」

「大丈夫だから、座つてて」

そこまで言われちゃしょうがない。戻ろう。

にしても、このキッチンもダイニングも、綺麗だな。テレビ見ながら食べるとか、絶対しなさそう。テーブルもすごく美しい。なんてったって色が上品だし。なにもかも私の家と大違いだ。玲二くん、うちに来た時どう思っただろう……。

ソファの方に戻ると、葉山君が壁にかかった写真を見ていた。小学生くらいの玲二くんがお父さんと落ち着いた笑顔で写っている。

「この頃から美少年なんだな。いや、生まれた時からか？」

もっと小さい頃の写真もあった。2歳くらいかな？　すごく可愛い。

小さいのにやっぱり落ち着いた微笑みを浮かべていて、玲二くんを象徴するような1枚だな、なんて思ってしまう。

「園田は紅茶でいい？」

台所から声がした。

「いいよ」

「良太郎もいいかな」

「いいぜー！」

写真を2人で眺めながら返事をする。少しして、トレイにお茶を載せた玲二くんがやってきた。

「何みてるの」

少し恥ずかしそうな顔をしている。

「玲二、お母さんの写真はないわけ？」

「それは母さんが飾ってるんだ。だから、俺と父さんだけでいいんだって」

「愛を感じるね」

お茶をテーブルに丁寧に置いて、玲二くんがソファに座った。ちやっかりすぐ隣に座る。

「玲二くん、これ、プリントとか……」

まずはお知らせやら課題やら、席にたまっていたプリント類を渡

す。

「ありがとう」

声がいつもより少し小さい。顔色は良くなったけど、全然元気はなさそうだ。

「なあ玲二、具合はもういいのか？」

「いいよ」

「で、どこが悪かったの？」

葉山君の質問に、答える声はない。

少し困ったような顔をして黙ったままだ。

「言えないような大事件でもあったわけ？」

「……そうだな」

意外な肯定だ。そういえば「危機一髪だった」って言ってたけど。

「へえ」

そんな返事をされると、かえってこれ以上追及できない。

「まあ、回復したんならいいけど。でも、心配したんだぜ？」

「そうだよな。ごめん……」

かつてない暗さだ。どうしたんだろう。もちろん、普段から明るいタイプじゃないけど。

しばらくの沈黙の後、玲二くんがゆっくり口を開いた。

「誕生会るとき、なんで本城がいたの？」

思わず、葉山君と顔を見合わせてしまった。

「お前……それでスネてたとかじゃないよな？」

「まさか！ そんなことはないよ。気になっただけ」

玲二くんは照れたのか赤くなって、その横で葉山君が大きな声で笑い出す。

「あはは……！ 本城はさ、島谷に聞いたんだってよ。あいつも4組だから、友香ちゃんが来て話してたの聞いたんだって」

そうだったのか。盗み聞きして呼ばれてないパーティに参加する

とは……。しかも隣に座ろうとしてきた。玲二くんの席なのに。めでたくトップオブ図々しいに認定だ。

「玲二、お前が来ないと園田ちゃんは大変だぜ。本城と中村と、両方相手しないといけないんだから」

「そうか」

玲二くんがこちらをチラッと見る。

「別に、大丈夫だよ。軽くあしらっちゃうから」

本当はムカつて来ることもあるけど、今は心配かけたくない。ちよつとだけ強がっておこう。

「今日、2人とも部活休んだの？」

「ああ。だって玲二の方が大事だもんね」

「うん」

「そうだ。アイス忘れてた」

大変だ。慌てて2人でガサガサと中身を取り出す。

「まだ溶けてない。よかったよかった。玲二は、なに食べる？」

食べるかどうかの確認も取らずに、葉山君が全部テーブルに並べていく。でも、ちゃんと返事があった。

「じゃあ俺、……ラムレーズンにする」

「大人だな。園田ちゃんは？」

「チョコチップ、いい？」

「いいよ。じゃあ俺ミント」

残った分をきちんと冷凍庫にしまって、3人で並んで座った。

学校であつたことを少し話す。玲二くんはうんうんと、黙ったまま頷いている。

いつも穏やかで落ち着いているけど、今日はそういうことではなく、とにかくテンションが低い。元気がないし、覇気もない。

それが伝わってくるせいで、何も聞けない。葉山君も同じ気持ちみたいだ。

具合が悪いんじゃないのは嬉しい。でもなんでこんなに辛そうな

のか……。

段々、いたたまれなくなってきた。

「なあ玲二、もう再来週から期末試験だろ。月曜から勉強会するんだ。お前も来いよ」

「……わかった」

その返事を聞いて、もう帰ることにした。

2人で、駅に向かって歩く。

「どうしちゃったんだろうな。玲二」

本当に、あの日何があったんだろう。

「やっぱり病気なのかな……。違うって言ってるけど、それくらいしか思いつかないよ」

「まあなあ。母ちゃんが心配してって言ってたし。怪しいよな」
揃って元氣のない足取りになってしまった。

「大体、パジャマで出てくる時点でおかしいよな」

「え？」

「あいつ、パジャマだっただろ？ あんな格好で出てくるキャラじゃないと思わない？」

その前にちゃんと襟のついたパジャマを着てるところがすごく可愛いと思っただけ。

「日中パジャマでダラダラするような男じゃないと思うんだけどな。ま、これはただのイメージだけど」

確かに、勝手なイメージだ。2人で少し、笑う。

「勉強会来るって言ってたし、来週は来るんじゃないかな、具合もいって言ってるし」

予想というよりも、これは希望だ。そうなってほしいと思って、言った。

「そうだな。じゃあ、そうっておくか。紅茶用意しとくよ」

駅に着いて、同志を見送った。
また来週か……。土日の2日間、悶々としてしまいそうな気がする。

再び立花家の前に立っていた。

何しに来たの？ って言われたら、どうしよう。
言われてもいいか。そう考えて、インターホンを押した。

しばらくして、またドアが開いた。

「……どうしたの？ なにか、忘れた？」

元氣のない玲二くんの顔が出てくる。

門のところまでやってくる姿を見つめた。

パジャマの上に、黒いパーカー。足元は適当なサンダルだ。見るのは2回目のはずなのに、さっきの会話のせいで、気になる。

「うっん。ただ、なんか……なんでもないんだけど」

門を挟んで、向かい合う。

どうしよう。話はない。また病気なの？ って聞くのもしつこい気がする。

黙って、門にかけられた玲二くんの手の上に、自分の手を重ねた。

—— 何かが頭の中に飛び込んできた。

暗い、木がたくさん並んでいる中に、……倒れている。

「玲二くん、ケガしたの……？」

「え？」

なんだろう。倒れているのは、玲二くんに見えた。
血が出ているのか、あの日着てたスーツの背中が黒く染まっていた。

「あの日、パーティの日……ケガ、したの？」

「……なんでそんなこと言うの？」

「なんでかな。一瞬、そんな感じがしたの」

あの日やってきた玲二くん、かつこよかった。スラっとした形の
スーツを着てて、決まっていた。
汚れたりかはしてなかったはずだ。

「そんなことないよ。ケガなんて、してない」

確かに、さっきのイメージの通りだったらこんな風に家にいら
れるわけなさそうに思える。パーティにだって来られなかっただろ
う。なんだったんだろう。変な感じ。

「わかんないけど、玲二くんが倒れてたのが見えた気がして……」

そう言うと、玲二くんはビックリした顔をした。

そして次に、すごく嬉しそうな笑顔を浮かべた。

今までで見た中で、1番幸せそうな、優しい笑顔。

「どうしたの？」

ここでこの笑顔は一体なんだろう。心配してるのに。

「ありがとう……。嬉しい、心配してくれて」

笑顔でそう言つと門を開けて、いきなり抱きしめてきた。

あわわわ……

なんだなんだ？

でも、嬉しい。

ぎゅうつと体をきつく抱きしめられたまま、しばらく固まった。

「玲二！？」

その声で、体がゆっくり離れる。

「おかえり母さん」

母さん！？ それは…… 大変だ！！

「あの……、こんにちは」

まずい。これは恥ずかしい。

「何してるのよ……。こんな外で、そんな格好で……」

「お見舞いに来てくれたんだ」

王子様はなぜかご機嫌なようで、笑顔をこちらに向けてきた。

対して、当然ながら…… お母さんはちよつと怒った顔だ。とてつもなく気まずい。

「私、もう、帰るね」

「うん。ありがとう」

慌てる私に、玲二くんは優しい笑顔のまま言った。なぜか手を取つて、ぎゅつと握ってくる。

「あとでメール送る」

「え？ うん」

手が離れてから、お母さんに一礼した。
気まずさのあまり、つい、走って帰った。

家に帰っても、ちょっと落ち着かなかった。

なんだろう。急に元気になったみたいだけど。すごく心配されているのが、嬉しかったとか？

だからってあんなに一気に回復するかな……。なんか、ヘンじゃない？

夕食を終えて部屋でゴロゴロしていると、電話が鳴った。
メールじゃなくて、電話の呼び出し音だ。

外側の小さなディスプレイに「玲二くん」と表示されている。慌てて電話を開いて、耳に当てた。

「はい！」

『園田？』

「うん。玲二くん……どうしたの？」

『明日か明後日ヒマ？ この間言ってた、船に乗りに行こう』

うわー

デートの誘いだー

「うん、うん、ちょっと待ってて！」

慌ててチケットを確認する。確か、使える日程が裏にかかれていたはずだ。

明日、明後日……。

どちらも、使える。ただ、行く前に予約が必要と書かれていた。

受付の電話は17時までで、今日はもう終了している。

「じゃあ、明後日。予約が必要だから、電話しておく」

「そうか。何時？」

「えっとね、11時出港だって。ここからだと50分くらいかかるかな……」

駅からバスで乗り場の近くまで行けるはずだ。多分そのくらいで着く。

「じゃあ9時半頃、駅で待ち合わせよう」

「うん……」

突然の積極的な誘いに、正直戸惑う。もちろん嬉しいけど、いきなりのこの変わりようはなんなんだろう。

「イヤだった？ また、次でもいいけど」

「イヤじゃないよ。今日、元気なさそうだったから……、どうしたのかと思って」

「……園田の顔みたら元気出た。良太郎が邪魔だったのかな」

「ええ？ そんな事言ったら葉山君ガツカリするよ」

電話の向こうで、ははは、なんて笑う声がした。珍しい。声出して笑ってる。

落ち込んだ反動で一気にテンションが上がってるのかな。

なんだか花火大会の日のことを思い出す。

あの日もやたらめったらテンションが高かったっけ。

「あんまり張り切ると、また倒れない？」

「ええ？ なんだよそれ……。そんなことないよ」

もしかして、自覚がないのかもしれない。

ちよつとだけ不安もあるけど、でも、元気が出たなら何よりかな。

「楽しみにしてる。じゃあ、お休み」

「うん。おやすみなさい」

初めて電話で話した。嬉しいような、なんだか困惑してしまうよ

うな……複雑な気分だ。

あの玲二くんが倒れているように思ったの、なんだったんだろう？
心配しすぎて、幻覚でも見ちゃったのかな。

日曜日、張り切って家を出た。

昨日1日中、何を着ていくか考えて、考えすぎてこれでいいかわからないけど、とにかく全力を尽くした姿と思われるコーデイナートにしてある。

上は茶系のボードーのニットに、ミニスカート。パーティでみんながくれた、ミリタリー調のファー付きのコートに、ブーツを合わせた。千早がオマケにつけてくれた、保温系のレギンスも履いてみた。確かに薄いのにあったかい。

もちろん、もらったネックレスもしている。

駅前に行くと、もう玲二くんが待っていた。いつもの木の下に立っている。

「玲二くん、お待たせ」

優しい笑顔が迎えてくれた。

「園田！」

よかった。元気そうだ。

同じような雰囲気、ミリタリー調のコートを着ている。色はグレーとカーキで違うけど、なんだかお揃いにしてきたみたいになっ
てしまった。ちょっと恥ずかしい。

「こういうの、流行ってるの？」

「そうみたい」

「合わせてきたみたいだな」

そう言いながら、ニコニコしている。イヤじゃないってことか。

なら、いいかな。

「バス、あっちだよ」

一緒にバス停に移動する。あと5分ほどで来るらしい。

「園田は？ 船なんて乗ったことあるの？」

「ううん。ないなあ。むかーし、赤ちゃんの時に乗ったって言われたけど」

「酔わないといいな」

「うん。それに、晴れてよかったよね」

空は晴れ渡っている。日向はぽかぽかとして暖かった。

バスに乗って、2人で並んで座る。なんだか、久しぶりだな。こういうの。

プールというか、遊園地以来……。そういえばあの時、なんだかしょんぼりして帰ったつけ。

玲二くんは外を見ている。横顔が相変わらずカッコイイ。世界で一番好きな顔だ。

「ねえ玲二くん……」

「何？」

微笑んだような顔で振り返った。やっぱり、不思議な気がする。

「昨日、どうしてあんなに急に元気が出たの？」

「え？」

「だって、葉山君と一緒にいったときは、本当に元気なかったから。結構真剣に2人で心配して帰ったんだよ」

「そうか。……そうだよな。ホント、ごめん。俺、ちょっと……すぐく落ち込むことがあったんだ」

目を伏せて、寂しそうに言う。

「世界にたった1人きりになったみたいなのがしてたんだ。だけど

……」

「だけど？」

「昨日、希望が見えたから」

希望が見えた……。

なんだかすごく、大げさな話だ。世界でたった1人きりだなんて、そんなに悲しい気持ちになるなんてどんな大事件があったんだろう。

「園田のおかげで」

「私の？」

これには返事をしないで、ニコッと笑った。なんだろう。なにかしたっけ？

「ありがとな」

「なんだろ。そんなに言われるようなことあるかな……？」

これにも答えずに、またニッコリしている。ただ、どこかちよつとだけ寂しそうな感じもした。

バスが海沿いの道を走っている。遠くに船がたくさん並んでいるのが見えた。

1番最寄の停留所で降りる。乗り場までは少し歩かないといけないうだ。

海風が吹き付けてくると、少し寒い。

夏は海水浴場になるビーチが少し遠くに見える。チラホラとサーフボードに乗っている人の姿が見えた。

そんなワイルドなところとは違って、船着場近くは少し大人な雰囲気だ。オシャレなカフェがあったり、レストランがあったり。極めて付けに、結婚式場まである。

海に見える結婚式か。夏とか、明るいシーズンには良さそうだ。

式場の入り口には「シー ブリーズ・ウェディング」なんて書か

れている。

美しいウエディングドレスの写真が並んでいて、ついじつと見入ってしまった。

「そういうの、興味あるんだ」

「え？ うん。そうだね……」

そういえばこの間、すっかりお嫁さんになりたいとか口走ったんだっけ。

「あの、だってさ、すごくキレイじゃない？ やっぱり特別っていうか……」

妙に焦ってしまう。

「そうだな。園田が着たら、すごくキレイだろうな」

王子様はごく普通の顔でそんなことを言ってきた。

困るな。そんなこと言われたら、期待しちゃうじゃないか……。

そんな期待をスルーして、玲二くんは歩いて行ってしまった。慌てて、後について歩く。

確かに、男の子はきつと興味ない。僕、将来真っ白なタキシード着るのが楽しみです！ なんて聞いたことがない。

しばらく歩くと、豪華客船ことクリスタルティアラプリンセス号の元にたどり着いた。

「……豪華客船ね」

確かに大きな船だ。でも「もしかしたら豪華はいいすぎかもしれない」くらいに見える。

もう受付は始まっていて、玲二くんと一緒に棧橋を歩いて乗り込んだ。

乗船しているのはどうやら大人ばかりみたいで、若くても20代後半くらいに見える。10代の、しかも高校生のカップルなんて他にはいなさそうだった。

「なんか緊張するね」

「大丈夫だよ。食事もコースとかじゃないんだろ？」

「そっか。ビュッヘだもんね」

「ビュッフェね」

しまった。噛んでしまった。

「ビュッ、フェ、って言いにくくない？」

船内のラウンジに入ってみると、クリスマスツリーが早々と飾られなんとも浮かれたムードになっていた。ちょっと座ってみると、まもなく出航するというアナウンスが流れた。

「せっかくだし、外に出ておこよう」

「ああ。行こう」

2人で船首の方へ向かう。

海からの景色はなかなかだった。ビルが立ち並んでいたりと、ウォーターアイランドが少し遠くに見えたり、伯父さんの水族館も見えた。ビーチにはウェットスーツに身を包んだ人たちが歩いている。

甲板には何組もカップルが景色を見ていて、堂々といちゃついている。

風が吹いてくると、少し寒い。ブルッと震えると、玲二くんが自分の首に巻いていたマフラーを取って、首に巻いてくれた。

あったかい。

ついでに、いいにおいがした。玲二くんのおいだ……。

「ありがとう」

「うん」

玲二くんは遠くを見たまま返事をしている。

出港のアナウンスが入り、船が動き出す。湾内を2時間かけてグルッとまわるらしい。

15分後からビュッフェもスタートする。

海風に吹かれながら海上からの光景を見つめていると、玲二くんが口を開いた。

「なあ園田……」

「何？」

「もし、命と引き換えにしても欲しいって思えるくらいのものがあつたとして……」

「うん」

「それが手に入るとしたら、でも、かわりに今の生活を全部捨てなきゃいけないとしたら、どうする？」

「ええ？」

玲二くんは真剣な顔でこちらをまっすぐ見ている。

「今の生活って……、家族とか友達とか、全部？」

「うん。……全部」

「それは困っちゃうな」

この質問の意図はなんだろう？　こんな心理テストみたいなものしてくるなんて。

今の玲二くんの悩みと、何か関係あるのかな？

将来の夢？

そのために、今の生活全部捨てなきゃいけないとか？

海外留学するとか？

あれ。もしかして、ビンゴじゃない？　翻訳の仕事したいんなら、充分考えられる。

慌てて隣の顔を見る。

……やっぱり真剣な顔だ。

いや、いまだき海外行くくらいで全部捨てるなんて。そんな馬鹿

な。

大体そんなセンチメンタルな考え方、玲二くんらしくない。

「こんな質問、答えられないか」

フッと笑って、つぶやいた。

「ごめん。忘れて」

いいのかな。……なんか、すごく大事な質問な気がする。

ビュッフェが始まるというので、レストランの中へ移動した。

たくさんのカップルが席についている。なんだか妙に幸せムードの人が多い。

「俺待ってるから、先に取ってきてきたら？」

「え？ 私が待ってるから、取ってきていいよ」

「じゃあ、2人分ね」

玲二くんは笑顔で立ち上がった。

なんか、いろんな種類をキッチリちよつとずつ取ってきてくれそうだ。

待っているといきなり、隣のテーブルから声がかかった。

「こんにちはー」

20代後半くらいに見えるカップルが、揃ってニコニコしている。

「彼、カッコイイね。彼女は若そうだけど……いくつなの？」

「え？ ……16ですけど」

なんだろう突然。そんな質問するなんて。

「えー？ ホントに？ 若そうだって思ったけど、ホントに若いんだ。そうかー」

2人ですごいね、なんて微笑みあってる。

「学生なの？ 彼も？」

「はい。同じ学校です」

今度は、おおー！ なんて言っている。

きよんとんとしていると、後ろからどうぞーと声がした。振り返ると、ビンゴのカードを手渡される。

こんなオマケつきだったのかな？

玲二くん分もなのか、2枚あった。

「この後30分くらいしたらビンゴ大会が始まりますので」

カードを配るお兄さんが笑顔で言いながら、他のテーブルにもカードを配っている。

「1等ってなんですか？」

隣のカップルの男の方が質問する。

「旅行券10万円分です！張り切って当てちゃってくださいね！」

へえ……そんな豪華なビンゴ大会があるなんて。知らなかったな。チケットには何も書いてなかったけど。

玲二くんが持ってきたお皿を、テーブルに並べていく。

予想通りだ。色んな種類の料理が同じくらいずつ、キレイに盛りられている。

「ふふっ」

「……なに？」

「すぐ玲二君らしい盛り付け方だなと思って」

「俺、こんなイメージ？」

「うん」

お楽しみのランチの始まりだ。玲二くんは席に着くと、置かれているカードに気がついた。

「それは？」

「なんかね、ビンゴ大会があるんだって」

「へえ」

まずはピラフを一口食べてみる。

うーん

美味しくない。

顔をあげて向かいを見ると、やっぱりなんだか微妙な顔だ。色んなものを少しずつ食べてから、玲二くんが口を開いた。

「これなら、弁当作ってもらった方がよかったかも」
そう言つて、ちょっと苦笑いしている。

なんか嬉しいな。

お料理がイマイチなのは悲しいことだけど、こんな風に言ってもらえたら、幸せだ。

「全部ちよつとずつにしたのは正解だったね」

「……そんなつもりはなかったけど」

2人でちよつとずつ片付けて、早々にデザートを取りに行った。

「これもイマイチだったらどうしよう？」

他のお客に遠慮して、小声で話す。内緒話つてなんだか、ちよつとイイな。

「じゃあ、1つずつはんぶんこにするか」

「うん」

案の定、デザートも残念な味だった。

うーん。やっぱり、豪華客船は誇張表現だったな……。

残念なビュッフェを終えて、お茶を飲む。玲二くんは珍しくコーヒーを飲んでいた。

「コーヒー飲むんだね」

「飲むよ。紅茶飲んでガツカリするのモイヤだし」

ガツカリビュッフェはドリンクもやっぱりガツカリ味だった。確かに、好きなものがマズイっていうのは悲しい。

ここまでガツカリだと逆に面白い気分になってきて、2人で顔を見合せて笑った。

#30 「運命の人と、秘密の予言」 &1t;玲二>

「いやー、すごかったね」

いつきはちよつと興奮した様子だ。

ビンゴ大会で、2人して2等と3等の賞品をもらっていた。

2等はナントカというブランドの腕時計で、3等はなんちゃらというブランドのバッグだった。どちらも若い女性に大人気らしい。料理がガツカリだった分、これは嬉しいハプニングだった。もちろん、両方いつきのものだ。俺には必要ない。

船が栈橋に着いて、2人で1番に降りた。

「おなかすいたね」

ビュッフェの後とは思えないセリフをいつきが言う。

「そうだな。どこか、寄っていこう」

来る途中に、レストランがあった。ランチだったら、そんなに高いこともないだろう。

2人で歩き出すと、近くにバスが停まっていた。

「結婚式場巡りツアー 豪華クルージング&ビュッフェ付」

車体にそんな文句が書かれている。

そんなツアーがあるんだな。よく見ると、ドアの横の部分にポスターが貼ってある。

「オータムフェア 豪華賞品が当たる！ お楽しみビンゴ大会も開催！」

もしかして、あのビンゴ大会は……この参加者用のものだった？

「園田、あれ」

「え？」

いつきもポスターを見て、驚いた顔をしている。

「玲二くん、急ごう！」

「え？」

いつきに手を引かれて走り出した。2人で、船の並ぶ横を走る。

ツアー用のバスから遠ざかったところで、足を止めた。

「あー、ビックリした……」

そういいながら、いつきは笑っている。

「もしかしてあの船に乗ってた人たち、みんなあのツアーの参加者だったのかな？」

確かにあの幸せムードのカップルだらけの状況はそうだったかもしれない。確認されなかったけど、もしかして貸切だったとか……。「どおりで、16歳で驚くはずだよ」

いつきが、隣のカップルに年を聞かれたと教えてくれた。

式場巡りツアーなら、確かに16歳が混じっていたら驚く。しかも同じ学校だなんて、なかなかセンセーショナルなカップルだ。

海辺のイタリアンレストランに入って、2人で食事をした。こんな風に落ち着いた店で2人で食事なんて初めてのことだ。これまでは、高校生らしくファーストフード的な店ばかりだった。

出てきたパスタランチは、先ほどの船の上の食事と比べて抜群に美味しい。いつきは笑顔だ。横には、ちょっとこっさりさせられているビンゴの賞品が置かれている。

あのマズイ食事のかわりにもらったと思うのか。大体、勝手に確認もせずにカードを配ってきたんだから。まあ、いいだろう。

「玲二くん」

デザートのティラミスを食べながら、いつきが急に真剣な顔を
した。

「さっきの質問の答えだけど」

さっきの質問？

「全部、捨てられる。家族も、友達も……、全部捨てられるよ」

「……」

「そのどうしても欲しいって思えるものが、玲二くんだった場合」
そう言って、笑った。

胸に、ズンと大きな衝撃が走る。

一昨日、家に来てくれた時。あの時と同じ衝撃だ。

いつきは見えたと言った。あの日、何があったのか……。

父さんと同じだ。父さんも、ある日急にわかったと言った。

正直言って、信じていなかった。けど違う。本当だったんだ。

運命の相手なら、わかってくれる。

本人たちにしかわからないと、ライは言った。本当に運命の相手
かなんて、絶対わからないと思っていたのに……。

「あの質問の後、ずっと考えてたんだ。なんかひっかかったちゃって
……」

いつきは、下を向いて紅茶に砂糖を入れた。スプーンでクルクル
まわしている。

「えへへ。ちょっと、大げさかな？」

首をかしげて、ニッコリ笑った。

あの時と同じ、どうしようもなく幸せな気持ちが胸の奥から沸き
上がってくる。

「いつき……」

目の前の可愛い顔が、少し驚いた表情になった。

俺は1人じゃない……。

思わず、目を閉じる。今なら確信を持っていえる。

運命の相手だつて。

相変わらず、気持ちを伝えることはできない。相手が誰だろうと、それがどうしようもなく惹かれる相手だろうと関係ない。薄い血の拡散はダメだ。人生の見通しの立たない中途半端な自分は、誰とも深い関係にはなれない。

状況は絶望的なのに、なぜか心が落ち着いている。

ただ、彼女がいるだけでいい。同じ世界に生きていてくれるだけで、それでももう……いい気がする。

「……玲二くん？」

「ん？」

「いつきつて呼んでくれたでしょ？」

ニコニコ顔だ。

「え？ そう？」

「あれ、呼び方変えたわけじゃないの？ 無意識に？」

「俺、名前で呼んだ？」

「呼んだよ。やだなあ、もう。ぬか喜びさせて！」

笑いながら、ちよつと怒ってるフリなんかしている。

「2回目だからね！ 名前で呼んだの。気がついてないみたいだけ
ど」

「2回目？」

いつきは首をちよつと斜めに傾けて、ニツコリ微笑んだ。
「いつでも下の名前で呼んでね」

ああ。

やっぱりダメだ。

何言つてんだ。

生きていてくれるだけでいいなんて……そんなわけあるか!!

海に向かって走り出したい。

太陽に向かって、バカヤローって当り散らしたい。

ズブ濡れになって、全力で叫びたい。

いつきが好きだ!!

「玲二くん、どうかな？ さっきの答え、正解？」

「え？」

「玲二くんのためだったら、私……どんな試練でも耐えちゃうからね」

微笑んだ顔の中に、真剣さのかけらを感じる。

正解だ。求める答え、そのものだった。

俺だつてどんな試練にも耐えられる。もしも、いつきと結ばれる方法があるなら……。どんなことだってできる。だけどその方法が見つかからない。

自分の中にある唯一の力……。それが全ての邪魔をしているんじゃないか。

なんなんだろう。こんな力、何の意味もない。これのせいで誰に

も、わかってもらえない。

「玲二くん、どうしたの？」

いつきが顔の目の前で手をパタパタと振っている。

「また、具合でも悪い？」

「いや、ごめん。ちよつと、考え事」

「何？　もしかしてさっきの答え、ちよつと重すぎた……？」

そんなことはない。正解の場合だけ教えてあげられないなんて、最悪のクイズだった。

「いや、……そんなことない。嬉しいよ」

いつきは目をクリクリつとさせて、少し照れたような笑いを浮かべた。

「急にぼんやりしちゃって。まだ、調子悪いの？」

「……ちよつと、衝撃的で」

「何が？」

「いや、ビンゴの当たり具合が……」

「あはは。確かにね。まさか2等3等が当たるなんて。あのツアーの人たちには悪いことしちゃったかな」

ごまかしてしまった。

いや、違う。

いつきにはわかってもらえるんだ。俺の心の中。

どういう風にしたらわかってもらえるんだろう？

家に来た時は、手に触れた。さっきも、手をつないで走った。じやあ、触れたらわかるのか？

でも今までも、触れるくらいのことは何度もあった。触れればいってもしんじゃないはずだ。

「おい。れいじくーん！」

また、目の前でいつきの手がぱたと揺れている。

しまった。考えすぎている。もうやめよう。

いや、家に帰ったら父さんに聞こう。運命の相手に出会った先輩なんだから。でも母さんがいたらいい顔をしないかもしれない。

食事を終えて、2人でまた歩き出した。

「美味しかったね」。でも、さすがに食べ過ぎたかな？　ちよっと苦しい」

「そうだな」

文句は言ったが、ビュツフエで取ってきたものは残さず食べていたから、胃の中が満タンになっている。

「ちよっと歩こうか」

「うん！」

海が見える道を、並んで歩く。

物は試しだ。手を取って、強く握った。

「……」

ちよっと赤い顔をして、いつきがこちらを見る。黙ったまま、並んで歩く。

「玲二くん……」

「なに？」

「もう、行きたい大学とか、決まってるの？」

「え？」

「将来の夢、はっきりしてるんだったら決めてあるのかなって思ってた」

「ああ……」

つい、そんな話かとガッカリしてしまった。

「いや、まだ全然決めてないよ」

「そうなんだ。……でも玲二くんだったら、どんなところでも受かつちゃうよね」

ちよつと前までは、行きたいと思っている大学や進路はあった。でも、将来がどうこう言える身分ではなくなつて、その希望もすつかり忘れかけている。

「私、ついお嫁さんなんて言つちやつたけど……。お嫁さんって職業じゃないし」

「はは」

確かに。職業ではない。

俺の笑い声を聞いて、いつきがじつと、真面目な顔で見つめてきた。

「……なに？」

「この場合、お嫁さんじゃなくて主婦ってことになると思うんだけど……。それって、結婚してくれる相手がいて、更に主婦でいてくれって場合だけだと思うから」

一般論で言つてるわけじゃなくて、2人の場合の話つてこと、だよな。この、微妙な空気は……。

いつきは可愛らしい唇をちよつとだけ噛んで、瞬きもせずにごちらを見ている。

「……」

参つたな。なんて返事したらいいんだろう。

本気で、結婚したいって思つてると考えていいのか？

「まだ16だろ？ その発想……。早すぎない？」

「え？ ……まあ、そうだね。そっか」

目をパチパチさせている。下を向いたり、上を向いたり、斜めになつたりして、そして最後にニッコリ笑つて言った。

「そのくらい、玲二くんのこと、好きつてことだからね！」

いつきの投げるハート型の爆弾は、段々威力を増しているような気がする。しかも命中率は100%だ。この調子だと、そろそろ爆死してしまうかもしれない。

今の一言で、もう耳まで熱い。

「そろそろ帰ろうか……」

「えっ、もう？ …… もうちょっと歩こうよ」

腕にぎゅっとしがみつかれる。

「ずっと心配してたんだよ。色々知りたいことがあるのに、追求しないであげてるんだから」

可愛い顔が、近い。

近いし、……腕に当たってる。

「わかった」

絡みついた腕を慌てて外す。ただ外すだけなのは悪い気がして、手をつなぎなおした。

海辺を歩いて夕陽を2人で見てから、家に帰ってきた。

今日は危なかった。できないとわかっていても、なにかしらアクションをしたくなってしまう。

「玲二か？」

玄関を開けて靴を脱いでいると、声がした。

「ただいま」

リビングをのぞくと、父の姿はない。じゃあ、書斎にいるのかと思ったら台所に姿があった。

「おかえり。今日はどこに行ってたんだ？ デートか？」

「え？ ……うん」

父さんは笑顔だ。なんでわかるんだろう。

「母さんは？」

「買い物だよ」

「チャンスだ。今のうちに、話を聞いたらいい。」

「ただいまー」

すぐにドアの開く音がした。仕方なく、2人で玄関へ母を出迎えに向かった。

買い物袋から食材を出してしまう。

「今日はビーフシチューだから」

コンロには、すでに鍋が置かれている。弱火でコトコト煮こまれているようだ。

「今日も楽しかったみたいね」

母の方を振り返ると、父のとはまったく違った印象の笑顔だ。

「おかげさまで」

冷蔵庫のドアを閉めて、台所から出る。そこに、母さんがドンと立ちはだかった。

「……何にもしてないよ。ちゃんと知ってるんだろ？」

「ええ、もちろんよ。でも、恋愛はダメって言ってるのに」

目が険しい。こう言われるのはわかっていた。だけど今日は、気分がちよつと高揚している。

「男とだったらキスしてもいいのに？」

「そんな屁理屈言うなんて、あなたらしくないわね」

「反抗期なんだよ」

母の横をすり抜ける。

「玲二！」

呼びかけに応えずに部屋に戻ろうとすると、右手を掴まれた。想像以上の強い力で引つ張られ、廊下で派手に転んでしまった。

転んだ姿勢のまま、母さんの顔をちよつと睨む。

「玲二、せめて、１７歳になるまで待つて」

「１７？」

「そうよ。再来年の誕生日。それまで待つて」

「前は２０歳つて言つてたのに」

冷たい廊下の床に手を着いて立ち上がる。

「１７だろうが２０だろうが、俺が中途半端なままだったら……どうにもならないんじゃないの？」

「考えるわよ。それに、相手の覚悟だつて必要なの。あの子だつて、まだ１６歳でしょ？ 人生の決断を迫るには早すぎる。大体、これからあなた以外の男を好きになる可能性だつてある」

「そんなことない！」

初めて息子の怒鳴り声を聞いた両親が、揃つて驚いた顔をしている。

「園田は……俺の運命の相手だ！ 全部受け入れてくれる。父さんと母さんならわかるはずだ」

「そんなの、彼女がそうだなんて……」

「わかつたんだ。園田は俺の心の中をのぞいた。ひどい怪我をしてたこともわかつた。それに、家族も友達も、全部捨てても構わないつて言つてくれたんだ！」

母さんはますます険しい顔をしている。

父さんは驚いたような、だけど少し嬉しそうな顔だ。

「本当に？ あなたの心を見た？ １００％そうだつて言える？」

「あの日ケガして倒れてたのが見えたつて……」

「誰かがわざと、そう彼女に思わせたつてことはない？」

「え？」

誰かが、わざと……？

「面白がつて、運命の相手ごっこさせられてるだけかもしれないわよ」

「母さんがやったの？」

「……どうかしらね」

いや、それはない。だって、あの時いなかったはずだ。いや、すぐに帰ってきた。でもそんなこととしてメリットなんかない。それとも、そう見せかけて後からガツカリさせるとか……？

考え出すとキリがなかった。そうなるともう言い返す言葉もない。黙って振り返って、部屋に戻った。

部屋の真ん中の小さなテーブルに、新しいノートを広げる。

落ち着くんだ。

喜んだり、落ち込んだり、……怒ったりしている場合じゃない。まだ、何もわかってないじゃないか。世界のことも、自分のことも。

いつきのことは忘れよう。運命の相手のことも、保留だ。全部それと絡めるからわからなくなるんだ。

とりあえず、書き出す。

俺は、人間じゃない。母が狼で、父が人間。生まれたのはドイツらしいけど、育ったのは日本だ。今、15歳。血液型は知らないけど、誕生日は2月6日。これは、間違いない。

変身はしない。できるのか、できないのかはわからない。今はできない。

クロや母のような動きはできない。多分すごく速いんだろうけど、あの特別な動きを見ることができない。戦いは無理だ。

母は900歳前後。寿命や老化のスピードは人間とまったく違う。自分はどうなるか、わからない。

心の中は見えないらしい。他者からの超能力的な力は、基本的に効かない。効くものもある。母とライのテレパシー。いや、あの白い鳥……。あの鳥も多分聞こえる。ただし、近くにいないとダメだ。ミツの、癒しは効く。マスターのは多分効かない。百井の顔を隠したり、男を誘惑する力は無効。

人間になるのは不可能……。これはわからないな。もしかして、相手によっては可能なんじゃないか？

人ではない者たちができる、互いの存在の感知。俺だけはされない。どこにいるかわからない。そして、俺からもわからない。

純粋な人間は惹き付けられる。いつきと、良太郎と、……蔵元さんだ。どうしようもなく、好きになってしまいうらしい。本城もちょっと怪しいけど、あいつはまあいい。

……書き出してみると、わからないことだらけだ。思わず、笑いがこみあげてきた。

いや、普通の思春期の少年だって自分のことなんか全部わかるもんか。それと同じだ。

次に、疑問を書き出す。

まずは、完全な遮断のことだ。母や祖父は知らないらしい。日本固有の特別な能力……。ライではなく、マスターやゲンさんとやらに聞いた方がよさそうに思える。問題は、いきなり聞いて教えてもらえるかどうか。大体話を聞いたところで全部が真実かはわからないから、ライと一緒に聞くとかそういう工夫が必要だろう。

「心理的な操作が無効」だったはずが、「すべての操作が無効」になっている。それどころか、他人への影響もあるかもしれないところまできた。もう少しヒントが欲しい。知っている人物に当たる

必要がある。

神様級に強いやつが持つ力と思われるのと、ライは言った。他の面々も、そんな風に信じているんだろうか？ 百井が最初に、強いやつみたいな扱いをしてきたのもそのせい……？

そして、力の覚醒だ。自分の中に眠る力の可能性。知りたい。知
る方法は何かないのか？ これはまったく不透明。1番難しい。

他には……なにがある？ 気になること全部、書き出すんだ。

あの、ウォーターズの面々。彼らの正体や、使える力……。把握
できないかどうか。

俺の行動の監視方法。母さんにだって、生活がある。買い物に行
ったり、料理したり、家事だってこなしている。ずっとどこから
自分で見ているなんてことはないと思う。誰か、協力者がいるのか
でも、この間の事件で見当はついた。あの白い鳥だ。ライのあの
様子といい、2階に秘密があるに違いない。確認してみよう。

そして俺に、人間じゃないことを隠してきた理由。よく考えたら、
わからない。最初からわかっていた方が育てやすかったんじゃない
のか……？ これは、両親に直接聞こう。

他には何かないか。少しでも多くのことを知るんだ。

そうだ。

17歳。さつき、17歳まで待つて、と言った。夏には20歳ま
でと言ったのに。

妙に引つかかる。なんでだろう。

次の誕生日で、16だ。来年の2月。今は15歳……。

『まだ……15だもの。……大丈夫よ』

そうだ。あの時の母の言葉。あれのせいだ。どういう意味だったんだろう。

部屋を出て、向かいに見える扉。あの部屋は誰も使っていない。ドアノブに手をかける。鍵はかかっていない。そっと開けて、中へ入る。

自分の部屋とは対称の位置に、電気スイッチがある。指に力を入れて、パチンと鳴らす。

部屋にはなにもない。誰かいた形跡もない。

ここじゃないのか？ それとも、隠れているのか……。

窓は閉まっている。部屋の中は静まり返っていた。

この隣の部屋は、クローゼット扱いになっている。衣替えの時には、自分も入る。思い出の品なんかも置いてあるはずだ。あそこにライが本来の姿で入るのは難しいように思える。俺の隣の部屋も同じだ。物置になっているから、あの大きさのライが過ごすとしたら狭すぎる。2階にある4つの部屋の中で、怪しいとしたらここだと思っ

部屋の中を歩く。カーテン以外、何もない。不思議に思っていた。下にある両親の部屋よりも、こちらの方が広い。寝室にするならこっちにした方がいいのにと考えたことがあった。

年頃の息子への配慮があるのかなんてちよつと前に思ったこともあったけど……。なにか秘密があるんじゃないだろうか。

でも、とにかく今は何もないらしい。仕方ない。

部屋を出て、階段を降りた。
さっきの親子喧嘩の続きだ。

1階に降りると、キッチンの方から話し声がした。母さんは台所に、父さんは食卓の椅子に座っている。

「もうすぐご飯よ」

「わかった。じゃあ、その後で質問があるから……隠さずに全部教えて欲しい」

母さんは相変わらず険しい顔だ。

「そんな約束はできない」

「そう」

まあいい。とにかく、聞くだけだ。

父の向かいに座る。

「父さん、1つ聞いてもいい？」

「なんだ？」

「母さんの秘密がわかった時、どうしてたの？」

「……どうしてたって？」

「どういう状態の時に、いきなりわかったのか教えて欲しいんだ」

父さんはチラッと母さんの方を見た。

「あの時は……」

母さんは何も言わない。ただ、食器の当たる音がカチンとしただけだ。

「あの時は、一緒に食事をしていた。小さなテーブルで、一緒にラーメン食べてたんだ」

食事……？

「母さんにさわったりとかは？」

「食事中にそんなことしないだろ。大体、私はテレーゼに指一本触れたことなかったぞ」

……一緒に暮らしてたのに？

「なんだその顔は。当たり前だろう？」

「同棲してたんでしょ？」

「同棲？ まあ、確かに……。でも、本当だ」

「母さんから触ってきたりとかは？」

「父さんは嫌そうに顔をしかめた。」

「やめなさい玲二。誓ってもいい。触れてないぞ」

じゃあ、いつきが触れてきたから心の中が見えたと考えるのは、間違いなのか？

大体、誰かのイタズラ説……。あれだって可能性は充分ある。

百井と真夜の兄妹……。ああいうタイプのやつがまだいるって可能性もある。

それに今日の質問の答えは、いつきが心から言ってくれただけなのかもしれない。

「夕食よ」

母さんがいつもより少し乱暴に皿を置いた。食器を雑に扱うなんて珍しい。怒っているんだろうな。

「ごちそうさま」

自分の分の皿を下げて、ついでに洗う。

2人もすぐ終わると考えて、3人分のカップを用意した。ヤカンに水を入れて、火にかける。

母さんが立ち上がって、2人分の食器を運んできた。
「怒ってるのに、ちゃんとお皿は洗うのね」

「母さんが大事にしてるものなんだから、当然だろ？」

お湯が沸いたので、お茶の用意をしてリビングのテーブルに運んだ。

「……私も参加した方がいいのかな？」

「父さんもいてよ。心強いから」

「そうか」

父さんもリビングへと移動してきてくれた。3人とも、なんとなくいつもの位置は決まっている。

父さんの隣に俺。最後に、母さんが90度隣に座った。

「いいわよ。始めましょうか？」

「まず聞きたいのは、俺をいつもどうやって見てるのか。……前に言ってた『古い友人』なの？」

「……」

「ライのガールフレンドの、白い小鳥だ。2階で楽しくやってるんだろ？」

「そうよ。私だけであなたを見守るのは難しいから、協力してもらっているの」

「やっぱり。」

「俺がケガした時、心に話しかけてきた。心配してくれて……」

「そう。彼女の声も聞こえるのね。あなたが生まれた時からずっと見守っていてくれたから」

母さんは目を閉じている。

赤ん坊の頃から見ていたなんて。知らないところで長い付き合い合っただったようだ。

「もうあなたのこと、息子みたいに思っているくらいよ」

「わかった。ちゃんと紹介して」

「いいわ。彼女の名前はリアよ。今はいないの。ちょっと、出かけている」

出かけている？

「どこへ？」

「……ライのところよ。あなたが家にいる間が自由時間なの」

「ああ、そう」

これでライも子孫を残せるのかな。幸福を届ける鳥が増えるのは、なかなかいい話じゃないだろうか。

「次は？」

「どうして俺に、人間じゃないことを隠して来たの？」

「……」

なぜか、父さんまで険しい顔をしている。

「それは……」

「言えないわけ？」

「違う。言いたくないの」

2人の様子が明らかにおかしくなった。苦悩と悲しみに満ちた顔だ。

父さんが移動して、母さんの隣に座る。そんな風に寄り添われたら、ひどく不安な気持ちになってきた。

「言いたくないって……なにか悪いことがあるわけ？」

2人は答えない。なんなんだろう。

「じゃあ、もう1つ気になることがあるから、そっちを教えて」

「何？」

母さんが顔を上げる。まだ、苦しそうな表情だ。

「なんで17歳なの？……まだ15だから大丈夫って言ったのと、関係あるわけ？」

2人が、まっすぐにこっちを見た。まるつきり同じタイミングだ。

「何……急に。そんな顔して」

顔色が冴えない。険しい表情が、ますます苦悩に満ちたものになっていく。

「玲二、ごめんなさい。それだけは言えないわ」

「どうして……？」

「テレゼ、話そう」

「ダメよ。あんな話、できないわ」

「もう隠せないだろう」

「そんな……」

母さんが泣きそうな顔をしている。こんな顔、初めて見た。
なんで？ そんなに、恐ろしい秘密がある？

「父さん、教えてよ」

「ダメよ、言っちゃ……！」

父さんはこちらをまっすぐ見ている。

「わかるか？」

「え？」

「いや、読めるんだったら、もうわかるかと思つて」

「読めないよ。そんなごまかしはいいから、何かあるんだたら教えてよ」

「玲二。私たちは……お前に隠していることが2つある」

母さんはとうとう、両手で顔を覆ってしまった。

「2つ？」

「話せるのは1つだけだ。それでもいいか？」

2つのうち、1つだけ……。

どうして？ ……でも、何も知らないよりはいい。

「……わかった。いいよ、教えて」

父さんが大きく、ため息をついて話し始めた。

「お前が生まれた時に、私たちはある魔女のところに行ったんだ」
魔女……？

「力がないお前を、どうやって育てたらいいのか。未来が見えるというから、相談しに行った」

「俺の未来を見たの？」

「そうだ。見てもらった。実際には、よく見えなかったらしい。でも、1つだけ……」

急に母さんが立ち上がって、部屋を出て行ってしまった。

「母さん」

返事はない。廊下を走ると、ドアが閉まる音がした。寝室に行ってしまったようだ。

「玲二。私たちはお前の幸せを願っている。だから、今まで人間じゃないことを言わなかった。知らない方が、きっと安全だと思っていたから」

「何の話？」

「……入学式前に話したのは、私たちの本意じゃない。母さんは、あちらのリーダーの娘だ。どうしても、厳しい掟を守らなきゃいけない立場なんだ。だから、話した。どんな短い間にでも、過ちが起きないようにと」

短い間に……？

15歳だから、

17歳まで、

安全、

短い間、

母の心配、

予言……。

全部のパーツを組み合わせる。

おそらく1番悪い答えは……。

「16歳で死ぬ？」

「……そうだ」

父が肯定したのを聞いて、驚いた。なにか悪いことがあるのだろうと思っただけだ。

変な感じだ。体の芯の部分が、ブルブル震えてる。

「どうして……？」

「人ではない者によつて命を奪われる」

そついうと、父さんは目をそらせた。

「と、言われたんだ。本当はお前を、あちらで育てるつもりだった。同じ狼の仲間と一緒になら、なにか力が目覚める可能性があるかもしれないと最初は思っていたんだが……予定を変えた。日本に来て、お前には真実を伏せたまま育てる。力もほとんどないし、普通の人間の子供として育てた方が危険がないんじゃないかと思って。とにかく、無事に17歳になるまでは……と思っていたんだが」

「……」

「玲二。……魔女は、このままいけば、と言ったんだ。だから、未来は変えられると信じてる。私たちはそう思ってお前を育ててきた」「じゃあ、予言を恐れる必要なんて……」

「そうだな。でも、その辺の占いとは違うんだ。母さんはお前を失うのを何よりも恐れてる。口に出して言ったら、本当になつてしまふと思ってるんだ。怖いんだよ」

そうか……。

恋に気を取られていた自分が、まるでバカみたいだ。

子供丸出しで、何も知らずにいやいやしていたわけか。

「今の話、忘れることは無理だろうが、気にするんじゃないぞ」

「……無理だよ、そんなの」

「悪い言葉にとらわれていたら、悪いことを引き寄せる。負けたら許さないからな」

そう言つて、父さんは俺を抱きしめてきた。

「……私たちの自慢の息子なんだから」

もう俺の方がだいぶ大きい。それでも、背中にまわされた腕は力強く感じられた。

部屋に戻つて、ベッドの上に転がった。

16歳で、死ぬ……？

いつ、どこで、どうして？

誰の手にかかつて命を落とす？

目を閉じる。

どうせ16で死ぬんなら、好きにさせてくれ……
とか、そういう考えもあるよな。

やけになったり、やたらと悲観しないように。そのために言わなかったのか。

確かにこんなこと、知らない方がいい。余計なことを考えながら生きるのはきつと辛い。

……母さんに謝ろう。

起き上がつて、部屋をでた。階段を降りる途中に、飾つてある花が目に入る。

母さんの好きな花だ。

薄い紫色の花を指でつつくと、いい香りがした。

#31 「守りたいもの」 &It・テレーゼ>

ドアをノックする音がする。

「母さん」

いつまでもこんな風に落ち込んではいられない。
立ち上がって、ドアを開けた。

「玲二」

「父さんから聞いた。予言の話」
「……」

とうとう聞いてしまった。いつか、こんな日が来るんじゃないか
とは思っていた。

何もかも隠したままにいるのは、どうしたって無理がある。夫婦
で散々話した。

それでも伝えたくはなかった……。こんな不吉な話を知って、プ
ラスになることなんて何もない。

知らせないまま、私が盾になってなにがなんでも守りきろうと思
っていたのに。

玲二は、まっすぐこちらを見ている。そして、ゆっくりと口を開
いた。

「ごめん。俺、自分のことばかり考えてた。父さんや母さんが心
配してくれてるの、わかってたのに」

……この子はなんでもよくわかりすぎる。

小さいころからずっと、聞き分けがいい。もっとわがママを言っているのに。

だから教えたくなかった。絶対に我慢するとわかっていたから。泣いたり、怒ったりして当り散らしてくれたほうがまだ気が楽だ。この子は健気に耐えてしまう。

それがつらい。

もっと何も考えない、能天気な子だったらよかったのに。

「泣かないでよ……」

玲二は困った顔をしている。

「泣きたいのよ」

今日からまた、心を縛るものが増えてしまった。

運命は変えられる。未来は決まったものではない。大体あの魔女は、玲二の16年を見ることが出来なかった。インチキだ。適当なことを言って、私たちを脅して楽しんでいるんだから……。

愛する息子を抱きしめる。

誕生日まで、あと3ヶ月もない。あんな予言は信じない。だけど、不安で心が震える。

いつの間にか随分大きくなった息子が、背中を抱きしめてきてくれた。

「魔女って、みんな性格悪いんだろ？ そんなやつという事、信じなければいいじゃないか」

「そうよ。信じない。あんな、人の不幸を喜ぶような連中の言う事なんて……」

「俺、絶対死なないから。約束する」

「……」

「まだ園田のこと、諦められないし」

そんなにあの子が好きになっていたなんて……。

心は読めなくても、息子から恋心を感じたことはなかった。
今までずっと、そんなことに興味はなさそうだったのに。

いや、だから……かえってこんなに強く思っているのかもしれない。

とても可愛い娘。無邪気で、いつも笑っている。まっすぐでとても眩しい。

ライもやたらと肩入れしようとしている。その気持ちはわかる。
あんなに透き通った魂の持ち主は貴重だ。見ていて嬉しくなるくらい
の美しい命。

玲二が16歳の1年を生き抜くために、必要な存在なのかもしれない。

「そんなこと言って……。まずは生きるのが先よ」

玲二の胸を強めに押して、離れた。

「……」

「大体、もし今の問題が解決したって、一緒になるには厳しい掟を
守らなきゃいけないの。それができるかどうか見極めてからよ」

「……いつも思うけど、それって結婚前提ってことだね？」

「え？」

「ただ付き合うだけでもダメなの？」

意外と余裕があるじゃないの。

「責任も取れないのに、深い関係になるつもり？」

「なんだよ……そんなことしないよ」

「大体15で恋愛なんて早いのよ！ 片思いで充分だわ」
息子はなぜか笑っている。

「なによ」

「なんでもない」

優しい笑顔。父親に、よく似ている。

「もうすぐ試験だっけ？」

「うん。もう、来週から。明日からまた勉強会に行くよ」

「……大丈夫？」

一瞬、玲二の動きが止まる。

でも、まっすぐこちらを見て、答えた。

「大丈夫。今までどおりにする。……何も変わらないよ」

玲二は一体、何年待たなければいけないのだろう。

多分、20歳になるころにはきつとわかる。あちらの仕上がり次第で、もう少し早いかもしれないけど……。それでも、そんなにすぐにはわからないはずだ。間に合うだろうか？

それも生き残ることができたら、の話だ。なんとしても守るつもりだけど、もしも何かあったらという不安はどうしても消し去ることができない。

そして、玲二の力について全てがわかったところで、どうにもならない可能性も高い。

あの可愛い娘は、そんなに待ってくれるだろうか？

待たせた拳句、玲二が去ったらどうなるだろう。

今なら、ちょうどいい相手が近くにいます。あちらに行くようにし

たいと思っていたけど。

予言のことを知ってしまった今、あの子まで失ったら運命に負けてしまうかもしれない。今は、そっとしておくべきか……。

玲二の目を、じっと見つめる。

……相変わらず、何も見えない。

完全な遮断。未知の力。どうしてこの子には、こんな力があるのだろうか？

夜が更けて、リアが戻ってきた。

「おかえり」

『ただいま、テレーゼ』

「玲二にあなたを紹介するわ」

『……！』

リアを手の上に乗せて、玲二の部屋のドアを叩いた。

「はい」

「私よ」

ドアが開いて、玲二が顔を出した。部屋の中に、テーブルの上に紙がバラバラと散らばっているのが見える。あんなに散らかすなんて、珍しい。

「リアを紹介するわ」

「ああ」

玲二はゆつくりと手を前に差し出した。

リアがピヨンと飛んで、その手にうつる。

「えーと……初めまして、じゃないか」

『玲二、やっと挨拶できたわね。私はリア。テレーゼの友人よ』

玲二は白い小鳥をしげしげと眺めて、そして言った。

「リアは……姿はこのまま？ 変わらないの？」

『そうよ』

小鳥を見つめ、優しい微笑を浮かべている。

「可愛いな」

『あなたより随分年上なんだけどね』

なぜかチラッとこちらを見た。

「何？ 玲二」

「いや……女性に年を聞いたら失礼だよな」

リアはピピツと鳴いて、玲二の頭に飛び移った。

「……もしかして、観覧車にぶつかったのって、リア？」

『違う。あれは、私が海鳥に頼んだの』

「そうか。ちよっと小さいと思った」

本当に、声が聞こえているようだ。

リアの声が届くという事は、玲二が心を許した相手の声だけが聞こえるというわけではなさそうだ。

では、語りかける者の思いの質によるのだろうか？

「じゃああの時の犬や風は？」

『……あんまり教えられないわ。私はあなたの監視役だからね』

「それがわかったらもう、隠してても意味がくない？」

『ダメよ。全部わかったら、あの子と隠れていいことしようとしちゃうでしょ』

玲二は真っ赤になっている。

「ライとはうまくやってるの？」

『内緒』

「じゃあいい。ライに聞くよ」

リアはピピツと鳴いて、こちらの手の上に戻ってきた。

「あの時、励ましてくれてありがとう」

『……助かってよかったわ。あなたも、ライも』

そうだ。助かってよかった。あの時、もうダメじゃないかと思った。運命が狂って、少し早目にその時がやってきたのかと思ってしまった。

「テレゼ、今日はすまなかった」

「……いいのよ。仕方なかったもの」

夜になって、夫婦で反省会を開く。

「きつと何かあるとすぐに気付かれたわ。私もつい、あんなこと言っただから」

「仕方ないさ」

あの、醜い顔を隠している女。あいつが玲二を見つけなければ、こんなことにならなかった。

魔女かと思っていたけど、魔女ではなかった。どうやら兄の力に守られているようだし、その兄がいなければなんてことない存在だけだ……。

「とにかく、あと1年と2ヶ月だ。無事に過ぎたら、安心できるだろう？」

「でも、玲二の負担はあんまり軽くないかも」

「まあそうだが……。あのいつきちゃんという子は待ってくれそうし、なんだか秘密も守ってくれそうじゃないか？」

「またそんなこと言って」

自分が簡単にクリアできたからって、気楽に言うてくる。

「玲二にはあの子が必要だよ。高校に入ってから、一時は本当に心配した。随分、無気力になってしまった気がして。でも、夏前から

いから随分生き生きしてきたらう？ あの子のおかげだと思うんだが」

「……確かにそれは、そうね」

あの秘密を教えて以来、玲二は何もかも全力を尽くさなくなってしまった。

わざと目立たないようにしている。元々大人しい子ではあったけど、静かに情熱を燃やしているものはあったはずだ。

そうさせたのは自分たちだったが、やはり心苦しかった。

「これから、どうする？」

「どうもしないわ。今までどおりよ」

でも1つ、やらなくてはいけない。

この辺りのリーダー。あいつと話をつけなくては。

リアに玲二のことを頼んで、久々に電車なんかに乗った。

途中で外国人に声をかけられたものの、英語はわからない。少し、困ってしまった。

「W a t e r s」のドアを開ける。

「いらつしやい……」

店内に客はいない。遠屋がカウンターの中から、こちらをみているだけだ。

「今、話せる？」

「いいだろう」

遠屋はカウンターから出てくると、表のドアの「OPEN」のプレートをひっくり返した。

「いいの？」

「いいさ。この時間は大抵ヒマだ」

そう言つて、カウンターへ戻る。確かに、客は来なさそうだ。流
行っていない喫茶店。気軽に寄れる値段設定でもない。

「何がいい？」

「なんでもいいわよ。オススメで」

「そうか……」

カウンター近くの2人がけの席に座った。

しばらくして、コーヒーを2つ持った遠屋が、向かいの席に座つ
た。

「で？ 何の用だ？」

「玲二にもう構わないで欲しいの。ここに出入りをさせないで」

「それは困るな。それに、彼は自主的に会合に参加してくれたよ」

「呼んだくせに」

あの子が自分から行くわけがない。

「ライが連れてきてくれたんだよ。自分で判断したんだろう？」

「前回のことはいい。これから先のことよ。あの子にはここの交流
は必要ない」

遠屋の目が光る。鋭い視線に、一瞬ひるみそうになってしまった。

「何故？ 理由を聞かせてもらおう」

「……あなたが弱いものを守らないからよ」

これまでの長い命の中で、龍と出会ったことは何回がある。

弱い固体というものがいないらしい、と思える。

「申し訳ないが、玲二君がどのくらいの強さなのか私にはわからな
い。弱いと主張されてもね」

「ライは？ あの子が操られた時、気がついていたんじゃないの？」

「ライには普段からもっと力をつけるように言っている」

まったく。ムカつく龍だ。

「そういうことを言ってるんじゃない。あなたがその場をおさめるとか、助けに入らないのかってことよ」

「仲間内のトラブルも、皆の経験や教訓になる。無駄なことにはならない」

「そこが気に入らないのよ！」

思わず声が大きくなる。

相手は変わらず、すました顔だ。

「リーダーなら、弱いものを守るべきでしょう？ どうせ自主性を重んじてるとか、運命には逆らわないとか言うんでしょうけど、ただの怠慢よ！ 仲間の間でトラブルが起きないようにしようなんて、これっぽっちも考えてないんでしょう」

「そんなことはない」

嘘だ。……そんなの、すぐにわかる。

この龍には弱いものの気持ちかわからない。想像すらしない。

「大体、君たち親子を仲間として扱っていいのかな」

「だったら、放っておいて」

「それはできない。ここで暮らす以上は把握させてもらう」

「頭が悪いのね。大体、15年も気付かなかったくせに」

「まったくだな。どうやって隠れてたんだ？」

「さあね。あなたがよっぽど間抜けなんですよ」

遠屋の目が、青い光を放ち始めた。

しまった。これ以上怒らせてはいけない。

「不思議だな。君にはあの力はないようだが……？ 父親からか？」

「……」

「薄い血の人間なんだろう？」

「それは違う」

速音からは何も感じられなかった。彼の両親や兄妹からも、何も

感じない。

「じゃあ突然変異なのかな？　だとしたら、ますます見過ごすわけにはいかない」

「あの子にはあの力しかないのよ。争いに巻き込まれたら、間違いなくただじゃすまない。お願いだからもう、構わないで」

「……そうか。予言を受けていたんだな」

しまった。読まれてしまった……。冷静にならないと。

「そうよ。危険なことからはどうしても遠ざけたいの。この間みたいにへんなちよっかい出されたらかなわないわ」

「ミツの力が効くなら大丈夫だろう？」

「先週はたまたま間に合っただけじゃない。……もつと遅かったら死んでいた」

遠屋がふつと笑う。

「わかった。いいだろう。でも、すべての者をコントロールするとはできないぞ」

「あなたリーダーなんですよ？」

私の父なら、まず、弱いものを守る。

空を飛ぶ小さな鳥、力を操れない赤ん坊……。

「君たちは仲間じゃないんだろう？」

「またそんな屁理屈を……。だから龍は嫌なのよ！」

「……まだ隠していることがあるな？　なんだ？」

「教えない」

とは言っても、力はどうしたって相手のほうが上だ。隠しきれるかどうか……。

「なるほど」

表情からは、どこまでわかったかはわからない。

「随分と大きな隠し事のようにだな」

「あなたには関係ない」

「玲二君に全部教えてあげたらいいのに」

「余計なお世話よ！」

もう話は終わりだ。席を立つ。

「帰るのか？　じゃあ次は、家族3人で来てくれ。いや、4人か？
小鳥も歓迎するぞ」

「……おいぐらかしら？」

「サービスするよ。苦労してるようだしな」

この分だと、全部見られているようだ。遠屋の心は見えない。ただ、なんとなく楽しそうだ。

「じゃあお言葉に甘えて」

早足で出口へと向かう。

「ドアは壊さないでくれ」

「……」

そんなこと、するわけがない。黙って遠屋を睨む。

「そうだ。1つ言い忘れていた」

「何よ」

「しばらく会合はなしだ。所在は私がそれぞれ個別に確認する」

「……」

「この間ライが飛び回ったせいで、U研が動いている」

「ユーケン？」

「UMA研究、だ。世界にたくさん、我々の研究をしている者や機関があるだろう？　最近はまとめてそう呼んでいる」

ずっと昔から、人間は私たちを追っている。時代や国が違ってても、興味を持っている者がいないということがない。

「本当に、ライは目立つからな。ここでは1番だ。結構な距離を飛んだから、写真にも撮られた。しばらくは皆にあらゆる力を使うことを禁止しているし、集まるのも控えることになった」

「なんで最初から言わないのよ……！」

「君が聞かなさそうだから」

「……」

腹が立つ。よく考えたら、1番目立つのは自分だろうに。

今までの言い方からして、こいつはきっと弱いものが嫌いなんだと思う。弱いものが困っていても、自分でどうにかしろなんて非情な気持ちしか浮かばないに違いない。

「ただし個人によつては、人間の姿になるのだけはよしとしている。君たち親子には関係ないだろうが」

「……そう」

「これで君も安心できるだろう？　少なくとも、仲間内の争いなんてもものは起きない」

「どうかしらね。あなたは全員を制しきれてないように見えるけど」

「甘く見ないでもらいたい。非常事態だからな。手は抜かない」

「いつまで？」

「1年だ」

1年……。

少し足りないけど、しばらくは安心できるだろうか。

「わかったわ。玲二にも伝える」

「ああ、頼んだよ」

悔しい気持ちを抱えたまま、駅まで歩いた。

あの龍は相当強い。隠していたことまで全部知られてしまった。

途中で何人か、人ではない者がいるのを感じた。
彼らも気がついたようだが、寄ってくるものはいない。

また、電車に揺られる。

あの龍を信頼していいだろうか？
力は強い。本気になれば、全員を制することなんて簡単そうに思える。

でも、リーダーとしてはどうだろう。仲間を思いやる気持ちがなさそうなあの男に、みなよくついていけるものだ。

故郷の森に思いを馳せる。

森の奥の、私たちの家。私の父が、大きな力で皆を守っている。
力を合わせて、守りあっている。

いや、私の家はここだ。
速音と、玲二がいる。

ここで一体、あと何年暮らしていけるだろう。

あの子を守りきることができるだろうか……。
お父さん、お母さん……、大切な家族、森の仲間たち。どうか、
私たちを守って。過酷な運命に耐えられるように。乗り越えられる
ように。できるのなら、そんな運命がやって来ないように。

家に戻り、台所に立つ。

今夜は玲二の好きなものを作ってあげよう。

きつとおなかをすかせて帰ってくるはずだから。

私にできるのは今まで通り、日常を守ることだけ。ならばそれに、
全力を尽くすことにしよう。

愛する息子に、安心を与えよう。

速音とならば、きつと、それができるはずだ。

#32 「ほんの少しだけ、揺れる」 &1t;いつき>

あつという間に、期末試験の開始日になった。

毎日一緒に勉強会に行ったけど、玲二くんは元気がなかった。

しょんぼりしてるとか、落ち込んでいるような様子ではないけど、なんだかちよつとムードが重たい。

落ち込んで、テンションがいきなり急上昇して、楽しそうだったりぼんやりしたり……。

でもあの船のデートの次の日から、すごく落ち着いた。少し低いところで、落ち着いちゃった感じがする。

質問すればちゃんと答えてくれるし、笑いかけてくれることもあるけど……。なんか引つかかる。

「おはよー、玲二、園田ちゃん！」

葉山君がいつも通り、笑顔で教室に入ってきた。

「おはよう」

「おはよう、葉山君」

2人で揃って挨拶をする。

「どう？ 今日、自信ある？」

今日の試験は、数学と日本史、ついでに生物だ。

「うーん。どうかなあ」

「ま、なんとか乗り切ろう。で、クリスマスパーティしようぜ」

「そうだね。終わったら……」

玲二くんは隣で頼杖について、黙っている。その落ち着きすぎた様子に、親友は黙ってられないらしい。

「玲二、予定は？」

「……20日以降は埋まってる」

「何？ 連日美女とパーティでもすんの？」

「バイトだよ」

「24日は園田ちゃんと2人で乾杯？」

「いや、その日も」

葉山君が驚いた顔をする。ついでに、あきれたようだ。

「マジで？」

こちらを向いて、真剣な顔で聞いてきた。自分でもガツカリな答えを教える。

「マジだよ。私はおうちでクリスマス」

「本当に!？」

突然横から声がした。

ゲツ

「じゃあいつきちゃんは俺と過ごそう！ 1晩中パーティしようよ！」

「何がパーリーだよ、本城」

私のかわりに、葉山君がつつこんでくれた。

「立花、見損なったぞ。可愛い彼女がいるのにクリスマスにバイトなんて」

本城君は相変わらずちよつと軽薄な笑顔をぐつと近づけてきた。

「いつきちゃん、考えといて！ 16歳の美少女がおうちでクリスマスなんてダメだよ」

「うるさいなあ。いいでしょ、別に」

ぷいっと顔をそむける。でも、頬にキスされた悪夢のような思い出が蘇ってきて、慌てて顔を戻した。

「じゃあさ、19日は？ 日曜日。みんなでクリスマスパーティしよう」

本城君はまったく懲りない。

「19日？」

「そ。みんなならいいでしょ、いつきちゃん。その2人も」
「行くわけねえし」

葉山君のそっけない返事に、さすがに少し怒った顔になる。
「なんだよ、葉山……。勉強会も参加させてくれないし。そんなに意地悪しないでほしいんだけど」

「お前が来たら2人が集中できないだろ。お断りは当たり前」
「じゃあパーティーならいいじゃん」

そう言つて、こつちを振り返る。

「なあ！」

なあつて言われてもな……。

玲二くんの方を振り返ると、表情がない。どうしたんだろう。ちよつと怖い。

「玲二くん……」

「ん？」

そういつて、ゆっくり背筋をまっすぐに伸ばした。話は聞いてたらしく、ちゃんと返事してくれた。

「ごめん、悪いけど俺はパス」

「ええ？　なんで？　熱心な仏教徒とかじゃないよね？」

「そういう気分じゃないから」

「バイトって何？　もしかして強制労働かなんかなの？」

本城君のアメリカンジョークのようなコメントにも、反応はまるでない。

葉山君がちよつと心配そうな顔で間にはいる。

「俺の主催だったら？　いいか、玲二？」

「……」

「ダメ？」

はつとしたような顔で、玲二くんが一瞬止まる。

「……いや、いいよ」

「俺も招待してよ」

「お前はダメ！　園田ちゃんにちよつかい出すのを、玲二様は快く

思っていないのだ！」

2人がやいやい騒いでいる横で、玲二くんはやっぱり少し暗い顔だ。

試験の1日目が終わる。

「園田ちゃん、ちよつと！」

葉山君が声をかけてくる。

「何？」

「さっき言ってたクリスマスパーティー、ホントにやる？」

「……いいよ。19日なら空いてるし」

「そつか。じゃあやろう。誰か呼びたい子いる？」

「うん。友香と、あと2人にも声かけてみるね」

千早と則子も呼んでみよう。23日にも集まる予定だけど、男子がいるパーティーも喜ぶかもしれない。

「よしよし。でも、本城がかぎつけてやってきそうだなあ」

確かに。前科1犯だし。

「まあいいよ、来ても。玲二くんがいるなら大丈夫」

「会場、俺の家にしようかと思ってるんだけど。今から予約とか難しいかと思つて」

「いいよ。低予算で助かる」

そう答えると、葉山君があははと笑った。

「じゃあ、本城はますます呼べねえな。家がバレたら、勝手に勉強会も来るようになりそう」

「ホントだね」

「ま、試験が終わってからちゃんと企画しよう。場所さえ決まっていや、どうしてもなるでしょ」

「うん」

横を見ると、玲二くんが帰り支度を終えたところだった。会話に入ってくる気配はない。

「玲二くんもいい？」

「……いいよ。わかった」

「ちゃんと聞いてたのか？」

「19日に良太郎の家だろ」

一応聞いていたらしい。少し安心した。

今日もまた、一緒に電車で揺られて帰る。

色々話しかけると、返事はある。けど……。

「ねえ玲二くん、元気がなくない？」

「そう見える？」

「うん……」

私の返事を聞いた後、玲二くんはなぜかこっちをじっと見て、そして、いきなり手を握ってきた。

「そんなつもりはないんだけど」

突然のことについて、赤くなってしまふ。

「それならいいけど」

恥ずかしくて視線をそらす。でも、手は握られたままだ。

なんだろう、いきなり。なんで手を握ってくるの？

「クリスマス、一緒によかったかな」

小さな呟きが聞こえてきた。聞き捨てならない台詞に、視線を戻して顔を見つめた。

「バイト決めたときはそれでいいと思ったんだけど、……今ちょっと後悔してる」

「……」

「ごめんな」

「え？ そんな、いいよ。大丈夫！」

それで落ち込んでたとか？ ……まさかね。
でも、今の言葉は嬉しい。

「2人きりはもつと大人になってからでいいよ」

「……」

なにやら複雑な顔になってしまった。もしかしたら、ちょっと誤解を招く表現だったかもしれない。

「夜、行ってもいい？」

「へ？」

「24日、バイト終わってから、行ってもいい？」

「もも……」

噛んだ。緊張しすぎだ。

「もちろん、いいよ。家にいるから……いや、あの、連絡くれたら駅前とかでも」

「そっか。じゃあ、連絡する」

うわあ。

どうしよう。

嬉しい……！

「19日はみんなで、プレゼント交換とかしようよ」

「うん？ ああ、そうだな」

「お料理も持ち寄りしたらいいよね」

「そうだな。良太郎の家の台所借りれるなら、作ってもいいし」

「へえ、それ、いいね。玲二くんってお料理するの？」

「夏休み中、結構自炊したから」

それはなんていうか、将来有望な話だな……。

「玲二くんの作った料理って、なんかキレイそう。盛り付けとか丁寧にやりそうだね」

「そうかな」

絶対そうだ。ビュッフェの時の盛り付けも完璧だった。

「お菓子作りもきつと向いてるよ」

お菓子作りは正確な計量と丁寧な仕事求められる。玲二くんならきつと上手に作れるはずだ。

2人で一緒に台所に立つところを想像する。できあがったお菓子を、味見であーんと口に入れたりして……。

いけないいけない。最近この手の若奥様系の妄想を膨らましすぎだ。

「それより今は試験だろ」

そういつて、微笑んでくれた。ああ、よかった。ちょっと元気出たかな？

それに、この笑顔にすごく弱い。顔が熱くなってきた。

「うん。勉強も頑張つて、玲二くんがどこに行こうと着いていけるようにしちゃうからね」

「……」

つないでいた手が、パツと離れた。

しまった。また照れさせすぎだ。

問題文とにらめっこする日々が終わり、とうとう開放の時が訪れた。

今日は試験勉強会の打ち上げの日だ。

「終業式つて24日だっけ」

「めんどくさいよね、24日に行くのって」

試験が終わって、みんな意識はすっかり年末年始へと向かっている。

どこへ旅行へ行くとか、誰とクリスマスに集まるとか、そんな話をしている。

私もすみっこで葉山君とクリスマス会についての話し合いを始め

た。

「プレゼント交換ね。予算はどのくらい？」

「1000円くらいかな」

「男女で交換って難しいんだよな」

「そうか……、確かに」

「ま、いいか。何当たってもさ、楽しめばいいんだよな。化粧品とかストックキングは困るけど」

「あはは」

話しているうちに、勉強会のメンバーの参加も決まる。

則子や千早も来ると、全部で12人だ。

「葉山君の家の台所って使ってもいいかな？」

「何作るの？」

「ケーキとか」

「あー。うち、オーブン壊れてるとか母ちゃんが言ってたんだよな。あとで確認するよ」

オーブンが壊れていると困るな。やっぱり家で作るのか……？

「料理を持ち寄ったらいいと思うんだけど」

「ああ、いいな。でも、誰が何を担当とかは決めた方がいいかも。みんなチキンとかじゃ困るし」

「なるほど」

結局、ケーキとチキンだけ係を決めることにした。

他の人は、それ以外を持つてくるということになる。

「じゃあケーキは私が作ってこようかな」

言いだしっぺだし。家で作って持ってきたらいい。玲二くんと一緒に台所ドリームは、まだ先に取っておこう。

試験の結果は、まあまあだった。ぴったり50位。なかなかここから上がるのは難しいみたいだ。

玲二くんの名前を探すと、今回は9位のところに名前があった。やっぱり。出来る男だと思ってた！

あんなに元気がなかったし、やる気ありませんみたいな雰囲気だったのに。いきなりの1ケタ。

「玲二、9位なの？　すごくない？」

葉山君に言われて、玲二くんが顔をあげる。

相変わらず順位には興味がないのか、廊下には出ないでずっと自分の席に座っている。

「……すごいのは、5位以内とかだろ」

「そうかあ？　1ケタなら充分すごいだろ」

今回の1位は、相原君だ。前回は停学中だったので名前はなかった。見事な返り咲き、ってやつかな。

「葉山君は？」

「前回と同じくらい。園田ちゃんもでしょ？」

「うん。ぴったり50位」

「じゃあぴったりで賞のキスを」

じろつと睨む。

「……を、玲二君から」

もちろん、そんな賞はない。玲二くんからなら、ぜひもらいたいけど。

試験後には各教科で、解答用紙の返却や答えあわせがある。それが終われば少し休みがあつて、24日に終業式。それで、2学期は終わる。

「じゃあ19日の3時からね」

「はい。お部屋を暖かくして待ってますんで」

下駄箱で葉山君に別れを告げる。

「なになに？ クリスマスパーティの話？」

げっ。本城。

「もう定員いっぱいだから来るなよ！」

「なんだよひどいな。場所わかんないから行けないし」

本城君はやれやれと言った表情だ。

「なあ、立花。お前なんで今回順位あんなに上がったの？ せっか

く抜かしてやろうと思ってたのに」

「……別に、他のやつが悪かったんじゃないの？」

「そうかな。せっかくいつきちゃんにいいとこ見せようと思って毎日勉強に励んでたのに……」

私がふーん、なんて言葉で済ませたからか、本城君は不満そうな顔だ。

「何位だったか聞いてくれないの？」

「別に」

本当は知ってる。21位だったはずだ。

「俺が聞いてやるよ。何位だったんだ？ 本城」

葉山君がニヤニヤしている。

「いいよ、もう。次は絶対抜くからな！」

そんな捨て台詞に、みんなで笑った。

19日のクリスマスパーティーは、大いに盛り上がった。

チキンの担当の玲二くんが、なぜか自家製のローストチキンを2羽分も持ってきたところから始まって、全員でのプレゼント交換も愉快的結果に終わった。

心配してた招かれざる客も来なかったし、親しみのあるメンバーで楽しい時間を過ごすことが出来た。

帰りは、玲二さんと一緒。だけど、則子と千早もいる。友香は島谷君とちよつとだけ一緒に寄り道らしい。

……うらやましい。

明日から玲二くんはバイトに行ってしまう。24日に学校で会えるし、バイト帰りに来るとは言ってくれたけど、それまでは会えない。

「プリンス明日からバイトってホントなの？」

「……ああ。そうだけど」

「なんでまたこのシーズンに入れるかな」

「そうだよプリンス！ いつきがほら、拗ねてるよ」

則子と千早が集中砲火を浴びせ始めた。しまった。拗ねた顔になっ
っていたようだ。

「プリンスって呼ぶの、やめてくれないかな」

玲二くんは赤い顔をしている。確かに、電車の中でプリンスを連
呼されたら恥ずかしいだろう。

「もう4年くらい呼んでるから、今更変えられないよ」
ねー、と2人がハモる。

そうだ。24日までになにかプレゼントを用意しよう。

……むしろ今まで何も考えてなかった自分に驚きだ。何をあげよ
う。何なら喜んでくれるかな。

予算はあまりない。あと4日でなにか作ろうか。マフラーとか…
…？

船の上で、自分にかけてくれたマフラー。すべてで気持ちよか
った。

なんか、良さそうなものだったな……。あんないいのしたら、

手作りのマフラーなんていらないか。大体、作ったことないのに4日のできるわけがないし。

悩むな。

悩んで黙っているうちに、駅についてしまった。

「じゃあさ、プリンスはいつきを送って行ってね！」

「そこらへんでちょっとお茶でも飲んでいけば？」

2人が好き勝手に言っている。電車に乗ってる間中ずっとこんな調子だったのかな。ぼんやりしてて、悪いことをしてしまった。

「……じゃあ、寄っていいこうか？」

「え？」

私より先に、2人がわーいと喜ぶ。

「じゃあ、私たちは帰るね！」

「いつき、バイバーイ！」

親友たちはあつという間に去って行ってしまった。

「玲二くん、いいの？」

「いいよ。しばらく会えないし」

2人で揃って、駅前のコーヒーショップに入る。

「そうだ。年末のモデルのアルバイトだけど……」

「なあに？」

「父さんが帰りは送るって」

「え？ そんな、いいのに」

「1人だけ未成年だし、時間も遅いから。家まで車で送るから、園田のお父さんやお母さんにも言っておいて」

1人だけそんな特別扱いしてもらっていいのかな。

でも、なかなか嬉しい心遣いだ。優しそうなお父さんだったし、ちよつとは仲良くなれるかもしれない。なんとなく、期待が膨らむ。
「大丈夫だよ。乱暴な運転とかしないから」

「そんな心配してないよ」
そう答えると、玲二くんが笑顔を見せてくれた。

ああ、やっぱり、なんだろう。なんかちょっと、寂しそうに思える。

どうしてなんだろう。

ずっと気になっている。

普通にしているように見えるけど、どこか悲しみを抑えているよ
うな、そんな印象だ。

夏からずっと、話してもらえてない秘密。そのせいなのかな。じ
ゃあ、聞いたらいけないんだろうな。思えばあれから、謎は増える
一方だ。

それでもずっと、好きな気持ちに変わりはないけど、……なにか
つらいことがあるのに、力になってあげられないのは寂しい。

「なあ、何か、クリスマスに欲しいものってある？」

「え？」

「色々考えたけど、何が欲しいか全然思いつかなかったから……」
すごくマジメな顔してる。

「そんな、プレゼントなんかいいよ。会えるってだけで嬉しいし」
いつもなら、そこで言葉は終わり。玲二くんが赤くなって、可愛
いなんて思うところだ。

でも、やっぱり気持ちを隠しておけなかった。

「……プレゼントはいいから、玲二くんがどうしてもそんなに悲しそ
うなのか教えて欲しい」

今日は赤くならない。いや、最近あんまり、照れなくなってる。
つきあいに慣れてきたとかそういうことじゃなくて、もっと他の
気持ちが生きてるように思える。今の言葉にも、表情が変わらな

い。

「私じゃ相談相手にならないかな……。玲二くんの話だったら、何時間でも何日でも、ずっとつきあうよ」

玲二くんの前に置かれたカップを見る。最近、いつもコーヒーばかり飲んで。どれだけ紅茶が好きなんだって思ってたのに。

顔を見ると、少しうつむいていた。伏せられた長いまつげに一瞬ときめく。

「玲二くんの心が見えたらいいのに」

その言葉に、顔が上がった。

「……本当だな。全部、園田に見えたらいいのに」

まっすぐ見つめられて、少し恥ずかしくなる。そんなことを言われるなんて思わなかった。

しばらく見つめ合ったけど、結局心は見えない。

……そりゃそうか。

「帰ろうか。遅くなっちゃったな」

優しい微笑みに促されて、立ち上がった。

次に会えるのは、24日の朝だ。一緒に、学校に行く。

明日会えないなんて、寂しい。

寂しくても時はちゃんと過ぎる。

23日には、仲良し4人でまた集まって騒いだ。

今日は、2学期の終業式だ。クリスマスイブに掃除して先生の話聞きに来るなんて、とみんな文句をもらしている。

私にとっては、ひさびさに玲二くと会える嬉しい日で、文句な

んかまったくない。バイトの話を聞いたり、初詣の予定を相談したりする。

「今日、この後直接アルバイトに行くの？」

「うん。1時間くらい遅刻だけど」

「何時に終わるんだっけ？」

「6時。だから、7時くらいには駅に着くかな」

「そっか」

7時か。よし。ちゃんとそれまでにおめかししないと。

「ちようどご飯時か。迷惑かな？」

「迷惑なんかじゃないよ！ 大体、兄ちゃんも2人ばかりいないらしいから。私がいなくても問題ないよ」

もう、家族全員でクリスマス！ なんて年じゃない。予定のない子が家でケーキ食べるだけの話だ。

「玲二くんの家は？ 家族でお食事とか、予定はないの？」

「……特にないよ。むしろ父さんと母さんは2人の方が喜ぶかもね」
「へえ。なんか、いいね」

いつまでも仲のいい夫婦って、すごくいいと思う。自分の両親ももちろんそうだと思うけど、2人きりでなにか、というのを見たことはない。子供が6人もいればそれも仕方ないのかもしれないけど、それ以前にあんまり甘いムードが想像できないタイプだ。

「どこかで一緒に食事でもする？ たいした店には行けないけど」
いきなり嬉しいご提案だ。思わず、声も大きくなる。

「ホントに!？」

「今日は予約で埋まっていたりするのかな」

「ファーストフードとかでいいよ。それなら、予約なんかいらないでしょ」

「そう？ じゃあ、行こうか」

「うん！」

思いつきり笑顔で答えると、ひさびさに玲二くんの照れた顔を見ることができた。

「嬉しいな。楽しみにしてるね」
「ああ」

終業式も大掃除も終わり、あとは帰宅するだけだ。

2人で一緒に玄関へと移動すると、荒川先生が大荷物で通りかかった。

「お、立花、いいところにいた！ ちょっと……手伝ってくれるか？」

「はい」

快い返事で玲二くんがプリントの束を受け取る。

「ちよつと待ってて」

「うん」

「ごめんな園田！ メリークリスマス！」

ちよつとズレた感じの先生の言葉に、つい笑ってしまった。
よし、いまのうちに上履きをしまおう。

あれ……

小さなプレゼントの包みが置いてある。

赤と緑と金色のストライプの包装紙に、真っ赤なリボン。リボンの内側に、小さなメッセージカードが挟まっていた。

なんだろうこれ。誰だろう……。

とりあえず、メッセージカードを抜き出して、開いて見た。

「 大好きな君へ M 」

M？

とりあえず、玲二くんではない。ついでに、葉山君でもない。

「園ちゃん、なにそれ!？」

後ろからいきなり声がかかって、体がビクつとなってしまった。

「中村さん……」

久々の登場だ。全開の笑顔で遠慮なくカードを覗き込んできた。

「Mって、モトキ?」

「え? ああ、そうか。本城君はMか……」

じゃあこれは、本城君から?

「なんなの、中身は。開けてみたら?」

中村さんはさつと包みを取って、リボンをほどきだしてしまった。

「ちよつと、中村さん」

「いいじゃん。開けてみないと送り主だってわかんないよ?」

「そうかな……」

送り主のヒントが、中に入っているかな? なにかおかしなモノが入っていたらイヤだ。むしろ今、人が開けてくれるのは助かるかも、なんて考えてしまった。

「う……わっ! ちよつと!! なにこれ!？」

すごく大げさな声があげる。のぞいてみると箱の中には、美しい青い小箱が入っている。

「なんでそんなに驚くの?」

「これ、『Beauty Wear』の箱だよ! 知らないの??」

「知らない。何?」

「今人気のアクセサリーブランドだよ! 結構高いやつ。なんだろ、指輪かな!？」

「ええ?」

中村さんは勝手に中の小箱も開けてしまった。思わず一緒に覗き込む。

中身は、ゴールドの細いチェーンが2重になったブレスレットだった。

ピンクがかったキラキラと光る石が、いくつもついている。

「わおー！　いいなー園ちゃん！　これ絶対高い！」

「そんな……、ホントに？」

「ホントだよ。確か前雑誌の特集でみたけど、プレスなら3万はするね」

「3万円……」

そんな高いもの、誰が贈ってきたんだろう？　本城君が？

「モトキ、私にはこんないいものくれなかったのに……！」

「本城君、まだクラスにいる？」

「え？　いや、なんか急いで帰ってったよ。これ置いためかな？」

中村さんはニヤニヤしながら肘でえいえいといつついてきた。

こんな風に、私は喜べない。

「ほんとにそんなに高いものなら、困るよ」

「えー？　いいじゃん、もらっとけば」

「中村さん、本城君と連絡取れる？」

「うん。確認してみる？」

「頼んでもいい？」

「オツケ。待ってて」

元彼相手だというのに、すぐに電話を取り出してかけてくれた。

「お、園田ちゃん。……珍しい組み合わせね。玲二は？」

葉山君がやってきて、不思議そうな顔でこちらを見ている。

「今ちよつと、先生のお手伝い」

「どうしたの、それ？」

手に持った青い小箱を指差してくる。

「ここに入ってたの。誰からかわかんないんだけど」

「なにこれ。腕にするやつ？　随分高そうじゃない？」

「中村さんに3万円はするって言われた」

「3万！　それは随分と……。誰からの？　あ、わかんないのか」

「Mとしか書いてなくて。それで本城君かどうか今聞いてもらって

……」

「ああ、あいつモトキだったっけ」

そんな話をしていたら、横で中村さんが電話をボタンと閉めた。

「モトキじゃないってよ」

「え？　じゃあ誰……？」

困った私に、葉山君が考えてくれた。

「字は？　字に見覚えはない？」

「手書きじゃないもん」

メッセージは印刷されたものだった。

困ったな。こういう場合、どうしたらいいんだろう。

「先生に預けたりとかした方がいいかな……？」

「うーん。預けられても先生も困るんじゃないの？」

葉山君は難しい顔だ。対して、中村さんは笑顔。

「もらっちゃいなよ。もったいない。全校集会で『これ入れたの誰だ』ってやつても絶対出てこないよ」

確かに……。恥ずかしいだろうし、受け取り拒否も全校に公開されることになる。

「Mって苗字か名前かわかんねえしなあ。売り飛ばしちゃえば？」

……あ、玲二」

葉山君のセリフで、思わずプレゼントをコートのポケットに入れた。こんなものを受け取ったところを、見られたくない。

「あ！　玲二さん！　よかった会えて。これ、クリスマスプレゼント」

中村さんは笑顔でカバンから何かを出して渡している。

「何？」

「シュトーレン！　ドイツの名産品なんですよ？」

「……ああ」

しゅとーれん？　ってなんだろう。

「家族でどうぞ！」

笑顔で渡されて、玲二くんもちよつと微笑んだ。

「ありがとう」

微笑んだ中に、なんとなく呆れたような感じがちよつとある。でも、中村さんは気にしないらしい。

「よかったー！　喜んでくれて。じゃあ、また来年ね。よいお年を」

嬉しそうにバイバイと手を振って去っていく。一時期のようなベツタリした感じはこのところすっかりなくなっていた。でも、ちゃんとプレゼント用意して待ってる辺り、諦めたわけではないらしい。

「玲二、なんだそのストーレンて」

「パンだよ。クリスマス用のやつ」

「へー」

パンか。それくらいなら、確かに受け取りやすい。プレゼントはサプライズでもらうと嬉しいけど、相手に負担がないかっていうのも大事なポイントだな、と思う。クリスマス用のパンに比べて、3万円のブランドもののプレスレットは明らかに重たい。

「お待たせ園田。行こうか」

「あ……、うん」

この後バイトに急いで行くと言っていた。もう、行くしかない。プレゼントは……、使わないでおこう。いつか誰からかわかったら、返すことにしよう。

家に帰って、家族と昼食を取る。終わってからお母さんに夕食はいらないと告げると、一瞬驚いた顔をしたけどすぐにニヤリと笑って「わかった」と返事してきた。

部屋に戻って、服を選ぶ。せつかく会えることになったんだから、

ちゃんと可愛くしていこう。

この間船に乗ったときのものはのぞいて、どれにするか少し迷った。

机の上には、玲二くんへのクリスマスプレゼントが乗っている。

散々迷って選んだのは、しおりだった。本が大好きなんだから、きつと使うはずだ。紙のものではなく、金属のものもあると知ってこれに決めた。

なめらかな曲線を描くプレートの先に、クローバーのモチーフがついている。一目見て気に入ったし、予算にもあっていた。包み紙はクリスマス用ではなく、王子様により似合うと思える落ち着いたブルーのものにしまった。

その横には、下駄箱に入っていたブレスレットが置かれている。箱にキレイに入れなおしておいた。よく見るととても可愛らしくて魅力的だったけど、やはり誰からかわからない贈り物を平気な顔をして使うことはできない。

夕方になってからさっさと着替えて、いつでも出かけられるように準備した。連絡をくれるとは思うけど、6時半には駅前に着きたい。一緒にいられる時間が、少しでも長い方がいいから。

「いつきー！ お客だぞー！」

階下から声がかかった。将兄ちゃんの声だ。

時計を見ると、5時49分と表示されている。多分玲二くんではない。じゃあ、誰だろう？

階段を降りると、兄ちゃんがなにやら難しい顔をして立っている。

「男だけど」

「え？」

男？

「あの、よく通ってくれたで賞の……？」

「違う」

よかった。相原君ではないらしい。でも、誰だろう。

おそろおそろ玄関へ向かって、ドアを開けた。

「いつきちゃん！」

ゲゲーッ！！

「本城君！　なんで……！？」

笑顔全開の本城君が立っている。後ろから、兄の厳しい視線を感じて、慌てて外へ出た。

「今日、すごく可愛いね。どこか出かけるの？」

「うん……。それより、どうして家に来たの？　住所とか……」

「ああ。知ってそうなヤツに聞いたんだよ。結構苦労したんだから」

「何の用？」

「そりゃあ、クリスマスプレゼント届けに来たに決まってるじゃない」

後ろにそつと隠していた袋を、差し出してきた。

「本城サントから、メリークリスマス」

わざわざ家に来て渡してくるなんて、驚いた。そして本当に下駄箱のプレゼントは本城君からではなかったってことだ。

「……受け取つて。お願い」

笑顔のかわりに浮かんだ真剣なまなざしに、つい袋を受け取ってしまった。

「これ、なあに？」

「開けてみてよ」

玄関先で開けて、いいのかな。でも、家の中に入れることはちょっとできない。

仕方なく、立ったままプレゼントの包みを開けた。

「マフラー……」

「いいでしょ。寒くなったら学校にもしてきて」

中には、赤いチェックのマフラーが入っていた。さわってみると、柔らかくて肌触りがいい。しかもチェックの具合もどこか品があって、すごく好みだった。悔しいけど、これはぜひ使いたいと思えるセンスの良さだ。

「こんなのもらっても、お返しできないよ」

「お返しなんていいよ。そのかわり、俺のこともうちよつと見て」
キザなセリフと真剣な瞳に、つい赤くなってしまふ。

「俺、本気だからね。本気じゃなかったら、あんなかつこいい彼氏いる子にちよっかいなんか出さないよ」

赤くなっただけでなく、なぜか心臓まで動きを早め出す。
それに気がついて、焦りと妙な悔しさを感じた。本城にときめいてどうするんだ、私！

そうか。これが一兄ちゃんの言ってた……「もしかしていい人かも！？ 効果」か。

「どう？ これからクリスマスデートでもない？」

「それは……ダメ。これから出かけるし」

「そっか。どこまで行くの？」

「駅前まで」

「赤くなってるけど。もしかしてときめいてくれた？」

「……！ もうっ！ そんなことないから！」

もしかしたら全然説得力がないかもしれない否定をすると、本城君はニッコリ笑った。

「駅前まで行くなら、一緒に行こうよ。俺、道に迷うかもしれない

し」

「……」

「行ってくれないなら、いつきちゃんが出かける時間まで待つよ」

「わかった。じゃあ、行く」

多分、この人は本当に待つ。結局一緒に行く羽目になるなら、玲二くんとぼったり会わないうちに行った方がマシだ。

「ちよつと待ってて。準備してくる」

家の中に入って靴を脱ぐと、2人の兄がこちらを見ていた。3番目の方が声をかけてくる。

「誰あれ……。2人目の彼氏？」

「違うから！」

つい大声で否定してしまった。階段を駆け上って、カバンと玲二くんへのプレゼントを持つ。

これ以上つつこまれたくなくて、急いで靴を履いて外へ出た。

#33 「8カ月越しの返答」 &1t;玲二>

駅に着くのは、6時50分頃になりそうだ。

いつきにそうメールを送った。でも、返信がない。いつもなら大抵すぐに返ってくるのに。なにか用事でもできたのかな。

返信がないとはいえ、勝手に帰るわけにはいかない。7時くらいに、と話しておいたんだから。

改札を出て辺りを見回したが、見える範囲にはいつきの姿はない。

仕方がない。

改札の横にあるベンチに座った。

そつえば前、ここで落ち込んで座ってたつけ。あの時はひどかったな……お互い。

少し冷えるので、自販機でコーヒーを買った。再びチェックしても、メールの返信はなかった。

すつぽかすなんて彼女にかぎってあり得るか？ もしそんなことがあるとしたら、何か緊急事態に見舞われている可能性を考えないといけない。

予言の話は気にしないようにしている。けど、結局心の底の方にどうしようもなく引っかかって、完全に不安を払拭することができないでいた。いつきも敏感にそれに気がついて、ひどく心配している。

この状態をなんとかしたかった。だから、今日もこうして約束をした。

もしも16歳で死ぬのなら……

あれから何度も考えていた。

このまま何の思い出も作らずにいた方がいいのか。

それとも今のうちにたくさん、いつきや良太郎たちと一緒に過ごした方がいいのか。

やめようと思っているのに、どうしてもそういう思考になってしまっている。

試験も手を抜くのを、少しやめた。9位になってしまったのはそのせいだ。それでも全力ではない。自分の中途半端さがイヤになる。こんな調子の自分でも周りが心配するだけだ。いいことなんかない。

だけでもし無事に17になれたとしても、彼女と一緒に過ごせるかというところでもない。

なにもかもが中途半端すぎる。

閉塞感に、だいぶ疲れていた。

コーヒーを一口飲んで、ため息をつく。

駅前の時計を見上げると、7時を少し過ぎたところだった。どうしたんだろう？ 何か、あったのかな。

まっすぐ前を見ていると、見覚えのある人物が歩いてきた。本城だ。

ご機嫌な顔で、改札へ一直線に進んでいく。こちらには気がついていない。

もしかしていつきに会いに来たのか？ まさか、自分に、ということはないだろう。

じゃあ、連絡がないのは本城といたから？

キザ男が通り過ぎて少ししてから、立ち上がった。

どこかで、一緒にお茶でも飲んでいたのかもしれない。いつきの姿を探しに、本城がやってきた方角へ歩いた。

探し物はすぐに見つかった。少しうつむいて、こちらに向かって歩いてくる。

「園田……！」

「あっ」

驚いた顔で、こちらを見ている。顔が赤い。戸惑ったような表情をしていた。

「玲二くん、今、駅に行こうと思ってたんだ」

「……メール送ったんだけど、返事がなかったから」

「え？ あ……あれ？」

いつきはポケットの中や、カバンの中を探っている。

「家に忘れてきたみたい。せっかく早めに来たのに、これじゃ意味ないよね」

あはは、なんて笑う。

早めに来た？ もう時間は7時15分だ。つまり、本城と一緒にしばらくいたということだ。

自分の台詞の意味するところに気がついていないのか、いつきはいつもの笑顔を浮かべる。

「よかった、会えて。行こうか？」

「……うん」

一緒にいたのか、聞いておきたい。けどそんなことを聞いて嫌な気持ちにさせたくなかった。せつかくの約束だ。時間だって長くは取れない。

2人で店に入って注文をして、椅子に座った。店の中はいつもより少し空いているように感じる。

今日は特別な日だ。今までそう考えたことはなかったけど、大切な相手がいる場合にはそう思えるようになるらしい。

いつもなら、一緒にいたのかなんて簡単に聞ける。

大体、いつきの方から「本城君が勝手に来て……」なんて言っ
きそうなものだ。

でも今日はそんな言葉はない。さっき、少し頬を赤くして、困ったような顔をしていた。

どうしようもなく胸の中が、モヤモヤとしていた。

そうか。これが、嫉妬か。

俺はあいつに妬いてる。ストレートに好きだと言葉に出して、特別な日に押しかける大胆さもある。自分の存在意義に関わるような秘密もない。

それに、16歳で死んだりしない。

いつきは目の前で、笑顔を浮かべている。

「玲二くん、これ……」

青い小さな細長い箱が差し出された。

「クリスマスプレゼント」

そつと、包みを受け取った。

「俺からも……」

用意していたプレゼントを渡す。

「わあ。なに？」

嬉しそうな笑顔だ。中身を言っていないか、一瞬悩む。

「あ、いい。今あけるね。玲二くんも見て」

いつきはにこやかに包装紙のシールをはがしている。丁寧に開けていく様子をしばらく見守った。

「帽子だ……」

出てきたプレゼントを、さっそく頭にのせている。

「似合うかな？」

「うん」

散々迷って選んだものだ。せつかくファッションに目覚めたんだから、何かオマケ的なアイテムがあればと思って帽子にした。

「玲二くんもあけてよ」

帽子をかぶったままご機嫌そうに言う。

青い包装紙をあけると、小さな箱の中にブックマーカーが入っていた。

「ありがとう」

素直な気持ちを口に出す。クローバーのモチーフが、小さく光った。

「玲二くん、そういうの使う？」

「使うよ。ちょっと気になってたやつだ」

「ホント？ 玲二くんなら、きっと本読んでる途中にちゃんとしおりを使うかなーって思ってた」

ニコニコとした顔を見ていると、さっきまでのモヤモヤが少し溶けていく。

自由さをうらやむ気持ちは変わりないが、いつきを取られてしま

うかもという不安は感じなくても良さそうに思える。そう思ったからこそ、口に出してしまった。

「さっきまで、本城といたの？」

「……え」

笑顔が真顔に変わる。

「さっき駅前で見たんだ。園田に会いに来たんだろうって思って」

「……うん。そう、なんだ。いきなり家に來たの。ビックリしちゃうよね！」

あはは、と少し困ったように笑っている。

家に行ったのか。想像よりもずっと大胆なようだ。

「もう、帰ったらまたお兄ちゃんたちになんか言われそうだよ」
帰り道、いつきが呟いた。

「そうだな。夏休みにも、3人の男に取り合いされたんだし」

「もー、なんで玲二くんまでそんなこと言うの？」

いつきが軽く頬を膨らませて、そして笑う。

「次に会つの、もう来年なんだね」

「……そうだな」

いつきもアルバイトがある。後は、家の大掃除やら、親戚の集まりやら、高校生だって年末年始は忙しい。

「今年は良かったな。今までの人生で1番良かった」

「そう？」

「うん。だって、とうとう私の気持ち、玲二くんに言えたんだもん。一緒にいっぱい過ごしたから、すごく楽しかった」

あの、裏庭で全部が始まった。

そうだ。俺も、楽しかった。苦しかったけど、今までで1番幸せな時間を過ごした。

「園田……」

「なあに？」

「もう、本城と2人きりで会わないでくれ」

「思わず言ってしまった。他に、言すべき言葉はいっぱいあったのに。」

「予想外の発言だったんだろう、いつきは驚いた顔で止まっている。」

「いや、ごめん。俺がそんなこという筋合いがないよな……」

「え？ やだ。そんなことない」

「そう言つと、俺の手を取ってぎゅっと両手で握ってきた。」

「そんな事言つていいのは、この世で玲二くん1人だけだからね」

「どうしたらいいんだろう。」

「何も言う事ができないなんて。」

「伝えたいことは山ほどあるのに。」

「ごめんな……」

「何、どうしたの？」

「返事、できなくて。ずっと待たせて、ごめん」

「ああ……」

「手を握ったまま、いつきが心配そうな顔をした。」

「ほんとだよ。いつまで待たせるの？」

「どのくらいなら、待ってくれる？」

「えー？ 困ったな。ずっと待つけど……」

「斜め上のほうをみて、そして、急にニコッと笑う。」

「もしかして、本城君の攻撃に焦ってるの？」

「つい、赤くなってしまった。」

「玲二くんが妬いてくれるなんて、嬉しいな」

「そう？」

「そうだよ。でも、大丈夫。本城君なんか敵じゃないよ。玲二くんにかなう人なんて、きつとどこにもいないもん」

「……俺は……」

言いたい。せめてどう思ってるくらい伝えたい。
言えるか？ 今なら、みんな力を使うのは禁止だ。リアも、母さんも見ていない可能性は……

ピピっという泣き声が聞こえた。
どうやら、可能性はないらしい。

「俺は、何？」

「秘密」

そう言つと、いつきは少し怒った顔で手を離れた。

アルバイトの日々は終わり、あつという間に今年が終わる。
年末の3日間、父さんは毎日ご機嫌だった。随分といつきが気に入ったようだ。

毎日いつきからはメールが来た。今日はどんな仕事をしたとか、お父さんにありがとって伝えてとか。

大掃除をしつかり手伝つて、正月を迎える。

親戚付き合いというものはほとんどないけど、正月には父さんの教え子が結構家にやってくる。

2日には、いつきと初詣に出かけた。

神社に祭られているのは、一体どんな力を持ったやつなんだろう。そんな事を考えながら、2人で並んで今年1年の無事を祈る。

帰りに一緒におみくじを引くと、まんまと「大凶」だった。

「園田は、何だった？」

「大吉だよ！ あれ、玲二くん、大凶だったの？ そういうのは、木の枝に結ぶんじゃないかな」

確かに、たくさんのおみくじがあちこちにくりつけられている。真似をして、不吉なメモ用紙を木の枝にくくりつけて帰った。

1月の間は、いつもと変わらない生活を続けた。

ただひたすら、平穩に過ごす以外できることはない。Water Sでの集まりもないし、ライが時折顔を見せる程度だ。

予言の話を誰に打ち明けることもできず、1人でひたすら平常心を保つだけの日々。まるで修行僧のような自分に、ふっと笑ってみたり、むなしさを感じたりしている。

日々の生活は何も変わらない。今までの自分の全てを放棄することなんて、できなかった。

少しずつ、誕生日が近づいてくる。

毎日毎日、ちよつとずつ、運命の1年の始まりが近づいてくる。

どうしてもどこか暗い雰囲気が出ているのか、いつきは少し、気を使っているようだった。

こんな態度の男に、この後1年もつき合わせるのは悪い気がしてくる。いっそのこと、途中で愛想をつかされたいくらいだ。陰気な男はイヤ！ とか、言わないだろうか。

中村はこの陰気さに嫌気がさしたのか、3学期になってからは寄り付かなくなっていた。席替えをして、前よりも話しかけにくくはなったということもあるが、それだけではないと思う。

新しい席は、真ん中の列の後ろから2番目。

いつきからも、良太郎からも少し離れている。でも、イヤなやつも近くにはいない。ちょうどいい席順だ。

金曜日の放課後、いつきを待つ以外に、特に何もない学校生活を送る。

1月はあつという間に過ぎ去り、2月がやってくる。このシーズンは、大きな行事もない静かな時期だ。その分、誕生日がもうすぐやってくるという意識が際立つ。

2月4日、金曜日。

いつきの部活が終わるのを待って、今日も一緒に帰る。

もしかしたら、これで最後かもしれない。

あんな予言にとらわれてはいけなさと考えつつ、結局心の片隅でいつも意識していた。

父さんも母さんも、なにもなかったかのように接してくる。自分もそうすべきなのに、できていない。

自分が人間ではないといわれてから、10ヶ月経った。

それだけならきつと耐えられた。予言の話だって、なんとか乗り切れたんじゃないかと思う。

でも、恋に出会ってしまった。

好きな相手に、思いを伝えられないのがこんなにつらいなんて。

知らなかった。

横に座るいつきの顔をみる。

視線に気がついて、少し、微笑んでくれた。
愛らしい笑顔を、胸に焼き付ける。

世界で1番可愛い、俺の、大好きな笑顔だ。

いつもと同じ時間に目が覚めた。

6時半、まだ外は暗い。そして寒い。

パジャマの上に上着を着て、階段を降りた。何か、暖かいものが飲みたい。

やかんを火にかけて、玄関に向かった。新聞を取るのは、いつも自分の役目だ。

ドアを開けて郵便受けまで小走りで向かうと、門の前に誰かが立っていた。

「玲二」

「……!？」

「ひさしぶりだな。16歳の誕生日、おめでとう」

祖父だ。母さんの、父親。狼の一族の、あの森を守るリーダーだ。
「今来たんだ。2人は起きているか？」

「……どうかな。そろそろだと思っけど」

「中に入れてくれ」

黙って頷いて、家のドアを開けた。

驚いた。祖父がこの家にやってきたことなんて、今までなかったのに。

リビングを通して、両親の寝室のドアを叩く。

「どうした玲二」

少し寒そうにしながら父さんが出てくる。

「じいさんが来た」

「ん？」

「母さんの父さんだよ。今、来たって」

父さんは目をこすりながら、リビングをのぞいて慌てて寝室へ戻った。

すぐに母さんも出てくる。

「お父さん……！」

「テレーゼ。速音も、いきなりすまない」

「すみません、少し待つてください」

慌てて父がまた戻る。母も続いて、戻っていった。

仕方なく、沸いたお湯で飲み物を用意した。2人が着替えて戻ってきたので、交代して俺も部屋に戻った。

着替えをして、またリビングへと降りる。

いつもと違う光景。父と母と、祖父。何故、来たのか。あまりいい予感はない。

もちろんその予感は当たりだ。

「玲二を連れて帰る。テレーゼは速音とここに残りなさい」

「……どういうことですか？ いきなり」

父さんが少し慌てた様子で質問する。

「玲二にもう力がないことがわかったからだ。予言のこともあるし、一緒に帰ったほうが安全だ」

両親が顔を見合わせる。そして、そろって俺の方を見た。

「力がないって……何？ どうしてわかったの？」

いきなり切り出された提案に戸惑って、祖父に質問をする。

「それは、来てもらえばわかる。確認も必要だし、今日これから一緒に帰るぞ」

「これから……？」

「そうだ。早いほうがいい」

突然すぎる。

行けばわかる？ ……本当に？

「確認って何？」

「本当にお前に力がないかどうかの確認だ」

「どういうことをするわけ？」

「……見るだけだ。お前のことを、唯一見える存在がな」

見える存在……。そんなのが、いるのか……？

母さんの方を見る。母さんも、戸惑いの表情を浮かべている。

「いくらなんでも、早過ぎない？」

「早すぎるとはなんだ。急いだんだぞ、玲二のために」

「……でも、いきなりすぎるわ。大体、心の準備ができてない」

「準備などできるわけがない。まだ16の子供が。どうやったって、まとまるわけない」

「それでも、今からなんて急すぎる。それに……」

そこからは父さんが続けた。

「玲二だけでなんて。いくらなんでも……」

「仕方ないだろう。テレーゼ、お前が選んだ道なんだからな。それとも、お前はこちらの生活を捨てられるのか？」

「それは、……少し待ってもらえれば」

「待てない。予言を覆すためにはこれしかない。私だって大切な孫

を失うのは嫌だからな」

「予言なんて、そんなの……！」

思わず大きい声を出してしまった。いきなり今日、あの森へ行くなんて、……あんまりな展開だ。

「何を言う。あの魔女の予言は絶対だ。お前の命は我々が守る。なんとしてもな」

息がうまくできない。絶対って……なんだ。

母さんがこちらを見ている。目が潤んでいた。インチキだなんて……嘘だったのか？

「お義父さん、絶対なんていわないでください。ここで過ごしても危険はありません」

「そんなことはない。一体どれだけの種類の者がいるんだ？ それに、とてもじゃないが仲間としての意識が薄そうに思えるぞ。ちつともまとまりがない」

「それはわかってる。でも皆、今は、力を使わないようにしているから」

「それは絶対なのか？ まるで統率が取れていないのに」

そう断言すると、じいさんはまっすぐに俺を見てきた。強い瞳には、銀色の光が浮かんでいる。

「なにかやり残したことがあるのなら、いつか戻ってきてからにしなさい」

「……」

瞳と同じく強い口調に、言葉が出せない。とても逆らえない。圧倒される。

力を感じることはできなくても、この祖父が強いことは充分に感じられた。

「父さん……」

「玲二、大丈夫だ。今行く必要はない」

「速音！ 自分の息子が大切ではないのか！？」

「もちろん、大切です。自分の命に代えても守りたい。でも、この子にも自分の人生がある」

祖父の眉間に大きなしわが寄った。

「テレーゼは？ 反対なのか？」

「私は……」

母さんは、うつむいてしまった。

「わからない。玲二のことは守りたいけど、これ以上悲しい思いはさせたくない……！」

「お前はどうしたいんだ？」

今度は俺だ。鋭い視線に射抜かれて、そして……。

わからない。本当に行かなければ、死んでしまうのか？

それより、最初に言った言葉……。

もう、「他に力はない」。

「今日行ったら、もう、戻ってこれないんじゃないの？」

「そんなことはない。いつかまた戻ってきてもいいぞ。先の見通しが立てばな」

「……いつ？」

「何十年か様子を見てからだ。老化のスピードや……」

言葉はまだ続いていたが、まるで耳に入ってこなかった。

じゃあ、どっちにしても終わりだ。

今の生活は続けられない。

誰とも、深い関係にはなれない。

学校に通っていても、意味なんかない。

夢をみても叶わないし、愛おしい相手がいても結ばれる可能性はない。

何をしたって、ある日突然、全部なしになるんだ。

だったら……

だったら、どっちがマシだ？

いつか諦められる日まで、黙って今のまま心を殺して暮らすのと誰の心にも残らないように、今去るのと

その場にいるのが耐えられなくなって、黙ったまま階段を駆け上った。

部屋に入って、鍵をかける。

外はまだ薄暗い。

いや、自分にはもう、朝は来ない。

絶望的というのは、こういう気分のことを言うのか。

死ぬかもしれないという不安なんかより、ずっと重い。

むしろ、死んだ方がマシかもしれない。

こんなに苦しい思いをし続けるくらいなら、消えてなくなってしまういたい。

ドアの向こうから、呼ばれているのを何回も聞いた。

だけど、体が動かない。

ベッドにつつぷしたまま、石になってしまったかのように、暗い悲しみの底に沈みこんでいく。

閉められたカーテンの隙間から、少し光が入ってきているのが目に入った。

明るい光が一筋、部屋の中に差し込んでいる。

ドアの向こうから呼ぶ声はもうない。

ずっと起きていたのか、意識があったのかどうかもよくわからない。

ただひたすら重たい。自分の体も、心の中にあふれかえった悲しみも、全部が重たかった。

突然、机の上におかれた携帯電話が短く鳴る。

メールだ。

メールが来た、と意識したのに、体が反応しない。どうやって部屋にあがってきたのか、不思議に思えるほどだ。

ドキッとして、手を動してみた。ああ、よかった。動いた。もしかしてもう、死んでいるのかと思った。

目元を指でふれる。涙は出ていない。

そういえば、悲しくて泣いた事なんかあっただろうか。

物心ついてから今まで、感情が昂ぶって泣いたことなんか無い気がする。

こんなに悲しくても、涙って出ないものなんだな。

いや、もう悲しいを通り越して、空っぽなのかもしれない。

重たい体をなんとか起こして、ベッドに座った。

時計が目に入る。時間は、11時20分。朝起きたのが6時半だったから、随分時間が経っている。

座ったまま手を伸ばして、電話を手を取った。

いつきからだ。

玲二君、お誕生日おめでとう。

渡したいものがあるので、おうちに行ってもいいですか？

今、自分はどんな顔をしているだろう。きつと、ひどい顔に決まってる。からっぽの16歳になってしまったんだから。こんな状態で、いつきには会えない。

だけど、来ないでくれと返事を打つことができなかった。

電話をパタンと閉じて、ベッドの隅に放り投げる。

そのまままた、ぼんやりと座り続けた。

ゲームオーバーなのに、主人公が生き残るなんておかしいじゃないか。

もう、終わってしまえばいいのに。

ドアを叩く音がした。

「玲二」

じいさんの声だ。

何度もノックと、名前を呼ぶ声がする。

じっと座っていると、とうとうドアが打ち破られた。ものすごい破壊音がして、ドアが部屋の中に倒れる。まんなか

置かれた小さなテーブルにぶつかって、天板のガラスが粉々に砕けて飛び散った。

「玲二！ 何度も呼んでいるのに！」

「……」

「もう行くぞ。必要なものがあるなら、準備しなさい」

有無を言わさぬ迫力だ。その言葉に、勝手に返事が飛び出してきた。

「……いやだ、行かない」

「なんだと？」

「行くぐらいなら、死んだ方がマシだ！」

叫んだ瞬間、祖父が寄ってきて思いっきり頬を叩かれた。

ベッドの上から吹っ飛んで、壁にぶつかる。頭を打ったせいでクラクラして、すぐに立ち上がることができない。

「お義父さん！」

慌てて父さんが駆け寄ってきた。

「玲二、大丈夫か……？」

顔をむりやり上に向けさせられると、心配そうな顔が目に入った。殴られた左の頬が熱い。

「手加減してくださいよ」

義理の父に軽く抗議をして、父さんは部屋に置いてあるティッシュを何枚か取って俺の口元を拭いた。指が少し赤く染まっているのが目に入る。唇が切れたんだろう。

「冷やした方がいいな」

そう言って、部屋の入り口の方を見た。どうやら、母さんがいるようだ。

「ガラスが散らばってて危ない。玲二、おいで」

仕方なく、階段を降りた。ドアが破られてはもう部屋に閉じこもっていても意味はない。

タオルで頬を冷やしながらソファにじっと座った。
3人が黙ってこちらを見ている。何か言いたいけど、何を言っているかわからない。

じんじんと傷む左頬だけが今の自分の中で唯一生きている場所のように思える。

「……玲二、すまなかったな」

少し小さな声で祖父が謝ってきた。

「だが、死ぬよりはずっといいはずだ。生きていれば、希望はある。お前にだって、なにか幸運が舞い降りる時が来るはずだ」

そうかな。

そんなこと、ある、わけがない。

思わず手で顔を覆った。もう、何も聞きたくない。

このままだと引きずってでも連れて行かれてしまう。

さっき叫んでやっとわかった。いやだ。あの深い森の中で半端者として哀れまれるように自由もなく生きるなんて、絶対に嫌だ。

「行きたくない……」

ようやく、小さいけど声が出せた。

聞こえたかどうか自分ではわからなかったが、返事があった。

「仕方ない。では少し待ってやるから、考えなさい」

その声の後に、誰かが肩を抱いてきた。父さんだ。逆側から、母さんのおいも感じた。

考えたって……どの選択肢を選んでも答えは「NO」だ。自分の希望は何もかなわない。

祖父は結論が出るまでの間、ここに留まると言っている。母は俺の部屋を片付けるといつて階段を上がっていった。父はお茶を入れてくるというて台所に移動した。

顔を覆っていた手を下に降ろす。温まってすっかりぬるくなった濡れタオルを持ったまま、動けない。

厳しい顔で腕組みをしているじいさんの姿が視界の端にうつった。

「玲二」

「……」

「さっきも言ったが、大切な孫を私たちは失いたくない。お前は確かに一族始まって以来の異端の存在ではあるが、家族には違いないんだからな。我々のところに来てても、家族がいる。お前の力の事をわかるのも、家族だからなんだぞ」

家族……。

母の故郷に行くときには、祖父と祖母だけが待っている。

もしかしたら隠れているだけで、他にも伯父やら伯母やら従兄弟やらがいるのかもしれない。

「それに、お前には……」

祖父がそこまで言ったところで、玄関のチャイムがなった。

「私が出よう」

父さんが台所から言った。

もしかして、いつきじゃないか？

「俺が出る」

立ち上がって、玄関へ向かった。

ドアを開けると、思ったとおり、可愛い姿が門の前に見える。

「玲二くん、よかった」

近づくにつれ、笑顔が怪訝そうな顔に変わっていく。

「どうしたの、ほっぺ、腫れてる」

「……」

言葉がでない。ただ、黙って首を横に振った。門を開けてそばに寄る。

ちよっと戸惑ったようだったけど、いつきはまた笑顔を浮かべて言った。

「返事がなかったけど、来ちゃった。おうちにいて良かった。これ、渡したくて」

そう言って、持っていた紙袋を差し出した。

ゆっくりと手を差し出して受け取る。

「お誕生日おめでとう」

相変わらずの可愛い、花のような笑顔だ。プレゼントはこの笑顔だけでも充分だといえるくらい愛おしく感じる。

「そのだ……」

声がかすれている。

「うん」

「俺、園田のこと、好きだ……」

驚いて目をまん丸にしたいつきの頬が、薔薇色に染まる。でも、すぐに異変に気がついたようだ。頬は赤いまま、少し様子を伺うような表情になる。

「玲二くん？」

「だから俺、園田とは付き合えない。俺とだと、絶対幸せになれないから」

悲しくてどうしようもなく、いつきのことを抱きしめた。

これで、最後だ。

「好きだ」

「玲二くん……！」

ドンと胸を強く押されて、後ろに1歩下がった。

「今、何て言ったの？」

「……付き合えない」

「どうして？」

いつきの目から、涙があふれている。

「好きだから、幸せになってほしいんだ」

「意味がわからないよ……。どういうこと？」

「……俺には未来がないんだ」

一緒にいられない。

人間じゃないから。

普通の人生を送れないから。

死ぬかもしれないから。

どの選択肢も、最悪だ。

1年経って無事に生き残っていたって、何も変わらない。

「最初からわかってたんだ……だけど」

胸が苦しい。声が、なかなか出てこない。いつきの目を、見られ

ない。

「夢みてたんだ……。なんとかなるんじゃないかって。でも、ダメだった」

「玲二くん……」

いつきはまっすぐこちらを見ている。涙で、頬が濡れている。

涙を見ていられなくなって、慌てて門を閉めて、玄関へ走った。家に入って、ドアを閉める。

もう1度だけチャイムが鳴ったが、……出ることはできなかった。

#34 「友達だろ」 <良太郎>;

寒い空気を切って、自転車を走らせる。

冬はいい。朝は特にいい。空気が澄んで、遠くまでよく見える。

冬はつとめて……だったかな。確か、清少納言も言ってた気がする。まったく同感だ。

学校の駐輪場に自転車を止めて、鼻歌を歌いながら玄関に向かう。2階にある玄関への階段を登る足も軽やかだ。

ずらっと並ぶ上履きの列に、いつもとちよつと違うところを発見した。

今日はまだ来てない。

いつも早くに必ず来てる、もどかしい2人組。どうしたんだろう。そういえば昨日、玲二の誕生日だったはずだ。もしかしてそれになにかあったのかもしれない。朝までコースとか。

いや、どうかな。そんな展開をのぞめるような男じゃないか。

今度は廊下側になった自分の席に座って、教科書を取り出す。あの2人がいないとヒマだ。

少しずつ、クラスメイトが登校してくる。

でも、2人はやってこない。

一緒になって、風邪でもひいたかな。昨日は寒かったし。

前のドアから、本城の顔がひよいと出てきた。

「葉山！」

「……なに？」

「いつきちゃんは？」

「まだみたいよ」

マメな男だな。

「立花も？」

「見りゃわかるだろ」

そう、なんていつて手を振って行ってしまった。

すぐにちよっかい出さなくなるかと思ってたのに、意外と園田ちゃんに本気らしい。あんな風に上手い具合に押して引いてで女子を攻めるテクニクは、ちよっと参考になる。

少しして中村の顔が本城と同じように出てきた。こちらはちよつと教室内を見回して、すぐに引っ込む。

おかしいな。2人とも来ないのかな。
もうすぐホームルームが始めるのに。

そう思っていたところに、園田ちゃんが入ってきた。

目の下にはクマができているし、いつもの澁刺とした可愛らしさが今日はカケラもない。

一目で「なにかあった」のがわかった。

「……」

ここまで様子がおかしいと、声をかけていいのかどうか。挨拶をしそびれた。一体何があったんだ。

とぼとぼとした足取りで、園田ちゃんは自分の席に座ると、すぐに机につつぶしてしまった。

あの可愛らしい美少女がまるでゾンビのようだ。そして、玲二は

来ない。これは事件だ。

すぐに担任の荒川っちが入ってきて、ホームルームが始まる。

「今日は、休みは立花と津川だけかな」

教室内をぐるっとみまわす。

「園田、どうした？ 気分でも悪いのか？」

慌てたように、園田ちゃんが顔を上げる。でも、顔色は冴えない。

「大丈夫です……」

「そうか？ 無理するなよ」

授業の合間、時々美少女の様子を伺った。ずっと下を向いて、時々、震えているのが見える。泣くのをこらえているような感じだ。

これはただごとじゃないんじゃないのか……？

1時間目が終わったので、廊下に出た。すぐに、4組からルンルの本城が出てくる。

「おい、おい本城！」

「何、葉山。いつきちゃん来た？」

「来たけど、ちよつと様子が変わなんだ。今日はちよつかい出さないでくれ」

「なんだよ……なんでお前がそんなこと言うの？」

「いいから！ 今日はやめといてくれ。中村にも言つといてくれよ。」

玲二はいないからって

「……わかったよ。そこまで言うなら、今日は控える」

「頼んだぜ」

これでいい。後は、何があつただけ……。

玲二は休んでる。あいつはメールを毎回確実に返してくれない。大体、深刻な話ならメールなんかで教えてくれないように思う。

園田ちゃんの姿をそつと見つめる。休み時間の間中、ぐったりと机に頬を寄せていた。

授業の間の休み時間で済む話ではなさそうだ。

3時間目が終わって、ダッシュで購買へ走る。この時間なら、フライングでパンくらいなら買える。イチゴとホイップクリームがサンドされている甘いパンを買って、また走って教室へ戻った。そして、次は昼休みだ。

相変わらず死んだような顔をしている彼女の元に行く。

「園田ちゃん……」

しゃがんで、机の上に手をかけた姿勢で話しかける。

悲しそうな顔が上がった。1晩中泣きました、みたいな雰囲気だ。

「葉山君。なあに……？」

「昼飯一緒に食べようぜ」

「……食欲ないんだ」

「ダメだよ。育ち盛りの女子高生が。おべんと持ってるんでしょ？」

さ、用意して」

無理やりカバンからお昼を出させて、教室から連れ出す。元気もないけど逆らう気力はもつとないようで、黙ってついてきた。

書道部の部室を勝手に開ける。もちろん、誰もいない。

「ここ、使っているの？」

「いいに決まってるじゃん。エースでホープのお昼に使くらい、

誰も文句言わないし」

勝手に暖房も入れる。

窓際の机にお昼を広げて、2人で食事を始めた。園田ちゃんは弁当を広げたものの、食べる気力がなさそうだ。

「園田ちゃん、これ」

購買で買ってきたイチゴホイップサンドを渡す。

「元気ないときは甘いもんでしょ」

「……ありがとう」

クリームからちよつと顔をのぞかせる苺をしばらく見つめて、とうとう袋を開けた。端っこをかじったところを見て、少し安心する。

「なあ、園田ちゃん。何があつたの？」

「……何もないよ」

「そんなバカな。今日ゾンビみたいな顔してるよ。それで何もないってことはないわ」

ゾンビみたい、の部分で少しムっとしたようだ。反応があるのは、いい。なんと思われても構わない。

「……ホントになんでもない。玲二くん、フラれただけ」
「はあ？」

つい、大きい声が出てしまった。

「玲二にフラれた？」

「うん。フラれたの」

そういうとまた、イチゴホイップサンドをかじった。大きな可愛い瞳から、涙がじわじわと浮き出てきている。

「……うっ……うっっ……」

とうとう涙は大粒になって、下にボタボタと落ち始めた。

驚いた。

本当らしい。

しばらく、園田ちゃんは泣きながら食べ続けた。

ホイップサンドが全部無くなったところで、お茶をぐいっと飲んで、とうとうずっと「へ」の形にしていた口を開いた。

「昨日、玲二くんの家に行ったの。誕生日だったから、プレゼント

渡そうと思つて」

「うん」

「そしたらね……好きだつて言われたの」

「……？」

「だから、付き合えないんだつて。自分には未来がなくて、私のこ
と幸せに出来ないって……」

「……なんだそれ」

「わかんないよ。それだけ言つて、もう、出てきてくれなかったの」
「本当に？ それ、玲二だった？」

園田ちゃんはちよつと怒つた顔をしてこちらを睨んできた。

「当たり前じゃん！ 見間違えたりなんかしないもん」

「ごめん」

「……ほつぺが腫れてたから、なにかあつたのかなつて思つたけど」
ほつぺが腫れてた？ 誰かに、ぶたれたのか？

誰かに付き合つたらダメって言われたとか？ いや、だからつて
自分の意思を曲げるようなヤツだろうか。……むしろ今まで、誰か
にダメって言われたから黙つてたんじゃないだろうか。ひらすら我
慢してたとか。

どう考えても、玲二は園田ちゃんのことが好きだつたと思う。夏
休みもあつさり認めたし。あれから気持ちが変わるようなことがあ
つたとは考えられない。

「好きだつて言われたの？」

「うん」

好きだから、付き合えない。未来がない……？
病氣説が再浮上だな。

「昨日は眠れなかつたんだ……」

この疲れ果てた様子をみれば、そうだろうなとすぐに納得が行く。
「いきなり、あんな風に終わっちゃうなんて思つてもみなかったか
ら……」

「園田ちゃん」

「どうしよう葉山君。どうしたらいいんだろう……」
潤んだ瞳がこちらを見ている。本気でわからなくなってしまっているようだ。

「俺、玲二のところに行くよ。今日は連絡は……なかった？」

「うん。ずっと、ギリギリまで駅で待ってたけど」

「そっか。どうしようかな」

部活がないのは明日の火曜だけだ。でも、気になる。今日いくべきか？ それとも、明日になったらつらくても登校してくるだろうか。

どういう事情かわからないけど、もしかしたら玲二も混乱してるかもしれない。やっぱり1日寝かせるべきか……？

「なあ園田ちゃん、玲二のこと、嫌いになった？」

「え？」

目の前の美少女は困ったような顔をしている。
しばらくじっと待つと、小さな声が聞こえた。

「そんなわけ、ない」

放課後になり、とぼとぼと帰る姿を一応玄関まで見送った。
部室に移動する前に、メールを送る。

玲二、どうしたんだ？

園田ちゃん、死んでるみたいな顔してたぞ。

もつと言いたいことはあったが、これくらいにしておこう。

部活の間中、ずっと携帯を気にしていたが、結局夜寝るまで返事は来なかった。

次の日も、教室に1番乗りになる。

これは、今日も来ないのか？　メールの返事もない。

しばらくして、園田ちゃんの姿がようやく現れた。

昨日よりは少し早い。そして、顔色も昨日に比べれば少し良かった。

「園田ちゃん、おはよう」

「おはよ、葉山君」

「昨日は眠れた？」

「……うん。なんか、寝すぎたかも。一昨日の分まで寝ちゃった」
そう言つて、少し微笑んだ。

「玲二は？　なんか言ってきた？」

黙つて首を振っている。

あいつにも何か、相当ダメージのある出来事があったということなのか。

大体、誰にほつぺた叩かれたんだろう。母ちゃんか？　いや、母親にぶたれたら普通、発奮するところだよな。健康な男子高校生なら。

休み時間になると、また能天気な本城が現れた。

今日は、止めることはできない。そんなことをしたら、何かあったと感づかれてしまう。

もしかしたら、園田ちゃんの様子でわかってしまうかもしれないが、自分がしゃしゃりでて大げさにはしたくない。

本城はいつもの笑顔で恋しい女の子に話しかけている。

しかし、すぐに様子がおかしいのを案じるような雰囲気になった。

優しい表情で、いつもより言葉すくなに園田ちゃんを見つめている。

あいつ、本当にテクニシャンだな。

最初の失礼な態度。同じ部活に入って、身近な存在になって、今度は真剣な顔を見せる。相手が弱ってるときには、思いっきり優しく……。

ただのキザ野郎ではなかったようだ。

テクニクに感心している場合ではない。このままじゃ、園田ちゃんだってどうなるかわからない。

今日は玲二のところに行こう。

「園田ちゃん。一緒に帰ろうぜ」

「……玲二くんのところ、行くの？」

「うん。駅まで一緒に、どう？」

こくと頷く。元気がないのは気の毒だが、少しションボリした様子もそれはそれで可愛い。

一緒に電車に揺られている間、会話はほとんどなかった。無理もない。こういう時には黙っておくのが、いい。いつも回している口は閉じておこう。

そしてもうすぐ着くという頃に、ようやく小さな声が聞こえた。

「葉山君」

「……なに？」

「玲二くんの家、わかる？」

「あー、そうだな。多分、大丈夫だと思うけど」

「ホント？」

秋に行った時のことを思い出す。それほど難しい道順じゃなかつ

たはずだ。

「一緒に行きたいなら、行こうぜ」

「それは……無理」

「じゃ、途中まで案内してよ。帰りはなんとかする。できるなら玲二に送らせるし」

「うん」

さて、お見舞いはいるだろうか？

大体、あいつの好物が、紅茶以外よくわからない。

「園田ちゃん、あいつ好物って何？」

「うーん……そうだな。煮物とか？」

「煮物？」

「あとは、お魚とか」

「じいさんかよ」

まったく呆れる。お土産に選ぶにくいことこの上ない。今日はいいか。大体、病欠じゃなさそうだし。

「その角、左に曲がってちょっと行ったら玲二くんの家だから」
園田ちゃんは、角の手前で立ち止まった。

「わかった。ありがと。なんかわかったら、メール送るよ」

「……」

「どうしたの？」

「……怖いんだ。何であんなに辛いのか、知りたくない」

「大丈夫だよ、園田ちゃん。どうせくだらない青春の悩みだよ」

うつむいた顔がちよつとあがる。

昨日から潤みっぱなしの大きな瞳。あんな目でじっと見られ続け
たら、つい好きになってしまいそうだ。

「わかった。適度な内容のメールを送るから。心配しないで」

「ふふつ。適度って何？」

「いいね。やっぱ笑顔だよ、園田ちゃんは。じゃ、気をつけて帰

って！」

手をさつとあげて、角を曲がる。

「逆！ 左！」

「おつと失礼」

あげた手をパタパタと振って、玲二の家に向かった。

さて、ここからが本番だ。

インターホンを押すと、「はい」と返事があつた。女性の声だ。母ちゃんか？

「葉山といいます。玲二君のクラスメイトです」

『……少し待っててね』

門の前で待つ。なかなか、ドアは開かない。

5分ほど待って、ようやく誰か出てきた。

おお。玲二にそっくり……。

「お待たせしてごめんなさいね。葉山君、いつもお世話になって……
……ありがとうございます」

そう言って、まっすぐ玲二と同じ色の瞳で見つめられる。うつむ。
玲二が女だったらこうだったんだな。

「いえ、こちらこそお世話になってます」

「どうぞ」

家に入れてもらい、リビングではなく階段の方へ案内される。
あがつて右側の部屋の前で、玲二の母ちゃんがドアを叩いた。

「玲二、葉山君よ」

返事はない。

「玲二！！」

強くドアが叩かれて、ようやく鍵の開く音がした。

「ごめんなさいね」

「いえ」

部屋の中は暗い。玲二の母ちゃんはため息をついて、カーテンを開けた。

光が入ると、部屋の中にはベッドしか置いてないのがわかった。その上に、親友がぐったりとうなだれて座っている。

「お茶持ってきて来るわ」

「いえ、おかまいなく……」

驚いたな。なんだこの部屋は。

「玲二」

昨日の園田ちゃんに負けず劣らず、げっそりと顔色の悪い様子にちよつと驚く。

ゾンビ具合はこっちの方が上だった。園田ちゃんに、悪いことを言ってしまった。

「なんだよその顔。いや、なんだ、この部屋は？」

「……俺の部屋は本当は向かい」

辛気臭い声。

「ドアが壊れたから……」

ドアが？

思わず、部屋を出る。目の前に、ドアのない部屋があるのが見えた。

「ないけど」

「うん……。ドアがないなんて、落ち着かないだろ」

「……年頃の男子には拷問だな」

そう答えて、ゾンビの隣に座った。

「どうしたんだよ。美男子が台無しじゃないか」

「……」

ひざをかかえるように座って、じつとうつむいている。

「……園田に、全部聞いたのか？」

「聞いたよ」

「そうだよな」

消え入りそうな声だ。頼もかけてて、ご飯も食べてませんオーラが出ている。

ノックが聞こえて、玲二の母ちゃんが入ってきた。

「……テーブルがないわね」

そういうと、お茶の乗ったトレイを無理やり息子に持たせると部屋を出て、どこからか折りたたみのテーブルを持ってきた。

そこにお茶を置くと、笑顔を1つ残して出て行った。

「うまいな」

紅茶を一口飲んで、玲二にもカップを渡す。

捨てられた子犬みたいな様子の美少年も、黙って一口すすった。

「なんなんだ？」

「……」

「お前の秘密、なんなんだよ。よっぽどくだらないか、よっぽど深刻なんだろうけど。どっちなの？」

玲二は目を伏せる。憂いを帯びた表情に、下へと伸びる長いまっげが、なんとなくいつもより美少年度をあげている。

「どっちかな。俺、人間じゃないんだ……」

「……？」

反応に困る。玲二が、くだらない嘘をつくやつじゃないと信じているからだ。

「人間じゃないなら、なんなの？」

「なんでもないんだ。俺、すごく半端で、どうにもならなくて、それで……困ってるんだ……」

「それで、未来がないとか言ってるの？」

黙って頷いている。

どうしようかな。

「具体的にどう困ってるわけ？」

「ここで暮らしていけないし」

「うん」

「誰とも、結婚したり、深く付き合えないし……」

「うん」

「もうすぐ、死ぬかもしれない」

大事だ。親友のことが、信じられなくなってる。

何を言われても信じてやるつもりだったのに、ここまでくるとちよつと、どうしたんだろうか。うまく理解ができない。

「……信じないよな。当然だ」

「あー……」

「いいんだ。良太郎。俺はもう、ダメなんだ。ここからいなくなるしかない。これから先、できることなんて何も無い。お前にももう会えない。学校だって、もう行けない。なにもかも全部、意味がないんだ」

「何言ってるんだよ。そんなことあるわけないだろ。何がお前をそんなに弱気にさせるんだよ」

玲二は黙って首を横に振った。

……本当なのか？

もし、今言った事が……ありえないけど、本当なら？

地盤の部分がどうなっている事情なのか想像もつかないが、どれだけ寂しいかわからない。想像を絶する孤独にさらされることになりそうだ。

「だから、お別れなんだ。園田とも……」

「好きなんだろ？」

「そうだ。俺は、園田が好きなんだ。それが全部の始まりだった。好きにならなかつたら、こうはならなかつた。こんなに辛い思いしなかつたはずなんだ……」

好きなら、諦めるなよと言いたかつたのに、その言葉は心の中でストップすることになった。

親友のただならぬ様子に、段々不安のようなものが胸に渦巻き始める。

「良太郎、俺、園田が好きだ。好きすぎて、もう、頭がおかしくなりそうなんだ……！」

玲二の目は真剣だ。額を両手でおさえて、少し震えている。

「あいつがいなかつたら、諦められるのに……。ダメなんだ。どうしても、ふんぎりがつかない。もう、返事はしたのに……嫌なんだ。離れたくない」

「玲二……」

名前を呼ぶと、苦しそうな顔でしがみついていた。俺の右肩に顔をつけて、遠慮がちに両肩に手を置いている。

不器用に甘えてきた親友がどうしようもなく気の毒に思えて、そつと背中を抱いた。

「つらいなら、泣けよ。泣いて全部ぶちまけるよ」

震える指先に、力が全然入ってない。顔のすぐ横にある茶色い髪が、いつもよりも元気なくぺたつとしている。いつもの玲二じゃない。全然違う。どうしてこんなに、弱ってるんだろう。

気がついたら、自分の方が泣いていた。涙がぼろぼろ、落ちてくる。

玲二の話は無茶苦茶で、信じていいのかハッキリ言ってよくわか

らない。

だけど、どうしようもなく悲しくて苦しいのは伝わってきた。深い暗い海の底に、沈んでいるような感じがする。

どのくらい経ったか、よくわからない。

玲二がゆつくりと顔をあげた。

涙で霞んだ目で見ても、泣いてないのがわかる。

「お前、涙は出ないわけ？」

「……そう、かもな」

かわいそうに。人目も気にせずに泣けたら、きっともつと楽なのに。

「良太郎、ありがとう、俺のために、泣いてくれるんだな」

悲しげな声に、また涙があふれそうになる。

「お前のためならいくらでも泣く。それに、人間じゃなくても気にしない」

玲二がじつと、顔をみつめてきた。でも、すぐにまたうつむいてしまう。

「……俺、お前にも出会わなきゃよかった」

「なんで……」

「俺はお前に、同じような友情を返せない、から」

弱々しい台詞に、思わず大声で返した。

「そんなもんいるか。俺が一方的にお前のこと好きなんだからな。」

それでいいんだ。それに、俺がいなくても同じようにお前のこと大好きになるやつは、かならずどこにでもいる」

そうだ。勝手に親友になったんだ。名前で呼んでくれるようになったとき、妙に嬉しかった。そっちの趣味があるんじゃないかって、1週間ほど悩んだくらいだ。

「お前がいなくなったとしても、ずっと友達だからな。結婚式の友人代表スピーチはお前に頼む。絶対、お前以外にはやらせない。俺

の1番の親友は、立花 玲二、お前だ。不動の永久欠番でお前以外にはなれないんだからな」

勝手にぎゅうぎゅう玲二を抱きしめて、勝手に思いをぶちまけた。抱かれている方は嫌がりもせず、ただ、黙って勝手な主張を聞いてくれている。

思いは届くだろうか。悲しげに伏せられた目から、気持ちを讀み取ることはいできない。

「お前のその大荷物、半分持ってやりたい。俺にできること、ないのか？」

抱かれたまま、玲二が横に首を振った。

「そうか……。でも、なにかあったらすぐ言えよ。どこにいても必ず会いに行くし、何年会わなかったとしても俺はお前のこと忘れない。じいさんになっても、もし他のこと全部忘れてても、玲二のことだけは絶対覚えてる。約束するからな。お前も俺がいること、絶対忘れるなよ。今この瞬間から、ずっとだぞ」

「りようたるう……」

しょぼしょぼの声。

「わかった……」

しょぼしょぼの声だけど、返事が聞けた。よかった。その返事だけでも今は充分だ。

「黙って勝手にいなくなるなよ。もしどこか行ってく言うなら、絶対俺には知らせしてくれ。いいな」

玲二の体が離れた。

そして、力なく頷く。

涙は出ていないが、目が潤んでいるようにみえた。

「今日聞いた話、誰にもしない方がいいか？」

「……」

少し考えた顔をして、またこくと頷く。

まったく、無口なやつだ。

それにしても今日は、本当に頼りない顔をしている。まるで、小学校低学年くらいの子供みたいだ。

「帰りたいけど、道がわかんないから駅まで連れてってくんない？」
なんとか、部屋から出したい。少しでも気分が変わるように。

「……わかった。着替えるから、ちょっと下で待ってて」

階段を降りて、玄関で靴を履きかえる。

玲二の母ちゃんが、足音を聞きつけたのかやってきた。

「葉山君、ありがとう来てくれて」

「ああ、いえ。なんか、役に立てたかわかんないですけど」

「いいえ。訳がわからなかったでしょう？ ごめんなさいね。玲二も今ちよつと、混乱してて」

「……」

このお母さんに、あいつホントに人間じゃないんですか？ なんて聞いていいもんだろうか。

「お待たせ」

玲二が降りてきた。ひどい顔だが、一応服はパリっとしている。

「駅まで送ってくる」

「そう……。ありがとう葉山君」

礼を言われてしまった。やっぱり、ずっと部屋から出てこなかったんだな。

やっぱり事情の全体像がよくわからない。玲二個人の問題なのか、もつと大きい話なのか。

想像しても、頭の中でペンの試し書き用の紙に書かれた落書きみたいにくちゃぐちゃになってしまう。

そつえば、こんな風に2人で歩いたことなんてほとんどないな。
「なあ玲二」

「……何？」

「園田ちゃんから、何もらったの？」

「……セーター」

「手編みの？」

「うっん……。どこか、買ってきたやつ」

「今着てる？」

首を横に振っている。

「着られない」

「バカ、着ろよ。まだ園田ちゃんはお前のこと諦めてないんだぞ」
途端に顔を下に向けた。自分からフッておいて、こんなに落ち込むなんて。訳アリの恋か。……昼メロみたいだ。

家に帰ってから、園田ちゃんにメールを送ろうと考えた。

しかし、なんと書いたものだろう。

今日聞いた話をそのままはダメだ。アホかと思われてしまうかもしれない。大体、自分だって100%信じられてないんだから、うまく伝えられなさそうに思う。

ただどあの落ち込みよう、どうしようもない状態に陥っているのは本当だ。

ふざけてあんなガツカリしたりするような奴じゃない。大体、あんまり感情を出してるところなんて見ない。しょっちゅう照れてはいたが、それ以外は基本的に冷静で動じない男だったはずだ。それがあそこまで落ち込むなんて、よっぽどシリアスに悩んでいるに違いないかった。

今日、玲二に会えたよ。

色々話をしたけど、事情はよくわからない。

ただ、どうしようもなく辛いのは確かみたいだ。

俺は玲二を支える。何があっても、どんな理由があっても。

園田ちゃんも、一緒にどうか。きっと玲二の重荷も、少し軽くなると思う。

ちよつとクサイかな。

まあいいか。クサくても、ふつと笑ってもらえるのが俺の強みなはずだ。よし、送信。

返事はすぐきた。

葉山君、ありがとう。

これからも玲二ファンクラブの会員同士、よろしくね。

会員番号1番 園田いつき

俺が2番ってことか？

電話をパタンと閉じて、布団に転がる。

今日はなんか、すごく泣いちゃったな。思い出すとほんのり恥ずかしい。

青春だわ。

火曜日に大いに泣いて、はっきりに言って次の日から来るんじゃない

いかと思っていたのに。予想は裏切られてずっと、玲二は登校して来なかった。

1週間まるまる休んで、次の週。月曜日はバレンタインデーだ。園田ちゃんが小さな可愛らしいチョコレートケーキをくれた。これは嬉しい。

「玲二には？ 渡しに行くの？」

「……行きたいけど、どうかな。ポストに入れとけば、届くかな」

「直接渡せばいいじゃん」

「無理には行けないよ。きっと、会ってくれないもん」

先週よりはマシだけど、やっぱり、もちろん園田ちゃんに元気はない。玲二はどうだろう？

さつき下駄箱の前を通ったときに、園田ちゃんのスペースは大変なことになっていた。本人は多分まだ気がついてないけど、玲二がいなくなったのをかぎつけたハイエナたちが集まってきている。早く復帰しないと、何かが起きる……！ なんて可能性はどのくらいだろう。

「いつきちゃん！」

またきた。

「……本城君」

「はい、これ」

なにやら愛らしい包みを渡している。

「何？」

「チョコに決まってるじゃん」

「……男の子から？」

「欧米じゃ当たり前なんだってよ」

歯をキラキラさせている。多分、玲二が来なくなつて1番気合を入れているのはこいつだ。

「いつきちゃんからは？ 俺に、ないの？」

「じゃあ、これ」

何か、ごそごそとカバンから取り出している。

「なにこれ……たくあんチョコ？」

「そ。義理チョコ。よかつたらどうぞ」

本城は笑顔で早速チョコを口に放り込んで、絶妙な表情を浮かべている。

「いや、これ、個性的な味だね」

「うん。お兄ちゃんのお気に入り。正直もらっても困っちゃうんだよね」

「うわー。小悪魔だな、園田ちゃん！」

2人でケラケラ笑う。

ちよつとムつとした顔の本城の視線が、俺の手元で止まった。

「葉山……。それ誰から？」

「園田ちゃんに決まってるでしょ」

「俺にはたくあんなのに！？」

そんな苦情は決して受理されないのだ。

「おーい、葉山ー！」

「あ、荒川先生」

「ちよつといいか？」

昼休みに、職員室へと呼ばれるのは初めてだ。

「なあ、立花がどうして休んでるか、知ってるか？」

「ああ……」

「お前仲いいんだろう？ 電話しても、本人が出てくれなくてな」

「……ちよつと、深い悩みがあるみたいですよ」

「悩み？ どんな？」

「それは……説明するのが難しいな」

ちよつとくらいのため口には文句を言わないのが、荒川っちのい

いところだ。

「そうか。あんなマジメなやつがこんなに休むなんて、なにか思
つてな」

「そうですね」

「あのさ、園田に理由聞いても平気か？」

おっと。本当に聞きたいのは、園田ちゃんの方だったのか。なか
なか鋭い観察眼だ。わざわざ先に俺にこんなこと聞いてくるなんて、
気の利く先生らしい。

「いや、どうでしょうね。彼女も落ち込んでるんで」

「うーん。そうか。わかった、今週家庭訪問するよ」

俺ももう1回、行こうかな。家庭訪問。

頼むからまた、学校に来て欲しい。死ぬなんて言ってたのが、ど
うしてもひっかかる。

親友のカッコイイ姿を思い浮かべる。

……カッコイイは余計か。自分に軽くつつこんで、職員室を出て
教室へ戻った。

#35 「暗闇から出て、先へ」 &1t;玲二>

もう、どのくらいになるだろう。

カレンダーを見ても、今が何日なのかよくわからない。

携帯の電源は切つてある。毎日電話が鳴るのがつらかった。電池ももう多分、切れてる。

お客もよく来た。

荒川先生も来だし、ライも来てくれた。まあ、ライは多分リアにも会いに来てるはずだから、別にいい。いつきだつて来た。会わなかったけど、チョコレートと手紙をもらった。意外なところで、いつきの友達3人組もやってきたし、蔵元さんから本も届けられた。

会ったのは良太郎だけだ。

あの日の言葉は本当に嬉しかった。だけど、どうしても家から出られない。学校に行けば、きっと辛い。

俺だつて、あのごく普通の高校生活に混じりたい。きっと皆をうらやましいと思うだろう。平気な顔をしていられる自信がなかった。

家にいる間、毎日勉強はしていた。他にやることもないし、何もやらないとどうしてもおかしくなつてしまいそうになるから。

祖父はとうとう3日前くらいに帰っていった。リーダーがあまり留守にするのは良くないらしい。

ただし、また来ると言っていた。次はきっと連れて行かれる。

父さんと母さんは、なんとかここにいられたらと味方してくれているけど……。じいさんの方が圧倒的に強い気がする。なにか裏技的な力を使われたら、きっと即、アウトだ。

食事はなんとか取ってる。

時々鏡を見る。

見るたびに、死んだような顔をしている自分がイヤになる。

自分は何がしたいんだろう。

こんな生活なら、祖父と一緒に行くのと変わらないんじゃないのか？

大学の教授の息子が不登校児なんて、シャレにならない。もう、自慢の息子でもなんでもない。運命のプレッシャーに負けて、自分の殻に閉じこもっているだけ。このまま、そんな情けない17歳になるのを待つ？

いつきには付き合えないと言ったのに、チョコレートが届いた。

一緒についていた手紙には、「玲二君、大好き」とだけ書かれていた。

あんなに理不尽な別れの言葉を言われても、まだ好きでいられるなんて……。もしそれが、運命の相手だからなんて理由なんだとしたら、そんな呪縛から早く解き放ってあげたい。

あの時、いつきと会った時、直前まで止まっていた思考が一気に動いた。

いつきのあの家族。

優しい両親と、仲のいい兄弟。あれが、彼女のあるべき未来の姿だ。

一生を共に過ごせるかどうかわからない。子供はもうけることを許されない。いつきが年を取っていくのを、自分は若いままずっと見ていく？　そして散々年月が経った後に、いなくなるなんて……

…。

そんなの、申し訳なさすぎる。もっと、幸せになってもらいたい。自分のためにたくさんの幸せの要素を我慢させるなんて、耐えられない。

思わず、好きだと言ってしまった。あれは間違いだった。ひどい言葉を投げかけるべきだったのに。嫌われるようにすればよかったのに、できなかった。中途半端で気が利かない自分に腹が立つ。

好きで好きで、諦めきれない。自分のこともこの呪縛から開放してほしい。誰かが、彼女をさらっていつてくれないだろうか。結局この未練のせいで身動きが取れない。もしも、生き延びられるなら……。もしも、恋をできる身分になれるなら……。

心の隅にある甘い妄想と、目の前にあるどうしようもない絶望が順番に波のように打ち寄せる。

自分のことを思ってくれている人にすがりたい気持ちと、どうしようもない自分を見限って欲しい気持ちがぶつかりあう。

毎日がこの思考の繰り返しだ。ベッドの上で小さく丸まって、理不尽な運命を呪う。

今日もまた、眠れない。いつきに会いたくてどうしようもない。

「玲二、食事よ」

母さんの声がする。

今、何時だろう。ゆっくりと起き上がると、時計は7時をさしている。外は暗い。じゃあ、夜なんだろう。

食事は取らなくてもいい。食べたくないかない。でも、母の涙は見たくない。仕方ないから、階段を降りる。

食卓には父の姿もあつた。

既に3人分の食事が並べられている。無言で席について、なんとなく食事を取る。

もう何日も、自分の声を聞いていない。こんな辛気臭い食卓にしまして、両親に申し訳ない気分だ。

「玲二」

父さんが声をかけてきた。それに、少し顔をあげる。

「今日、いつきちゃんが来たぞ」

ろくに動かしてなかった箸が、とうとう動きを止める。

「……どこに？」

「大学だよ。玲二君は元気ですかって、聞きに来了」

わざわざ、父さんのところに……。

「やっぱり、すごくいい子だな」

「……」

まったく同感だ。ビックリするくらい、本当に可愛くて、優しいんだ。素直で、料理が得意で、スタイルだって結構いい。

食事を終えた父さんは、リビングのソファに移動していった。

「玲二、ちょっとおいで」

食事はまだ、8割ほど残っている。母の方をつい見てしまう。目があつと、黙って頷いてきた。

箸を置いて、移動する。

「ずっと考えてたんだ。このままでいいわけないからな」

父さんが俺の手を取って、握ってきた。

「春休みになつたら、一緒に行こう」

「……どこへ？」

「母さんの故郷だ」

……父さんと一緒に？

「おじいさんが言つてただろう。お前を見ることができる唯一の存在がいるって」

言つていた。本当に見えるか確認するって言つてたはずだ。

「その唯一の存在が、お前の最終兵器にもなるはずなんだ。父さんは、3年前にあることをみんなに秘密で頼んだ。もしかしたら、もう使えるかもしれない」

「……最終兵器が？」

「その最終兵器君はな、想定よりずっと早く仕事をこなしてるんだ。お前のことを見えるようになるまでもつとかかかると思つてた。そうだな、お前が20歳になるくらいに……」
つて思つてたんだよ」

母さんが言つてた、最初の期限。20歳になるまで……そのことだつたんだろうか。

よく考えたら、20歳なんて期限、何の意味もないはずだ。いや、絶対に死なせないと思つていたからなのかもしれない。

「だから、最終兵器君に会いに行こう。もしかしたら秘密の技で、お前の悩みを全部解決できるかもしれない」

「そんな……、そんなこと、あるの？」

母さんの方を見ると、ちょっと驚いた顔をしてこちらの会話を聞いていた。初耳だったらしい。

「あるぞ。これに賭けよう、玲二。一緒に行こう。もしダメなら、私も母さんも一緒に向こうへ行く。お前とずっと一緒にいるからな」
「……」

父さんは本気だ。目を見たら、わかった。

自分の為に今の生活をぜんぶ捨ててくれる存在が、いつき以外に
もいた。

「いいか？」

「……うん」

「そのかわり、学校には行きなさい。期末試験だけ受けに行くだけでもいい。とにかく、進級は必ずするんだ。普通の高校生として暮らせるように準備してから行く。戻ってくるんだからな」

父さんは優しい微笑みを浮かべながら、手をまた力強く握ってきた。

「それから今日の夕飯はちゃんと全部食べる。それができないなら、連れて行かない」

「……わかった」

ようやく、普通の声がでた。

「最終兵器君って、何者？」

「それは会ってのお楽しみだ」

「もしかして、秘密にしていることの、もう1つ？」

「ああ。そうだ。……それから、試験は全力で受けなさい。わざと成績を落とすのはもうやめるんだ」

手を抜いていたことを、誰かに話したことはない。

父さんの力強いまなざしに、黙って頷いた。まずは夕食だ。食卓に戻って、箸を握った。

部屋に戻って、まずは日付を確認した。

試験は、あと3日で始まる。父さんとの約束を果たそう。ちゃんと試験を受けて、全力を尽くす。

机の上にほったらかしにしている携帯電話が目に入った。
開いてみると、案の定電源が入らない。ひさしぶりに、充電器の
上に乗せてやる。

少ししてからまた電源を入れると、メールが何十件も来ていた。
ほとんどがいつきと、良太郎からだ。本城からも来ている。

早く来いとか、元気がどうかとか、見ていると切なさがつる。
ほんの少し前まで自分のいた世界が広がっている。いや、ここに
戻るんだ。そのために動くんだ。

春休みに行くということは、3月の下旬。終業式が19日にある
から、それ以降。

試験は8日からだ。金曜まで4日間。その後答え合わせと、順位
の発表がある。

生活をなんとか立て直さないと。今日から、元に戻るんだ。

3月8日、火曜日。久しぶりに、学校へ向かった。
いつきには何の連絡もしていない。いつもより少し遅い電車に乗
った。

ガタガタと揺られる。

そうだ。これが、俺の世界だ。普通の、日本の高校生。

学校に着いてまず、職員室に向かった。

散々心配して連絡をくれた先生に一言謝りたかった。

「お！ 立花！」

入り口に立つなり、声をかけられる。試験期間中は奥へは入れな
い決まりだった。早足でやってきてくれる。

「よく来たな。良かった良かった」

「すみませんでした。長い間、休んで」

「いいんだよ、来たんだから。試験、どうだ？　できそうか？」

「……はい。大丈夫です」

「もし気分が悪い時は、保健室でもやれるからな。いつでも言えよ」
そう言つて、背中をぱんぱんと叩いてくる。試験の準備で忙しいのか、笑顔で席へと戻つていった。

そつと頭を下げ、今度は教室へと向かう。

久しぶりの教室に、一瞬足が止まる。でも、入らなければ解決はない。意を決して中に入った。

「……玲二！」

良太郎が駆け寄ってきた。

「来たんだな」

黙つて頷く。

いつきもいた。目が合うが、こちらは座つたまま止まっている。
今はいい。試験を受けに來ただけなんだ。すべては、父さんと最終兵器君に会いに行つてからだ。

なんとなく皆が軽く距離を置いているのを感じる中、試験を受ける。

集中して、ペンを走らせた。

全力を尽くす。しばらく、忘れていた気がする。入学式前日から遠ざかつていた高揚に、少し気分が良くなっているのを感じた。

もしかしたらずつと、両親は気がついていたのかもしれない。何に對しても、どこか無気力な息子に。ずつとずつと、1人でふてくされていた。それを、何も言わずに見守つていてくれたんだ。

良太郎と少し話した以外は特に誰とも絡まずに試験をこなした。
いつきは遠慮しているのか、避けているのか、話しかけてこない。

行き帰りも別だ。

土日挟んで、今度は試験の結果が発表される。廊下に張り出された順位を、初めて自分から見に行った。

廊下に出ると、いつきがこちらを見ている。

隣で本城がやはりこちらを見ていた。

ついでに相原が睨んでいるのが目に入る。

最後に、良太郎が笑顔で抱きついてきた。

「玲二、お前……家で何やってたわけ？」

「勉強」

「つまんねえ答え！ でもま、当然か。この結果ならな」

指差した先に、自分の名前があつた。本気を出した結果は、……1位。

相原が睨んでいるわけだ。

これなら父さんに堂々と報告できる。

順位の発表の後は、各教科の答えあわせがある。妙にたくさんの視線を感じながら、静かに時間を過ごした。

そしてとうとう、終業式の日が来た。これで1年生の日々は終わる。りだ。

出席日数もセーフで、2年生になれることが決定する。

明後日父さんと2人で出発することになっていた。運命の旅だ。もしだめだったら、帰って来れないかもしれない。

もちろん戻ってくるつもりだった。やはり、今まで通りの普通の生活がしたい。もしダメでもなんとかならないか模索したらいいと思ってる。でも、約束通り親友にだけは話しておこう。

席を立ち上がって、良太郎の元へ向かった。

「お、玲二」

「良太郎、ちょっといい？」

「もちろん、いいぜ。ここじゃダメ？」

「いい。すぐ済む」

もう主が既に帰っているらしい、良太郎の隣の席に座る。

「俺、明後日からドイツに行くんだ」

「ドイツ？ 母ちゃんの実家とか？」

「うん。いつ帰るかわからないから、一応伝えておく」

「……帰ってくるよな？」

「俺は、そのつもり」

良太郎の顔が険しくなる。確かにこんな言い方はなかったかもしれない。

「どこに行くって？」

声がして振り返ると、いつきがなんとなく不安気で腹立たしげな表情をして立っていた。

「……ドイツだよ」

「帰って来ないの？」

「わからない」

いつきの顔がみるみる曇っていく。しかし怒りの矛先は自分ではなく、良太郎に向けられた。

「葉山君、なにか知ってるの？ 私の知らないこと」

「ええ？ そんなことないけど」

「あんまり驚いてないじゃん。もしかして、秘密、教えてもらったの？」

良太郎は少し焦っている。それが、そのまま答えになってしまった。

「ひどいよ。私にもちゃんと教えて！」

怒った顔と声がこちらに向けられる。

「おい、みんなそろそろ帰りなさい！」

隣のクラスの担任が声をかけてまわっているのが聞こえてきた。

「玲二くん……。お願い」

話す？ 何を……。どこまで？

いや、でも、話すべきなのかもしれない。もう会えないのかもしれないんだから。

「わかった……。じゃあ、明日でいい？」

「明日？ どこで？」

「10時に、駅前でいい？」

「ホントに来るの？」

眉間にしわを寄せて、怒った声で疑ってくる。こんな彼女は初めて見た。そうさせているのは、自分だ。

「行くよ。……。ちゃんと、話す」

怒った顔のまま何も言わずに、いつきは行ってしまった。

良太郎が、肩にポンと手を置いてくる。

「絶対帰ってこいよ」

「ああ」

返事をして、自分も帰ることにした。

玄関で靴を履き替えて、外へ出たところで電話が鳴った。ディスプレイには「らい」と表示されている。

『玲二、まだ学校か？』

「ああ。久しぶり」

『よかった。少しは元気になったんだな』

優しい声に、なんだか安心する。

『実は見せたいものがあるんだ。今から、家に来れるか？』

「……大丈夫。今ちょうど出たところだから、すぐに行くよ」
ライの家なら5分で着く。校門を出て、駅とは違う方向へと向かった。

住宅街の中を、1人歩く。

途中の短いトンネルの中を歩いていると、車が走ってきていきなり真横で止まった。

反射的に少し離れる。そこで、電話が短く鳴った。メールが来たようだ。

ポケットから電話を取り出して、開く。

少し後ろから、先ほどの車のドアが開く音がした。何人かの足音がトンネルの中でドタドタと響く。

その足音がいきなり止まる。違和感を感じて振り返ろうとすると、後ろからいきなり口をふさがれた。

電話が手から落ちる。

口を塞いでいる布から、嗅いだことのないおかしい臭いがする。

抵抗して暴れるが、何人もの手が動きを抑え込んでくる。

途中、足元からバキッという音がした。

体の力が抜けて、地面に倒れこむ。

目の前に、音の正体が見えた。電話がまっぴたつに折れている。

……せつかくカラスに直してもらったのに。
また……。

目の前に落ちている電話を、誰かが拾っているのが見えて、後は真っ暗になった。

目を開けると、薄暗い。なにか、椅子の足のようなものが見える。床が冷たくて体がブルつと震えた。固くて冷たい床の上に、転がされている？

状況がよく理解できない。

……そうだ。

なにか、嗅がされて倒れた。

体を起こそうとすると、ジャラっという重たい金属音が響いた。ついでに、手が後ろに回ったまま、前に出せない。固い床に寝ていたせいか、体が痛かった。

ゆっくりと、感覚を確かめていく。

腕には、金属の輪がついているようだ。両手首にピッタリとついて、さらに鎖で繋がっているらしい。手を動かすと、ジャラジャラと音がする。

首にも同じように輪がついている。これにも鎖がついているようで、立ち上がるうとすると後ろにひっぱられた。

足にも、金属の輪がついている。左足だけだ。でも、これも鎖が伸びて壁と繋がっていた。

なんだこれは……。

誘拐？ 男子高校生を？ そんな馬鹿な計画があるか？

目を凝らして室内の様子を伺うと、少し離れたところにベッドのようなものが置いてある。少し手前に、背もたれのない簡単なイスが1脚あるようだ。それ以外はわからない。

物理的な寒さと、今の得体の知れない状況からくる不安に体が震える。着ていたはずの制服はどうしたんだろ。ひどく簡単な、ペラっとした短パンのようなものだけになっている。

遠くから足音が聞こえてきた。何人かいるのか、バラバラと何重にも音が響いている。

なんとか立ち上がろうとするが、首の鎖の長さが足りない。しかたなくひざで立った状態になって構えた。

足音が近くなり、とうとう止まる。そして、右側の壁の1部が開いた。どうやらドアだったらしい。

明かりが差し込み、人影が何人か分入ってくる。カチツという音がして、室内が明るく照らされた。

実に楽しい笑顔の男が1番前に立っていた。なぜか、ゴーグルに白衣といういでたちだ。

正面の男以外の表情は見えないが、全部で5人。

部屋は10畳くらいの広さのようだ。ちょうど真ん中の壁際に、自分がいる。

「やあ。ちょうど起きた頃だと思っていたよ」

笑顔の男が近寄ってきた。

「……なんだよ、これ…… どういう」

当然の質問をしようとしたが、途中で途切れた。男が後ろ手に持っていた棒を振り下ろしていきなり胸を打ってきたからだ。あまりの衝撃に、息が止まる。

「質問は受け付けないからね。こっちがするから、君は答えるだけだよ」

後ろの4人は動かない。黙ったまま後ろに整列している。

「名前は？」

「……」

男がムつとしたように、口をへの字にした。

「名前は！？」

また棒が振り下ろされて、今度は肩を打たれる。

「うつ……！」

男がしゃがんで、右の耳を引っ張りあげてきた。

「な・ま・え・だ・よ」

「……立花、玲二」

「よし。本人確認OK！」

男の声が、嬉しそうなトーンに戻る。

なんなんだこれは。夢なら、早く覚めて欲しい。

「じゃあ次の質問だよ。ちゃんと答えないとコレ、わかるよね」

棒をブンブンと楽しげにまわしている。あの棒、なんだろう。特殊警棒とか、そういうやつだろうか……。

「君の正体は、どういう動物なんだい？ さ、教えて」

「……正体？」

「そつだよ。わかるでしょ。何の動物でーすーかつ！」

笑顔で顔を覗き込んできた。ゴーグルの奥の目が、うつすらと透けて見える。本当に、楽しそつだ。

俺の正体……。

狼？

でも、狼にはなれない。

「時間切れ！」

また、棒が振り下ろされる。

「狼でしょ？ 知ってるんだから、隠しても無駄だよ」

どういつことだ。もしかしてこれが、遠屋の言っていたっていう
U研？

あからさまに狙われて連れてこられた。全部……知られている？

「じゃあもう、まどろっこしいから見せてもらおうかな」

「……何を？」

「質問はダメっていったらどう？」

今度は足が出てきた。男の履いている革靴の先が、腹に突き刺さる。

「正体をだよ。君の本当の姿、見せてもらっていいかな」

「……そんなもの、ない」

また、棒が振り下ろされる。背中を何度も打ち付けられて床に倒れこんだ。

「そついうのはいいって。わかってんだから。とにかく手っ取り早く頼むよ。こつちも生活かかってるんだからね。それとも、何かアイテムがいるわけ？ 満月とか？」

どうやら、冗談ではないようだ。

誰かが、自分のことを売った、ということだろうか。

真夜か？ 百井か……？ それとも、誰か自分のことを気に入らないと思っていた者がほかにいたのか。

あのウォータースの面々以外に、こんな情報をもってる奴らはいないはずだ。

「……変身なんてしない。狼になんかならない」

言うだけで、かなりの力が必要になっている。声が震えそうになるのを、必死でこらえた。

「まだいうの？ 無駄だって。こっちは早く現物が欲しいの！ 君みたいなちよどいいのが捕まえられて本当に嬉しいんだからね。水をさすようなことはやめてもらわないと」

「できないって言うてるじゃないか……！」

男が舌打ちをする。怒ったのか、背中をさつきよりも激しく、めちゃめちゃに打ってきた。

喉の奥から、自分では聞いたことのない声がもれ出てくる。背中の皮が破れて、血がそこらじゅうに飛び散った。

冷たい床が体温でだいぶ温まった頃、ようやく男の八つ当たりが収まった。

あまりの痛みに、体を起こすことができない。背中がひりひりと焼けるように熱いの、やたらと寒くて体の芯が震える。なんとか息をするのだけで精一杯だ。

「ねえ、先生どうかな。追い詰められたら本性出す？」

男が振り返って、並んでいる男の1人に尋ねた。

「その可能性は高いと思いますよ。過去に2例ありますからね」

パラパラと本をめくるような音がする。

「狼は……、途中で逃げられた報告ならあります」

追い詰める？

これ以上なにかされたら、死んでしまう……。

男がわざわざ床のあたりまでしゃがんで、顔を覗き込んできた。につこりと笑っている。

「何がいい？ 色々用意してるけど」

「……本当に、へん、しんは……しない……」

必死に声を出す。男は眉間にしわをよせて、額を思いつきり中指で弾いてきた。

「よし！ 全部用意しよう！ なにせ期限が迫ってるから。出し惜しみしてる場合じゃないぞ」

楽しそうに両手を挙げて、ぶんぶん回し始める。

「行こう。その2人、見張りして！」

男たちのうち、3人が部屋を出て行く。男の歌う鼻歌と足音が小さくなっていき、ほんの少しだけ安心する。

いや、安心なんかしている場合じゃない。このままだと間違いなく……死ぬ。

しかし、体は痛みと震えでうまく動かない。鎖を外すことなんてとてもできそうにない。

自分の荒い息遣いの合間に、残った2人の会話が聞こえてきた。

「なあ、これマジかな」

「ドッキリじゃない？ カメラとか、どこがあるんじゃないの……？」

さつき嬉々として棒を振り下ろしてきた男とのあまりの温度差に、愕然とする。

思わず2人のほうを見ると、2人もこちらを見てきた。

「ねえ君、これってドッキリなんでしょ？ 血糊？」

「よくできてるな。カメラは？ どこに設置してあんの？」

もしかして、アルバイトかなにかで来ているのだろうか。もしそうなら、ひどく恐ろしい話だ。

「違う、……鎖を、外して……」

2人が顔を見合わせる。

「え？ 何？ マジなの？」

「心理テスト？ 行動テストとか？」

首を横に振る。振っただけで、力を使い切ってしまった。床に額をつけて、歯を食いしばって痛みをこらえる。

2人がおそろのおそろ近寄ってきて、自分をつなぐ鎖に触れ出した。ジャラジャラと音が聞こえる。

その間も、体の震えが止まらない。

「鍵ってさっきの人が持ってた？」

「あー、どうかな。どこかおいてあるかな？」

2人がキョロキョロしだす。もしかして、助けてもらえるだろうか。

「なくない？」

少しずつ、意識が遠のいてくる。

寒さで歯がカチカチと鳴り出し、目がかすんで周りがよく見えなくなってきた。

「ないよ。やつぱさっきの人じゃない？」

「部長さん？ あの人すげえ怖くないか？ アカデミー賞ものの演技力じゃない？」

オスカー！ なんて声が聞こえる。緊張感の無さに、脱力しそうになる。

力を抜いたらダメだ。

なんとか、なんとか意識を保つんだ……。

もしかしたら、母さんが助けにくるかもしれないじゃないか。

母さん……。

父さんや母さんも捕まっていたらどうしよう。

ライは？

いつきや良太郎も、巻き込まれたりしてないだろうか。

恐ろしい想像に、心まで震える。

目の前が暗くなりかけた瞬間、ドアがバンと開いた。

「部長」と呼ばれた笑顔の男が、戻ってきてしまったようだ。

「よし！ 始めようか立花君！！」

後ろの鎖が、引つ張られる。高いところまで引き上げられて、首が絞まる。

少しでも足から力を抜くと、鎖の長さが足りなくて首がしまってしまう、という仕組みのようだ。

「もう棒はイヤかな？ 痛い？」

イヤに決まってる……。

足が震えて倒れそうになり、そのたびに首の鎖が冷たい音をたてる。なんとか力を入れて踏ん張らないと……。

「女の子だったら良かったのになあ。まあ、美少年ってのも悪くはないけど」

やたらと不吉なセリフを言って、部長が振り返る。

「そういう趣味の人、いるなら今のうちだよ！」

返事はない。思わず、はあっと息を吐いた。しかし、状況が良くなつたわけではない。

「じゃ、これからやってみよう。興味深いよね」

なにかわからないが、持ってきたワゴンから出している。

「その2人、おさえて。先生よろしく」

体がおさえつけられる。注射器が、目に入った。

……何を打つ気だ？

肩に注射針がささる。何か冷たいものが、体の中に入ってくる感覚があった。

すぐに効果が現れる。

体が、ぶるぶると大きく震えだす。立っていられなくなって、ひざから力が抜ける。鎖が無情な金属音を立てて、首に輪が食い込む。あまりの苦しさに、足を動かす。でも、足の裏はうまく地面を捉

えられない。

限界まできたところで、横から体を支えられた。食い込んでくる金属の輪から開放されたものの、息の仕方がもうわからない。パクパクと口を開けて、入ってきたわずかな空気をなんとか出し入れする。

「変身の方法は？」

部長は実際にこやかに質問をぶつけてくる。でも、答えられない。そもそも、答えなどない。

「なんだよ。これ、効果ないんじゃないの？」

空の注射器をポイと放り投げて、顔をしかめている。

「ありましたよ。ガクガクになってたじゃないですか」

「そういうんじゃないはずだろ？」

「先に弱らせすぎたのかもしれない。弱い固体と言ってたし、体力もあまりないのかも」

そうだ。長い間、ちゃんと食事もしてなかった。ひきこもって勝手にボロボロになっていたところに、この悪夢のような状況。耐えられるわけがない。

もう、体の感覚がおかしくなっている。手や足がどうなっているのか、わからない。

視界もぼんやりとして、全体が赤みがかっている。

「しょうがないねえ」

部長はやれやれというジェスチャーをしてみせる。

「1回降ろすか。応急処置は？」

「できます」

「よし、全員離れて」

後ろでまた、金属音がする。

鎖が外れて、床にいきおいよく倒れこんだ。

体から流れる血と一緒に、命も少しずつ体から出て行ってしまった。
残りはもう、ほとんどない。

「次はこっちね」

ガラガラと大きな音を立てて廊下から運び込まれた台の上に乘せられる。

台の上で、ひとつずつ輪が外されていく。

かわりに、別のベルトのようなもので台に固定されてしまった。

まるで抵抗しない自分の様子に、作業を任されている男たちはすっかり油断していたらしい。

「おいおい、緊張感なさすぎだろ！　いつ変わるかわからないんだぞ。足は外すな」

部長の真面目な注意が飛び、急に作業が慎重になる。そんな心配はいらないのに。

足の鎖はついたままで、体がガツチリと台に固定されてしまった。
「これで楽になったね？　じゃあ続き、しようか」

部長は相変わらずの笑顔だ。頬をピシピシと叩いてくる。応急手当はないらしい。

「しっかり起きて。寝ちゃダメだよ。狼になるんだから！」

なれない……。

この状況でも、何も起きない。本当に、変身する力はなかった。
ようやく、確信できた。

自分自身の中に、秘密兵器はなかった。
眠っている狼の魂が目覚めて、牙を剥くなんて奇跡は起きなかった。

もう、どうしようもない。

まぶたが、落ちてくる。

「あ、じゃあシャッキリ起こすやつにしよう。先生、あれ頼むよ」
「わかりました。じゃあ下がってください」

予言は、的中だ……

「Eのボタン押して」

次の瞬間、体の真ん中に大きな衝撃が走った。

最後に一瞬だけ可愛い笑顔が浮かんだけど、すぐに真っ暗になって、深く深く、どこまでも沈んで……

それで、全てが終わった。

#36 「夜を駆ける」

「バカ！ 何やってんの先生！？ もー、レベルの確認くらいしてよ！」

「……ダメです。もう」

「ダメなの？ 本当？」

「すみません……部長、どうします？」

「どーするもクソもない。廃棄だよ。あーあ、せっかく初の生け捕りかと思っただらこれ？ ただの高校生殺してどうするんだよっ、もーめんどくさい！ あの野郎もガセネタ掴ませやがって許さないぞ！」

ああ……！

間に合わなかった……！

入り口を探すのに、思ったよりも時間がかかってしまった。嚴重に隠されていたとはいえ、この時間の口は痛かった。

中に入ると、長い通路が続いている。

じつと、目をこらす。

どうやら罠の類はなさそうだ。

そもそも、あまり手入れがされていない。

普段からあまり使っていないように感じる。

母に目配せをし、一気に走った。

グレーのタイルの床を蹴り、先を急ぐ。

自分と母の足音だけが静かに響いている。

分かれ道に出た。

ここから、照明が点いている。

まっすぐと、右に折れる道。

まっすぐのほうだ。

母に伝える。

母は頷いて、右の通路へ入っていった。

奥へと進む。

とにかく早く。

全力で。

突き当たりを右に曲がる。

白い壁に、ドアが並ぶ。

あそこだ。奥から3番目。少し空いている。

力がみなぎる。

声が聞こえてくる。

中に渦巻いているのは、怒りと失望。

だが、怒りならこちらの方が上だ。

許してなどやるものか！

後ろ足を強く蹴り、少し空いたドアの隙間から一気に部屋へ入る。

真ん中でやかましく喚いている男。

1番許せない。

知っている。

お前が殺した！

一気に喉笛にかみつく。そして、そのまま引きちぎった。

部屋の中に悲鳴があがり、混乱が支配を始める。

誰1人として無事に戻らせるわけにはいかない。

部屋から出ようとしているものから順に、噛み付く。

2人。

3人。

4人。

あと1人だ。

部屋の奥で震えている。

「たすけて……」

何を言ってるんだ。

お前の涙など、なんの意味もない。

容赦なく、のどに噛み付く。

これで全員。

歩くと、あふれる血で足が汚れた。

こんなやつらの血で汚れるのはイヤだが、今は仕方ない。

玲二。

薄く目を開けたまま、動かない。

傷だらけだ。

頬をなめてみるが、反応はない。

体に寄り添う。

ずっと会いたかった。

せっかく会えたというのに。

苦ませてしまった。

もう少し早かったら間に合った。

全速力で来たつもりだった。

でも、足りなかった……。

ここから連れ出さなくては。

でも体が、きつく固定されている。

あれを試したほうが早そうだ。

玲二の額に、鼻先をのせる。

目を閉じ、少し集中して、力を移す。

目を開けると、小さな狼の子供がいた。

うまくいった。

つまりまだ、大丈夫だ。希望はある。

首の後ろを優しくくわえ、部屋を出た。
早く戻ろう。なんとしてでも助けなくては。

通路を駆ける。

分かれ道のところで、とまった。

小さな狼をそっとおろす。

傷だらけの体をなめる。

気配を感じた。

足音が響き出す。

こちらに気付いて、合図を送ってきた。

すぐに合流する。

『それは……玲二なの？』

母は驚いている。仕方ない。初めて見る姿だ。

『そうだよ』

母はそっと玲二に近づき、閉じている瞳のあたりをなめた。
やはり、ピクリとも動かない。

反応がないことに悲しみ、震えている。

『早く行こう』

母が頷く。

ふたたび玲二の首の後ろをくわえて、走った。
外は夜。好都合だ。

後始末は友人に任せる。
黒い影が、隠された入り口の中に入っていた。

2人で駆け抜ける。
初めて帰る、家族の暮らす家へ。

お母さんが家のドアを開けた。

奥から、慌ててお父さんが出てくる。

「テレゼ……」

小さな玲二を抱いて、ゆっくりと中へ入った。

「一路」

お父さんが僕のことを、抱き寄せてくれた。

胸の中の狼に気付く。

「それはもしかして、玲二なのか？」

「そう」

本当に勘がいい。よくわかった。

お父さんは真剣な表情で僕たちを見つめる。

両手を出してきたので、黙って玲二を渡した。

「入りなさい」

お母さんが僕の肩に手をあてて、中へと促してくる。

一歩足を出す。

「靴は脱ぐのよ」

そうか。脱ぐのか……。

部屋の奥へ進む。普段暮らしている家とはだいぶ違って、狭い。
でもとてもかわいらしくて、いいにおいがした。
小さな部屋に着くと、四角い布の塊が置いてあった。
お父さんはそこへ玲二を寝かせる。

小さな玲二の頭を1度撫でて、お父さんがこちらを向いた。

「一路、どうなってるんだ？」

その疑問は最もだ。

ただ、玲二が危ないからと伝えただけで、突然来たんだから。

「玲二は捕まって、拷問……を受けた」

「拷問？」

「僕たちを、研究してる。玲二は弱いから、捕まえて、調べたかった」

あいつらの声が頭の中でよみがえる。

「ダメージを与えたら、変身があると思った。玲二が、狼だって知っていた。誰かがそう伝えている」

2人の顔がみるみる曇っていく。

「玲二は……死んだ」

予言を回避することができなかった。さすが、大魔女様だ。

お父さんが悲痛な顔で僕を見た。さっき触れたときに、気がついてるはずだ。それでも、信じたくなかったようだ。

「本当か？」

「本当。でも、まだ終わってない」

「終わってない？」

「まだ終わってない。なんとか取り戻せるはず」

お父さんとお母さんが見つめあう。

「そうか。一路がそう言うなら、……信じよう」

お父さんが呟いた。

「どうしたらいいの？」

お母さんが聞いてくる。

どうしたらいいんだろう？ それはまだわからない。

とにかく、玲二に完全な終わりはまだ来ていない。なにか手があるはずだ。

「まず、元に戻す」

狼の姿に変えたのは、ただ輸送をしやすくするためだ。

2人の返事を待たずに、すぐに額をつける。

少し集中すると、玲二が元の姿に戻った。

ぐったりと横たわる無残な姿に2人が息を呑む。

お父さんがそつと、毛布をかけた。

「どこか、静かなところに行ったほうがいい」

感じる。

「何か来る」

お父さんがしばらく考えて言った。

「わかった。私の実家に行こう。テレゼ、用意だ」

お母さんは玲二の髪を撫でている。

涙が浮かんでは、次々と汚れた頬に落ちていく。

「僕が会う。お母さんは玲二と一緒に行って」

「……わかった。頼むわね」

お母さんは目を拭いて立ち上がると、準備に取り掛かった。

かわりに、玲二の髪を撫でた。

あちこち汚れて、しかも焦げている。痛かったし、苦しかっただろつ。

悲しくて胸が痛んだ。

最後は絶望の中にいた。たった一人で闇に落ちていくのは、苦しかったはずだ。

傷口を舐める。なんとか、治してやりたい。

「一路、舐めるんなら、狼の姿でやってくれないか？」
通りかかったお父さんが声をかけてくる。

確かに狼の姿の方がやりやすいか。

2人の準備の間、玲二の傷をなんとか癒そうとあちこち舐めた。
汚れは取れたけど、傷は治らない。

やっぱり、体が生きていないとダメだ。

お父さんがやってきて、玲二の体をタオルで丁寧に拭いていった。
傷のある部分には、なにか白いものを貼ったり巻いたりしている。
そして新しい服を着せた。

「一路、車で行くから、玲二を乗せるのを手伝ってくれ」
狼の姿から元へ戻る。お母さんも準備を終えたようだ。荷物を抱えて、外へと運んでいる。

玲二の細長い体を抱いて、車の後ろの席に乗せた。
ゆっくりと寝かせてやる。少し窮屈そうだけど仕方ない。

お母さんが隣に座って、玲二の体をしっかりと抱きしめた。

「一路、まかせて大丈夫か？」

「大丈夫。お客が帰ったら、僕もいく」

お父さんはちょっと考えて、こちらを真剣な目で見て言った。
「わかった。まかせたぞ」

車が出て行った。

暗い雲がゆつくりと流れ、月が見え隠れしている。

玄関のドアの前に座った。

玲二、まだ終わりじゃないぞ。

僕がついてる。

大切な弟。

まだ終わらせない。

故郷の森を思い出す。

みんな、玲二の帰りを祈ってくれ。

しばらくドアの前で座って待っていた。

来た。

闇の中に、人影が浮かび始める。

この気配は……龍だ。

龍にはむこうでも1度だけ会ったことがある。

でも、感じは全然違う。少し、冷たい。水の龍だ。

闇の中から、中年の男が現れた。

「……玲二君、じゃないな」

声をかけてきた。

「玲二じゃない。わかっていることを聞くな」

しばらく間が空く。

「今日、あの研究所をつぶしたのは君か？」

「玲二のいたところ、なら、そう」

「……」

龍は渋い顔をしてこっちを見ている。

「全員の命を奪う必要があったのか？」

「……」

「答えてくれ」

何故殺したか、聞いているのか。

「玲二が殺された。だから、ああした。許せないから」

「玲二君は死んだのか？」

わかっていくせに。

お前のような強いヤツが、その程度のことかわからないとは言わせない。

にらみつけると、龍は下を向いてしまった。

「お前の仲間が、玲二のことを言った。だから狙われた」

「言っただって？ 何を」

「お前は知ってる。お前の仲間が、玲二を狙うよう、あいつらに言った。玲二は弱い。だから、簡単に捕まる。たくさん傷ついて、玲二は苦しんだ！」

抑えようと思っていたのに、どうしても腹が立って我慢ができない。

この龍の仲間に出会わなければ、玲二はあんな目にあわずに済んだはずだ。

いや、この強い龍が見過ごさなければ、捕まらずに済んだ。なんて冷たい奴なんだ。

あいつらは一瞬で死んでいった。苦しまずに死んだ。

玲二に比べたら、随分恵まれているじゃないか。

どれだけの怒りを抑えているか、……この龍に思い知らせてやりたい。

澄ました顔に生えてる鱗を、全部はがしてやりたいくらいだ。

「わかった。すまなかった……」

龍がうなだれた。

「君の怒りはもっともだ。しかし我々は、人間を傷つけないことを一番大切な掟にしている。だから今回のことは本当に、なにもかも残念だ」

残念ですむ話ではない。

人間が傷つかなければ、仲間がどうなってもいいのか？
そんなの、おかしいじゃないか。

「なにか、我々にできることがあつたら言ってくれ」

この龍には仲間が多そうだ。奥のほうから、色んな匂いがする。
もしかしたら、役に立つ者がいるかもしれない。

「わかった。でも、玲二の命が終わってしまったら、絶対に許さない」

その時は、どんなことをしてでも叩き潰してやる。

龍は答えず、来た時と同じように闇の中へ消えていった。

またドアの前に座った。
気持ちを落ち着けよう。
もう1人、来るはずだ。

雲が流れていき、月が明るく輝き出す。

少し経って、遠くから足音が聞こえてきた。
黙って待つ。

門のところで、人影が止まった。

「玲二くん……！」

門を開けて、女の子が入ってくる。
立ち上がって迎えた。

「心配したんだよ、今日……」

目の前まで来て、止まる。
大きな瞳が潤んでいた。

この子だ。玲二の大切な、宝物。
自然と微笑みが浮かんでくる。

「？」

気がついたようだ。

「玲二くん？」

「玲二じゃない。僕は、一路」

「いちろ……？」

不思議そうな顔をしている。

「玲二君の、兄弟かなにかなの？」

「そう。お兄さん」

「お兄さん？」

不安げな顔になる。そうだ。彼女の名前は、いつき。

「いつき、大丈夫。僕は一路。玲二の、お兄さん」

また不思議そうな顔になった。

「お兄さんがいるなんて、聞いたことなかった……。それに、お兄さんって」

「玲二と僕、一緒に生まれた。一緒に生まれた、お兄さん」

「一緒に？ 双子ってこと？」

「そう、それ。双子のお兄さん。そっくりなのは、そのせい」

ますます不思議そうな顔をする。そうだろうな。

玲二だって知らないんだから。驚くのは当然だ。

「あの、玲二くんは？ 今日約束してたのに来なかったの」

「……玲二は、ケガした」

「ケガ？ また？ ひどいの？ もしかして、入院してるの？」

「ニュウイン？」

「ニュウイン、わからない。ごめん、僕、日本語わかるけど、いつも使わない」

「いちろくんは、もしかしてドイツにいたの？」

「うん。そう、ドイツにいた」

「そっか。えっと……ケガして、病院にいるのかってこと。病院はわかる？ えーと、ホスピタル？ は、英語か」

ああ、病院か。行った事も見たこともないけど、一応どんなものかは知ってはいる。

「ちがう。病院にいない。玲二は、お父さんの家」

「お父さんの家？ 実家のこと？」

「ジツカ？」

「玲二くんに会いたい。どこにいるの？ 教えて」

「会えない。ごめん。今はダメ」

いつきが悲しそうな顔をする。こんな顔をさせてしまった、こち

らも悲しい。

「いつき、手を出して」

両手を前に出す。

いつきはなんだか不安そうな顔をしながら、でも自分の手をのせてきた。

思ったとおり。素直で、優しい。

「玲二が目を覚ますように、いつき、玲二のこと、思って」

「……！」

いつきの顔が驚きの表情になった。大きく開いた目から、涙がこぼれ出す。

でも、少しすると目を閉じて、祈り始めた。

いつきの気持ちが伝わってくる。

……玲二への気持ちが伝わってくる。

これを、玲二に届けてあげよう。

いつきの涙が、手の上に落ちた。

「ありがとう。いつきの気持ち、玲二に渡す」

「……」

「玲二のことと思ってて。ちょっと時間がかかる、けど、必ずいつきのところに、戻す」

いつきはこちらをじっと見つめている。

可愛らしい唇が、震えていた。

やがて、悲しい顔のまま小さく頷いた。
「待ってて。戻る時は教える。すぐに」

「……わかった」

いつきは手でゴシゴシと目をこすった。

「いつき、笑って。玲二は、いつきの笑顔が1番好き」

「え？」

いつきは戸惑いの表情を浮かべている。

大きな目をじっと見つめた。

笑ってほしい。

「……うん。わかった」

いつきは少しだけ笑った。可愛い。花のような笑顔だ。

さすが、完全な遮断も突破した、運命の一輪。

「いちろくん、本当に、すぐ教えてね」

「大丈夫」

いつきは下を向いて、小さく頷いた。そしてまた、顔をあげる。

僕にちよつとだけ、微笑んで言った。

「私、帰るね」

「わかった」

門を開けて、帰って行く。

もう夜も遅い。暗い中、あんな可愛い子が1人だと危ない。悪いやつはそこらじゅうにいる。

そつと姿を変え、そつと後を追った。

悲しそうな後姿が無事に家に入っていくのを見て、自分も家に戻った。

真夜中になり、月が1番輝く時間になった。

来客はもうない。

そろそろ僕も行こう。

友人を呼び出す。

暗闇の中、空から黒い炎に身を包んだ大きな鳥が飛んでくる。

『一路、呼んだか？』

「うん。終わった？」

『もちろん。心配はいらない』

「玲二のところに行く」

『どこにいるんだ』

「あっち」

北の方だ。僕の家族がいる……。

力を合わせて、玲二を取り返さないと。

『細かい場所は教えてくれよ』

「うん。急いで」

空を翔る1番の友人の背に乗って、弟の元へと急いだ。

#37 「幸せがたどり着く場所」 <いつき>;

一睡もできなかった。

あれは現実だったのかな。

ために電話をかけてみる。でも、つながらない。

電源が切られているか、電波の届かないところにいる？
メールも何通も送っているけど、返事はない。

一体何がどうなっているのかよくわからなかった。
会いたい顔を思い浮かべる。

玲二くん。

何を言われてもいい。嫌いだって言われたって構わない。一目で
いいから会いたい。

一昨日やっと、ひさしぶりに話したのに。

昨日2人きりで会えるって、すごく嬉しかったのに。

どんな話かは怖かったけど……。遠いところに行っちゃうなんて
イヤだって言いたかったのに。

「玲二が目覚めますように」って言った。

いちろくん……玲二くんの双子のお兄さんは言った。

日本語が下手で、ああいう表現になっただけなのか、それとも意
識がない状態なのかよくわからない。

でも、病院じゃなくて、お父さんの実家にいるようなことを言っ
ていた。

じゃあ、そんなにひどい状態ではないのかな？ でも、それなら
会えない理由がわからない。

不安で胸が締め付けられる。

気がついたら、夜が明けていた。

玲二くん。

一緒に帰ればよかった。

意地張らないで、校門で、駅で、玲二くんを待つてれば良かった。毎日近づいてくる、本城君に少し……グラついてたことを知られなくなかったから。だからつい、急いで帰っちゃったんだ。葉山君には秘密を話してたっていうのもショックだった。

でも、やっぱり……どう考えても1番大事なのは玲二くんだ。

後悔ばかり胸に浮かんできてくる。

どうしよう。

そうだ。葉山君に話そう。

まだ6時だけど、いいかな……。どうしても気持ち落ち着かない。他に話せる相手は思いつかない。

1人でじっと考え続けていたら、心が壊れてしまいそうで、時間は早いけど同志にメールを送ることにした。

10時ピッタリに家の前に着くと、玄関のドアが開いて見慣れた笑顔が迎えてくれた。

「あ、園田ちゃん。待ってた待ってた」

離れの書道教室へ招かれる。

「大丈夫？ 顔色が結構悪いよ」

「昨日、ちよつと……」

葉山君に全部話した。

約束したのに、玲二くんが現れなかったこと。心配になって家に行ったこと……。

「玲二に兄貴がいるとはね」

「知らなかった？」

「知らないよ。そんな話聞いたことないし。あいつ当然のように人っ子の顔してたでしょ？」

「……なにか理由があるのかな。言えないような理由があつて、お兄さんだけドイツにいたのかな」

「さあねえ。そこはまったく想像がつかないなあ」

確かに。謎の兄弟がいた理由は多分ここで話したところで無駄だろう。

「でも、ケガしたっていうのは本当なのかもね。あいつが来ないなんておかしいだろ」

「……うん」

まったく連絡が取れないのは、ケガのせいなのかな。意識が戻らないような、ひどい状態なのかな。

考えたら、涙が出てきた。

「園田ちゃん」

「ごめん葉山君……でも」

どうしても涙が止められない。ぽろぽろぽろ、次から次へと落ちていく。

「……もう会えなかったらどうしよう」

まだまだ涙が出てくる。うぐうぐつと変な音がしてしまって、それも止めることができない。

「そんなのヤダよ……！」

突然、肩を掴まれた。

「園田ちゃん！ おい！ 園田ちゃん！」

へんてこな呼びかけに、一瞬涙が止まる。

「なんちゅう顔してんの？ しかもヤバイよ、そんな音出して」

鼻をずつとすすって、なんとか涙を止めようとした。でもまだ、目の端でじわじわと次の涙が待機している。

「今の顔見たら、さすがに玲二も引くよ？」

その言葉を聞いて、手の甲で目をこすった。まだ鼻がズルズルする。

葉山君が後ろにあったティッシュを箱ごと渡してくれたので、1枚出して鼻を拭いた。

「そうそう。落ち着いて」

もう1枚出して、ブーっと鼻水を出す。

しまった。葉山君、苦笑いしてる。

「玲二がいきなり帰って来たら困るだろ？　ビククリするぜ、今のブサイクな顔見たら」

ブサイクって……。失礼な。

「まずさ、ちよつと混同してるよな。玲二が行くつて言つてたのはドイツだ。あの世じゃないぜ」

「……」

「帰るかわかんないなんてあいつが言つたせいで不安になつちやつてるんだよ。ケガとは切り離して考えないか？」

「でも、意識不明の重体で会えないんじゃないのかな」

「玲二が俺や園田ちゃんを置いて死ぬわけないだろ？」

そう言つて、葉山君が一瞬動きを止めた。なんだろう？

でもじつと見ていたら、すぐにまたちよつと笑顔を浮かべて話し始めた。

「その兄貴はさ、必ず連絡くれるんだろ？　待とうぜ。心細いなら一緒にいるからさ」

なんだかすごく頼もしく見える同志をじつと見つめる。

「玲二の兄貴なら、嘘言わないだろ。あいつの兄貴なんだから」
その言葉で、涙がなんとか引つ込んだ。

「そっか。そうだよな。玲二くんのお兄さんなんだもんね」

「そうだよ。しかも双子なんだろ？　似てた？」

「うん。だつて、最初玲二くんだと思つたもん」

「じゃあ嘘つかねえよ。間違いないだろ？」

力強い言葉が心にしみる。最後の涙を、ティッシュで拭いた。

「葉山君つて、優しいよね」

「そうだよ。優しいよ」

自分で言つてる。だけど、この人なら全部許せちゃう魅力がある。

「……なんで？」

「なんでって。俺はイケメンと美少女の味方だからさ」

「もしかして、本気で玲二くんのこと好きなの？」

ヘンな顔で固まってしまった。

「……そこは普通『私のこと』って考えるべきじゃないかな。園田ちゃん」

「そうなの？」

「違うよ。園田ちゃんのこととは好きだけどね。なんていうかフレッシュすぎて俺の好みとはちょっと違うから」

フレッシュすぎてって……。ダメなのかな。

「だから安心して。今だって隙あらばチューしようとか、そういうことは考えてないから」

「ふふっ」

思わず、笑いがこぼれた。

「私、玲二くんがいなかったら、葉山君を好きになってたかも」

半分くらい本当だった。こんな紛らわしいセリフも、相手がこの男だからこそ安心して言える。

葉山君はそれを聞くと、ニカッと笑った。

「玲二がいなかったら、こんな風に仲良くならなかったよ。多分」

……そうかな。確かに、そうかもしれない。

「俺も玲二が無事に帰ってくるように毎日お参りするよ。今ジタバタしてもしようがない。園田ちゃんは女を磨いて待ってな。帰ってきたら、絶対あいつにチューしようぜ！」

それは、2人でチューするわけじゃないよね？

「うん。……頑張る」

なんだか変なファイトが沸いてきた。

「しかし、玲二にそっくりな兄貴かあ。並んだところ見るの、楽しみだな」

葉山君らしい、すごく明るい口調。元氣付けようとしてくれているのがわかる。

「そっくりだったけどね……。でも、雰囲気は全然違ってたな。なんか、子犬みたいな感じだった」

「子犬？」

「人懐っこい感じがしたの。初めて会ったのにすごくフレンドリーで」

少し話しただけのあの短い時間を思い出す。姿かたちは似ていたけど、話してみたら全然違っていた。

「へえ。人懐っこい玲二なんて、想像つかねえなあ」

「お兄さんはね、いちろくんって言っただって」

「いちろ……のいちは、数字の一かな」

「どうかな？」

「それなら、玲二の二も納得いくな」

「本当だ。そうだね」

そんなこと、気にしたこともなかった。何年も好きなくせに。

「うちと一緒だ。うちも兄弟みんな数字が入ってるもん。1から6まで」

「そうなの？ 園田ちゃんの名前、ひらがなじゃないの？」

「数字の五に、樹木の樹ってかくの。でも、男の子みたいでしょ？それがイヤで、ひらがなでかいてるんだ」

しかも大体、意地の悪い男の子にゴキって呼ばれるんだ。嫌で嫌で仕方なかった。

「そうなんだ。へえ」

「全然そんなこと気がつかなかったなあ……。何してたんだろ、7年も」

「7年も？」

「小学校のときから、ずっと好きだったんだ」

この台詞に葉山君はちよつと、驚いた顔をした。

「6年間、ただ見てただけだったから、この10ヶ月はすごく楽しかった。イヤなことも心配したことも、ガツカリしたこともあったけど……。玲二くんのこと、好きになる一方」

「そんなに好きなんだ」

「うん。どうしてだろうね？ 他にも男の子はいっぱいいるのに。おかしいね。もしかして、ちよつと引いちゃうかな。どう？」

「どうって」

葉山君は口元をぼりぼりかいて、ちよつと微笑んで答えてくれた。

「うらやましいよ。そんなに1人の事、好きになれてさ」

「一歩間違えたら、ストーカーだよな。私も、相原君とあんまり変わんないかも」

その違いはきつと、相手が振り向いてくれるかどうかだけだ。

そう考えたら、苦笑いが出てきた。

「玲二くんが学校に来ない間、毎日考えてたんだ。つきあえないって言われたんだから、もう諦めなきゃって。でも、理由がよくわかんなくて納得いかなかったから。なんか諦めるの悔しくなってる」

しかも、好きだって言われたんだから尚更だ。

「意地でも玲二くんのこと、幸せにしてやるって思ったんだよね」

「ははは」

自分とじゃ幸せになれないなんて、訳がわからない。そう、思った。

「私、玲二くんのこと、全部知りたい。全部信じるし、全部受け入りたい。玲二くんのしたいことは全部聞いてあげる」

珍しく、葉山君が真っ赤な顔をしている。

「どうしたの？ 私、なにか変なこと言ったかな？」

「園田ちゃんの情熱はわかったけど、思春期の男子にそんなこと面

と向かっていったら何されるかわかんないよ」

その言葉につい赤くなる。そうか、ちよつと、過激な発言として受け取れるか。

でも、あの王子様があんまり無茶なことをする姿は想像できない。

「玲二くんでも？」

「あいつ、園田ちゃんのこと好きすぎて頭がおかしくなりそうだって言ってたし」

「そんなこと言ってたの？」

頬がカーツと熱くなる。

「言ってた」

玲二くんが？ そんなことを？

「クールな顔して、あいつは絶対本性はエロいぜ。一旦火がついたら止まらないタイプだな」

「……やめてよ葉山君」

そう言いながら、さっきの嬉しすぎるセリフをかみしめていた。

「ホントにそんなこと、言ってたの？」

「……俺、園田のこと好きすぎて、頭がおかしくなりそうだ！　っ
て言ってたよ」

葉山君はニヤニヤしている。

「もう1回言おうか？」

「ううん。もういい……」

「それはもう、苦しそうに言ってたぜ」

いつそんな話聞いたんだろう。私より、葉山君の方が深い話を聞いてそうだ。ボーイズトークってやつなのかな。

「2人ともお互いひいちゃいそうなくらい、好きあってるってことでOK？」

「だといいな」

「いいな」、俺も、園田ちゃんみたいな情熱的に愛してくれる彼女

が欲しいわ」

そう言つて、また二カツといつもの笑顔を浮かべた。

「元氣出た？」

「うん」

「じゃあ、後はあいつが帰ってくるの待つだけだな」

「……葉山君、玲二くんの秘密つて何だったの？」

「それは」

笑顔があつという間に困った顔に変わってしまった。

「本人から聞いた方が良くない？」

「でも、葉山君だけ知ってるなんて悔しいよ」

「あー、うーん。説明が難しいんだよな。俺も正直、全部信じてるわけじゃないんだよ」

「そうなの？」

葉山君が信じられないって言ふなんて。どんな話なんだろう。

「わかった。じゃあ、戻ってきたら聞く」

「兄貴から連絡あつたら、俺にも知らせて」

「うん。葉山君、ありがとう」

「いいつて。俺と園田ちゃんの仲でしょ？」

「そうだね……。玲二ファンクラブの会長として、真っ先に知らせる」

仲間と話したおかげで、随分気持ちが落ち着いていた。

電車に乗つて、家へと帰る。駅から出ると、バスが停まっているのが見えた。

何度も玲二くんと一緒に並んで座つたのを思い出して、なんとなく乗り込む。しばらくバスに揺られて、なんとなく、海の前で降りた。

春の海はまだ寒い。波打ち際には人がほとんどいなかった。

砂を踏みながら、ゆっくり歩く。

玲二くんのことばかりが心の中に浮かんできた。

笑顔で迎えないと。絶対帰ってくるんだから。

「あら、園田さんじゃない？」

後ろから声がかかって、ビクつとする。不吉な声。
振り返ると、百井さんが立っていた。

「どうしたの？ こんなところで。しかもなんだか元気がなさそうに見えるけど」

みるみる嫌な気持ちになっていく。

なんでだろう？ なんだか……気持ち悪い。玲二くんも、この人にはいつも難しい態度だった。

相変わらずまっすぐに切りそろえられた前髪。

そのすぐ下にある、猫のような瞳がこちらを見ている。

「立花君となにかあったの？」

どこかトゲのある言い方に、ちよつと、ムつとした。

「別に」

この女には話したくない。何も話したくなかった。

でも、自分の気持ちとは逆に、薄く笑った顔がゆっくりと近づいてくる。

動けずにいるとすぐ目の前までやってきて、にっこりと楽しげな笑顔を浮かべた。

「ねえ、知らないと思うけど、立花君はね、もう帰ってこないわよ。思わず息を呑む。

「……なに言ってるの?」

「たちばなくんは、もう、かえって、こないわよ」

わざとらしくゆっくりになった口調に、猛烈に腹が立つ。

思わず、突き飛ばした。でも百井さんは1歩後ろに足を出しただけで倒れない。

「なにするの? こわーい」

「……」

何故そんなことを言うの?

玲二くんのことを知ってるの?

でも、この女に聞くのは悔しい。

でも、なにか知ってるなら教えて欲しい……!

「知ってるの?」

「なにを?」

「玲二くんのこと」

「名前と、気取ったイヤなやつってことなら知ってるわよ」
苛立ちが加速していく。

「もう帰ってこないって、どういう意味!?!」

「そのまんまよ。もう帰ってこない。それ以外なんでもないけど」

やっぱり聞くんじゃないかった。

ムカつく顔の横を通り抜け、海岸を去ろうと歩いた。

「いいの？　よかつたらもうちょっと教えてあげるけど？」

挑発は無視してバス停のほうへむかう。でも、バスはしばらく来そうにない。

仕方ない。歩いて帰ろう。

あいつから少しでも早く遠ざかりたい。

走った。

涙があふれてきて、悲しくて悲しくて、泣きながら走った。

ダメだ。

泣いたらダメ！

あんなやつに負けちゃ……ダメだ！

絶対帰ってくる。信じて、待つ。

家に着いて、まず顔を洗った。

大丈夫だ。あんなイヤなやつ of イヤな言葉なんて忘れよう。

目を閉じて、思い出す。

いちろくん。

穏やかで、優しい声だった。

どうして私の名前知ってたのかな。

玲二くんは、お兄さんがいるなんて一言も言ってなかった。

そっくりだけど、全然違うお兄さん。隠し事とか嘘とか、そういうのとは無縁な感じ。

正直で思ってること、全部言っちゃいそうな感じがした。

玲二は、いつきの笑顔が1番好き……。

そう言ってたっけ。

お兄さんにはそんな話してたのかな？ 双子の兄弟なら、特別だよね。

玲二くんのお兄さんなら、絶対嘘を言わない。葉山君の言うとお
りだ。

時間はかかるけど、必ず戻すって言ってた。私のところに。

なんだかよく考えたら、恥ずかしいな。

玲二くん、そんなに私のこと思ってくれてるのかな？

それを知っちゃったら、余計に他の人のところなんか行けない。

玲二くんじゃなきゃ、幸せになんかなれない。

早く帰ってきてほしい。

また、恥ずかしそうな笑顔が見たい。

あんまり話してくれなくてもいい。

もう、理由なんかどうでもいい。

そばにいたい。

玲二くん……。

家を出て、ぶらぶらと歩いた。部屋にいらとどうしても落ち込んでしまっ。

気がついたら、立花家の前に立っていた。

ブルーのエコカーがない。そういえば、昨日の夜もなかったつけ。

インターホンを押してみる。

でも応答はない。

誰もいないのかな。お父さんの実家にいるって言ってた。どこなんだろう。いけたらいいのに。

誰か玲二くんのことを知ってる人、いないかな……。

そうだ。

来平先輩なら、わかるかも。

でも、家がどこかわからない。もう春休みだし、学校では会えない。

確か学校のすぐ近くに住んでると言ってた。近くって言ってもどのくらい近くなんだろう。範囲が全然わからない。しらみつぶしになんてのはちよつと無理だ。

誰か学校の先生に言ったら、教えてくれるかな？

いや、個人情報保護なんとかで、教えてもらえないかな。なにせ接点がひとつもないし。

蔵元先輩なら知ってるだろうけど、こちらも連絡先は知らない。

……大体、聞きづらい。

どうしよう。

そうだ。

ウォーターズ……。

前に、来平先輩と玄関で話した時。

あそこに行かなかったとは言わなかった。むしろ、肯定してるように聞こえたんだ。あそこには行っただけ、心配しないでっていう感じだった。

駅へ向かう。

定期はまだ期限内だ。とりあえず、改札を通る。電車が来るのを待つ少しの時間ももどかしい。

月浜駅で降りると、やはり人が多かった。春休みに入ったからか若者であふれかえっている。人通りの少ない道を歩いていく。確か、こっちの方角だったはずだ。

すぐに、探していた看板を見つけた。

ドアには前来た時と違って「OPEN」の札がかかっている。

ゆっくりとドアを開けて、中に入った。

「いらっしやい」

少し薄暗い店内の中を見回す。とりあえず、来平先輩の姿はない。

カウンターでは中年の男性がカップを拭いている。

あの人が、店主なのかな。聞いてみよう。

「あの……」

「なんだい？」

40くらいの鋭い目の男性だ。なんとなく強そうな感じがする。

「ここに、来平さんっていう、高校生の人は来ますか？」

「え？」

変な質問の仕方をしてしまった。

「えっと、高校の先輩で、来平さんっていう人を探してるんです。ここに來ることがあるみたいで」

「ああ。来平ね」

「わかりますか？」

「わかるよ。用があるの？」

「はい……」

男にまじまじと見つめられる。こんな曖昧な言い方で人探しなんて、やっぱりダメだったかな。怪しいかな？

「呼び出そうか？」

「え？ 連絡先、わかるんですか？」

「わかるよ。常連だからね。そこに座って、待ってて」

カウンター近くの席を指差される。

やった。良かった。嬉しい展開だ。

自分の名前とお礼を言って、椅子に座った。

なんか思い切ったことしちゃったな。

でも、もう来平先輩しか思いつかない。

カウンターの中では電話をかけてくれている姿があった。

じっと見てるのも悪い気がして、メニューに目を移す。

高いな。1杯800円もする。

ここで待っててって言われたら困るな。

「君」

「はい！」

「来平は今旅行中だつて。明日でよければ会えるそつだよ」

「旅行中？」

「明日、君の家から1番近い駅の前に12時だつて」

わあ。勝手に決めてる。電話をかわるとか、しないのね……。そつえばマイペースな人だつた。

明日か。長いな。つい、ため息が出る。

仕方ない。帰ろう。

「あの、ありがとうございました。こんな変なお願ひなのに、聞いてくれて」

「いいよ。今度は恋人でも連れておいで」

恋人……か。

「はい。失礼します」

次の日、約束より1時間早く駅前に着いた。

結局昨日もまともに眠れなかった。うとうとしては悪夢にうなされて起きる。その繰り返しだった。

でかける前にのぞいた鏡には、疲れきったブサイクな顔が映っていた。

11時45分に、改札とは逆の商店街の方から見覚えのある顔が現れた。

「園田ちゃん！」

ちよつと息切れしてる。走ってきてくれたみたいだ。

「来平先輩」

「お待たせ……」

「そんな、こっちが勝手に早く来たのに」

「いや、待たせたら悪いからさ」

まだ時間になってないのに。もうここにいるのがわかってるみたいな感じた。

「玲二のことだよな」

「え？ ……はい」

なんでわかるんだろう。

いや、逆に玲二くん以外に接点はない。

そして、玲二くんに何があったのか知ってるってことだ。

旅行って……もしかして、玲二くんのところに行ってたのかな？

「どこか、入るかい？ お店とか」

「はい」

こんなところで立ち話じゃ落ち着かない。近くのファーストフード店に一緒に入った。

アイスティーをちゅうつと飲んで、来平先輩は息を吐いた。

「来平先輩、玲二くんのところに行ってたんですか？」

「え？ あ……いや、違う」

「ケガしたことは、知ってますか？」

「園田ちゃんは誰から聞いた？」

「いちろ君、です。玲二くんのお兄さんの」

「一路に会ったのか？」

知ってるんだ。本当は行ってたんじゃないのかな？ と、少し考える。

「はい。一昨日の夜」

「そうか」

先輩はまた、ふうと息をもらした。

「何か知ってるなら、教えてください。玲二くん、良くない状態なんですか？」

「……そうだな。良くない」

「どのくらい？」

「かなり」

大きくなりくりの目が、こっちをまっすぐに見た。

間違いない。

この人は嘘をつかない。

胸の中の不安が、一気に大きくなる。

涙が出そうになった瞬間、先輩は急にキリっとした顔になった。

「でも、大丈夫だ」

「どうして……？」

「これ」

服の中に手を入れて、ごそごそとなにかを取り出してきた。

「？」

大きな羽根だ。鳥の羽根かな。だとしたら、ダチヨウ並みに大きいそう。

肘から指の先くらいまでの長さの、金色に輝く羽根……。

「君に会って決まっってから……あー、見つけたんだ」

そう言っ、羽根が手渡される。

根元はオレンジがかっていて、先にいくにつれて黄色になっていく。美しい、朝日のようなグラデーションだった。

「これは、幸運を運ぶ鳥の羽根。君のものだ」

「私の？」

幸運の羽根？

「この羽根は、持ち主が1枚ごとに決まってる。他のやつが持つても効果はない」

確かに、すごくキレイだけど。幸運を運ぶなんて……。

「信じてくれ、園田ちゃん。これを手にすることが出来る人間は、そうそういないんだ」

相変わらずくりくりの目が、今までになく真剣で、そしてなんとも優しい。

信じてみようか……。

「これ、持つてるだけでいいんですか？」

「ああ、それでいい。玲二のこと、思ってくれ。君の幸せが玲二に繋がっていると信じてる」

私の幸せが、玲二さんに。

もう1度見つめると、羽根はキラリと金色に輝いた。

来平先輩の羽根……。

「わかりました」

玲二のこと、思ってた。
いちろ君も言ってた。

羽根をぎゅっと握り締める。

玲二くん。

私のところに、戻ってきて。

私の幸せは、ずっと、玲二さんと一緒にいることだから……。

#38 「王子の帰還」 <玲二>;

気がつくと、深い深い闇の中にいた。

目の前も、横も、上も下も真っ黒な闇が広がっている。

首はかろうじて少し動くが、体がまったく動かない。

ここは一体どこだろう？

なんでここにいるんだろう？

考えたが、わからなかった。ただひたすら真っ暗だ。

暑くもなく、寒くもない。

怖くもない。

闇の中で、少しずつ、自分が目を開けているのか閉じているのかも、よくわからなくなってきた。

どのくらいの時間が経ったのか、
自分が起きているのか眠っているのか、
立っているのか、横になっているのか……。
すべてがわからなくなっていく。

ただぼんやりと虚空を眺めていた。

何も思うことがないし、感じるものもない。もう、疑問すらなかった。

突然水滴が顔に落ちてきて、はっとした。
暖かい水が次々と、頬に触れる。

涙……。

園田の涙だ。

少しずつ、目が覚めてきた。

泣かないで。

泣いてる顔を見たくない。

どうして泣いてる？

俺のせいだ。

散々待たせて、……黙って去ったんだ。

ごめん……。

涙の雨が止む。

そうだ。待ち合わせだ。行かなくちゃ。

10時に、駅前。

でも、どうやって行ったらいいんだろう？
なにも見えない。

首をゆっくりと左右に動かす。

まっくらだ。

また意識が、ぼんやりとしてきた。

どのくらい時間が経っただろう。

霞む視界の端に、何か光った気がした。

何か来る……？

右の方向、遠くから銀色の光が近づいてくるのが見えた。
あれは？

四足の大きな獣が、そばにやってきた。
目の前で止まって、顔をべろっとなめてくる。

母さん？

違う。母さんじゃない。

もつと近い。感じる。これは……自分だ。俺の、本当の姿。

銀色に輝く狼は、体の右側に寄り添って座り込んだ。
触れている部分からぬくもりを感じる。

いつの間にか、手が自由に動くことに気がついた。
手をゆっくりとあげて狼の頭を撫でると、嬉しそうに頬をまた舐めてきた。

今度は左の方向から、何かが聞こえる。
ゆっくり首を動かすと、ほのかに光る美しい大きな鳥が飛んでくるのが見えた。

……ライ。

幸運を運ぶ鳥はすぐ横に降りてきて、着陸で起きた風がふわっと髪を揺らした。

チヨコチヨコと近付いてきてすぐ横に來ると、先の丸いくちばしで鼻先をつついてくる。

くすぐったい。

美しい羽根が1枚、胸の上に落ちた。

はっと目が覚める。

眠っていた？

相変わらず、あたりは闇。

しかし、隣に銀色の狼がいる。

胸の上では、金色の羽が優しい光を放っている。

そうだ。

園田のところに行くんだ。

手や足は少し動くけど、体を起こすことはできなかった。

園田……

目を閉じて、顔を思い浮かべる。

少し斜めに首を傾げた笑顔に弱いんだ。

可愛くて、優しくて、大好きな俺の……

会いたい。
それで、いつきって呼ぶんだ。

目を開く。

突然、人影が現れた。

誰だ。よく、見えない。

『お前の願いをかなえよう』

人影は白く輝いている。どんな姿かはうかがい知ることができない。

声はしたが、男なのか女なのか……わからなかった。

『父に感謝せよ』

人影はその輝きを増し、体の中へと入ってくる。目の前が、金色に輝いていく。

輝きは暗闇を打ち消して、世界は暖かい光に包まれていった。

どこかで見たことのある天井が目に入ってきた。

この場所を俺は知ってる。

そうだ、じいちゃんの家だ。

父方の祖父の家の天井。古めかしい吊り下げ型の電気の笠にも見覚えがある。

しばらくぼんやりと電気を眺めた。

少しずつ、頭が働きます。

なんで、じいちゃん家にいるんだろう？

体を起こそうとすると、全身に痛みが走った。

体がやたらと固い。なんとか首を動かし、周りを見る。

左側は、見覚えのある古めかしいタンスが置かれている。

右側には、小さなちゃぶ台。そして誰かが寝ている。

誰だ？

ぴったりと寄り添って眠っている。近すぎて顔がよく見えない。

少しずつ体を動かして横を向く。痛みはあるが動かなくはない。なんとか右を向いて、少し体を起こす。

体が重いし、たまらなく痛い。

我慢して、時間をかけてようやく上体を起こした。

横に寝ているのは男のようだ。上のほうから顔を確認する。

……？

どこかで見た顔。

俺だ。

どこからどうみても、自分の顔に見える。

……夢をみているのか？

立ち上がりたいけど、そこまで体が動きそうにない。

もう1人の自分を起こして手伝ってもらう？ いや、なんだかそれは、気持ちが悪い。

外は明るい。朝なのかな？ 部屋の障子は閉められているが、そ

う感じる。

父さんや母さんはいる？ 呼んでみようか。

……喉がカラカラだ。声が出ない。

状況がまったく把握できない。

なんでじいちゃん家で寝てるんだろう？

もう1人同じ顔の男が寝ているのは、何故なんだろう？

やっぱり夢なのかな。でも、ついさっきまで夢を見ていた気がする。

目を閉じて、少し考えた。

体がよろけて倒れそうになるのをなんとかこらえると、背中に激

しい痛みが走った。

俺は、何をしてた……？

考えていると、誰かが走ってくる慌しい音が聞こえてきた。

「母さん早く！」

父さんの声だ。

障子がスパーンと音を立てて開く。その音で、横に寝ていたもう一人の自分も飛び起きる。

「あっ！」

前と横から同時に声がした。

横からいきなり飛びつかれて、せっかく起こした体が倒れてしまった。

「玲二……？」

父さんの声が上がらする。しかし抱きつかれたまま、動けない。

「どっちだ??」

「こっち、お父さん」

もう一人の俺が、頬を指差してきた。

「玲二」

両親は揃ってなんとも言えない顔をしている。もう一人の自分が、力強く抱きしめてくる。

とうとう最後には頬ずりをしてきた。何なんだ……。

気を取り直したように、父さんが顔を覗き込んで言った。

「玲二、大丈夫か？」

「…… かつ」

喉が痛い。こんなにカラカラになったこと、今までにあつたかな？抱きついていたもう一人が水の入ったコップをいつの間にか持つていて、体を起こし、ついでに飲ませてくれた。

少しずつ、喉が潤う。

飲まされながら、目の前にある顔を見る。なんというか……慈愛に満ちた笑顔だ。

夢ではないみたいだけど、じゃあ一体どういう事なんだろう。

水を飲み終わって、はあっと息を吐いた。

「玲二」

母さんがのぞきこんできた。

「かあさん」

かすれてはいるけど、なんとか声が出せた。母さんの目にはみるみる涙があふれていく。

「よかった……」

強く抱きしめられる。

「玲二」

父さんも一緒に抱きしめてきた。

「玲二！」

もう1人の自分もついでに抱きついてきて、重さで後ろに倒れる。

「あっ！ 大丈夫か??」

「……だ……じょうぶ」

「まだ寝ていたほうがいいな」

父さんが心配そうな顔で言う。

「起きたい……」

なんだか、もうこれ以上寝っぱなしなのはイヤだった。ずっとずっと、寝ていたような気がする。節々が痛いし、少し動かしておきたい気分だ。

「そうか。母さん、隣の部屋に座椅子があつたろう。取ってきてくれ」

母さんは急いで部屋を出ていく。

「ザイス？」

もう1人の俺は座椅子がなにかわからないようだ。

父さんはそれには答えず、背中をささえて体をおこしてくれた。

「気分はどうだ？ どこがおかしいところはないか……？」

おかしいのは、父さんのこの微妙な表情のように思える。

「体が痛い。けど、それ以外は大丈夫」

声がかスッカスだ。自分の声に聞こえない。

「そうか」

母さんが座椅子を持って戻ってきた。すぐに広げて、みんなで座らせてくれる。

ひざに布団をかけて、父さんがいとおしそうに足を撫でてきた。

「なんか……、よくわからない。ここ、じいちゃんの家？」

「そうだよ」

なんでいるのかわからないけど、ここがどこなのかは解決だ。

「何から話そうか？ 随分、混乱してるみたいだが……」

父さんの顔が険しくなった。

「何から？」

「玲二、どこまで覚えてる？ お前が最後に見たこと、したことはわかるか？」

最後にしたこと？

「学校の、終業式があった」

「ああ、そうだな」

「それで……、家に帰ろうとした」

いつきと明日会う約束をした。それで、電話が鳴ったような……。

そこから先がわからない。

「そこに、あいつらが来た」

もう1人の俺が続けた。真剣な顔。そうだ、1番おかしいのはここだった。

「誰なの？」

「ああ」

父さんと母さんが目を合わせる。そして、答えた。

「最終兵器君だ。お前の双子の兄の、一路だよ」

「……」

言葉が出ない。

ビククリが過ぎると、知っている言葉でも意味がわからなくなるようだ。

「ふたこのあに？」

なんとか喉を動かして、聞いた。

「そうだ。ずっと……母さんの故郷で暮らしていたんだ」

一路と呼ばれた兄は笑顔でこちらを見ている。優しげでいとおしげな表情。

どこかで見た事がある、穏やかな顔。……一体どこで見たんだろう。

「あなたと一路が生まれて……、すぐにわかったの。力のこと」
母さんが静かに話した。

「二人で半々になるはずだった力が、ほとんど一路のものになっていたのよ」

一路が少し悲しげな顔になる。

「そのせいで、俺にはなかった……？」
「そうね」

母さんが呟いて、父さんが続きを引き受けた。

「一路は力が強すぎて、母さんの故郷で育てることにしたんだ。普通よりもずっと強すぎて……。幼いうちはコントロールが難しいからって。逆に玲二にはほとんど力がないから、2人一緒に育てるのは危なかったんだ」

なんだか、信じられない話だった。マンガみたいだ。

「本当だよ。玲二。僕は、人間になったり、狼になったり、自分でうまくできなかった」

一生懸命一路が話した。

「何度も何度も、おじいさんたち、迷惑した」
ちよつとたどたどしい日本語だ。

「やっとコントロールできる。今は大丈夫」
ニツコリと笑う。なんだか、すごく素直そうだ。

俺は人間として育てると決めたから……、予言から逃れるためにこちらに来たから、だから存在を隠してたってことなのかな。

「最終兵器って、なんだったの？」

「……一路はお前のことを強く感じる力があるんだ。そして、少し影響力もある。玲二、夏にいきなり倒れたことがあっただろう？」

「ああ」

なんで知っているんだろう。ああ、リアが見てたのかな？

「あれは一路が受けたダメージがお前に伝わったんだ。あの時一路は大暴れしたんだよな」

「そう。私とお父さんで2人がかりで止めた。思った以上に大ゲンカになったから」

あの時の、殴られたような感覚。なんであんなことになったのかずつと不思議だった。あれは、一路が受けたダメージだったのか。

「一路になら、玲二のことが大体わかるんだ。それから、力の移動

「ができないか、頼んでいた」

「力の移動？」

「玲二が見たものやしていることを一路は自分のことのように感じることができんだ。深い部分で繋がっているんだから、元々2人の力だったものを独り占めしてる一路から、力を分けてもらうことができないかと思ってな」

「できたんだ。玲二！僕は、玲二を狼にできる」

……???

「どうやって？」

「あの日、やったんだ。ねえお父さん、お母さん」

2人がうんうんと頷いている。いつの間にそんなことがあったんだろう？

「驚いたか？ 玲二」

「あたりまえだよ……」

知らなかったのは、自分だけだったのか。
離ればなれの兄弟。遠いところに、1人でいたなんて。

「寂しくなかった……？」

「寂しかったよ、玲二」

一路と目が合う。自分と同じ顔をしていると思ったが、よく見るとだいぶ違うような気がした。

「ずっと苦しんだから」

「……」

「力になりたかった。急いで、お父さんの頼み、できるようにならうって。ずっと感じてた。一人ぼっちで、悲しいのを」

次の瞬間、一路は急にマジメな顔をした。

「だから危ないのを、すぐにわかった。だから、急いだ」
「危ない？」

「そう。玲二は捕まって、痛かった」

一路が手を握ってきた。悲しげな顔で、俺の手に額をつけてくる。

捕まった？ ……体が痛いのは、そのせい？

「玲二、全然覚えてないのか？」
「……うん」

今のところ、まったく心当たりがない。でも、この訳のわからない状況を考えれば、きつとなにか大きな事件があったのかもしれないと思える。

「玲二、今日は3月30日だ。お前の覚えている終業式から、11日経ってる」

11日……？

じゃあ、約束は？ すっぱかしたってことか。

「大丈夫。いつきと、ちゃんと話した」

一路が笑顔を浮かべる。

「？」

「玲二は会えない。目が覚めると、すぐに教える。約束した」
「会ったのか？」

「玲二のこと、心配して、家に来た」

それはいつのことなんだろう？ それより、いつきは混乱しなかったかな？

「いつきは泣いてた。玲二のことすごく心配してた。早く目が覚めるように、祈ってくれた」

一路が手をぎゅっと、強く握ってくる。

「届いた？」

そういえば、涙が雨のように降ってきた気がする。

「ああ……」

俺も一路をまっすぐ見て、答えた。

「届いた」

兄がまた笑顔になる。

「そうだ。それで、父さんに感謝しろって……」

「私に？」

「……ええと、なんか、何かが俺の中に入ってきたんだ」

銀色の狼が横にいて、さらに金色のなにかが入ってきた。
そうか……。

あの銀色の狼は、俺ではなくて一路だったんだな。

父さんと母さんは顔を見合わせている。

「何が入ってきたか、わかる？」

母さんは真剣な顔だ。

「え？ ……うーん」

「そのせいかしらね？」

「……そうかもしれないな」

2人は考え込んでいる。

「一路、どう思う？」

「玲二には、新しい力が入った」

自分を置き去りのまま、話が進んでいる。なんなんだ？

「そうなのか？」

「うん。あっちのほうから来た」

一路はタンスの置いてある壁のほうを指差した。父の表情が変わる。

兄に、肩を両手で力強く掴まれた。

「玲二には、この森の守護者の力が入った。父さんの、ずっとずっと前の先祖の力」

なんとか立ち上がって顔を洗いに行った。もうちょっと目を覚ましたかったから。

鏡をみたら、両親のあの様子の理由がわかった。

「……なるほど」

髪の色が、黒い。ついでに、瞳も黒い。真っ黒ではなくて、かなり濃いこげ茶色とも言えいいのか……。

とにかく今までとは全然違っていた。見慣れた自分の顔なのに、色が違うだけで別人みたいだ。

見た目だけなら、一路の方がずっと俺っぽい。

まだ体がふらつく。そういう時は、ベストなタイミングで一路が支えてくれた。

兄は優しい微笑をたたえ、ずっとついてきてくれている。

部屋へ戻ると、両親がなにやら考え込んでいる。

「あ……、玲二、なにか飲む？ おなか空いてるかしら？」

「すぐには食べられないか？」

2人は心配そうに声をかけてきた。

今は食欲が全然ない。

「いない。……俺、どうなったの？」

「玲二は死んでた」

一路がすぐに答えてくれた。

「……」

両親は揃って複雑な顔をしている。

死んでた？

「玲二は死んだ。ひどい目にあったから。だけど、命が終わってなかったから、なんとか助けようとしたんだ」

ひどい目にあった……。

うつすらと、なにか頭のすみっこに感じるものがあった。確かに、なにかあったような気がする。

そして「死んでも命が終わらなかった」ら、なんとかなるものなんでしょうか？

「難しい。理屈じゃない。僕たちは、命が終わるまではなんとか、取り返せる。人間とは違う」

理屈じゃない？

人間じゃないから……？

「玲二は1つだけだけど、ちゃんと力があつたから」

……「完全な遮断」か。

「玲二、私は朝、その森に行ったんだ。一緒に行ったことがあるだろう？ 小さなほころがあるところだよ」

覚えている。小さいころによく、父さんと2人で行った。森の中

を探検した時に見つけたんだ。ずっとずっと奥にある、大きな木。その下に、小さなほこらがあった。

「あのほこらは、この辺の守り神を祭ってあるというから、お参りしてきたんだ」

「父さんのずっと昔の先祖がいる」

一路が実に軽い口調で言った。

「僕たちとは違う……、狼の一族」

それに、母さんが驚いた顔をする。

「そうなの？ 一路」

「そうだよ。お母さん、知ってるのかと思った。だからお父さんと結婚したんでしょう？」

「……その話、誰がしたの？」

「誰もしない。ここに来たらわかった」

なんだか、混乱してきた。どうということなんだろう？

「玲二、今までと違うよ。全然違う。大きな力を、もう持ってる」

「それって、いわゆる覚醒……？」

「違う。目覚めたんじゃない、新しく与えられた。これから、自分のものになっていく」

突然現れた双子の兄が、世界の秘密を次々と明かしてくる。

今のぼんやりした頭では、全部処理しきれない。

「朝お参りした時に、玲二が目を覚ました気がしたんだ」

父さんが呟いた。

「そつということなのかな」

その言葉に、一路が頷く。

当の本人である俺には何もわからないのに、一路にはわかるのかな？

「僕は、玲二のこと、なんでもわかる」

顔を見ると、一路は微笑んだ。

「ずっと……、玲二のこと、感じていた。一緒に生まれた兄弟だから。喜びも、悲しみも、全部わかってる。ずっとだよ。ずっと会いたかった」

一路はそんな気持ちを抱えたまま、ずっと家族と離れて暮らしていたのか。

すごく切ない。

この1人で我慢していた兄のことは、教えてくれても良かったんじゃないだろうか。

そして、完全な遮断は彼には効果を發揮しない？

弟への愛がそうさせるとか？ それとも、双子の神秘とか……なのか。

「これから力のコントロールできるようにならないと。僕が教える。玲二、一緒にいるから」

すっかりくたびれて、また横になった。

一路がついていたがったけど、父さんが他の部屋へ連れて行った。

双子の兄弟がいた。

そして新しく力が宿った……。

母さんの一族とは違う、他の狼の力？

そんな感じ、何もない。見た目がちょっと変わった以外に、なにもわからない。

なんだかひどく疲れた。

頭が考えることを拒否している。

ああ、でも……もう予言におびえることはないんだ。
だってもう、ちゃんと死んだんだから。これで安心して毎日眠れる。

目を閉じると、すぐに眠りが訪れた。

目を開けると、部屋の中が暗い。
どうやら、夜中のようだ。

眠った時は何時だったんだろう？
それに、どれくらいの間「死んでいた」んだろう？
体のリズムがどれだけ狂っていても、仕方ないだろうな。

体を起こすと、随分楽に動くようになっていた。
すぐ横に誰がいる。一路だ。眠っている。

一緒にいるからって言ったけど、ずっとこの調子なんだろうか……。

兄を起こさないように、そっと立ち上がった。
大丈夫だ。歩ける。痛みももうない。

立ち上がって障子を開けた。廊下に出ると、少し寒い。

月が輝いている。

心の中に、世界一可愛い顔が思い浮かんで来た。

いつき……。

そういえば、すぐに伝えると一路は言ってたけど、どうやって伝えるんだろう？

目がさめたことはもう伝えてくれたのかな？

いや、自分で伝えたらいいじゃないか。

……携帯はどこに行ったんだろう？　なんだか、失くしたような気がする。

そのとき、気がついた。

庭の柿の木。その下に、何かがいる。

ぼんやりと、誰かの姿があった。

すぐにわかった。あの時の、金色の光だ。
見ていると、木の下に誰かは手招きしてきた。

テレビなんかの心霊特集だったら、死にそうになるパターンだな。そう思ったらふつと笑いが出てきた。そして、はだしのまま木に近づく。

そばによっても、どんな姿の人物なのかはよくわからない。
見えるような、見えないような、不思議なぼやけ方をしている。

誰かは、手を伸ばして額に触れてきた。

ひんやりとしている。
体が動かなくなる。

そして、すごい勢いで力が入ってきた。
そういう感覚があった。

やがて、手が離れる。

何か声がした。けど、聞きとれない。
何……？

気がつくと、元の部屋の、布団の中だった。

夢だった？
いや、違う。

外はもう明るい。朝になったようだ。

自分の中に満ちる力を感じた。

一路はいつの間にか起きたのか、横に座っている。
こちらを見て、笑顔を浮かべた。

「おはよう玲二」
そういつて、優しく抱き寄せてくる。
「目覚めたんだね」

兄の問いかけに、自信を持って答える。

「
ああ
」

そして2人で、見つめ合って笑った。

#39 「狼少年の告白」 &It;いつき>

誰かわからないアドレスから、メールが届いた。

玲二は元気になりました。
帰るとき、また連絡します。

いちろ君、で間違いないかな。
アドレスは、sonic1602@...、となっている。

良かった……。
ずっと待っていた連絡だった。
早速、葉山君にもメールを送る。

これまで、長かった。
今日はもう4月1日。……まさか、エイプリルフールのウソじゃないよね？

この2週間、生きた心地がしなかった。
毎日ひたすら王子様の無事を祈り続けて、思わぬダイエットに成功したところだ。

ちゃんと、返事を書こう。

いちろ君

知らせてくれてありがとう。
帰ってくるのを、待ってます。

8日はもう始業式だから、一緒に学校に行けるとすごく嬉しい

です。

いつき

送信ボタンを押すと、なんだか力が抜けて体が震えた。
涙が出てくる。

良かった。玲二くん……。

携帯を胸に握り締めて、部屋で1人泣いた。
本当は、こんな風に泣いている場合じゃない。

秘密だつて聞いてないし、お付き合いだつて断られてる。

ドイツに行っちゃうって言ってたし、もしかしたら学校にももう
来ないかもしれないのに。

でも、私のところに戻すって言ってくれたから。

いちろ君も、来平先輩も。信じよう。

そう思ったところで、胸に抱いた電話がブルッと震えた。
メールだ。返事が来たのかな。

慌てて開いて確認する。

いつきちゃん

玲二と、一路の父です。

心配かけて、悪かったね。

学校にはちゃんと行きます。

その前に、玲二が6日の14時に、小学校の裏山の木の下で会いたいと言っています。

時間が空いていたら、会ってやってください。

本人の電話が壊れてしまったので代わりに送ります。

立花 速音

……！？

お父さんのメールだったのか！

これは恥ずかしい。一気に顔が熱くなる。

でもこれで、ウソじゃないのは確定だ。

いちろ君は、一路って書くんだ。

やっぱり、兄弟でナンバリングされてる。私と、お揃いだ。

学校にも行くし、会いたって言うてるなんて……。ものすごい朗報だ。

あと5日。こけちゃった頬をなんとか戻さないと。とびっきりの可愛い格好で行かないと。

またフラれたっていい。だって、会えるんだから。

もう1度画面を確認する。お父さん、速音っていうのか。

あ、だから、sonicなのかな？ 音速……でソニックとか。

1602は、いちろ、れいじなのかもしれない。

6日に待つてると、丁寧な言葉で返信をした。

5日間で、体調を万全に整える。

出かける前に、お風呂にも入った。髪も洗って、きれいに乾かす。

季節はすっかり春だ。

風に吹かれて落ちた桜の花びらが道の端にたくさんたまっている。

携帯の画面で、時間を確認する。

13:50。

約束の時間まで、あと10分。

コンビニに寄って、2人分のお茶を買ってカバンに入れる。
裏山を、ゆっくり登っていく。

大きな木の下に、ついた。

もう1度携帯を取り出して、画面を見た。

13:58。

胸が高鳴る。

もうすぐ会える。

世界中でただ1人、どうしようもなく、好きな人。

目を閉じて、そのときを待つ。

いきなり、後ろから抱きしめられた。

突然のことに、一瞬体がビクつとする。

でも、……すぐにわかった。

世界で1番好きな人におい。

玲二くんの、においだ。

「園田」

左耳の少し後ろあたりに、玲二くんの顔がある。
腰に、後ろから玲二くんの長い腕が巻きついている。
背中にピッタリと、玲二くんの体がついている。

「お待たせ」

そう声がして、更に強く抱きしめられた。
大好きな顔が、すぐ横にある。
だけど、涙があふれてきて、体が震えて、振り返ることができない。

「玲二くん……」

「約束破ってごめん。行けなくて、悪かった」
「すぐく、心配したの。もう会えないかと思ったから」
「俺も、もう会えないと思ってた」

涙がポロポロ落ちる。

腰にまわされている玲二くんの手に、自分の手を重ねた。

「良かった。来てくれて。もう、それだけでいい。玲二くんがいるだけでいい」

「それは困るな」

「……なんで？」

「俺、園田に言いたいことがあって来たんだ。聞いてもらってもいい？」

「……」

黙って頷く。

「泣かないで。俺、もう園田の涙は見たくない」

「……うん」

カバンからハンカチを出して、涙を拭いた。

ブサイクな顔は見せられない。少し、ほっぺをもんでおく。

「あと、俺、前とちよつと違うんだ。驚かないでほしいんだけど」
「……違うって？」

まさか大怪我して、顔がメチャメチャになっちゃったとか？

「心の準備が出来たら、俺の方振り返って」

腰から、大きな手が離れた。すぐ横にあった顔の気配も後ろに下がっていった。

そんなこと言われたら、緊張しちゃう。
どう違うんだろう。

いや、でも、もし顔が美少年じゃなくなってたって、玲二くんは玲二くんだ。

そんなことでキライになったりしない。

そう、だよ、ね、いつき……！

しばらく動けなかった。

でも、ずっと待ってたんだから。

振り返ったら、笑顔で言うんだ。

「おかえりなさい、玲二くん……！」

目の前に立っている、最愛の人。

……？

黒い！

「ビックリした？」

「……うん。どうしたの、それ」
「ちよつとね」

ちよつと？ 髪はいいとして、目は？ コンタクトなの？

「染めたの？」

玲二くんは黙って首を横に振った。

「こうなっちゃったんだ」

意外な変化で、妙に驚いてしまった。

顔はそのままだから、なんだか余計に違和感がある。

「何があつたの？」

「ちよつと誘拐されて、大怪我」

「……嘘」

そんな馬鹿な。

玲二くんは優しい顔で、微笑んでいる。

「驚かないでって言ったのに」

「驚くよ」

ケガしたのはまあ信じてもいいとして、それが治ったら目と髪の色が変わるなんて。

「目の色も変わったの？」

「うん。不思議だよな」

不思議すぎるよ……。

ああ、でも、前に病気で移植して、血液型が変わったって話を聞いたことがあったっけ。

じゃあ、目の色が変わることも、世の中絶対ありえないとは言えないのかな？

じつと、目の前の顔を見つめる。

なんだか、雰囲気も変わったみたい。

最後に見た玲二くんが、ずっと落ち込んでて元気がなかったせいかな？

いや、でも……なんだかすごく、落ち着いた感じがする。大人になったような、そんな感じ。

「言いたいことって、なあに？」

「言ってもいい？」

「……うん」

玲二くんはにっこり優雅に微笑むと、私の前で片ひざをついた姿勢になった。

そして、右手を取って、甲にキスした。綺麗な瞳が、下からまっすぐ見つめてくる。

「……園田いつきさん。去年の6月から、君の事ずっと見てました」

黒い目が、輝いてる。

「優しくて、可愛くて、素直で……、大好きです。俺と、付き合ってください」

顔が熱い。

熱くてもう、爆発してしまいそう。

私の王子様。

7年間、毎日思い続けてきた大切な人。

また、涙が出てきた。

口がへ字になってしまって、何もいう事ができない。

「いつき……」

玲二くんが立ち上がる。

そして、優しく、でも強く抱きしめてきた。

「玲二くん」

顔をあげると、もうすぐ目の前に顔があった。

唇が重なる。背中にまわされた腕に、強く抱き寄せられる。

すごい。

今日は、ちゃんとできた。

幸せをかみしめっていると、なにかが口の中に入ってきた。慌てて離れる。

「何、今の」

「何って……、言わせる気？」

多分、舌だ。恥ずかしくて、慌ててしまつて、下を向いた。

「……返事してないのに、キスするなんて、順番が違つ」
「ごめん」

ちらつと顔を見ると、なんだか余裕の微笑みを浮かべている。
なんだなんだ。性格まで変わったのか！？

「急にそんなに変わっちゃったら、どうしていいかわかんない」
「変わってないよ。ちよつと色が違うだけだろ？　すぐ、慣れると思つけど」

「ううん。いきなりキスしてくるとか中身も変わりすぎ！　だから、返事はもうちよつと様子を見てからにします」

我ながら可愛くない返事だ。

玲二くんはビックリした顔をしている。

「どのくらい待つたらいい？」

「それはわかんない。何年待つてくれる？」

「……そんなに待てない」

「あははっ」

思いつきり、2人で笑つた。

木の下に並んで座つて、持ってきた紅茶を渡す。

「乾杯しよ」

「何に？」

「うん。またこうして、会えたことと……あと、ちゃんとキスできたことかな」

そういつて、ボトルをぶつける。

「なあいつき、さっきの返事、冗談だろ？」

「まさか。玲二くんに冗談なんか言わないよ！ 大体、秘密だつて話してくれてないじゃん」

「それは……」

「それは？ 教えてくれるの？」

「うん。おいおい」

「おいおい？」

「いつきが俺と、結婚してくれるなら教える」

「……」

もう、ホントに変わりすぎだよ。ビックリさせすぎ。

どうしようもなく嬉しくて、恥ずかしくなって、顔をあげられなくなってしまう。

「返事、早めに頼む」

左手をぎゅっと握られる。

暖かくって幸せで、心がいっぱいになっていく。

「うん」

顔をあげて、もう1度、大好きな人と唇を重ねた。

私たちの恋は、今日からが本当のスタート、みたいだ。

#39 「狼少年の告白」 & It・いつき>・; (後書き)

T o b e c o n t i n u e d

狼少年の初恋 S - 2 に続く……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2115q/>

狼少年の初恋

2011年10月3日03時10分発行